秋田県文化財調査報告書第107集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ

――妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡――

1984・3

秋田県教育委員会

東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅷ

――妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡――

1984・3

秋田県教育委員会

序

東北縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は、秋田県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて記録保存を目的に実施しているものであります。昭和54年度から昭和56年度までは鹿角市が対象でしたが、昭和57年度からは小坂町を対象として発掘調査を行っております。

鹿角市ではこれまで34ヵ所の遺跡、発掘総面積154,435㎡におよぶ調査を行いましたが、本報告書は昭和56年度に実施した妻の神Ⅰ・乳牛平の2遺跡の調査結果を収録したものです。この報告書が鹿角地方の歴史解明と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後にこの調査に御協力いただきました顧問、専門指導員、日本道路公団、鹿角市、同教育委員会はじめ関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和58年3月

秋田県教育委員会

教育長　斉藤　長

例　　言

1．本報告書は、東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和56年度発掘調査を行った10遺跡のうち、妻の神Ⅰ遺跡（遺跡番号No.22）、乳牛平遺跡（遺跡番号No.25）の発掘調査報告書である。

2．遺跡については機会をみて発表してきたが、本報告書を正式のものとする。

3．発掘調査遺跡の記載は遺跡番号順による。

4．発掘調査に関して、下記の諸氏から御指導、御教示を賜わった。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

青森県埋蔵文化財調査センター主査	遠　藤　正　夫
青森県埋蔵文化財調査センター主事	成　田　滋　彦
秋田県鹿角市教育委員会主事	秋　元　信　夫

5．本報告書の執筆と編集は下記の調査員と補佐員が協議して作成した。

Ⅰの1	小玉　準
Ⅰの2	桜田　隆
Ⅱの2	小林　克
妻の神Ⅰ遺跡	橋本高史、鈴木秋良、鈴木　功、福本雅治、安保　徹
乳牛平遺跡	小玉　準、高橋　修、畠山　圭、阿部明人、米田　哲

6．本報告書のⅡのⅠ「地形と地質」は秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。

7．石器の石質鑑定は秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。

8．炭化米及び炭化種子の分析は元岡山大学農学部教授笠原安夫氏に依頼した。

9．報告書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の５万分の１、２万５千分の１及び日本道路公団作成の千分の１の地形図である。

10．遺跡の土層及び遺物の色調の記載は「新版　標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

11．遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

12．遺跡の写真撮影は主に次の者があたった。

妻の神Ⅰ遺跡	橋本高史、鈴木　功、安保　徹、鈴木秋良
乳牛平遺跡	小玉　準

13．遺物の写真撮影は主に次の者があった。

小玉　準、橋本高史、渋谷　志、熊谷　安、高橋れい子、鈴木　功、安保　徹

14．遺物の実測、採拓、トレース、整理等は上記調査員、補佐員の他に次の者があたった。

妻の神Ⅰ遺跡	柳沢照子、奈良美栄子、奈良栄子、大野甲子、高橋チエ子、松本幸子、岡本龍子、加藤正子、山田美喜子、土屋ひさ子

乳牛平遺跡　　中村陽子、村木繁子、阿部玲子、岡本龍子、熊谷裕子、越後谷栄子、菅原恵子、高柳良子、後藤のり子、小松郁子、藤井偉智子

15. 本報告書に記載した遺物の実測図、拓影図の縮尺は原則として½、⅓とした。その他のものは任意の縮尺である。それぞれの実測図、拓影図にはスケールを付した。

目　　次

序

例言

Ⅰ　はじめに……1

1．発掘調査に至るまで……1

2．調査の組織と構成……2

Ⅱ　遺跡の立地と環境……3

1．地形と地質……3

2．環境と周辺の遺跡……9

妻の神Ⅰ遺跡

1．遺跡の概観……17

(1)　遺跡の立地と環境……17

(2)　遺構の分布……17

(3)　遺物の出土状態……17

2．調査の方法……19

3．調査経過……22

4．遺跡の層位……25

5．遺構と遺物……26

(1)　遺構……26

(2)　遺物……128

6．まとめ……134

付1　妻の神Ⅰ遺跡 ^{14}C 年代測定結果……136

別編　妻の神Ⅰ、Ⅲおよび案内Ⅲ遺跡出土の炭化穀類と豆の同定……195

乳牛平遺跡

1．遺跡の概観……221
2．調査の方法……221
3．調査経過……223
4．遺跡の層位……223
5．遺構と遺物……224
(1) Ⅰ郭検出遺構……226
(2) Ⅱ郭検出遺構……247
(3) Ⅲ郭検出遺構……291
(4) Ⅳ郭検出遺構……317
(5) トレンチ……317
(6) 遺物……325
6．まとめ……343

挿 図 目 次

第１図　段丘地形図……4
第２図　露頭柱状図……6
第３図　東北縦貫自動車道関係及び周辺遺跡……11

妻の神Ⅰ遺跡

第１図　遺跡位置図……18
第２図　遺跡地形図……20
第３図　グリッド配置図……21
第４図　遺構配置図……23
第５図　遺跡断面図……25
第６図　ＳＩ101、101'、110 竪穴住居跡……27
第７図　ＳＩ102 竪穴住居跡……31
第８図　ＳＩ104、105竪穴住居跡……35
第９図　ＳＩ106、109、109' 竪穴住居跡……39
第10図　ＳＩ107 竪穴住居跡……41
第11図　ＳＩ108 竪穴住居跡……45
第12図　ＳＩ121 竪穴住居跡……49
第13図　ＳＩ121 竪穴住居跡カマド……51
第14図　ＳＩ123 竪穴住居跡……53
第15図　ＳＩ124 竪穴住居跡……55
第16図　ＳＩ125 竪穴住居跡……56
第17図　ＳＩ126 竪穴住居跡……59
第18図　ＳＩ127 竪穴住居跡……61
第19図　ＳＩ129 竪穴住居跡……63
第20図　ＳＩ131、131'竪穴住居跡……65
第21図　ＳＩ132 竪穴住居跡……67
第22図　ＳＩ133 竪穴住居跡……69
第23図　ＳＩ138 竪穴住居跡……70
第24図　Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(1)……71
第25図　Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(2)……72
第26図　Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(3)……73
第27図　Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(4)……74
第28図　ＳＫ111、112土壙……75
第29図　ＳＫ113 土壙……75
第30図　ＳＫ114 土壙……76
第31図　ＳＫ115 土壙……77
第32図　ＳＫ122 土壙……77
第33図　ＳＫ130 土壙……78
第34図　ＳＫ134 土壙……79
第35図　ＳＫ135 土壙……79
第36図　ＳＫ136 土壙……80
第37図　ＳＫ139 土壙……81
第38図　ＳＫ140 土壙……81
第39図　Ⅰ郭土壙出土遺物……81
第40図　ＳＩ001 竪穴住居跡……82
第41図　ＳＩ002 竪穴住居跡……85
第42図　ＳＩ003、005、006 竪穴住居跡……87
第43図　ＳＩ007 竪穴住居跡……91
第44図　ＳＩ008 竪穴住居跡……95
第45図　ＳＩ008 竪穴住居跡カマド……97
第46図　ＳＩ009、009'竪穴住居跡……99
第47図　ＳＩ020 竪穴住居跡……103
第48図　Ⅱ郭竪穴住居跡出土遺物(1)……104
第49図　Ⅱ郭竪穴住居跡出土遺物(2)……105
第50図　ＳＫ014、015土壙……106
第51図　ＳＫ016 土壙……107
第52図　ＳＫ017 土壙……108
第53図　ＳＫ018 土壙……109
第54図　ＳＫ019 土壙……109
第55図　ＳＫ022 土壙……110
第56図　ＳＫ023 土壙……111

第57図　ＳＫ025 土壙……111
第58図　ＳＫ026 土壙……111
第59図　Ⅱ郭土壙出土遺物(1)……112
第60図　Ⅱ郭土壙出土遺物(2)……113
第61図　ＳＤ010 溝……115
第62図　掘跡断面図、断面Ａ、Ｂ、Ｃ……120
第63図　掘跡断面図、断面Ｄ、Ｅ……122
第64図　掘跡断面図、断面Ｆ、Ｇ、Ｈ……124
第65図　掘跡出土遺物(１)……126
第66図　掘跡出土遺物(２)……127
第67図　遺構外出土遺物(１)……128
第68図　遺構外出土遺物(２)……129
第69図　鉄器実測図(１)……130
第70図　鉄器実測図(２)……131
第71図　鉄器実測図(３)……132
第72図　鉄器実測図(４)……133

乳牛平遺跡

第１図　グリッド配置図……222
第２図　Ⅰ郭遺構配置図……225
第３図　Ⅰ・ＳＩ001 竪穴遺構実測図……227
第４図　Ⅰ・ＳＩ002 竪穴遺構実測図……228
第５図　Ⅰ・ＳＩ002 竪穴遺構焼土・炭化材分布図…229
第６図　Ⅰ・ＳＩ004、007竪穴遺構実測図……231
第７図　Ⅰ・ＳＩ005 竪穴遺構実測図……233
第８図　Ⅰ・ＳＩ006 Ａ・Ｂ竪穴遺構実測図……235
第９図　Ⅰ・ＳＩ009・010竪穴遺構柱穴変遷図……239
第10図　Ⅰ・ＳＸ(Ｆ)001～003焼土遺構実測図……242
第11図　Ⅰ・ＳＸ(Ｆ)004～008焼土遺構実測図……243
第12図　Ⅰ・ＳＸ001～004土壙実測図……244
第13図　Ⅰ・ＳＫ005～009土壙実測図……245
第14図　Ⅰ・ＳＫ010～015土壙実測図……246
第15図　Ⅰ・ＳＫ(Ｔ)001 土壙実測図……247
第16図　Ⅱ郭遺構配置図……248
第17図　Ⅱ・ＳＩ001 竪穴遺構・ＳＫ023 土壙実測図……250
第18図　Ⅱ・ＳＩ001 竪穴遺構カマド実測図……251
第19図　Ⅱ・ＳＩ007 竪穴遺構実測図……254
第20図　Ⅱ・ＳＩ008 竪穴遺構実測図……255
第21図　Ⅱ・ＳＩ009 竪穴遺構実測図……258
第22図　Ⅱ・ＳＩ010 竪穴遺構実測図……259
第23図　Ⅱ・ＳＩ001 ・012・018竪穴遺構、ＳＫ(Ｔ)004 土壙実測図……261
第24図　Ⅱ・ＳＩ013 竪穴遺構焼土・炭化材出土状況……263
第25図　Ⅱ・ＳＩ015・016竪穴遺構実測図……265
第26図　Ⅱ・ＴＩ018 竪穴遺構岩化材分布図……267
第27図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)001～003・006 焼土遺構土実測図……268
第28図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)004・005焼土遺構実測図……269
第29図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)007～010焼土遺構実測図……270
第30図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)011～014焼土遺構実測図……271
第31図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)015～018・020 焼土遺構実測図……272
第32図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)019・021・022 焼土遺構実測図……273
第33図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)023・024・026・027焼土遺構実測図……274
第34図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)028・030～032 焼土遺構実測図……275
第35図　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)033～035焼土遺構実測図……276
第36図　Ⅱ・ＳＡ001 柱列模式図……277
第37図　Ⅱ・ＳＫ001～003土壙実測図……278
第38図　Ⅱ・ＳＫ004～008土壙実測図……279
第39図　Ⅱ・ＳＫ009～014土壙実測図……280
第40図　Ⅱ・ＳＫ015～020土壙実測図……281
第41図　Ⅱ・ＳＫ021～024土壙実測図……282
第42図　Ⅱ・ＳＫ(Ｔ)001・002土壙実測図……283
第43図　Ⅱ・ＳＫ(Ｔ)003・005土壙実測図……284
第44図　Ⅱ・ＳＫ(Ｔ)006 土壙実測図……285
第45図　Ⅱ・ＳＫ(Ｔ)007 土壙実測図……286
第46図　Ⅱ・ＳＫ019土壙・ＳＸ001実測図……287
第47図　Ⅱ・ＳＸ002 実測図……289
第48図　Ⅲ・Ⅳ郭遺構配置図……290
第49図　Ⅲ・ＳＩ001 竪穴遺構実測図……292
第50図　Ⅲ・ＳＩ002 竪穴遺構実測図……293
第51図　Ⅲ・ＳＩ003 竪穴遺構実測図……294
第52図　Ⅲ・ＳＩ004 竪穴遺構実測図……295

第53図　Ⅲ・ＳＸ(Ｆ)001・002・004・005焼土遺構実測図……297
第54図　Ⅲ・ＳＸ(Ｆ)006～010焼土遺構実測図……298
第55図　Ⅲ・ＦＡ001 柱列実測図……299
第56図　Ⅲ・ＳＢ001 掘立柱建物跡実測図……299
第57図　Ⅲ・ＳＢ002 掘立柱建物跡実測図……300
第58図　Ⅲ・ＳＩ004竪穴遺構・ＳＡ001柱列・ＳＢ002 掘立柱建物跡実測図……301
第59図　Ⅲ・ＳＤ001～005溝実測図……303
第60図　Ⅲ・ＳＫ001～004土壙実測図……305
第61図　Ⅲ・ＳＫ005・006土壙実測図……306
第62図　Ⅲ・ＳＫ(Ｔ)001・002Ｔピット実測図……307
第63図　Ⅲ・ＳＫ(Ｔ)004・006Ｔピット実測図……308
第64図　Ⅲ・ＳＸ001 実測図……309
第65図　Ⅲ・ＳＫ005土壙・ＳＫ(Ｔ)003Ｔピット・ＳＸ002 実測図……311
第66図　Ⅲ・ＳＫ(Ｔ)005土壙、ＳＸ003実測図……313
第67図　Ⅲ・ＳＸ004 実測図……314
第68図　Ⅳ・ＳＤ001 溝実測図……315
第69図　トレンチ平面図……318
第70図　Ａトレンチ土層断面図……319
第71図　Ｂトレンチ土層断面図……321
第72図　Ｃ・Ｄトレンチ土層断面図……323
付図１　遺構配置図
付図２　乳牛平遺跡周辺地形図
付図３　Ⅰ・ＳＩ003・008～010竪穴遺構　ＳＫ(Ｔ)002Ｔピット実測図
付図４　Ⅱ・ＳＩ002～005・017竪穴遺構・ＳＡ001柱列・ＳＤ002溝・ＳＫ004・021・ＳＫ(Ｔ)002土壙実測図
付図５　Ⅱ・ＳＩ006・009・013・014竪穴遺構ＳＫ001・002・009・010土壙・ＳＤ001溝・ＳＸ004・005その他の遺構実測図

表 目 次

第１表　周辺遺跡一覧……10

妻の神Ⅰ遺跡

第１表　ＳＩ101 竪穴住居跡観察表……26
第２表　ＳＩ101′竪穴住居跡観察表……29
第３表　ＳＩ102 竪穴住居跡観察表……30
第４表　ＳＩ104 竪穴住居跡観察表……30
第５表　ＳＩ105 竪穴住居跡観察表……33
第６表　ＳＩ106 竪穴住居跡観察表……34
第７表　ＳＩ107 竪穴住居跡観察表……37
第８表　ＳＩ108 竪穴住居跡観察表……38
第９表　ＳＩ109 竪穴住居跡観察表……43
第10表　ＳＩ110 竪穴住居跡観察表……44
第11表　ＳＩ121 竪穴住居跡観察表……47
第12表　ＳＩ123 竪穴住居跡観察表……51
第13表　ＳＩ124 竪穴住居跡観察表……52
第14表　ＳＩ125 竪穴住居跡観察表……56
第15表　ＳＩ126 竪穴住居跡観察表……57
第16表　ＳＩ127 竪穴住居跡観察表……58
第17表　ＳＩ129 竪穴住居跡観察表……60
第18表　ＳＩ131 竪穴住居跡観察表…… 63
第19表　ＳＩ131′竪穴住居跡観察表…… 64
第20表　ＳＩ132 竪穴住居跡観察表…… 67
第21表　ＳＩ133 竪穴住居跡観察表…… 68
第22表　ＳＩ137 竪穴住居跡観察表…… 69
第23表　ＳＩ138 竪穴住居跡観察表…… 70
第24表　ＳＩ001 竪穴住居跡観察表…… 83
第25表　ＳＩ002 竪穴住居跡観察表…… 84
第26表　ＳＩ003 竪穴住居跡観察表…… 86
第27表　ＳＩ004 竪穴住居跡観察表…… 89
第28表　ＳＩ006 竪穴住居跡観察表…… 90
第29表　ＳＩ007 竪穴住居跡観察表…… 90
第30表　ＳＩ008 竪穴住居跡観察表…… 93
第31表　ＳＩ009 竪穴住居跡観察表…… 98
第32表　ＳＩ009′竪穴住居跡観察表……101
第33表　ＳＩ020 竪穴住居跡観察表……102
第34表　竪穴住居跡内出土遺物一覧表……135

乳牛平遺跡

第１表　Ⅰ・ＳＸ(Ｆ)焼土遺構観察表……241
第２表　Ⅰ・ＳＫ(Ｔ)Ｔピット観察表……241
第３表　Ⅱ・ＳＸ(Ｆ)焼土遺構観察表……276
第４表　Ⅱ・ＳＫ(Ｔ)Ｔピット観察表……287
第５表　Ⅲ・ＳＸ(Ｆ)焼土遺構観察表……296
第６表　Ⅲ・ＳＫ(Ｔ)Ｔピット観察表……306
第７表　遺物観察表……339
第８表　遺物観察表……340
第９表　遺物観察表……341
第10表　遺物観察表……342

図 版 目 次

妻 の 神 Ⅰ 遺 跡

図版１　妻の神Ⅰ遺跡航空写真
図版２　妻の神Ⅰ遺跡遠景　（上）　発掘前
（下）　発掘後
図版３　Ⅰ郭近景　（上）　発掘中
（下）　発掘後
図版４　Ⅱ郭近景　（上）　発掘後
（下）　遺構検出状態
図版５　（上）　ＳＩ 101、110竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 101、101′竪穴住居跡
図版６　（上）　ＳＩ102竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 104、105竪穴住居跡
図版７　（上）　ＳＩ 104、105、106竪穴住居跡
（左下）　ＳＩ 104竪穴住居跡遺物出土状態
（右下）　ＳＩ 105竪穴住居跡遺物出土状態
図版８　ＳＩ 106、109竪穴住居跡
（上）　掘り下げ中
（下）　完掘状態
図版９　（上）　ＳＩ 107、108竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 107竪穴住居跡遺物出土状態
（左）　唐製石斧
（右）　鉄器
図版10　（上）　ＳＩ 121竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 123竪穴住居跡
図版11　（上）　ＳＩ 124竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 126、127竪穴住居跡
図版12　ＳＩ 126竪穴住居跡遺物出土状態
（上）　土師器坏
（中）　鉄器
（下）　鉄器
図版13　（上）　ＳＩ 129竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 129、131、131′竪穴住居跡
図版14　（上）　ＳＩ 133竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 138竪穴住居跡
図版15　（上）　ＳＫ 112土壙焼土検出面
（下）　ＳＫ 111、112土壙
図版16　（上）　ＳＫ 112、土壙鉄器出土状態
（下）　ＳＫ 113土壙
図版17　（上）　ＳＫ 114土壙
（下）　ＳＫ 115土壙
図版18　（上）　ＳＫ 122土壙
（下）　ＳＫ 130土壙
図版19　（上）　ＳＫ 134土壙
（下）　ＳＫ 136土壙
図版20　（上）　ＳＫ 139土壙
（下）　ＳＫ 140土壙
図版21　ＳＩ 001竪穴住居跡　（上）　炭化材出土状態
（下）　完掘状態
図版22　（上）　ＳＩ 002竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 003、 005、 006竪穴住居跡検出状態
図版23　ＳＩ 003、005、006竪穴住居跡
（上）　炭化材出土状態
（下）　完掘状態
図版24　ＳＩ 003竪穴住居跡遺物出土状態
（上）　紡錘車
（中）　木皿
（下）　炭化米
図版25　（上）　ＳＩ 007竪穴住居跡
（下）　ＳＩ 008竪穴住居跡検出状態
図版26　ＳＩ 008竪穴住居跡　（上）　完掘状態
（左下）　カマド
（右下）　鉄器出土状態
図版27　ＳＩ 009′竪穴住居跡　（上）　完掘状態
（左下）　カマド
（右下）　布出土状態
図版28　ＳＩ 020竪穴住居跡　（上）　完掘状態
（下）　鉄器出土状態
図版29　（上）　ＳＫ 014土壙
（下）　ＳＫ 015土壙
図版30　（上）　ＳＫ 016土壙
（下）　ＳＫ 018土壙
図版31　（上）　ＳＫ 019土壙
（下）　ＳＫ 023土壙
図版32　ＳＫ 023土　土器出土状態
図版33　（上）　ＳＫ 024土壙
（下）　ＳＫ 025土壙

図版34　（上）　ＳＫ 026土壙
（下）　ＳＫ 022土壙
図版35　ＳＤ 010堀跡　（上）　全景
（下）　断面Ａ
図版36　ＳＤ 010堀跡　（上）　断面Ｂ
（下）　断面Ｃ
図版37　ＳＤ 011堀跡　（上）　全景
（下）　断面Ａ
図版38　ＳＤ 011堀跡　（上）　断面Ｂ
（下）　断面Ｃ
図版39　（上）　ＳＤ 011、013間断面Ｃ
（下）　Ｉ郭北側、ＳＤ 012、013堀跡
図版40　（上）　ＳＤ 012堀跡断面Ｄ
（下）　Ｉ郭南側、ＳＤ 013堀跡
図版41　（上）　ＳＤ 012、013間断面Ｅ
（下）　ＳＤ 013堀跡断面Ｅ
図版42　ＳＤ 013堀跡　（上）　断面Ｃ西側
（下）　断面Ｃ東側
図版43　ＳＤ 013堀跡　（上）　断面Ｆ
（下）　Ｆ付近木材出土状態
図版44　ＳＤ 013堀跡　（上）　断面Ｇ
（下）　断面Ｈ
図版45　ＳＤ 116溝
図版46　Ｉ郭竪穴住居跡出土遺物（１）
図版47　Ｉ郭竪穴住居跡出土遺物（２）
図版48　（上）　Ｉ郭竪穴住居跡出土遺物（３）
（下）　Ｉ郭竪穴住居跡出土遺物（４）
図版49　（上）　Ｉ郭土壙出土遺物
（下）　ＩＩ郭竪穴住居跡出土遺物（１）
図版50　ＩＩ郭竪穴住居跡出土遺物（２）
図版51　ＩＩ郭土壙出土遺物（１）
図版52　ＩＩ郭土壙出土遺物（２）
図版53　（上）　堀跡出土遺物（１）
（下）　堀跡出土遺物（２）
図版54　（上）　遺構外出土遺物（１）
（下）　遺構外出土遺物（２）
図版55　（上）　出土鉄器（１）
（下）　出土鉄器（２）
図版56　（上）　出土鉄器（３）
（下）　出土鉄器（４）
図版57　発掘調査風景
図版58　発掘調査風景

乳 牛 平 遺 跡

図版１　遺跡　１　空から見た乳牛平遺跡
図版２　遺跡　１　西町Ｉ遺跡もり見た乳牛平遺跡
２　柴内館から見た乳牛平遺跡
図版３　遺跡　１　Ｉ郭調査前
２　同　上
図版４　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 001
２　Ｉ・ＳＩ 002
図版５　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 002
遺　２　Ｉ・ＳＩ 002南西コーナー柱痕跡
図版６　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 002
２　Ｉ・ＳＩ 002
図版７　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 003
２　Ｉ・ＳＩ 003
図版８　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 003
２・Ｉ・ＳＩ 003
図版９　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 003・004
２　Ｉ・ＳＩ 003・004
図版10　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 004
２　Ｉ・ＳＩ 004
図版11　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 002・006
２　Ｉ・ＳＩ 002・005・006
図版12　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 005
２　Ｉ・ＳＩ 006
図版13　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 003・004・007～010
２　Ｉ・ＳＩ 003・004・007～010
図版14　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 003・004・007～010
２　Ｉ・ＳＩ 003・004・007～010
図版15　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 009・010
２　Ｉ・ＳＩ 009・010
図版16　遺跡　１　Ｉ・ＳＩ 003・008
２　Ｉ・ＳＫ 001・002
図版17　遺跡　１　Ｉ・ＳＫ 001・002
２　Ｉ・ＳＫ 006・007
図版18　遺跡　１　Ｉ・ＳＫ 008～010

図版18　2　Ⅰ・ＳＫ011
図版19　遺跡　1　Ⅰ・ＳＫ012
2　Ⅰ・ＳＫ013・014
図版20　遺跡　1　Ⅰ・ＳＫ015
2　Ⅰ・ＳＫ（Ｆ）002
図版21　遺跡　1　Ⅰ・ＳＫ（Ｔ）001
2　Ⅰ・ＳＫ（Ｔ）002
図版22　遺跡　1　Ⅰ・全景
2　Ⅰ・全景
図版23　遺跡　1　Ⅰ郭から見たⅡ郭
2　Ⅱ郭調査状況
図版24　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ001
2　Ⅱ・ＳＩ002
図版25　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ001～005
2　Ⅱ・ＳＩ001～005・017
図版26　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ004・005・ＳＫ004
2　Ⅱ・ＳＩ004・005・ＳＫ004
図版27　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ006
2　Ⅱ・ＳＩ007
図版28　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ006・009・010
2　Ⅱ・ＳＩ008
図版29　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ011・018
2　Ⅱ・ＳＩ011・012・018ＳＫ（Ｔ）004
図版30　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ013炭化材出土状況
2　Ⅱ・ＳＩ013
図版31　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ009・013・014
2　Ⅱ・ＳＩ013・014
図版32　遺跡　1　Ⅱ・ＳＩ015・016
2　Ⅱ・ＳＩ015・016
図版33　遺跡　1　Ⅱ・Ⅱ郭南端の竪穴遺構
2　Ⅱ・同　上
図版34　遺跡　1　Ⅱ・ＳＸ（Ｆ）003
2　Ⅱ・ＳＸ（Ｆ）006
図版35　遺跡　1　Ⅱ・ＳＸ（Ｆ）007
2　Ⅱ・ＳＫ001
図版36　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ003
2　Ⅱ・ＳＫ004
図版37　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ004
2　Ⅱ・ＳＫ005
図版38　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ006・007
2　Ⅱ・ＳＫ008
図版39　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ015
2　Ⅱ・ＳＫ019
図版40　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ020
2　Ⅱ・ＳＫ021
図版41　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ（Ｔ）001
2　Ⅱ・ＳＫ（Ｔ）003
図版42　遺跡　1　Ⅱ・ＳＫ（Ｔ）004
2　Ⅱ・ＳＫ（Ｔ）005
3　Ⅱ・ＳＫ（Ｔ）006
図版43　遺跡　1　Ⅱ・ＳＸ001
2　Ⅱ・ＳＸ002・ＳＸ015
図版44　遺跡　1　Ⅱ郭
2　Ⅱ郭
図版45　遺跡　1　Ⅱ・Ⅲ郭と妻の神遺跡
2　Ⅱ・Ⅲ郭と妻の神遺跡
図版46　遺跡　1　Ⅲ・ＳＩ001
2　Ⅲ・ＳＩ002
図版47　遺跡　1　Ⅲ・ＳＩ002
2　Ⅲ・ＳＩ003
図版48　遺跡　1　Ⅲ・ＳＩ003
2　Ⅲ・ＳＩ004
図版49　遺跡　1　Ⅲ郭
2　Ⅲ郭
図版50　遺跡　1　ＳＸ（Ｆ）001
2　ＳＸ（Ｆ）001
図版51　遺跡　1　Ⅲ・ＳＤ001～005
2　Ⅲ・ＳＤ001～005
図版52　遺跡　1　Ⅲ・ＳＤ001～005
2　Ⅲ・ＳＤ001土層面
図版53　遺跡　1　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）001
2　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）006
3　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）003・ＳＫ005　ＳＸ002
4　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）003・ＳＫ010　ＳＸ002
図版54　遺跡　1　Ⅲ・ＳＸ001
2　Ⅲ・ＳＸ001
図版55　遺跡　1　Ⅲ・ＳＸ001
2　Ⅲ・ＳＸ003
図版56　遺跡　1　Ⅲ・ＳＸ003
2　Ⅲ・ＳＸ003
図版57　遺跡　1　Ⅴ郭残存部とⅠ・Ⅴ郭間の掘

2　V郭西端に見られる段差
図版58　遺跡　1　I・II郭間の掘調査前（中央部段差が土塁）
2　II・III郭間の堀調査前
図版59　遺跡　1　III郭と妻の神III遺跡間の堀（中央部土塁小山）
2　III郭と土塁状小山間の堀（左、III郭、右、小山）
図版60　遺跡　1　I郭北側に見られる堀
2　同　上
図版61　遺跡　1　Bトレンチ調査状況
2　同　上
図版62　遺跡　1　Bトレンチ調査状況
2　同　上
図版63　遺跡　1　II郭とBトレンチ
2　Bトレンチ調査状況
図版64　遺跡　1　Bトレンチ土塁
2　Bトレンチ土塁
図版65　遺跡　1　トレンチII郭側堀土層
2　Bトレンチ土塁
図版66　遺跡　1　Bトレンチ土塁芯と堀底の溝
2　Bトレンチ南側堀底の溝
図版67　遺跡　1　Bトレンチ南側堀底の溝
2　Bトレンチ土塁芯
図版68　遺跡　1　III郭よりII郭
2　妻の神III遺跡から乳牛平遺跡

Ⅰ　は　じ　め　に

1．発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年４月の鹿角市・青森市間約81kmの第２次施行命令と同46年６月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37kmの第５次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受けて同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があって、ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年８月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境(註1)まで、幅４km、延長25kmにわたって遺跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。昭和48年８月には、鹿角市八幡平、尾去沢(註2)、花輪地区で、幅４km、延長20kmの遺跡分布調査と試掘を実施して、46ヵ所の遺跡を確認した。

昭和51年２月21日になると、昭和48年８月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に至る延長約21.1kmの路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上(註3)の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。昭和55年に新たに２遺跡が発見追加され、現在総計33遺跡となっている。

その後、遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年２月に遺跡の発掘調査依頼があり、秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区７遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平、花輪地区19遺跡の調査を行い、昭和56年度に８遺跡の調査を行い、３ヵ年に及ぶ鹿角市内の路線内遺跡調査を全て完了している。

註１　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第20集　1970年。

註２　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第24集　1972年。

註３　秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書（八幡平～十和田錦木）』秋田県文化財調査報告書　第56集　1978年。

2．調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井清足	奈良国立文化財研究所所長
	芹沢長介	東北大学文学部教授
専門指導員	小林達雄	国学院大学文学部助教授
	林　謙作	北海道大学文学部助教授
	須藤　隆	東北大学文学部助教授
	藤沼邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	進藤秋輝	宮城県多賀城跡調査研究研究第一科長
調査担当者	岩見誠夫	秋田県埋蔵文化財センター副所長 （猿ヶ平Ⅱ、柏木森遺跡担当）
	桜田　隆	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （妻の神Ⅳ、一本杉遺跡担当）
	小玉　準	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （乳牛平、明堂長根遺跡担当）
	橋本高史	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （妻の神Ⅰ、中の崎遺跡担当）
	小林　克	秋田県埋蔵文化財センター文化財主事 （室田、案内Ⅳ、柏木森遺跡担当）
調査補佐員	藤井　安正、松岡　忠仁、児玉　悦郎、高橋　学、奈良　義博	（以上岩見班）
	神田　公男、児玉　昭彦、安保　廣、池田　洋一	（以上桜田班）
	畠山　圭、阿部　明人、米田　哲、高橋　修	（以上小玉班）
	安保　徹、福本　雅治、鈴木　功、鈴木　秋良	（以上橋本班）
	関　直、阿部　義行、花田　孝夫	（以上小林班）
事務補助員	佐藤　順子、金沢万里子	
調査協力機関	日本道路公団鹿角工事事務所	
	秋田県東北縦貫自動車道対策事務所	
	鹿角市建設部建設課高速道路対策室	
	鹿角市教育委員会	

II　遺跡の立地と環境

1　地形と地質

(1)　地形と地質の概要

本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。これらについて秋田県（1973）、内藤（1966、1970）および日本道路公団の東北自動車道土性縦断図表（日本道路公団仙台建設局：昭和53年）等を参考にしてまとめると次のようになる。

山地：東側は花輪越以北800～700ｍと北にゆくほど高度を下げるが、以南では1000ｍ以上の標高で満壮年期のけわしい地形を示し、特に皮投岳（1122.4ｍ）、五の宮嶽（1115.0ｍ）など起伏量の大きい山塊が連なっている。

地質は主として新第三紀中新地の火山砕屑岩よりなるが、それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩を分布している。また、福士川上流には南部の谷内、湯瀬と同様に粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列は南部でほぼ南北に連なっているが、花輪越以北では方東方向にのびている。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩頸や断層系の方向ともほぼ一致している。

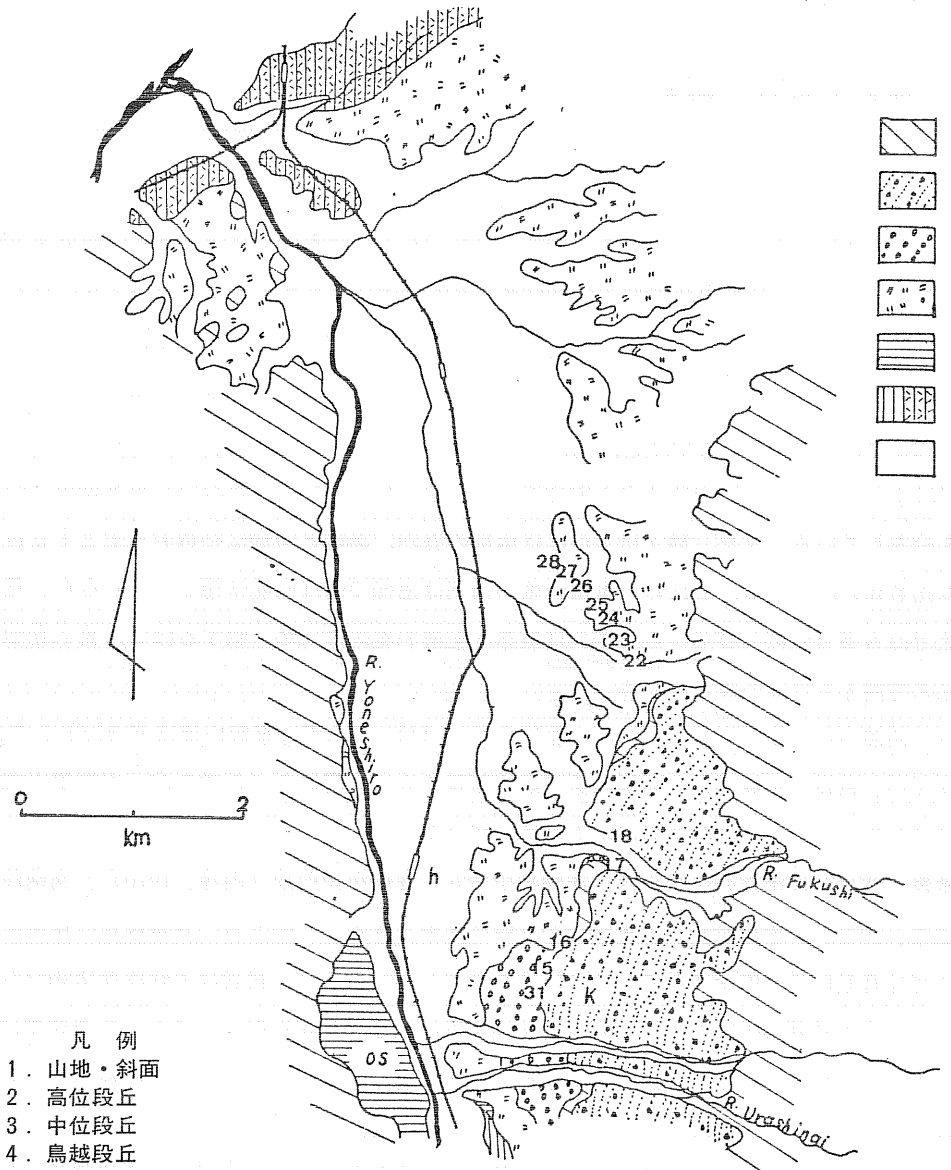
一方、西側山地は南部で400～600ｍ、北部で250～300ｍで山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に第三紀中新世の火山砕屑岩を主とするが、大葛層大滝層などでは砂岩、泥岩などの砕屑岩が広く発達している。

段丘地形：花輪盆地南部の段丘面は、花輪高位段丘、花輪中位段丘（内藤、1970）、鳥越段丘（秋田県、1973）、松館段丘、大里段丘の５段に区別できる。このうち、鳥越段丘は秋田県（1973）では鳥越段丘・関上段丘の二つに区別されたものであるが、後者は火砕流堆積物からなる前者の二次堆積物の上面であり、両者を区別する段丘崖の発達も局所的であって連続性に乏しいことから一括して使用する。また、松館・大里の各段丘は内藤（1970）*の花輪低位段丘群とされたものである。

一方、花輪盆地の中～北部の段丘面は、高位段丘・鳥越段丘・毛馬内段丘・中位段丘などが見られる。次にそれぞれについて簡単に記載する。

高位段丘は、南部では東側山地の末端部からなだらかに斜面をもって扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平担面を残している。標高は1/25千地形図から、浦志内

＊以下、高位段丘、中位段丘と略称する。



凡　例
1．山地・斜面
2．高位段丘
3．中位段丘
4．鳥越段丘
5．松館段丘
6．毛馬内段丘・大里段丘
7．沖積地
（15～31は遺跡所在地，
h：花輪，k：葛岡，
os：尾去）

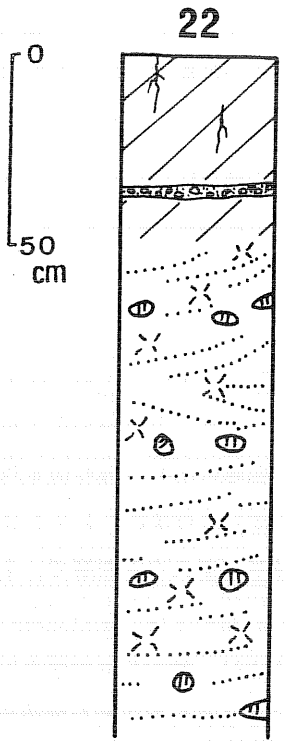
第1図　段丘地形図

川左岸の扇頂部で350m、葛岡北東の末端部で240mであり、平均こう配は約7.2%(4.1°)となる。また、歌内川流域でも320mから250までの高度差をもつ。一方、福士川左岸では350m～250mであるが、右岸では花輪スキー場北東の300mから女森西方の200mまでと明らかに低い。また、平均こう配も福士川以北では約4.4%（2.5°）と小さくなる。 盆地の中～北部では南部ほど分布は広くなく、散在的で面の高度も230～240mと低い。構成層は径数cmから50cm前後までの亜角礫が雑然と混入した不淘汰礫層であり、地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み、礫はくさってマトリックスと大して変らないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のほかに、葛岡西方では火砕流堆積物の下位に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また、上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており、中に末風化の亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層がみられることもある。

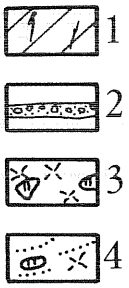
中位段丘は上田（1965）および内藤（1970）の産土神断層以南にやや広く分布し、浦志内川下流で標高230～180m、歌内川下流で270～200mである。産土神断層以北ではまだ確認していない。末端部は鳥越軽石質火山灰層におおわれるが、明瞭に扇状の地形面を残しており、平均こう配は柏木森の西方で約6.0%（3.5°）である。構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雑然と混入する礫層で、全体的に層理は不明瞭で塊状であるが、末端部では厚さ数cmの連続性のわるいシルトないし砂の薄層を含なこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の上に、最大6mの厚さで泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川と歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお、この粘土層の上位に5～6mの厚さで重なる中位段丘構成層はすでに記載したように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが、全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越段丘の下部にもみられる。

鳥越段丘は鳥越軽石質火山灰層（内藤、1966）の堆積面であり大湯環状列石など多くの遺跡をのせて盆地内に最も広く分布する*。特に大湯川の西岸および小坂川の左岸、米代川右岸によく発達する。高度は、花輪東方で170～180m、柴内から根市戸付近で150m前後、腰廻から一本木にかけて180m前後と盆地の周辺部にむかって高度をあげるが、特に大湯川沿いでは風張付近を扇頂部とする扇状地様の形態を示す。全域にわたって灰白色～乳白色の火山灰中に白色の軽石が多量に含まれる層相を示すが、大湯川と小坂川の合流点に近いほど層理の明瞭な二次堆積物が発達する傾向がみられる。火砕流台地としての形態をよく示しており、段丘面は平坦で段丘崖は急崖をなすことが多い。なお、小枝指から申ヶ野にかけては部分的により古い高市軽石質火山灰層が見られることがあり、埋没段丘面の存在が指摘されている（内藤、1966）。

＊このことから藤原（1960）は本段丘面を遺跡面と呼んだ。



22：妻の神 I 遺跡



凡　例

1．黒色腐植土層
2．大湯軽石質火山礫層
3．鳥越軽石質火山灰層
4．同上二次堆積物

第 2 図　露頭柱状図

松館段丘は南部で米代川左岸に沿い尾去から松館、荒町にかけて広く分布している。標高は160～170ｍで、夜明島川、黒沢川等の扇状地の解析された段丘とみられる。構成層は未確認である。盆地中部の東側に、草木川、佐比内沢、間瀬川等による扇状地が発達するが、これらは松館段丘と同時期の可能性がある。大里段丘は南部で米代川右岸沿いに大里付近まで分布する。標高 150～155 ｍと低く、構成層は上部はくずれやすい河床性の礫層を主として、田泥質の砂礫層が重なっている。河床性の礫層の上には大湯軽石質火山礫層があり、さらに部分的に軽石質の二次堆積物がその上に見られたりすることから北部の毛馬内段丘に対比できるものと思われる。

毛馬内段丘は大湯川両岸と松の木以西の米代川沿いに発達する最低位の段丘で東能代付近まで連続して分布する。標高は毛馬内付近で 110～120 ｍ、松の木では112ｍである。構成層は大湯川沿いでは下部から大湯軽石質火山礫層、毛馬内軽石質火山灰層、不淘汰砂礫層の順に重なるが、米代川沿いでは毛馬内軽石質火山灰層が主となる。毛馬内軽石質火山灰層は米代川沿いでいくつかの遺跡を埋没させており、特に鷹巣盆地における胡桃館埋没遺跡（平安時代中～末期）はよく知られている（秋田県教委、1968、1969、1970、平山、市川、1966）。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山砕屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西の山地の起伏量、山容のちがい、段丘の非対称的分布等は、断層の東側の山地が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており、注目に値する。一方、火山砕屑物層については内藤（1966、1970）、中川、ほか（1972）等によりくわしく知られており、古い方から小坂軽石質火山灰層、高市軽石質火山灰層（^{14}Ｃ年代で 25,850 ±1,360年前）、鳥越軽石質火山灰層（12,000±250 年前）、申ヶ野軽石質火山灰層（ 8,600±250 年前）、大湯軽石質火山礫層(3,680±130 年前）、毛馬内軽石質火山灰層（1,280±90年前)に区分されている。このうち大湯軽石質火山礫層の^{14}Ｃ年代値は同層の下位の炭質物についての値があり、同層の降下時期より古い年代値と考えられる。また、毛馬内軽石質火山灰層は前述のように埋没遺跡との関係から平安時代中～末期とみられており、大湯軽石質火山礫層の降下に引きつづいて流下した同一火山活動にともなう火砕流堆積物であるとの指摘もなされている（大池、1974、藤本、1980）。

(2) 地　　質

No、22、23、24、25

いずれも標高 161～163 ｍで平坦な鳥越段丘上にある。上位から黒色腐植土層、鳥越軽石質

火山灰層の順にみられるが、黒色腐植土層中には径 0.5～2.0 cmの軽石を含む大湯軽石質火山礫層が５～12cmでみられる。鳥越軽石質火山灰層は上部の５～７ｍが水中の二次堆積物となっており、明瞭な斜交ラミナがみられる。

参考文献

秋田県教育委員会（1968、1969、1970）『胡桃館埋没遺跡発掘調査報告（概報、第２次、第３次）』秋田県文化財調査報告書、第14、19、22集

秋田県（1973）『秋田県総合地質図幅』、「花輪」

藤本幸雄（1980）「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成（その１）大館、花輪盆地における火山灰層」、『大館工業高研究紀要』

藤原建蔵（1960）「米代川流域の河岸段丘と十和田火山噴出物との関係」『東北地理』12、２、P 34～41

内藤　博夫（1966）「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑物と段丘地形」『地理学評論』第39巻第７号、P13～34

内藤博夫（1970）「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』第43巻、P 594～606

中川　久夫　ほか（1972）「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研究邦報』第73号 P７～18

大池昭二（1972）「十和田火山は生きている」　『国土と教育』第26号Ｐ２～７

上田良一（1965）「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」『秋田大地下資源開発研究報告』第32号Ｐ１～71

2．環境と周辺の遺跡

秋田県の北東隅に位置する鹿角は、東に八幡平を介して岩手県と境を接し、北には青森県八甲田山系を控え、年間平均気温花輪 9.4℃、年間平均降水量月 168㎜を測り、積雪量概して少なく、年間を通じて昼夜の温度隔差の大きい内陸型気候を示す地である。

奥羽山脈中に形成された地溝盆地である鹿角盆地は、八幡平から北流する米代川、十和田から南流する大湯川、小坂川の三本の河川流域に開けた沖積地と、複合扇状地及び東部、西部の両山岳地帯からなっている。盆地中央を流れる米代川、大湯川、小坂川の三本の河川には、東西の両山岳地から多くの小侵蝕谷を伝わって小河川が流れ込み、沖積面よりも70～80ｍ程高位にある標高200ｍ前後の山岳地裾野の段丘を開析している。そして、こうした小河川の間は、さらに細かな沢筋によって区切られる場合が多く、それらの沢筋によって分断された舌状の台地が、群となって開析谷と開析谷の間にいくつか連なって存在する。

鹿角盆地は多くの遺跡をその中に抱えているが、それらの遺跡は前述の標高200ｍ前後の段丘地帯に立地し、その段丘が多くの小侵蝕谷によって開析されているため、分布状態は多くの小河川によって分断された個々の段丘毎に群在の様相を呈する。盆地内で特に遺跡の集中する箇所をあげれば、熊沢川と米代川の合流地点南東の長嶺地区、米代川に西流して注ぎ込む歌内川が開析する大里地区、同じく米代川支流である福士川周辺の産土神地区、米代川、大湯川、小坂川の合流地点南側の神田地区、同じく北側の瀬田石地区、小坂川に注ぎ込む荒川の周辺等がある。また、盆地中央部東側の風張台地も広範囲に遺跡が点在する。

鹿角では旧石器時代の遺跡は確認されておらず、調査が行われたり遺物が採集されたりして確認されているのは、全て縄文時代以降の遺跡である。

縄文時代早期の様相は、未だ明確に把握されている状態とは言い難い。三ヶ年にわたる東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で、大地平遺跡[*4]、上葛岡Ⅳ遺跡[13]、柏木森遺跡[15]等から、青森県八戸市是川や岩手県三戸市等で出土例があり赤御堂式と呼称される表裏縄文の土器が破片で確認されている。同様の土器は大湯付近からも採集されている。また、上葛岡Ⅳ遺跡[13]、猿ヶ平Ⅱ遺跡[21]柏木森遺跡[15]からは、胎土に多量の繊維を含み複節の羽状縄文の施された所謂砲弾形の深鉢が出土しており、早期末～前期初頭に位置づけられている。上記の遺跡からは、縄文時代早期東北地方北部に通有のトランシェ様の石器も併せて出土している。他に極く少量ではあるが一本杉遺跡[33]からは貝殻文土器の破片、飛鳥平遺跡[8]からは青森県八戸市でも出土し、草創期の可能性も指摘されている瓜形文類似の土器も破片で出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、八幡平玉内にある清水向遺跡[54]があげられる。この遺跡は昭和29年武藤鉄城氏等によって調査され、県内で初めて縄文時代竪穴住居跡２棟を確認した遺跡と

＊　数字は第３図の遺跡番号と一致する。

第１表　周辺遺跡一覧

〈鹿角の中世城館〉

記号	城館名	残存状況	城主（伝）	記号	城館名	残存状況	城主（伝）	記号	城館名	残存状況	城主（伝）
A	谷内会館	やや良		S	尾去館	やや良	尾去越中(安保)	2L	柴内館		
B	谷内館	不良	谷内三郎（成田）	T	下館			2M	万谷野館	不良	
C	谷内館	不良	一戸弾正左ェ門(武田)	V	玉内館	不良	玉内大炊助(安保)	2N	高市館	不良	高市玄蕃（成田）
D	長牛館	不良	秋元弾正左衛門・一戸摂津守義定・[illegible]	W	上山館	不良		2P	上台館		
E	白懸館	やや良	白懸勘解由	X	茶臼館	不良		2Q	新斗米館	不良	新斗米左近（奈良）
F	長内会館			Y	花輪館	不良		2R	新斗米館	不良	新斗米左近
G	三ヶ田館	やや良	三ヶ田左近（阿部）	2A	かいぬま館	やや良		2S	小平館	やや良	小平彦次郎（奈良）
H	長嶺館	やや良	長嶺下総（成田）	2B	高瀬館	やや良	高瀬土佐(秋元)	2T	小枝指館	不良	小枝指左馬之助（奈良）
I	長内古館	やや良		2C	孫右ェ門館	不良		2V	一ッ森館	やや良	
J	長内館	やや良	長内刑部（成田）	2D	花輪古館	不良	(伝)花輪次郎(安保)	2W	丸館	やや良	奈良越後
K	下和志賀館	不良		2E	黒土館	やや良	黒土丹後(秋元)	2X	高屋館	やや良	高屋筑前（秋元）
L	田中館			2F	（無名館）			2Y	碁石館	不良	禅田十郎（成田）
M	湯瀬館	消滅	湯瀬中務(成田)安倍宮内	2G	（無名館）			3A	中草木館	不良	
N	小豆沢館	不良	小豆沢駿河（秋元）	2H	妻の神館			3B	関上館	不良	関神安房（成田）
O	石鳥谷館	やや良	石鳥谷九郎（安保）南部九郎正友	2I	乳井館	不良	乳牛六郎(安保)	3C	毛馬内館		
P	大里館	不良	成田小次郎左衛門[illegible] 大黒上総（安倍）	2J	柴内館	不良	柴内弥次郎(安保)	3D	瀬田石館	やや良	瀬田石太郎左衛門(奈良)
Q	松館	やや良	松館越前（安保）	2K	西町館						

〈鹿角の周辺遺跡〉

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
36	大館	53	尾去	70	大曲	87	上ノ野Ⅷ	104	申ヶ野
37	三ヶ田	54	清水向	71	陸場	88	上ノ野Ⅶ	105	草木C
38	長嶺	55	三光塚１号	72	天戸森Ⅰ	89	上ノ野Ⅵ	106	小板野
39	新城15、17、18番地	56	三光塚２号	73	用野目	90	上ノ野Ⅴ	107	中野袋B
40	新城26、27番地	57	六角平	74	餅野Ⅳ	91	上ノ野Ⅳ	108	白坂
41	長畑	58	玉内	75	万谷野	92	板橋Ⅰ	109	瀬田石A・B
42	天狗橋	59	甘蕗	76	餅野Ⅲ	93	上ノ野Ⅲ	110	狐平
43	三ツ森	60	下平	77	餅野Ⅰ	94	上ノ野Ⅱ	111	柏崎
44	下毛和志賀	61	産土神A・B・C	78	餅野Ⅱ	95	上ノ野Ⅰ	112	寺ノ上B
45	下鷲の巣	62	赤坂B	79	長野	96	石野古墳	113	蟹沢
46	後口田	63	東山C	80	餅野Ⅴ	97	曲谷地B	114	大湯環状列石
47	石鳥谷	64	東山A	81	花輪C	98	枯草坂	115	一本木平
48	岩淵	65	東山C	82	花輪B	99	曲谷地A	116	八幡堂
49	中ノ沢	66	赤坂A	83	花輪A	100	冠田		
50	下葛岡A	67	日向屋敷Ⅰ	84	板橋Ⅱ・Ⅲ	101	平元館Ⅰ		
51	尾去	68	御休堂	85	戸羽の沢	102	平元館Ⅱ		
52	東在家	69	天戸森	86	上ノ野区	103	鳥野		

〈東北縦貫自動車道路線上の遺跡〉

番号	遺跡名	時代・時期	遺構・遺物	収録報告書
1	居熊井	縄文（後期）	縄文竪穴住居跡，土壙，土器捨場，縄文土器	東北縦貫自動車道発掘調査報告書 I
2	湯瀬館	縄文　中世	縄文土器，掘立柱建物跡，礎石配列建物跡	〃　I
3	上山田	縄文（前期）	縄文土器	〃　I
4	大地平	縄文　弥生	縄文土器，弥生土器	〃　I
5	堂の上	縄文（前期～晩期）	縄文土器	〃　I
6	歌内	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，土壙，縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　II
7	鳥居平	縄文	縄文竪穴住居跡，縄文土器	〃　III
8	飛鳥平	縄文（早期・後期）平安	縄文竪穴住居跡，縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　III
9	北の林I	縄文（中期～後期）平安	縄文竪穴住居跡，土壙，平安竪穴住居跡，掘立柱建物跡	〃　III
10	北の林II	縄文（中期～後期）平安	縄文竪穴住居跡，土壙，縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　IV
11	上葛岡I	縄文	縄文竪穴住居跡，縄文土器	〃　IV
12	上葛岡III	縄文	縄文土器	〃　I
13	上葛岡IV	縄文	縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器，須恵器	〃　V
14	駒林	縄文　平安	縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　V
15	柏木森	縄文　平安	土壙，フラスコ状ピット，縄文土器(早期・後期・晩期)土師器	〃　VII
16	中の崎	縄文（後期・晩期）平安	縄文土器(後期・晩期)，平安竪穴住居跡，掘立柱建物跡，須恵器，土師器	〃　VII
17	孫右ェ門館	縄文　平安	屋外炉，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器	〃　XI
18	案内I	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器	〃　XI
19	案内II	縄文	縄文竪穴住居跡，土壙，配石遺構，縄文土器	〃　V
20	猿ヶ平I	縄文（中期～晩期）弥生	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器，弥生土器	〃　V
21	猿ヶ平II	縄文（早期～晩期）	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器	〃　VI
22	妻の神I	縄文（晩期）平安　中世	フラスコ状ピット，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器	〃　VIII
23	妻の神II	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，平安竪穴住居跡，中世建物跡	〃　XI
24	妻の神III	縄文　平安　中世	縄文竪穴住居跡，中世竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土壙痕，柵列跡	〃　IX
25	乳牛平	縄文　平安　中世	縄文土器，平安竪穴住居跡	〃　VIII
26	下乳牛	縄文　平安	フラスコ状ピット，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器，須恵器	〃　XI
27	西町I	縄文　弥生	縄文土器，弥生土器	〃　XI
28	西町II	縄文	縄文土器	〃　XI
29	室田	中世？	な　し	〃　VI
30	明堂長根	縄文	土壙，フラスコ状ピット，縄文土器，溝状遺構	〃　VII
31	上葛岡II	縄文	縄文竪穴住居跡，縄文土器	〃　IV
32	一本杉	縄文　平安　中世	縄文土器，平安竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土師器，須恵器，中世建物跡	〃　VI
33	案内III	縄文　平安	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器，平安竪穴住居跡，土師器，須恵器	〃　VI
34	小豆沢館	縄文　平安　中世	縄文竪穴住居跡，フラスコ状ピット，縄文土器，土師器，中世陶器	〃　IV

第3図　東北縦貫自動車道路線上及び周辺遺跡

して注目された。出土した土器は、前期後葉円筒下層ｄ式を中心として、円筒下層ａ式、円筒下層ｂ式等であり、また円筒下層ｄ式土器に伴って、山形県吹浦遺跡等に類例の求められる大木６式土器も出土している。また、東北縦貫自動車道関係の調査では、居熊井遺跡[1]、上山田遺跡[3]、堂の上遺跡[5]、小豆沢館遺跡[35]等から主に円筒下層ｄ式を中心とした前期後葉の土器の出土をみている。

縄文時代中期の遺跡は東北縦貫自動車道関係遺跡の調査で数箇所調査されている。飛鳥平遺跡[8]、北ノ林Ⅰ遺跡[9]、北ノ林Ⅱ遺跡[10]では石組の複式炉をもった竪穴住居跡が検出され、大木９～10式土器を出土している。また歌内遺跡では、フラスコ状土壙の壙底から中ノ平式土器を出土している。

後期は、鹿角における縄文時代各期を通じて、調査、発見例の最も多い時期である。東北縦貫自動車道関係の遺跡では、後期中葉の捨場と竪穴住居跡を確認した居熊井遺跡[1]、後期初頭の埋設土器を検出した飛鳥平遺跡[8]、後期中葉の石組の炉をもつ竪穴住居跡を検出した案内Ⅰ遺跡[18]案内Ⅲ遺跡[34]、猿ヶ平Ⅰ遺跡[20]、猿ヶ平Ⅱ遺跡[21]、後期後葉の竪穴住居跡を検出した案内Ⅱ遺跡[19]等がある。さらに昭和43年には奥山潤氏等によって、十和田大湯の黒森山麓竪穴群遺跡が調査され後期前葉の土器を伴った石組をもつ竪穴住居跡の検出が報告されている。

また、昭和26年、27年の両年に調査が行われ史跡指定された大湯環状列石[114]は、その後数回にわたって周辺の分布調査がなされ、現在の万座、野中堂の両列石の他にも付近数箇所に配石群の存在が確認されている。

晩期では、清水向遺跡[54]と同じ台地に立地する玉内遺跡[58]が知られ、晩期中葉の遺物とともに所謂日時計形の列石が確認されている。また、この玉内遺跡の立地する台地とちょうど米代川を挟んでの対岸には東在家遺跡[52]があり、晩期中葉までの遺物を多く出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、柏木森遺跡[15]、明堂長根遺跡[31]から袋状土壙群が検出され、晩期初頭の遺物を多く出土している。

秋田県内における弥生時代の遺跡は現在までのところ縄文時代のそれと較べると、知られている遺跡数、その内容とも少なく且つ不明確な点が多い。鹿角はその中にあっては比較的該期様相の理解がすすんでいる地域である。

鹿角盆地北端の小坂町周辺では、奥山潤、安保彰両氏の活動により、内ノ岱遺跡、曙岱遺跡等から、天王山式類似の土器、後北Ｃ式土器が採集され報告されている。また鹿角市尾去沢からは田舎館式類似の土器が出土している。東北縦貫自動車道関係の調査では、大地平遺跡[4]、駒林遺跡[14]から縄軸の絡縄体の回転施文された土器片、奥山潤氏等命名によるところの小坂Ｘ式土器が出土し、さらに猿ヶ平Ⅰ遺跡[20]からは天王山式類似の土器が出土している。しかし、これらの弥生時代の土器は今のところ断片的な出土に限られており、伴出する他の遺物や遺構等、末

だ不明な点が多く残されている。

奈良、平安期の古代の遺跡も近年調査例を増して来ている。古くは昭和初年に木村善吉氏等によって調査され、その後、後藤守一氏等によって調査された菩堤野竪穴群遺跡がある。この遺跡は計12ヵ所の竪穴群からなると想定されたが、その調査当初から覆土中に入る火山灰層が注目され、以来鹿角における該期の遺跡調査は、この火山灰層との関係解明を大きな視点の一つとして据えることになる。近年では大湯環状列石周辺の分布調査、鳥野遺跡[103]、源田平遺跡、小平遺跡[28]等の調査で、該期竪穴住居跡が検出され、また、東北縦貫自動車道関係の調査では、歌内遺跡[6]、飛鳥平遺跡[8]、北の林Ⅰ遺跡[9]、北ノ林Ⅱ遺跡[10]、上葛岡Ⅳ遺跡[13]、駒林遺跡[14]、一本杉遺跡[33]中ノ崎遺跡[16]、案内Ⅰ遺跡[18]、案内Ⅲ遺跡[34]、妻ノ神Ⅱ遺跡[22]、妻ノ神Ⅱ遺跡[23]、下乳牛遺跡[26]などで竪穴住居跡が検出されている。さらに御休堂遺跡[68]、高市向館遺跡でも同様の住居跡が検出されている。菩堤野竪穴群から含めた現在まで確認されている該期住居跡の総数は、144棟という膨大な数にのぼる。

他に、奈良、平安期の遺跡としては、十和田錦木字曲谷地にある枯草坂古墳[98]、尾去沢字東在家にある三光塚古墳群[55、56]があげられる。いずれも終末期の小円墳であり、玉類、刀装具等を出土している。また十和田字宝田にも古墳群があったと伝えられている。

中世鹿角は、鎌倉時代にこの地に移住したと伝えられる成田氏、安保氏、秋元氏、奈良氏の所謂鹿角四氏の支配する地域であった。これら四氏から出自する各々の庶流は、盆地内に所領を得て『鹿角由来集』『鹿角由来記』などに伝えられる鹿角四十二館にそれぞれ居を構えて割拠する。この状態は近世鹿角が南部領となるまで続く。

鹿角には、鹿角四十二館あるいは四十八館に該当するものを含めて計58ヵ所に及ぶ「館」跡が確認されている。これらの「館」跡は、舌状に張り出した台地を、1～数本の掘切を構築して造りあげている多郭連続式のものが多い。すなわち、一ヵ所の「館」跡は数個の郭が連っている。また、郭自体が元来舌状台地であったため、「館」として使用される以前にも人間の居住域として選定される事が多く、郭上面の調査では時として縄文時代、平安時代の竪穴住居跡等が中世の遺構、遺物等とともに検出される。

現在までに発掘調査の行われているのは、小枝指七ッ館[27]、長牛館[D]、御休堂遺跡[68]等があり、東北縦貫自動車道関係では、湯瀬館遺跡と乳牛館の一部と考えられている妻ノ神Ⅰ[22]、同Ⅱ[23]、同Ⅲ[24]乳牛平遺跡[25]が調査終了している。

妻の神Ⅰ遺跡

遺跡番号	No.22
所在地	鹿角市花輪字妻の神31番地他
調査期間	昭和56年4月20日～8月12日
発掘予定面積	3,219m²
発掘調査面積	4,800m²

1．遺跡の概観

(1) 遺跡の立地と環境

妻の神Ⅰ遺跡は、秋田県鹿角市花輪字妻の神31番地他に所在する。

岩手県に源を発する米代川が秋田県側に西流し、湯瀬の急峻な渓谷を出て、北へと流れを変え、ここに鹿角盆地を形成する。鹿角盆地は東西約10km、南北約30kmの細長い形をしており、遺跡は盆地の中央やや南よりの東側の鳥越段丘面上に位置する。乳牛部落西方の段丘面は、いくつかの堀とそれによって区切られた郭がみられ、この付近一帯は乳牛館の一部とみられる。当遺跡においては、Ⅰ郭、Ⅱ郭および3重の堀が検出された。

(2) 遺構の分布

妻の神Ⅰ遺跡は、中世の館跡を形成した空堀が廻る範囲内を調査対象として行った。調査を進めることによりⅠ郭をとりまく部分的に2重の堀のさらに外側にも掘のあることが確認され結局Ⅰ部郭分は3重に堀が廻ることがわかった。堀跡は調査区域外にも延びており、かなり大規模なものであったらしい。

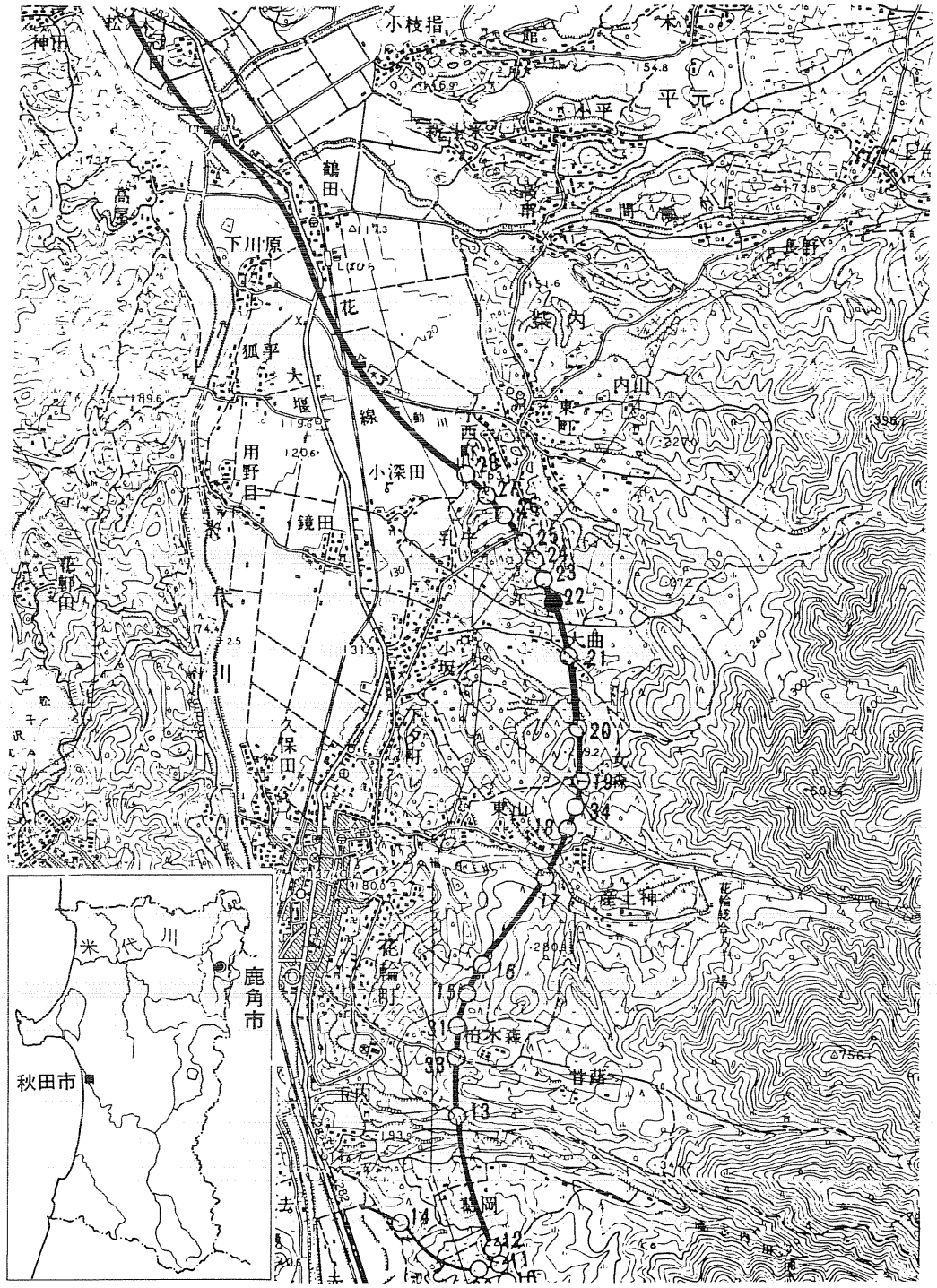
堀は台地の縁辺部を利用して構築されており、台地上からは平安時代の竪穴住居跡、縄文時代晩期のフラスコ状ピット等が検出された。住居跡によっては堀によって一部を切られたものもあった。中世の館跡に付随したとみられる遺構は堀跡以外検出されなかった。

(3) 遺物の出土状態

出土遺物は縄文時代晩期と平安時代の遺物がほとんどである。縄文時代の遺物は遺構外ではⅠ、Ⅱ郭ともまとまりなく少量出土するのみであり、フラスコ状ピットのうちＳＫ 023土壙からややまとまって出土しているにすぎない。フラスコ状ピット出土土器はいずれも底縁部から出土した。

平安時代の遺物は、住居跡内を主にほぼ全面にわたり出土したが、量的にはそれほど多いものではない。東北北部に限定してみられる把手付土器も出土した。

また、南側の堀跡から焼けた板が2枚出土しており、これが中世のものと考えられる唯一の出土遺物である。このように館跡として遺構自体は中世のものでありながら、遺物は縄文、平安時代のものの出土がほとんどであった。



22:妻の神Ⅰ遺跡

第1図　遺跡位置図

2．調査の方法

妻の神Ⅰ遺跡は、郭部と堀部の比高が大きく日本道路公団の付設したＳＴＡ杭の見通しが困難であり、また歴史時代の遺跡は方位に合わせるという方針から、ＳＴＡ 155＋00を15－Ｋとして磁北に合わせて５ｍ×５ｍのグリッドを組んだ。南北基線をアルファベットとし、西へ行くにつれて進むものとした（西←……Ｍ、Ｌ、Ｋ、Ｊ、Ⅰ……→東）。東西基線は算用数字とし、北へ行くにつれて進むものとした（北←……17、16、15、14、13……→南）。各グリットの名称はこれら基線の直交する東南隅の座標の算用数字とアルファベットの組み合わせにより呼ぶこととした（15－Ｋ、14－Ｌ……）。

実測は堀断面については、グリッドと関係なくⅠ郭から放射状にいれた10本のトレンチにより、Ｓ＝1/20で行った。その他郭上面の遺構の実測はグリッド中心に、間尺もしくは１ｍのマス目を組んで原則としてＳ＝1/20で、カマド等はＳ＝1/10で行った。また地形実測図は航空測量による遺跡付近図と現場におけるS=1/200の平板測量による実測図をもとに作成した。

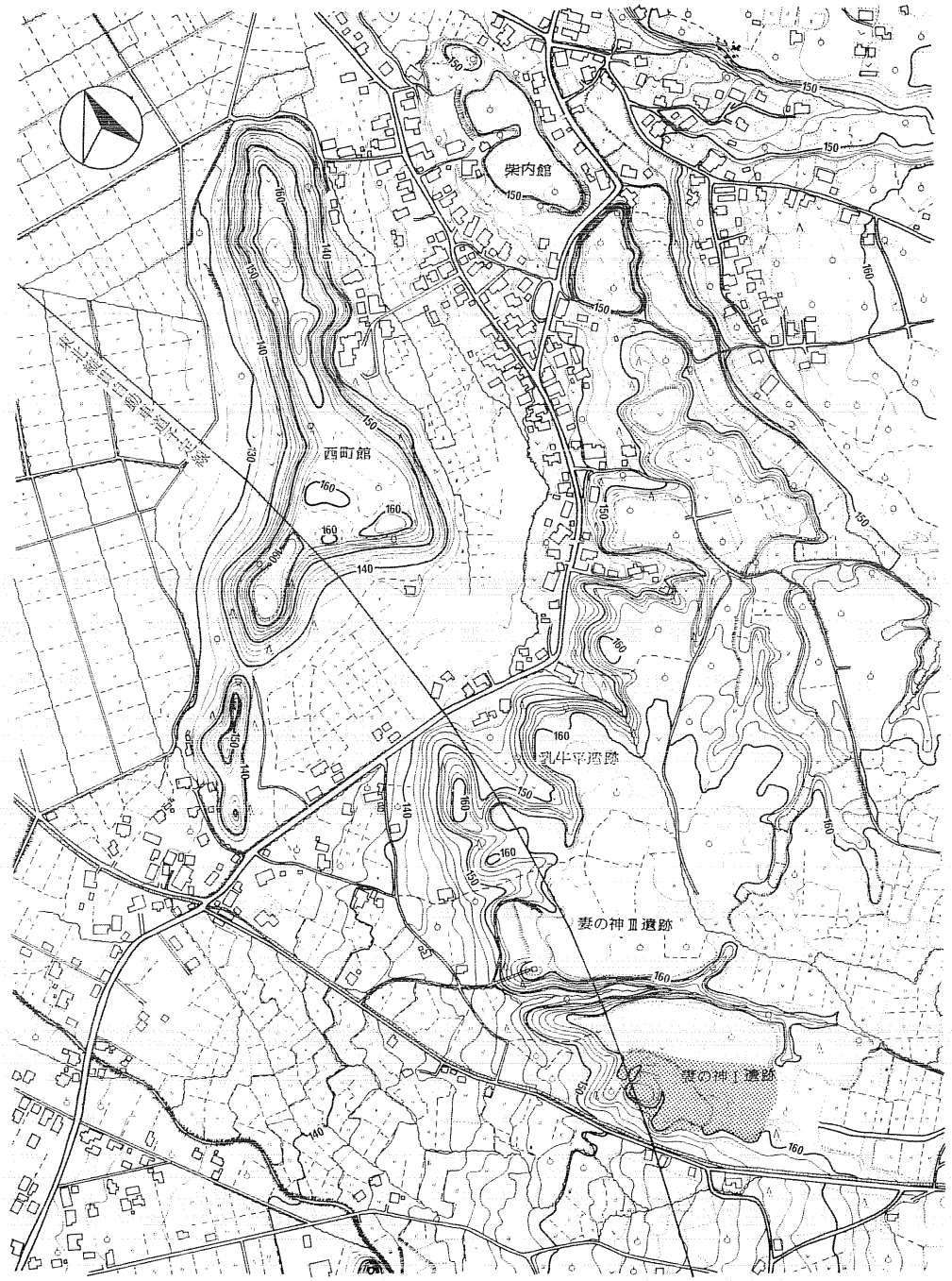
報告書使用挿図は現場作成のもの及び整理期間中作成のものをもとに、原則として次のように縮尺を統一した。住居跡平・断面図：1/40、土壙平・断面図：1/10、溝平・断面図：任意、土器実測図：1/2、土器拓影図:1/3、石器実測図：1/2。遺構計測表のうち（　）としたものは、重複等で正確な法量を測り得なかったものである。したがって（　）内の数値は実際の数値より小さいものとなっている。

なお、報告書に使用したスクリーン・トーンは次のとおりである。これ以外のものについては図中に示した。

焼土　　炭化物　　炭化米

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に、下記のように定めたものを使用した。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
ＳＡ	柵列・柱列	ＳＫ	土壙	ＳＸ(F)	焼土遺構	ＲＱ	石製品
ＳＢ	建物跡	ＳＫ(F)	フラスコ状ピット	ＳＸ(R)	捨場	ＲＴ	貝製品
ＳＣ	廊	ＳＫ(I)	竪穴状遺構	ＳＸ(S)	配石(集石・立石・組石 ストンサークル)	ＲＵ	人骨
ＳＤ	溝・堀・濠	ＳＫ(P)	ピット	ＳＸ(U)	土器埋設遺構	ＲＶ	紙・布製品
ＳＥ	井戸跡跡	ＳＫ(S)	墓	ＲＣ	炭化物	ＲＷ	木・竹製品
ＳＦ	築地・土塁	ＳＫ(T)	トラップピット	ＲＭ	金属製品	ＲＹ	その他
ＳＧ	苑池	ＳＬ	河川	ＲＮ	自然製品		
ＳＨ	広場	ＳＭ	道路・橋・階段	ＲＯ	骨角製品		
ＳＩ	住居跡	ＳＸ	その他	ＲＰ	土製品		



第2図　遺跡地形図

第3図　グリッド配置図

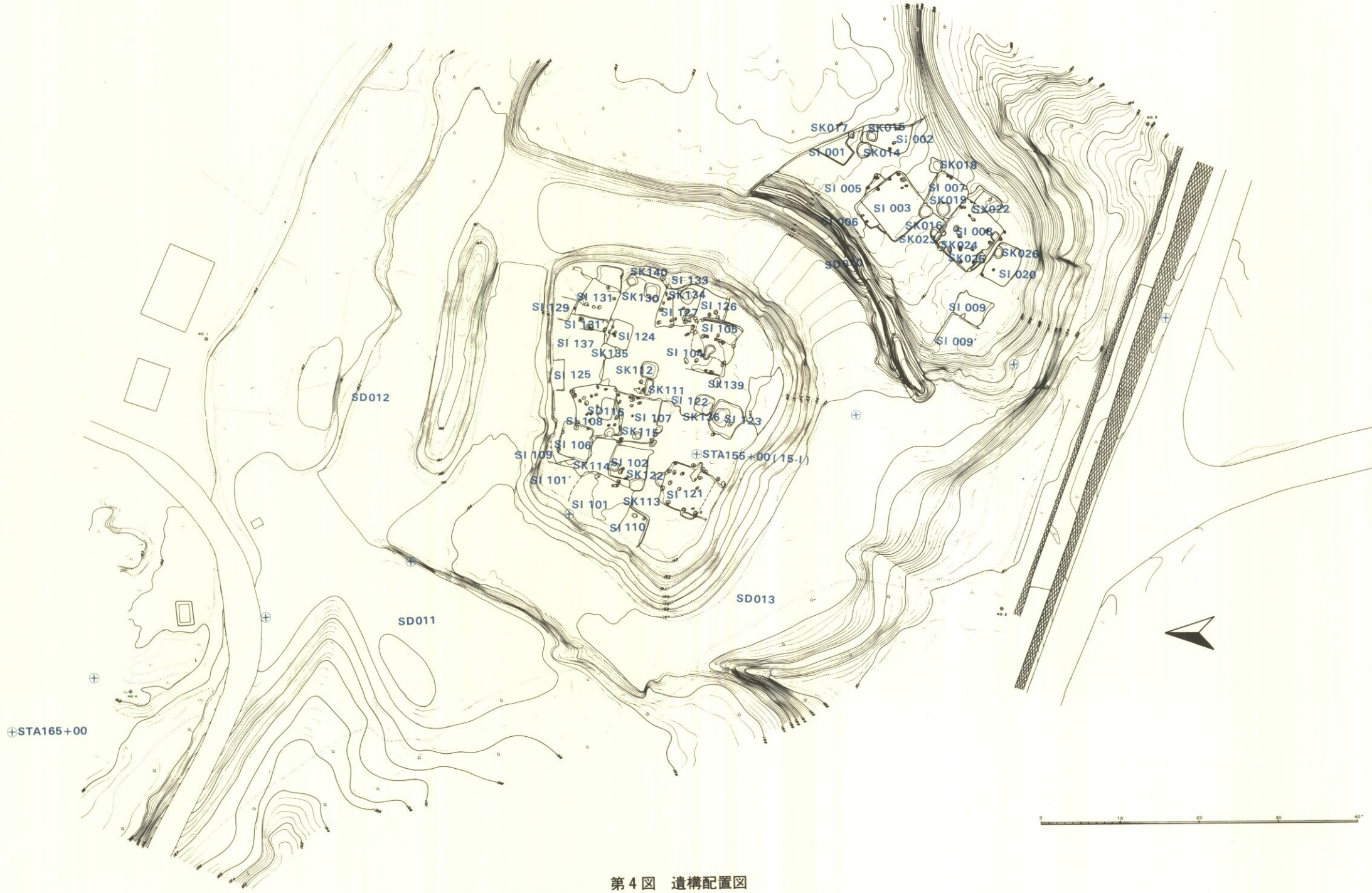
3．調査経過

妻の神Ⅰ遺跡は昭和56年４月20日～８月12日の間にわたって行われたが、調査の全般的な経過は次のとおりである。

４月20日から調査にはいったが、遺跡はほとんどが山林だったため、枝のとりはらい等を最初に行った。それらのほぼ終了した23～25日の間にグリッド杭を設定した。グリッドは磁北にそう。坪掘りの結果、郭部分の表土は薄く機械による排土は不可能と判断されたので、24日に堀部分だけ機械により抜根した。27日からはグリッドと関係なしに、放射状に堀に数本のトレンチをいれ、掘り下げはじめるとともに、Ⅱ郭から調査にはいった。当所の範囲外にもトレンチを入れたところ、堀跡が検出されこれをＳＤ 011とした。この結果、遺跡の範囲は当所の3,219㎡から5,081㎡へと広がった。

５月12日にⅡ郭から住居跡を検出、ＳＩ 001 とした。Ⅱ郭の表土をほぼ剝ぎ終えた６月２日から平行してⅠ郭の表土剝ぎにはいった。12日にⅡ郭にももう１重、堀が廻っているのを検出しＳＤ 010 とした。７月７日にⅠ郭から住居跡を検出、Ⅰ郭とⅡ郭の混乱を避けるためＳＩ 101 とした。８日にⅡ郭からフラスコ状ピットを検出し（ＳＫ023 とした）、掘り下げたところ中から縄文時代晩期の土器が３点出土した。Ⅰ、Ⅱ郭を平行して調査し、住居跡、土壙を検出し、検出順に遺構番号を付していった。22日にはほぼ精査の終了したⅡ郭の遺構配置図を作成した。その後は一部、中の崎遺跡へ分離していたグループも加えて、Ⅰ郭の精査を急いだ。

８月８日にほぼ精査を終了。11、12日にⅠ郭の遺構配置図を作成して、妻の神Ⅰ遺跡の調査を終了した。最終発掘面積は 4,800㎡であった。この間７月25日には現地説明会を開いて、地域の埋蔵文化財保護意識の高揚に努めた。


SK017
SK015
Si 002
SI 001
SK014
SK018
SI 005
SI 007
SK019
SI 003
SK022
SI 006
SK016
SI 008
SK023
SK024
SK025
SK026
SD010
SI 020
SK140
SI 133
SI 131
SK130
SK134
SI 129
SI 127
SI 126
SI 105
SI 124
SI 137
SK135
SI 104
SK112
SI 125
SK111
SR139
SI 122
SD012
SD115
SI 107
SK136
SI 123
SI 108
SK115
SI 106
SI 109
SK114
SI 102
SK122
SI 101
SI 121
SI 101
SK113
SI 110
SD013
SD011
STA155+00(15-1)
STA165+00
SI 009
SI 009
0
10
20
30
40m

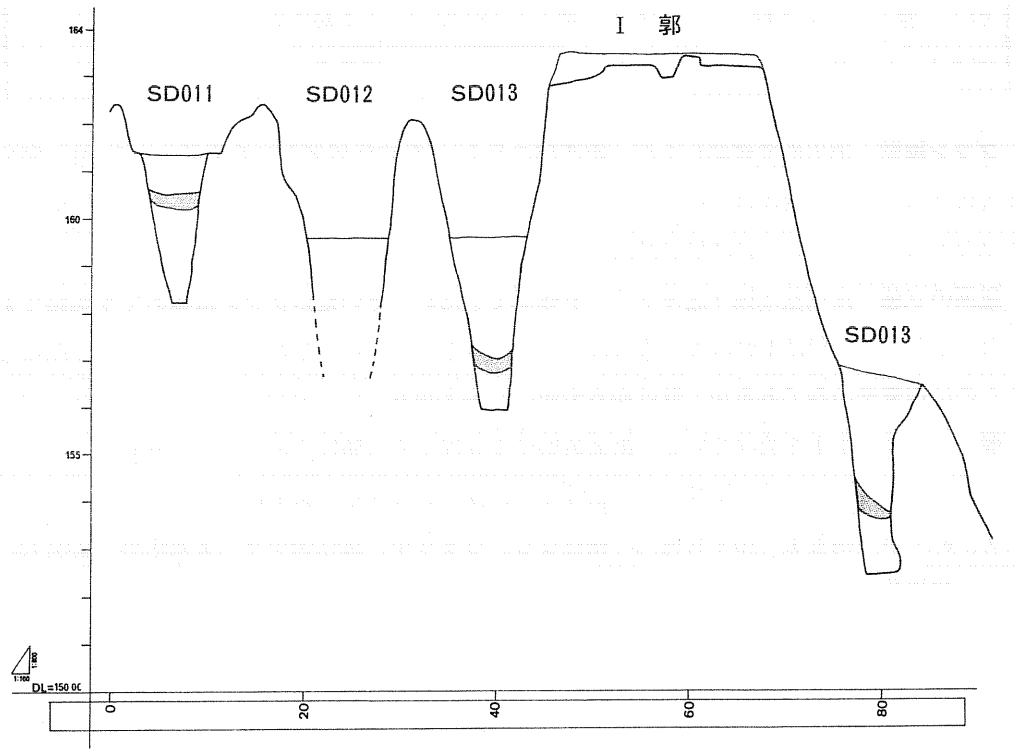
第 4 図　遺構配置図

4．遺跡の層位

妻の神Ⅰ遺跡の層位は郭部と堀部で違うため、以下それぞれについて概略を述べる。

郭部　Ⅰ、Ⅱ郭ともに表土は極めて薄く、10～20cm程度の黒褐色土におおわれているのみである。したがって、遺物は縄文時代のものと平安時代のものが混在して出土する状況であり、層位的に把握することは不可能であった。

堀部　堀は4条検出されているが、外側のＳＤ010、011と内側の012、013とでは堆積状態に差異がみられる（第5図）。特に大きな違いは、浮石(スクリーントーン部分)の堀埋土内における相対的位置である。外側の堀においては上部の方にみられるのに対し、内側の堀においては下部の方にみられる。浮石がどちらもプライマリーなものとしても、二次的だとしても同時期に流入したものとすれば、外側の堀が内側の堀より古い可能性が大きく、浮石降灰時期以前に外側の堀が構築されていた可能性もでてくる。南部のＳＤ010と013の切り合い関係もＳＤ010が古く、新旧関係を裏付けるものかもしれない。しかし、浮石の相対的位置だけで新旧関係を判断することはできず、可能性があるというにすぎない。



第5図　遺跡断面図

5．遺構と遺物

(1) 遺構

ア．Ⅰ郭の遺構

(ア) 竪穴住居跡

ＳＩ101 竪穴住居跡　　(表内のカッコづけは確認可能な値を示す…以下同じ)

第1表	挿図番号	第6図	図版番号	図版5
遺構名	ＳＩ 101	検出地区	17－K、17－L、18－K、18－L	

法量		南東側壁	北西側壁	南西側壁	北東側壁
	壁長	(51.0cm)	——	(180cm)	(205cm)
	壁高	8.1～21.3cm	——	35.3～36.5cm	22.1～22.4cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(38.8m²)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山面で確認したが、南西部のＳＩ110竪穴住居跡及び北東部のＳＩ101′竪穴住居跡との切り合い関係は平面プラン確認時点ではできなかった。断面観察して新旧関係は不明確ながらもＳＩ101′、110竪穴住居跡より新しいことが確認された。

壁面の状態　南東壁は掘り込みプランを確認できたが、その他のプランは極めて不明確であった。また、北東壁は堀跡により切られているため不明である。したがってはっきりと確認しえたのは南東壁のみであるが、壁はゆるやかに立ち上がる。

覆土　上部は削平を受けている。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　　10ＹＲ3/2　　粘性ややあり。しまり中。黄褐色土少量混入。
2．にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3　　粘性なし。しまり中。炭化物少々、黄褐色土少量混入。
3．暗褐色土　　10ＹＲ3/3　　粘性あり。しまり中。黄褐色土少量混入。
4．暗褐色土　　10ＹＲ3/4　　粘性あり。しまりよし。にぶい黄褐色土、黄褐色土少量混入。
5．にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　　粘性あり。しまり中。黄褐色土少量混入。
6．褐色土　　7.5ＹＲ4/4　　粘性あり。しまりよし。

第6図　SI101, 101', 110竪穴住居跡

床面　床面はあまり堅固でない。数個の礫が検出された。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内に６個あるが、明確に柱穴となりうるものはない。

カマド　なし

遺物とその出土状態　いずれも床面からまとまりなく出土した。第24図１、２は縄文時代後期のものと思われる。この他はすべて土師器もしくは須恵器の甕破片である。土師器甕の口縁部は若干くびれをもつもので、口縁部先端も薄くならない類のものである。

ＳＩ101´ 竪穴住居跡

第２表	挿図番号	第６図	図版番号	図版５
遺構名	ＳＩ101´	検出地区	18－Ｊ、18－Ｋ、19－Ｊ、19－Ｋ	

法量		南東側壁	西北側壁	南西側壁	北東側壁
	壁長	(410cm)	――	――	――
	壁高	16.9～30.4cm	――	――	――
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

形態	方形？	面積	(11.9㎡)	主軸方向	
かまど	位置	な　し		構築素材	

プラン確認　地山上面にて、ＳＩ101竪穴住居跡の北東部に黒褐色土の掘り込みを検出した。

壁面の状態　北東・北西壁はＳＤ013掘跡によって、南西壁はＳＩ101竪穴住居跡によってそれぞれ切られている。唯一、確認される南東壁も、きわめて不明瞭である。

覆土　ＳＩ101竪穴住居跡の覆土を参照のこと。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　３片の破片が出土したのみで、いずれも土師器の甕の破片である。

ＳＩ102 竪穴住居跡

第３表	挿図番号	第７図	図版番号	図版６
遺構名	ＳＩ102	検出地区	16－Ｊ、16－Ｋ、17－Ｊ、17－Ｋ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	450cm	448cm	427cm	403cm
	壁高	6.9～18.0cm	9.9～13.5cm	8.2～13.3cm	9.6～17.5cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(19.8m²)	主軸方向	
かまど	位置	な し		構築素材	

プラン確認　地山上面にて方形プランを確認した。ＳＫ113、114土壙を切っている。

壁面の状態　壁面もしっかりしており、直角に近い立ち上がりを呈す。

覆土　上面が削平を受けている。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまり中。褐色土及び黄褐色土３％混入。

2．黒色土　10ＹＲ2/1　粘性ややあり。しまり中。褐色土５％混入。

床面　当遺跡検出の竪穴住居跡としてはしっかりしている。

壁溝　なし

柱穴、ピット　住居跡内中央に２個、対角線上に２個あるが、明確な柱穴となりうるものは検出されなかった。

カマド　住居跡内に２ヶ所焼土が検出されたが、かまど・炉跡などは検出されなかった。

遺物とその出土状態　第24図３・４は縄文土器の破片、５は土器師坏の破片で回転糸切り技法が施されている。その他の遺物は、土師器の甕の破片が出土しており、口縁部はほとんどくびれがなく、先端は鋭角的なものと肥厚するものが混在している。

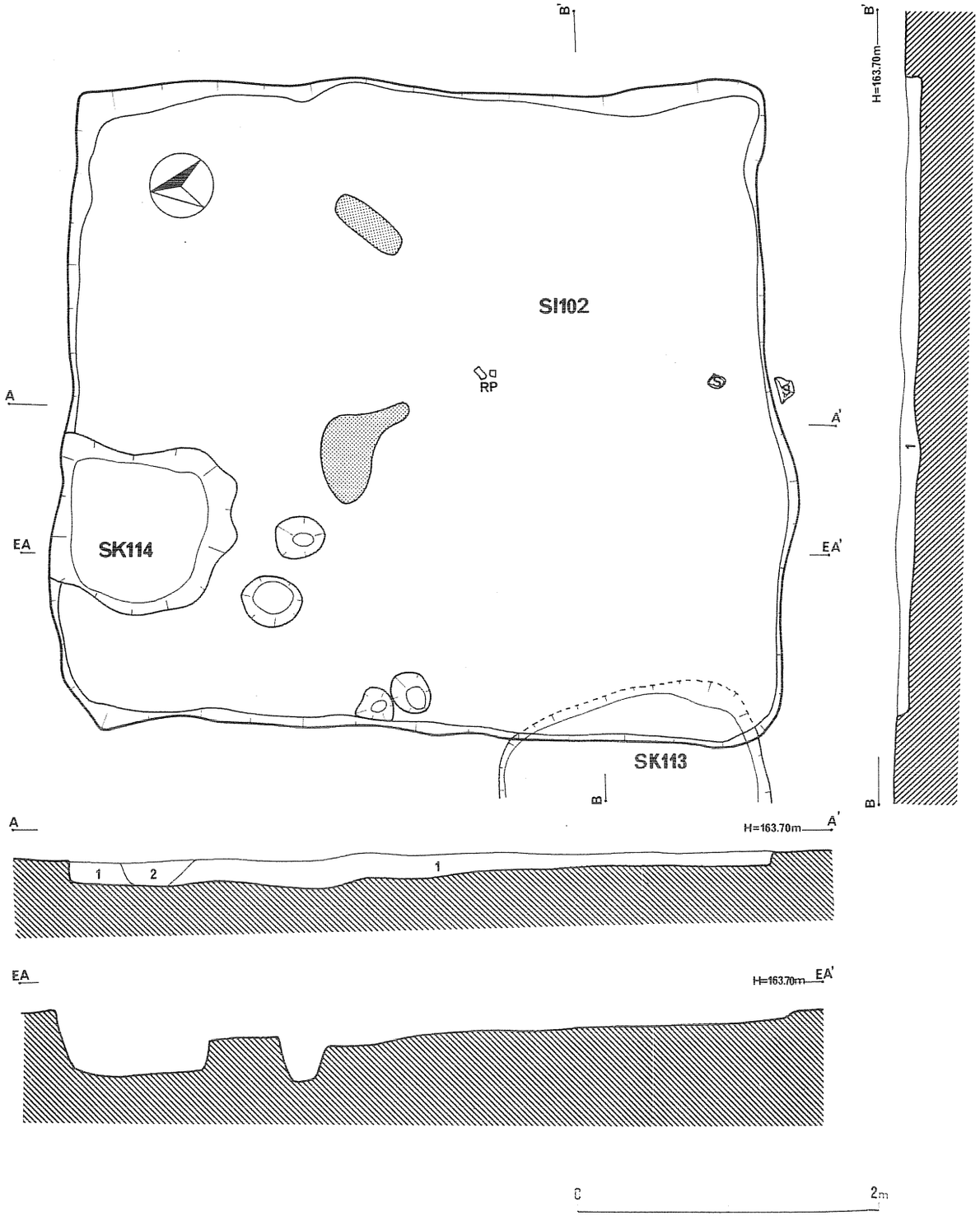
第27図46は砥石である。

ＳＩ103竪穴住居跡

第４表	挿図番号	第８図	図版番号	図版６
遺構名	ＳＩ104	検出地区	14－Ｈ、14－Ｊ、15－Ｈ	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	——	(142cm)	——	531cm
	壁高	——	14.3～20.0cm	——	13.1～27.6cm
	壁溝幅	——	——	——	14～21cm
	壁溝深	——	——	——	5.9～15.9cm

形態	方形？	面積	(23.8m²)	主軸方向	
かまど	位置	な し		構築素材	



第7図　SI102竪穴住居跡

プラン確認　地山上面にて黒褐色土の方形プランを確認したが、そのラインは極めて不明確でＳＩ105竪穴住居跡との区別もつかなかった。

壁面の状態　北東壁の一部は削平及びＳＩ105竪穴住居跡に切られているため不明。南東壁及び南東壁の一部はＳＩ105竪穴住居跡に切られているため不明。しかし、北西壁はしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土

1、褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。にぶい黄橙色（10ＹＲ7/2）、明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。

2、褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。

3、暗褐色土　　10ＹＲ3/3　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。

4、にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3　粘性あり。しまりよし。

5、褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色土（10ＹＲ6/8）、にぶい黄橙色土（10ＹＲ7/2）混入。

6、にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性ややあり。しまり中。

7、黒褐色土　　10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまりよし。明黄褐色土（10ＹＲ6/8）多量混入。

床面　床面は比較的しっかりしている。その高さはＳＩ105竪穴住居跡とほぼ同一レベルにある。

壁溝　北壁に確認された。

柱穴、ピット　3個のピットが確認されたが、南西隅のピットが柱穴になると思われる。

カマド　なし

遺物とその出土状態　第24図6～9に示す土器が出土した。9は鍔の羽口と思われ、スクリーントーン部分は強い熱変成を受けていた。その他の遺物は大部分が土師の甕の破片で、若干のくびれがあり、先端部が若干薄くなるが鋭角的というほどではない。

ＳＩ105竪穴住居跡

第5表	挿図番号	第8図	図版番号	図版6・7
遺構名	ＳＩ 105	検出地区	14－Ｇ、14－Ｈ、15－Ｇ、15－Ｈ	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	——	（215cm）	——	397cm
	壁高	——	20.6～21.9cm	——	25.2～34.1cm
	壁溝幅	——	——	——	13～19cm
	壁溝深	——	——	——	8.9～12.9cm

形態	方形	面積	(3.0㎡)	主軸方向	
かまど	位置	な し		構築素材	

プラン確認　地山上面にて黒褐色土の方形プランを検出したが、北東壁は削平を受けているため不明、北西壁はＳＩ104竪穴住居跡を切っているものの平面プランを把握することはできなかった。

壁面の状態　南東、南西壁は比較的しっかりしており、壁もほぼ垂直に立ち上がる。その他の壁は不明確である。

覆土　ＳＩ104竪穴住居跡の欄参照

壁溝　壁溝は南東壁と北西壁・南西壁の一部に確認された。おそらくは全周するものであろう。

柱穴、ピット　隅に3個の柱穴、壁溝にそって数固の柱穴が確認された。その他中央部にも数個のピットが確認された。

炉　住居跡南西部を地床炉として使用していたと思われる。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1、褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。淡黄色（5ＹＲ7/8）焼土粒子混入。

2、暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。

遺物とその出土状態　土師器の坏の底部が1片出土した以外はすべて土師器の甕の破片であり出土量も多くない。坏は回転糸切りによるものである。甕の口縁部は若干くびれ、くびれの部分が最も厚く、先端は鋭角的である。多面もＳＩ104竪穴住居跡出土のものに比べて細かい調整が行われる。

ＳＩ106竪穴住居跡

第6表	挿図番号	第9図	図版番号	図版8
遺構名	ＳＩ 106	検出地区	18－Ⅰ、18－Ｊ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	360cm	370cm	408cm	371cm
	壁高	18～25.4cm	11.5～26.9cm	——	5.7～16.8cm
	壁溝幅	18～20cm	17～24cm	——	14～23cm
	壁溝深	3.9～9.1cm	24～9.2cm	——	5.9～7cm

第8図　SI104, 105竪穴住居跡

形態	方形	面積	16.6㎡	主軸方向	24° E
かまど	位置	南壁に2基検出		構築素材	芯部石組

プラン確認　地山上面にて黒褐色の落ち込みを確認したが切り合いがはげしく、平面にてはっきりとプランを検出することはできなかった。

壁面の状態　切り合っている壁をのぞいては、比較的しっかりしている。

覆土

1．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。明黄褐色（10YR6/8）粒子混入。

2．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。明黄褐色（10YR6/8）粒子混入。

3．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。

4．暗褐色土　10YR2/3　粘性なし。しまりなし。

床面　床面はほとんど凹凸がなく、しっかりしている。

壁溝　確認されたのはとぎれとぎれであるが、ほぼ全周するものと思われる。

柱穴、ピット　壁溝内に3個の柱穴を確認した。

カマド　南壁に2基検岩したが遺存状態は極めて不良である。当初は東寄りに建設し破棄して西寄りに新設したものと思われる。袖部等はほとぐど残っていない。

1．暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり。しまり中。焼土粒子、赤褐色（5YR4/8）ブロック混入。

2．褐色土　10YR4/4　粘性なし。しまりなし。焼土粒子（5YR4/8）、明黄褐色（10YR6/8）粒子混入。

遺物とその出土状態　第24図10～12の縄文土器片の他は、ほとんどが土師器の破片で、そのうち大部分は甕の破片である。坏も数点ながら出土しており、内面黒色処理を施されたものが多く、ロクロ痕も明確である。甕底部がえぐれているものも出土している。甕口縁部はほとんどくびれがなく、先端が鋭角的なものが出土している。

ＳＩ107竪穴住居跡

第7表	挿図番号	第10図	図版番号	図版9
遺構名	ＳＩ107	検出地区	16－Ｉ、16－Ｊ、17－Ｉ、17－Ｊ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	636cm	602cm	545cm	——
	壁高	12.2～15.2cm	24.7～29.6cm	28～31.4cm	——

法量	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——
形態	隅丸方形	面積	34m²	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にてプランを確認したが、北壁部は削平を受けており、検出できなかった。北側でＳＩ108竪穴住居跡を切っている。

壁面の状態　北壁部をのぞいては比較的しっかりしている。

覆土

1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性なし。しまりなし。

2．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまりなし。

床面　凹凸が激しく床面も堅固ではない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡北西隅に１個、その他に８個のピットを検出した。

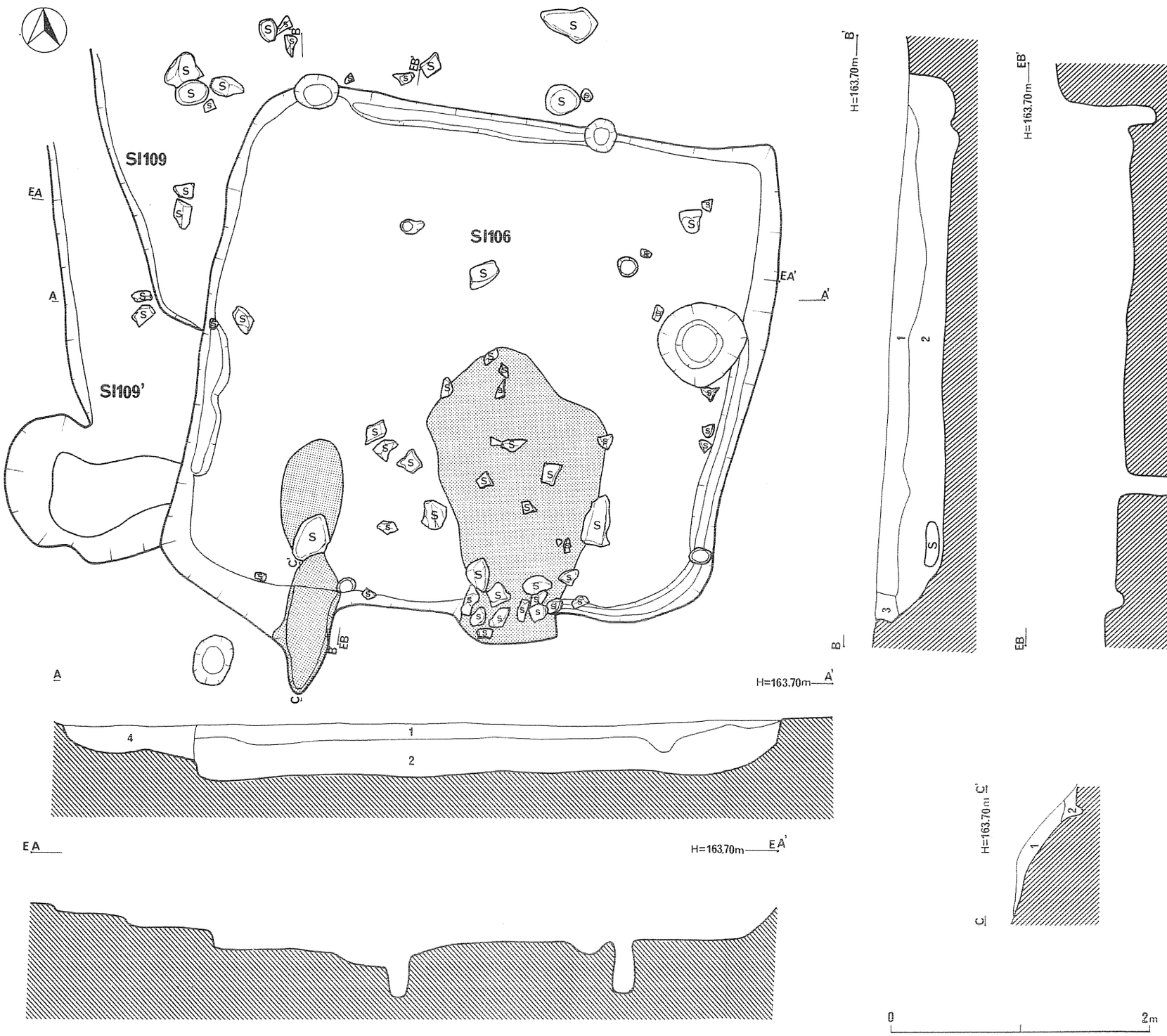
カマド　なし。

遺物とその出土状態　第24図13～16に示す土器が出土した。大部分が土師器の坏と甕の破片である。16は坏で回転糸切りの底部で、この坏も含め黒色処理を施したものが多く出土する。甕の口縁部はほとんどくびれがなく、先端が鋭角的なものが多い。１点だけあるが砂粒を底部に付着したいわゆる砂底の土器も出土している。

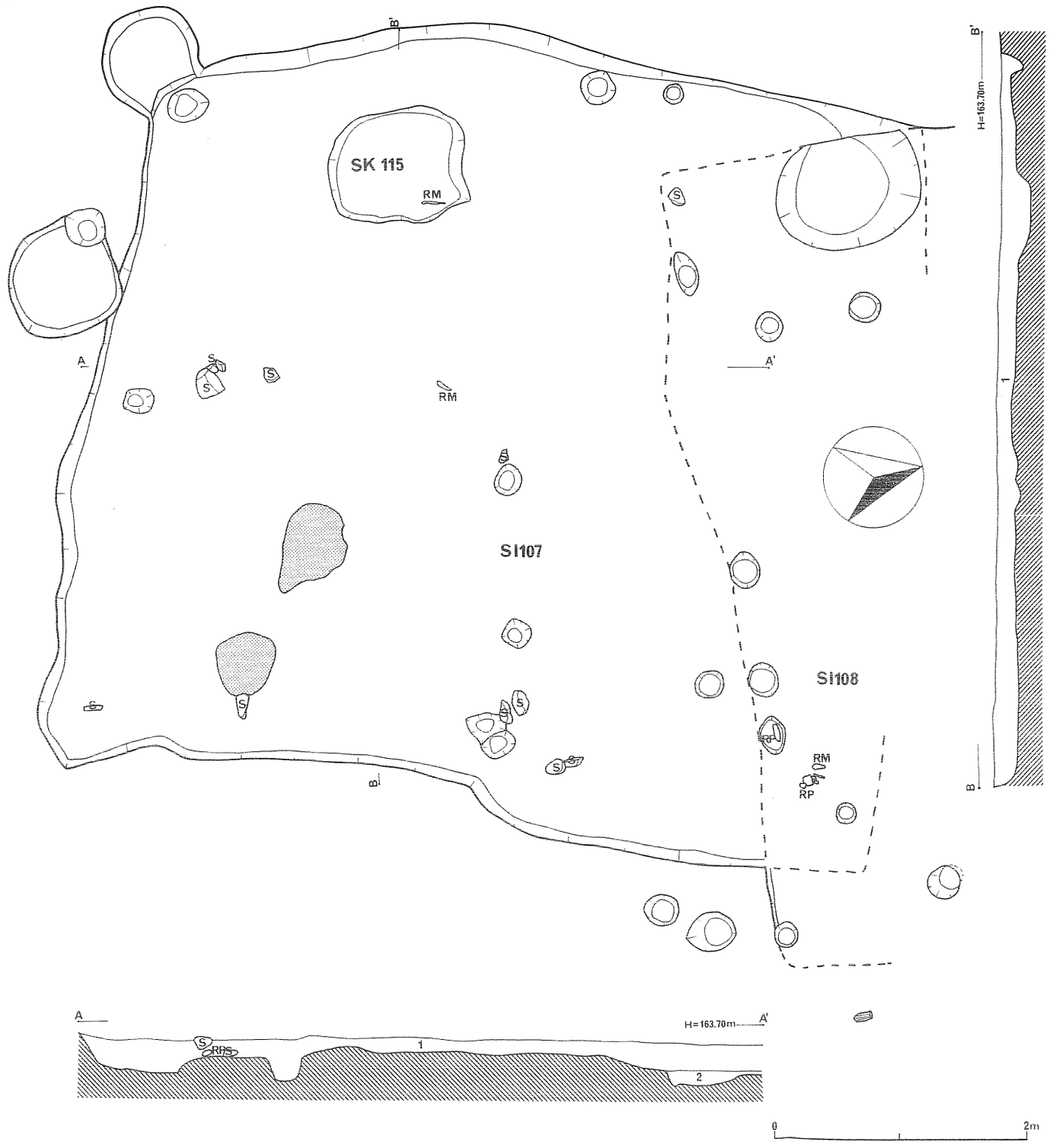
第27図47に示す磨製石斧が出土した。石質は凝灰岩である。

ＳＩ108竪穴住居跡

第８表	挿図番号	第11図		図版番号	図版９
遺構名	ＳＩ108	検出地区	16－Ｈ、16－Ｉ、16－Ｊ、17－Ｈ、17－Ｉ、17－Ｊ		
法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	——	(378cm)	(620cm)	(322cm)
	壁高	——	11.9～33.1cm	5.4～25.8cm	10.7～13.3cm
	壁溝幅	——	——	——	7～20cm
	壁溝深	——	——	——	8.9～9.9cm
形態	方形	面積	(32.7m²)	主軸方向	N88° W
かまど	位置	東壁		構築素材	芯部石組



第9図　SI106, 109, 109'竪穴住居跡



第10図　SI107竪穴住居跡

プラン確認　地山上面にて黒褐色土の落ち込みを確認したが、切り合いが激しくＳＩ 107竪穴住居跡の覆土を剥いで、南壁は検出したが、東壁は確認がほとんどできなかった。ＳＩ106 107竪穴住居跡によって切られており、これらより古い。

壁面の状態　壁面も不明瞭なところが多い。西壁の切られてない箇所のみしっかりしている。

覆土

1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性なし。しまりなし。

2．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまりなし。

3．明黄褐色土　10ＹＲ6/6　粘性ややあり。しまり中。

4．焼土炭化物混入。

5．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまりなし。明黄褐色（10ＹＲ6/6）粒子混入。

床面　床面は若干の凹凸があるものの比較的しっかりしている。

壁溝　北壁の一部に確認された。

柱穴、ピット　住居跡壁ぎわに７個（内隅に２個）、住居跡内に数個のピットを確認した。

カマド　東壁に検出された。遺存状態は極めて不良である。

1．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまり中。焼土粒子混入。

2．赤褐色土　５ＹＲ4/8　焼土。

3．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまりなし。

4．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりなし。

5．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。灰白色及び明黄褐色粒子混入。

遺物とその出土状態　第24図17に示す縄文土器片の他は、土師器の坏と甕及び須恵器の甕の破片が出土した。土師器の坏は内面が黒色処理されているものがほとんどで、底部は回転糸切り技法で切り離す。土師器の甕の口縁部はほとんどくびれがなく先端が鋭角的なものもあるが、口唇部が肥厚し、くびれを持つものも多く出土する。砂底の土器も１点出土している。

ＳＩ109竪穴住居跡

第９表	挿図番号	第９図	図版番号	図版８
遺構名	ＳＩ109	検出地区	18－Ｊ、19－Ｊ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	——	(220cm)	——	——
	壁高	——	6.4～23.6cm	——	——

形　態	方形？	面　積	(3.7㎡)	主軸方向	
かまど	位　置	な　し		構築素材	

プラン確認　地山上面にてＳＩ 106竪穴住居跡の西側に検出した。しかしプランは明確でなく、断面から推定した箇所も多かった。ＳＩ 106竪穴住居跡により切られており、これより古い。

壁面の状態　きわめて不明瞭である。南東隅は掘り過ぎたものであろう。

覆土　ＳＩ 106竪穴住居跡の欄参照。

床面　残存東側に落ち込んだ箇所があり、住居跡の切り合いかとも思われたが、断面観察しても明瞭とはならなかった。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

カマド　残存部においては検出されなかった。

遺物とその出土状態　遺物も出土しなかった。

ＳＩ110竪穴住居跡

第10表	挿図番号	第６図	図版番号	図版５
遺構名	ＳＩ110	検出地区	16－Ｌ、17－Ｌ	

法量		南東側壁	北西側壁	南西側壁	北東側壁
	壁　長	(290cm)	——	(410cm)	——
	壁　高	33.4～38.3cm	——	35.3～45.4cm	——
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形　態	方形	面　積	(13.9㎡)	主軸方向	
かまど	位　置	な　し		構築素材	

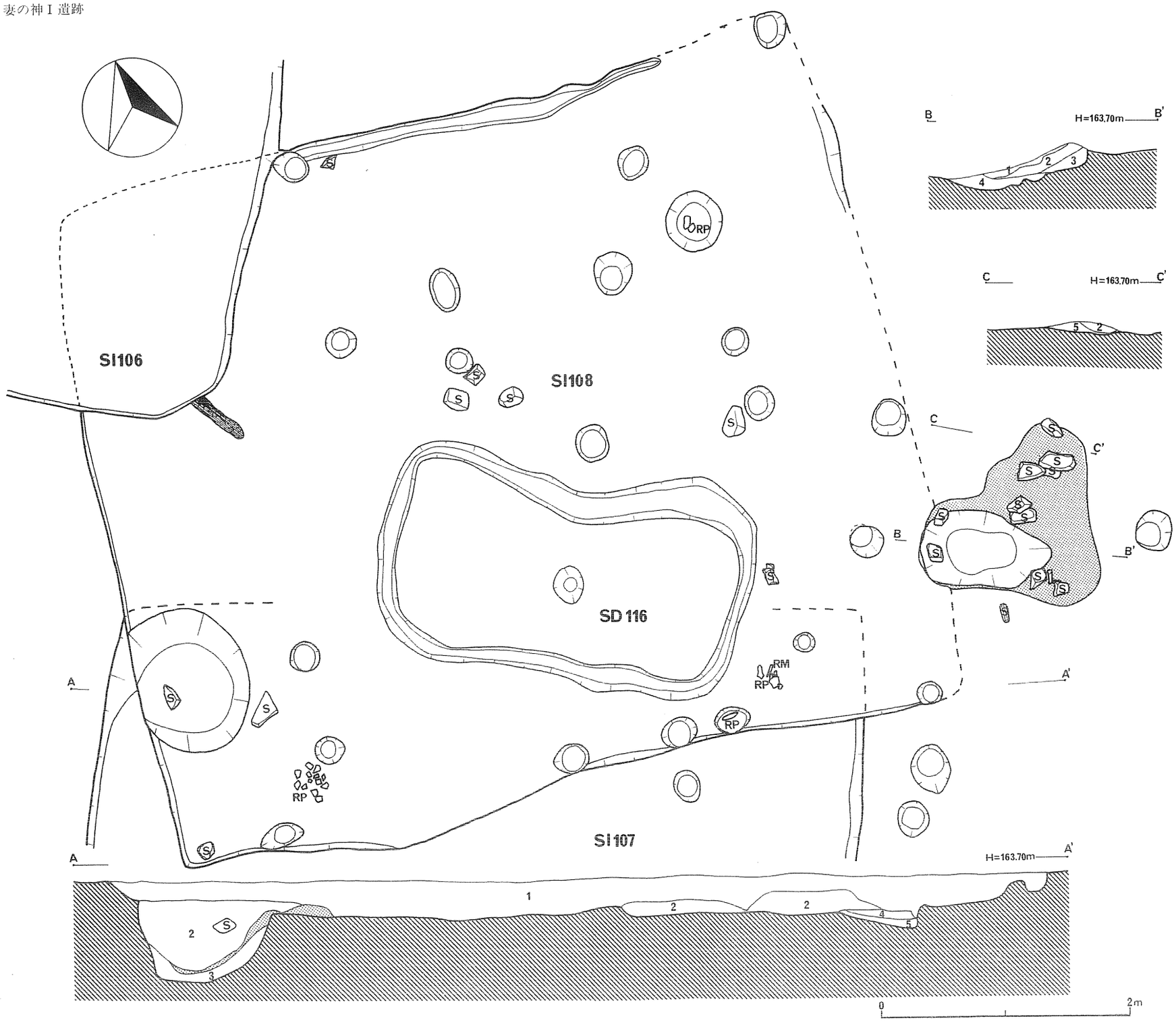
プラン確認　地山上面にてＳＩ 101竪穴住居跡の南東部に黒褐色の落ち込みを確認した。しかし、平面では新旧関係がとらえられず断面にてＳＩ 110竪穴住居跡が新しいことがわかった。

壁面の状態　南東壁を除いて極めて不明瞭である。

覆土　ＳＩ101竪穴住居跡の欄参照のこと。

床面　若干の凹凸があるが比較的しっかりしている。

壁溝　なし。



第11図　SI108竪穴住居跡

柱穴、ピット　住居跡内に２個確認された。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　第24図18～20に示す土器が出土した。19は土師器坏の底部で回転糸切りである。20は鹿角市内の東北縦貫自動車道関係遺跡としては妻の神Ⅰ遺跡でのみ出土した把手付形土器である。外面はヘラケズリ、内面はユビナデによる調整が行われている。把手部分はなく中空かどうかは不明である。その他の遺物は土師器の杯と甕の破片で、大部分が甕の破片である。甕は内側にユビ状のナデアトが明確に残るものが多く、口縁部はくびれがなく先端部が鋭角的なものが多い。

ＳＩ121竪穴住居跡

第11表	挿図番号	第12図	図版番号	図版10
遺構名	ＳＩ121	検出地区	15－Ｋ、15－Ｌ、16－Ｋ、16－Ｌ	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	511cm	510cm	575cm	511cm
	壁高	36.6～41.1cm	8.6～12.6cm	29～33cm	42.6～50.1cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	33.7m²	主軸方向	N59° W
かまど	位置	東壁		構築素材	芯部石組

プラン確認　地山上面にて検出した。南西壁は極めて不明瞭であった。北東部がＳＫ 122土壙を切っている。

壁面の状態　南西壁は不明瞭で床面の固さからやっと把えられた。その他の壁は比較的しっかりしている。

覆土

1．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。白色粒子少量混入。

2．にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性なし。しまり中。白色粒子、明黄褐色粒子が共に少量混入している。

3．暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。

4．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまりなし。黄褐色、白色極大粒少量混入。

5．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。白色粒子混入。

6．かくらん。

7．褐灰色土　　7.5YR6/1　灰層

床面　比較的しっかりしている。床面は概ね平坦である。

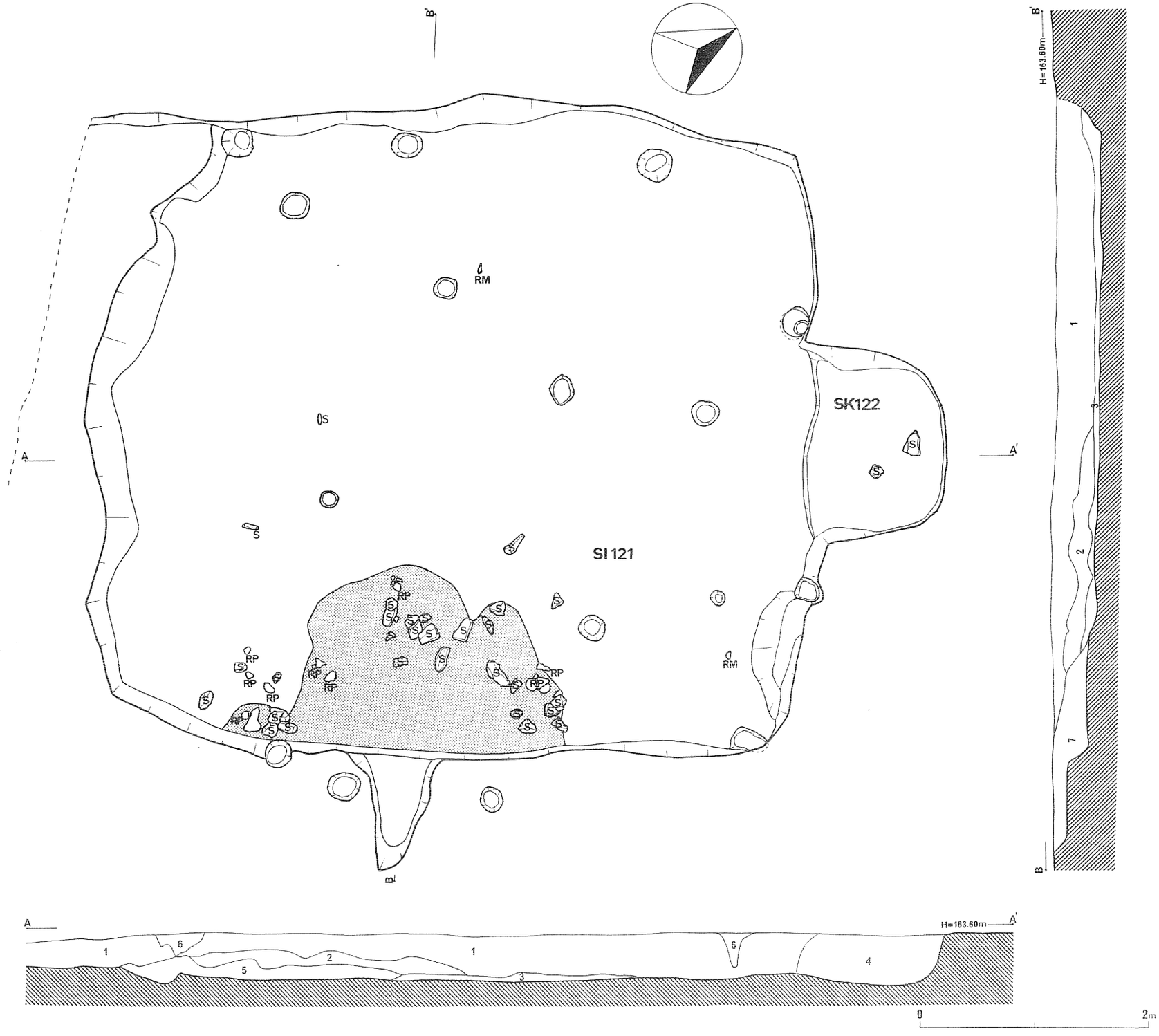
壁溝　北東壁の極一部に確認された。

柱穴、ピット　住居跡の壁に沿って6個、住居跡内にも数個のピットが確認された。カマド煙道部の両側にも2個確認された。

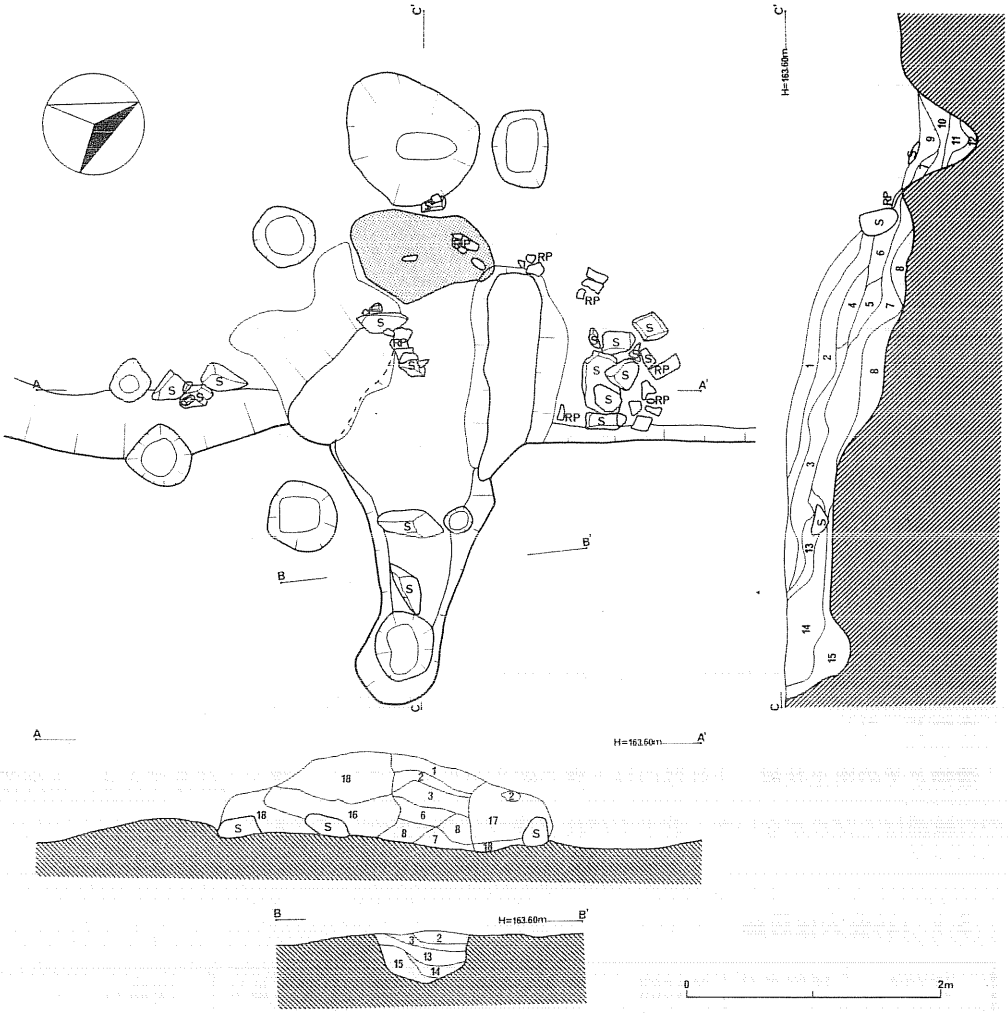
カマド　妻の神Ⅰ遺跡検出のカマドの中では遺存状態が良好で、南側の袖が流れているものの、北側は比較的しっかりしている。しかし上部は削平を受けており、芯部の石組などは一部しか残っていない。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．にぶい黄褐色土　10YR5/4
2．褐色土　　10YR4/4　粘性ややあり。
3．にぶい黄橙色土　10YR6/4
4．にぶい黄褐色土　10YR5/3
5．明褐色土　　7.5YR5/8
6．褐色土　　7.5YR4/4　粘性ややあり。
7．褐灰色土　　7.5YR6/1　灰層。
8．橙色土　　7.5YR6/8　粘土質。
9．褐色土　　7.5YR4/6
10．泌黄橙色土　　7.5YR8/3　灰黄褐色土（10YR4/2）混入。
11．灰褐色土　　5YR4/2
12．黒色土　　10YR2/1
13．褐色土　　10YR4/4
14．暗褐色土　　10YR3/3　にぶい黄褐色土（10YR3/4）少量混入。
15．黒褐色土　　10YR3/2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）混入。
16．浅黄色土　　2.5YR7/3　明黄褐色土（7.5YR5/8）少量混入。粘土質。
17．にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘性ややあり。しまりなし。黄褐色、白色粒子混入。
18．にぶい黄橙色土　10YR6/3　粘性なし。しまり中。赤色粒子上部にやや混入。

遺物とその出土状態　第25図21～26に示す土器が出土した。25、26は把手付土器でいずれも把手部分は中空になっており、断面形はほぼ円形を示す。どちらも二次的焼成を受けているが、25は特に口縁部付近が顕著である。その他の遺物は土師器及び須恵器の甕の破片で、杯は出土していない。土師器甕の破片が大部分であり、その口縁部はくびれのほとんどないものと、若干のくびれのあるものとが約3：2の比率で出土している。また、その先端部はほとんどが鋭角的なものである。



第12図　SI121竪穴住居跡



第13図　SI121竪穴住居跡カマド

ＳＩ 123竪穴住居跡

第12表	挿図番号	第14図	図版番号	図版10
遺構名	ＳＩ　123	検出地区	14－Ｉ、14－Ｊ、15－Ｊ	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	345cm	380cm	340cm	345cm
	壁高	36.1～40.9cm	9～33.7cm	23～29.7cm	33.7～43cm
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

形態	方形	面積	15.7㎡	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて検出した。ＳＫ136 土壙を切っている。

壁面の状態　どの壁面もあまりしっかりしていない。壁はゆるやかな立ち上がりを呈する。

覆土

1．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまりなし。黄褐色土、明黄褐色土少量混入。
2．褐色土　10ＹＲ4/6　粘性ややあり。しまり中。炭化物少量混入。
3．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性なし。しまり中。
4．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまり中。黄褐色土少量混入。
5．にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性あり。しまり中。
6．暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性なし。しまりなし。明黄褐色土、黄褐色土少量混入。
7．にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3　粘性なし。しまりなし。
8．黄褐色土　10ＹＲ5/6　粘性あり。しまり中。黒褐色土少量混入。

床面　床面はＳＫ136土壙との重複部分以外は比較的しっかりしている。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内にピット１個を確認した。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　土師器の坏と甕の破片が出土しており、甕が大部分である。土師器甕の口縁部はくびれがないか、若干くびれを持つものが出土している。

ＳＩ 124竪穴住居跡

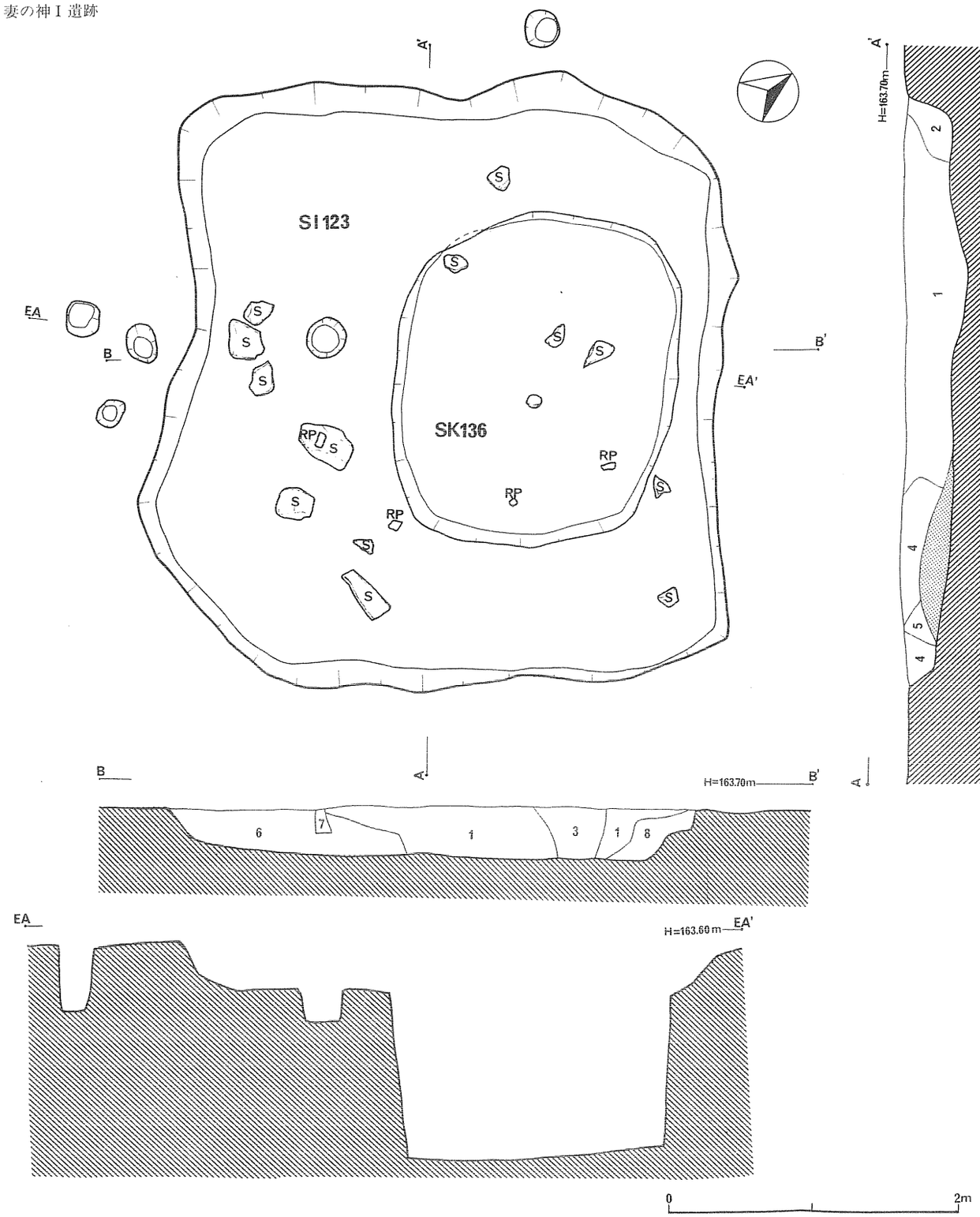
第13表	挿図番号	第15図	図版番号	図版11
遺構名	ＳＩ 124	検出地区	16－Ｇ、17－Ｇ、17－Ｈ	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	344cm	295cm	233cm	250cm
	壁高	4～10.2cm	21.4～29.9cm	7.4～9cm	28.7～29.6cm
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

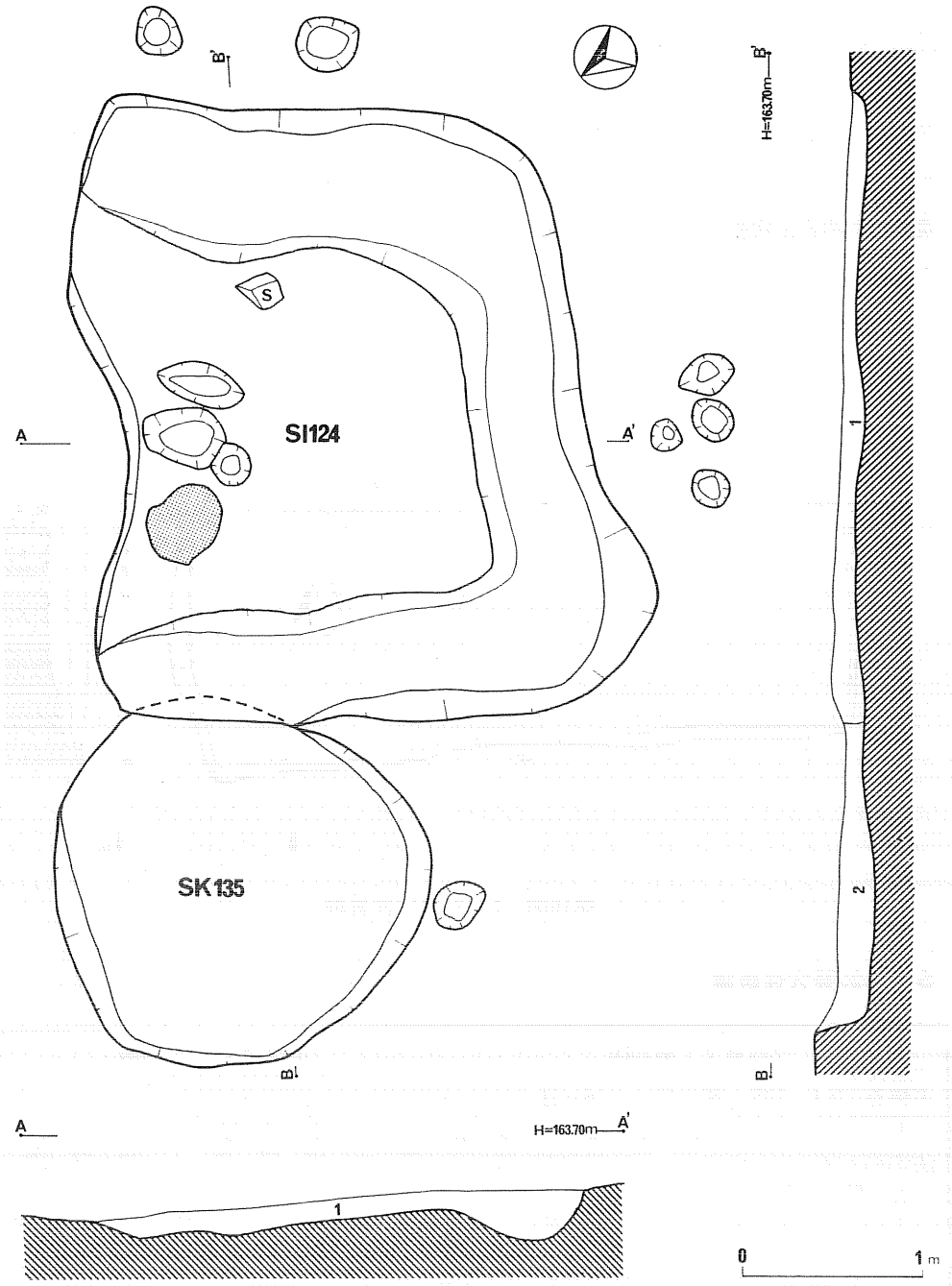
形態	方形	面積	9.0㎡	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて方形プランを確認した。ＳＫ135 土壙を切っている。

壁面の状態　南西壁以外はしっかりしていない。



第14図　SI123竪穴住居跡



第15図　SI124竪穴住居跡

1．黒褐色土　10YR⅔　粘性ややあり。しまり中。

2．黒褐色土　10YR⅔　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色（10YR⅚）ブロック混入。

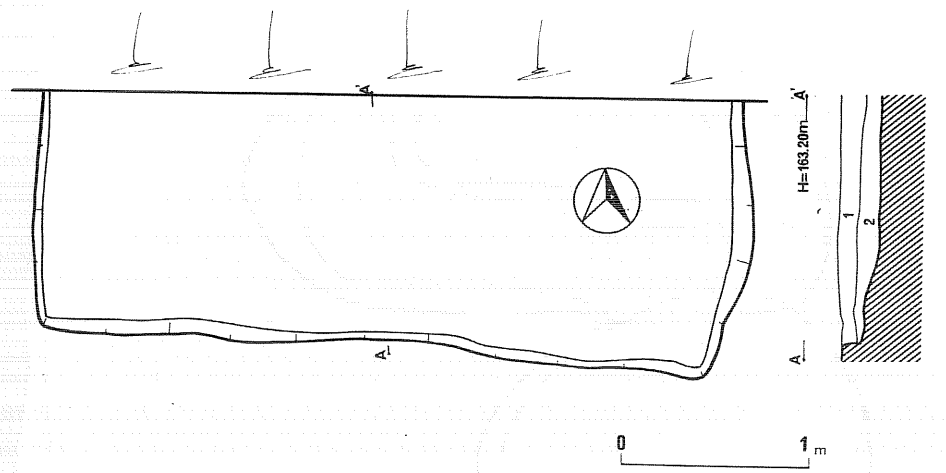
床面　凹凸があり床面もしっかりしていない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内に3個のピットが確認されたが、住居跡に伴う柱穴とは言い難い。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　土師器の坏と甕の破片が出土しており、甕の破片がほとんどである。甕の口縁部はくびれは少ないが反りの明確なものが出土している。



第16図　SI125竪穴住居跡

ＳＩ 125竪穴住居跡

第14表	挿図番号	第16図			図版番号	図版
遺構名	ＳＩ　125	検出地区	18－H			
法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁	
	壁長	(147cm)	(125cm)	355cm	——	
	壁高	5.4～12.5cm	12.6～20.8cm	7.1～14.4cm	——	
	壁溝幅	——	——	——	——	
	壁溝深	——	——	——	——	
形態	方形	面積	(5㎡)	主軸方向		
かまど	位置	な　し		構築素材		

プラン確認　Ⅰ郭北端のほぼ中央部にて、地山上面で確認した。北側の半分以上がＳＤ013堀跡によって切られている。

壁面の状態　上部削平を受けているものの壁面は比較的しっかりしており、ほぼ垂直に近く立ち上がる。

覆土

１．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまり中。

２．黄褐色土　10ＹＲ5/8　粘性なし。しまりよし。

床面　床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

壁溝　なし。

柱穴　なし。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　遺物は出土しなかった。

ＳＩ 126竪穴住居跡

第15表	挿図番号	第17図	図版番号	図版11・12

遺構名	ＳＩ126	検出地区	14－Ｆ、14－Ｇ、15－Ｇ

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	――	455cm	(350cm)	(100cm)
	壁高	――	9.2～22.6cm	9.2～13cm	17cm
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

形態	方形	面積	(14.9m²)	主軸方向	

かまど	位置	なし	構築素材	

プラン確認　Ⅰ郭東南端より浮石が大量に混入した不整形プランを確認した。掘り下げたところ方形の竪穴住居跡のところどころに大ブロック状に浮石がはいりこんだものであることが確認された。東部はＳＤ013 掘跡により切られており、北壁はＳＫ134 土壙により切られており、これらの遺構より古い。

壁面の状態　西側の壁際には大量の浮石が検出された。北壁は削平を受けているため、不明確である。

覆土　覆土の状態からみて浮石降灰時期と比べてそれほどの時間差はないものと思われる。

１．褐色土　10ＹＲ4/1　粘性なし。しまりよし。浮石（アッシュ）。

2．にぶい黄褐色土　10YR7/2　粘性なし。しまりよし。

3．黄褐色土　10YR7/8　粘性なし。しまりなし。1㎜～2㎝の粒子でつぶつぶである。浮石（パーミス）。

4．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし。しまり中。

床面　床面より若干高いレベルまで浮石が混入している。床面や若干の凹凸があり堅固でない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡に5個のピットを確認した。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　第25図28～34、第27図51に示す遺物が出土した。その他の遺物は土師器の坏と甕の破片で、当遺構においては壇の割合がたいへん高い。坏は黒色処理のものが多く底部も回転糸切りで切り離したものが多い。甕の破片はくびれを持っており、反りの明確なものが出土している。

51は勾玉である。材質は比重が小さく琥珀製と思われる。

ＳＩ 127竪穴住居跡

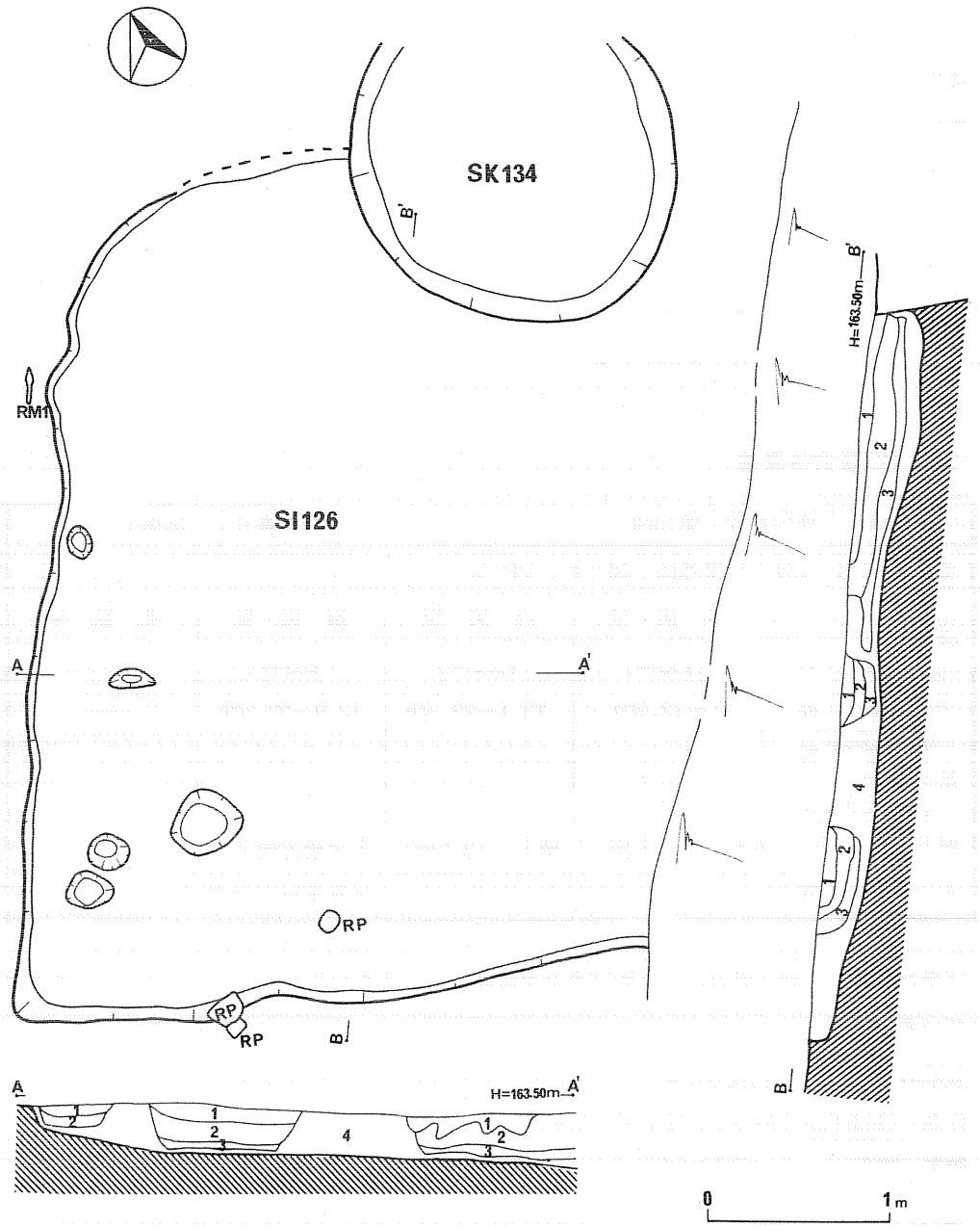
第16表	挿図番号	第18図	図版番号	図版11
遺構名	ＳＩ127	検出地区	15－Ｆ、15－Ｇ	

法量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長	――	(415cm)	――	(395cm)
壁高	――	7.8～11.6cm	――	0～16cm
壁溝幅	――	――	――	――
壁溝深	――	――	――	――

形態	方形	面積	(14.8㎡)	主軸方向	
かまど	位置	不明		構築素材	

プラン確認　ＳＩ126の北側に方形のプランを確認したが、南側の壁はつかめなかった。掘り下げたところ、さらに落ちこむ部分があり、2軒の重複の可能性が出て来た。しかし断面でもはっきりした新旧関係はつかめなかったため一つの竪穴住居跡として扱うこととする。削平がひどいため不明確なところも多いが、ＳＩ126・133竪穴住居跡、ＳＫ134土壙、ＳＸＦ120焼土遺構より古い遺構である。

壁面の状態　両竪は比較的しっかりしているが、その他の壁は極めて不明確である。とくに



第17図　SI126竪穴住居跡

北側は大きく削平されており、ほとんど壁が残存していない。

覆土

1．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし。しまり中。植物根が混入。

2．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし。　しまりなし。

3．にぶい黄褐色土　10YR7/2　粘性なし。しまりなし。ザラザラした荒い粒子の砂で構成

4．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし。しまり中。

床面　住居跡南部が一段落ちこんでいる。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内隅に1個、西壁際に3個、北壁際に2個確認された。

カマド　北壁西側の焼土がかまどの可能性があるが、削平がひどく不明である。

遺物とその出土状態　遺物は縄文土器、土師器、須恵器が出土した。土師器は坏と甕の破片で甕が大部分を占る。甕口縁部はほとんどくびれがないか、若干あるものが出土している。須恵器は坏の口縁部破片が1点出土した。

ＳＩ 129竪穴住居跡

第17表	挿図番号	第19図	図版番号	図版13
遺構名	ＳＩ 129	検出地区	18－Ｆ、18－Ｇ	

法量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長	(155cm)	(132cm)	205cm	——
壁高	0～12.9cm	13.1～22.2cm	12.9～22.2cm	——
壁溝幅	——	——	——	——
壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(3.7㎡)	主軸方向	
かまど	位置	な　し		構築素材	

プラン確認　Ⅰ郭北東端にて方形プランを確認した。北半分程がＳＤ013 堀跡によって切られている。

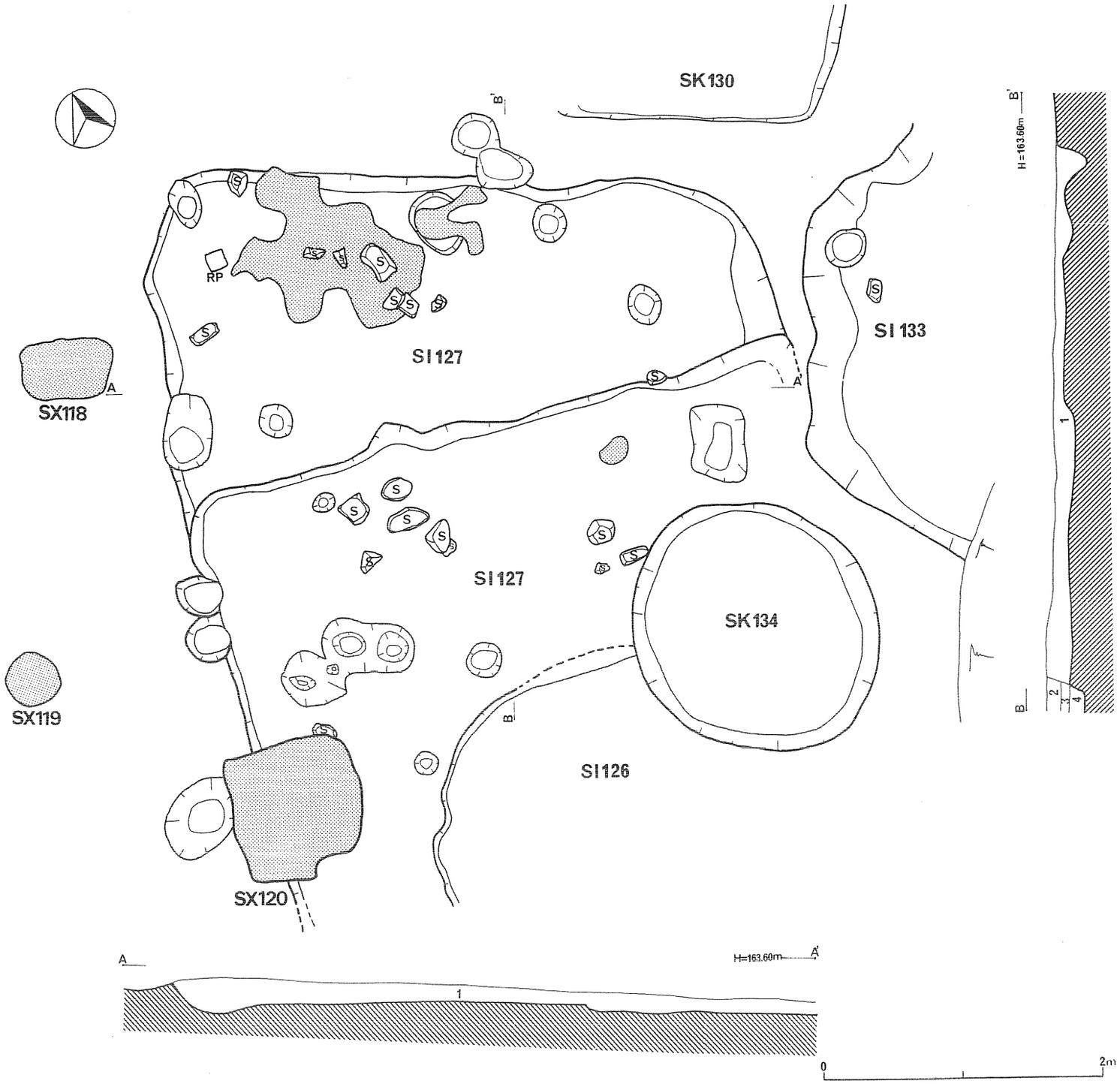
壁面の状態　上面は削平を受けており、いずれの壁面もしっかりしていない。

床面　ほぼ平坦であるが、堅固ではない。

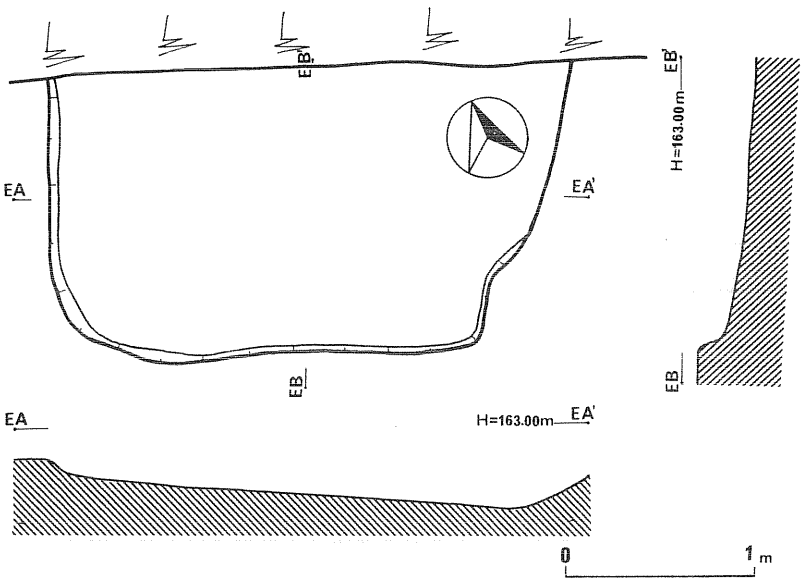
壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

カマド　なし。



第18図　SI127竪穴住居跡



第19図　SI129竪穴住居跡

遺物とその出土状態　第25図38～40に示した縄文土器が3点と土師器の坏と甕の破片が出土している。ほとんどが土師器の甕の破片で、その口縁部はほとんどくびれのないものである。坏は内面に黒色処理が施されている。

S I 131竪穴住居跡

第18表	挿図番号	第20図	図版番号	図版13
遺構名	S I 131	検出地区	15－F、16－F、16－G、17－F、17G	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	——	513cm	(328cm)	(172cm)
	壁高	——	16.8～25.5cm	11.5～19.5cm	3.9～7.5cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(15.3m²)	主軸方向	
かまど	位置	南西壁		構築素材	

プラン確認　地山上面にて方形プランを確認したが、重複が激しく南西壁以外ははっきり確認できなかった。北側は削平を受けているため不明である。北西部でS I 131′竪穴住居跡を切

ている。

壁面の状態　南西壁以外は不明瞭で、竪固さに欠ける。

床面　床面は若干の凹凸がある。竪固ではない。ＳＩ131′竪穴住居跡の床面よりやや掘り下げてある。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡の壁に沿って６個、住居跡内に数個のピットが確認された。

カマド　上部が削平されており、遺存状態はきわめて不良である。袖部煙道部等もほとんど確認できなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

１．焼土

２．暗褐色土　10ＹＲ3/4　焼土粒子、灰混入。

３．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまり中。焼土粒子混入。

遺物とその出土状態　第26図41～45に示す土器が出土した。41～45は縄文時代の後期のものと思われ、あとから混入した土器であろう。その他の遺物は土師器の坏と甕の破片で、甕の破片が大部分である坏の底部は回転糸切りのあと調整が施されたものである。甕の破片はくびれを持ち、反りのある口縁部を持つものが出土している。

ＳＩ131′竪穴住居跡

第19表	挿図番号	第20図	図版番号	図版13
遺構名	ＳＩ　131′	検出地区	17－Ｇ、18－Ｇ	

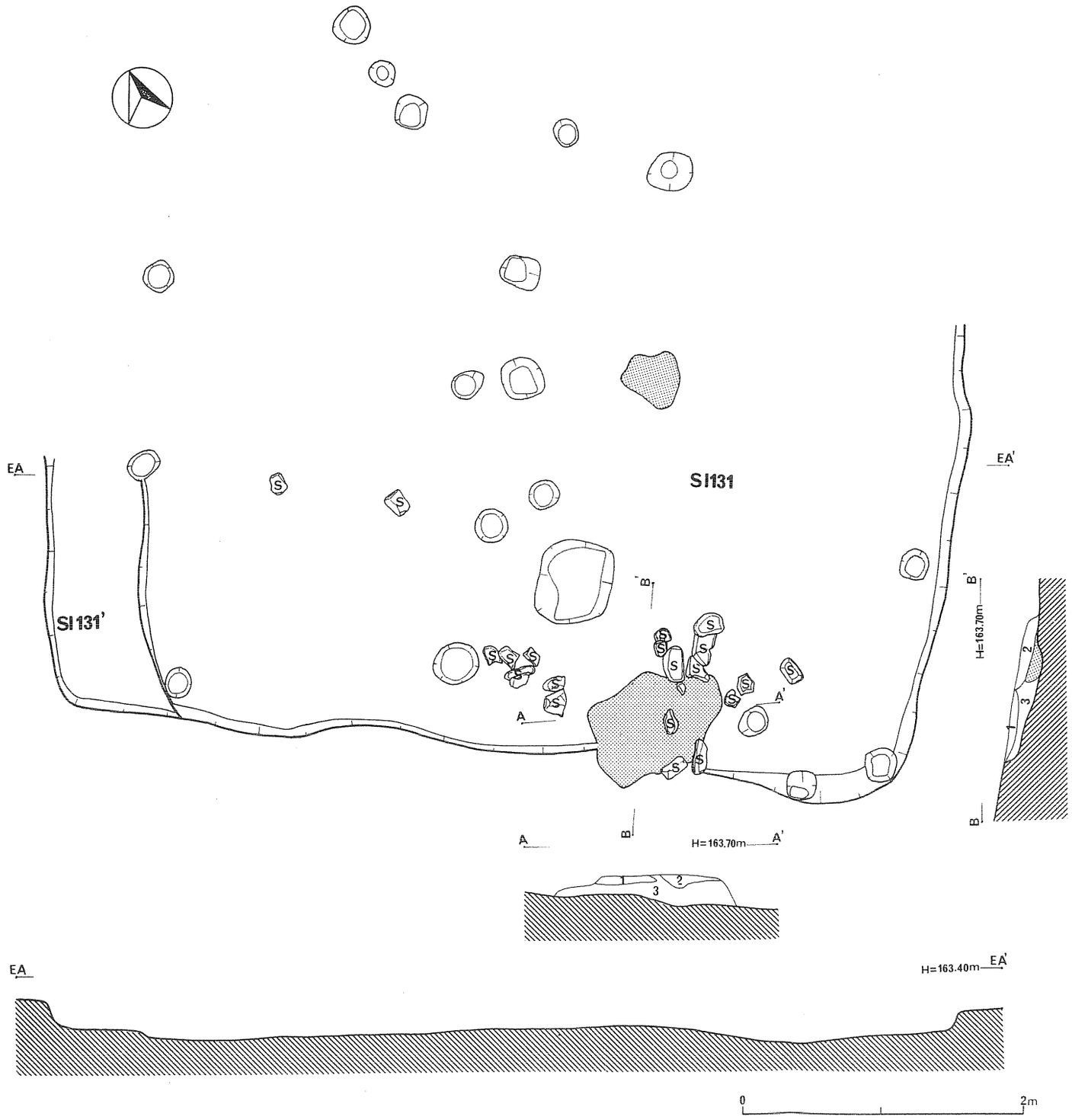
		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
法量	壁長	――	(85cm)	――	(180cm)
	壁高	――	13.8～16.2cm	――	13.8～18.1cm
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

形態	方形	面積	(1.4m²)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて南西壁を検出した。南西部を除く大部分をＳＩ　131竪穴住居跡によって切られている。

壁面の状態　北側は削平を受けているため不明である。わずかに残存する南西壁以外はしっかりしておらず、床面から排定できるにすぎなかった。

床面　竪固でない。



第20図　SI131, 131'竪穴住居跡

壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

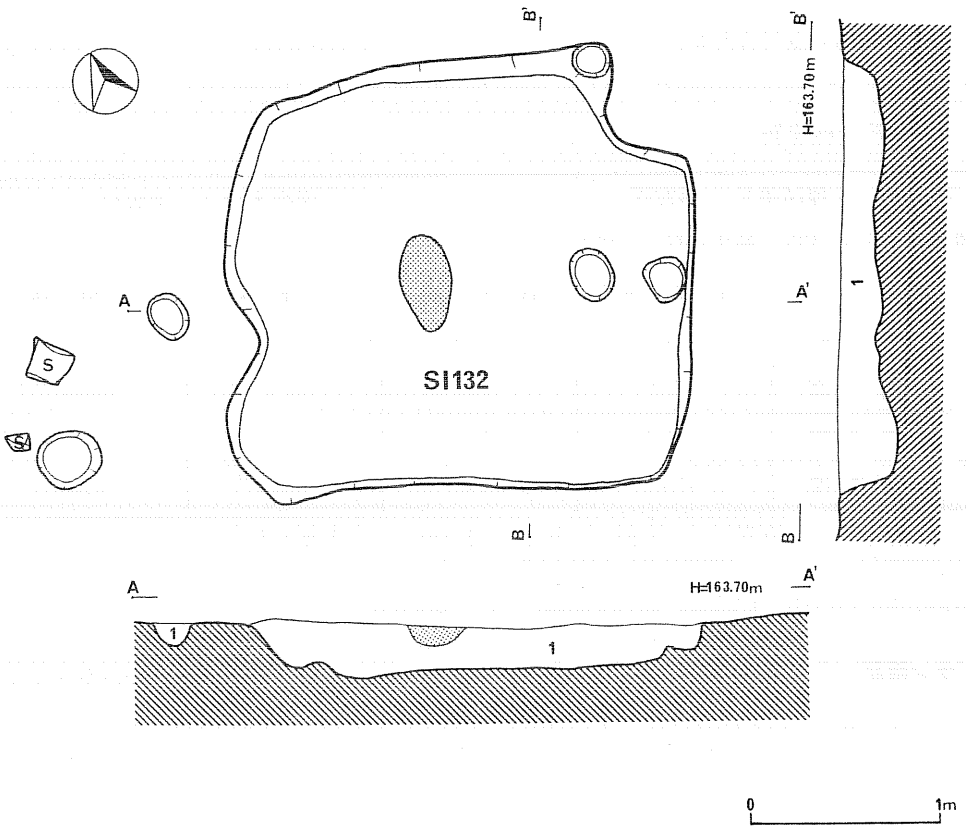
カマド　なし。

遺物とその出土状態　土師器の甕の破片が出土した。口縁部はほとんどくびれのないものが出土している。

ＳＩ132竪穴住居跡

第20表	挿図番号	第21図	図版番号	図版22
遺構名	ＳＩ 132	検出地区	14－Ⅰ、15－Ⅰ	

法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	250cm	245cm	232cm	214cm
	壁高	——	——	——	——



第21図　SI132竪穴住居跡

形態	方形	面積	(5.05㎡)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて方形のプランを確認した。

壁面の状態　削平がひどく、特に北側の壁はほとんどない。その他の壁もしっかりしていない。

覆土

1．褐色土　10YR¾　粘性なし。しまりなし。にぶい黄橙色土（10YR⅞）、にぶい黄褐色土（10YR⅝）混入。

床面　凹凸が激しくしっかりしていない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内隅に1個、壁際に1個のピットを確認した。

炉　中央部に焼土があり、ここを地床炉として使っていたと思われる。

遺物とその出土状態　土師器の甕の破片が出土しており、その口縁部はほとんどくびれがなく先端も鋭角的なものである。

ＳＩ133竪穴住居跡

第21表	挿図番号	第22図		図版番号	図版14
遺構名	ＳＩ 133	検出地区	15－Ｆ		

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	——	(155cm)	——	(360cm)
	壁高	——	——	——	——
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

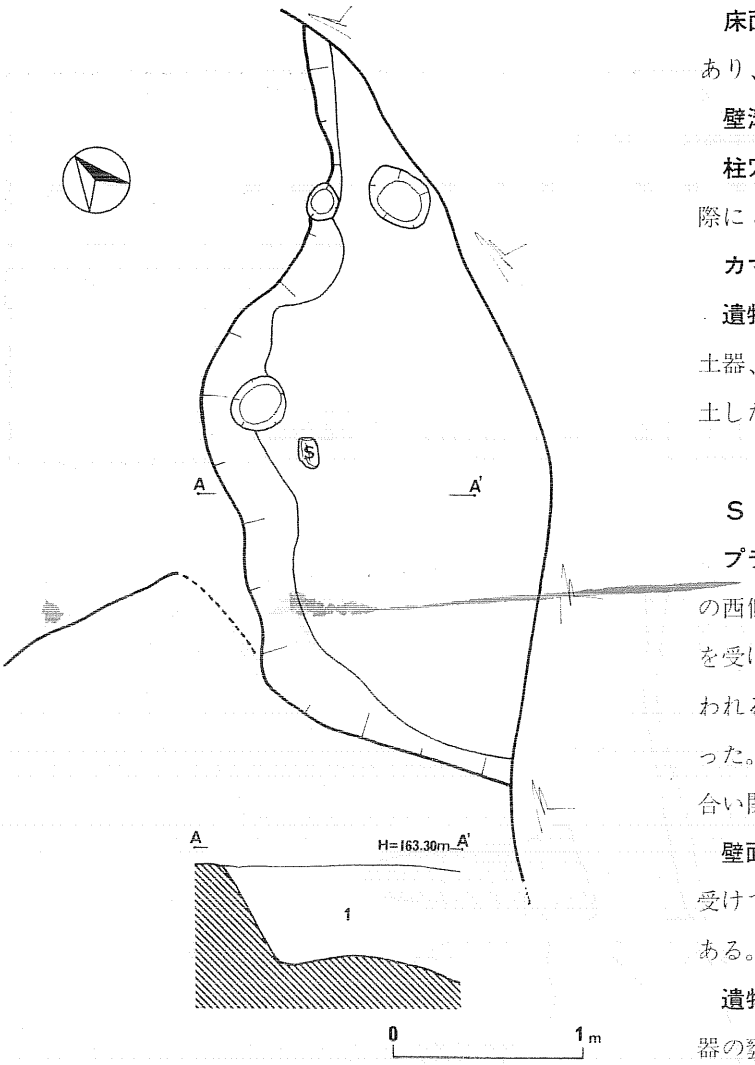
形態	方形	面積	(4.4㎡)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　Ⅰ郭東端中央部から黒褐色土のプランを検出した。東側はＳＤ 013堀跡によって切られている。

壁面の状態　壁面はしっかりしていないが、垂直に近い立ち上がりを呈する。

覆土

1．黒褐色土　10YR⅔　粘性なし。しまり中。植物根を多く含む。



第22図　SI133竪穴住居跡

床面　床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内壁際に３個のピットを検出した。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　縄文土器、土師器の破片が数点出土した。

ＳＩ　137竪穴住居跡

プラン確認　ＳＫ　135土壙の西側に壁を確認したが、削平を受けており、この南壁と思われる壁以外は検出できなかった。ＳＫ135土壙との切り合い関係はつかめなかった。

壁面の状態　上部が削平を受けており、極めて不明確である。

遺物とその出土状態　土師器の甕の破片が数点出土した。

ＳＩ　133竪穴住居跡

第22表	挿図番号		図版番号	
遺構名	ＳＩ137	検出地区	17－Ｇ、17－Ｈ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	――	――	（約300cm）	――
	壁高	――	――	――	――
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

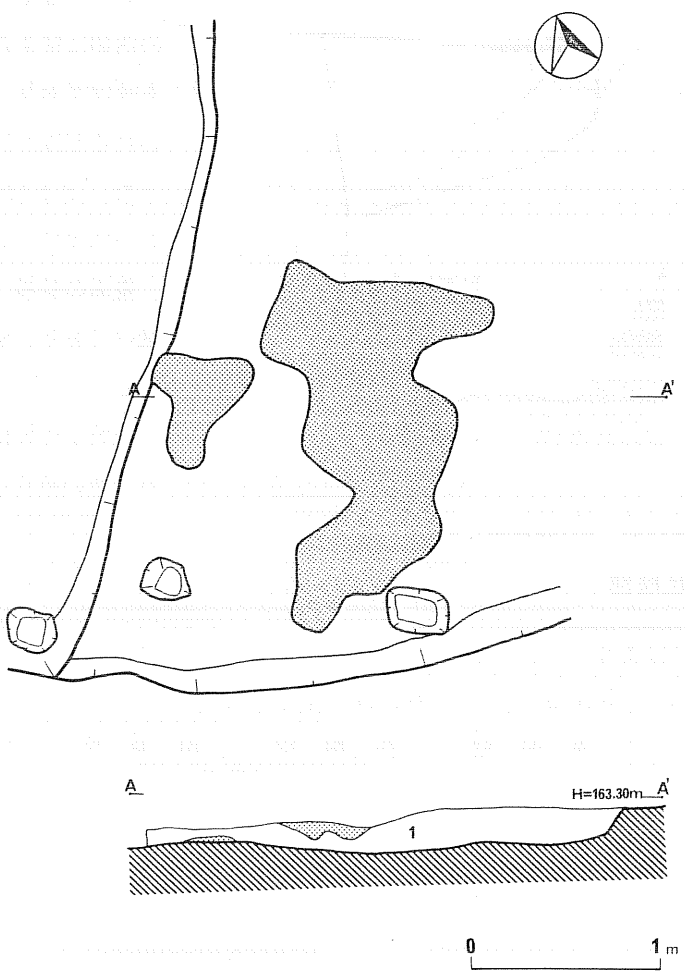
形態	方形？	面積	測定不能	主軸方向	

ＳＩ 138竪穴住居跡

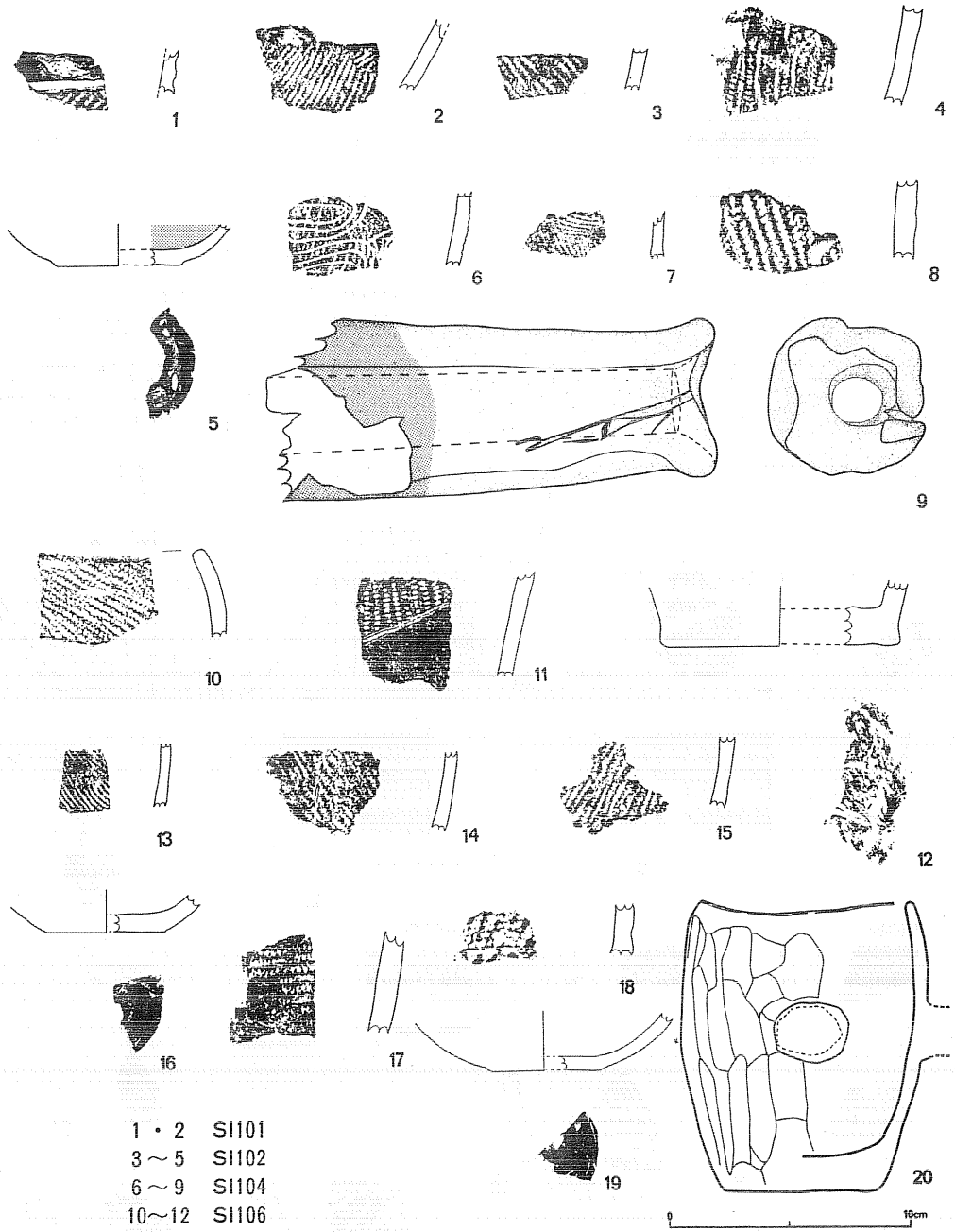
第23表	挿図番号	第24図	図版番号	図版14
遺構名	ＳＩ 138	検出地区	16－Ｆ、17－Ｆ	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	——	——	(265) cm	——
	壁高	——	——	5.3～8.1cm	——
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形？	面積	(5.0㎡)	主軸方向	

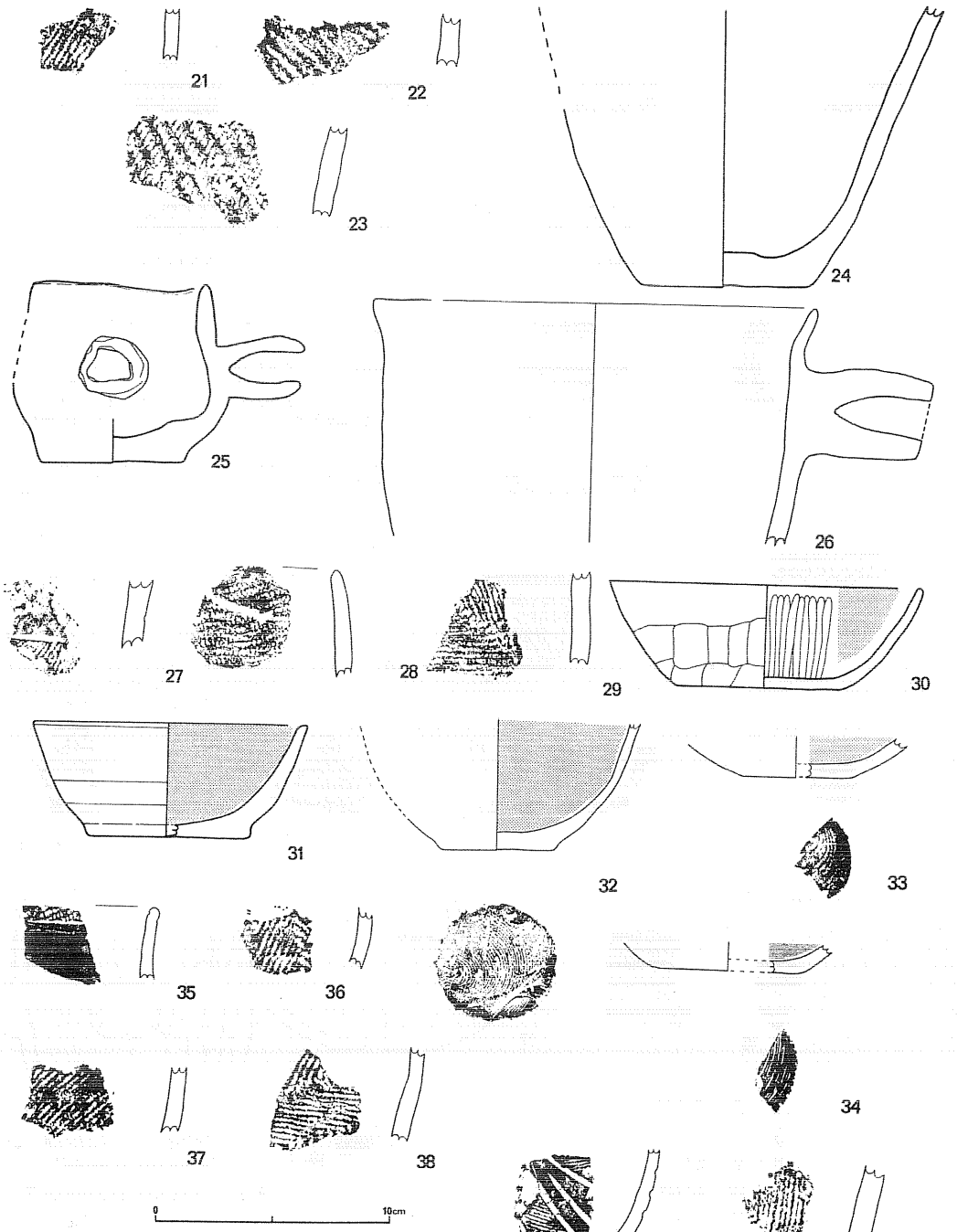


第23図　SI138竪穴住居跡



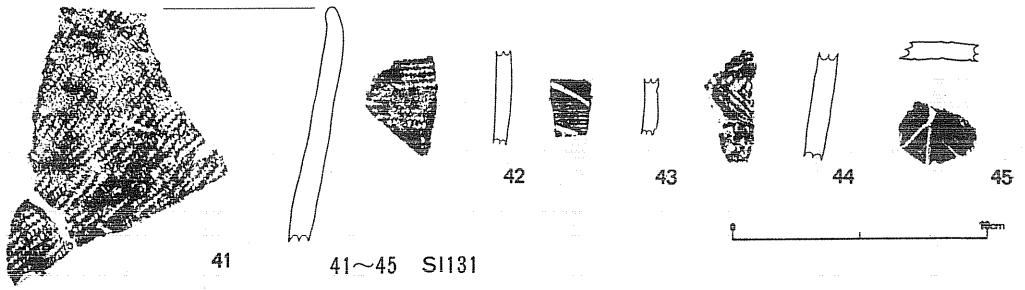
1・2　SI101
3～5　SI102
6～9　SI104
10～12　SI106
13～16　SI107
17　SI108
18～20　SI110

第24図　I郭竪穴住居跡出土遺物(1)



21～26　SI121
27～34　SI124
28～34　SI126
35　SI127
36・37　SI128
38～40　SI129

第25図　I郭竪穴住居跡出土遺物(2)



第26図　I郭竪穴住居跡出土遺物(3)

プラン確認　Ⅰ郭の北東端に、ＳＩ 131 竪穴住居跡に切られた状態でプランが検出された。東壁はＳＤ 013掘跡に西壁はＳＩ131 竪穴住居跡にそれぞれ切られ、また北壁は削平をうけているため不明である。

壁面の状態　南側のみの検出であるが、若干の削平を受けており堅固ではない。

覆土

１．黒褐色土　10Ｙ Ｒ⅔　粘性なし。しまり中。

床面　２ケ所の焼土を検出したが、東側のものは埋土上部にあり、この住居跡より新しいものである。西側のものは床面から検出されており、炉として用いられていた可能性がある。床面は堅固でない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内壁際に２個のピットを確認した。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　土師器片１片が出土したのみである。

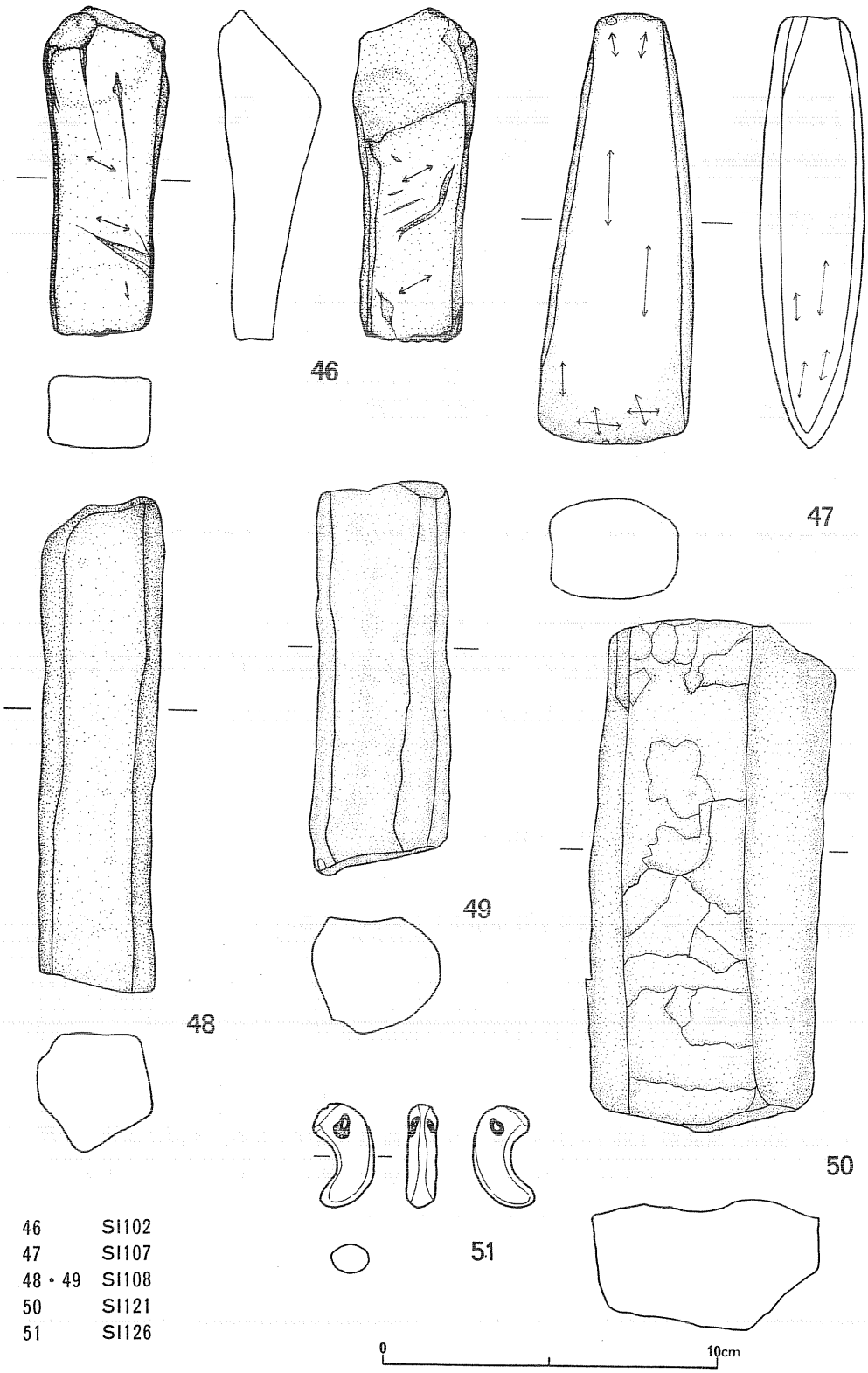
（イ）土壙

ＳＫ 111土壙　（第28図　図版15）

16－Ｈ、16－Ｉ 地区から地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部、213 cm×80cm、壙底部 198cm×58cm、深さ31cm、面積 1.4㎡である。床面には焼土が厚く堆積していた。またＳＫ112 土壙にも焼土があり、位置埋土等からこれらの２つの土壙には何らかの関係があったとも考えられる。断面は西側に深くなる。壁は比較的しっかりしている。主軸方位はＮ75°Ｗである。　遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次の通りである。

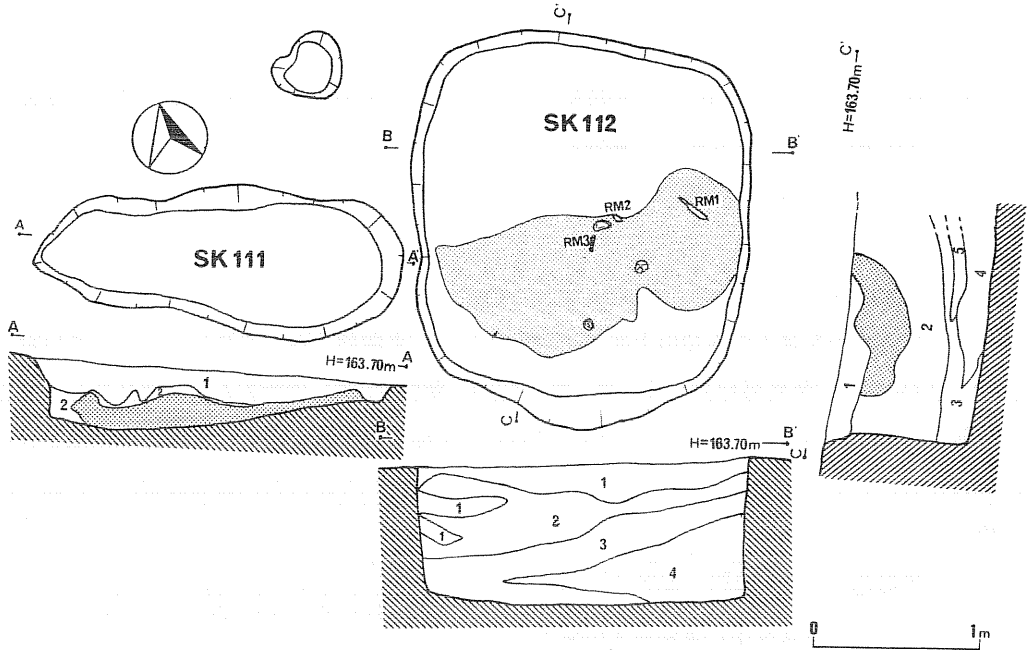
１．黒色土　　7.5Ｙ Ｒ⅔　粘性なし。しまりなし。粒子がこまかい。

２．黒褐色土　7.5Ｙ Ｒ½　粘性ややあり。



46　SI102
47　SI107
48・49　SI108
50　SI121
51　SI126

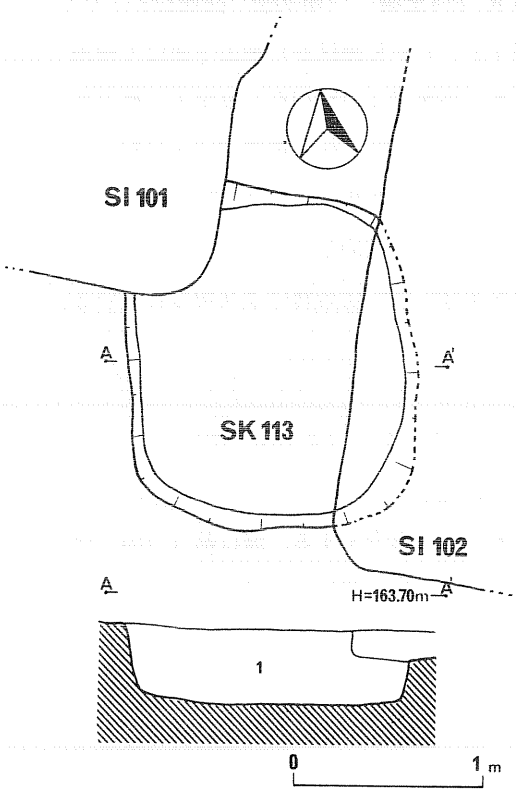
第27図　I郭竪穴住居跡出土遺物(4)



第28図　SK111, 112土壙

ＳＫ 112土壙　（第28図　図版15）

16－Ｈ地区から地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形を呈する。壙口部 225cm× 188cm、壙底部 204cm× 175 cm、深さ82cm、面積 3.9㎡を計る。埋土に焼土が多量に混入している。また焼土内から鉄器４点（第70図10～13）が出土しており、製鉄に関連のある遺構と思われる。主軸方位はＮ73°Ｗである。土師器の甕と坏の破片が出土している。坏は黒色処理のもの１点、黒色処理されていないもの２点が出土した。その他は甕の破片で、口縁部はほとんどくびれていないか、若干のくびれを持つもので、先端部は鋭角的である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



第29図　SK113土壙

1．黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまり中。明黄褐色土（10YR7/6）少量混入。
2．黄褐色土　10YR5/5　粘性なし。しまり中。粒子荒い。
3．黒色土　7.5YR2/1　粘性なし。しまり中。明赤褐色（5YR5/8）ブロック混入。
4．明赤褐色土　5YR5/8　粘性なし。しまりなし。
5．明黄褐色土　10YR6/6　粘性なし。しまり中。褐色土（10YR4/4）少量混入。

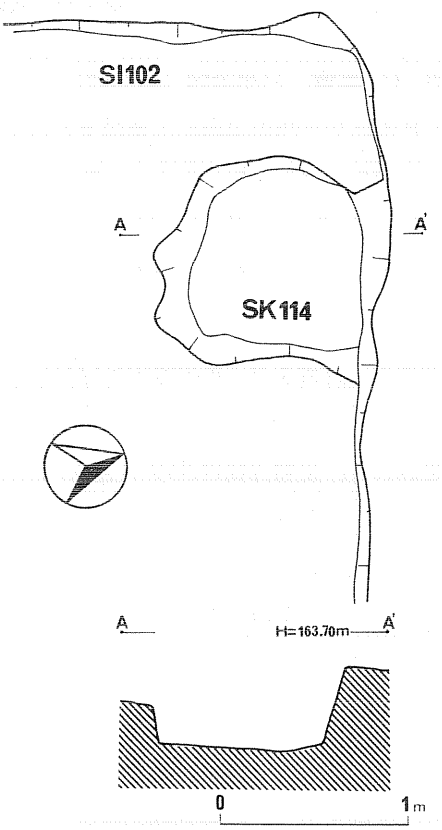
ＳＫ 113土壙　（第29図　図版16）　（測定値のカッコづけは測定可能な値である。以下同じ）

16－Ｋ、17－Ｋ地区から地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形を呈する。壙口部 180cm×（150）cm、壙底部163cm×138cm、深さ40cm、面積（2.5）㎡である。床面は凹凸がなく、壁面は垂直に近い立ち上がりをし、堅固である。東部をＳＩ102 竪穴住居跡に北西部をＳＩ 101 竪穴住居跡によってそれぞれ切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり。
　　しまり中。黄褐色土少量混入。

ＳＫ 114土壙　（第30図　図版17）

17－Ｊ、17－Ｋ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部（123）cm×（105）cm、壙底部92cm×86cm、深さ（27）cm、面積（1.1）㎡である。床面は凹凸がなく比較的しっかりしている。上半分をＳＩ102 竪穴住居跡により切られている。遺物は出土しなかった。



第30図　SK114土壙

ＳＫ 115土壙　（第31図　図版17）

16－Ｊ 地区から地山上面にて検出された。平面形は楕円形を呈する。壙口部（ 104）cm×（85）cm、壙底部90cm×80cm、深さ（80）cm、面積（ 0.8）㎡である。床面はほとんど凹凸がなく、壁は垂直に近い立ち上がりを呈する。上半分をＳＩ107 竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面

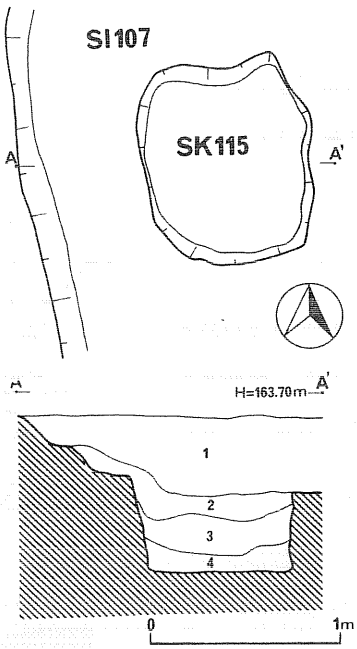
観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　　10YR3/2　粘性なし。しまりなし。

2．明黄褐色土　　10YR6/6　粘性なし。しまり中。

3．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性なし。しまりなし。

4．にぶい黄橙色土　10YR6/4　粘性ややあり。しまりなし。



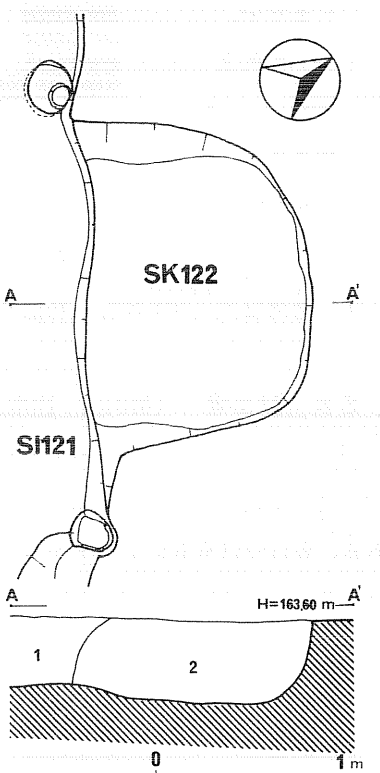
第31図　SK115土壙

SK 122土壙　（第32図　図版18）

16－K地区から地山上面にて検出された。平面形は隅丸方形？を呈する。壙口部 163cm×（ 134）cm、壙底部 140cm×（ 115）cm、深さ43cm、面積（1.8）m²である。床面は若干の凹凸があり、壁はゆるく立ち上がる。南西部をSI121 竪穴住居跡により切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　　10YR3/2　粘性なし。しまりなし。黄褐色、白色極大粒少量混入。

2．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性なし。しまり中。白色、明黄褐色粒子少量混入。

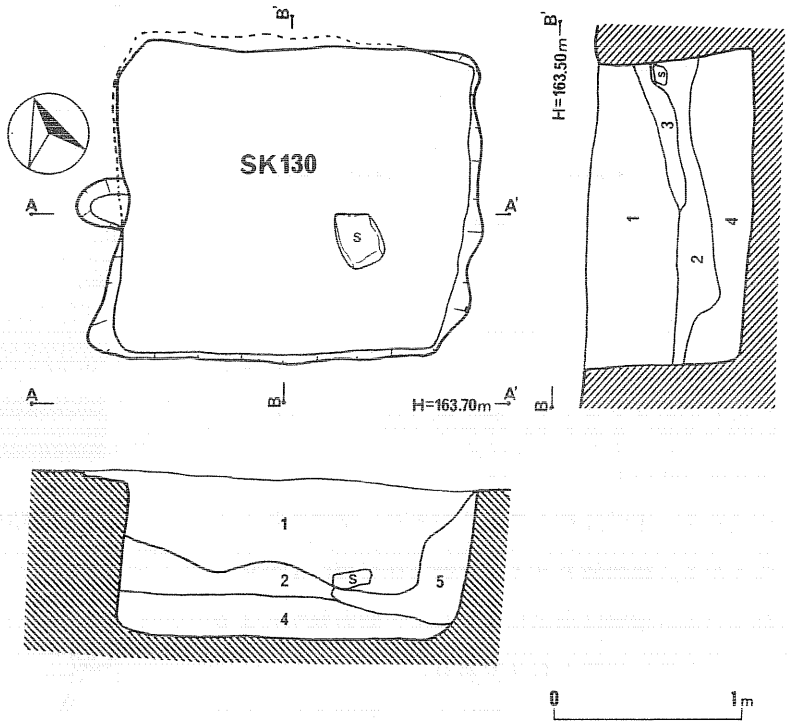


第32図　SK122土壙

SK 130土壙　（第33図　図版18）

15－F、16－F地区から地山上面にて検出された。平面形は方形を呈する。壙口部 187cm× 160cm、壙底部 181cm× 166cm、深さ87cm、面積 3.2m²である。床面は凹凸が少なくかなり堅固である。壁はほぼ垂直で北側はえぐれている。焼土が少量検出されており、SK112 土壙と形態等に共通点も多い。しかし、

遺物は第39図に示す土器が出土したのみであった。1は縄文土器で単節ＲＬが回転施文されている。2、3は須恵器甕の破片で叩き目文が認められる。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



第33図　SK130土壙

1．黒褐色土　10Y R2/2　粘性ややあり。しまり中。

2．黒褐色土　10Y R3/1　粘性ややあり。しまり中。

3．黒色土　10Y R2/1　粘性ややあり。しまり中。少々焼土や灰らしきもの混入。

4．暗褐色土　10Y R3/3　粘性ややあり。しまり中。少々焼土や灰らしきもの混入。

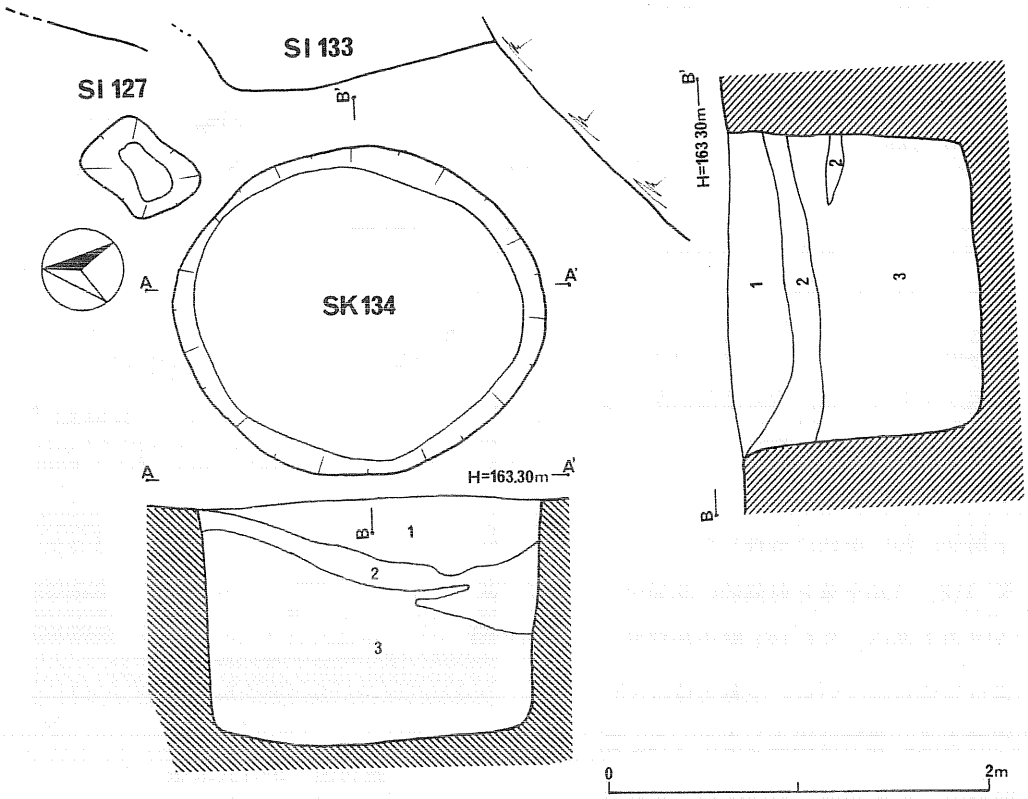
ＳＫ 134土壙　（第34図　図版19）

15－Ｆ、15－Ｇ地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部 195cm×173 cm、壙底部 172cm× 145cm、深さ 130cm、面積 2.6㎡である。床面は凹凸が少なく堅固である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。ＳＩ126、 127竪穴住居跡を切っており、これらより新しい。遺物は土師器甕の破片が数点出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．にぶい黄褐色土　10Y R5/3　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10Y R6/8）中粒がブロック状に少量混入。

2．黒色土　10Y R2/1　粘性ややあり。しまりなし。

3．にぶい黄褐色土　10Y R4/3　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10Y R6/8）中粒がブロッ

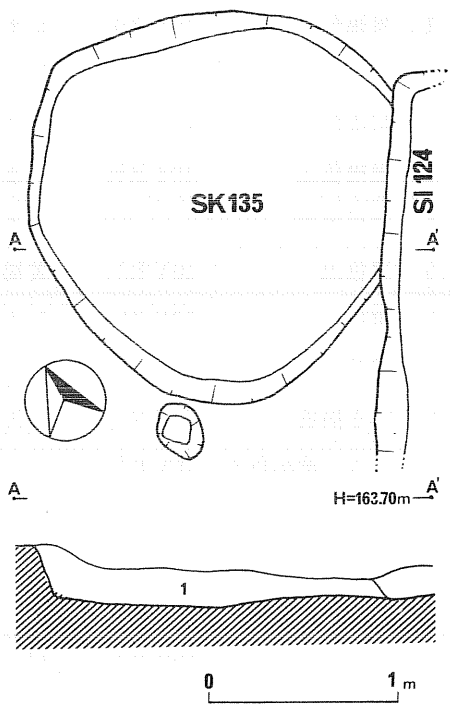


第34図　SK134土壙

ク状に少量混入。

ＳＫ 135土壙　（第35図）

17－Ｇ、17－Ｈ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部206 cm× 186cm、壙底部 178cm×（ 182）cm、深さ（21）cm、面積（3.1）㎡である。 上部は削平を受けている。床面、壁面ともしっかりしていない。ＳＩ124 竪穴住居跡により切られている。ＳＩ137竪穴住居跡との切り合い関係は不明である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

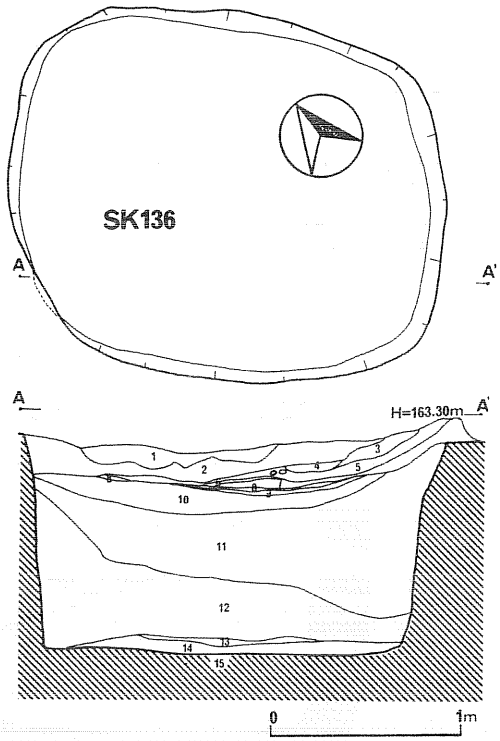


第35図　SK135土壙

1．黒褐色土　10Y R2/3　粘性ややあり。しまり中。

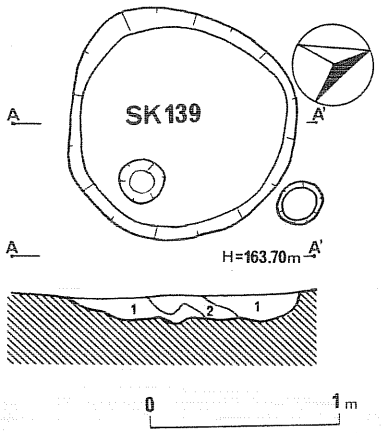
ＳＫ 136土壙　（第36図　図版19）

14－Ⅰ、14－J 地区から地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部（231）cm×（192）cm、壙底部 216cm× 176cm、深さ 113cm、面積 3.8㎡である。床面は凹凸が少なく堅固である。壁も垂直に近く立ち上がり、深さのある土壙である。焼土が上層部に細い帯状に堆積している。ＳＫ 112、 130土壙と形態的に共通するところも多い。ＳＩ 123 竪穴住居跡によって切られている。主軸方位はN 50° Wである。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

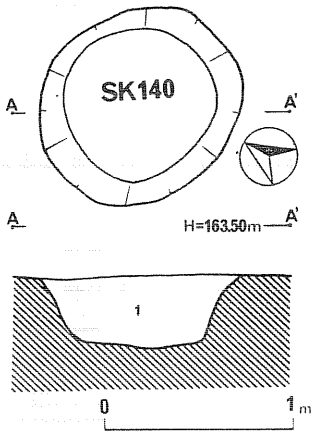


第36図　SK136土壙

1．黒褐色土　10Y R3/2　しまりなし。上面に黄褐色大粒、下面に炭化物極小粒混入。
2．暗褐色土　10Y R3/3　しまり中。炭化物小粒が多量混入している。
3．黒褐色土　10Y R2/2　しまりなし。焼土。黄褐色小粒混入。
4．暗褐色土　7.5Y R3/4　しまりなし。焼土。
5．黒色土　10Y R2/1　黄褐色極小粒混入。わずかに 6 層を混入。
6．黒色土　10Y R1.7/1　しまりよし。混入物なし。
7．明黄褐色土　10Y R7/6　しまりよし。黒褐色小粒混入。
8．暗赤褐色土　5 Y R3/3　しまりよし。上面に炭化物少量混入。焼土。
9．にぶい黄褐色土　10Y R5/4　ＳＩ123 の床面と思われる。黄褐色小粒混入。焼土。
10．にぶい黄橙色土　10Y R6/4　しまりなし。炭化物極小粒、黄褐色小～中粒混入。
11．にぶい黄橙色土　10Y R7/4　しまり中。炭化物小粒混入。黄褐色小～中粒やや混入。
12．にぶい黄橙色土　10Y R7/3　しまりなし。炭化物小粒混入。黄褐色粒子わずかに混入。
13．黒色土　10Y R3/1　しまりなし。赤色小粒混入。



第37図　SK139土壙



第38図　SK140土壙

14．浅黄色　　2.5Y R7/3　上面しまりよし。黒褐色小粒混入。

15．にぶい黄橙色土　10Y R7/2　地山。きめ細かい。

ＳＫ 139土壙　（第37図　図版20）

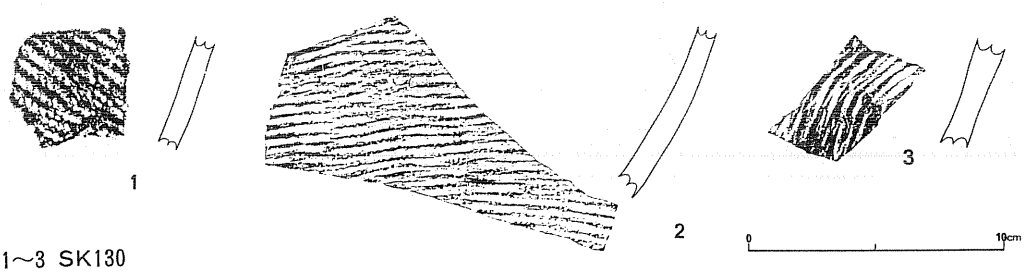
14－I 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部（ 127）cm×（ 120）cm、壙底部 111cm× 107cm、深さ（12）cm、面積（1.2）㎡である。床面は凹凸が激しく、上半分は削平されている。床面、壁面とも堅固でない。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．暗褐色土　　10Y R3/4　粘性なし。しまりなし。明黄褐色（10Y R6/8）粒子混入。

2．にぶい黄褐色土　10Y R5/4　粘性なし。しまりなし。

ＳＫ 140土壙　（第38図　図版20）

16－F 地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部 112cm×97cm、壙

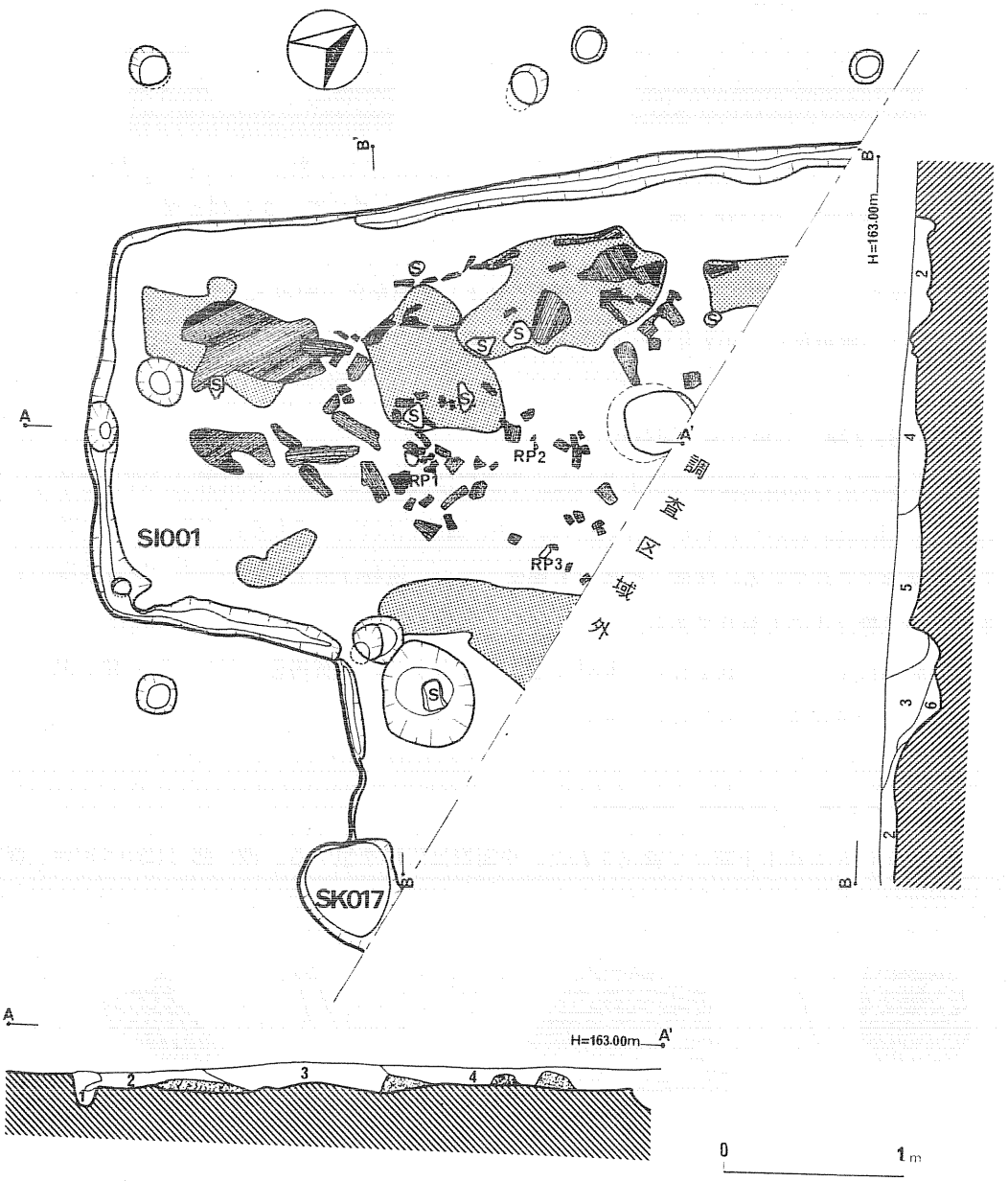


1～3 SK130

第39図　I郭土壙内出土遺物

底部78cm×76cm、深さ36cm、面積 0.8㎡である。床面は若干の凹凸がある。壁はゆるやかに立ち上がる小土壙である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　10YR$\frac{2}{2}$　明黄褐色粒子混入。



第40図　SI001竪穴住居跡

（ウ）溝跡

ＳＤ116溝跡　（第11図　図版45）

ＳＩ108竪穴住居跡内より検出された。方形に廻っており、その規模は181cm×299cm、溝幅11cm～36cm、深さ3cm～6cmである。溝の放向、規模などからSI 108竪穴住居跡の施設とは考えにくく、単独のものと思われる。

遺物は土師器の甕の破片が出土した。

イ．II郭の遺構

（ア）竪穴住居跡

SI 001竪穴住居跡

第24表	挿図番号	第40図		図版番号	図版21
遺構名	ＳＩ001	検出地区	10-Ｃ、10-Ｄ、11-Ｃ、11-Ｄ		
法量		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁　長	――	(207＋10°)cm	――	(410) cm
	壁　高	――	6.6～11.3cm	――	6.3～10.4cm
	壁溝幅	――	(８～17) cm	――	(10～18) cm
	壁溝深	――	５～7.8cm	――	3.1～3.5cm
形　態	方形（張出あり）？	面　積	(９㎡)	主軸方向	
かまど	位　置	な　し		構築素材	

プラン確認　地山上面にてプランを確認したが、上部は削平を受けている。また東部は路線外のため不明である。このため南西部が張出部のようにも思われるが不明である。SK017　土壙を切って構築されている。

壁面の状態　壁はしっかりしていず、上部が削平を受けている。

覆土

１．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10YR6/6）粒子混入。

２．褐土色　10YR4/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10YR6/6）ブロック状に混入。

３．褐土色　10YR4/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10YR6/6）ブロック状に混入。炭化物混入。

４．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10YR6/6）ブロック状に混入。炭化物混入

5．褐色土　10YR¼　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10YR⅚）ブロック状に混入。

6．黄褐色土　10YR⅚　粘性なし。しまりなし。

床面　床面は凹凸が激しく、堅固でない。床面は炭化材と焼土が広く分布しており、焼失家屋と思われる。

壁構　南西部が確認できなかったが、その他はほぼ全周するものと思われる。

柱穴、ピット　壁溝にそって3個のピットが検出された。東部にある2個の大きめのピットは住居跡に付属しないものと思われる。

カマド　なし

遺物とその出土状態　土師器の甕の破片が5点出土した。土師器甕の口縁部はほとんどくびれがなくその先端部も鋭角的である。

SI 002竪穴住居跡

第25表	挿図番号	第41図	図版番号	図版22
遺構名	SI 002	検出地区	9-C、10-C	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	——	(442) cm	(277) cm	(190) cm
	壁高	——	6.5～9.1cm	1～3.4cm	12～22.6cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(17.5m²)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて方形のプランを確認したが、削平がひどく南西部は壁が確認できなかった。また東側は跡線外のため不明である。SK014、015土壙を切っており、これらより新しい。

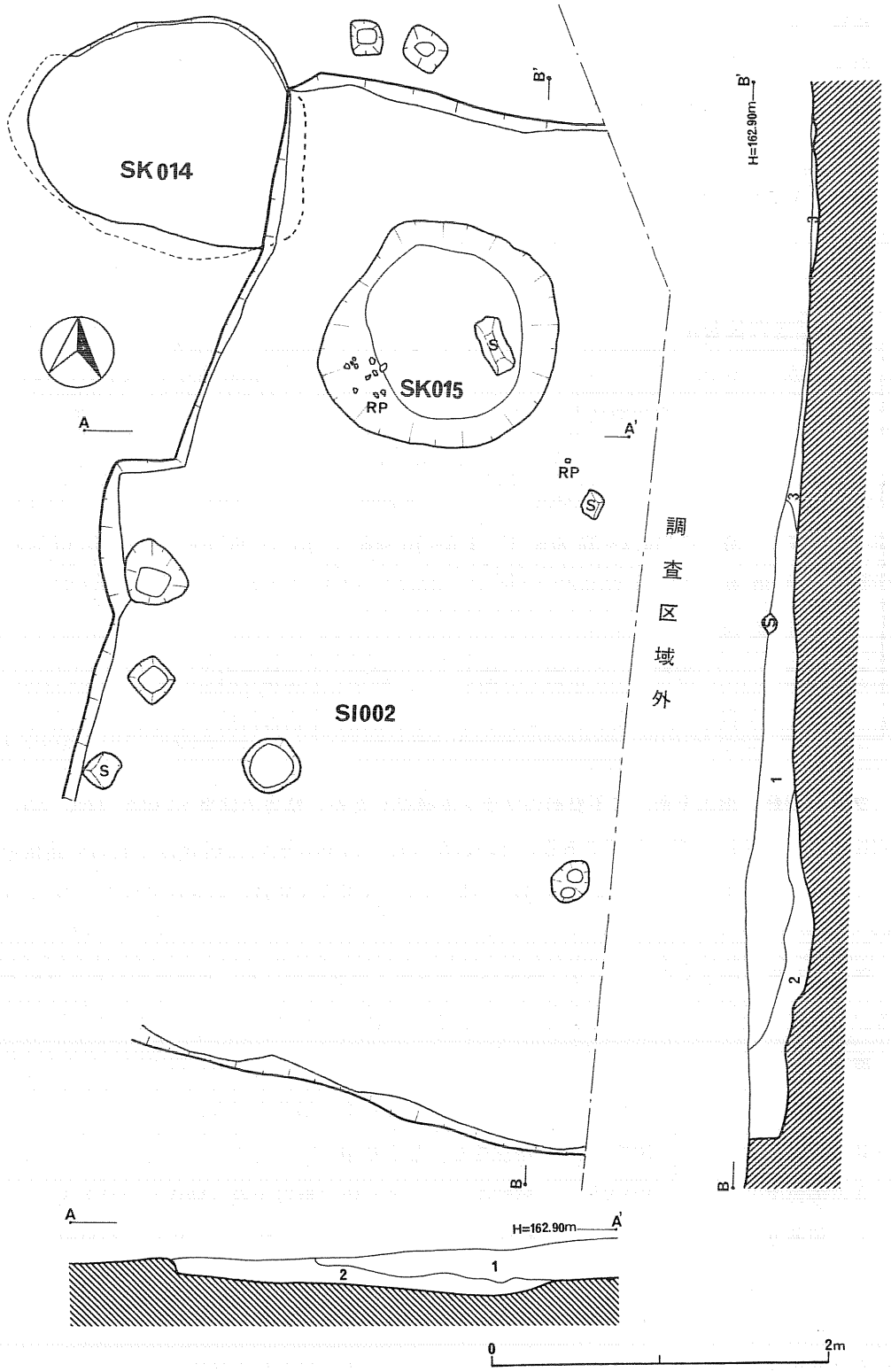
壁面の状態　南西部は削平されていて不明である。その他の壁もごくわずかしか確認されなかった。

覆土

1．黒褐色土　10YR⅔　粘性なし。しまり中。黄褐色土（10YR⅙）少量混入。黒色土（10YR1.7/1）少量混入。

2．黒褐色土　10YR⅓　粘性なし。しまり中。黄褐色粒子少量混入。

3．黄褐色土　10YR⅚　粘性ややあり。しまり中。



第41図　SI002竪穴住居跡

床面　床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

壁溝　なし

柱穴、ピット　住居跡西壁に1個、他に4個のピットが確認された。

カマド　なし

遺物とその出土状態　遺物は数点の土師器甕の破片が出土したのみである。土師器甕の口縁部はほとんどくびれのないものが出土している。

SI 003竪穴住居跡

第26表	挿図番号	第42図		図版番号	図版22～24
遺構名	SI 003	検出地区	9－D、9－E、9－F、10－D、10－E、10－F		

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	638cm	639cm	699cm	663cm
	壁高	14.4～39.8cm	4.6～10.9cm	10.3～25.4cm	10.2～14.9cm
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――

形態	方形	面積	40m²	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて不整形のプランを確認したが、精査の結果SI 003、005、006 竪穴住居跡、SK016 土壙の重複であることがわかった。SI 003 竪穴住居跡はこれらの遺構を切っておりこれらより新しい。また南例の一部をSI 008 竪穴住居跡に切られており、これより古い。

壁面の状態　削平を受けており、壁が全部遺存する箇所はないが、北部の方が若干良好である。

覆土

1．黄褐色土　10YR5/8　粘性なし。しまり中。褐色土混入。
2．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまり中。
3．褐色土　10YR4/4　粘性なし。しまり中。軽石少量、褐色土少量混入。
4．黄褐色土　10YR5/6　粘性なし。しまり中。炭化物少量、褐色土少量混入。
5．にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘性なし。しまり中。
6．黒色土　10YR1.6/1　粘性なし。しまりなし。
7．黒褐色土　10YR3/2　粘性なし。しまり中。炭化物少量混入。

第42図　SI003, 005, 006竪穴住居跡

8．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまり中。
9．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性ややあり。しまりよし
10．にぶい黄橙色土　10YR6/4　粘性なし。しまり中。軽石、黒褐色土少量混入。
11．明黄褐色土　10YR6/7　粘性なし。しまり中。軽石、黒褐色土少量混入。
12．にぶい明黄褐色土　10YR4/3　粘性なし。しまり中。炭化物少量混入。
13．明黄褐色土　10YR7/6　粘性なし。しまりよし。
14．にぶい黄橙色土　10YR6/4　粘性なし。しまり中。軽石少量混入。

床面　床面は比較的堅固で礫も多い。住居跡北側に焼土が検出されている。また概して住居跡南東半分側から多量の炭化米が検出された（P.195参照）。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡内に数個のピットが検出されたが、明確な柱穴となるものはなかった。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　第48図3～5に示す遺物が出土した。4、5は把手付土器で5は把手が中空のものである。その他の遺物としては土師器、須恵器、鉄器、木器、炭化米が出土している。土師器は坏、甕の破片が出土している。土師器杯の破片は1点だけで、内面黒色処理、底部は回転糸切りである。土師器甕の破片は多く、90点以上を数える。その口縁部はくびれのないものとあるものが5：3の割で出土する。須恵器は甕の破片が1点出土した。

床面直上から炭化米が出土しており、その直下から木皿が出土した。木皿は遺存状態が極めて悪く、完全に炭化していた。

SI 005竪穴住居跡

第27表	挿図番号	第42図	図版番号	図版22・23
遺構名	SI005	検出地区	9－D、10－D	

法量		北東側壁	南西側壁	南南側壁	北北側壁
	壁長	317cm	——	(142)cm	——
	壁高	10.5～11.9cm	——	5.7～11cm	——
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形？	面積	(2.5m²)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて不整形のプランを確認したが、SI003竪穴住居跡などのと重複

であった。SI 005竪穴住居跡はSI 003竪穴住居跡に切られており、これより古い。

壁面の状態　削平を受けており、壁はほとんど残っていない。

床面　床面は若干の凹凸があるが、比較的堅固である。

壁溝　なし。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　なし。

SI 006竪穴住居跡

第28表	挿図番号	第42図	図版番号	図版22・23
遺構名	SI 006	検出地区	10－E	

法量		北東側壁	南西側壁	南南側壁	北北側壁
	壁長	(118)cm	(100)cm	——	320cm
	壁高	32.1～32.3cm	10.5～14.4cm	——	20.6～31cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形（？）	面積	(4.1㎡)	主軸方向	
かまど	位置	なし		構築素材	

プラン確認　地山上面にて不整形のプランを確認し、精査の結果3棟の重複であることが確認された。南東側をSI 003竪穴住居跡によって切られており、これより古い。

壁面の状態　上面は削平されている。

床面　比較的堅固である。

壁溝　なし。

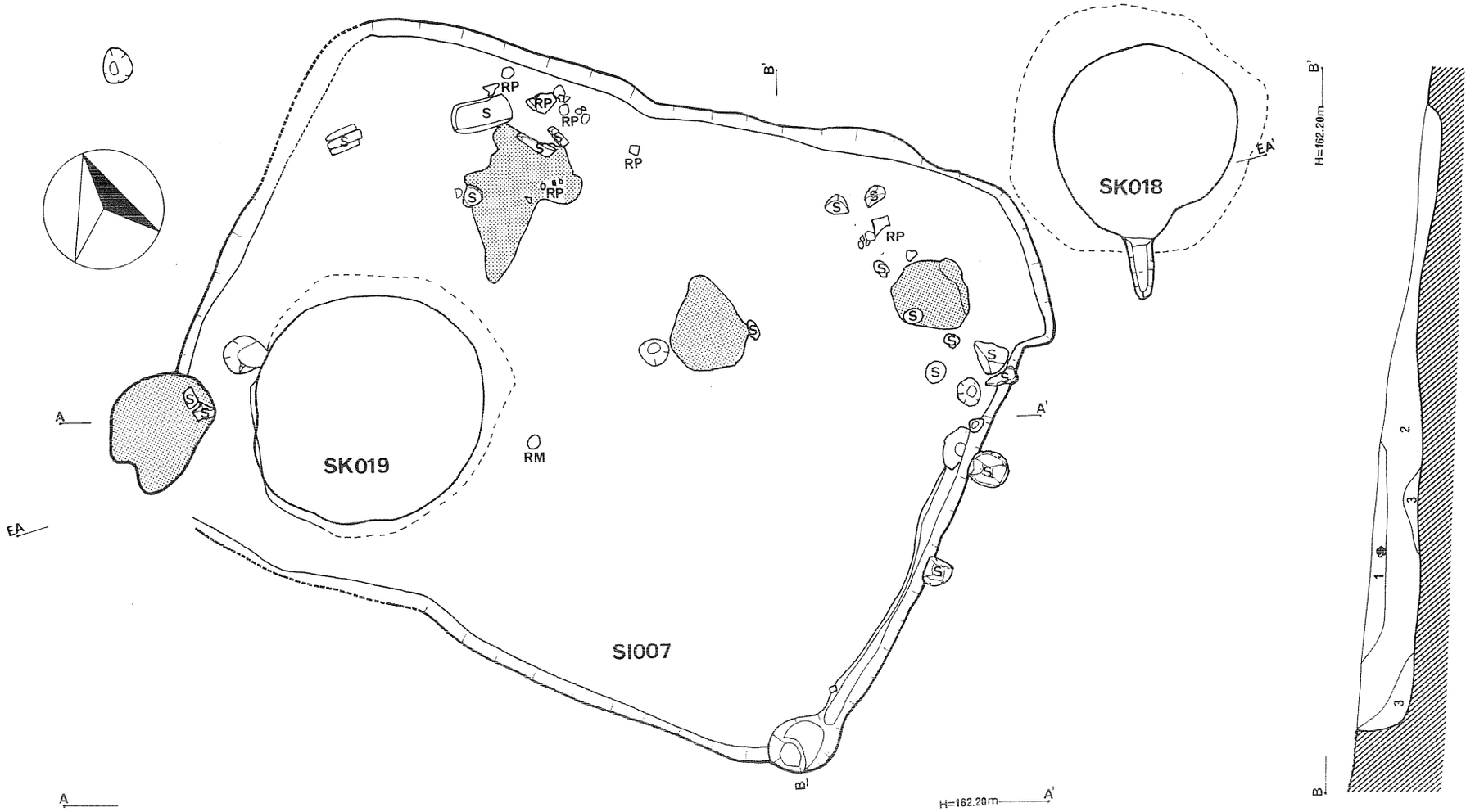
カマド　なし。

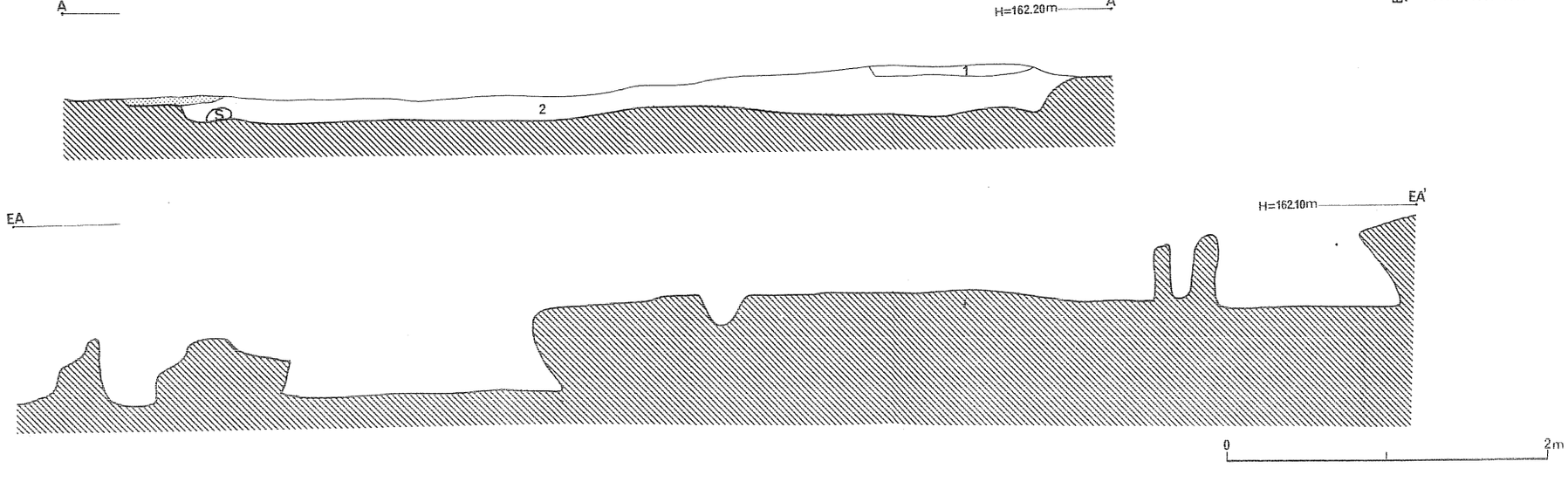
遺物のその出土状態　なし。

SI 007竪穴住居跡

第29表	挿図番号	第43図	図版番号	図版25
遺構名	SI 007	検出地区	7－D、7－E、8－D、8－E	

法		北東側壁	南西側壁	南東側壁	北西側壁
	壁長	440cm	(240)cm	40.9cm	140cm
	壁高	41.1～43.4cm	6.7～7.9cm	18.7～24.5cm	24.3～33.9cm





第43図　SI007竪穴住居跡

量	壁溝幅	——	——	10～20cm	——
	壁溝深	——	——	?	——
形態	方形	面積	(19.5m²)	主軸方向	
かまど	位置	な し		構築素材	

プラン確認　地山上面にて方形プランを確認したが、南西部はSI 008竪穴住居跡に切られており、これより古い。またSK019土壙を切っており、これより新しい。

壁面の状態　上面が削平されている。特に北部及び西部は著しい。

覆土

1．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまり中。

2．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり。しまり中。にぶい黄褐色土（10YR5/4）70%混入。

3．褐色土　10YR4/6　粘性ややあり。しまり中。

床面　比較的堅固である。焼土がみられるが炉とは思われない。西隅の焼土はＳＩ 008竪穴住居跡カマドのものである。

壁溝　南東壁にわずかに確認された。

柱穴、ピット　住居跡内東南部にピット1個を確認した。

カマド　なし。

遺物とその出土状態　遺物は土師器、須恵器が出土している。土師器は坏と甕の破片で、坏は内面黒色処理のものと非処理のもの、甕口縁部はくびれのないものとあるものが混在する。須恵器は甕の破片が出土した。

SI 008竪穴住居跡

第30表	挿図番号	第44図	図版番号	図版25・26
遺構名	ＳＩ008	検出地区	7－E、7－F、7－G、8－E、8－F、8－G	

		南東側壁	北西側壁	南西側壁	北東側壁
法量	壁長	595cm	630cm	667cm	(575)cm
	壁高	55.3～63.6cm	38.1～69.6cm	48.2～62.1cm	42.9～85.6cm
	壁溝幅	10～40cm	18～32cm	21～51cm	17～58cm
	壁溝深	24～38cm	3～7.5cm	16.4～35.1cm	4～8.3cm

形態	方形	面積	48.4m²	主軸方向	N47°E
かまど	位置	北東壁中央		構築素材	不明

プラン確認　地山上面にて方形のプラン及びカマドを検出した。ＳＩ007 竪穴住居跡、ＳＫ022 、 023、 024、 025土壙を切っており、これらより新しい。

壁面の状態　検出された住居跡中では遺存状態が比較的良好である。しかし東壁隅及び南西壁は大きく削平を受けている。南西壁以外の壁は堅固で、ほぼ垂直に立ち上がる。

覆土

1．暗褐色土　　10ＹＲ3/3粘性なし。しまり中。
2．褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。にぶい黄褐色（10ＹＲ7/4）粒子混入。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。
3．にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性なし。しまりなし。
4．明黄褐色土　　10ＹＲ6/6　粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粒子、にぶい黄橙色（10ＹＲ7/4）粒子混入。
5．黒褐色土　　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子少量混入。
6．暗褐色土　　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまりなし。
7．褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粒子混入。
8．暗褐色土　　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまりなし。赤褐色（５ＹＲ4/8）焼土粒子混入。
9．暗褐色土　　10ＹＲ3/3　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子多量混入。
10．暗褐色土　　10ＹＲ3/3　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。

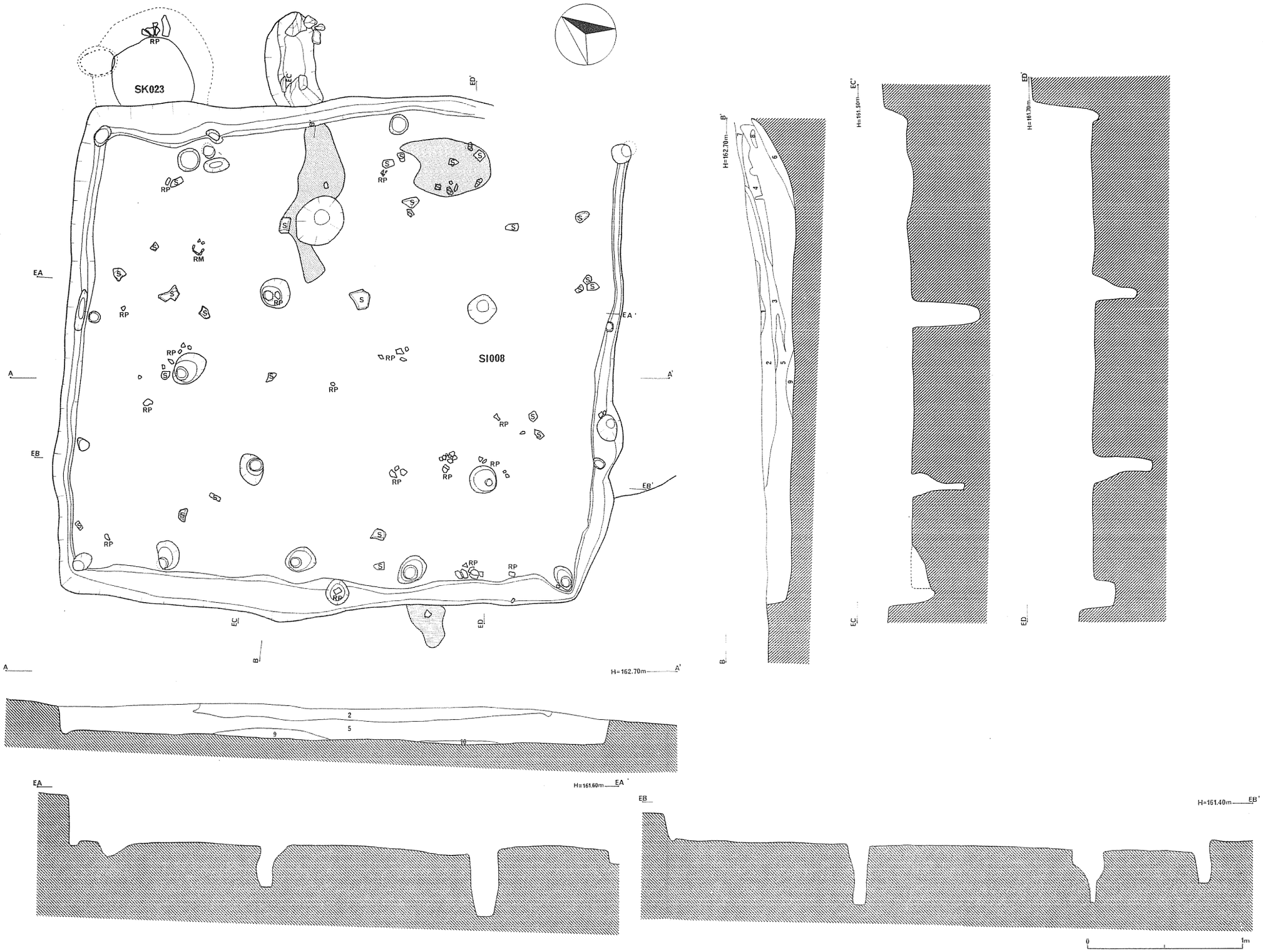
床面　床面は若干の凹凸があるものの、堅固である。また貼床である。

壁溝　住居跡内をほぼ全周している。

柱穴、ピット　壁溝にそって各壁３個ずつカマドのある壁のみ４個及び住居跡対角線上に４個の柱穴を配していたと思われる。さらに南西壁には壁溝際に３個のピットが確認された。

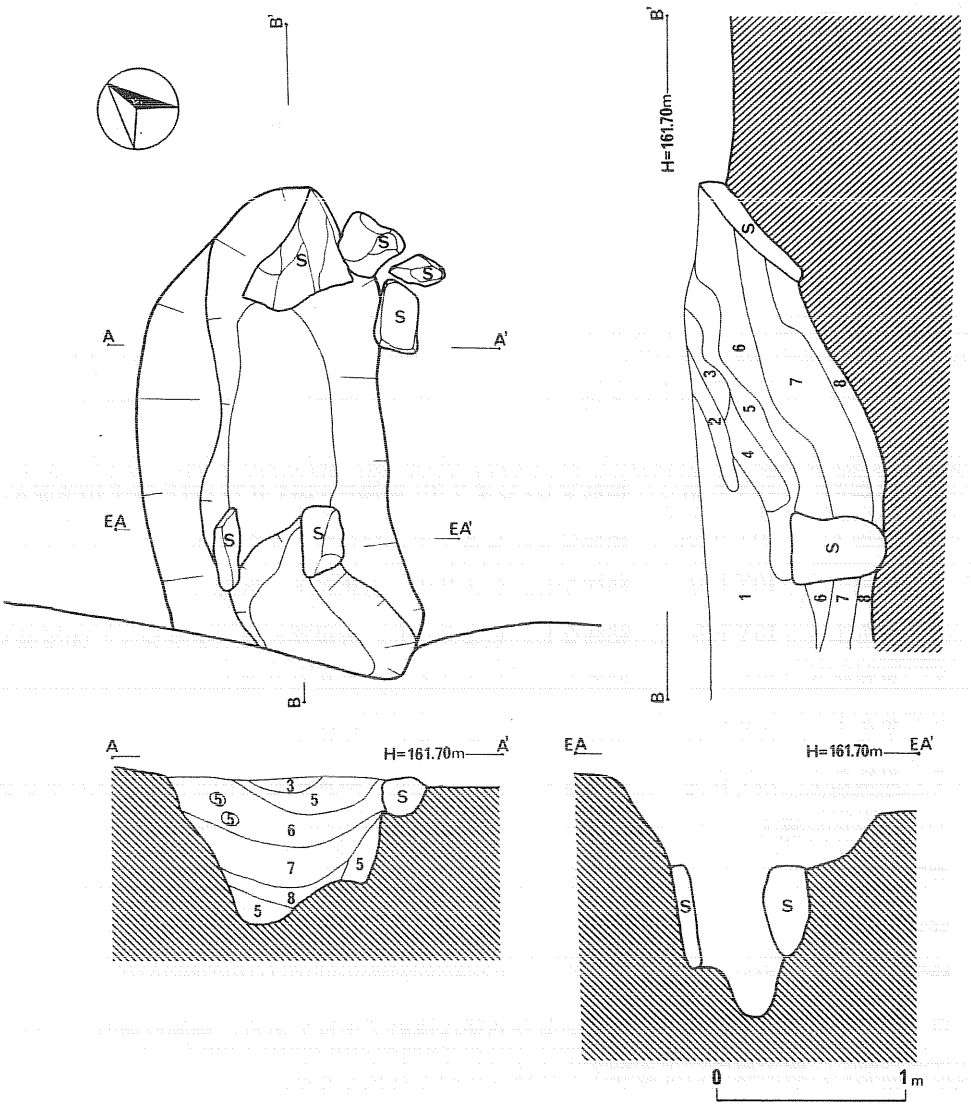
カマド　住居跡北東壁ほぼ中央から検出された。上面が削平されており、また袖部はほとんど確認できなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりよし。
2．にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3　粘性ややあり。しまり中。
3．暗褐色土　　10ＹＲ3/3
4．黒褐色土　　7.5ＹＲ2/2　粘性なし。しまりなし。
5．明褐色土　　7.5ＹＲ5/8　粘性なし。しまりよし。粒子さらさらしている。
6．褐色土　　7.5ＹＲ4/4　粘性なし。しまりなし。
7．黒褐色土　　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまりなし。
8．暗褐色土　　7.5ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまりよし。



第44図　SI008竪穴住居跡

遺物とその出土状態　遺物の出土量は妻の神Ⅰ遺跡検出竪穴住居跡中多い方である。しかし、復元できたものはわずか１点で、残りは小破片であった。第48図６は把手付土器の把手部分と思われるが、中空となっていない。その他の遺物は土師器の小破片である。土師器は壙と甕の破片が出土しているが、坏はわずか２点だけで、内面黒色処理が施されている。その他は土師器甕の破片が 100点以上で、その口縁部はほとんどのものがくびれのないものである。



第45図　SI008竪穴住居跡カマド

ＳＩ 009竪穴住居跡

第31表	挿図番号	第46図	図版番号	
遺構名	ＳＩ009	検出地区	7－G、7－H、8－G、8－H	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	(405) cm	——	——	(562) cm
	壁高	11.2～42.2cm	——	——	16.8～38.1cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(21.7㎡)	主軸方向	N 68° W
かまど	位置	東壁		構築素材	不明

プラン確認　II郭南西端部に方形の落ち込みと２基のカマドを検出。２棟の重復であることが確認されたのでこれをＳＩ009、009′竪穴住居跡とした。ＳＩ 009竪穴住居跡はＳＩ009′竪穴住居跡に切られており、これより古い。

壁面の状態　全長が検出される壁はなかった。また上面は削平を受けている。

覆土

1．黒色土　10ＹＲ 2/1　粘性なし。しまり中。黄褐色（10ＹＲ 5/8）白色粒子10%混入。
2．黒色土　10ＹＲ 1.7/1　粘性なし。しまり中。白色粒子５%混入。
3．黒色土　10ＹＲ 1.7/1　粘性なし。しまり中。白色粒子１%混入。
4．黒色土　10ＹＲ 2/1　粘性なし。しまりなし。大湯浮石層（アッシュ）50%混入。
5．黒褐色土　10ＹＲ 3/2　粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。
6．黒色土　10ＹＲ 2/1　粘性なし。しまりなし。植物根潟入。
7．黒褐色土　10ＹＲ 3/2　粘性なし。しまりなし。明黄褐色（10ＹＲ 7/6）ブロック状粒子混入。

床面　床面は若干の凹凸があり、堅固でない。炭化材が床面直上から検出された。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

カマド　東側北寄りに検出されたが遺存状態は極めて不良である。袖部は崩落していて不明、焼道部は短い。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒色土　10ＹＲ 2/1　しまりよし。白色、紫色粒子１%混入。表土。
2．暗褐色土　10ＹＲ 3/3　しまりよし。１層と５層の中間層。表土。
3．明褐色土　7.5ＹＲ 5/6　粘性あり。しまりよし。４と５の中間層。

第46図　SI009, 009′竪穴住居跡

4．赤褐色土　5YR4/6　しまり中。焼土。

5．明黄褐色土　10YR 6/6　粘性あり。しまりよし。

6．黒褐色土　10YR2/2

7．明赤褐色土　5YR5/8　しまりよし。焼土。

8．橙色土　7.5YR6/8　焼土。

9．褐色土　10YR4/4　しまりなし。焼土をブロック状に混入。

遺物とその出土状態　遺物出土量は極めて多いが、復元できるものは少ない。第48図7は土師器の甕で、カマドの掘り込み部分から出土したものであり、熱を受け変質している。外面はヘラケズリ、内面はハケ目の調整痕がみられる。その他遺物はすべて土師器の破片で、坏の多いことがこの住居跡の特徴である。坏は内面黒色処理と非処理のものが半々の割合で出土し、底部は回転糸切りである。甕は口縁部にくびれのほとんどないものが多く出土する。また砂底の土器が1点出土している。

SI 009′竪穴住居跡

第32表	挿図番号	第46図	図版番号	図版27
遺構名	SI009	検出地区	8－H、9－H	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	(350) cm	——	——	(440) cm
	壁高	35.7～40.4cm	——	——	56～71.3cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——

形態	方形	面積	(12.5m²)	主軸方向	N51° W
かまど	位置	なし		構築素材	芯部石組

プラン確認　II郭南西端に方形の2棟重複した竪穴住居跡プランを確認、新しい方をSI 009′竪穴住居跡とした。

壁面の状態　上面は削平されている。また堀跡によって切られているため、全長が確認された壁もない。

覆土　SI 009竪穴住居跡覆土の項参照のこと。

床面　若干の凹凸があり、堅固でない。南西側は堀跡に切られている。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

カマド　南東壁北寄りに確認されたカマドはＳＩ009 竪穴住居跡を切って構築されている。上面は削平され、遺存状態は極めて悪い。袖部も原型をとどめなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．褐色土　10ＹＲ4/4　しまりよし。焼土混入。
2．暗赤褐色土　5ＹＲ3/4　しまりなし。焼土。Ⅲ層と混入。
3．黒色土　10ＹＲ2/1　黒色、白色粒子混入。
4．褐色土　7.5ＹＲ4/4　粘土。
5．黒褐色土　10ＹＲ1.7/1　炭化物、黄褐色粒子混入。
6．暗赤褐色　5ＹＲ3/4　焼土。
7．赤褐色土　5ＹＲ4/6　しまりなし。焼土。
8．明黄褐色土　10ＹＲ6/6　しまりよし。黄褐色粒子混入。焼土。
9．黒色土　10ＹＲ1.7/1　しまりよし。炭化物混入。
10．黒褐色土　10ＹＲ2/2　しまりなし。黄褐色粒子、浮石粒混入。

遺物とその出土状態　第48図８、９に示す土器が出土した。８は把手付土師器で、ＳＩ009' 竪穴住居跡の煙道部の焼土付近から出土した。全体的に熱変成を受けており、特に把手の根元部分が著しい。９は土師器の甕でヘラケズリによる調整が行われている。この他の遺物は土師器の甕の破片が数点出土しただけである。

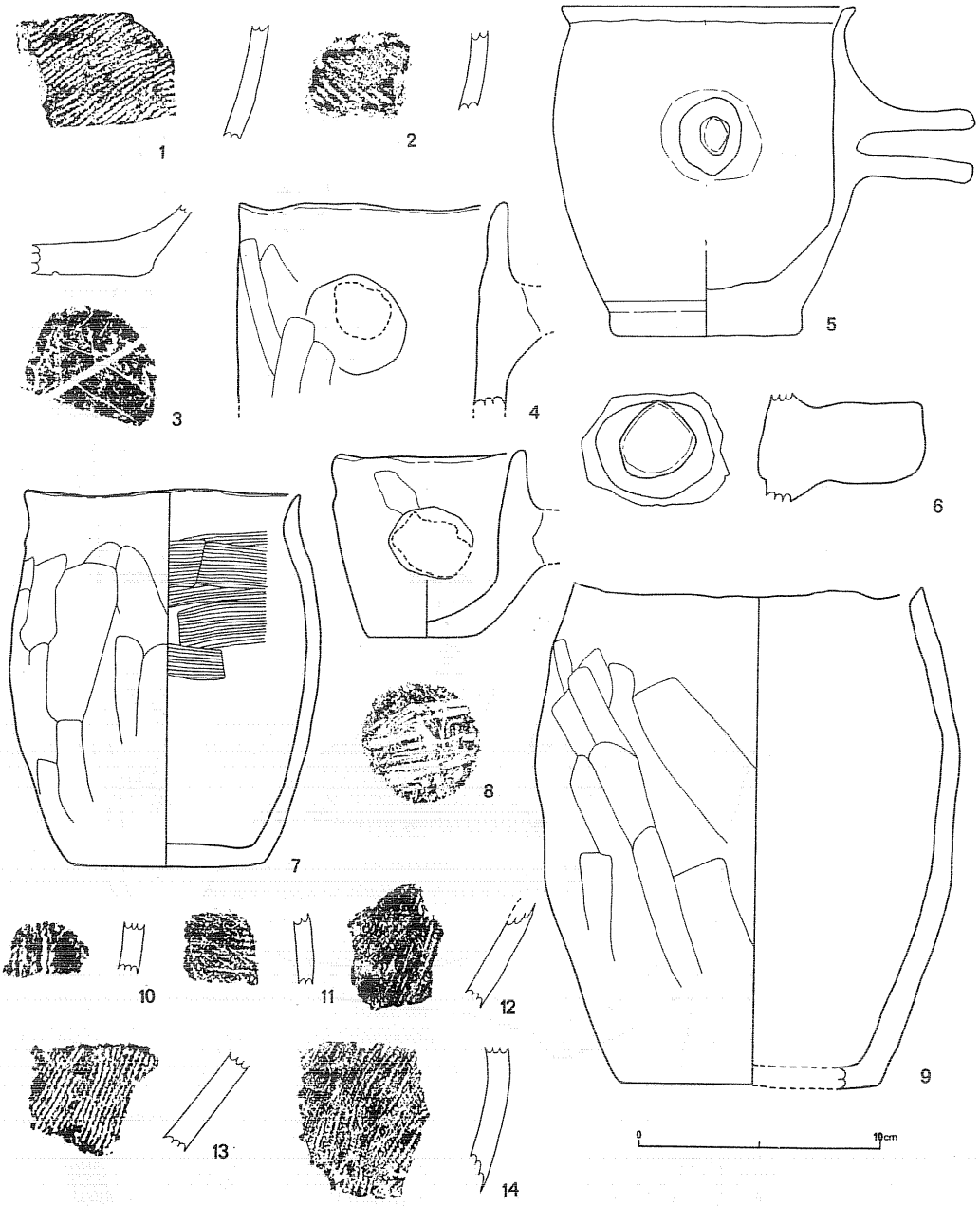
ＳＩ 020竪穴住居跡

第33表	挿図番号	第47図		図版番号	図版28
遺構名	ＳＩ020	検出地区	６－Ｆ、７－Ｆ、７－Ｇ		
法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	(320) cm	(371) cm	——	(457) cm
	壁高	43.5～47.5cm	45.2～48.1cm	——	42～48.4cm
	壁溝幅	——	——	——	——
	壁溝深	——	——	——	——
形態	方形	面積	(18.8㎡)	主軸方向	
かまど	位置	東部に地床炉		構築素材	

プラン確認　Ⅱ郭南端部から方辺のプランを検出した。南側は台地縁辺部の崩落によって不明である。ＳＫ026 土壙を切っており、これより新しい。

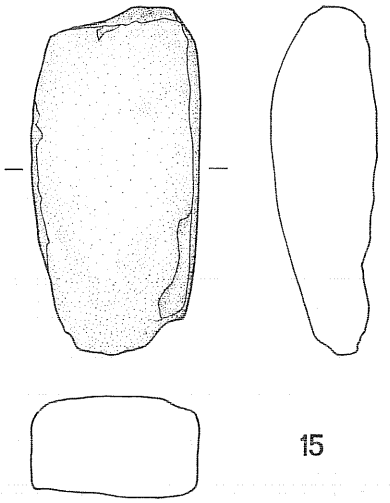
壁面の状態　上面が削平されている。壁面は垂直に近い立ち上がりを呈する。

第47図　SI020竪穴住居跡

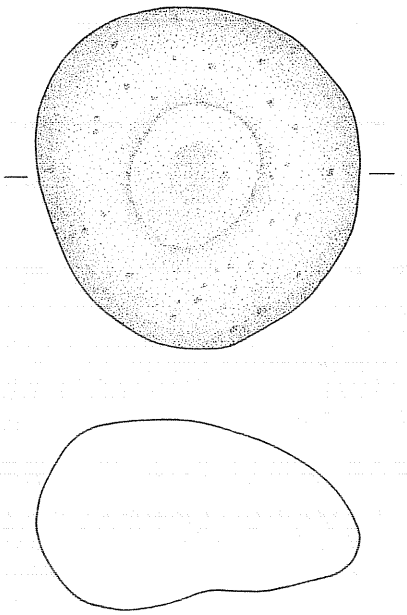


1・2　SI002
3～5　SI003
6　SI008
7　SI009
8・9　SI009'
10～14　SI020

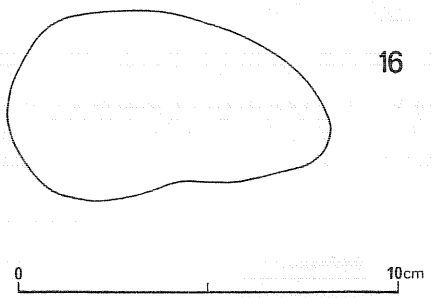
第48図　Ⅱ郭竪穴住居跡出土遺物(1)

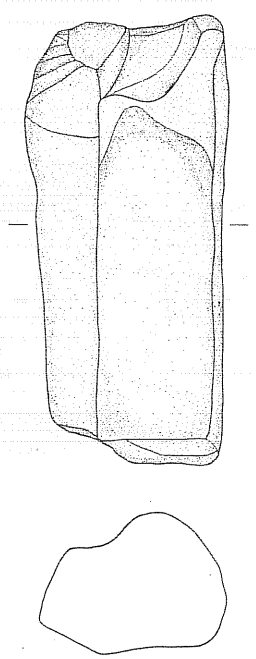


15

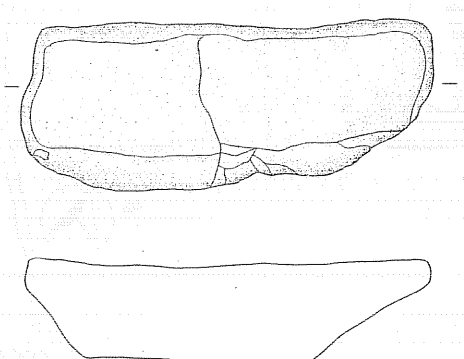


16





17



18

15～18 SI009

第49図　II郭竪穴住居跡出土遺物(2)

覆土

1．黒褐色土　10Y R$^{2}/_{2}$　　粘性ややあり、しまり中。明黄褐色粒子、植物根混入。

2．黒褐色土　7.5Y R$^{2}/_{2}$　　粘性ややあり。しまり中。

3．黒色土　10Y R$^{2}/_{1}$　　粘性ややあり。しまり中。

4．黒色土　10Y R$^{2}/_{1}$　　粘性ややあり。しまり中。

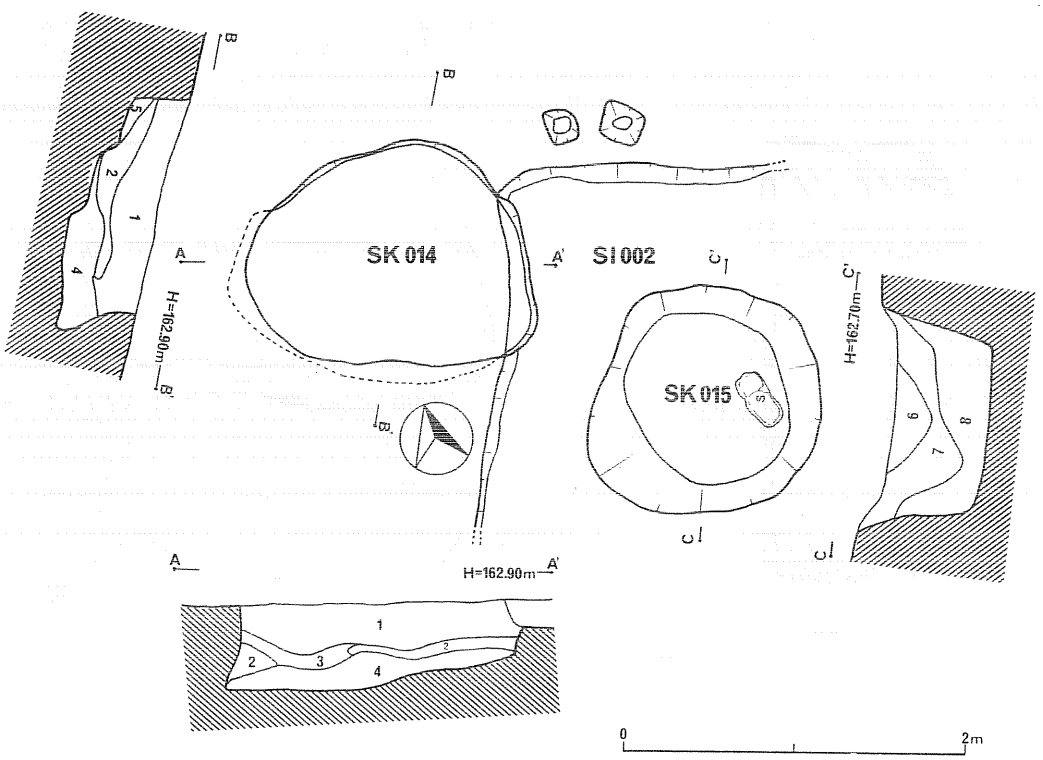
床面　床面は若干の凹凸があり、堅固でない。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　住居跡壁際に1個、他に3個のピットを確認した。明確な柱穴となりうるものはない。

炉　住居跡東部に焼土痕がみられ、ここを地床炉として使用していたものと思われる。

遺物とその出土状態　第48図10～14の縄文土器が出土した。この他の遺物としては土師器の坏と甕の破片が出土している。坏は内面黒色処理のものと非処理のものがある。甕の口縁部はほとんどくびれのないものが出土している。



第50図　SK014,015土壙

（イ）土壙

ＳＫ 014土壙　（第50図　図版29）

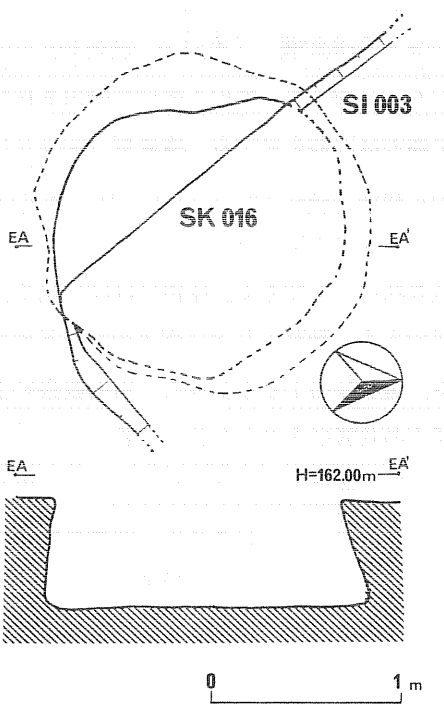
10－Ｃ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部 164 cm×130 cm、壙底部 173cm×140 cm、頸部 154cm×126 cm、深さ51cm、面積 1.9m²である。いわゆるフラスコ状ピットである。ＳＩ 002竪穴住居跡によって切られている。床面は凹凸が多い。主軸方位はＮ72° Ｗである。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性ややあり。しまりよし。黄褐色土中～少量混入。
2．黄褐色土　10ＹＲ5/6　粘性ややあり。しまり中。黒褐色土中量混入。
3．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまり中。黄褐色土やや混入。
4．黒色土　　10ＹＲ2/1　粘性ややあり。しまりよし。黄褐色土少量混入。
5．褐色土　　10ＹＲ4/6　粘性ややあり。しまり中。

ＳＫ 015土壙　（第50図　図版29）

10－Ｃ地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部（ 147）cm ×（ 128）cm、壙底部 106cm×90cm、深さ（54）cm、面積（1 .5）m²である。断面は逆台形を呈する。床面はほぼ平坦で堅固である。埋土内に礫がはいっていた。遺物は土師器甕の破片が数点出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

6．褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。にぶい黄褐色土、黒色土少量混入。
7．にぶい黄橙土　10ＹＲ6/4　粘性ややあり。しまりなし。黄褐色土、黒色土少量混入。
8．にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性ややあり。しまりなし。黒色土少量混入。



第51図　SK016土壙

ＳＫ 016土壙　（第51図　図版30）

８－Ｅ、９－Ｅ地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙底部 177cm×171 cm、頸部（152） cm、深さ（56）cm、面積（ 2.4）㎡である。いわゆるフラスコ状ピットで、ＳＩ 003竪穴住居跡によって切られている。床面はほぼ平坦であるが、あまり堅固でない。頸部より上は削平のため不明である。遺物は出土しなかった。

ＳＫ 017土壙　（第52図）

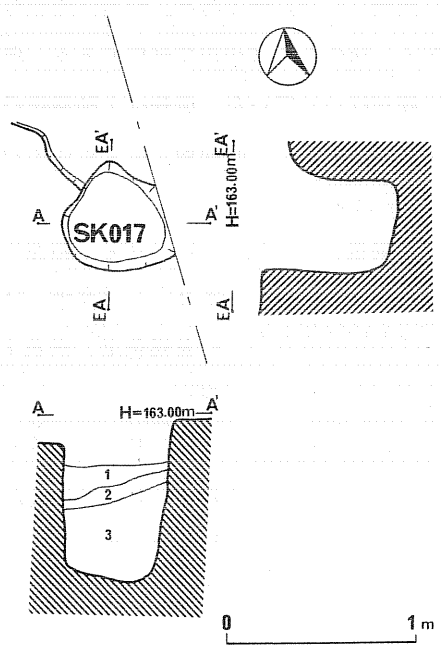
10－Ｃ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部57cm×（53）cm、壙底部47cm×48cm、深さ60cm、面積 0.3㎡である。路線外のため東側の一部は不明である。断面は垂直に近い立ち上がりを呈する。ＳＩ 001竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

１．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/6）粒子混入。
２．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/6）粒子混入。
３．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/6）粒子ブロック状に混入。炭化物混入。

ＳＫ018土壙　（第53図　図版30）

８－Ｄ地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙底部 180cm×174 cm、頸部（126）cm ×（117） cm、深さ（55）cm、面積（2.2 ）㎡である。いわゆるフラスコ状ピットである。床面はほぼ平坦で、堅固である。頸部より上は削平のため不明である。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

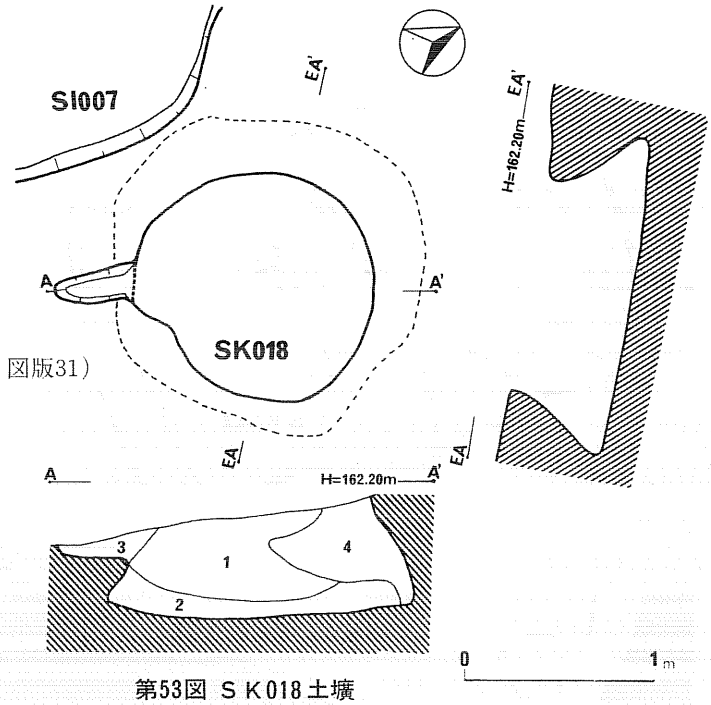
１．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。
２．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。
３．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。



第52図　SK017土壙

しまり中。明黄褐色（10ＹＲ⅝）粒子ブロック状に混入。

4．明黄褐色土　10ＹＲ⅝　地山。



第53図 ＳＫ018土壙

ＳＫ019土壙（第54図　図版31）

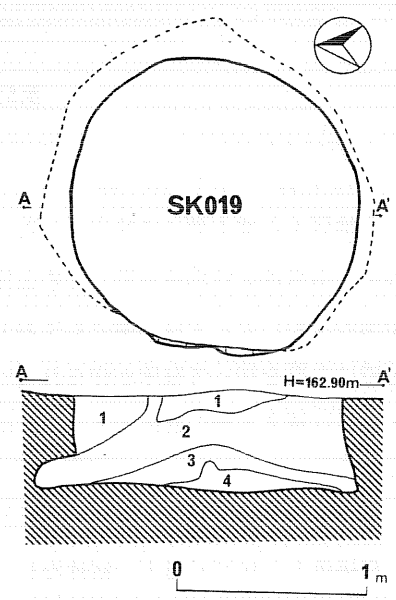
8－Ｅ地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部（164）cm×（150）cm、壙底部 182cm×160cm、頸部 143cm×（141）cm、深さ（53cm）、面積（2.3）㎡である。いわゆるフラスコ状ピットである。床面はほぼ平坦で堅固である。頸部より上はＳＩ 007竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黄褐色土　10ＹＲ⅚　粘性なし。しまりなし。

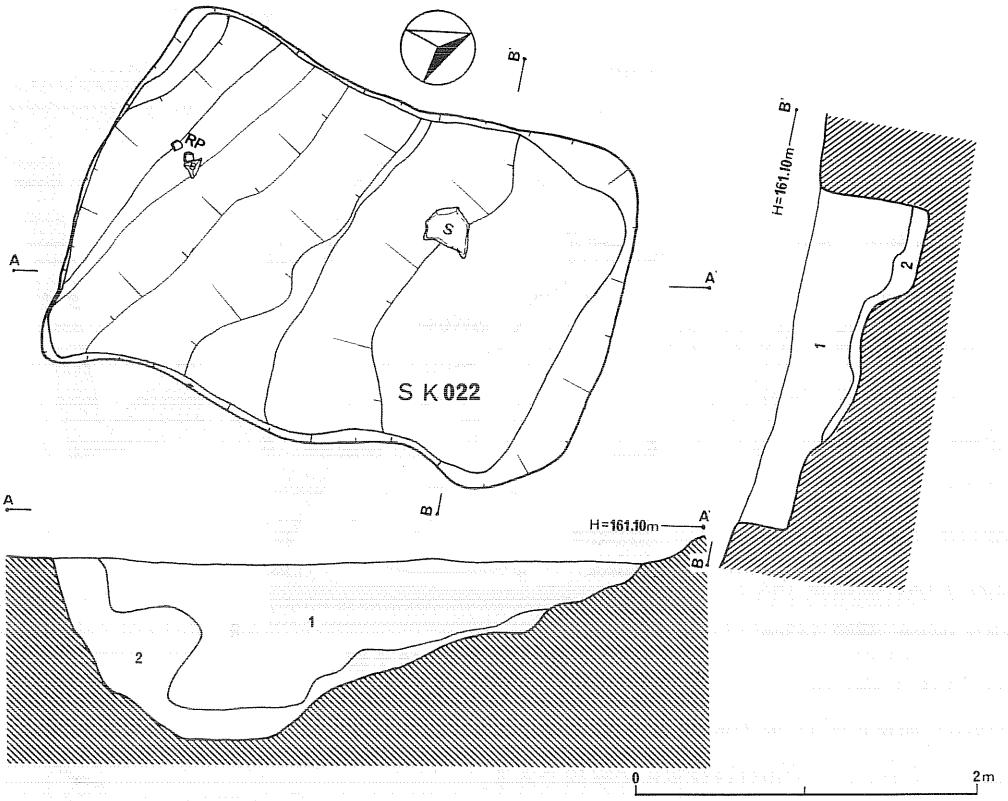
2．黒色土　10ＹＲ²⁄₁　粘性あり。しまりなし。黄褐色（10ＹＲ⅝）白色粒子少量混入。

3．黄褐色土　10ＹＲ⅝　粘性なし。しまりなし。白色粒子混入。

4．黒色土　10ＹＲ¹⁷⁄₁　粘性なし。しまりなし。黄褐色（10ＹＲ⅝）粒子少量混入。



第54図　SK019土壙



第55図　SK022土壙

ＳＫ022土壙　（第55図　図版34）

7－Ｅ地区から地上面にて検出された。壙口部 318㎝×（207）㎝、深さ103 ㎝、面積（6.4 ）㎡である。南東部が台地縁辺部のため全体の形は不明である。溝状遺構の先端部とも考えられるが不明のため、ここでは土壙としておく。ＳＩ008 竪穴住居跡によって切られており、住居跡構築時に土壙を切って貼床が作られている。第60図４～６に示す遺物が遺構底面から出土した。４・５は縄文土器の底部である。６は石匙で、石質は頁岩である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

１．黒色土　10ＹＲ1.7/1　粘性なし。しまり中。

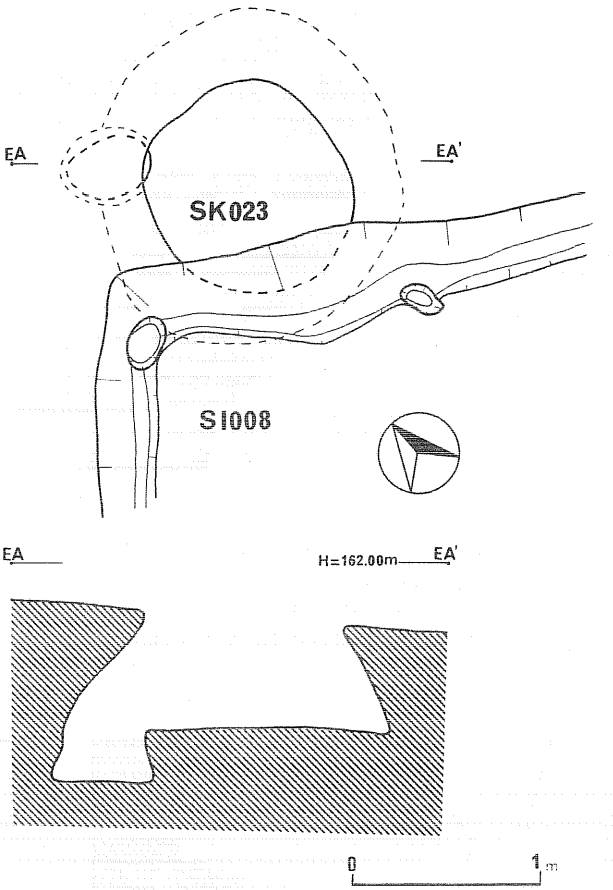
２．黒褐色土　10ＹＲ３/２　粘性なし。しまり中。明褐色土（10ＹＲ６/６）ブロックが小粒状に少量混入。

ＳＫ023土壙　（第56図　図版31）

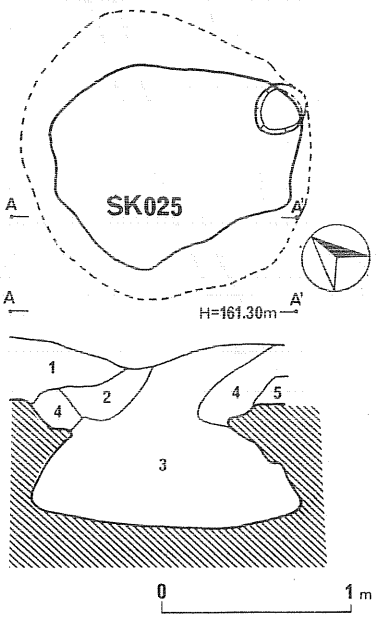
8－Ｆ地区から地山上面に検出された。平面形は（円形）を呈する。壙底部 157㎝×（171）

cm、頸部（110）cm×101 cm、深さ57cm、面積（2.2）㎡である。

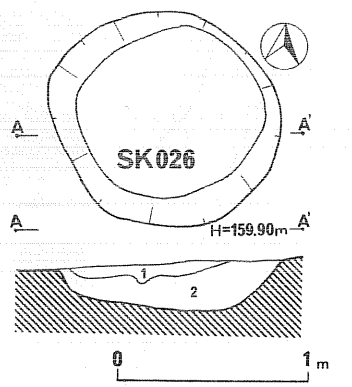
ＳＩ008 竪穴住居跡の北東壁北寄りの壁面に黒褐色土の掘込み及び土器の胴部を検出した。しかし、平面観察では壙口部が確認できなかったため、底面から掘り進めた。底面から３個の土器が出土。第59図１・２、第60図３に示す土器がそれらである。１は台付鉢形土器である。口唇部にＢ突起が４組配され、貼瘤がそれらのうち１対の下に施される。口縁部にはいわゆる羊歯状文が施される。胴部は単節ＬＲ原体を横位回転施文している。２は単節ＲＬ縄文が縦位回転施文されている。



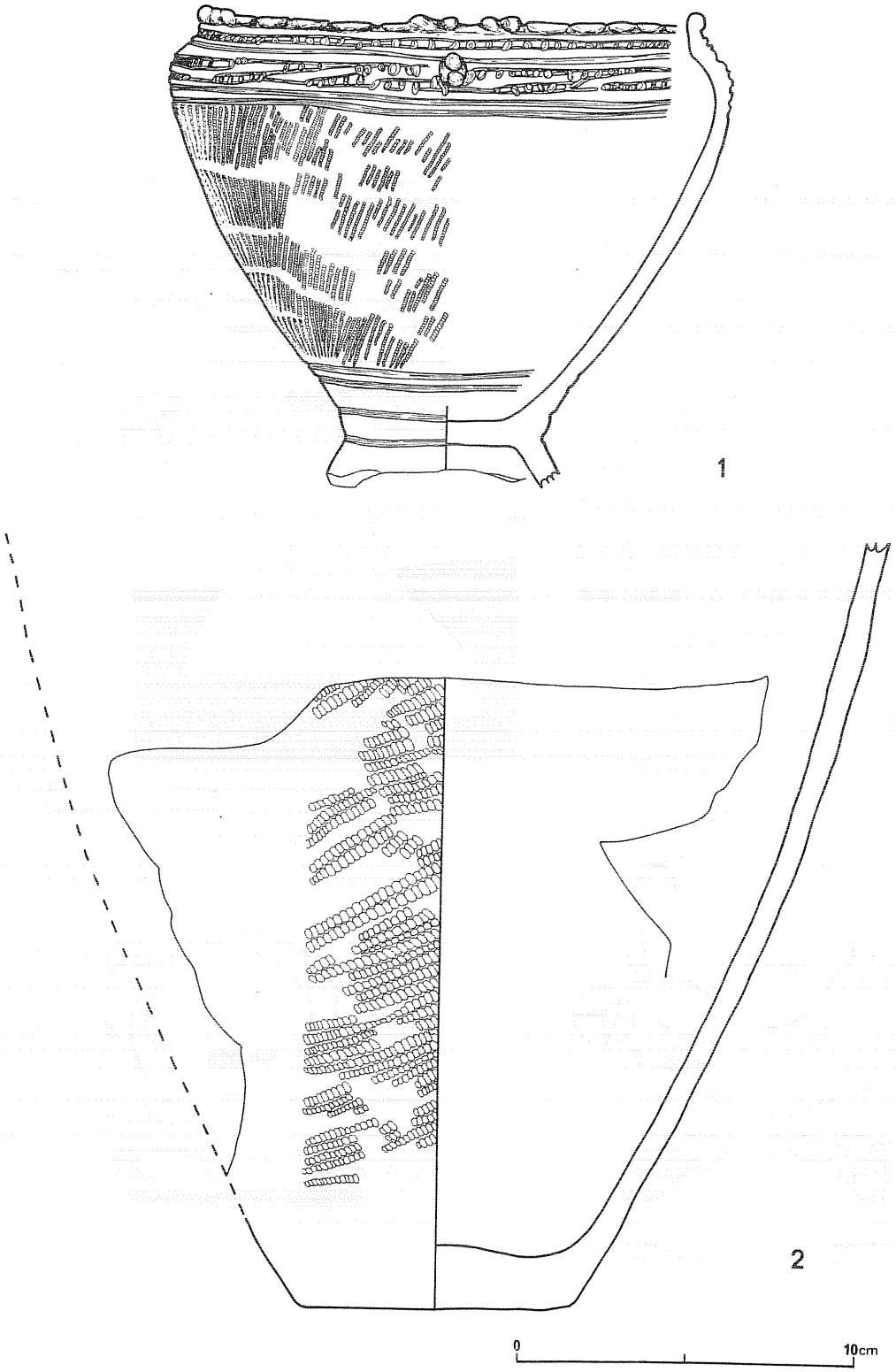
第56図　SK023土壙



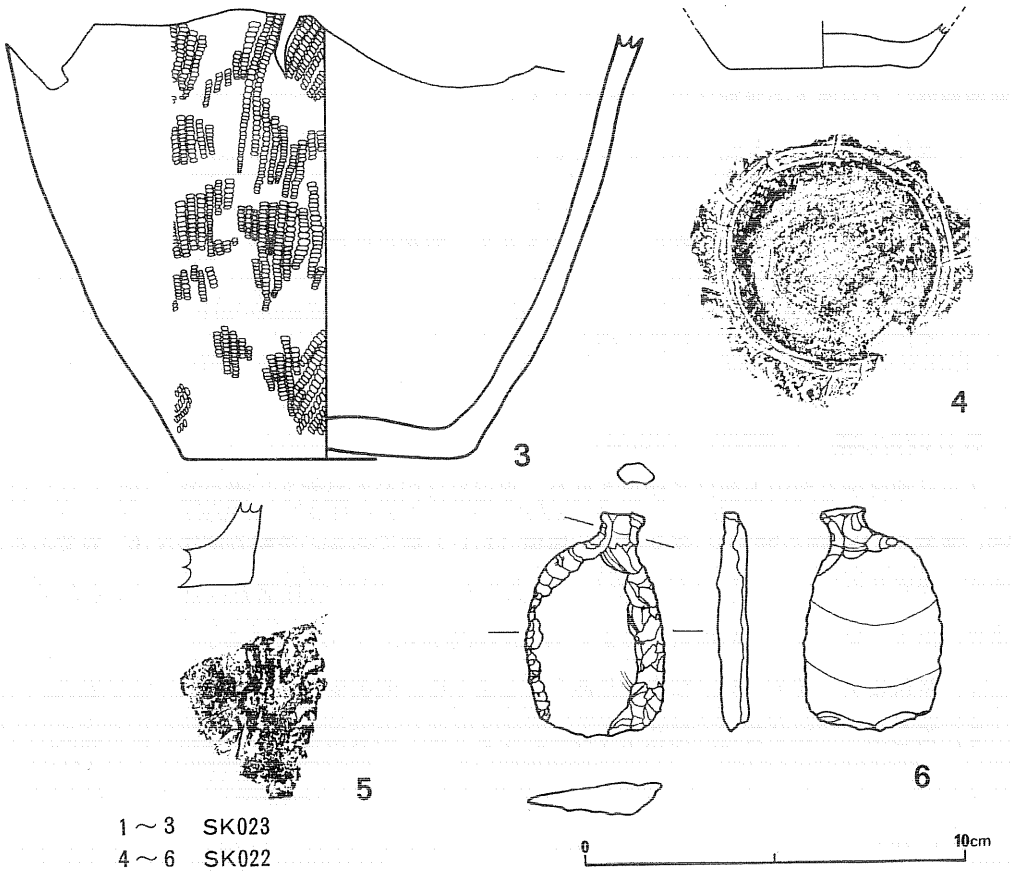
第57図　SK025土壙



第58図　SK026土壙



第59図　Ⅱ郭土壙出土遺物(1)



第60図　II郭土壙出土遺物(2)

3は単節ＬＲ縄文が横位回転施文されている。いずれも縄文時代晩期のものと思われる。

いわゆるフラスコ状ピットで、底面にさらに小ピットが1個確認された。床面はほぼ平坦で堅固である。

ＳＫ024土壙

８－Ｆ地区から地山上面にて検出された。ＳＩ008 竪穴住居跡の北西壁面上にわずかに長楕円形の掘り込みを確認した。フラスコ状ピットの底縁部がわずかに削平されずに残ったものと思われる。したがって法量等はほとんど計測不可能であった。遺物も出土しなかった。

ＳＫ025土壙　（第57図　図版33）

7－F地区から地山上面にて検出された。平面形は楕円形を呈する。壙口部（130 ）cm×（99）cm、壙底部153 × 140cm、頸部83cm×83cm、深さ86cm、面積（1.8 ）㎡である。いわゆるフラスコ状ピットである。床面はほぼ平坦で堅固である。頸部やや上部より上はＳＩ008 竪穴住居跡によって切られている。また底部に小ピット１個が確認された。遺物は出土したかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまり中。
2．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまり中。
3．黒色土　　10ＹＲ2/1　粘性なし。しまり中。明黄褐色粒子混入。
4．褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。黄褐色土（10ＹＲ5/6）多量に混入。
5．黄褐色土　10ＹＲ5/6　粘性ややあり。しまり中。

ＳＫ026土壙　（第58図　図版34）

7－F地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部（125 ）cm×(106)cm、壙底部 100cm×85cm、深さ25cm、面積（1.1 ）㎡である。主軸方位はＮ76° Ｗである。断面は鍋底状を呈し、床面は堅固でない。上面をＳＩ020竪穴住居跡によって切られている。遺物は出土しなかった。断面観察による 埋土の状態は次のとおりである。

1．暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。
2．褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。明黄褐色（10ＹＲ6/8）粒子混入。

ウ．堀跡

妻の神遺跡では４つの堀跡が確認された。一番外側がＳＤ010 とＳＤ011であり、その内側がＳＤ 012、最も内側がＳＤ 013である。新旧関係はＳＤ010 がＳＤ013 に切られている。ＳＤ012 とＳＤ013の間ではほぼ同時に使用されていたと思われる。

ＳＤ010堀跡　（第61図　図版35　36）

Ⅱ郭の内側の縁辺部に、内側のＳＤ013 堀跡に沿って溝状の落ち込みを確認した。内側の壁はＳＤ013 堀跡構築時に削平されている。空堀として使用されていたものと思われるが絶えず若干の水流があったらしくそれによって底部は深くえぐりこまれていた。埋土中から縄文土器、土師器等がまとまりなく出土した。（第65・66図）出土量は堀跡の中では最も多い。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

第61図　SD010堀跡

〈断面A〉

1．黒褐色土	10YR 2/2	粘性ややあり。しまり中。黄褐色少量混入。
2．黒色土	10YR 2/1	粘性なし。しまり中。黄褐色土少量混入。
3．黒色土	10YR 17/1	粘性ややあり。しまり中。
4．黒褐色土	10YR 3/2	粘性なし。しまりなし。軽石多量に混入。
5．褐色土	10YR 4/4	粘性なし。しまりなし。暗褐色土少量混入。
6．にぶい黄褐色土	10YR 5/4	粘性あり。しまりよし。黒褐色土少量混入。
7．にぶい黄褐色土	10YR 4/3	粘性なし。しまりなし。黄褐色土少量混入。
8．黒褐色土	10YR 3/3	粘性ややあり。しまりなし。黄褐色土少量混入。さらさらしている。
9．明黄褐色土	10YR 6/6	粘性ややあり。しまり中。暗褐色土少量混入。
10．にぶい黄橙色土	10YR 6/3	粘性ややあり。しまり中。地山土。
11．黒色土	10YR 2/1	粘性なし。しまりなし。
12．にぶい黄橙色土	10YR 6/4	粘性ややあり。しまり中。黒褐色土少量混入。
13．にぶい黄橙色土	10YR 6/3	粘性ややあり。しまり中。
14．黒色土	10YR 2/1	粘性なし。しまりなし。にぶい黄橙色土少量混入。
15．明黄褐色土	10YR 6/6	粘性なし。しまりなし。黒褐色土少量混入。
16．暗褐色土	10YR 3/4	粘性なし。しまり中。
17．オリーブ褐色土	2.5YR 4/4	粘性なし。しまり中。軽石大粒混入。
18．にぶい黄褐色土	10YR 5/3	粘性なし。しまりなし。軽石極大粒混入。
19．暗オリーブ褐色土	2.5YR 3/3	粘性なし。しまりなし。軽石小粒少量混入。
20．にぶい黄橙色土	10YR 6/4	粘性なし。しまりなし。
21．暗褐色土	10YR 3/3	粘性なし。しまりなし。軽石混入。
22．黒褐色土	10YR 3/1	粘性なし。しまりなし。白色極小粒少量混入。
23．黒褐色土	10YR 2/3	
24．黒褐色土	10YR 3/2	
25．黒褐色土	10YR 3/2.5	
26．黒褐色土	10YR 2/2	
27．暗褐色土	10YR 3/3.5	粘性なし。しまり中。白色粒子少量混入。
28．黒色土	10YR 2/1	粘性ややあり。しなりなし。
29．黒褐色土	10YR 3/1.5	粘性なし。しまりなし。
30．黒褐色土	10YR 2/3.5	粘性ややあり。しまり中。軽石混入。

31. 灰黄褐色土　10YR4/2　粘性あり。しまりなし。黒褐色土（10YR3/3）ごく少量混入。
32. にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘性なし。しまり中。白色粒子少量混入。
33. 黒褐色土　10YR2/2.5　粘性あり。しまりなし。
34. 灰黄褐色土　10YR6/2　粘性なし。しまりよし。白色粒子極小粒混入。
35. にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性なし。しまりなし。火山性軽石混入。下部に粘土混入。

〈断面B〉

1．黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり。しまり中。
2．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色土少量混入。
3．にぶい黄橙色土　10YR6/4　粘性なし。しまりなし。褐色土少量混入。
4．暗褐色土　10YR3/4　粘性なし。しまり中。褐色土少量混入。
5．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性あり。しまり中。黒色土褐色土少量混入。
6．にぶい黄褐色土　10YR5/3　粘性あり。しまりよし。黒褐色土褐色土少量混入。
7．にぶい黄橙色土　10YR6/4　粘性ややあり。しまり中。黒褐色土褐色土少量混入
8．褐色土　10YR4/4　粘性ややあり。しまり中
9．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性あり。しまり中。
10．にぶい黄橙色土　10YR7/4　粘性なし。しまりなし。
11．黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまりなし。褐色土少量混入。
12．暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。軽石中粒少量混入。
13．褐色土　10YR4/6　粘性ややあり。しまり中。黒褐色土少量混入。
14．黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまりなし。褐色土少量混入。
15．にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性ややあり。しまり中。

〈断面C〉

1．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり。しまりなし。
2．暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり。しまり中。
3．黒褐色土　7.5YR2/2　粘性ややあり。しまり中。
4．黒褐色土　10YR2/2　粘性ややあり。しまり中。
5．黒褐色土　10YR3/3　粘性ややあり。しまり中。
6．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまり中。
7．明褐色土　7.5YR5/8　粘性ややあり。しまりなし。
8．黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまりなし。

9．	黒褐色土	10YR$^{17}/_{1}$	粘性ややあり。しまりなし。
10．	にぶい黄褐色土	10YR$^{4}/_{3}$	粘性ややあり。しまり中。
11．	暗褐色土	10YR$^{3}/_{3}$	粘性ややあり。しまりなし。
12．	褐色土	10YR$^{4}/_{4}$	粘性ややあり。しまり中。
13．	黒褐色土	10YR$^{3}/_{2}$	粘性ややあり。しまり中。
14．	黒褐色土	10YR$^{2}/_{2}$	粘性ややあり。しまりなし。
15．	黄褐色土	10YR$^{5}/_{6}$	粘性ややあり。しまりなし。
16．	暗褐色土	10YR$^{3}/_{4}$	粘性ややあり。しまり中。
17．	にぶい黄褐色土	10YR$^{4}/_{3}$	粘性ややあり。しまり中。
18．	暗褐色土	10YR$^{3}/_{4}$	粘性ややあり。しまり中。

ＳＤ011堀跡　（第62図　図版37・38）

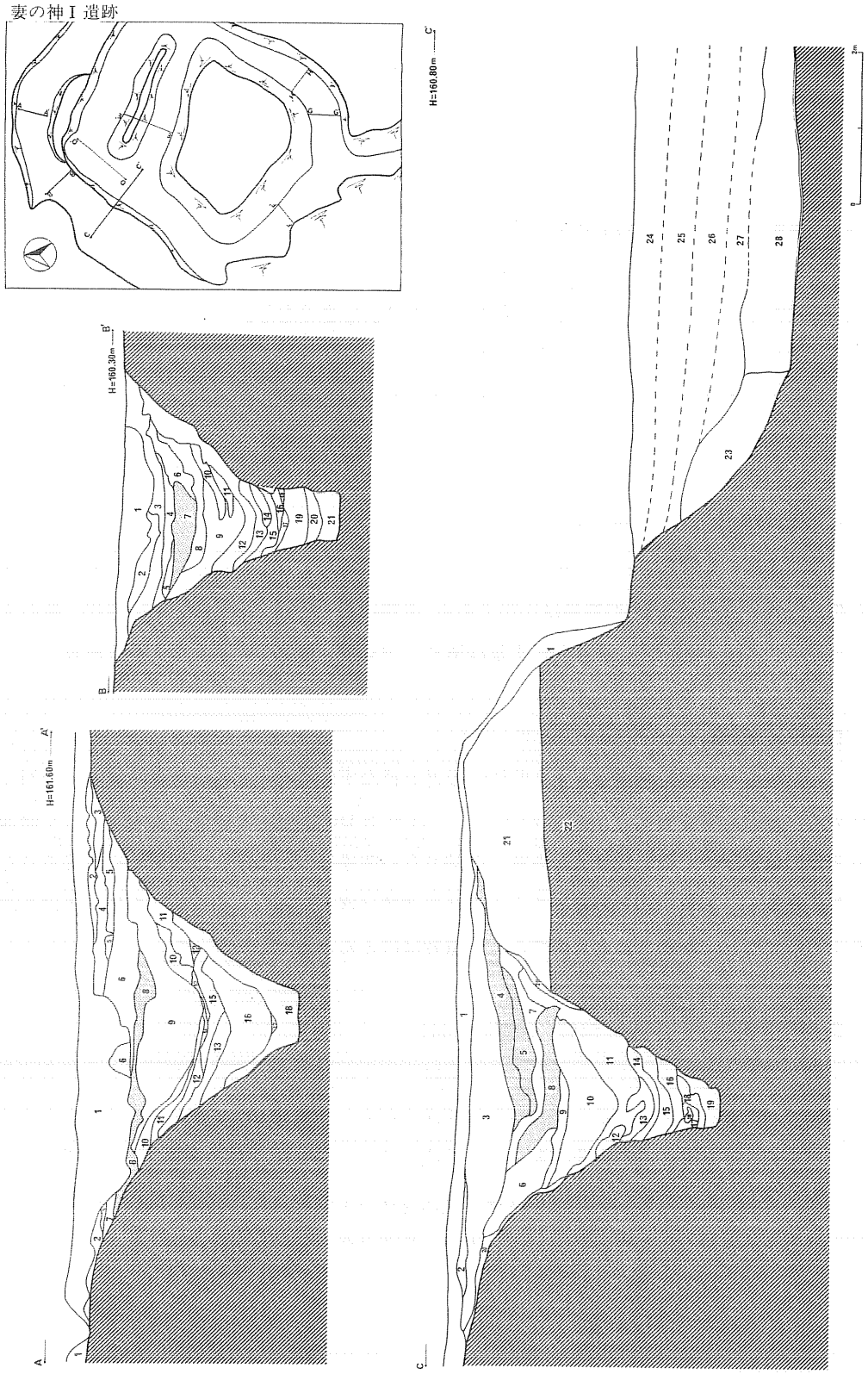
遺跡北端部から検出された。現況では堀は埋もれていた。最も外側を廻る掘である。両端とも調査区外のため総延長・形態等は不明である。遺物は若干の縄文土器片、土師器片、磨石等が出土した（第65・66図）。遺物の出土量は極めて少なく、数点が出土したのみである。

ＳＤ012堀跡　（第63図　図版39・40）

Ｉ郭を廻るＳＤ013 堀跡とあまり時間的差異を持たずに、その北側に土塁状に地山を残し、部分的に二重に堀を構築した部分がある。これをＳＤ012 堀跡とした。湧水が激しく断面図実測は困難を極めたが、ＳＤ013 堀跡との切り合い関係はつかめず、ほぼ同時に構築されたものと思われる。ＳＤ 013との境にある土塁状の遺構は盛土ではなく、まわりを掘り下げて地山を土塁状に残して構築されたものである。遺物はほとんど出土しなかった。

ＳＤ013堀跡　（第63・64図　図版40～44）

Ｉ郭を廻る大きい堀跡である。ＳＤ 012 堀跡とともに発掘前の現況においてもその存在が確認されていた堀跡である。ＳＤ 012堀跡同様湧水があり、空堀として使用されていたものの若干の水の流れがあり、それらを南側の方から流出させていたようだ。遺物は縄文土器片、土師器片が若干出土した。第65図10～16は縄文時代後期の土器である。17は土師器の底部で回転糸切りによる切りはなしが行われている。また、断面下から焼けた木材が出土している。



第62図 堀跡断面図　断面A, B, C

断面　A

	土色			土色説明
1	黒褐色土	10YR3/2	粘性なし。	しまりなし。暗褐色土（10YR3/4）1%混入
2	暗褐色土	10YR3/3	粘性なし。	しまり中。上部に黒褐色土（10YR3/2）帯状に少量混入。
3	黄褐色土	10YR5/6	粘性なし。	しまりなし。
4	褐色土	10YR4/4	粘性なし。	しまりなし。明黄褐色土（10YR7/6）1%混入。
5	黒褐色土	10YR3/2	粘性なし。	しまり中。黄褐色（10YR5/6）粒子少量混入。
6	黒褐色土	10YR3/4	粘性ややあり。	しまり中。にぶい黄褐色（10YR5/4）粒子3%混入。
7	黒色土	10YR2/1	粘性なし。	しまりなし。黄褐色粒子5%混入。
8	黒色土	10YR1/1	粘性あり。	しまり中。火山性軽石2%混入。
9	黒色土	10YR2/2	粘性なし。	しまりなし。黄褐色（10YR5/6）大粒2%混入。
10	黒色土	10YR2/1	粘性ややあり。	しまりなし。明黄褐色（10YR7/6）極小粒5%混入。
11	黒褐色土	10YR2/2	粘性ややあり。	しまり中。
12	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘性ややあり。	しまりなし。明黄褐色（10YR7/6）小粒50%混入。
13	黒褐色土	10YR2/3	粘性なし。	しまり中。
14	褐色土	10YR4/6	粘性なし。	しまりよし。明黄褐色（10YR7/6）を20%混入。
15	黒色土	10YR2/3	粘性なし。	しまりなし。白色粒子混入。
16	黒色土	10YR1/1	粘性ややあり。	しまり中。白色粒子混入。
17	黒色土	10YR2/2	粘性なし。	しまりなし。
18	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘性なし。	しまり中。黄褐色（10YR5/6）中粒5%混入。

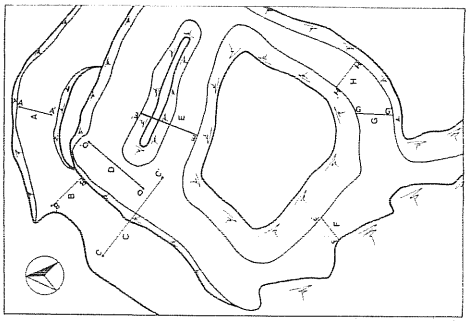
断面　B

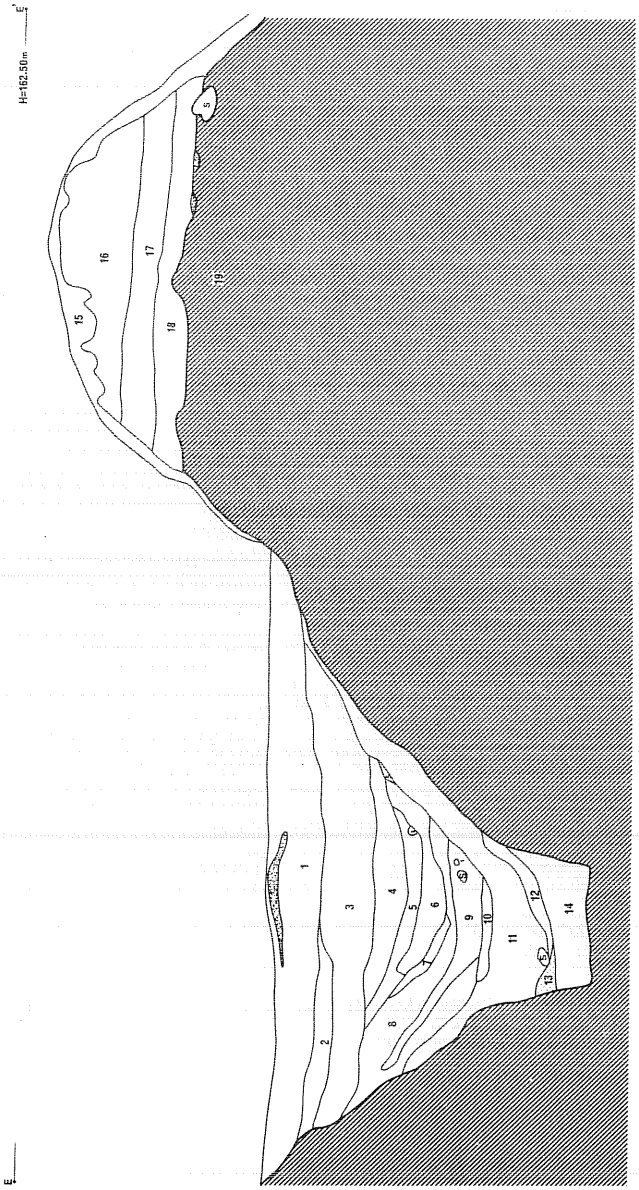
	土色 10			土色説明
1	黒褐色土	10YR3/2	粘性なし。	しまり中。暗褐色土1%混入。
2	暗褐色土	10YR3/3	粘性ややあり。	しまり中。黒褐色土10%混入。
3	黒色土	10YR2/1	粘性ややあり。	しまりよし。
4	褐色土	10YR4/4	粘性ややあり。	しまりよし。
5	黄褐色土	10YR5/6	粘性ややあり。	しまり中。
6	黄褐色土	10YR5/8	粘性ややあり。	しまりよし。
7	褐色土	10YR4/6	粘性ややあり。	しまりよし。軽石2%混入。
8	黒褐色土	10YR2/3	粘性ややあり。	しまり中。
9	黒色土	7.5YR2/1	粘性あり。	しまり中。粒子荒い。
10	暗褐色土	10YR3/4	粘性あり。	しまり中。
11	暗褐色土	10YR3/3	粘性あり。	しまりなし。
12	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘性なし。	しまりよし。目の荒い粒子。
13	にぶい黄褐色土	10YR5/3	粘性ややあり。	しまり中。
14	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘性ややあり。	しまりよし。
15	明黄褐色土	10YR6/6	粘性ややあり。	しまり中。ざらざらした粒子。
16	にぶい黄橙色土	10YR5/4	粘性ややあり。	しまりよし。荒い粒子。
17	明黄褐色土	10YR6/6	粘性あり。	しまりなし。
18	明黄褐色土	10YR6/6	粘性なし。	しまりよし。
19	黄褐色土	10YR5/6	粘性なし。	しまり中。
20	にぶい黄褐色土	10YR5/3	粘性なし。	しまりよし。荒い粒子。
21	浅黄橙色土	10YR8/3	粘性なし。	しまりよし。荒い粒子。

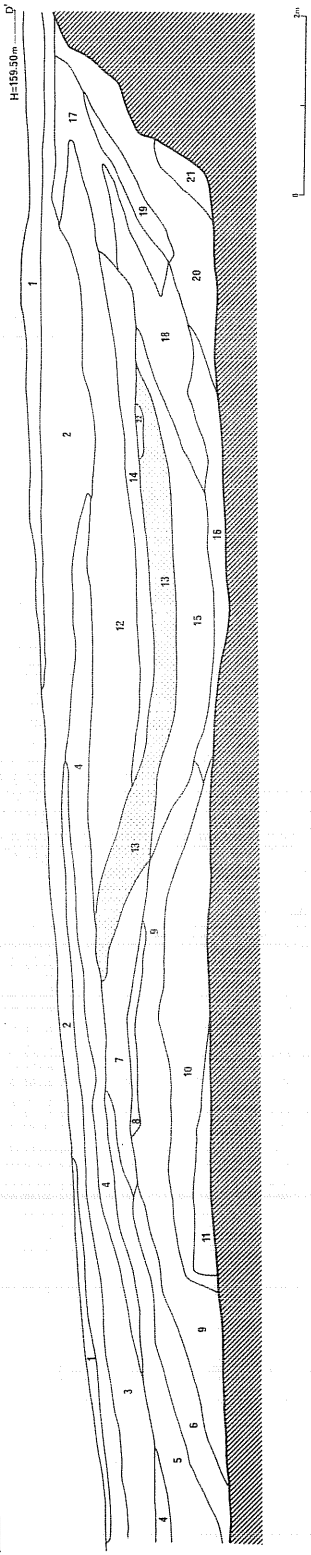
断面　C

	土色			土色説明
1	暗褐色土	10YR3/4	粘性なし。	しまり中。
2	黒褐色土	10YR3/2	粘性なし。	しまりなし。をベースに明黄褐色土（10YR6/6）40%～50%混入。
3	黒褐色土	10YR3/1	粘性なし。	しまり中。
4	褐色土	10YR4/4	粘性ややあり。	しまり中。にぶい黄橙色土（10YR6/4）混入。かる石3%混入。
5	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘性ややあり。	しまり中。かる石3%混入。
6	黒褐色土	10YR3/2	粘性なし。	しまりなし。明黄褐色（10YR6/6）6%混入。
7	黒褐色土	2.5YR3/2	粘性中。	しまり中。黄褐色（10YR5/6）5%混入。
8	黒褐色土	10YR3/2	粘性あり。	しまり中。かる石3%混入。
9	暗褐色土	10YR3/4	粘性あり。	しまりなし。褐色土(10YR4/4)、黒色土(10YR2/1)と黄橙色土(10YR6/6)を10%それぞれ混入。
10	黒色土	10YR2/1	粘性あり。	しまり中。黄褐色土（10YR5/6）粒子5%混入。
11	黄褐色土	10YR5/6	粘性なし。	しまりなし。黒色（10YR2/1）を3%混入。白色粒子も1%混入。
12	黒色土	10YR1/1	粘性あり。	しまりなし。にぶい黄褐色土（10YR5/4）10%混入。
13	黒色土	10YR1/1	粘性あり。	しまりなし。黄褐色土（10YR5/6）5%混入。
14	黄褐色土	10YR5/6	粘性ややあり。	しまりなし。にぶい黄橙色土（10YR6/4）10%混入。
15	にぶい黄褐色土	10YR5/4	粘性あり。	しまりなし。黒色土（10YR2/1）を5%混入。
16	にぶい黄橙色土	10YR6/4	粘性あり。	しまり中。にぶい黄褐色土（10YR5/4）10%混入。
17	にぶい黄橙色土	10YR6/4	粘性あり。	しまり弱。黄褐色土（10YR5/6）5%混入。
18	黒色土	2.5Y2/1	粘性あり。	しまりなし。
19	褐色土	10YR4/6	粘性ややあり。	しまりなし。黄褐色土（10YR5/6）5%混入。
20	明黄褐色土	10YR6/6	粘性ややあり。	しまりなし。
21	にぶい黄橙色土	10YR6/4	粘性なし。	しまりよし。サラサラしている。火山性軽石混入。
22	灰白色土	10YR7/1	粘性なし。	しまりよし。
23	にぶい黄橙色土	10YR6/4		しまりなし。28層の大粒黄褐色小粒混入。
24	褐色土	10YR4/4		しまりなし。淡黄色小粒混入。
25	黒褐色土	10YR3/2		淡黄色小粒混入。
26	黒色土	10YR2/2		
27	黒色土	10YR2/1		淡黄色極小粒混入。
28	淡黄色土	2.5Y8/4		しまりなし。黒褐色土を斑状に混入。砂まじり。

▒▒は浮石混入層。







第63図　堀跡断面図　断面D, E

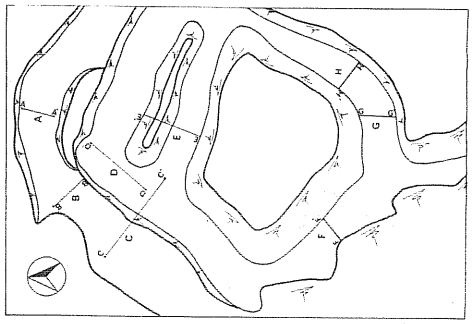
断面　D

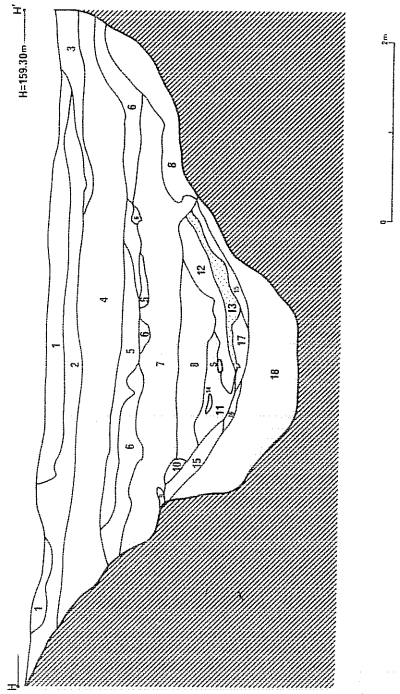
土色		土色説明		
1．黒褐色土	10YR3/2	粘性ややあり。	しまりよし。	軽石5％混入。
2．暗褐色土	10YR3/3	粘性なし。	しまり中。	炭化物小量5㎜程度の軽石3％混入。
3．にぶい黄褐色土	10YR4/3	粘性なし。	しまり中。	軽石小量混入。
4．暗褐色土	10YR3/4	粘性あり。	しまり中。	軽石混入。
5．黒褐色土	10YR3/3	粘性あり。	しまり中。	軽石混入。
6．黒褐色土	10YR3/2	粘性ややあり。	しまり中。	明黄褐色土3％混入。
7．褐色土	10YR4/4	粘性あり。	しまりよし。	黒褐色土，明黄褐色土20％混入。
8．黒色土	10YR2/1	粘性あり。	しまりよし。	軽石小量褐色土小量混入。
9．黒褐色土	10YR3/1	粘性あり。	しまりよし。	さびたような色の土7％混入。
10．黒褐色土	10YR2/2	粘性あり。	しまり中。	暗褐色土（7.5YR3/3）10％混入。
11．にぶい黄褐色土	10YR5/3	粘性あり。	しまり中。	褐色土（7.5YR4/6）40％混入。
12．黒褐色土	10YR3/2	粘性あり。	しまり中。	
13．黒褐色土	10YR2/2	粘性なし。	しまりなし。	黒色土，5％軽石5％混入。
14．褐色土	10YR3/3	粘性ややあり。	しまり中。	黄褐色粒子，1％混入。
15．黒褐色土	10YR3/1	粘性あり。	しまりよし。	黄褐色粒子1％，暗褐色土（7.5YR3/3）小量混入。
16．黒色土	10YR1.7/1	粘性あり。	しまり中。	
17．黒色土	10YR2/1	粘性ややあり。	しまり中。	黄褐色土1％混入。
18．黒褐色土	10YR3/2	粘性なし。	しまりなし。	黄褐色土10％混入。
19．褐色土	10YR3/3	粘性あり。	しまりよし。	褐色土5％混入。
20．にぶい黄褐色土	10YR5/3	粘性ややあり。	しまり中。	黄褐色土40％混入。
21．黒色土	10YR1.7/1	粘性なし。	しまりなし。	黄褐色土20％混入。
22．黒褐色土	10YR3/3	粘性ややあり。	しまり中。	黄褐色土10％混入。

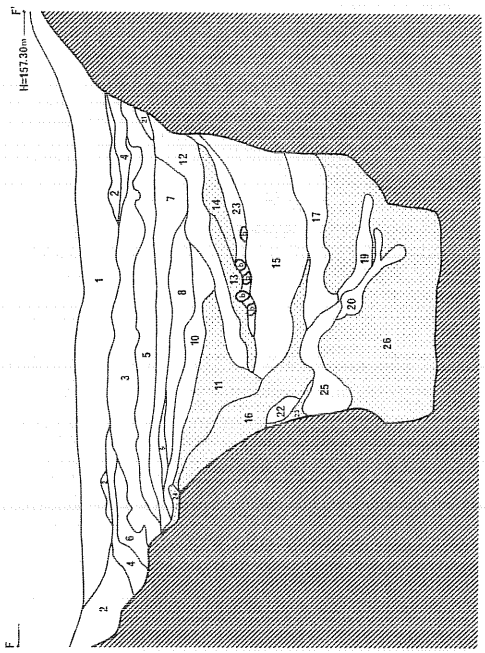
断面　E

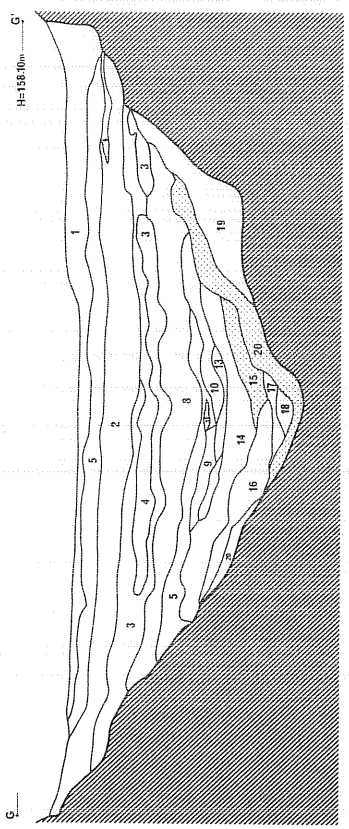
土色		土色説明		
1．暗褐色土	10YR3/4		しまりよし。	ザラザラしている，炭化物混入。
2．黒褐色土	10YR3/2			上部の粒子こまかい。
3．黒褐色土	10YR2/2		しまりよし。	粒子こまかい。
4．黒褐色土	10YR3/2		しまりよし。	
5．黒褐色土	10YR2/3		しまりよし。	粒子は荒い，にぶい黄橙色土（10YR7/4）のブロック混入。
6．褐色土	7.5YR4/6	粘性あり。		
7．にぶい黄橙色土	10YR7/3	粘性あり。	しまりよし。	
8．褐色土	10YR4/4	粘性あり。		粒子が荒い。
9．黒色土	5YR1.7/1	粘性あり。	しまりなし。	
10．褐色土	5YR4/6			
11．灰黄褐色土	10YR5/2	粘性あり。		粒子が荒い。
12．黒褐色土	10YR3/1			粒子が荒くザラザラすている。
13．灰黄褐色土	10YR4/2			浮石混入，粒子が荒くザラザラしている。
14．灰黄褐色土	10YR4/2			明褐色土（7.5YR5/6）混入。
15．黒色土	10YR2/1	粘性なし。	しまりなし。	ザラザラした粒子。
16．明黄褐色土	10YR6/6	粘性ややあり。	しまりよし。	粘土質。
17．にぶい黄橙色土	10YR6/3	粘性ややあり。	しまり中。	
18．にぶい黄橙色土	10YR7/3	粘性なし。	しまり中。	火山性軽石7％混入。
19．にぶい黄橙色土	10YR7/4	粘性なし。	しまりよし。	火山性軽石極大粒10％混入。

▒▒は浮石混入層。









第64図　堀跡断面図　断面F, G, H

断面　F

土色		土色説明		
1．褐色土	10YR¾	粘性なし。	しまり中。	火山性軽石混入。
2．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	褐色土（10YR¾）混入。
3．褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	
4．暗褐色土	10YR¾	粘性なし。	しまり中。	軽石混入。
5．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	黒褐色土（10YR⅜）5％混入。
6．にぶい黄橙色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	
7．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	
8．黒褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	軽石混入。
9．黒褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	極小白色粒子30％混入。
10．暗褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	白色粒子20％及び黄褐色(10YR⅝)極大粒子，黄褐色(10YR⅝)極大粒子2％混入。
11．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	火山性軽石混入。
12．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりよし。	ザラザラした砂粒。
13．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	火山性軽石2％混入。
14．褐色土	10YR¼	粘性なし。	しまりよし。	火山性軽石1％混入。
15．灰黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。		ザラザラした粒子，火山性軽石2％混入。
16．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	火山性軽石混入。
17．にぶい黄色土	2.5Y⅝	粘性なし。		粒状の荒い粒子。
18．灰黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりよし。	砂粒。
19．暗灰黄色土	2.5YR⅝	粘性なし。		
20．黒褐色土	2.5YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	
21．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	ザラザラした砂粒で構成。
22．黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	
23．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性ややあり。	しまり中。	火山性軽石が粒状構造大粒混入。
24．明褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりよし。	火山性軽石混入。
25．暗灰黄色土	2.5YR⅜	粘性なし。	しまりよし。	
26．灰黄色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりよし。	火山性軽石混入。

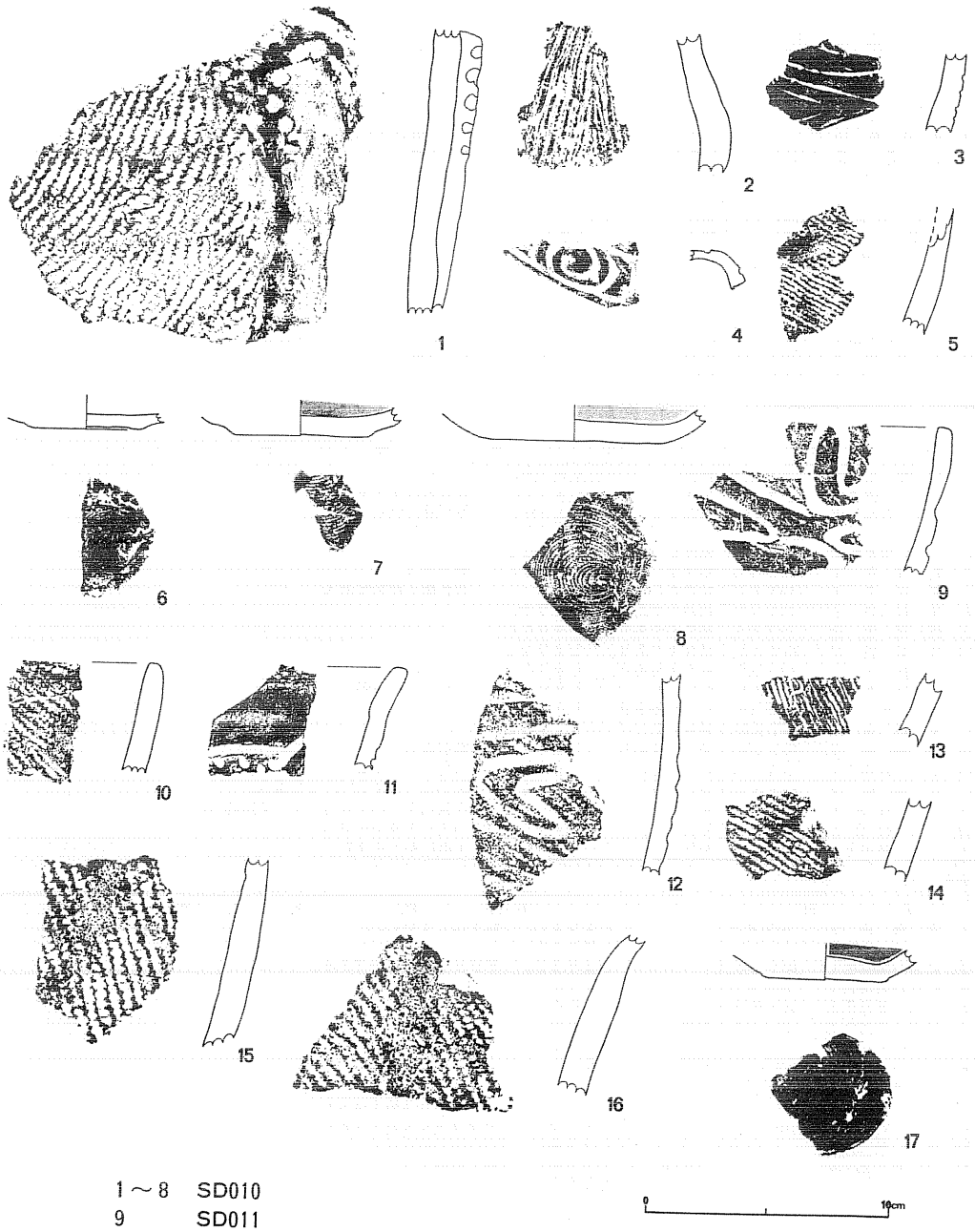
断面　G

土色		土色性名		
1．暗褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	
2．オリーブ褐色土	2.5YR¾	粘性なし。	しまり中。	軽石大粒3％混入。
3．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	軽石極大粒混入。
4．暗オリーブ褐色土	2.5YR⅜	粘性なし。	しまりなし。	軽石小粒5％混入。
5．にぶい黄橙色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりなし。	
6．暗褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまりなし。	軽石混入。
7．黒褐色土	10YR⅜	粘性なし。		白色極小粒30％混入。
8．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	
9．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまりなし。	
10．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまりなし。	
11．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまりなし。	
12．暗褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	白色粒子7％混入。
13．黒色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまりなし。	
14．黒褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまりなし	
15．黒褐色土	10YR⅜	粘性ややあり。	しまり中。	軽石混入。
16．にぶい黄褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	白色粒子3％混入。
17．黒褐色土	10YR⅜	粘性あり。	しまりなし。	黒色土（10YR¼）2％混入。
18．灰黄褐色土	10YR⅜	粘性あり。	しまり中。	黒褐色土（10YR⅜）1～2％混入。
19．灰黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりよし。	白色粒子極小粒混入。
20．にぶい黄褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまりなし。	下部に粘土を含む。

断面　H

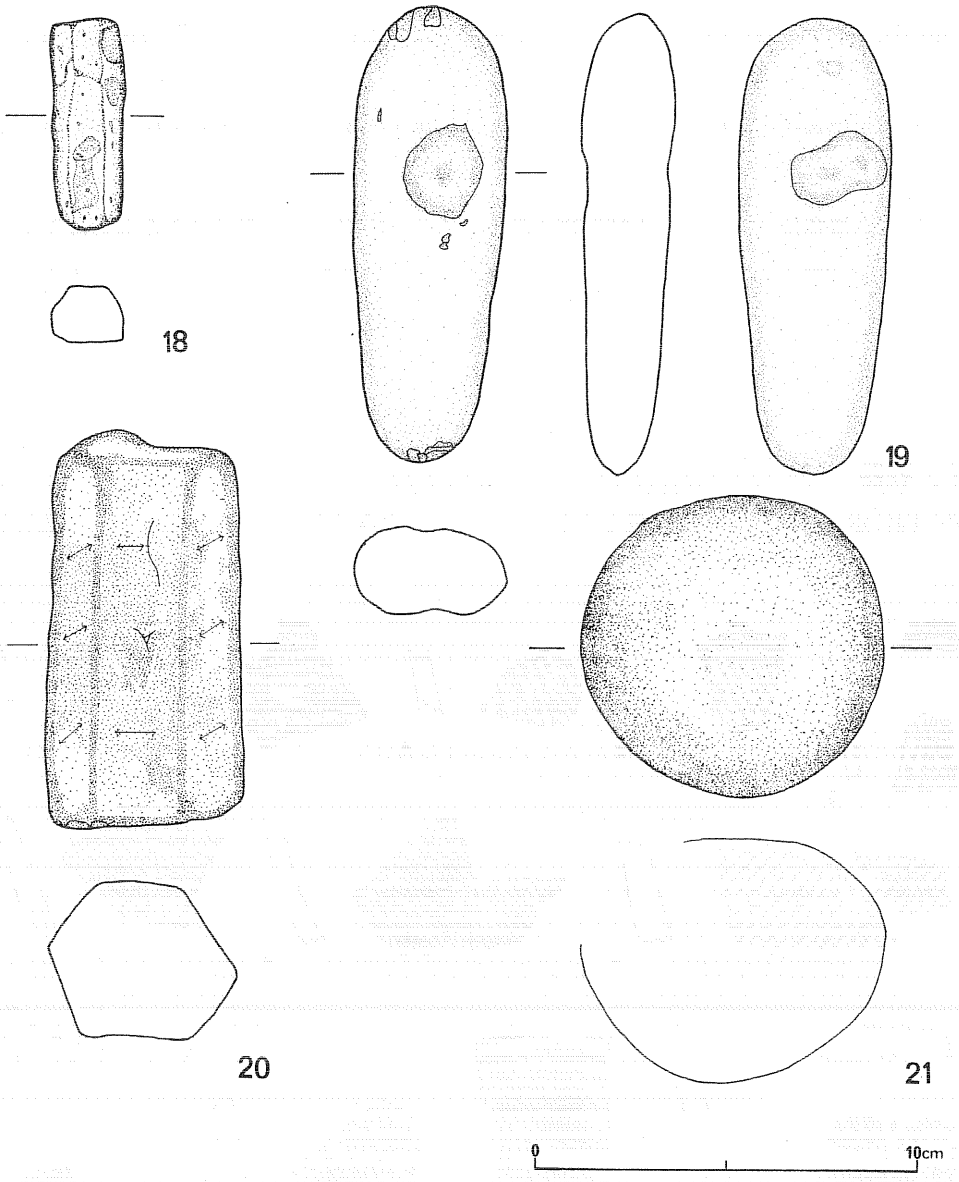
土色		土色説明		
1．黒褐色土	10YR⅜		しまりよし。	粒子はこまかい。
2．黒褐色土	10YR⅜		しまりよし。	
3．にぶい黒褐色土	10YR⅜		しまりよし。	ザラザラした粒子である。
4．にぶい黒褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	
5．にぶい黒褐色土	10YR⅜	粘性なし。	しまり中。	
6．にぶい黒褐色土	10YR⅝	粘性なし。	しまり中。	
7．にぶい黒褐色土	10YR⅜		しまりよし。	粒子はこまかい。
8．にぶい黒褐色土	10YR⅜	粘性あり。	しまり中。	
9．浅黄色土	2.5Y⅞			ザラザラして粒子は荒い。
10．にぶい黄褐色土	10YR⅜			ザラザラして粒子は荒い。
11．褐色土	10YR¾		しまり中。	ザラザラして粒子は荒い。
12．明黄褐色土	2.5Y⅞		しまり中。	
13．浅黄色土	2.5Y⅞	浮石層。	しまり中。	粒子は荒くザラザラしてる。
14．黒褐色土	2.5Y⅜		しまり中。	
15．黒褐色土	2.5Y⅜		しまり中。	
16．浅黄色土	2.5Y⅞			ザラザラして粒子が荒い。
17．黒色土	10YR⅜	粘性あり。	しまり中。	
18．暗灰黄色土	2.5Y⅝	粘性あり。	しまりよし。	

▒▒は浮石混入層。



1～8　SD010
9　SD011
10～17　SD013

第65図　堀跡出土遺物(1)



18～20　SD010
21　　SD011

第66図　堀跡出土遺物(2)

（２）　遺物

ア．土器

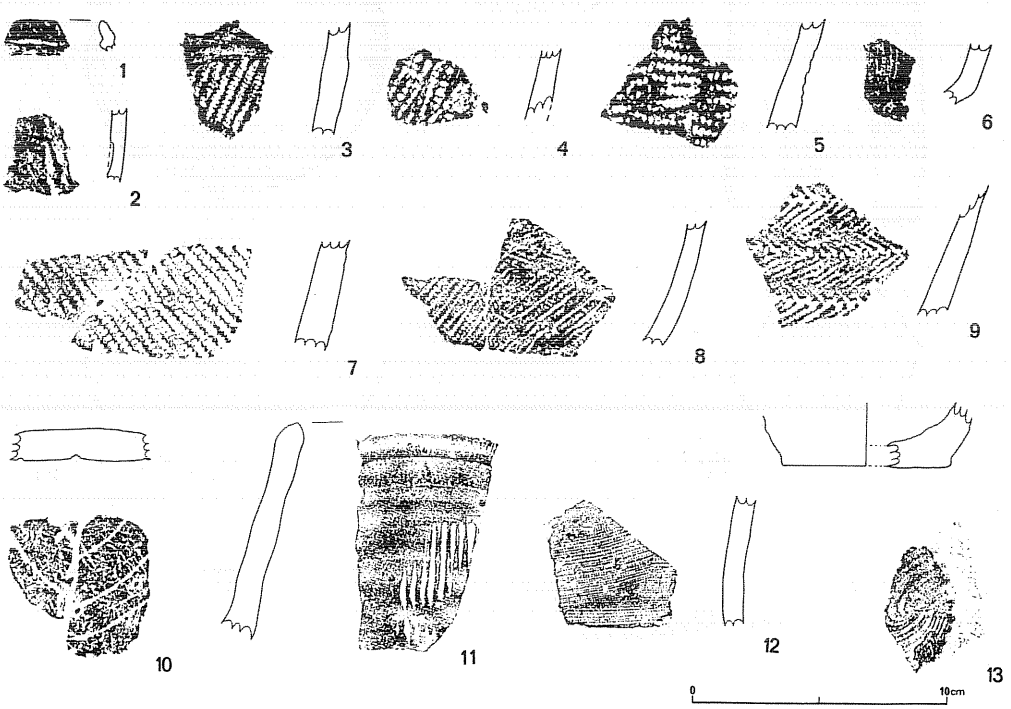
妻の神Ⅰ遺跡から出土した土器は非常に少なく、遺構外出土のものはコンテナ１箱程度である。第67図に示す土器が出土した。１～10は縄文時代の土器で、１～３は磨消縄文の施されたものである。10は木葉痕のある土器底部である。

11～13は平安時代の土器で、11・12は須恵器甕の破片である。13は土師器坏の底部で、回転糸切りである。

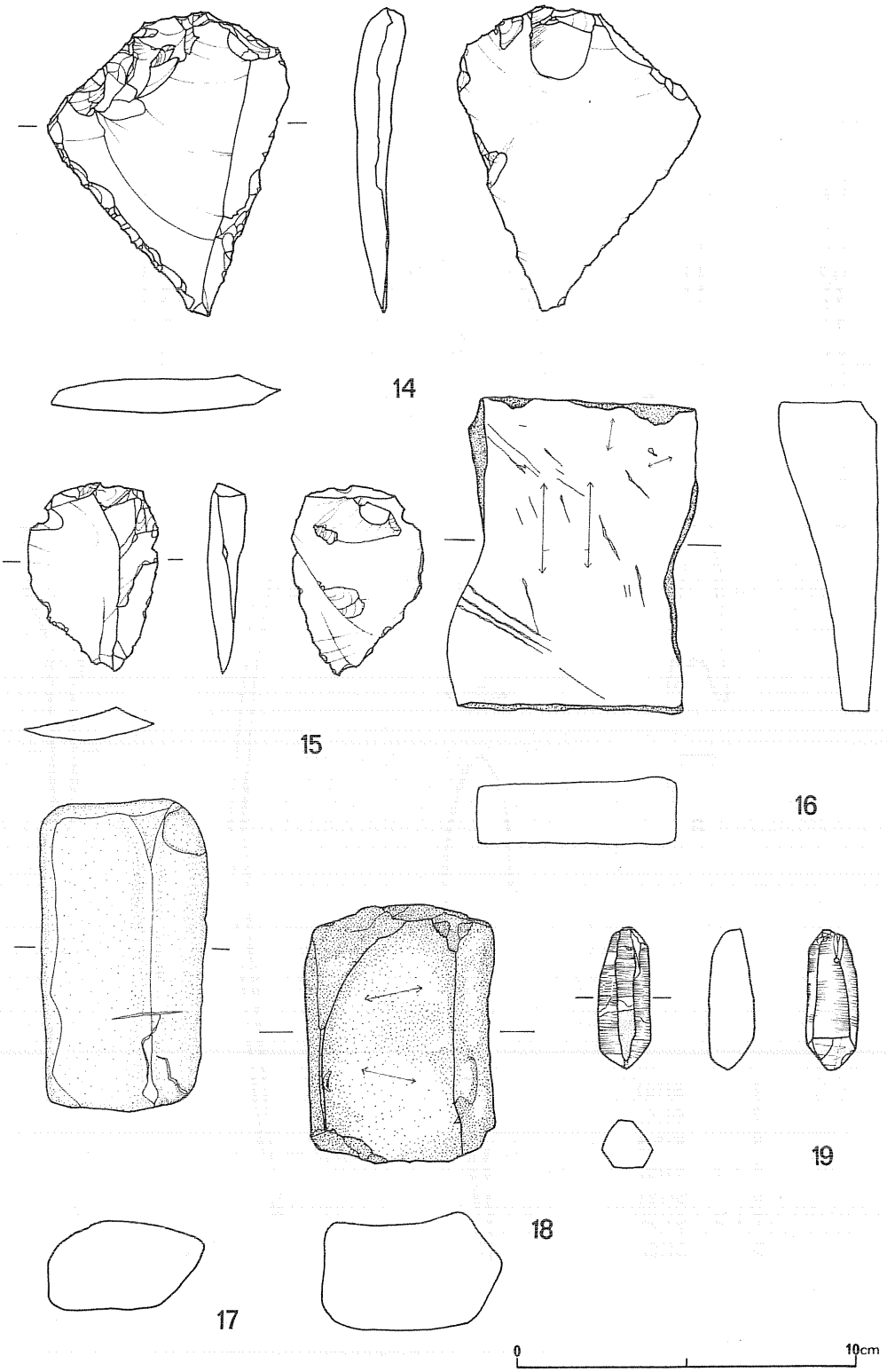
これ以外の遺物はほとんどが土師器甕の破片であり、完形に近く復元できるものはなかった。また、その口縁部は、①頸部がくぼみ、外反するもの、②頸部が若干くぼみ、外反するが、最大径は胴部にあるもの、③ほとんど頸部がくびれないもの、の３種に大別される。これらの比率は③が最も多く、②はその半分程度、①は少ない。

イ．石器

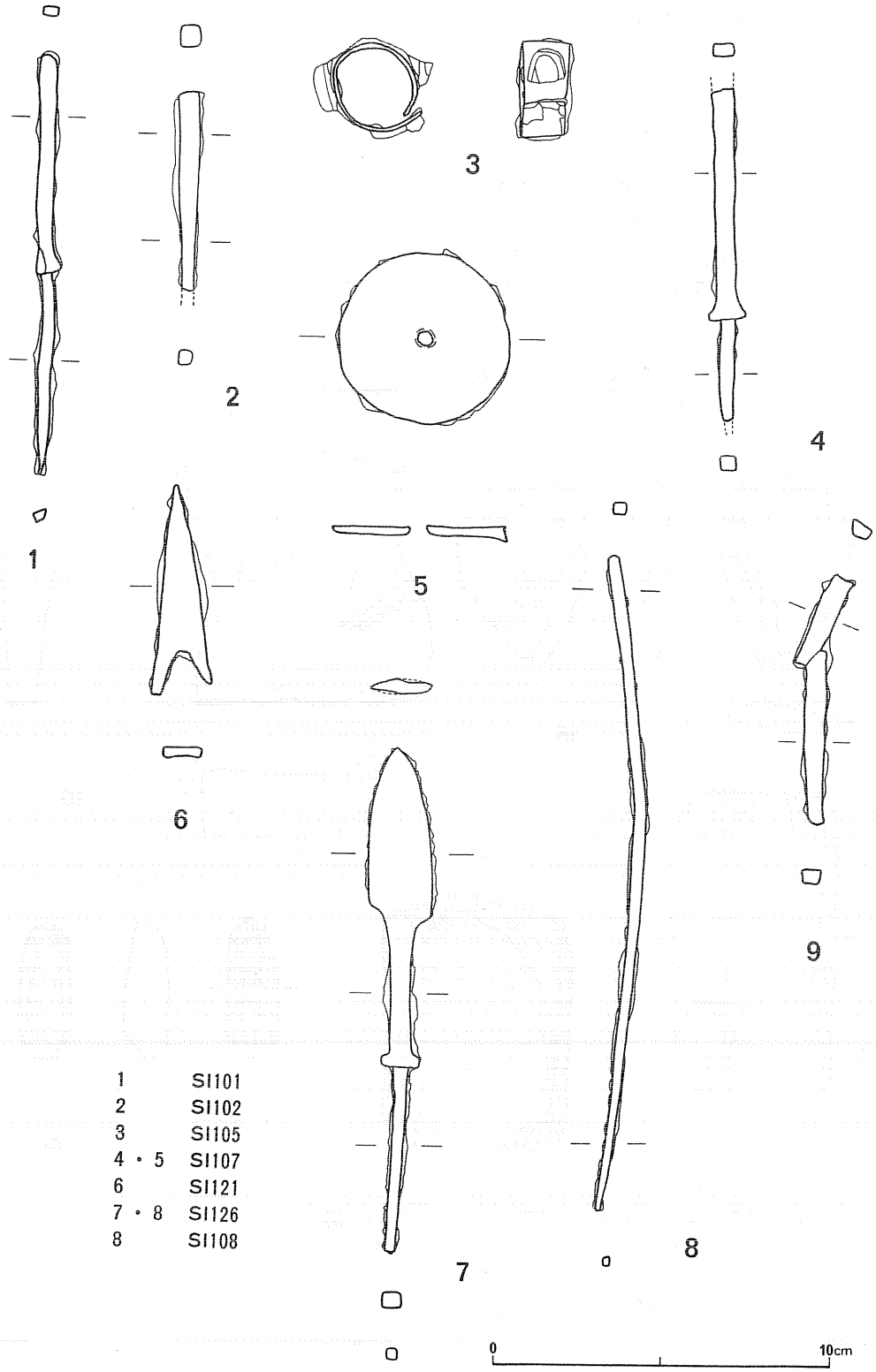
第68図に示した。石器の出土量も少なく、この６点のみである。14は掻器で、左下辺に調整



第67図　遺構外出土遺物(1)

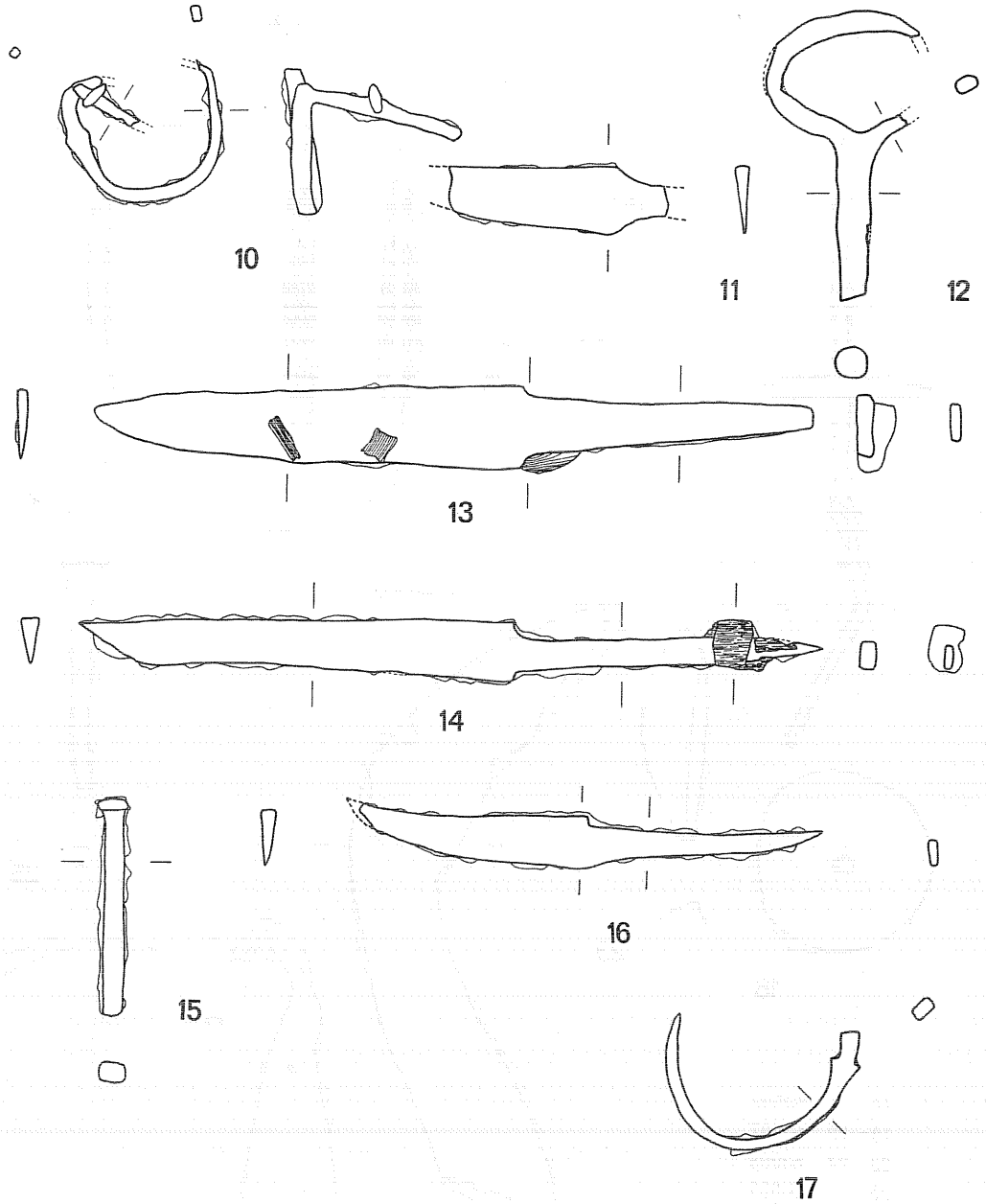


第68図　遺構外出土遺物(2)



1　SI101
2　SI102
3　SI105
4・5　SI107
6　SI121
7・8　SI126
8　SI108

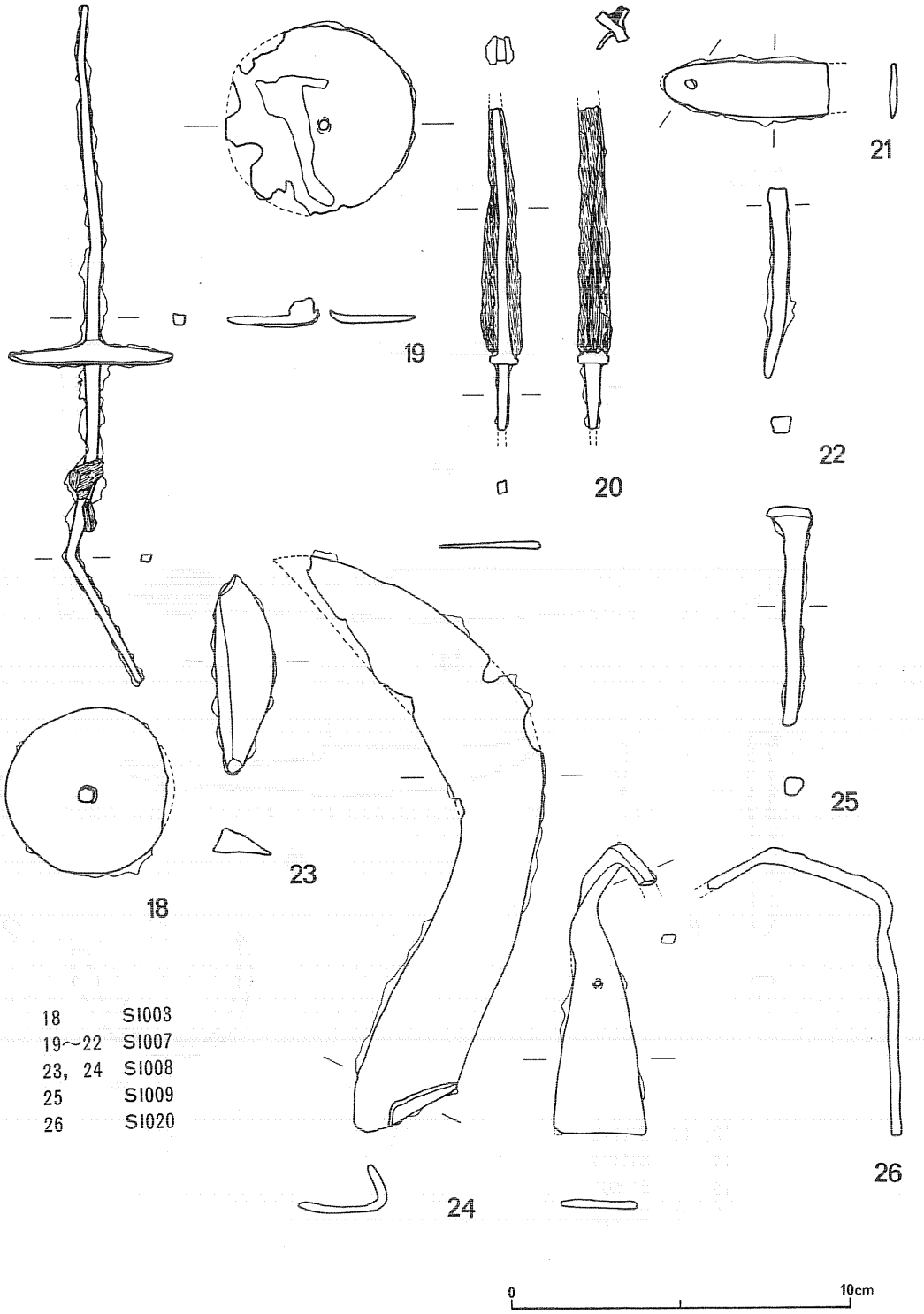
第69図　鉄器実測図(1)



10～13　SK112
14　SK114
15　SI 001
16・17　SI 003

0　10cm

第70図　鉄器実測図(2)



18	SI003
19～22	SI007
23, 24	SI008
25	SI009
26	SI020

第71図　鉄器実測図(3)

がみられる。石質は貢岩。16～18は砥石である。石質は16が凝灰岩、17・18が石英安山岩である。19は水晶の結晶体である。

ウ．鉄器

鉄器と確認されたものは30点出土しており、そのほとんどは竪穴住居跡内からの出土である。この他にも鉄滓状のものが数点出土した。

鎌　（第71図24）　柄に対し鈍角に使用する湾曲刃の鎌で、全長は20.0cm程と推定される。

手鎌　（第71図21）　⅔の残存で、目釘も一部残存する。また目釘付近に木質部が残る。

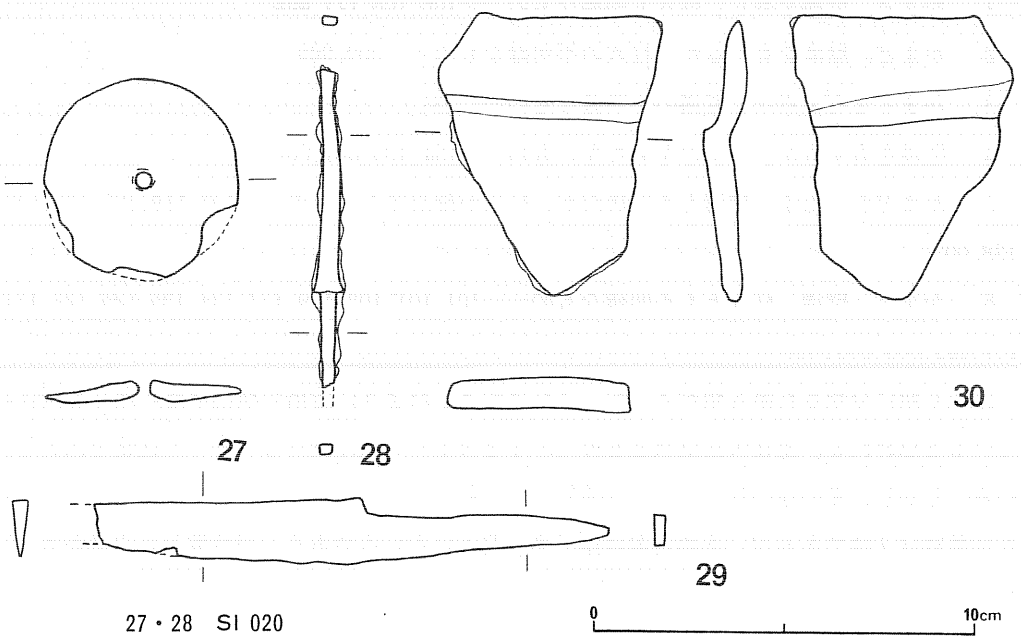
紡錘車　（第69図５、第71図18・19、第72図27）　18のみほぼ完存するが、その他は円盤部のみである。いずれも片側からの打ち抜きで、中央部は若干の盛り上がりを持つ。18は、軸部から木質部を確認した。

刀子　（第70図11・13・14・16、第72図29）　13・14から木質部が確認された。

釘　（第69図２・９、第70図15、第71図25）　９は頭部欠損で不明だが、他は平釘である。

鉄鏃　（第69図１・４・６・７、第71図20、第72図28）　20は木質部が残存する。

鉄鍋　（第72図30）　II郭堀内埋土上部出土のものである。



27・28　SI 020
29　SK017
30　SD010

第72図　鉄器実測図(4)

6．まとめ

妻の神Ⅰ遺跡は縄文、平安、中世の複合遺跡であり、発掘は約50m幅でその一部を掘ったにすぎない。現況として空堀とそれによって独立した郭があるのを確認できたが、表土は浅く、平安期の遺構・遺物が大きな割合を占めた。検出遺構は次のとおりである。縄文時代フラスコ状ピット7基（いずれもⅡ郭）、縄文時代土壙1基（Ⅱ郭）、平安時代竪穴住居跡33棟（Ⅰ郭23、Ⅱ郭10）、平安時代土壙6基（Ⅰ郭5、Ⅱ郭1）、時期不明土壙10基（Ⅰ郭7、Ⅱ郭3）、時期不明溝1条（Ⅰ郭）、中世空堀跡4条。

確実な縄文時代の遺構はフラスコ状ピットと土壙でいずれもⅡ郭から検出されている。空堀構築以前の段階ではⅡ郭は南西に突き出た舌状台地の先端部にあたり、ここに遺構が構築されたことになる。ＳＫ023フラスコ状ピットからは縄文晩期前葉の遺物が3点出土しているが、その他のフラスコ状ピットからは遺物は出土しなかった。

平安時代の竪穴住居跡は33棟検出されているが、表土が薄く、切り合いが激しく、遺物も少ないなどのことから、大湯浮石層との新旧関係はもちろん、遺構間の新旧関係や壁をつかむのに困難な箇所も多かった。よって形態分類も推定によるところが多いが、その点を加味した上で以下のように形態分類することができる。

1．かまど，壁溝を有し、柱穴も明確なもの……106,108,**121**,**008**

2．かまど，壁溝を有するが、柱穴の不明確なもの……009,**009′**

3．かまどを有するが、壁溝の不明確なもの……131

4．壁溝を有するが、かまどをもたないもの……104,105,001,007

5．かまどをもたず、壁溝も不明確だが、柱穴が確認できるもの……107,**110**,127,132,133,138,002

6．かまど，壁溝、柱穴とも不明確なもの……101,101′,102,109,123,124,125,126,129,131′,137,**003**,005,006,020

以上6類に分類され第6類が多いが、これは前述したように遺構の検出状態の悪さも関係していると思われる。遺物の出土状態をみてみると第1～3類は例外なく多くの遺物を出土している。しかし、その他の類については遺物の出土量にバラツキがみられる。かまどの確認された住居跡は7棟であるが、その位置は南、東、北といろいろであり、何時期かの変遷が考えられる。

また、いくつかの住居跡内からは東北北半部にみられる把手付土器が出土している（ゴシック体とした住居跡）。住居跡の形態をみてみるとバラツキはあるが、いくつかの共通点もみられる。まず第一に、土器はいずれも二次的火熱を受けていることで、ＳＩ009′竪穴住居跡出土

のものはかまど煙道部から出土した。特に口縁部付近に強い火熱を受けている。第二に、伴出遺物として坏の出土が極端に少ないことがあげられる。第三に鉄器の共伴（ＳＩ110 は除く）があげられる。以上のことから、この把手付土器は製鉄に関連ある遺物という可能性も考えられる。また、この時期と前後して坏にかわるもの、おそらく木椀のようなものが普及していったものと思われる。

平安時代のものと思われる土壙は６基確認された。いずれも土層中央部に焼土が帯状に分布している。鉄器も共伴することから、製鉄に関連したものと思われる。

ＳＩ003竪穴住居跡の床上面から出土の炭化米と床直上面から検出された炭化材を ^{14}C 分析したところ、570年の差がでた。ＳＩ003竪穴住居跡は遺存状態が不良で、壁等も削平されていたところからみると、炭化米は床面上とはいえ、検出面上にも極めて近いので、中世の遺物と言えるかもしれない。しかし、確実に中世の遺物と思われるものはほとんど出土しておらず、中世の館と考えると常駐しない例えば見張り小屋のような施設であり、常駐する郭となる部分が別にあると考えられる。この観点からみると本遺跡は北方の妻の神Ⅲ、乳牛平遺跡とは違った用途をもつものといえよう。また、それらの遺跡との間を区切る沢は深く、妻の神Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ及び乳牛平遺跡までを一つの館とみることは、まだ困難な点も多い。今回の調査は乳牛館のごく一部を縦断したにすぎず、乳牛館の範囲、妻の神Ⅲ遺跡等との関連等は今後の総合的判断を待っての研究課題としたい。

第34表　竪穴住居跡内出土遺物一覧表

１類：ほとんどくびれないもの。２類：若干くびれるもの。（ａ―口縁先端鋭角的，ｂ―口縁先端肥厚）３類：くびれの明確なもの

遺構名	土師器 坏 口縁・胴部 黒色処理	土師器 坏 口縁・胴部 非黒色	土師器 坏 底部 回転糸切り	土師器 坏 底部 ヘラ切り	土師器 甕 口縁部 1類	土師器 甕 口縁部 2a類	土師器 甕 口縁部 2b類	土師器 甕 口縁部 3類	土師器 甕 胴部	土師器 甕 底部 砂底	土師器 甕 底部 木葉痕	土師器 甕 底部 その他	把手付土器 中空	把手付土器 非中空	把手付土器 不明	須恵器 坏	須恵器 甕	合計	備考
ＳＩ００１					1				4									5	
ＳＩ００２					1													1	
ＳＩ００３	1		1		4	6	1	4	79		1		1		1		1	100	
ＳＩ００７	1	1			1			1	43			2					2	51	
ＳＩ００８	2				10	1	1	1	95			6		1				117	
ＳＩ００９	5	5	1		13	5	1		80	1	1	1						113	
ＳＩ００９′									75			1			1			77	
ＳＩ０２０	1	1			4	2			42			5						55	
ＳＩ１０１					8	2	1		26			1					1	39	
ＳＩ１０１′									2			1						3	
ＳＩ１０２					1	1			18									20	
ＳＩ１０４					1	1			11			1						14	
ＳＩ１０５			1		1	1	2		20			1						26	
ＳＩ１０６	3	1			5				63			3						75	
ＳＩ１０７		2	1		18	3		1	154	4		6						189	
ＳＩ１０８	16	1	2		11	7	4	4	160	3	1	4					4	217	
ＳＩ１１０	1				16				66			2			1		2	88	
ＳＩ１２１					14	9			208			10	2				1	244	
ＳＩ１２３					3	1	1		28	2		4						39	
ＳＩ１２４					2	3	1		31			1						38	
ＳＩ１２６	9	3		1				3	33		1	1						51	勾玉出土
ＳＩ１２７	1	2			3	1		1	39	1		3				1		52	
ＳＩ１２９	1				3				25			1						30	
ＳＩ１３１			1		4	1		1	86	1		4						98	
ＳＩ１３１′					1	1				1		2						5	
ＳＩ１３２					2				13									15	

付1　^{14}C年代測定結果

昭和57年4月2日に受取りましたC－14試料5個の測定結果ができましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代
N－4445	TW22　SI001床面	1030±80 y B.P.　(995±75 y B.P.)
N－4446	TW22　SI108床面	1210±80 y B.P.　(1180±80 y B.P.)
N－4447	TW22　SI003床面	970±75 y B P　(945±70 y B.P.)
N－4448	TW22　SI010埋土下	820±75 y B.P.　(795±75 y B.P.)
N－4449	TW22　SI003炭化米	400±60 y B.P.　(390±60 y B.P.)

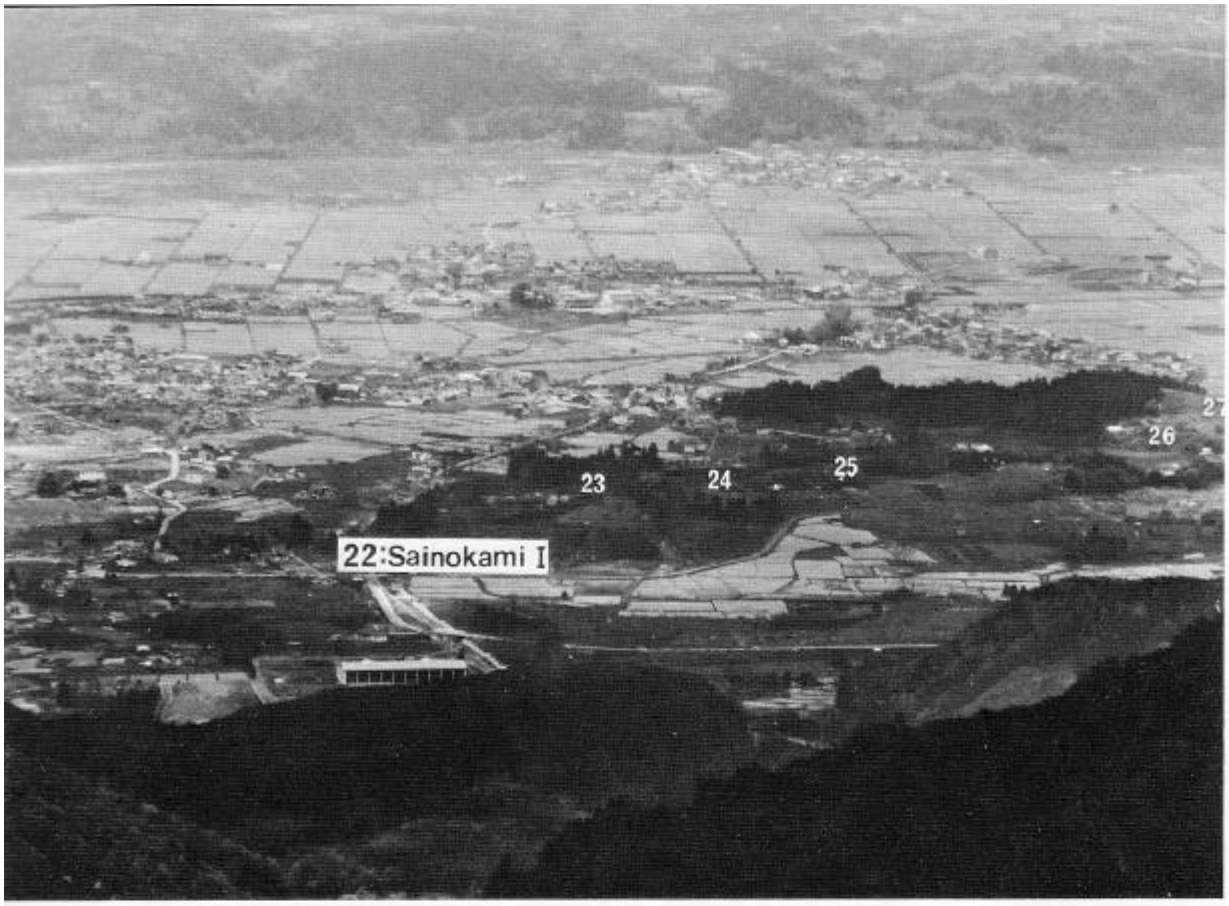
年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお^{14}C年代は必らずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。（御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。）

日本アイソトープ協会

発　掘　調　査　参　加　者　（妻の神Ⅰ遺跡）

浅利雄造、阿部藤次郎、阿部安五郎、阿部理一、海沼仁太郎、川又吉弥、川又喜代治、工藤伊代治、斉藤五十二、田中勇吉、田村勝弥、津江広、山本富恵、吉村明、浅石キガ、浅石サキ、浅石ミサ、阿部弘子、安保ヨシ、石川一枝、海沼栄子、金沢良子、川又リサ、木村ツギ、児玉ミツエ、斉藤イエ、斉藤節子、佐藤末子、佐藤スミ、佐藤ミツ、高田チオ、田中スミ、奈良ミワ、成田ウメ、成田笑里子、成田ヒサ、根本キヌ、根本スエ、畠山サカエ、前田エミ、間藤美代、宮沢イサエ、柳沢照子、山本エツヨ　（50音順）

図版1　妻の神Ⅰ遺跡航空写真（上が北）

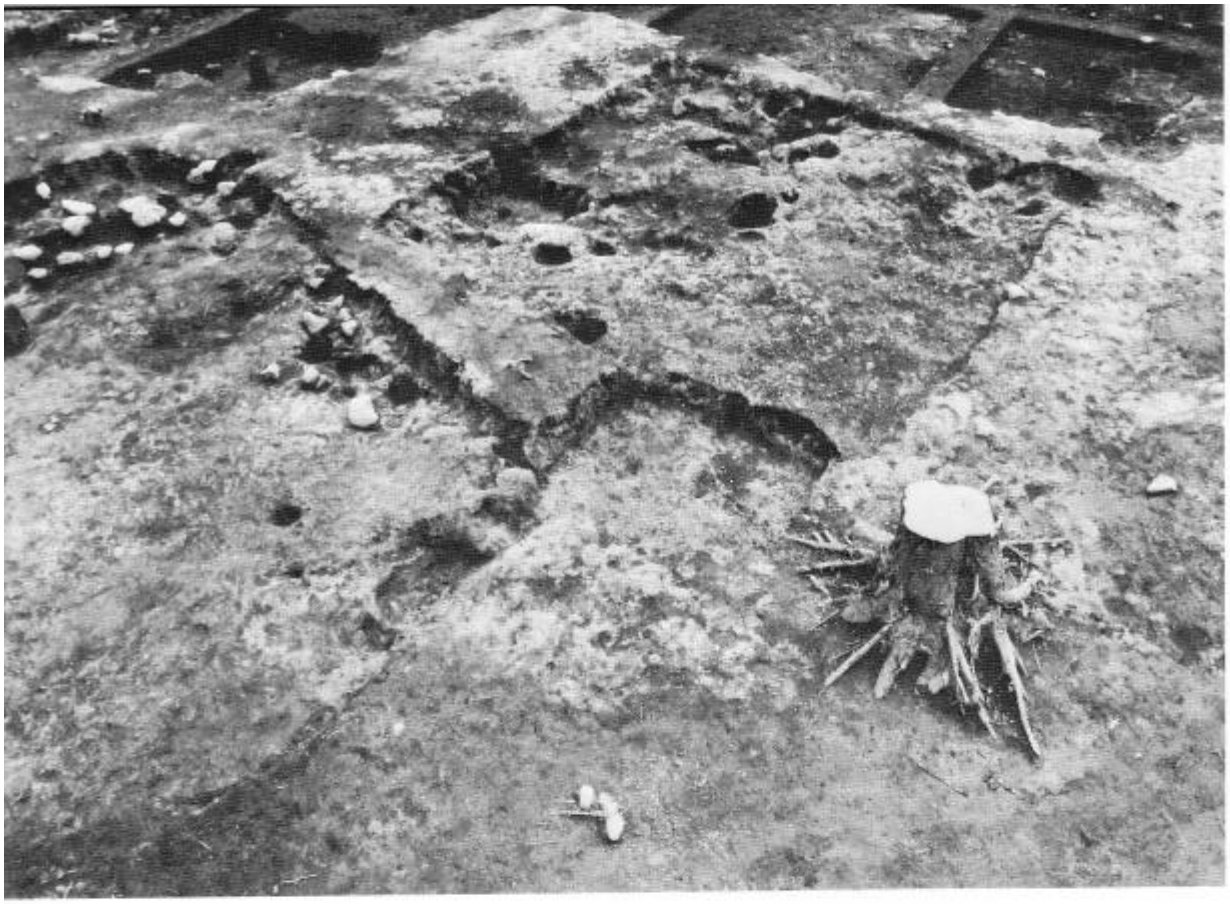


図版２　妻の神Ⅰ遺跡遠景　（上）発掘前（東▶西）　22：妻の神Ⅰ　23：妻の神Ⅱ
24：妻の神Ⅲ　25：乳牛平　26：下乳牛　27：西町
（下）発掘後（東▶西）

図版3　Ⅰ郭近景　(上) 発掘中(東南▶北西)
(下) 発掘後(東南▶北西)

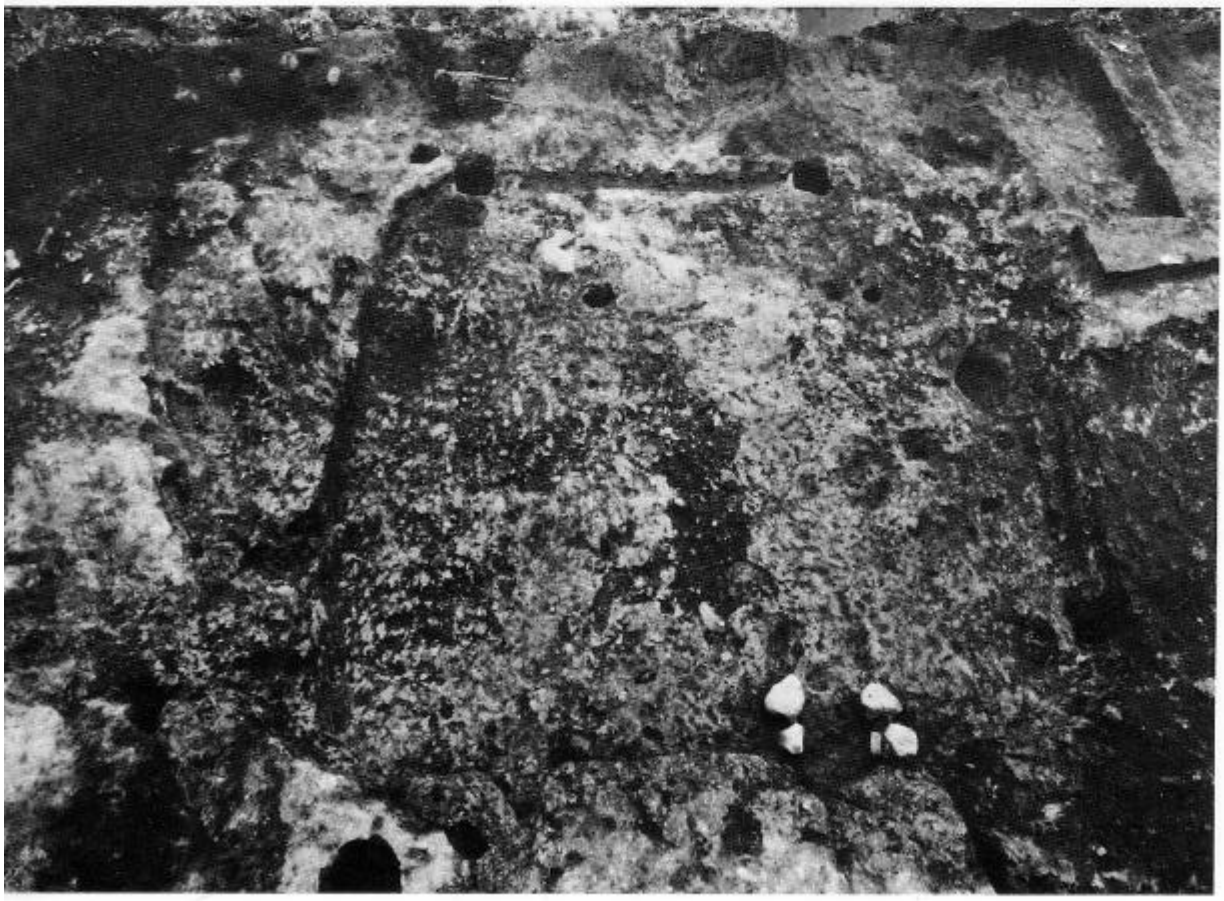
図版4　II 郭 近 景　(上) 発 掘 後(東▶西)
(下) 遺構検出状態(東▶西)

図版5　（上）ＳＩ101、110竪穴住居跡（東▶西）
（下）ＳＩ101、101′竪穴住居跡（東▶西）

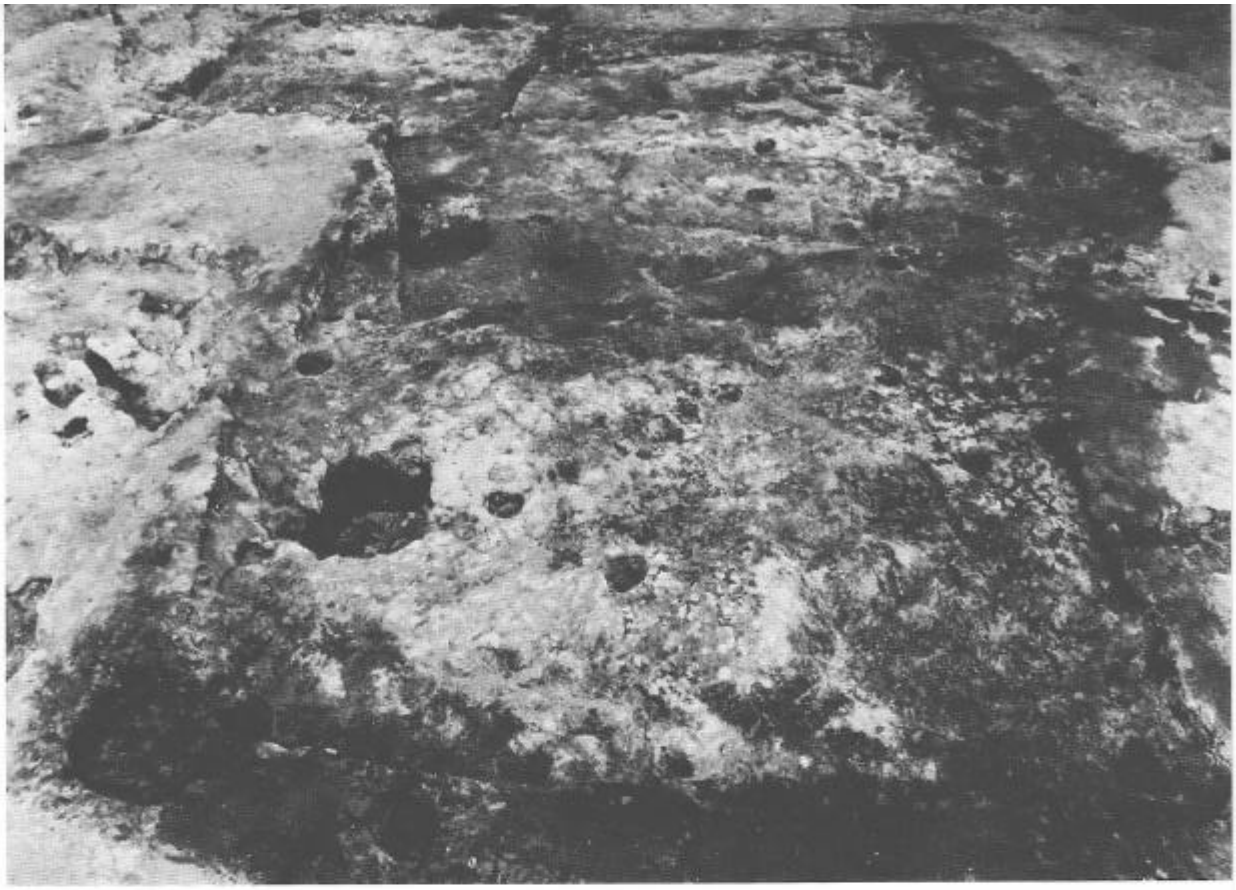


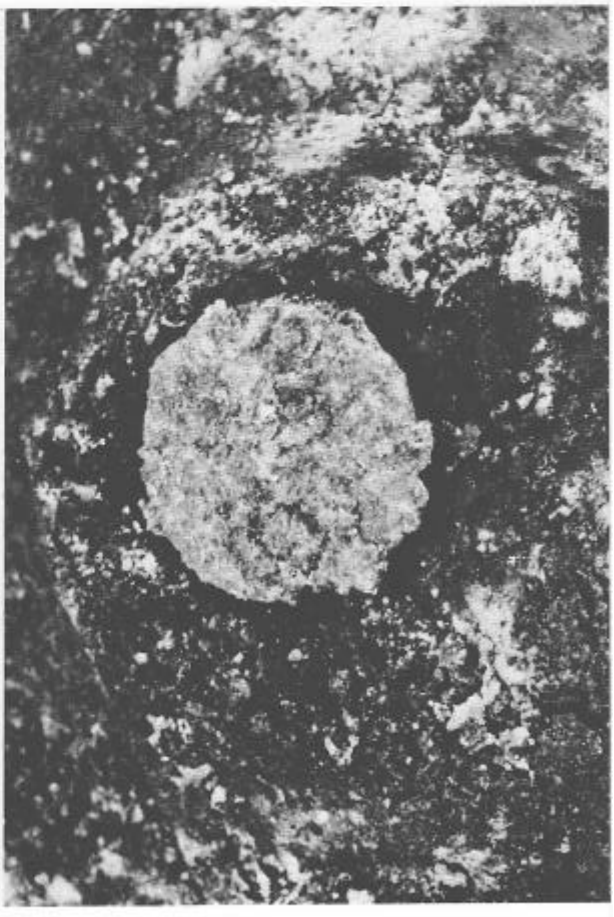
図版 6　（上）ＳＩ102 竪穴住居跡（北西▶南東）
（下）ＳＩ104、105 竪穴住居跡（西▶東）

図版 7　（上）　S I 104、105、126 竪穴住居跡（東▶西）
（左下）S I 104 竪穴住居跡遺物出土状態
（右下）S I 105 竪穴住居跡遺物出土状態



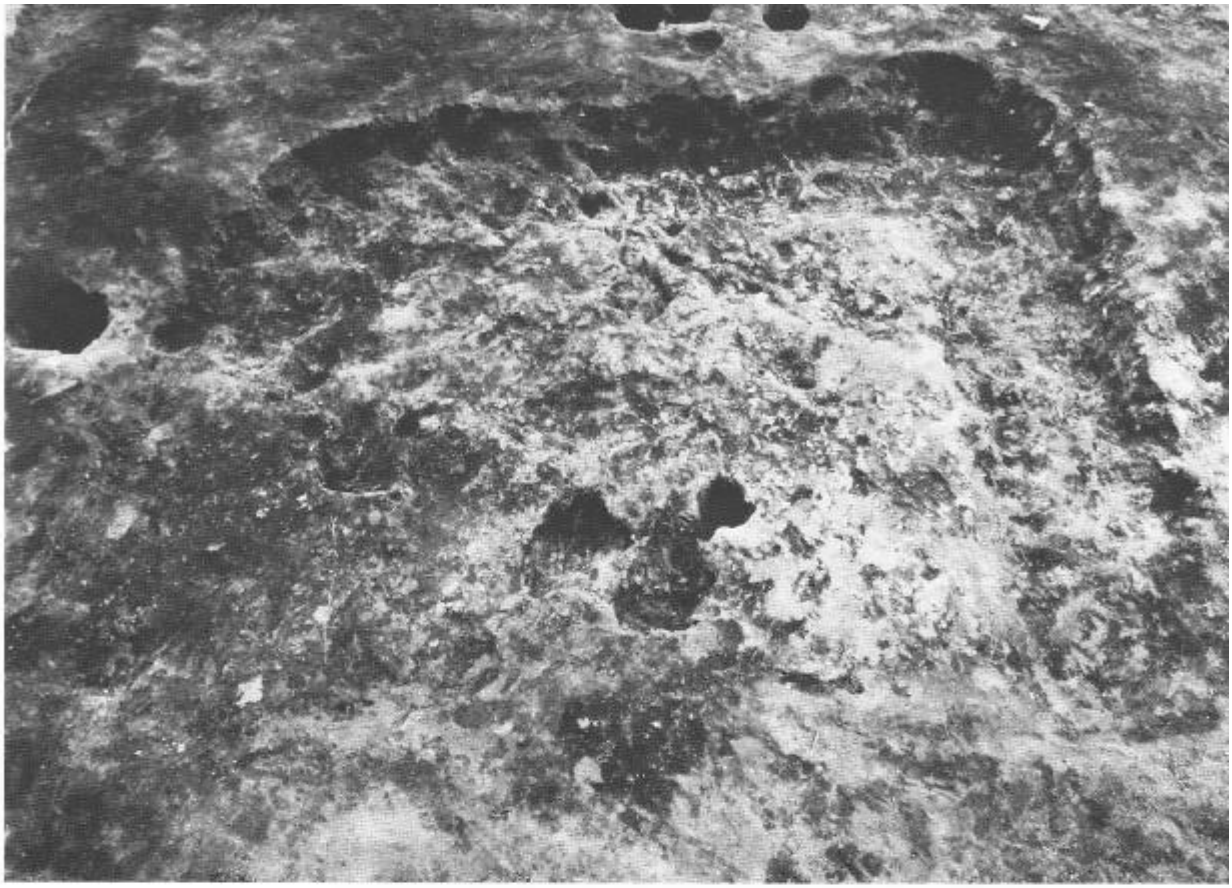
図版 8　S I 106、109 竪穴住居跡　（上）掘り下げ中（南西▶北東）
（下）完 掘 状 態（南西▶北東）



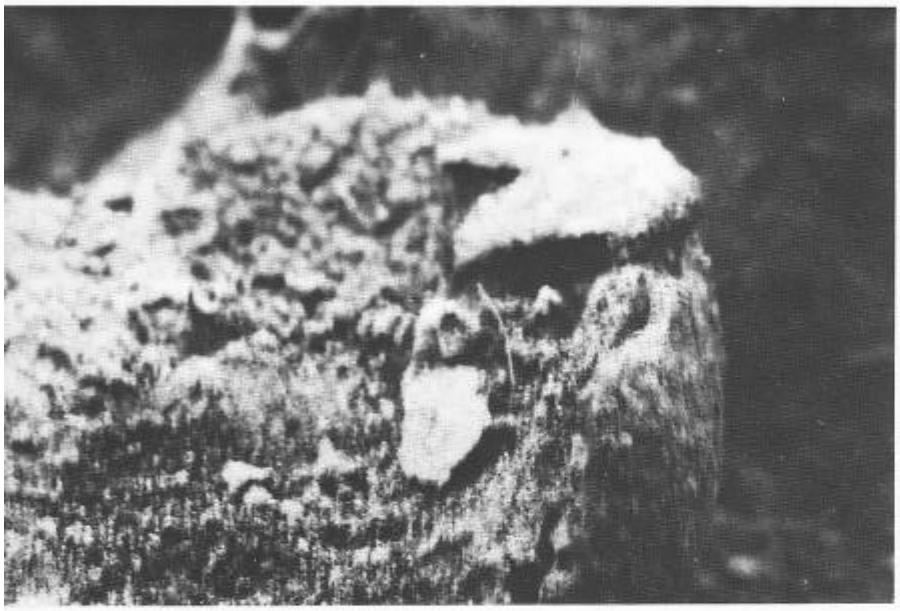


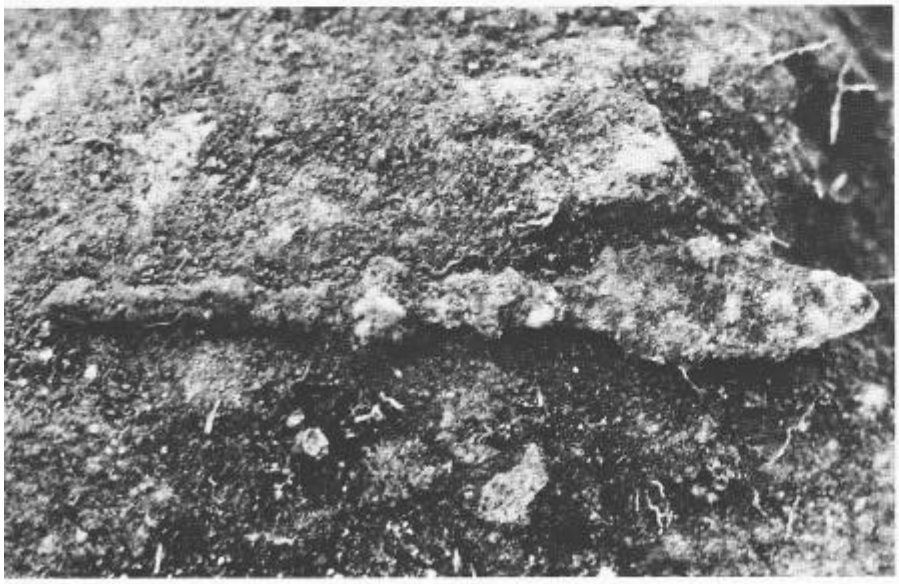
図版9　（上）SI 107、108 竪穴住居跡（西▶東）
（下）SI 107 竪穴住居跡遺物出土状態　（左）磨製石斧
（右）紡錘車

図版10　(上) ＳＩ121竪穴住居跡(東▶西)
(下) ＳＩ123竪穴住居跡(北西▶南東)

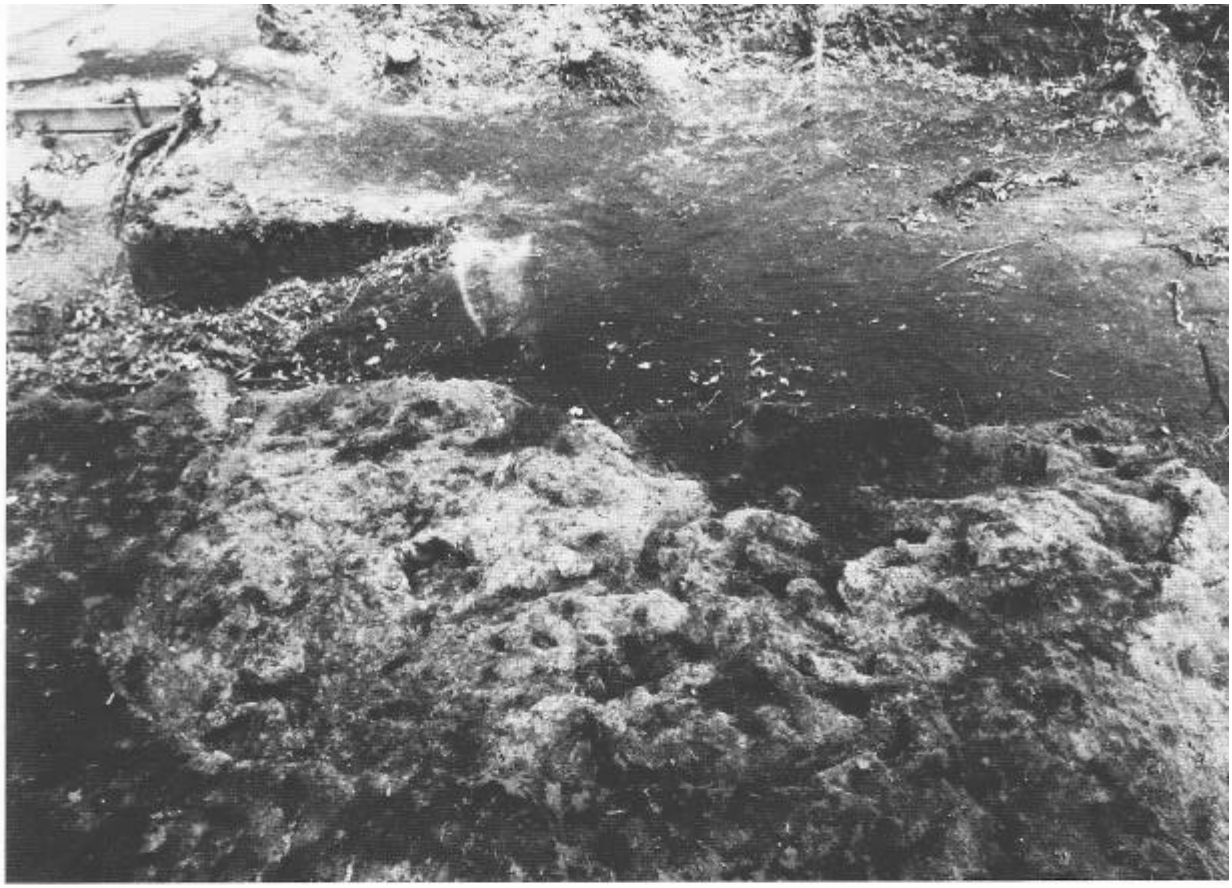


図版11　（上）ＳＩ124竪穴住居跡（北▶南）
（下）ＳＩ126、127竪穴住居跡（南東▶北西）

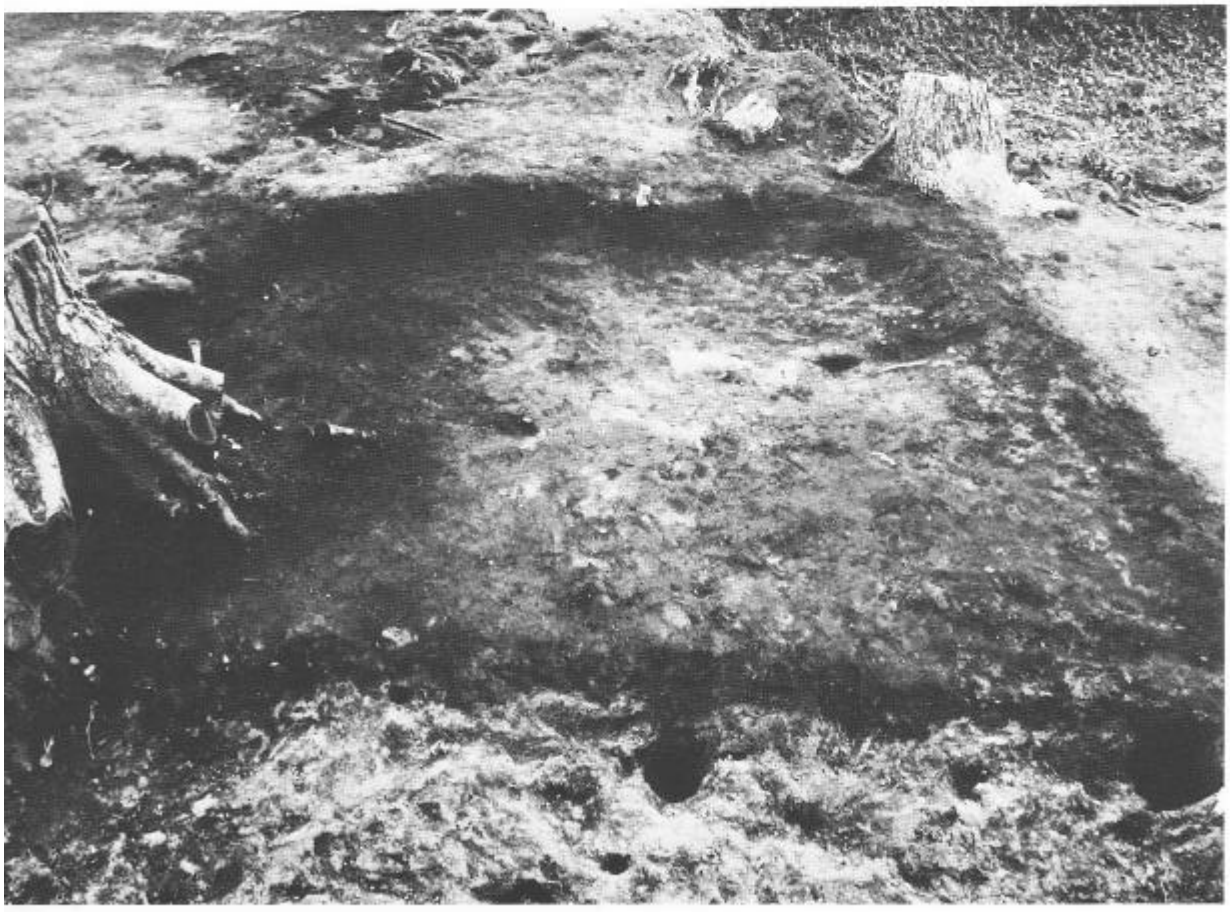




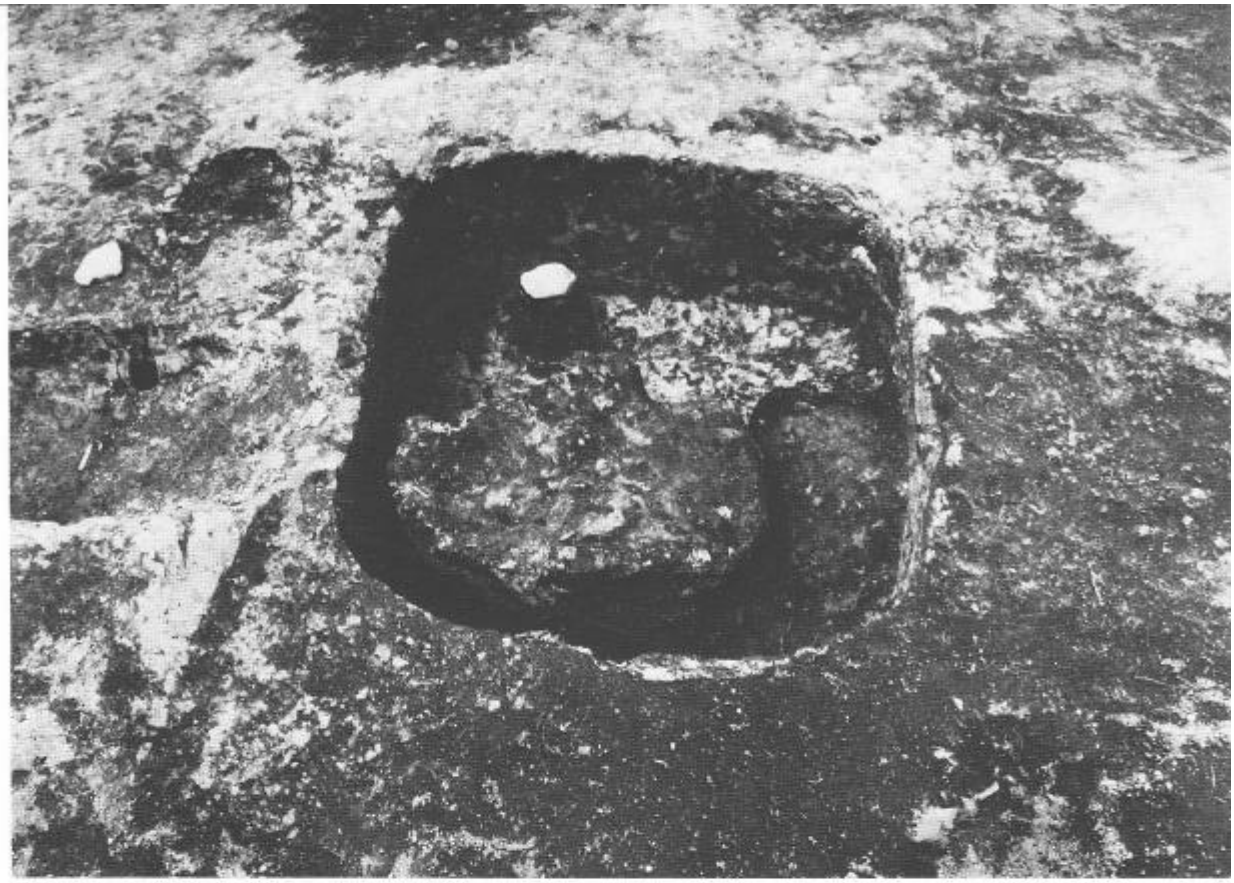
図版12　ＳＩ126竪穴住居跡遺物出土状態　（上）土師器坏
（中）鉄　器
（下）鉄　器

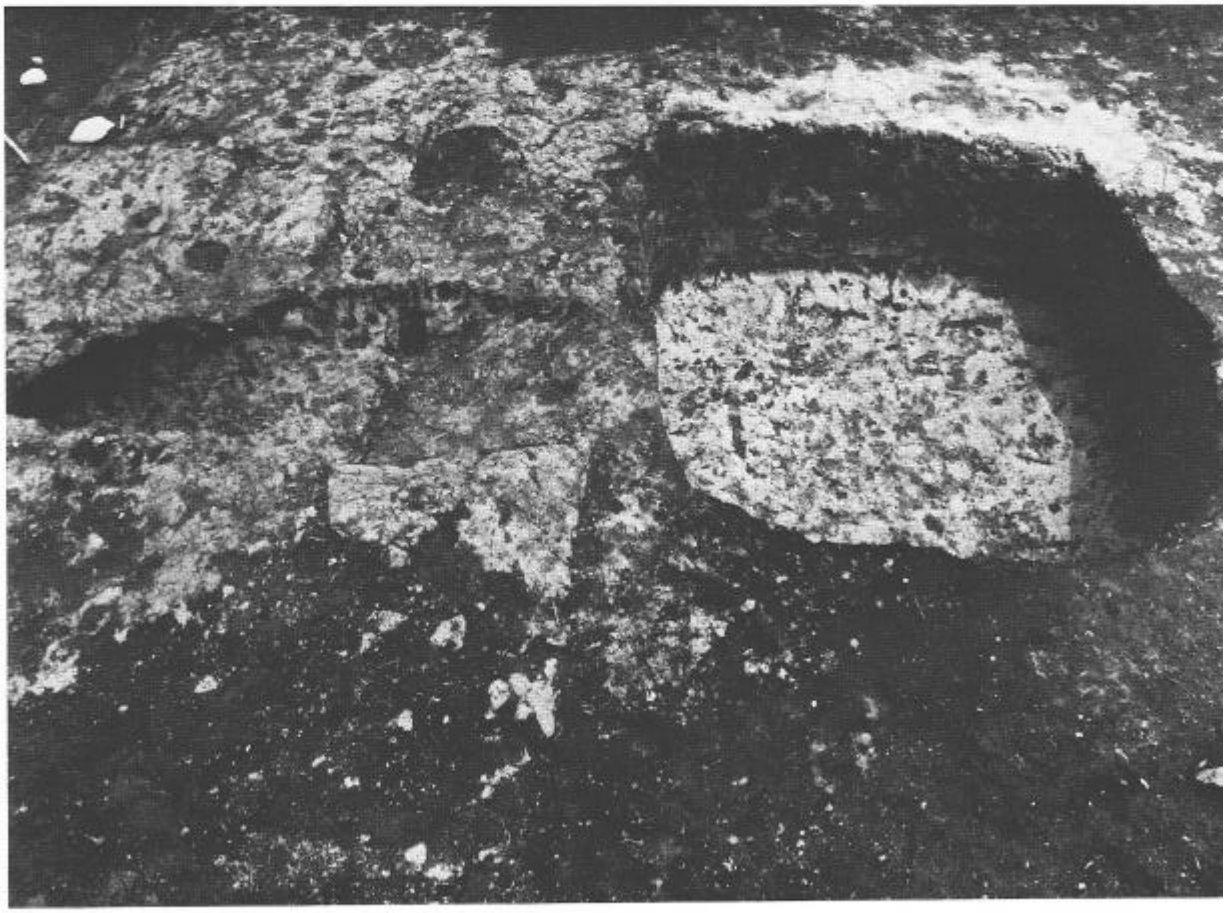


図版13　（上）ＳＩ129竪穴住居跡（南▶北）
（下）ＳＩ129、131、131′竪穴住居跡（南西▶北東）

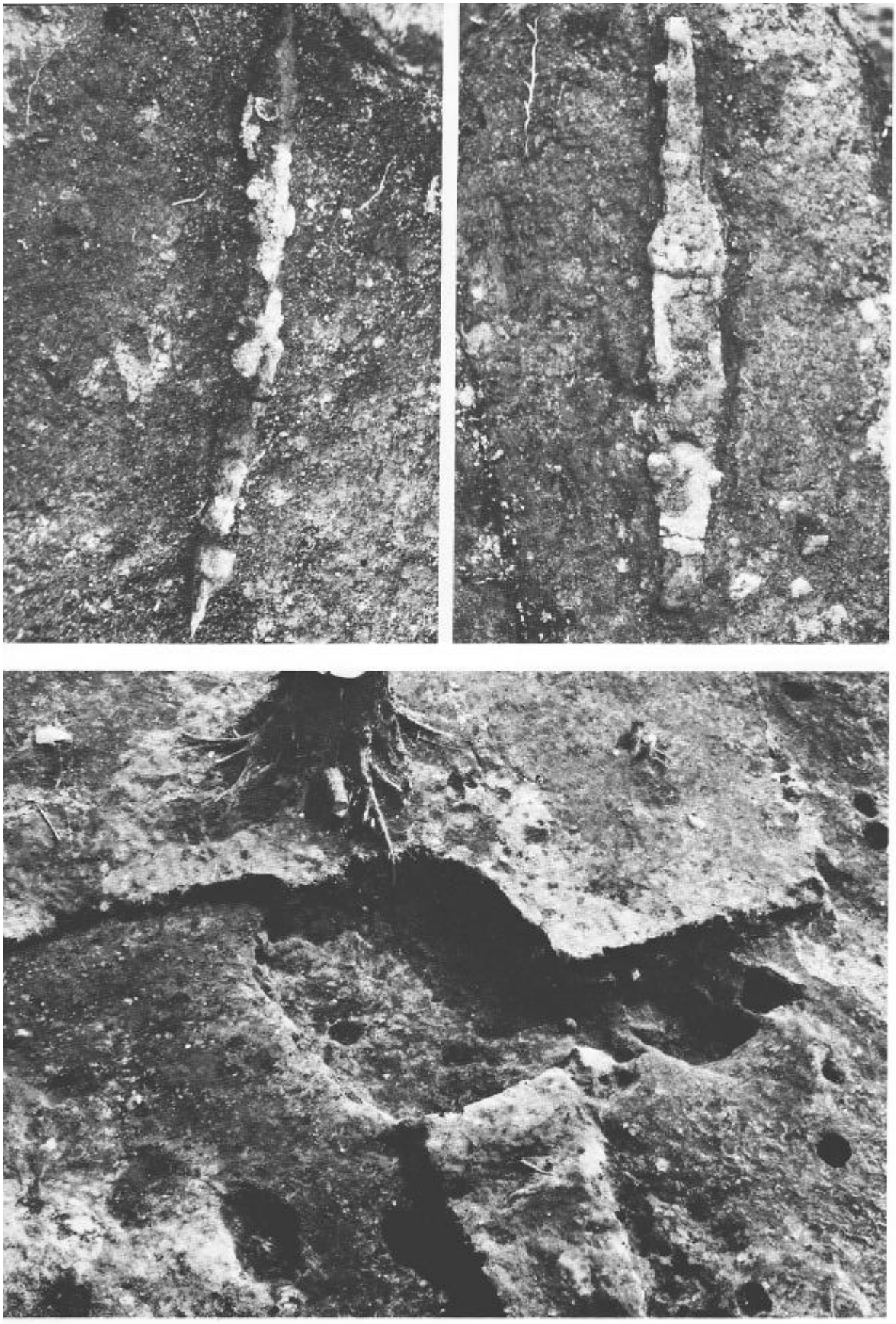


図版14　（上）ＳＩ133竪穴住居跡（東▶西）
（下）ＳＩ138竪穴住居跡（西▶東）



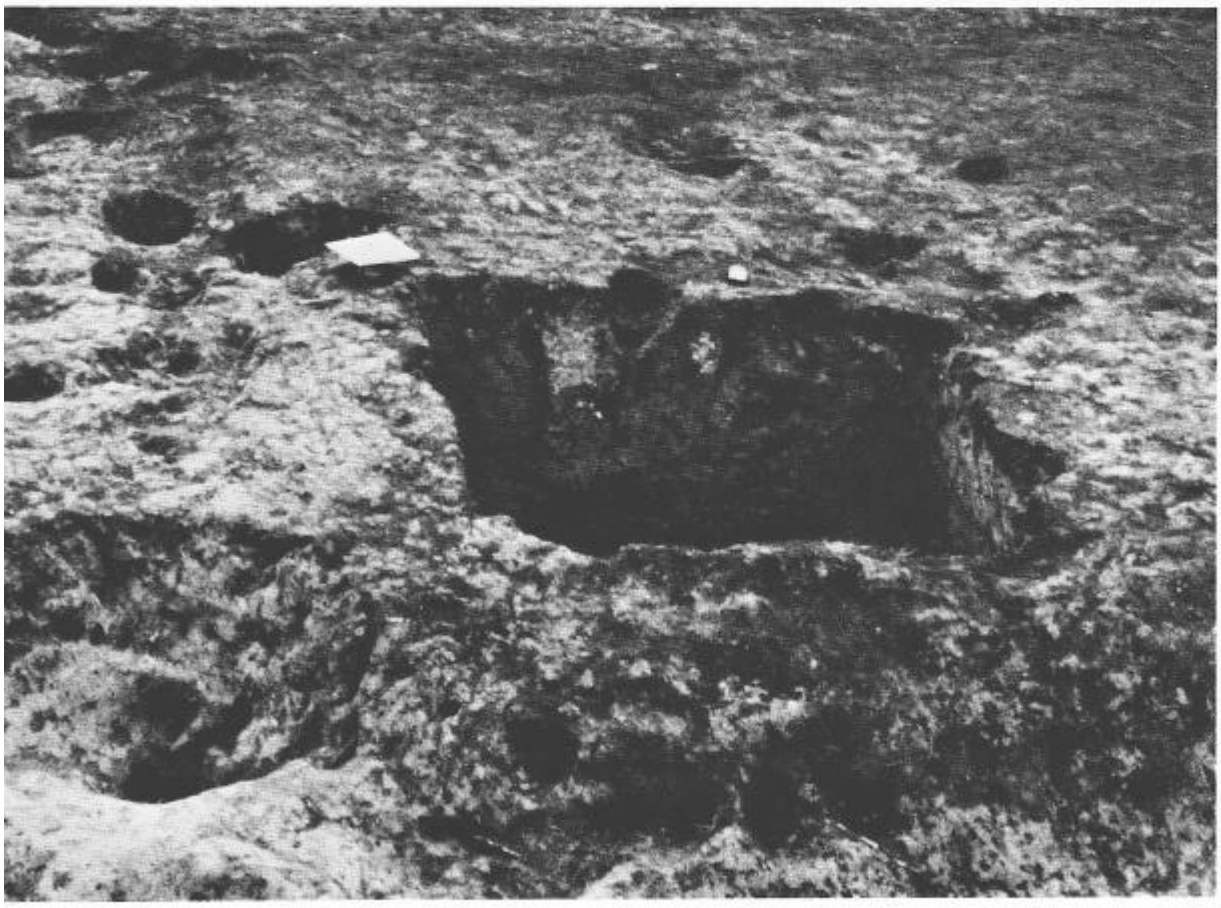


図版15　（上）ＳＫ112土壙焼土検出面（西▶東）
（下）ＳＫ111、112土壙（西▶東）

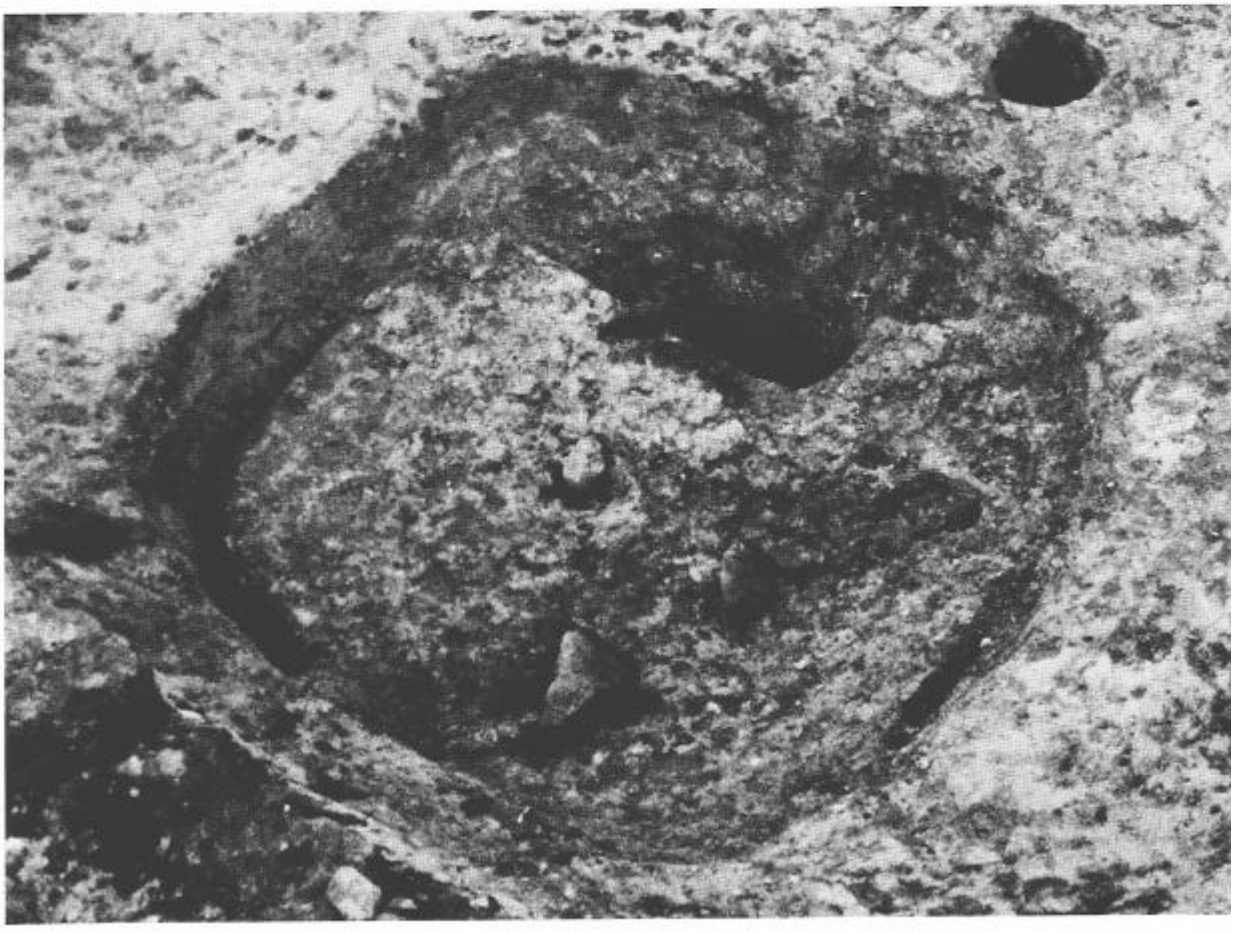


図版16　（上）ＳＫ112土壙鉄器出土状態
（下）ＳＫ113土壙（北▶南）

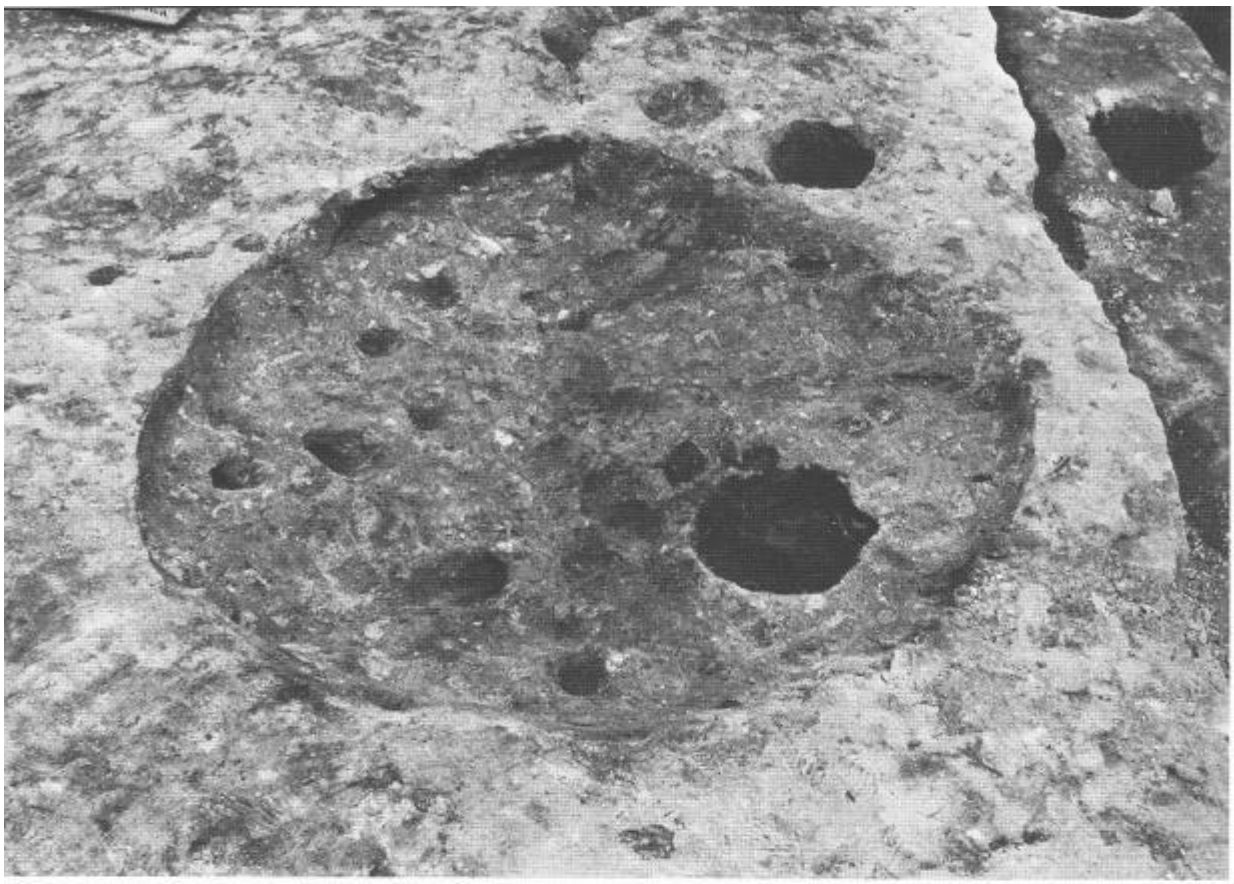
図版17　（上）ＳＫ114土壙（北▶南）
　　（下）ＳＫ115土壙（北▶南）

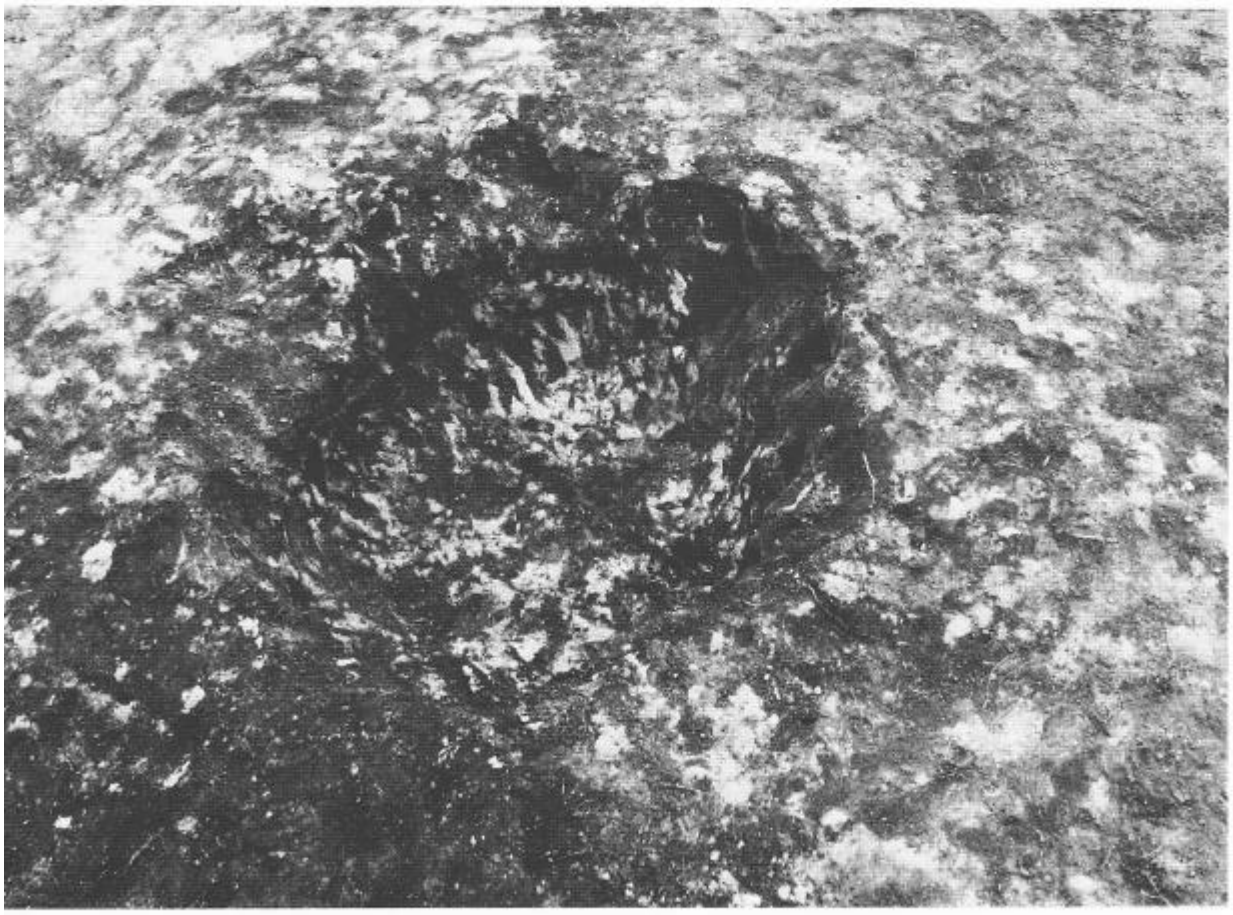


図版18　（上）ＳＫ122 土壙（東▶西）
（下）ＳＫ130 土壙（東▶西）

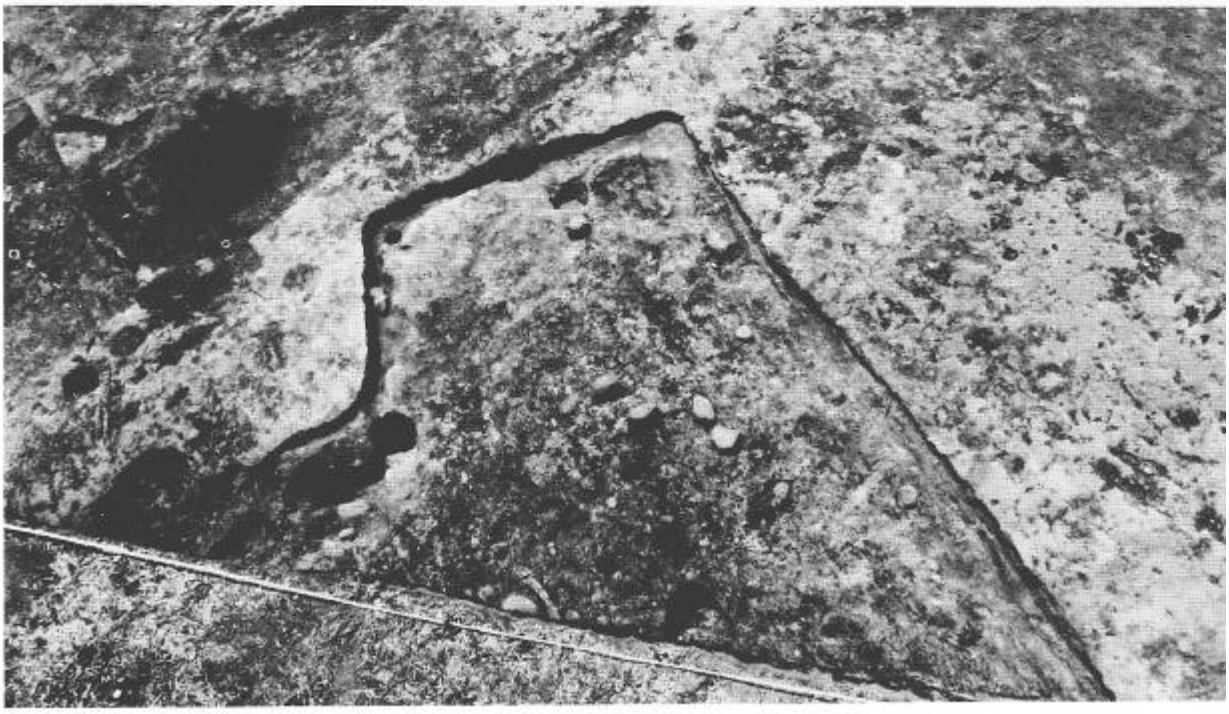


図版19　（上）ＳＫ134 土壙（西▶東）
（下）ＳＫ136 土壙（北西▶南東）

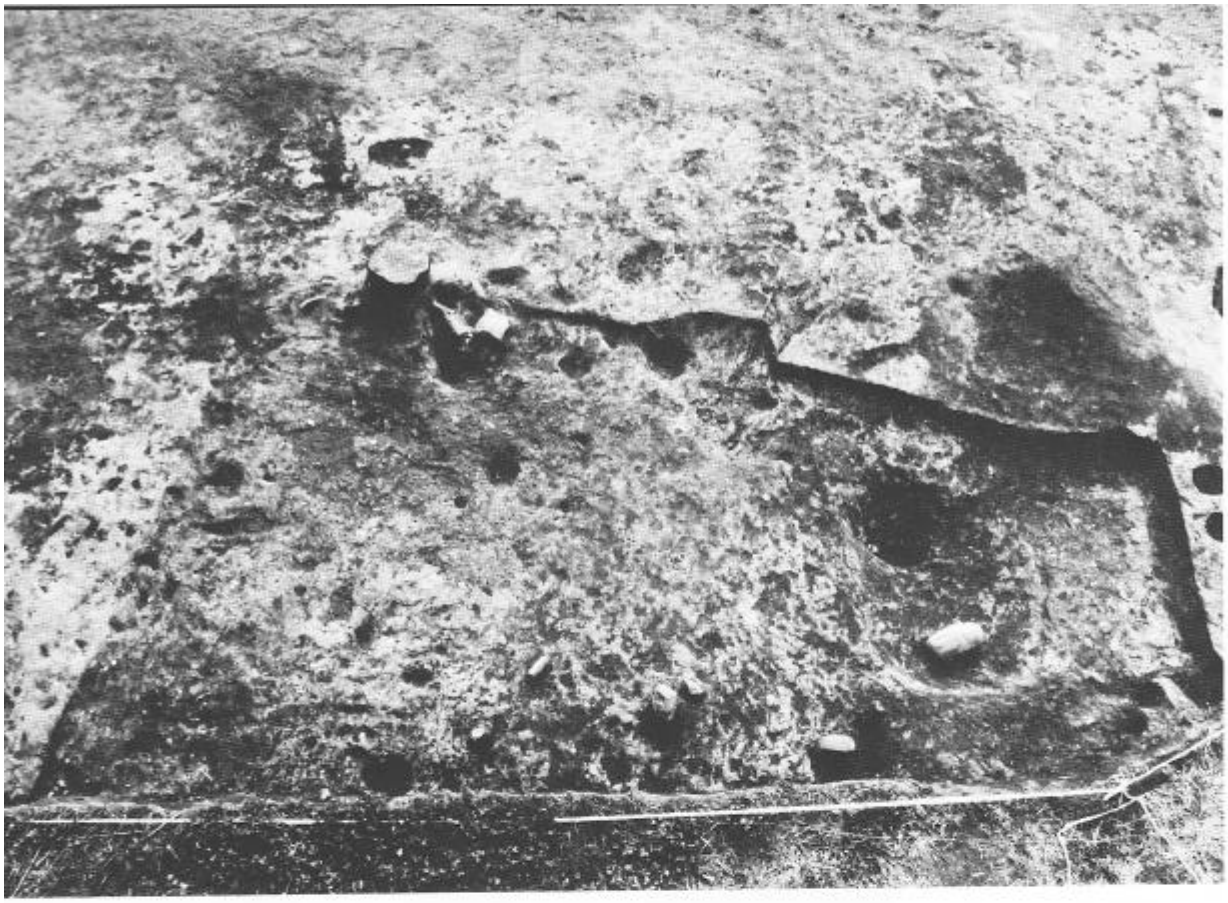


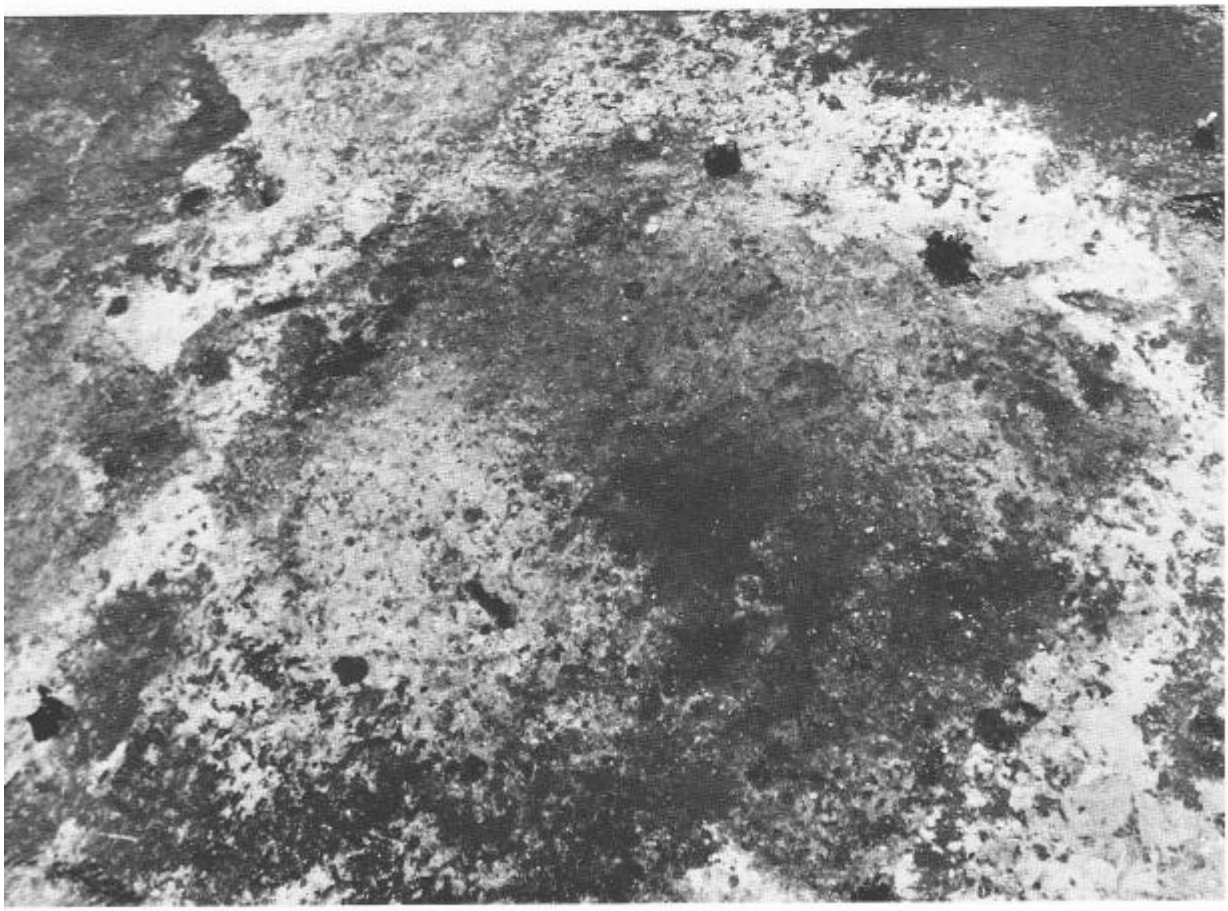


図版20　（上）ＳＫ139土壙（南西▶北東）
（下）ＳＫ140土壙（南西▶北東）

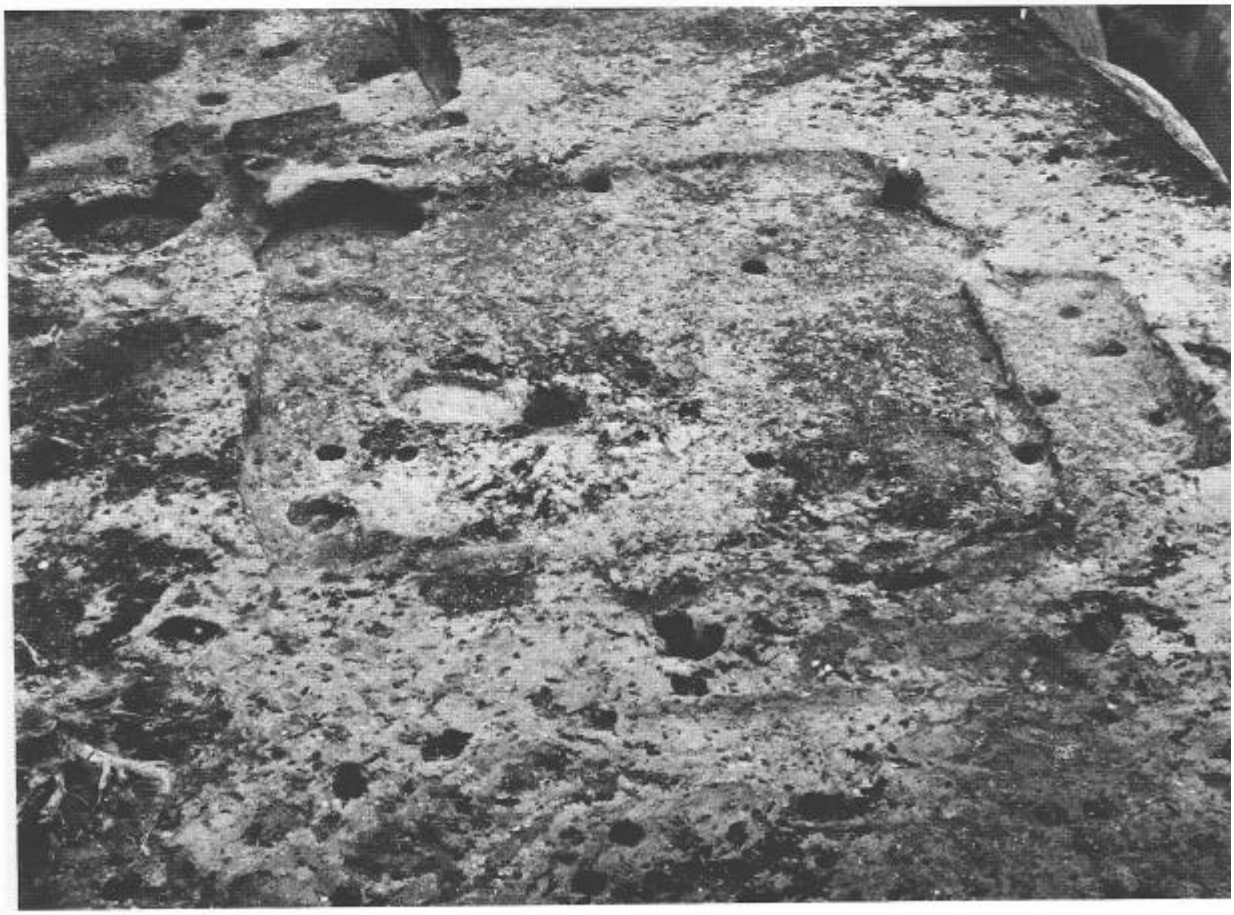


図版21　S I 001 竪穴住居跡　（上）炭化材出土状態（東▶西）
（下）完 掘 状 態（東▶西）

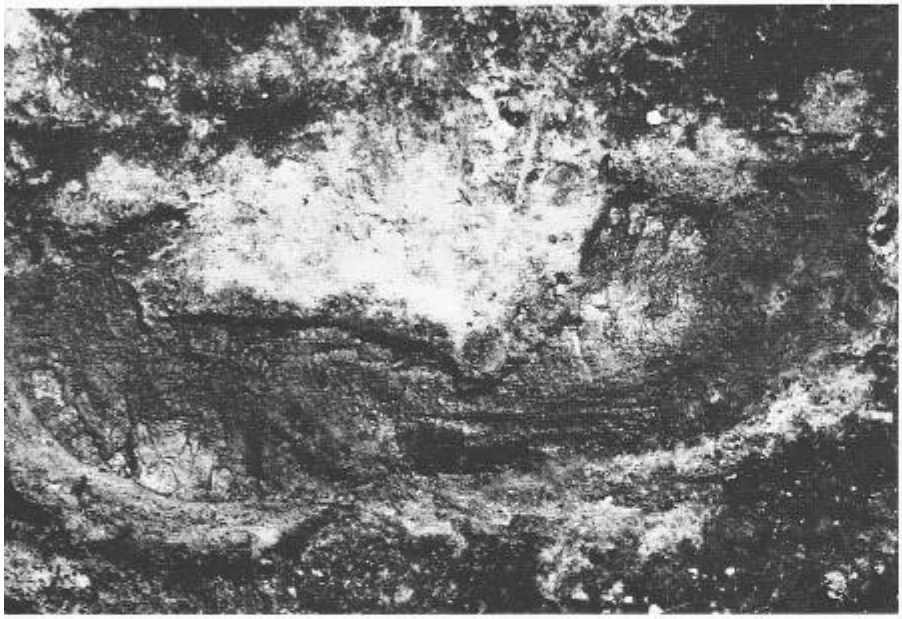


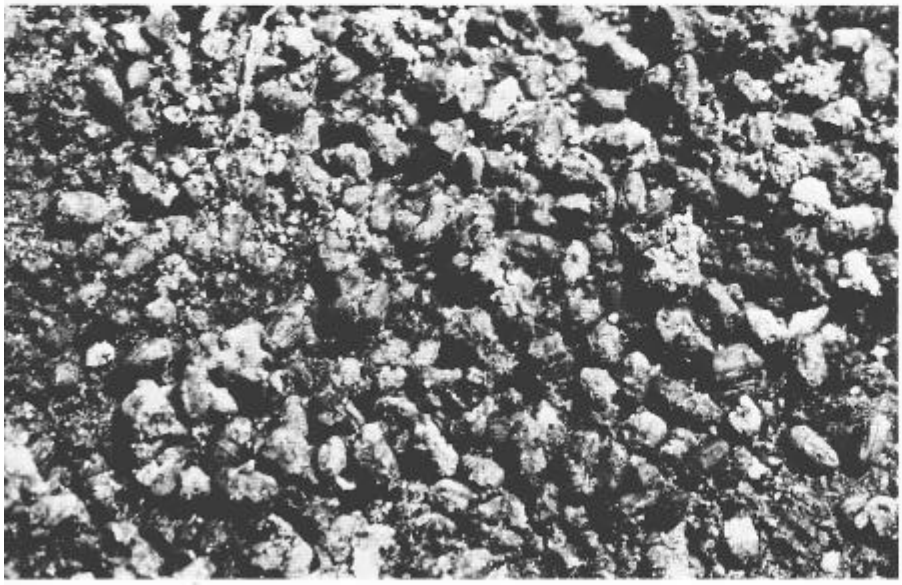


図版22　（上）ＳＩ002竪穴住居跡（東▶西）
（下）ＳＩ003、005、006竪穴住居跡検出状態（東▶西）



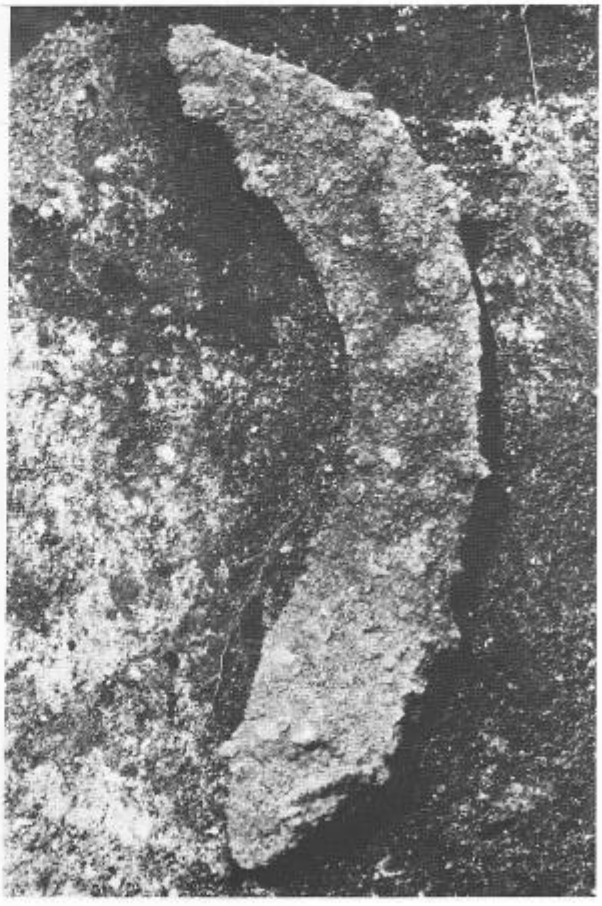
図版23　ＳＩ003、005、006竪穴住居跡　（上）炭化材出土状態（東▶西）
（下）完掘状態（東▶西）



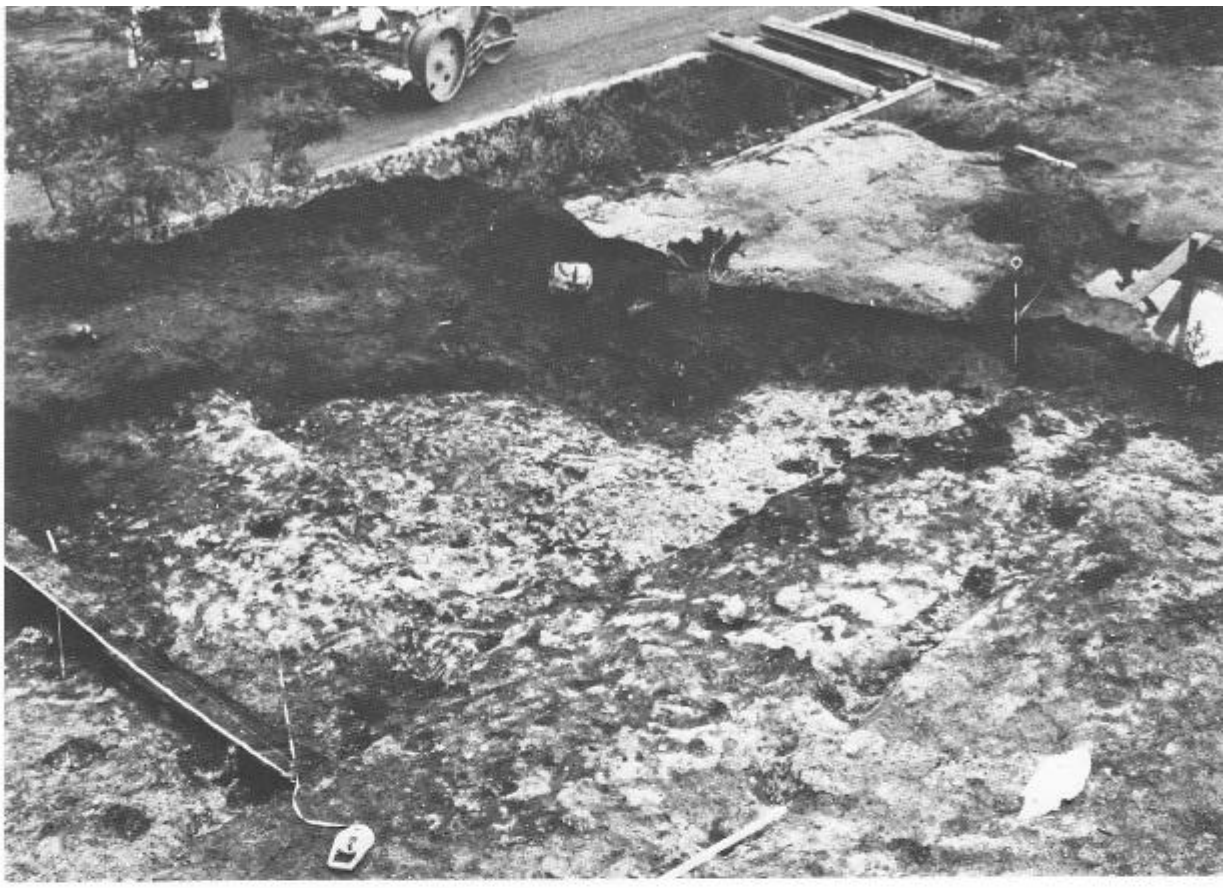


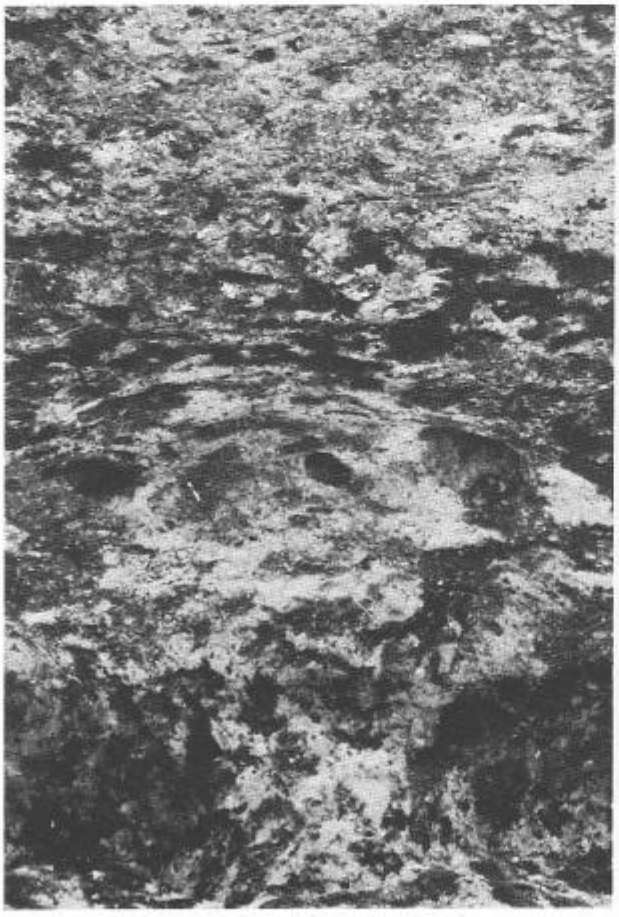
図版24　ＳＩ003竪穴住居跡遺物出土状態　（上）紡錘車
（中）木皿
（下）炭化米

図版25　（上）ＳＩ007 竪穴住居跡（東▶西）
（下）ＳＩ008 竪穴住居跡検出状態（南西▶北東）

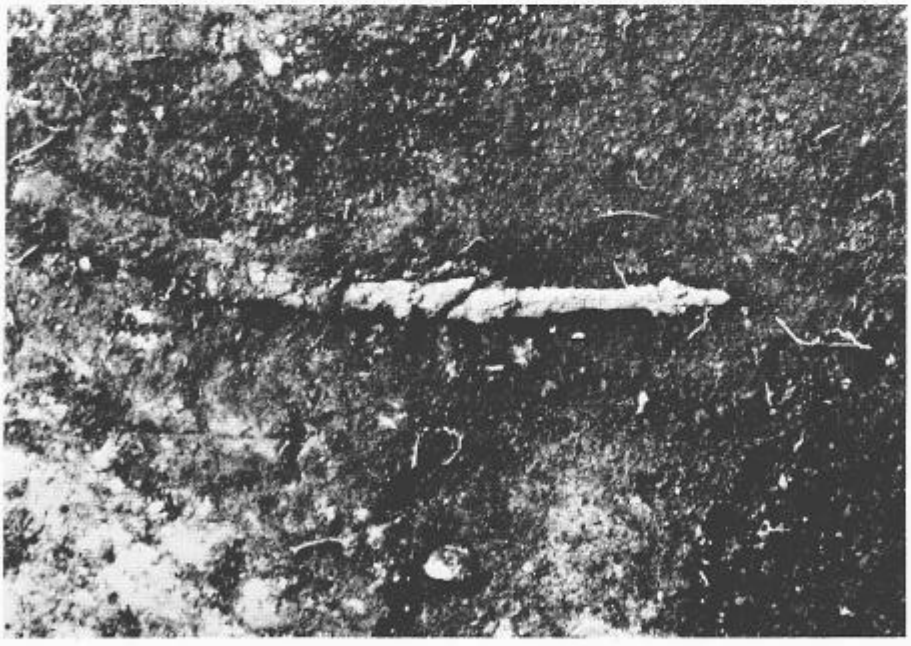


図版26　ＳＩ008竪穴住居跡　（上）　完掘状態（北▶南）
（左下）カマド（南西▶北東）
（右下）鉄器出土状態



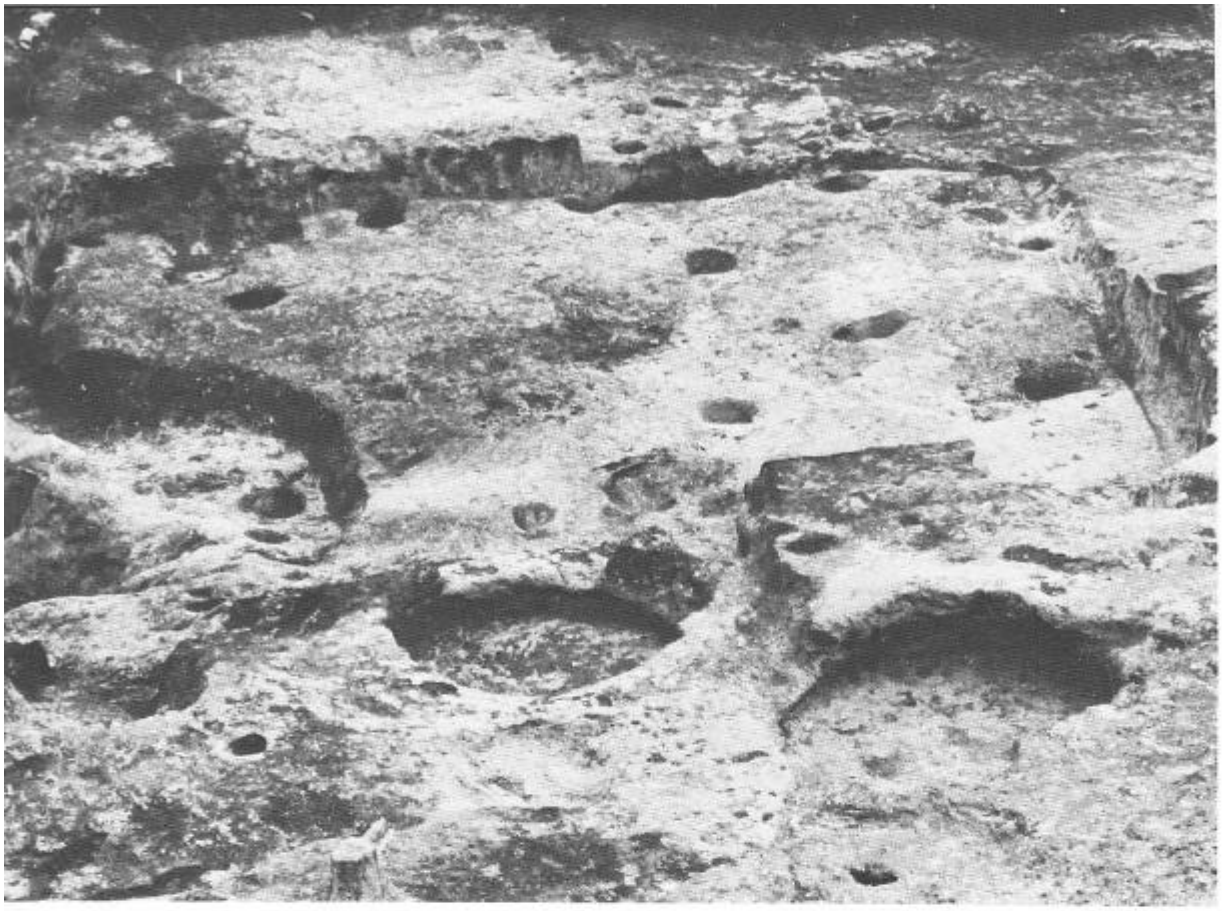


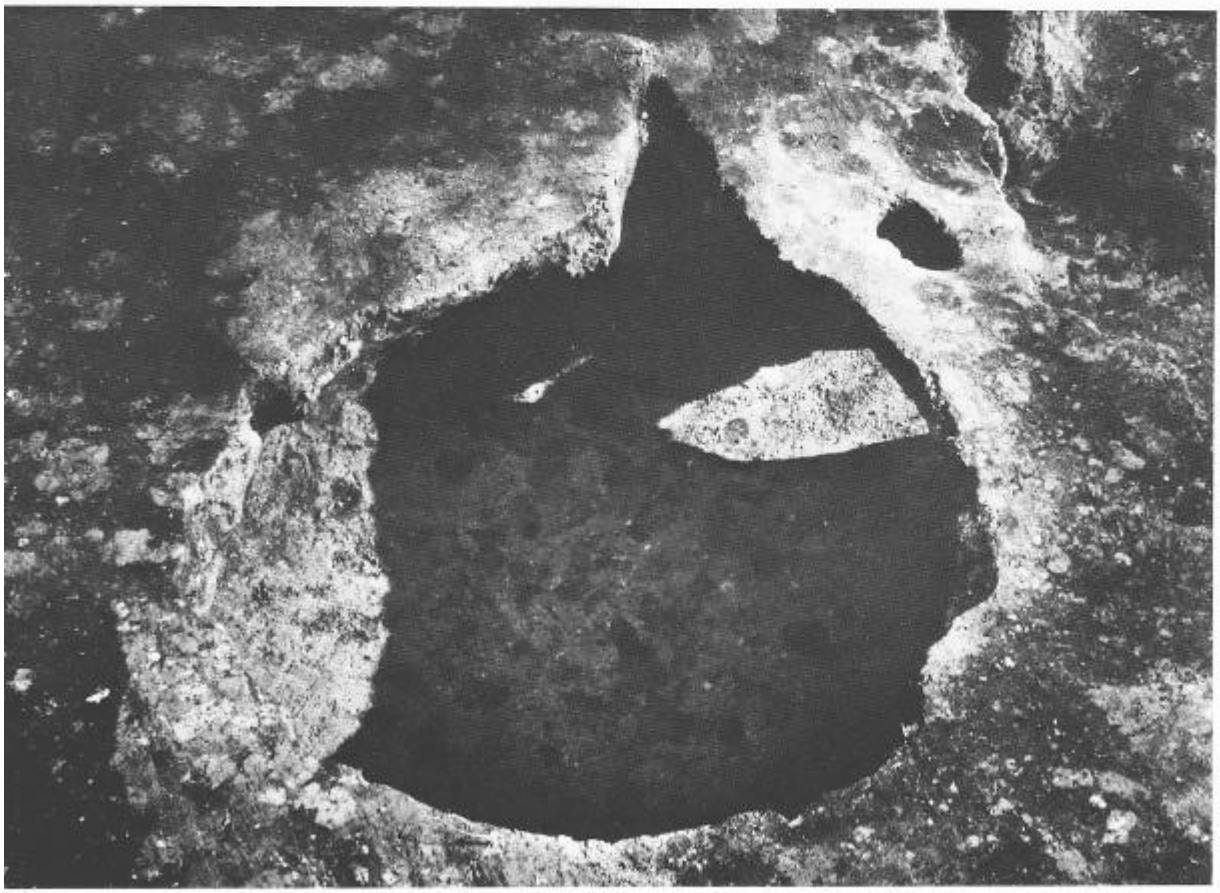
図版27　ＳＩ009 、ＳＩ009′竪穴住居跡　（上）　完掘状態(北西▶南東)
（左下）カマド(北西▶南東)
（右下）布出土状態



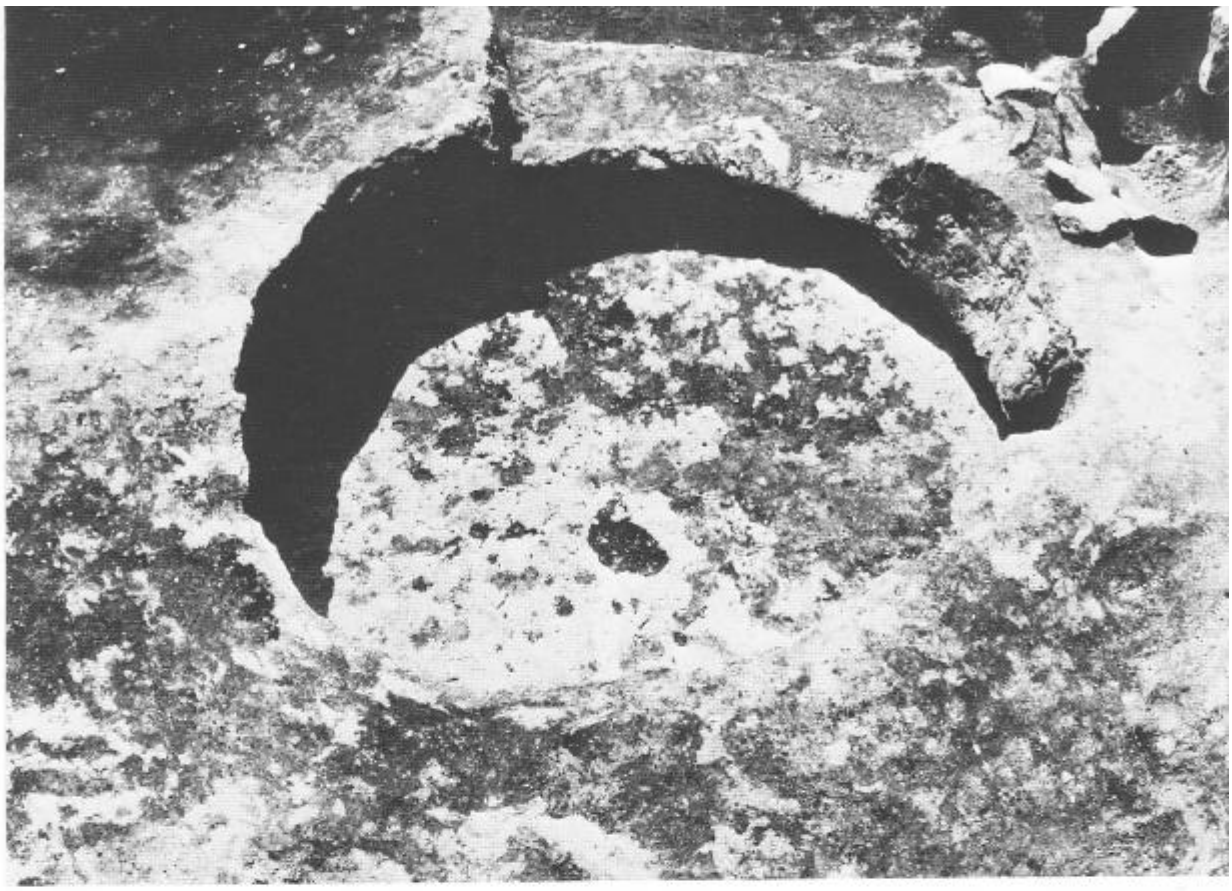
図版28　S I 020竪穴住居跡　（上）完掘状態(北▶南)
（下）鉄器出土状態

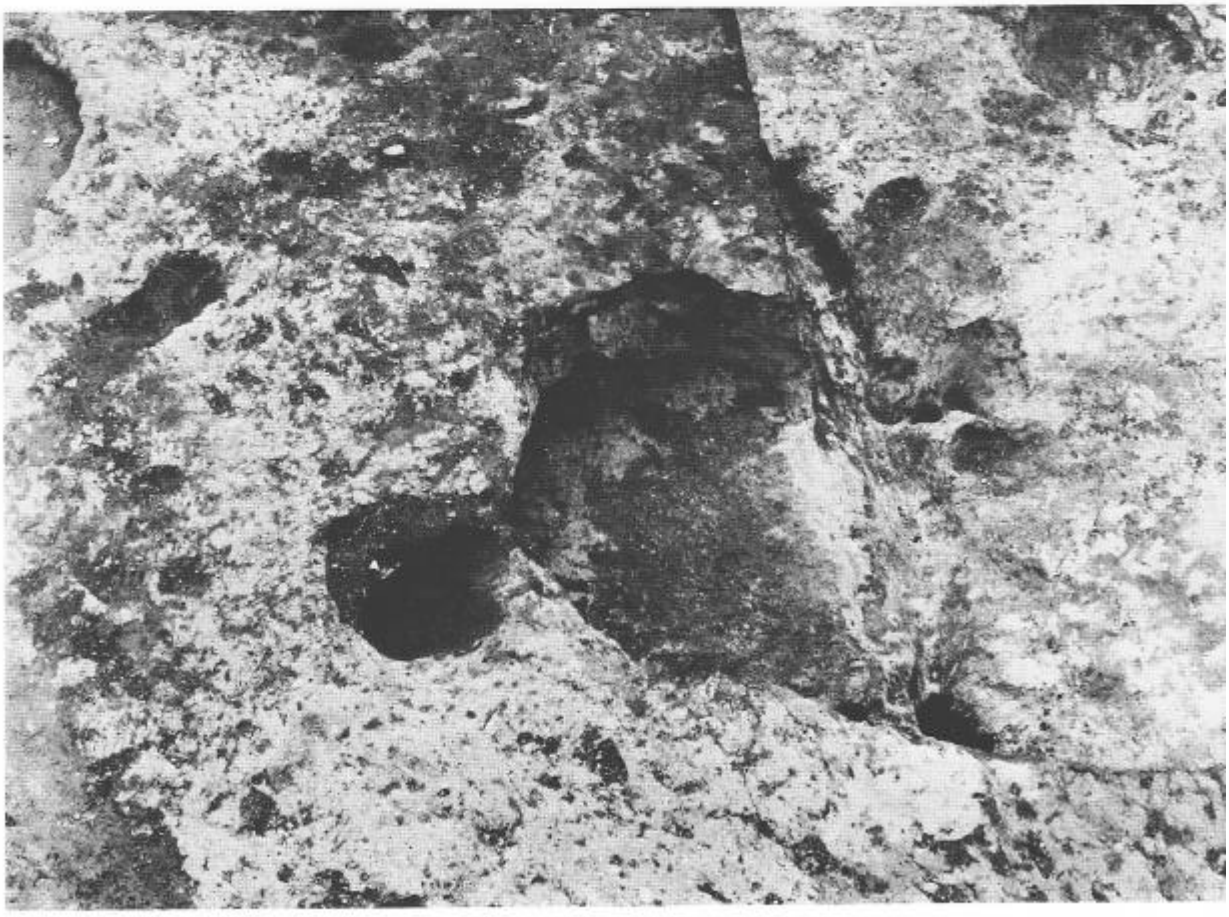
図版29　（上）ＳＫ014 土壙（東▶西）
　　（下）ＳＫ015 土壙（東▶西）



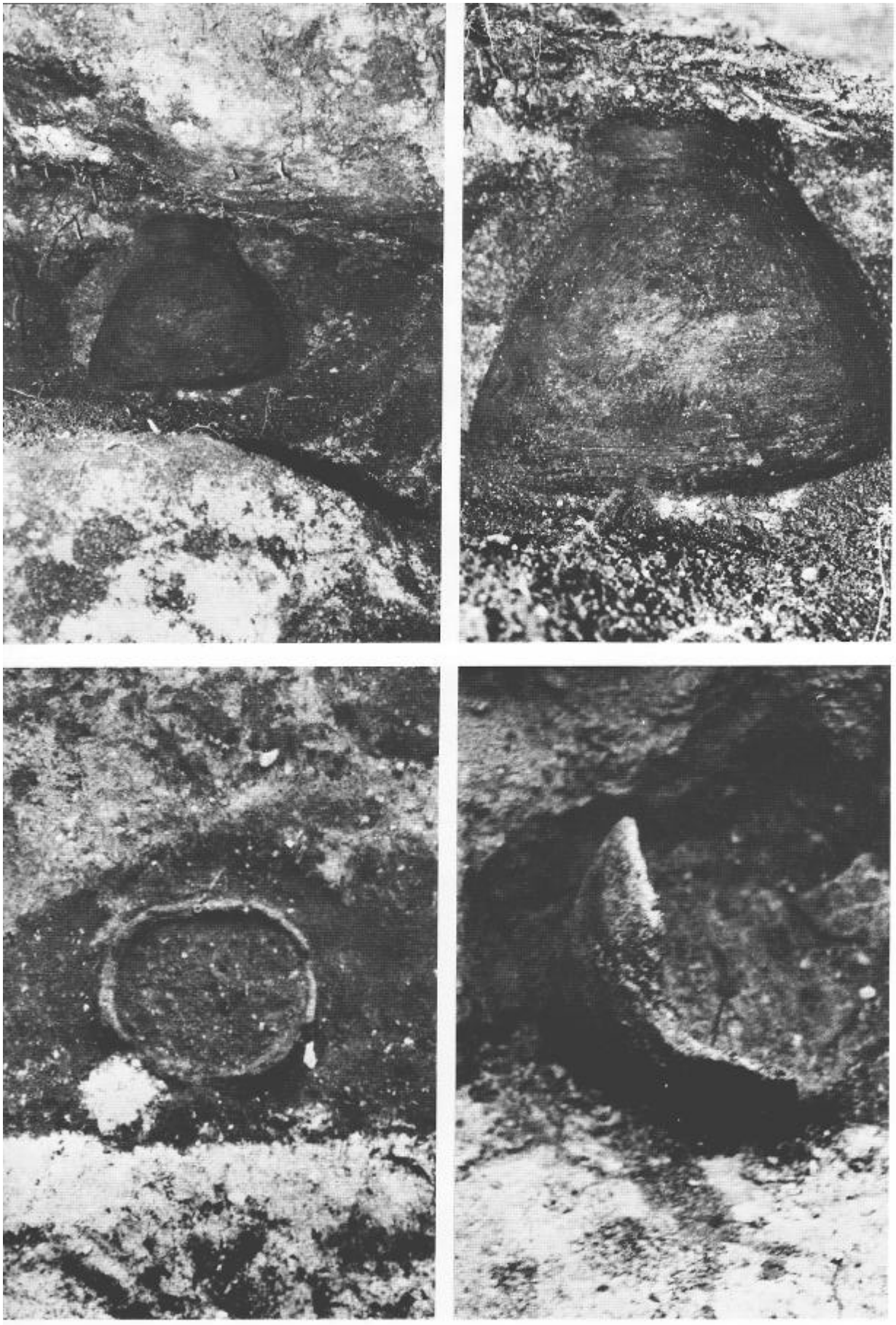


図版30　（上）ＳＫ016土壙（東▶西）
（下）ＳＫ018土壙（北▶南）

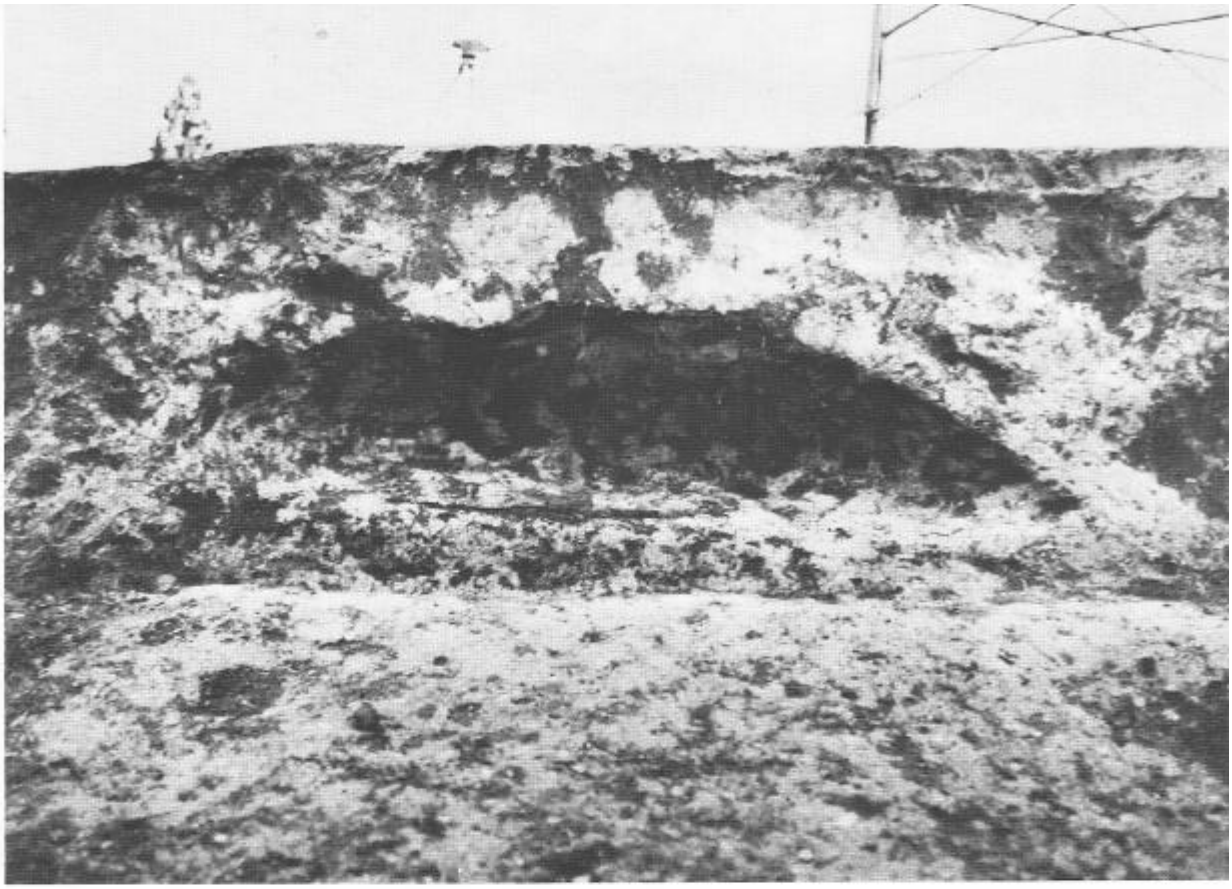


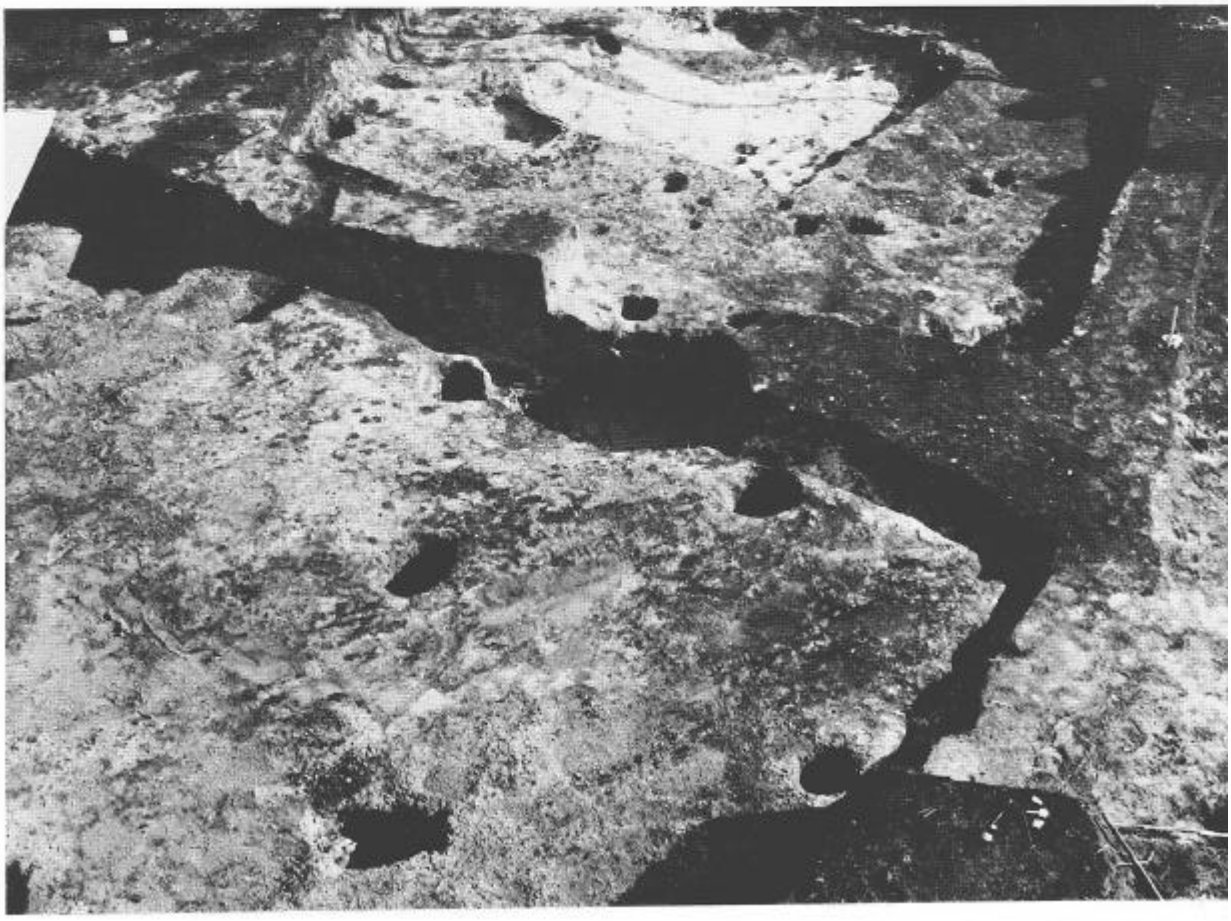


図版31　(上) ＳＫ019 土壙(北▶南)
(下) ＳＫ023 土壙(西▶東)

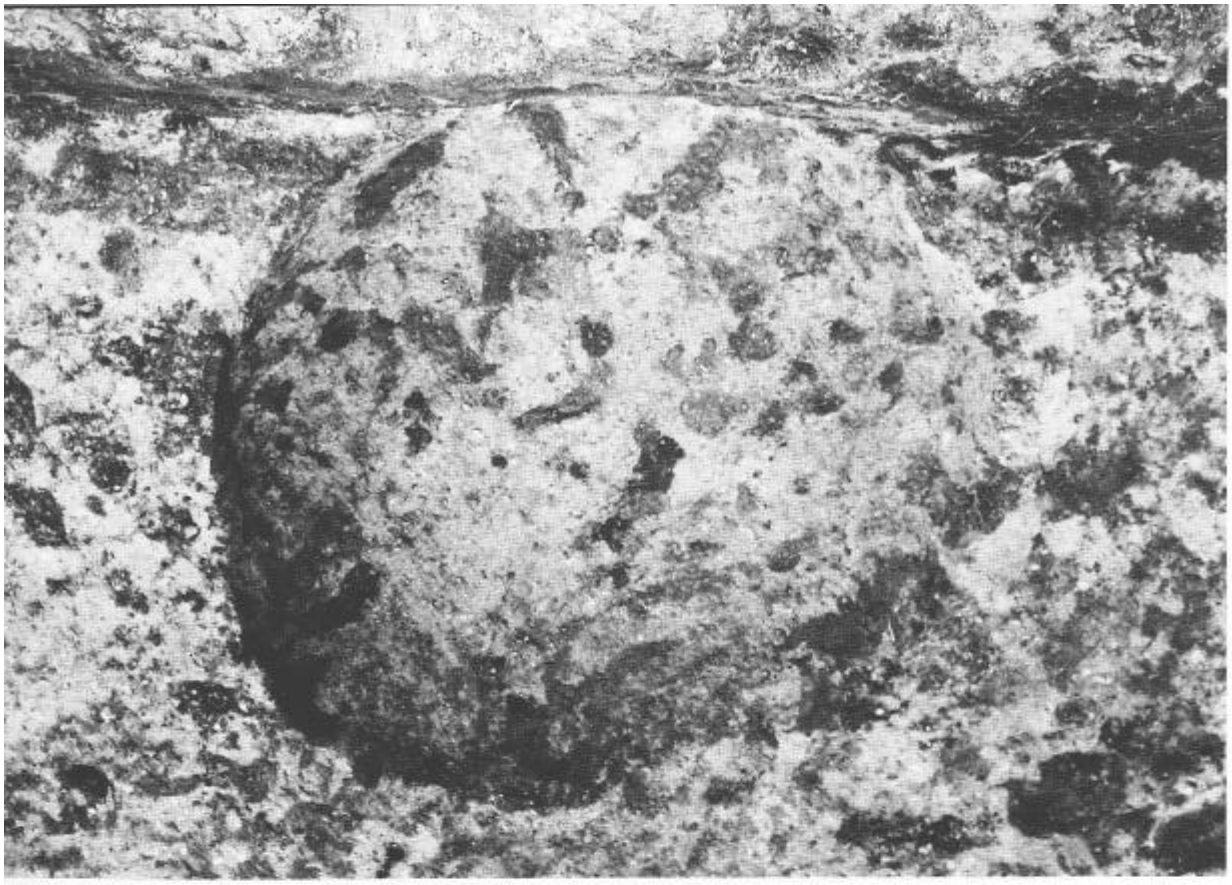


図版32　ＳＫ023土壙土器出土状態　（上）　RP 1
（左下）RP 2
（右下）RP 3





図版33　（上）ＳＫ024 土壙（南西▶北東）
（下）ＳＫ025 土壙（北▶南）



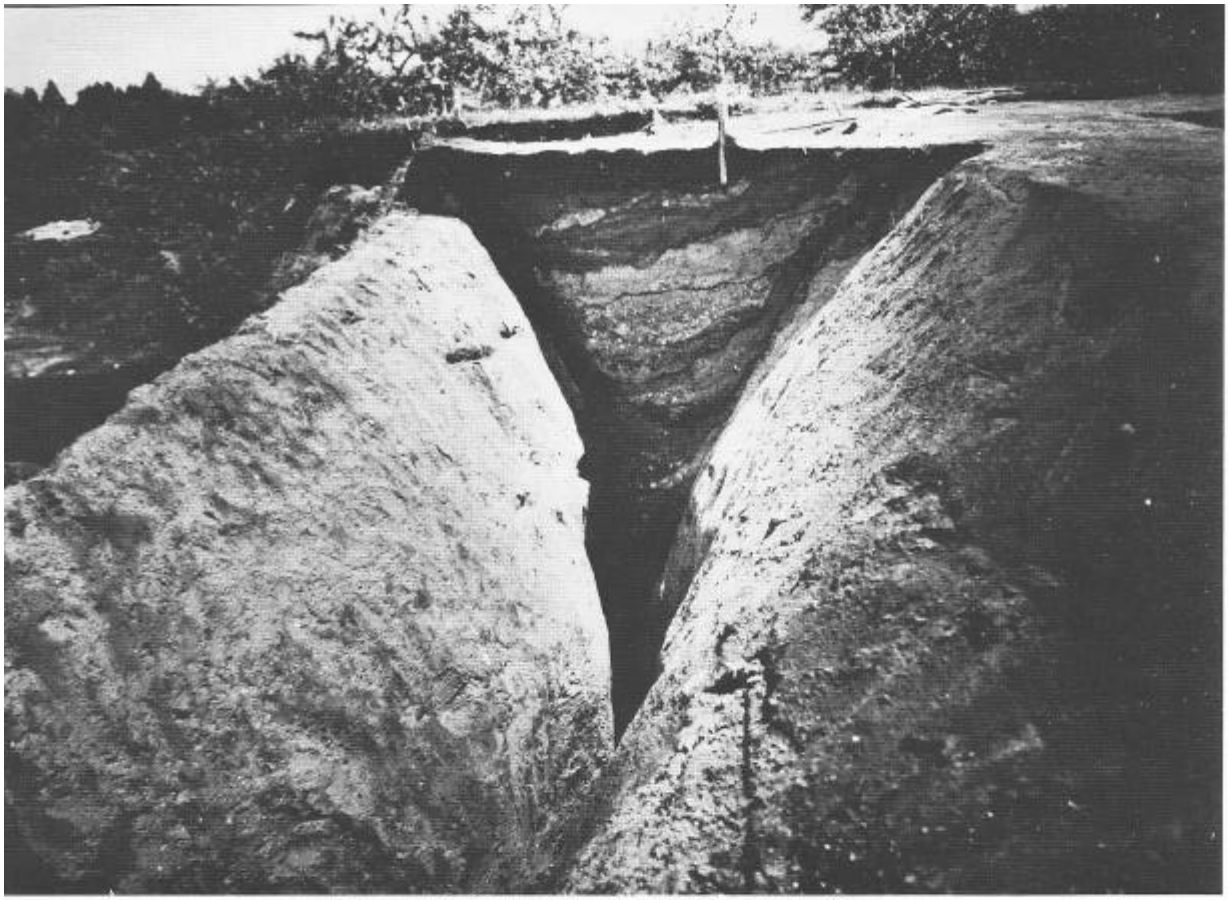
図版34　（上）ＳＫ026 土壙（北▶南）
（下）ＳＫ022 土壙（北西▶南東）

図版35

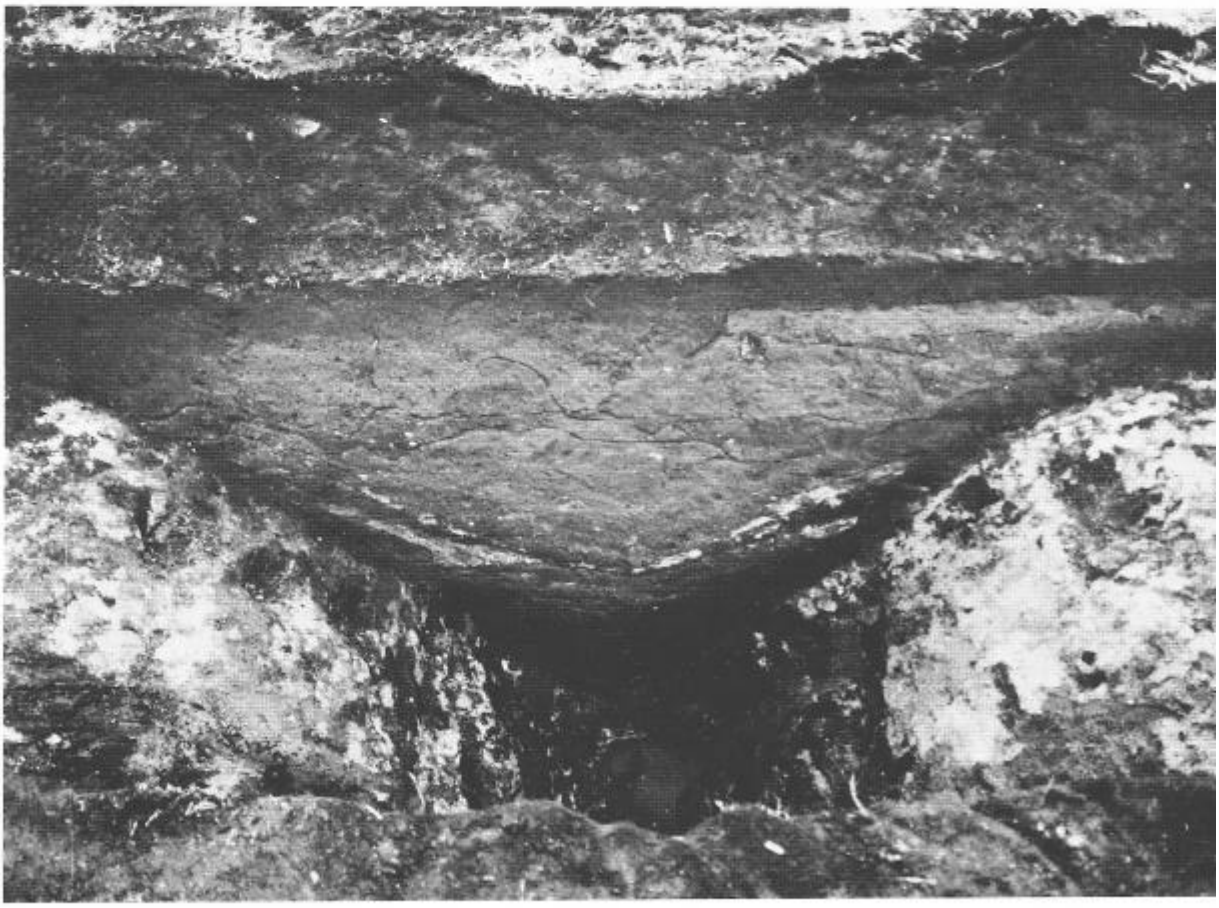
ＳＤ010堀跡

（上）全　景
（北東▶南西）

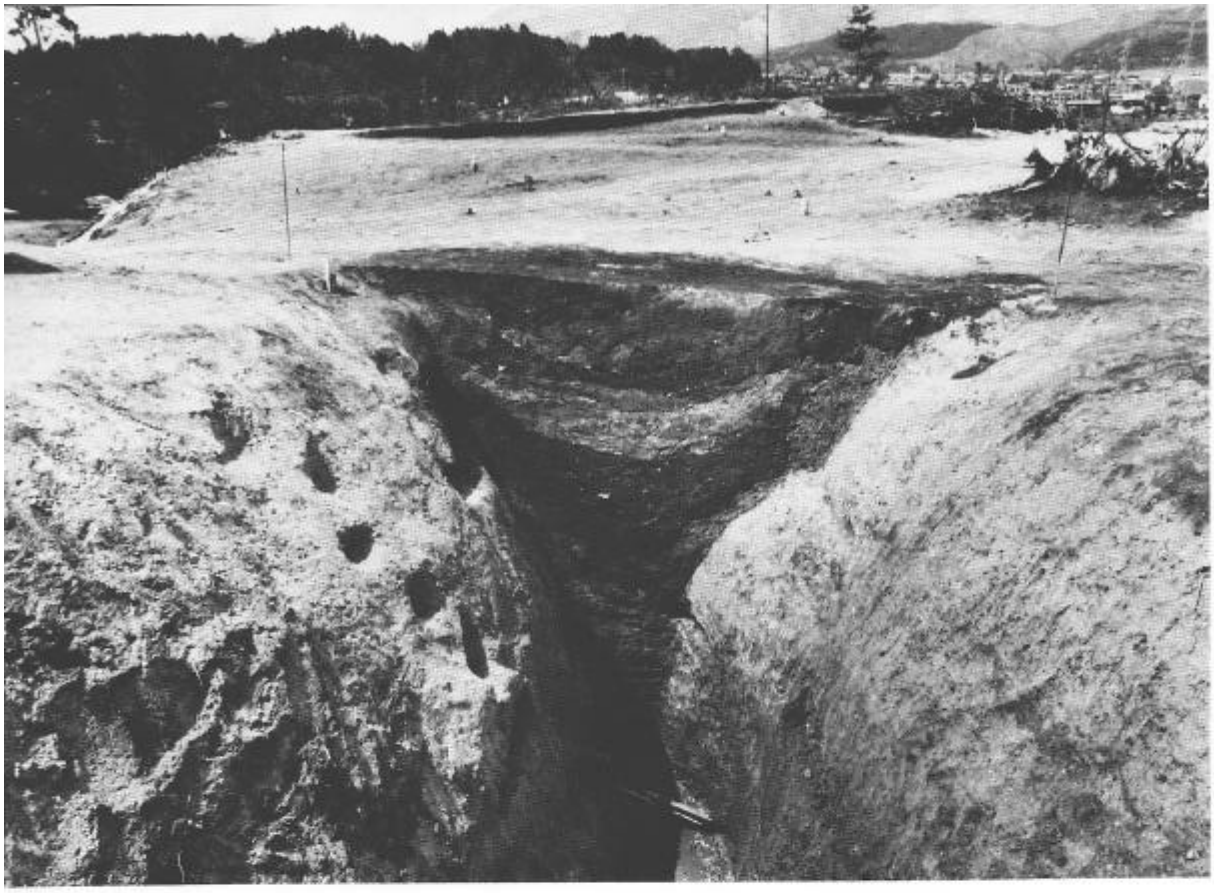
（下）断面Ａ
（東▶西）



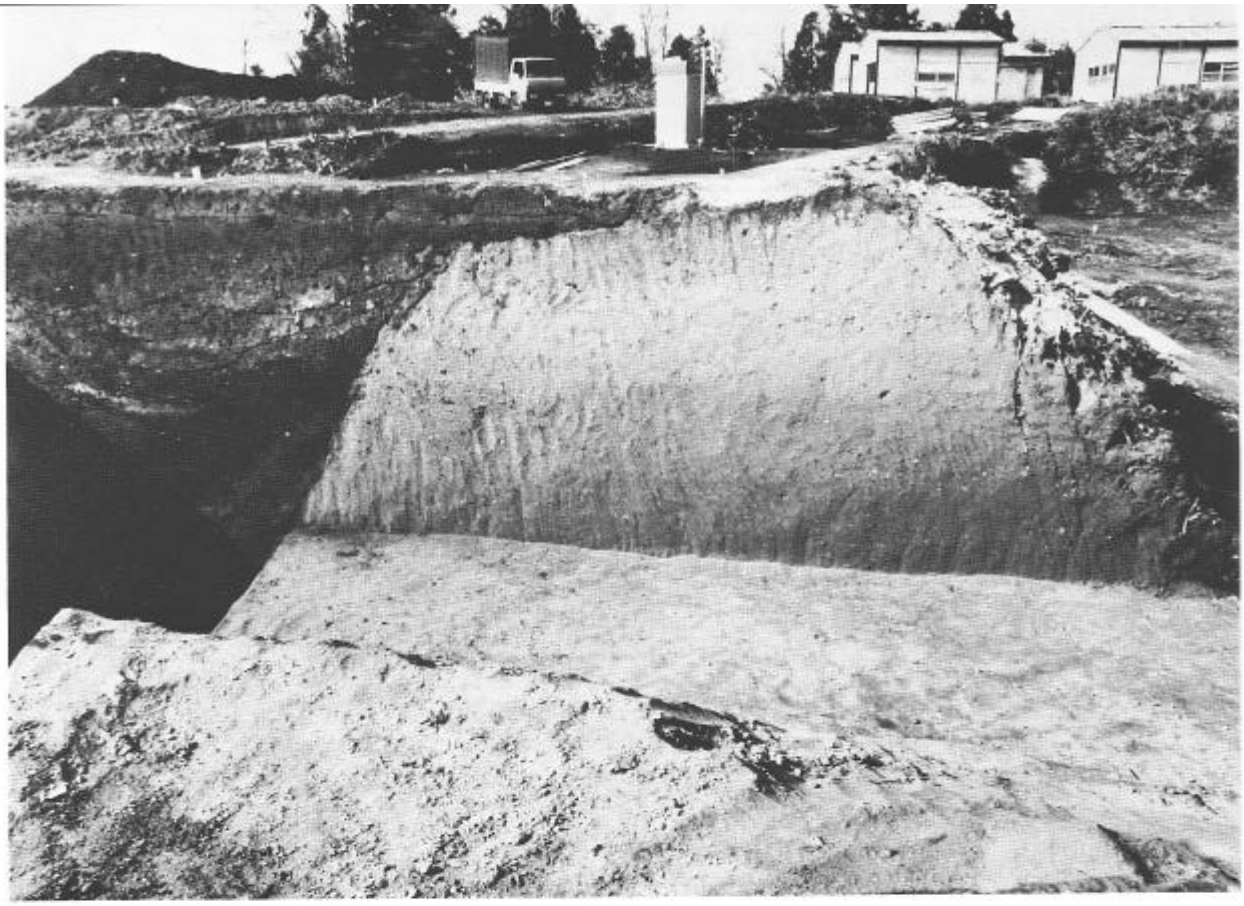
図版36　ＳＤ010堀跡　（上）断面Ｂ（西▶東）
（下）断面Ｃ（西▶東）



図版37　ＳＤ011堀跡　（上）全　景（南▶北）
（下）断面Ａ（西▶東）

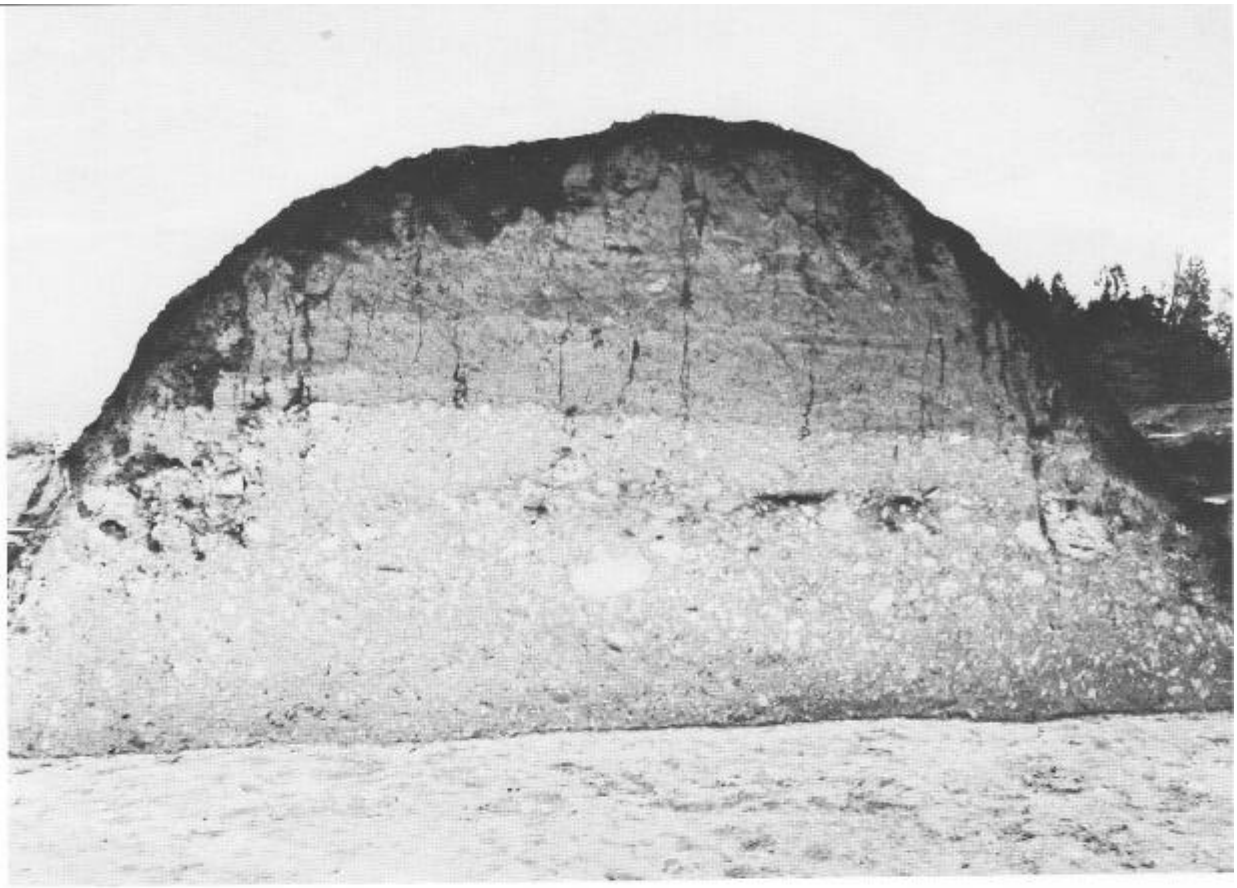


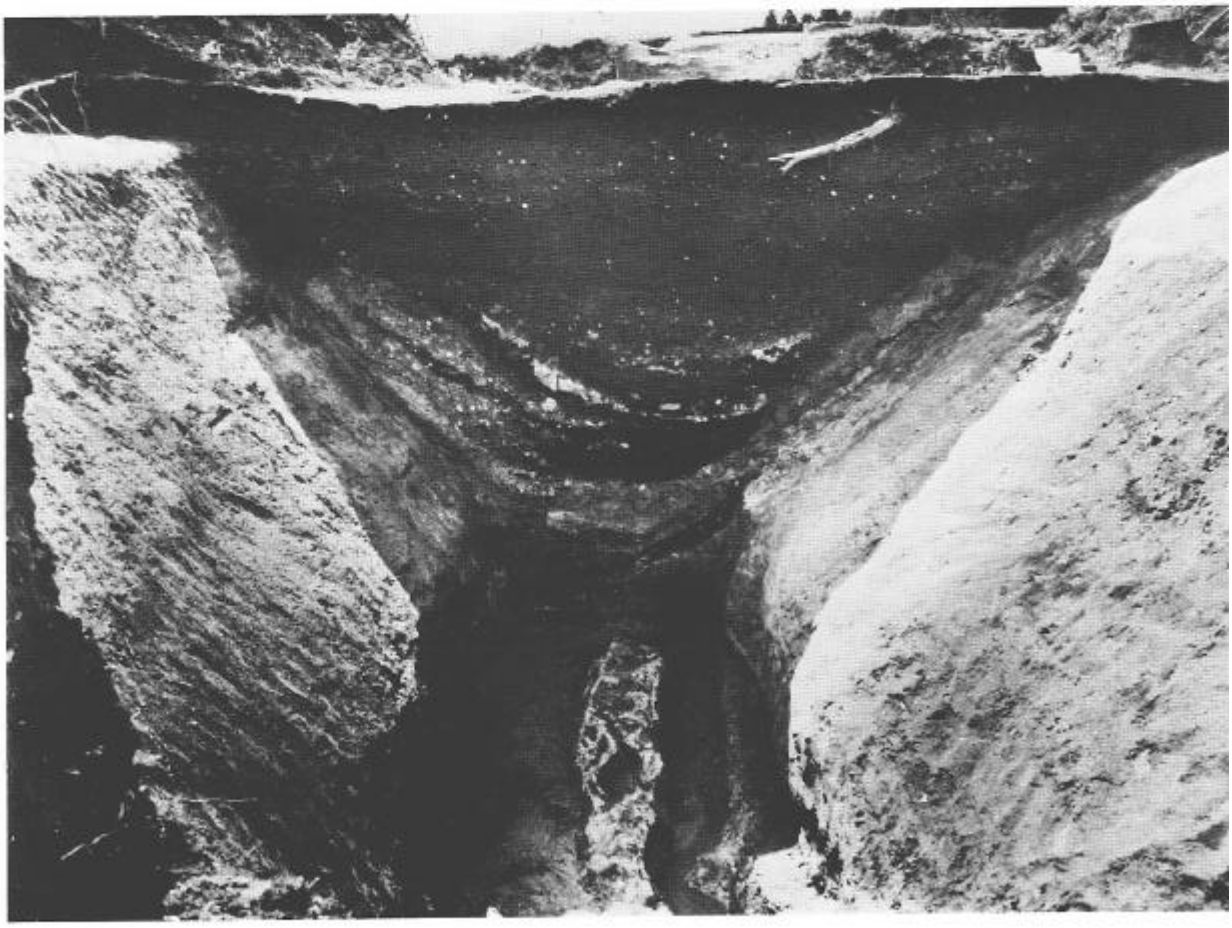
図版38　ＳＤ011堀跡　（上）断面Ｂ（西▶東）
（下）断面Ｃ（南東▶北西）



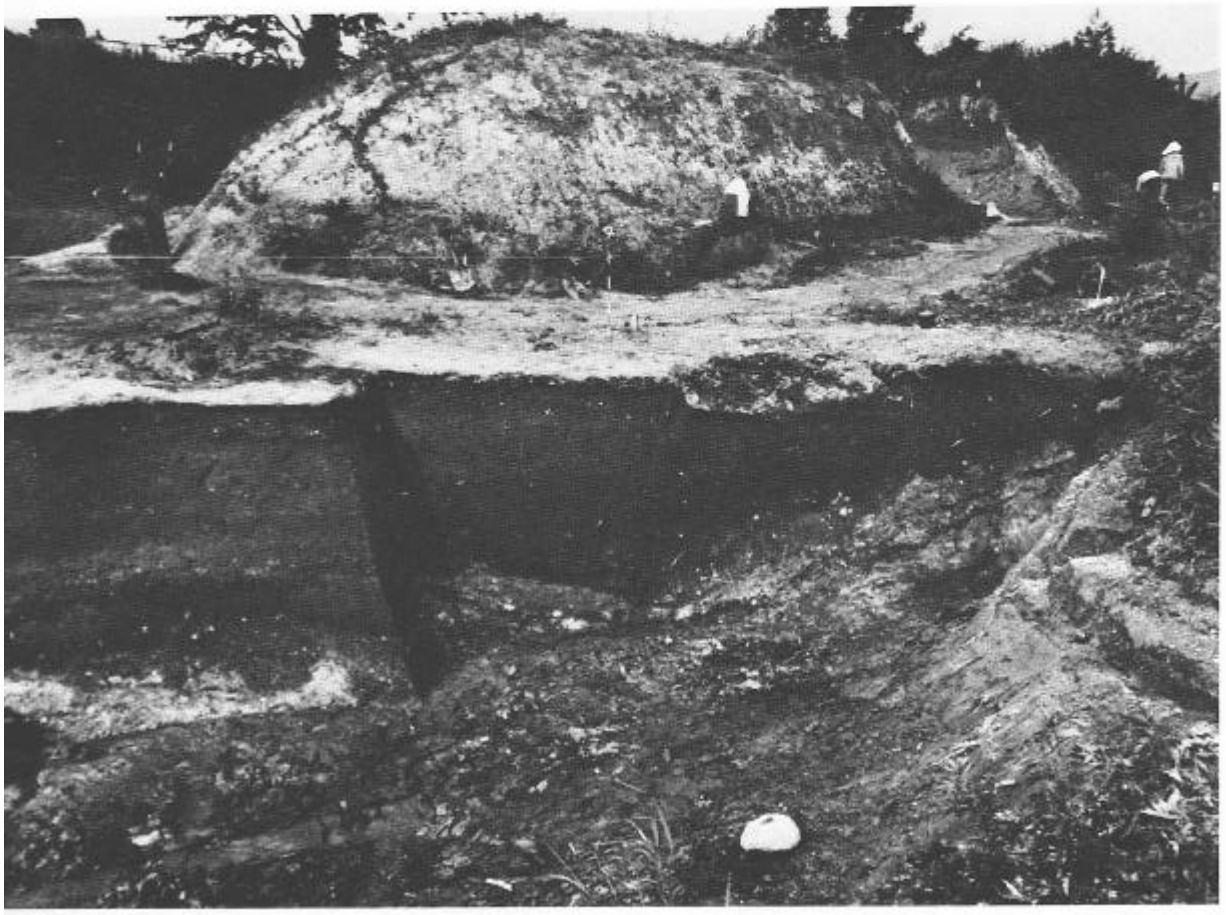
図版39　（上）ＳＤ011、013間断面Ｃ（南▶北）
（下）Ⅰ郭北側、ＳＤ012、013堀跡（南東▶北西）

図版40　（上）ＳＤ012堀跡断面Ｄ（南西▶北東）
（下）Ｉ郭南側、ＳＤ013堀跡（北▶南）



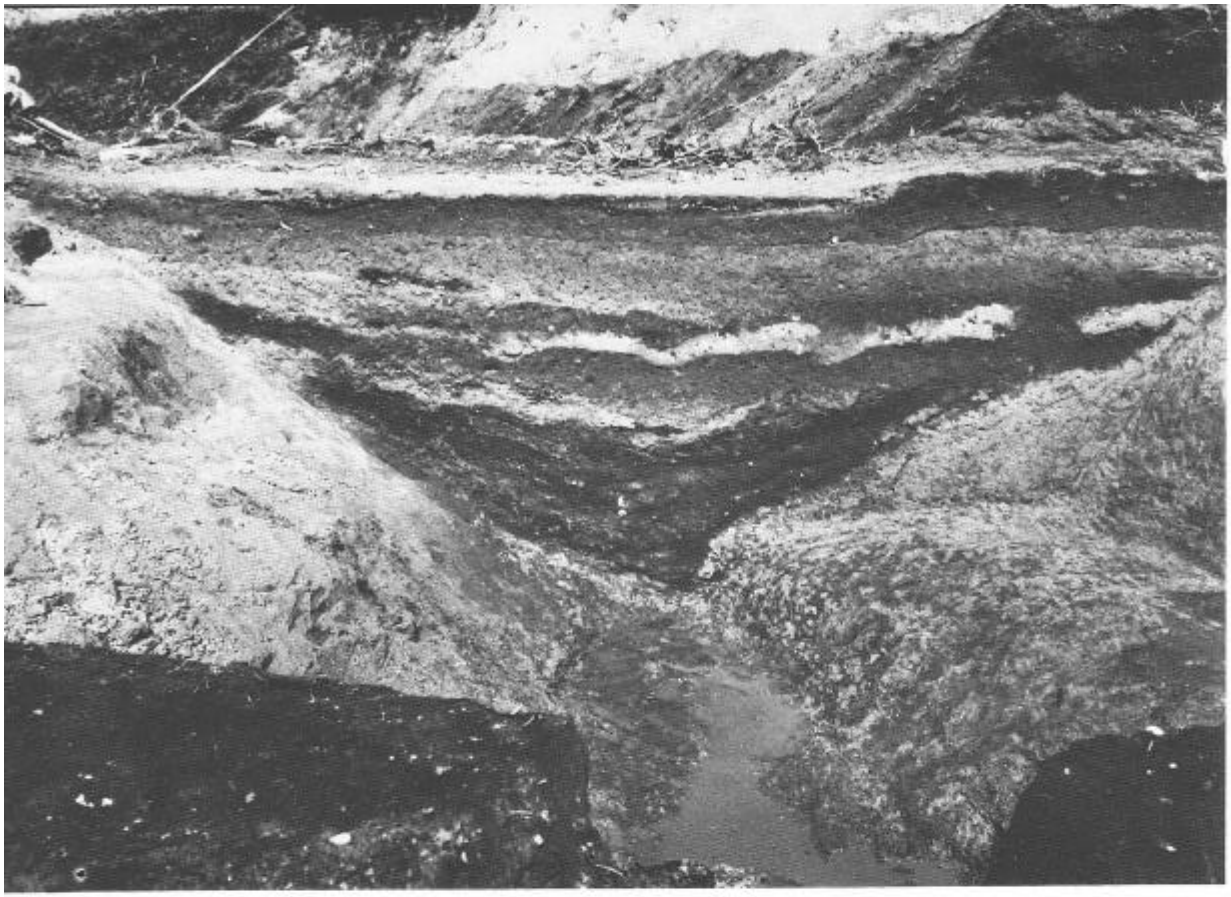


図版41　（上）ＳＤ012、013間断面Ｅ（東▶西）
（下）ＳＤ013堀跡断面Ｅ（東▶西）

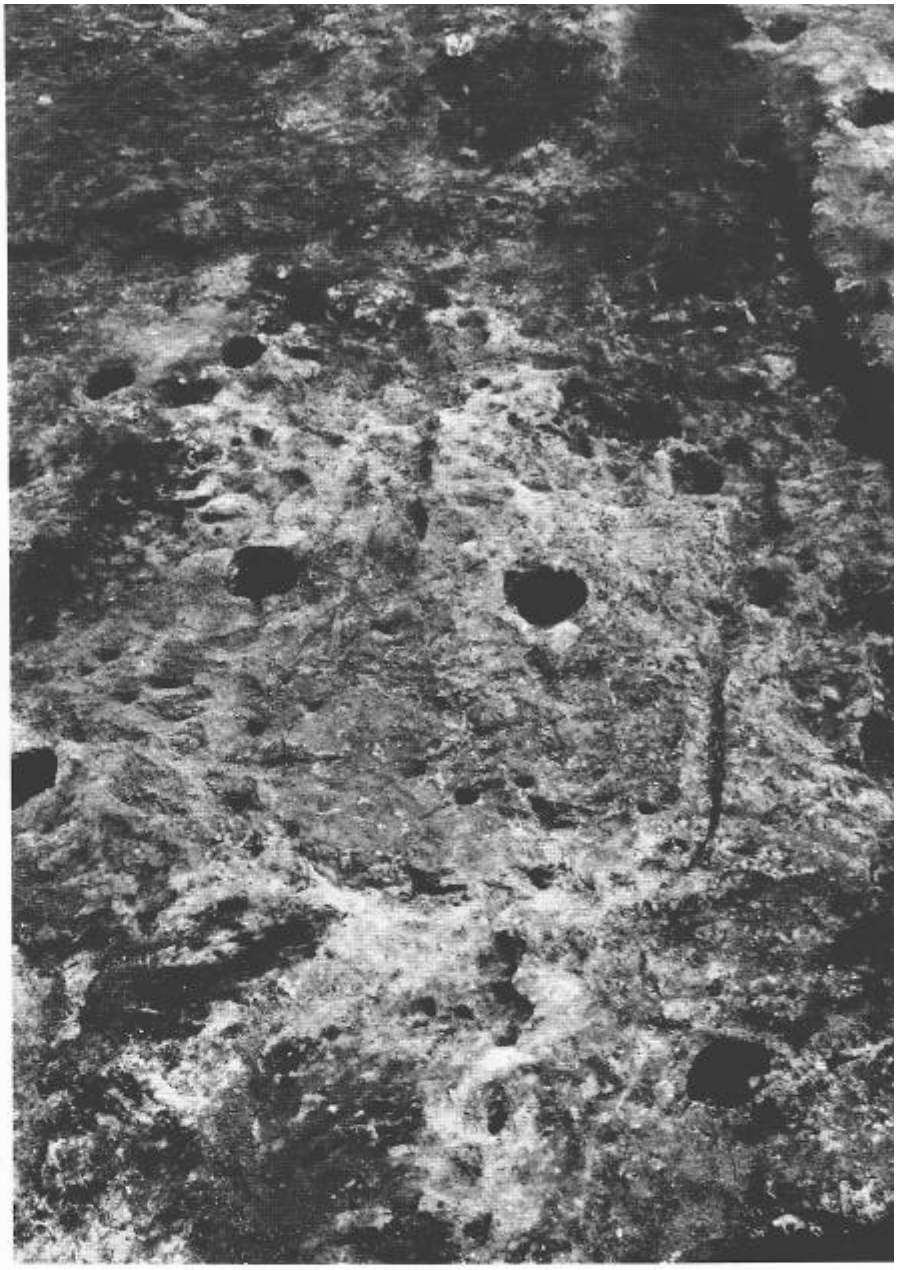


図版42　ＳＤ013堀跡　（上）断面Ｃ西側（南▶北）
（下）断面Ｃ東側（南▶北）

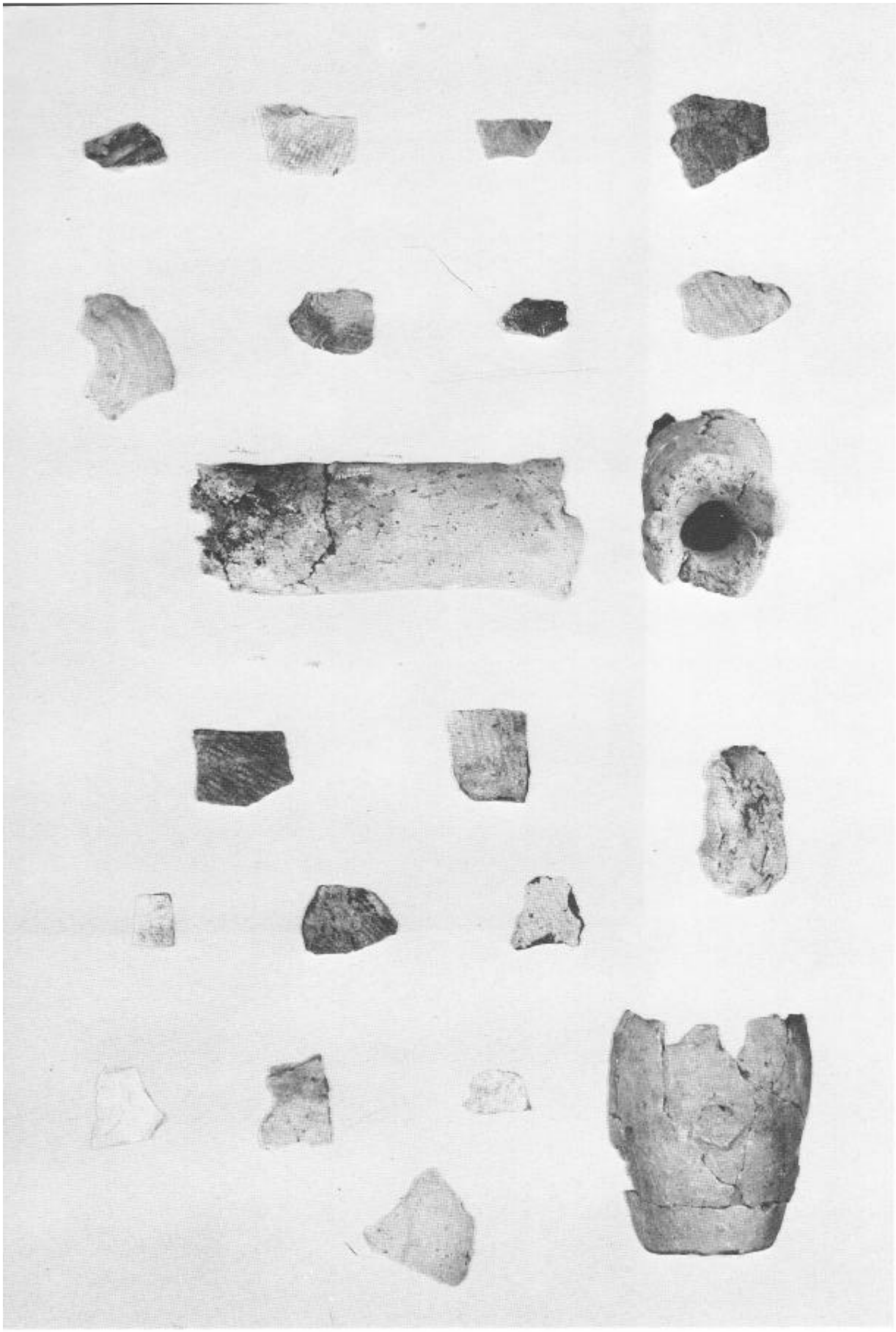
図版43　ＳＤ013堀跡　（上）断面Ｆ（東▶西）
（下）Ｆ付近木材出土状態（東▶西）



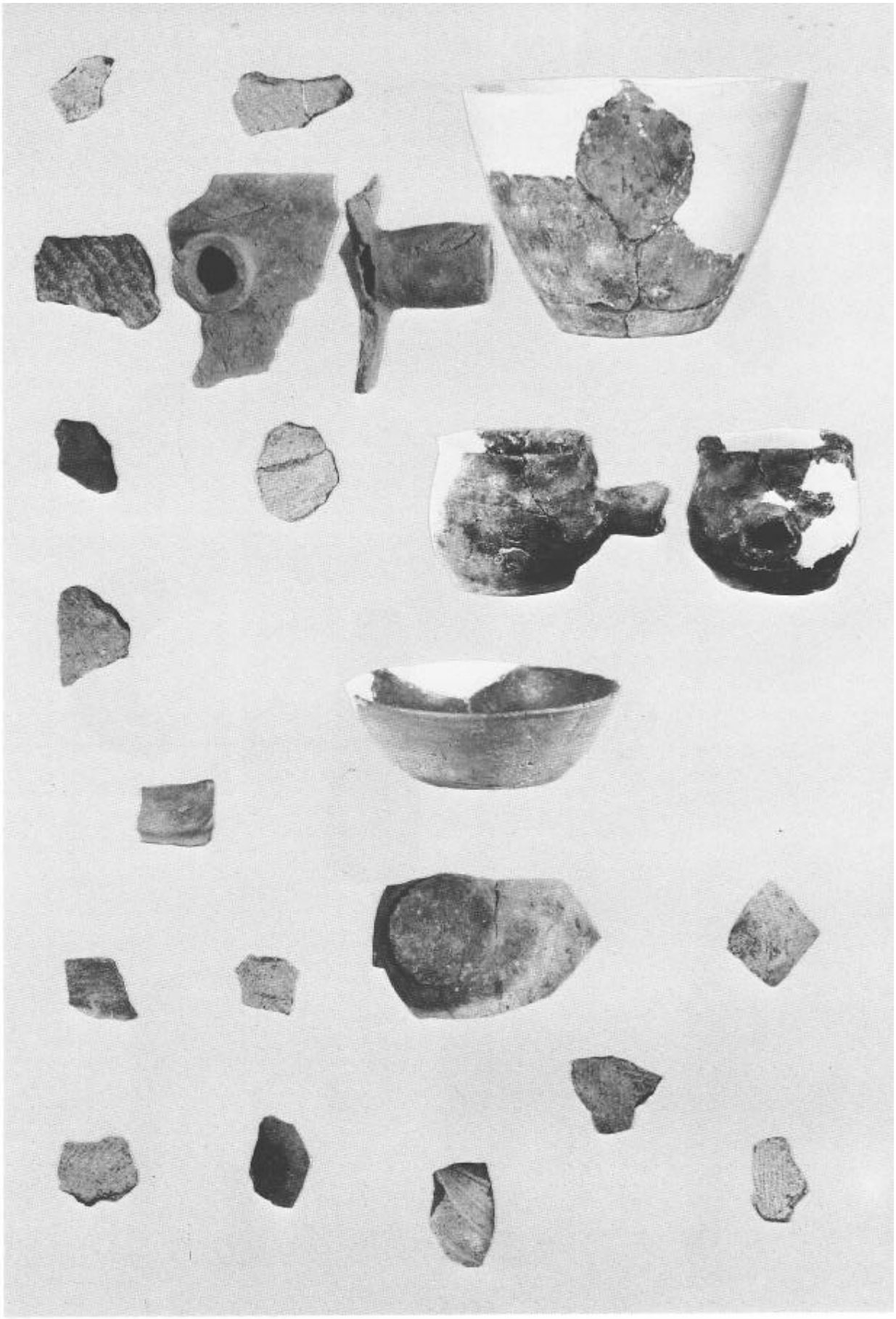
図版44　ＳＤ013堀跡　（上）断面Ｇ（西▶東）
（下）断面Ｈ（北▶南）



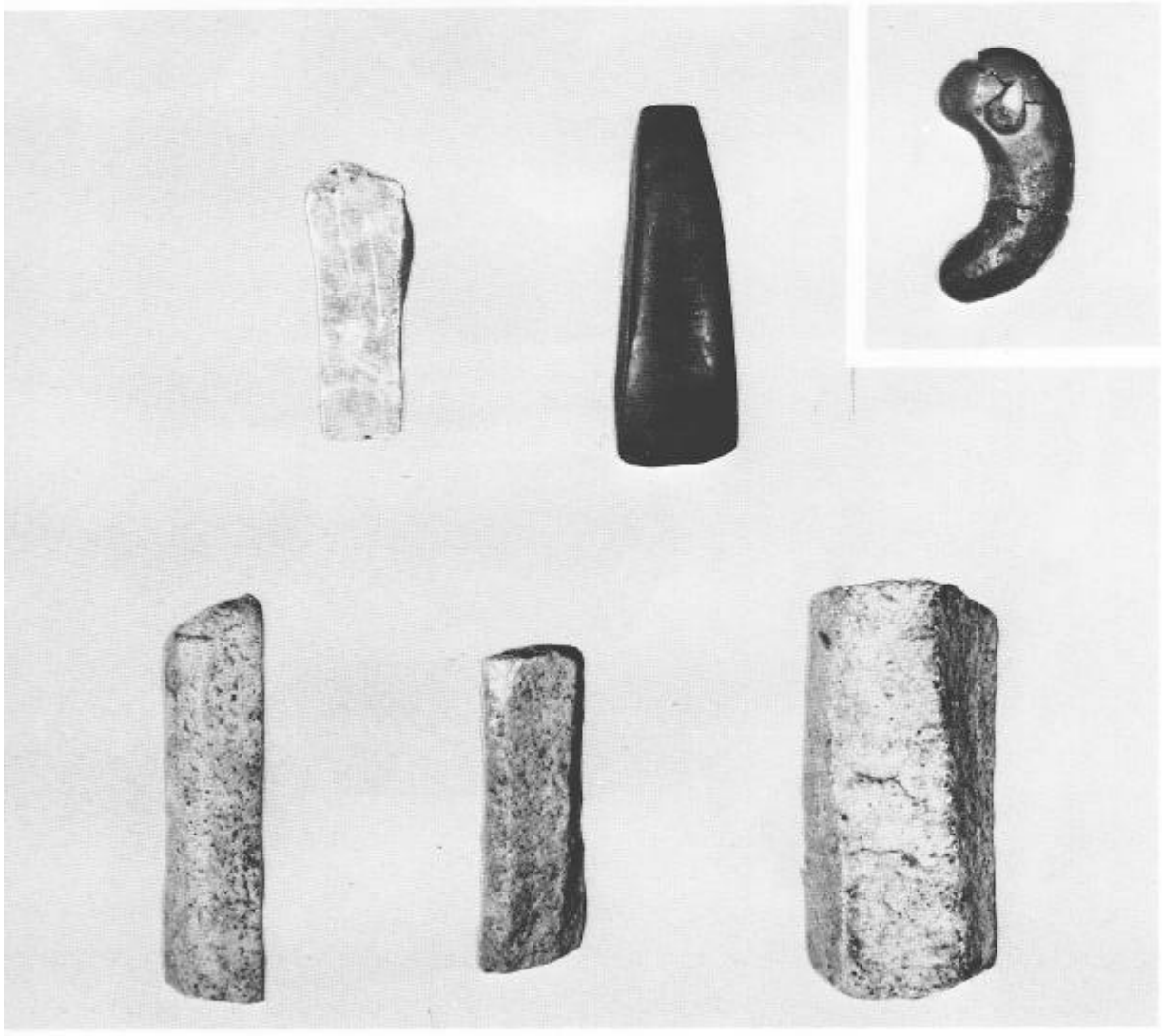
図版45　ＳＤ116溝　（西▶東）



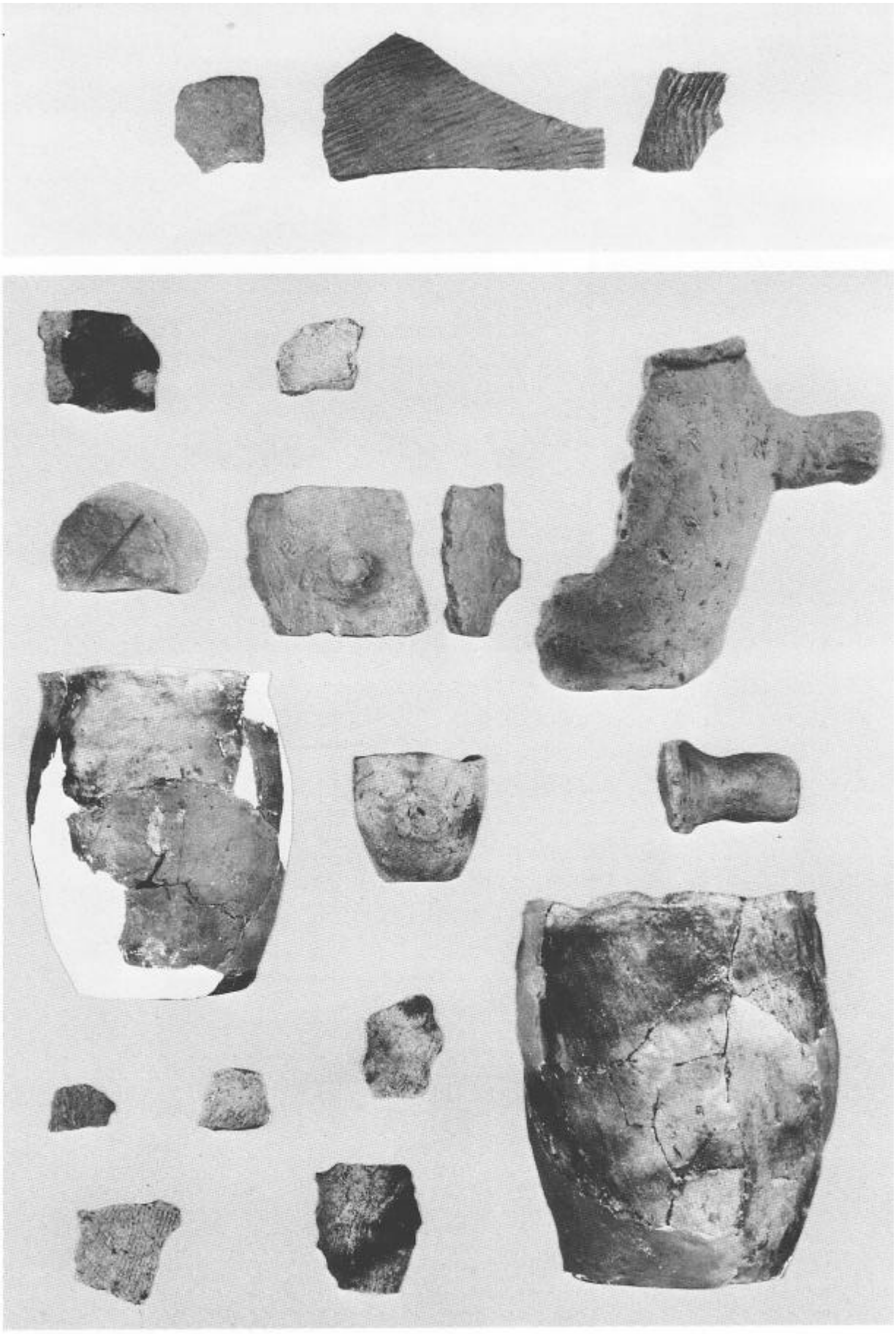
図版46　Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(1)



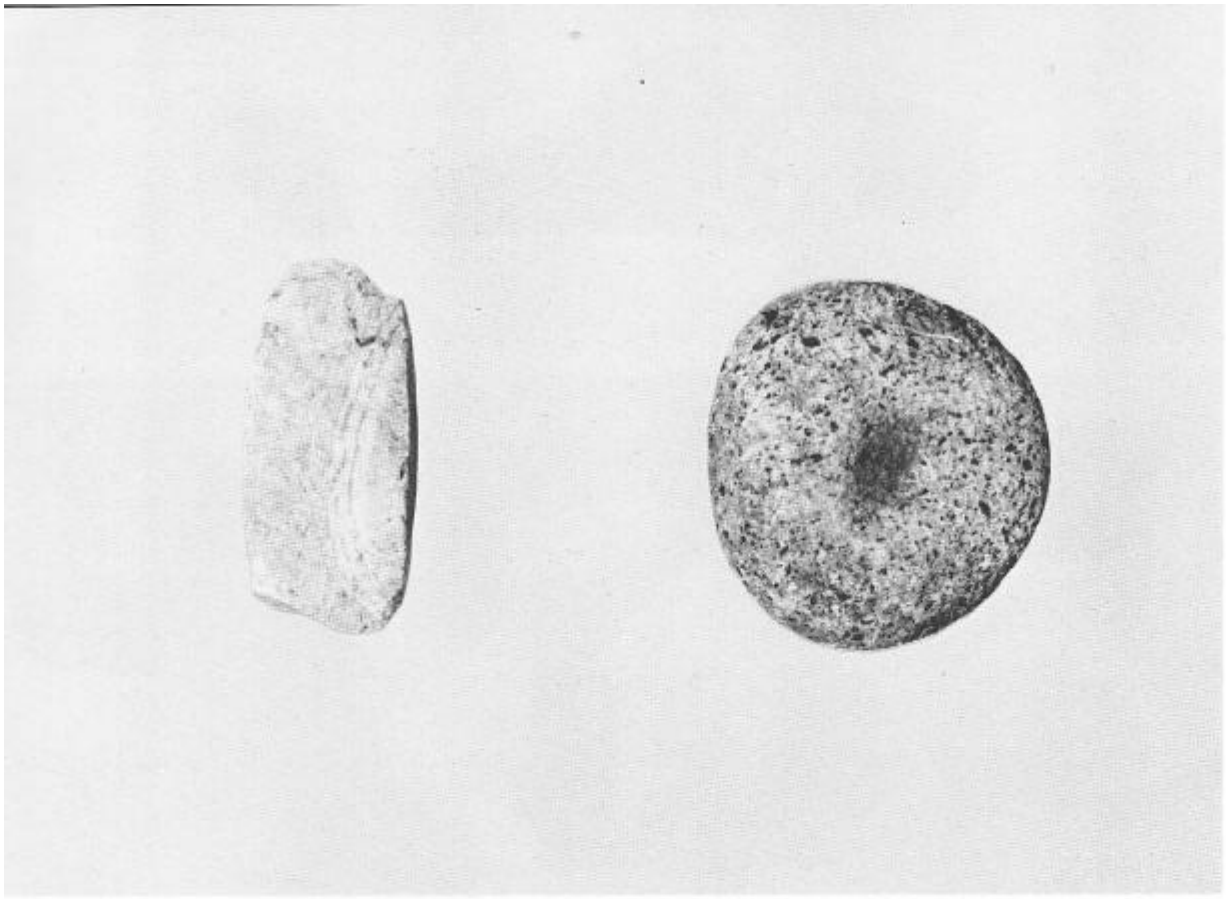
図版47　I 郭竪穴住居跡出土遺物(2)

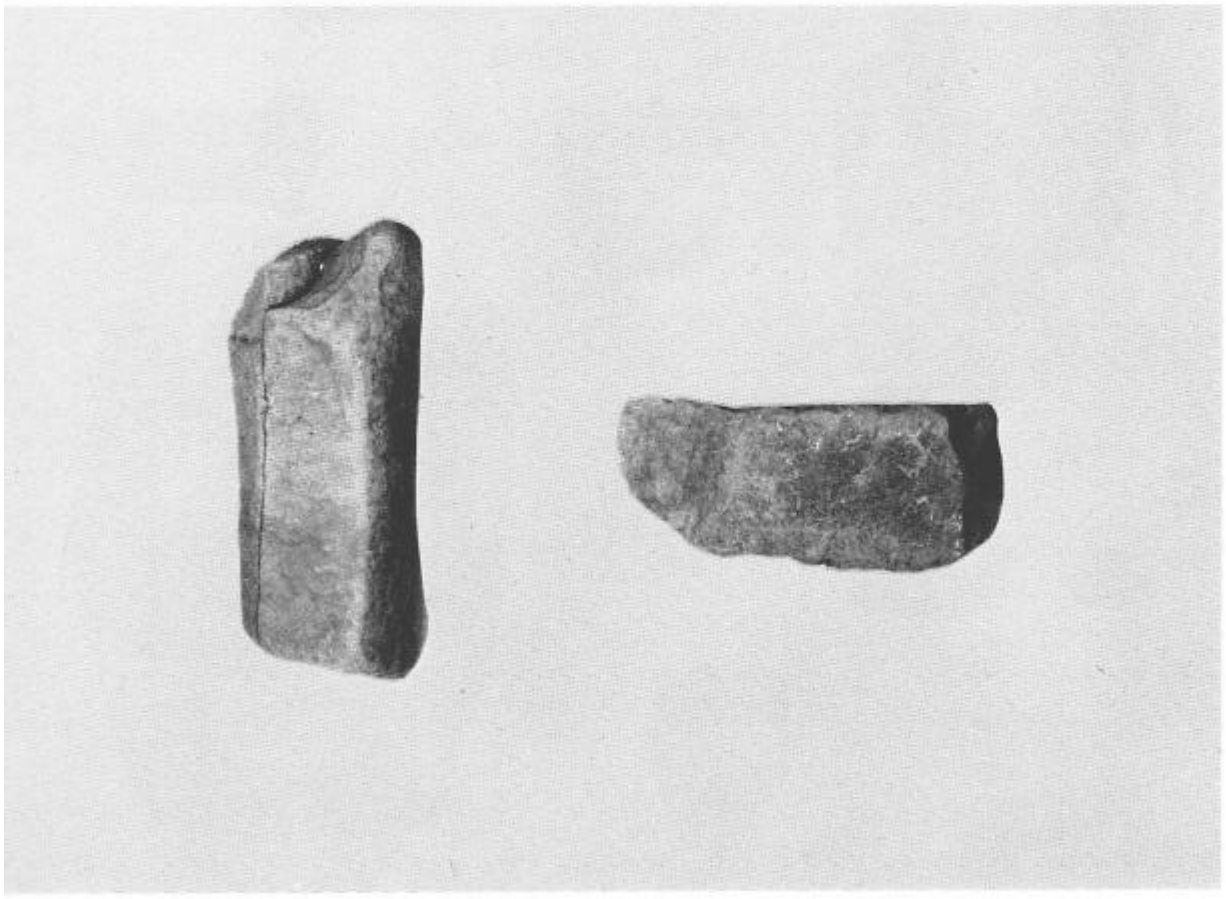


図版48　（上）Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(3)
　　（下）Ⅰ郭竪穴住居跡出土遺物(4)

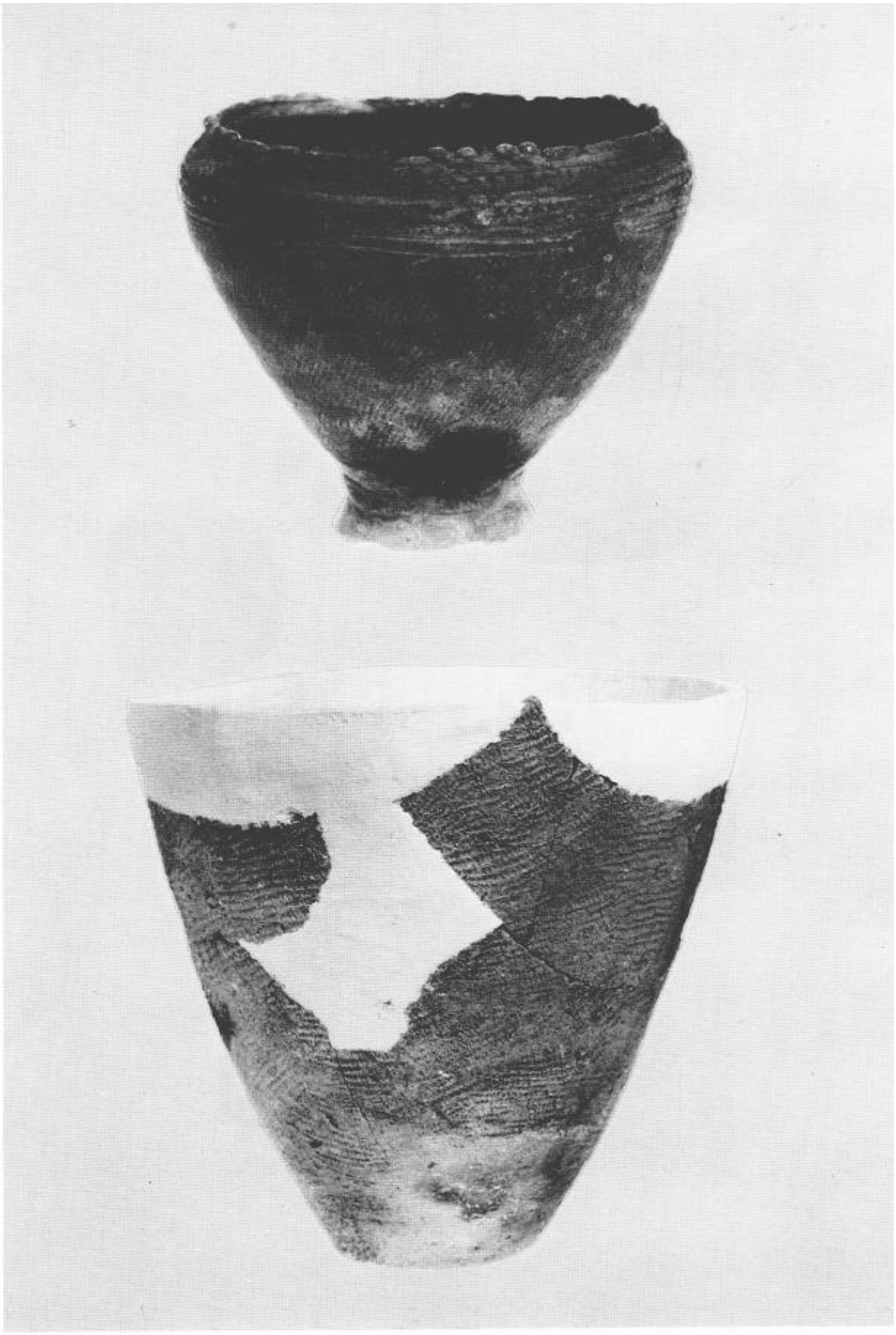


図版49　（上）Ⅰ郭土壙出土遺物
（下）Ⅱ郭竪穴住居跡出土遺物(1)

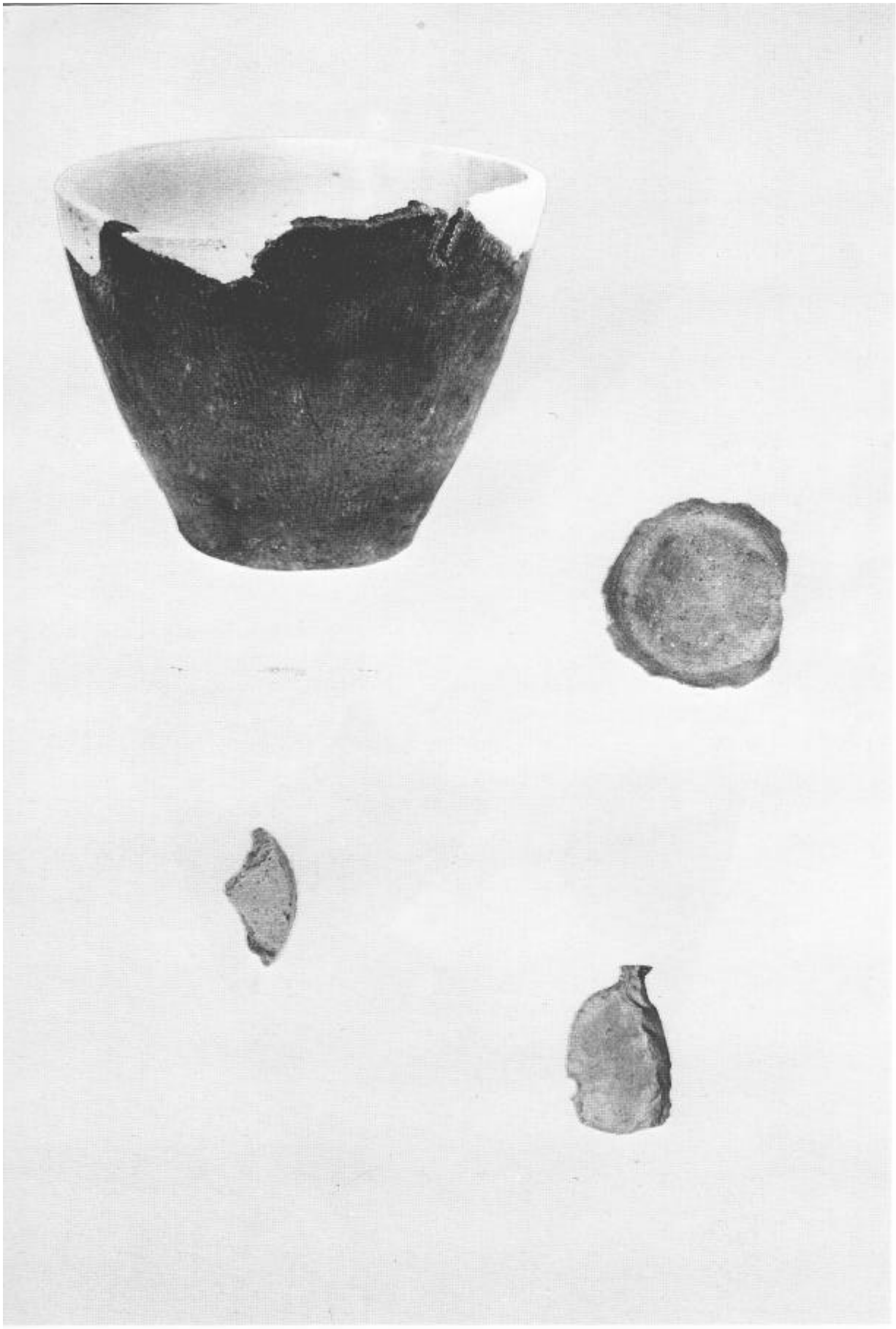




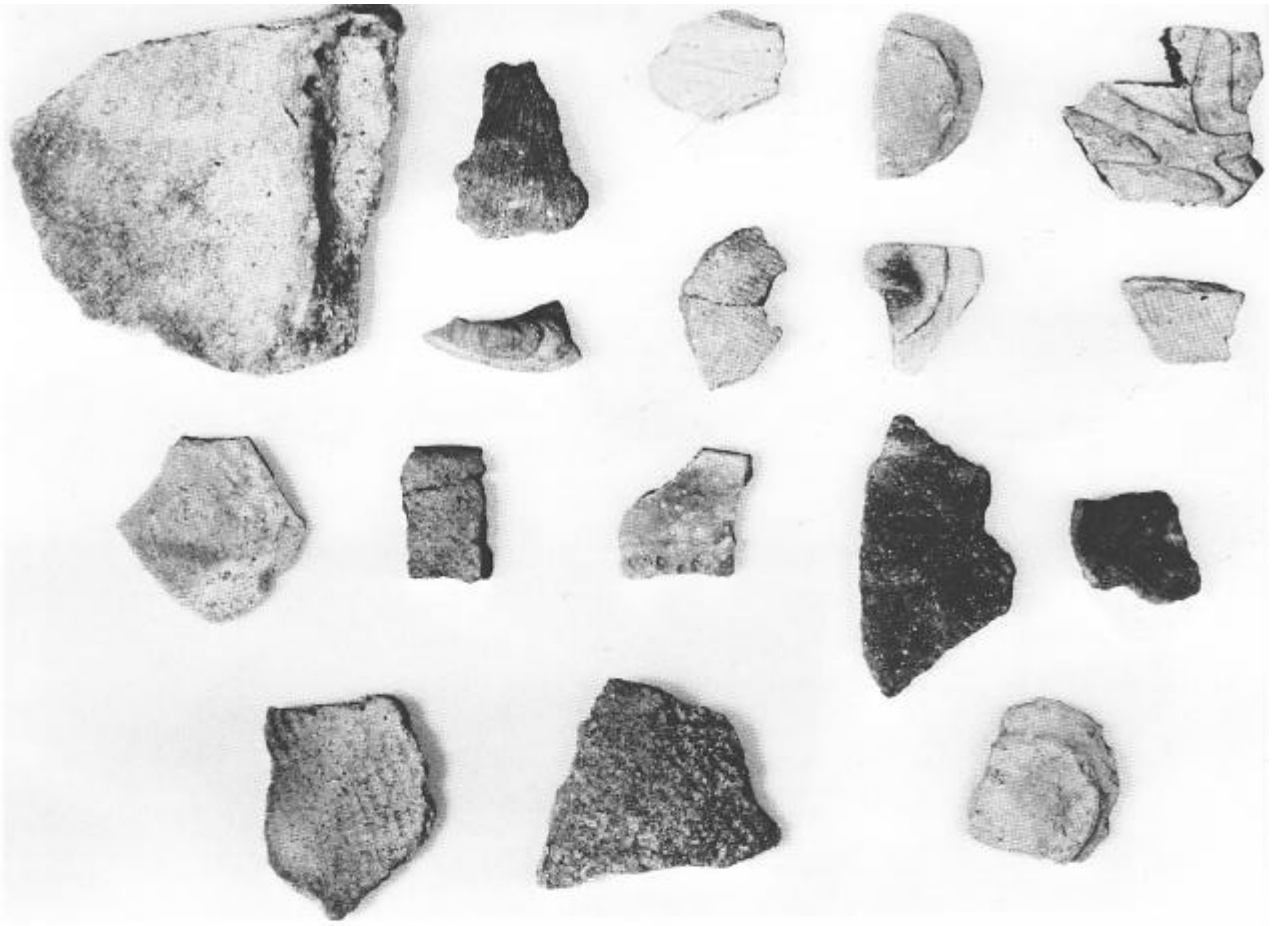
図版50　II郭竪穴住居跡出土遺物(2)

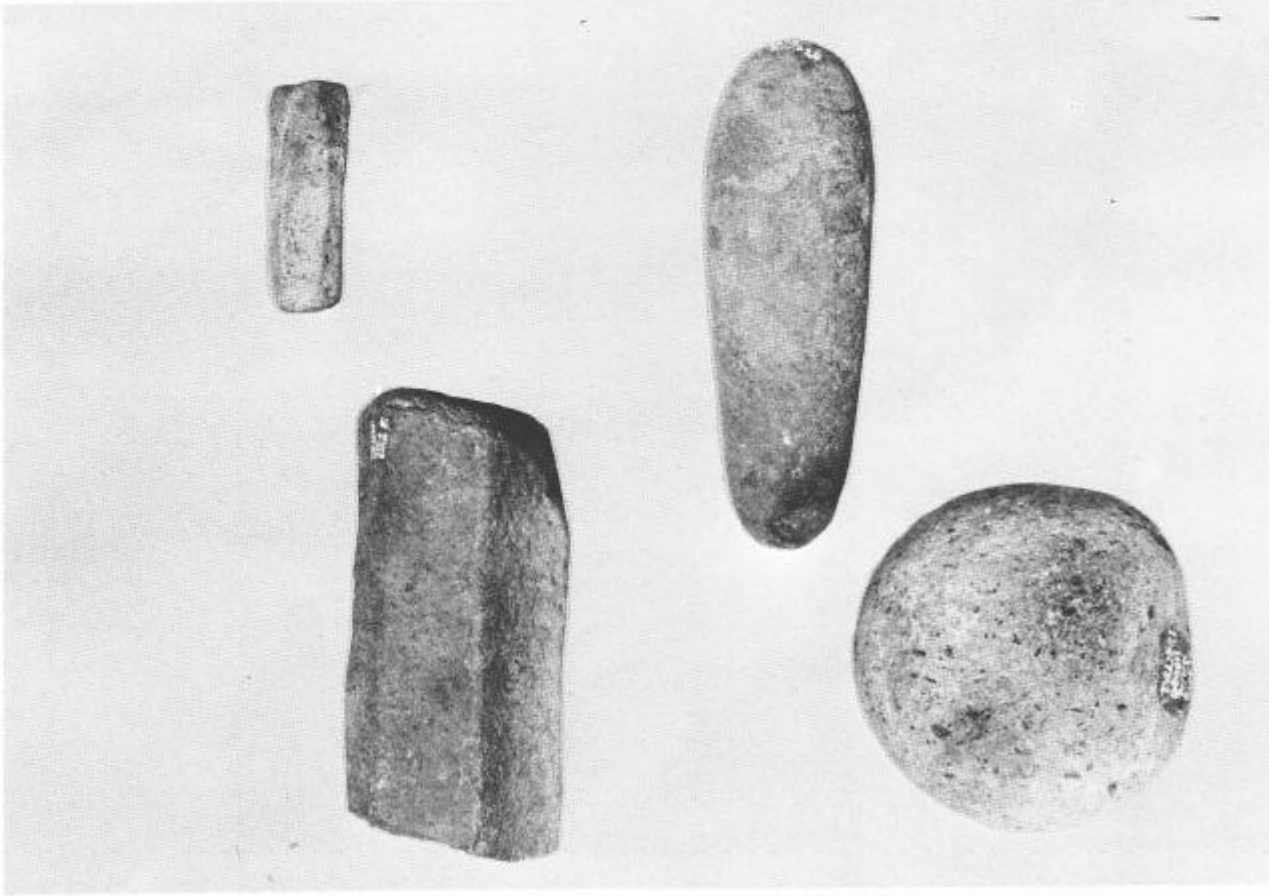


図版51　II郭土壙出土遺物(1)

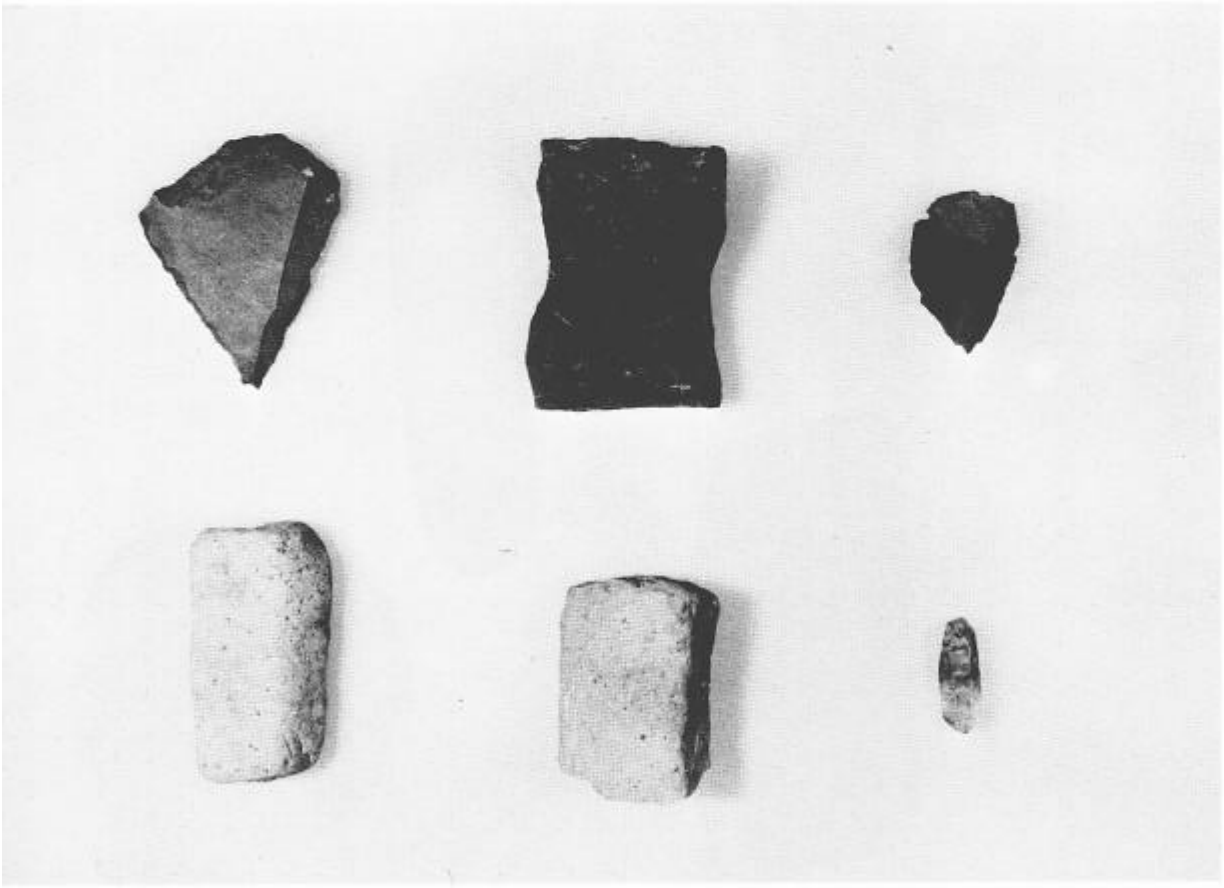


図版52　II郭土壙出土遺物(2)

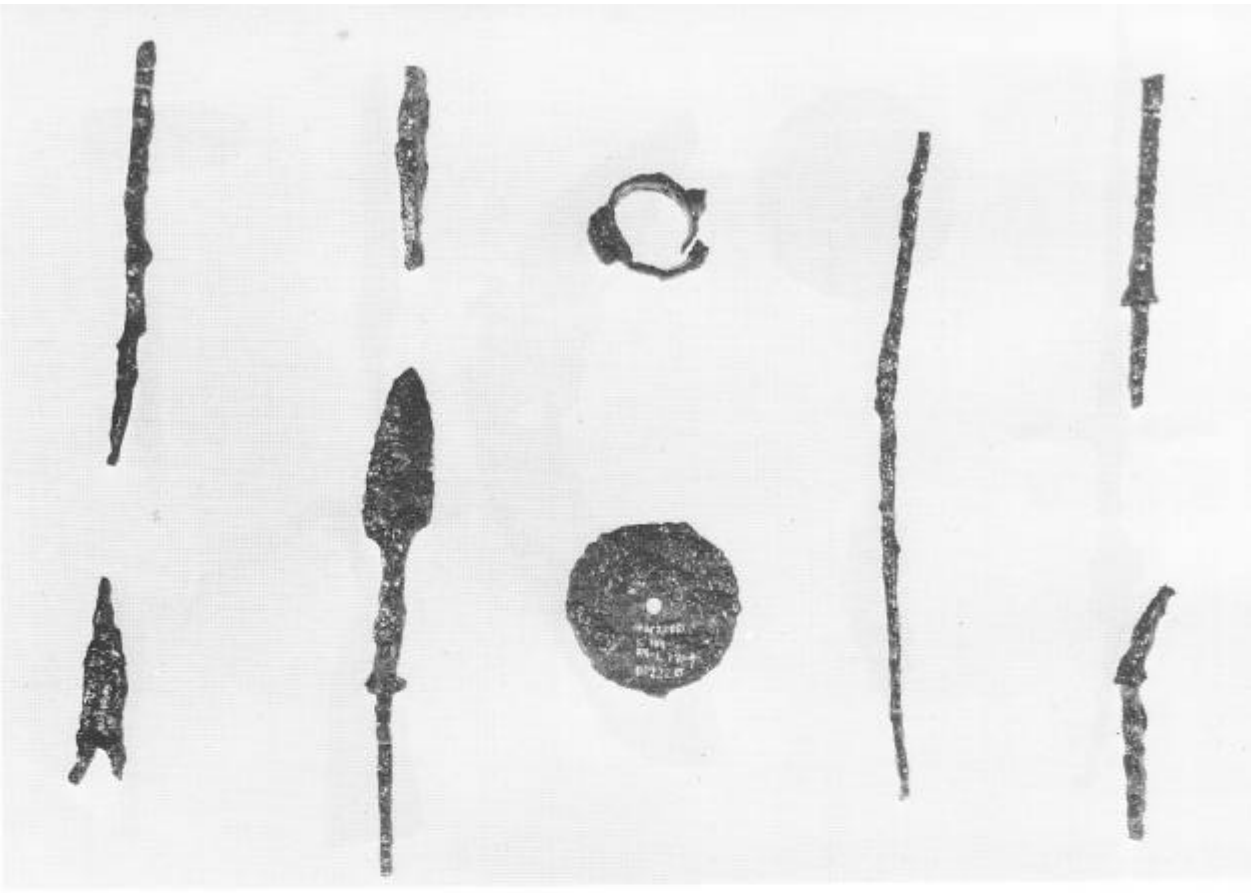


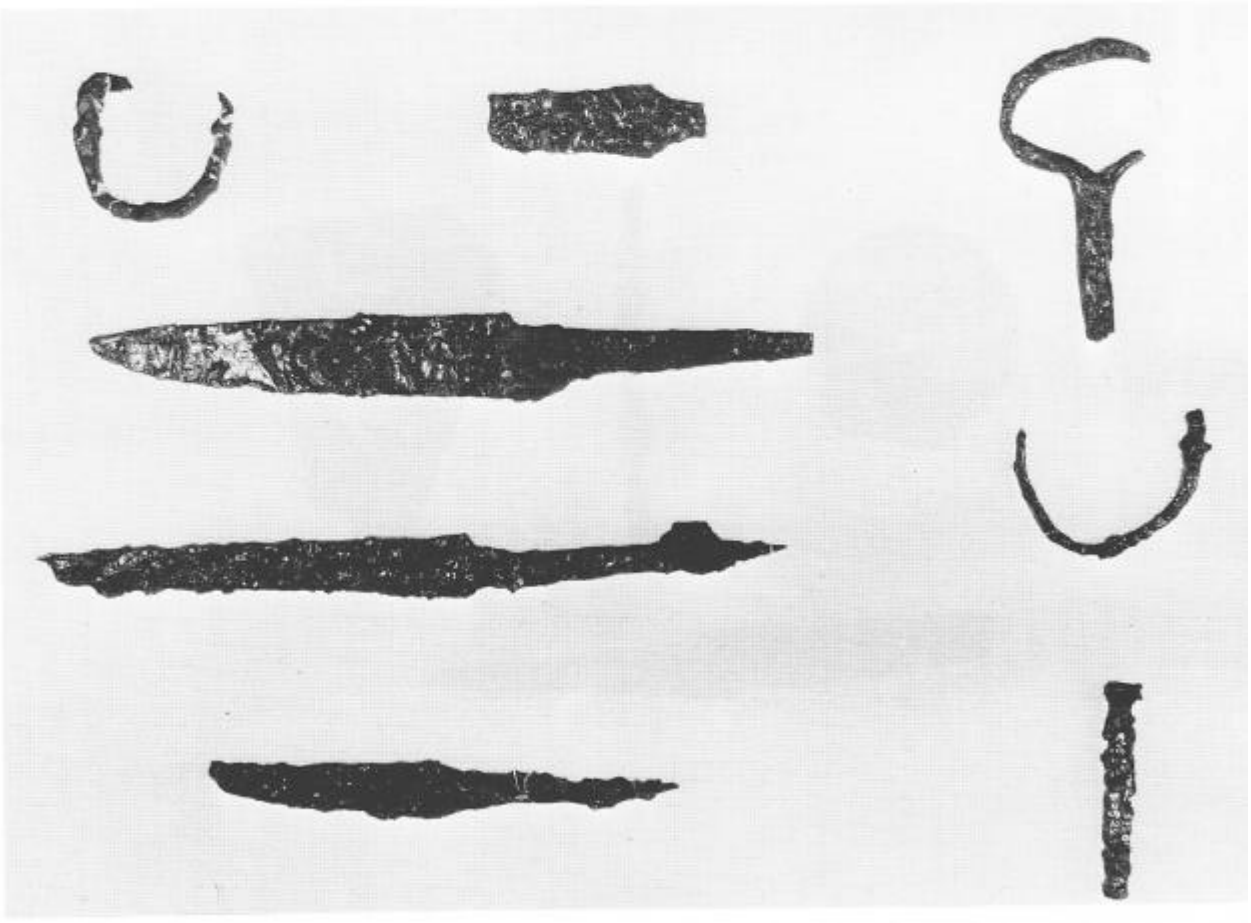


図版53　（上）堀跡出土遺物(1)
（下）堀跡出土遺物(2)



図版54　(上) 遺構外出土遺物(1)
(下) 遺構外出土遺物(2)

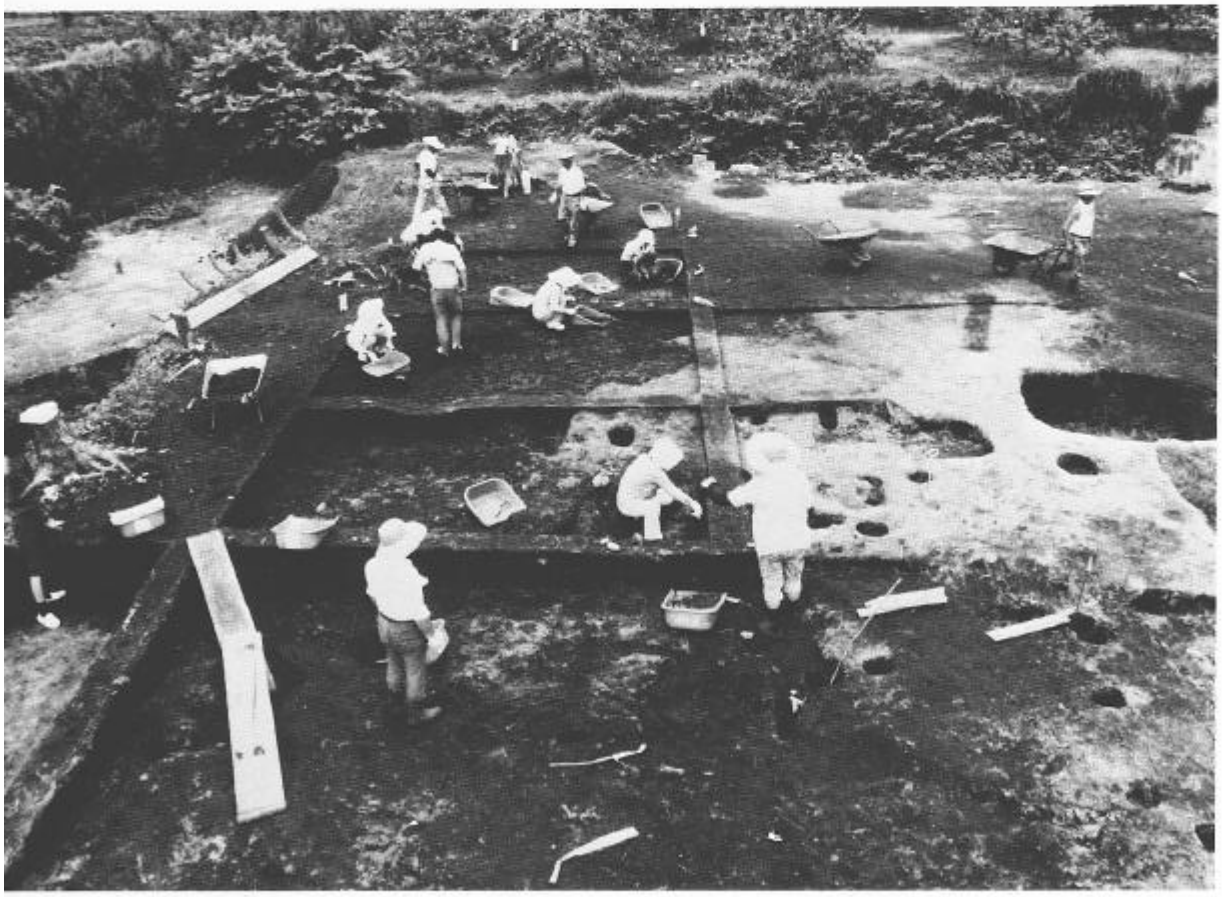




図版55　(上) 出 土 鉄 器 (1)
　　(下) 出 土 鉄 器 (2)

図版56　(上) 出 土 鉄 器 (3)
(下) 出 土 鉄 器 (4)

図版57　発掘調査風景



図版58　発掘調査風景

別編　妻の神Ⅰ、Ⅲおよび案内Ⅲ遺跡出土の炭化穀と豆の同定

カラー写真目次

カラー1図　妻の神Ⅰ出土炭化粒
　a　焼籾米
　b　焼玄米
カラー2図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　焼アズキ
カラー3図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　焼アワ粒塊
　b　焼稲穂塊
　c　焼籾米とアワ粒塊
　d　焼アワ粒と茎葉（稈）塊
カラー4図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　焼米塊
　b　同上
　c　焼豆
　　膨張粒、大粒、中粒、小粒
　d　焼米の篩別け
　　4 ㎜以上　2.5 ～4 ㎜

走査電子顕微鏡写真目次

第1図　妻の神Ⅰ出土炭化粒
　a　籾（×10）
　b　籾穀片（×100）
　c　籾と玄米（×10）
第2図　妻の神Ⅰ出土炭化粒
　a　玄米（丸）（×10）
　b　同上(細長)（×10）
　c　同上(普通)（×10）
　d　同上横断面（×10）
第3図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　籾片のある膨張粒（×10）
　b　同上の膨張米（×100）
第4図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　穂軸と籾米（×10）
　b　同上の籾片（×100）
第5図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　玄米と籾片（×10）
　b　同上の籾片（×100）
　c　同上の籾片（×100）
　d　同上の玄米の一部分（×200）
第6図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　玄米と籾片（×10）
　b　同上（×500）
　c　玄米（×10）
　d　膨張玄米（×10）
第7図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　アワ（×25）
　b　同上（×500）
　c　同上（×150）
　d　同上（×500）
第8図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　アワ（×50）
　b　同上（×250）
　c　アワ塊（×10）
　d　炭化木片（×200）
第9図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　シソ類の粒片の表面（×50）
　b　同上（×50）
　c　シソ類粒の内果皮片（×50）
　d　同上（×250）
第10図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　アズキ（小粒)(×10)
　b　同上　（中粒)(×10)
　c　同上（膨張粒)(×10)
　d　ダイズ？（膨張粒）（×10）
第11図　妻の神Ⅲ出土炭化粒
　a　アズキ（大粒）（×10）
　b　同上（×1,000）
第12図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　アズキ（幼芽と子葉）（×10）
　b　同上（子葉）（×250）
第13図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　アズキ（膨張粒）（×10）
　b　同上（大粒)(×2,500)
　c　同上（中粒）（×10）
　d　同上（中粒）（×10）
第14図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　マメ類（小粒）（×10）
　b　同上（×500）
　c　マメ類（小粒）（×10）
　d　同上（×500）
第15図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　マメ類の種皮の内側（×10）
　b　同上（×500）
　c　マメ類の(中粒)やや不正型（×10）
　d　同上（アズキ？)(×1,500)
第16図　現生アズキ種子
　(×10)(×500)
　(×1,000)(×2,000)
第17図　現生リョクトウ種子
　(×10)(×200)
　(×1,000)(×2,500)
第18図　現生ケツルアズキ種子
　(×20)(×250)
　(×1,000)(×2,500)
第19図　現生雑草アズキ種子
　(×10)(×2,500)
第20図　現生アカマミ種子
　(×20)(×1,500)
第21図　現生ヤブツルアズキ種子
　(×10)(×150)
第22図　現生焼畑ダイズ種子
　(×10)(×100)
第23図　現生ダイズ種子
　(×10)(×250)
第24図　案内Ⅲ出土炭化粒
　a　ダイズ膨張粒(1)(×20)
　b　ダイズ膨張粒(2)(×20)
第25図　現生ツルアズキ種子
　(×10)（×1,000）
　(×10)（×2,500）

秋田県鹿角市妻の神Ⅰ・Ⅲおよび案内Ⅲ遺跡出土の炭化穀類と豆の同定

笠　原　安　夫

はじめに

秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路の予定線上に横たわる34の遺跡は、秋田県教育委員会によって昭和54～56年にかけて発掘された。うち、同市花輪字妻の神にある(1)妻の神Ⅰ（No.22）、(2)妻の神Ⅲ（No.24）遺跡は、陸中花輪駅の北東 2.8 kmの地点にあり、乳牛川右岸の盆地内段丘にあって、これらを合せて台地縁辺部を利用し中世の郭と堀がつくられている。(3)案内Ⅲ（No.34）遺跡は、同字案内にあり陸中花輪駅東方 2.1 kmに位置し、標高 200 mの台地、南と西側の斜面を立地に利用した遺跡である。

(1)妻の神Ⅰ遺跡は、昭和56年４月20日～８月12日の間に橋本高史文化財主事が発掘を担当し、平安時代竪穴住居跡（ＳＩ003）の床面直上から焼炭化米が採集された。その炭化米の上に焼けた木皿が検出されている。

(2)妻の神Ⅲ遺跡は同年４月20日～８月31日の間に、桜田隆文化財主事が発掘を担当し、中世館跡の主要平担面の大湯浮石（十和田ａ降下火山灰）層上面で、確認された掘立柱建物群の柱穴と考えられるピットの壙底から次の５資料を採集した。

ａ）13－Ａグリッド　pit 1229……ナタネ粒のような小粒炭化物の塊

ｂ）13－Ｃグリッド　pit 1138……炭化物塊で稲穂か

ｃ）14－Ｅグリッド　pit 中……こぶし大の炭化物塊で籾か

ｄ）pit 9999－(1)……ナタネのような小粒と茎葉の炭化物塊か

ｅ）pit 9999－(2)……焼けた小豆（アズキ）か

(3)案内Ⅲ遺跡は、同年４月20日～８月22日の間に小林克文化財主事が担当した発掘において、平安時代の竪穴住居跡（ＳＩ010）の床面から炭化物を採集した。この試料は良好に保存されていた壁材、床材の焼材があり、この直上に櫃と思われる焼けた曲物に入った圧搾された焼米塊や、おにぎり状塊で出土し、また、焼炭化豆はバラバラの状態で出土し、両炭化物は混在していたので、一応発掘者において炭化米と豆とを粒別した。

なお、(1)妻の神Ⅰ遺跡では、平安時代の竪穴住居跡33棟、フラスコ状ピット７基、土壙17基、

縄文土器、土師器、須恵器、鉄器、木器が、(2)妻の神Ⅲ遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡２棟、フラスコ状ピット１基、Ｔピット13基、中世の住居跡38棟、土壙86基、貨幣、銅鏡片、鉄製馬具や土器、および(3)案内Ⅲ遺跡では縄文時代の竪穴住居跡５棟、同土壙15基、縄文前、後期の土器や、平安時代の土師器、須恵器の壷、鉄器（銛、穂摘具、小刀、手斧）、銅鏡などが出土している。

筆者は、昭和57年２月に秋田県農業試験場須藤孝久氏を通じて、同県教育委員会文化課からこれら炭化種実の同定を依頼された。同年３月同県埋蔵文化財センター小林克氏から、(1)妻の神Ⅰおよび(3)案内Ⅲ遺跡の試料は、約 0.6 ～ 1.4 kgの炭化物を、(3)妻の神Ⅲ遺跡の５資料は、0.2 ～ 2.5 gを送付された。なお、その後筆者はそれらの遺跡を視察し説明をうけた。

調　査　方　法

(1)妻の神Ⅰ遺跡の試料は、第１表のように 100 gを任意５区分し全部で約 11,000 粒を、(3)案内Ⅲ遺跡の炭化物は第３表のように約90 gの試料を炭化米 2,000 粒ずつ数えながら混入している炭化豆（中、小、半片粒）と膨張粒に分け、粒数と重量を計った。以上の試料は１粒ずつルーペで見ながらより分けた。なお、(1)、(3)遺跡とも、一部を細長、普通、丸粒にわけ走査電子顕微鏡で撮影した。また、案内Ⅲ炭化豆は第４表のように、1)サンプルは約220 gを標準篩（4 mm、2.5 mm、1 mm）を用いて篩別したもの（粒幅によってわけられる）と、2)、3)サンプルは肉眼またはルーペで見ながら炭化米と豆を膨張粒、大、中、小、半片粒に５区分し、粒数と重量を調べた。(2)妻の神Ⅲ遺跡の５資料は、第２表のようにルーペまたは実体顕微鏡下で各炭化塊の表面にある粒数を数えた。なお、籾、米とくに豆については、代表的な粒形のものを現生豆類と比較して同定のため走査電子顕微鏡で調査した。また第５表には妻の神Ⅰ、案内Ⅲの焼けた米を、第６表には焼けた豆を大中小粒にわけて粒の大きさを測定した。

調査結果と考察

佐藤敏也氏の〝日本の古代米〟には、各地遺跡から出土した古代米について多くの米粒の大きさが測定され、米粒の混合パターン(姿)の検索表の執告がある。それによれば、**日本型の米**(*Qryza sativa subsp japonica*)には、米粒の長さが 3.2 ～ 5.3 mmのものを第Ⅰ群とし、粒長が 5.3 mm以上のものを第Ⅱ群とした。そして第Ⅰ群を粒幅によってＡは 2.8 ～ 3.7 mm、Ｂは2.1 ～2.8mm、Ｃは 2.1 mm未満としてグループし、粒の長幅指数(長／幅)が日本型の米はいずれも1.3～2.0mmの間に介在し、各地遺跡の出土米の細粒、丸粒の混合のパターンがわかり、それによって古代米の系列が示されるとした。第５表妻の神Ⅰの炭化米パターンはⅠＡ(50%)、Ⅱｂ(30%)、Ⅲ(20%)で、案内ⅢのそれはⅠＡ(50%)、ⅡＡ(50%)である。すなわち、前者がやや大粒であり、長幅比は平均 1.6 ～ 1.7 で、それは20粒では、１粒ずつを除き、両者日本型に属している。前者は玄米で、

後者は胚を欠く搗精米が多い（カラー1図a，b，第1、2、4、5、6図）。

妻の神Ⅰ遺跡の出土米には、第1表に示されたように焼籾米が平均粒比 6.3％（重比7.3 ）あり、取扱中に籾殻が破れ易いのでこの比はさらに大きかったと思われ、玄米での貯蔵であろうが、籾摺程度は現在のものより悪かった。それが臼で搗いての脱穀か籾摺具があったのか不明であるが、炭化籾殻の表面は摩擦の段階がいろいろある(カラー1、2図、第1、3、4、5図)。熱のための膨張粒（第3図）は平均8.6％であり、炭化米の1,000 粒重は平均8.6 g である。また、1、2粒のマメ片は床上で混ったか、この周辺で豆栽培があったと考えられる。

第2表に示された妻の神Ⅲ遺跡の炭化物のうちナタネのような小粒炭化物はアワ粒が固ったものであり、pit 1229のものは木材片を伴い、pit 9999 —(1)にはアワの茎葉の1部分とみえるものが混在し、また14—Eのpit 中に出土した炭化物にはアワと籾米の塊が認められた。それらのアワ粒の拡大では、その粒の特徴である山脈型の乳頭が確認できる（カラー3図、第7、8図)。また14—E pit 中から初めアワ粒と間違った破片が、後でエゴマまたはシソの粒形の不明瞭な破片とわかった。それは傷ついた粒面と内表皮の多孔と厚膜細胞の穴が見える（第9図)。pit 1138 出土の籾米は穂軸を混じえて籾が穂の状態で並んでいる。おそらく、穂刈りして穂が束ねられたものの一部が火災に遭って焼かれて落ちたもので種籾用の保存かと思われる。（カラー3図b、第4図）、またpit 9999 —(2)の炭化豆には粒の大小はあるが、かなり揃っていてアズキの炭化粒と考えられた（カラー2図）。

案内Ⅲ遺跡の出土炭化物は、曲物の櫃内に入っていた炭化米塊と炭化豆が散乱し、周辺に稲藁で編れた筵状の炭化物が出土している（カラー4図a～d）。それらは一応発掘者において豆粒と米粒を区別し送付されたが、第3表に示されているように、なお炭化米には肉眼では米粒と区別できないような小さい豆が混入していた。それを小中粒と半分ずつに分離した半片粒と膨張炭化物（大部分は米粒だが若干豆も混入）に分け、粒数比と重量 100 分比を示した。その比はサンプル別でかなり違いがあるが、炭化米が粒数で平均81.9％、重量で平均68.8％であり（第6図）、豆ではそれぞれ15.1と26.6％である。第4表の(1)サンプルでは、粒数重量比とも中粒のものが最大で全体の⅔を占め、ついで半片粒と熱での膨張粒で、炭化米、大・小粒豆は少なかった。同(2)サンプルでは中・小粒が多く、ついで半片粒、膨張粒、大粒炭化米であった。これら炭化豆は大小、粒形が不揃いであり、うち大・中粒は現在アズキ粒に似ている（第10～13図)。しかし、最も小粒のものは現生アズキにはない（カラー4図c・d、第14、15図）。おそらく、この時代には雑多な品種で多系統が混在しているため、このような極小形のものまであったのではなかろうか。現在のものでも筆者が20年余前、岡山県中北部のアズキ畑で農家が品質不良のものとして除去していた、やや早産で小草本のもの(筆者は雑草アズキと呼んだ）は、種子の大きは中粒であるが、第19図に示したように、本出土品

とかなり似たものがある。また、小・中粒のものは、リョクトウやケツルアズキなどの栽培種にその粒形が似たものもある。しかし、その表面の拡大写真に網状細胞がなく確認できなかった（第14、17、18図）。また栽培型とされるツルアズキのような細長粒のものはなかった（第25図）。野性種のヤブツルアズキ（アズキの原種？）と似た粒はあるが（第21図）、他の野生豆のツルマメ、ノアズキ、ヤブマメに似たものはなかった。また第4表の1,000粒調査で、膨張粒が大、中粒よりも30～70％も重い。これは、大中粒が加熱で容積の増すことは考えられても重量の加重は考えにくい。アズキの大粒以外に重いダイズ粒の混在があったと考え、へそのある膨張粒を丹念に探した結果、数粒のアズキより短かいへそをもち、へその中央が大きく裂目のある粒が見付かったので、ダイズの膨張粒と推定した（カラー第4図c・d、第22～24図）。

近藤萬太郎博士の〝農林種子学(後)〟にはアズキ、リョクトウ、ダイズなどの種子の記述がある。備中緑豆が長さ3.5～5.1㎜、幅2.8～3.9㎜、厚さ2.7～3.9㎜、1,000粒重35.4ｇであり、小粒の備中白アズキが長さ3.7～6.2㎜、幅2.7～4.4㎜、厚さ2.5～4.2㎜、1,000粒重51.4ｇと大粒には朝鮮産大納言が長さ5.2～8.3㎜、幅3.8～6.4㎜、厚さ3.3～6.0㎜、1,000粒重129ｇとある。ダイズ粒のへそはアズキなどとちがって、種瘤がなく、へその中央に裂目があり、粒の重さは最小が1,000粒重90ｇで、最大は250ｇのように変種、品種による違いが大きい、とある。

第6表に示されたように、案内Ⅲの大・中粒は、アズキ、リョクトウに相当する大きさや形のものはあるが、小粒のものは現生の小形アズキやリョクトウよりもさらに小さい。また大形の膨張粒と同形のものが、前述の佐藤氏の書には秋田城跡南方地区第1号竪穴住居跡から出土した大豆様遺物としての描図・写真がある。その焼ふくれ粒には、A粒長7㎜、幅5.5㎜、厚さ5㎜、B粒長7.7㎜、幅5.5㎜、厚さ5㎜、しかし、へそが見えないので、同定は困難であるが、脂肪の多いダイズの膨れ方はアズキやインゲンと違っているのでダイズ粒と推定されている。

アズキ（*Phaseolus angularis*）は、佐藤正巳氏の〝有用植物分類学〟には、中国または日本の原産と言われる1年生作物で日本では極めて古くから栽培されている。種子の色はいわゆる小豆色の他に白、淡黄、黒、黒斑などの変異がある。赤飯、餡、汁紛、羊かんなどの原料とするなど日本人の食生活と深い関係がある。また、星川清親氏の書には、アズキは中国、朝鮮、日本原産で中国では2,000年前から栽培され、日本でも農耕文化が始ったころからの作物で中国から渡来したと推測される。アズキは日本人以外にはあまり好まれないらしく、中国、朝鮮でも歴史が古いわりには栽培は少なく、もっぱら日本への輸出用である。リョクトウはインド原産、一部は栽培される *P. radiatas* から変ったと見られ、野生はない。中国南部には古くから入り、中国北部へはB.C.5世紀に栽培された。日本へは中国から入った。最近まで各地方に広く作られていたが、今はほとんど栽培されなくなった。

渡部忠世、森脇晩氏らの報文には、インド亜大陸のリョクトウ（*Phaseolus aureus*）と類似種ケツルアズキ（P. *mungo*）の諸系統をインド各地で採集し、日本で栽培結果から、系統的な諸特性を報告されている。

ダイズ（*Glycine max*）は、前述の二書にその栽培化は、中国北部、シベリア、日本に自生するツルマメ（ノマメG. *soja*）が原生種で、大古から人間の食料とされ、東アジアの北部で栽培されるようになり、今日の栽培ダイズが発祥したらしい。それがやがて中国へ伝播し、五穀の一つとして重要視された。日本では縄文時代の遺跡からダイズが出土しているが、たぶん、野生ノマメを採集したもので、作物としては弥生初期に中国から伝来したものであろう。記紀には大豆が明記され、すでに普及していた。種子は、蛋白質や脂肪に富み、日本人の食生活に欠くことのできない重要な食品であり、現在は世界的な食品になりつつある。

筆者はアズキ・ダイズやリョクトウなどの出土種子同定の対照のため、森脇氏より前述の2種の他に沖縄県産のアカマミやダイズなどを、また、宮崎大学藤原宏志氏から宮崎県椎葉村の焼畑のダイズ・アズキの分譲をうけた。それらと栽培種のツルアズキおよび野生種のヤブツルアズキ、雑草と見られるアズキなどの種子表面構造の走査電顕像を示し、出土炭化豆と現生アズキやそれらと比較した結果、たとえば、アカマミは種子表皮に星状様の低に乳頭が並び他と違いが大きいようである（第20図b）。それほどは目立たないが、現生アズキおよび出土の妻の神Ⅲ、案内Ⅲの表皮の500～1,500倍の拡大図にも乳頭が見える(第11、15、16図)。一方、リョク豆、ケツルアズキには200～1,000倍の拡大で表皮に顕著な短形の網状、後者は皿状細胞が見え、この点アズキ、アカマミとリョクトウ、ケツルアズキの区別点となろう(第17､18図)。またダイズの粒面には穴が並列している（第22､23図)。さらにこれら現生マメ類と出土豆の種皮表面を1,000～2,500倍に拡大し顕鏡して見るにいずれも表皮下には錯綜した網状細胞がぎっしりつまっている（第13、16、17、18、19、25図）。

アワ（*Setaria italica*）は、戸苅義次、管六郎氏の〝食用作物〟および佐藤正巳氏の前掲書には、欧亜大陸に広く野生しているエノコログサから発したと考えられる作物で、北支を中心として極めて古くから栽培されている。一部にはインド原産説があるが、Roxburgh がインドにはエノコログサが分布しないし、Körnickeらもインドが原産でなく北方の、しかも冬の厳寒でない地とした。Vavilowの原産地は日本を含む東部アジアであり、キビの原産地とほぼ一致するか、キビよりは冬の温暖な海洋的気候の地域とした。中尾佐助氏の〝栽培植物の世界〟には、キビは近縁野生種かインドにあるので、そうしたものが中国や近東で見出されないことなどからインドで栽培化されたと結論して問題はないが、アワは事情が違い、中国説が一般だが、しかし、中国のアワが最初からキビと相伴っていたという事実を重く見て、アワもキビについでインドで栽培化したとみる方が説明しやすいとしている。

筆者は先に、大分県二本遺跡弥生後期の住居跡の焼けた家屋の床上からバラバラに散らばった多重の塊状炭化物の中から若干のへそのあるアズキ粒を見付け走査電顕検査で同定した。また現時点で最初の水田遺構と言われている唐津市菜畑遺跡の縄文晩期山の寺層から稲籾穀の他に炭化したアワ粒、アズキ粒、ゴボウ粒、未炭化の雑草メロン（マクワウリ）種子などを同定している。それ以前の遺跡として福井県鳥浜貝塚縄文前期層から西田正規、松本豪氏らによってリョクトウとされた豆を、その翌年の発掘された同期層から一粒の炭化豆を検出した。その粒は本報告の小粒の豆（第14図ｃ）と同形で、その種皮の網状斑文は、本報告リョクトウの表皮（第17図ｂ）と同じであった。一応発表時にはリョクトウ（？）としたが、網状斑文からリョクトウとしてよい。なお同遺跡からエゴマ、シソの炭化・未炭化粒を検出した。それは従来、長野県縄文中期農耕遺跡でアワの証拠品とされたタール状炭化物がエゴマ・シソ粒の特有な果表面の網目と流線文、内果皮の多孔細胞、肥厚細胞の配列穴および種皮の〝わらじ細胞〟の発見から、松谷氏と筆者によって、エゴマ・シソ粒であることを確認した。本報告の妻の神Ⅲ14－Ｅグリッドのpit 中からの小破片には、種皮の〝わらじ細胞〟は見られないが、炭化粒（はじめアワ粒と誤認）の拡大像が松谷氏による大石遺跡のエゴマ粒面や筆者のなすな原出土エゴマの内果皮に酷似した。すなわち、炭化内果皮の多孔および肥厚細胞の穴の配列が見られた（第９図）。おそらくこの周辺で栽培または生えていたものを収穫後に焼け、pit に落ち込んだ炭化片が一部のこぶし大に塊った籾米やアワ粒塊に付着していたものであろう。

炭化米や畑作物の炭化豆は、縄文・弥生時代に出土しているが、貯えられた状態での発掘例は弥生後期～中世時代に多い。たとえば筆者は中世の尾道市街地の埋甕遺跡から焼けたアワ、ソバ、コメ、オオムギを、大分県二本木弥生後期遺跡のアズキの焼粒を同定している。また、東北地方でも早くから青森県田舎館村垂柳遺跡で土器での籾痕や炭化米の出土が報ぜられていたが、300枚近い弥生時代の水田跡が発掘されたのは昨年（1982年）のことである。中世における本遺跡からの多量の米、豆（アズキ・ダイズ）や少量だがエゴマ（シソ）が揃って出土は当時の農耕文化の貴重な資料と考えられる。

ま　と　め

本報告では、古代中世の住居跡で焼落ちたと見られた炭化材や柱穴から採集された米・アワ・豆類を同定した。それらは炭化物塊または、ばらばらの粒として、貯蔵用の櫃、木皿の内やその周囲の床上に散在していた。なお、周囲には焼かれた稲藁で作られた筵があった。送られた妻の神Ⅰの焼（炭化）米と案内Ⅲの同じく炭化米と豆、および妻の神Ⅲの塊状のアワ、玄米をサンプリングして、量的調査と粒形の走査電顕像（写真）と現生種実とを比較し同定した。

妻の神Ⅰ遺跡の炭化米には６～８％の炭化籾が混じ、搗精また籾擢のよくない玄米を貯えた

ようであり、火事による膨張米が３～11％であった。案内Ⅲ遺跡の炭化米には、粒数で平均15％、重量で27％の炭化豆を混じているし、炭化豆では粒数で８％、重量で３％の炭化米を混えている。これはもともと別々に貯えられたものが火災時に混合したのか、玄米の膨張粒は２～７％、豆では８～13％あり、相当強い火力で膨張したものと思われる。炭化米の大きさの測定で、粒の長幅比から日本型であるが、妻の神Ⅰが案内Ⅲの米より少し大粒であり、前者は玄米であるが、後者は胚の欠けた粒が多く、膨張粒に横の割目があり、搗精米の貯えではなかったか、案内Ⅲの粒が小さいにも拘らず1,000粒重がやや重いのは、粒に黄褐色の土粉が付着していると考えられる。なお炭化米はどちらも細粒、丸粒を含み、不揃であった。

炭化豆にも大小さまざまのものがあったが、案内Ⅲのものの大・中粒は形、大きさ、残された僅かのへその形、表皮細胞の低い乳頭などからアズキと同定した。しかし、現生アズキ品種には見られないような極小粒のものがあるが、品種、系統が雑多なままの栽培と考えた。なお膨張粒は最初はアズキが火災のため膨大したと考えられたが、1,000粒重が大きいところから大粒で重いダイズの混入がへその形から推定された。また小粒のものにリョクトウ、ケツルアズキの混入はあるかどうか、出土粒には表皮細胞に網状が見付からず、今のところアズキの小粒と考えざるを得ない。

また妻の神Ⅲの塊状粒には、表面に山脈状の乳頭が並んでいるのでアワ粒と同定した。なお古くから五穀とされているキビ・ヒエ粒がないかと小粒種子を丹念にしらべてみたがこれらの中には見当らなかった。しかし、エゴマまたはシソの破片が認められた。

いずれにしても、この遺跡周辺にこれらが栽培、貯蔵されていたことが確実であり、籾米がフェノール反応で水稲か陸稲かの調査は炭化粒のためできなかった。なお、アズキの小粒に近似するヤブツルアズキは混入が考えられるが、焼畑に栽培されていたと考えられる細長粒のツルアズキの種子はなく、また野生のツルマメ（ノマメ）、ノアズキ、ヤブマメなどは粒形、表皮細胞模様から見てなかったようである。

謝　　辞

本調査試料を送付いただいた秋田県教育委員会ならびに発掘担当された小林克氏はじめ各位および、本試料の対照として各種のリョクトウ・ダイズ類種子の送付をいただいた京都大学農学部森脇勉氏・宮崎大学農学部藤原宏志氏ならびに前秋田農業試験場の須藤孝久氏、走査電子顕微鏡で本試料の撮影に協力を得た岡山大学農業生物研究所藤沢浅氏、調査に援助された武田満子氏などに本文を草するに当り感謝いたします。

１９８３・２・14

農学博士　元岡山大学農業生物研究所教授

第1表　妻の神Ⅰ（ＳⅠ003）の炭化物

サンプル	炭化米	炭化籾	炭化膨脹米	炭化豆	計
1) 粒	1193(90.2)%	84(6.3)%	45(3.4)%	1 (0.1)%	1323 (100)%
g	10.1(84.9)	0.8(6.7)	1.0(8.4)		11.9 (100)
2) 粒	3080(89.1)	159(4.6)	215(6.2)	4 (0.1)	3458 (100)
g	25.1(82.6)	2.0(6.6)	3.3(10.9)		30.4 (101)
3) 粒	2248(89.7)	184(7.3)	75(2.9)	3 (0.1)	2507 (100)
g	18.2(87.5)	1.9(9.1)	0.7(3.4)		20.8 (99.9)
4) 粒	2071(87.6)	196(8.3)	92(3.8)	4 (0.2)	2363 (99.9)
g	17.3(82.7)	1.6(7.7)	2.0(9.6)		20.9 (100)
5) 粒	1082(88.9)	65(5.3)	68(5.6)	2 (0.2)	1217 (100)
g	9.2(82.9)	0.7(6.3)	1.2(10.8)		11.1 (100)
計 粒	9679(89.1)	688(6.3)	495(4.6)	14 (0.1)	10868 (101)
g	9.2(83.9)	7.0(7.3)	8.2(8.6)		95.2 (99)

備考　1）約100ｇの試料を採り、任意5試料にわけ、炭化米、炭化籾、炭化膨張米、炭化豆を数えそれぞれ重量をしらべた。

2）その他、各粒⅓以下で粒形が不明の炭化粉屑が全部で6.2ｇあった。

3）炭化米1,000粒重は8.0～8.7ｇ、炭化籾は9.0～10.4ｇ

第2表　妻の神Ⅲの炭化物

a）13－Ａグリッドpit 1229……炭化アワ粒が2×2.5㎝魂ぐらいの一面に約270粒が認められ（カラー3図）、炭化材片を共存している（第8図）。炭化塊の中の各粒は約1.3×1.6㎜、1.4×1.8㎜。

b）13－Ｃグリッドpit 1138……穂刈りしたままの籾穂を貯えていたものが、火災にあったらしく、2～2.5㎝の炭化塊に籾米、籾殻跡が95粒と約1～2㎝の穂軸が12ついていて（カラー3図、第4図）アワ粒は多分120粒ぐらいの塊である（カラー3図ａ）。

c）14－Ｅグリッドpit中……1.5～2㎝の炭化塊は、元はこぶし大の籾米とアワ粒塊があった。（カラー3図ｃ、第3図）粒形は不明瞭だが破片の電顕像からシソ属（エゴマまたはシソ）が少数ある（第9図）。

d）pit 9999－(1)……2～2.5㎝の炭化アワ粒がアワ稈をはさんで1～数列に並び、一面に約80粒が見られる（カラー3図ｄ、第7図）。

e）pit 9999－(2)……炭化アズキ粒18粒（大粒1、中粒3、小粒5、半片9粒）がある（カラー2図）。

第3表　案内Ⅲの炭化物（その1）

	炭化米	炭化豆	炭化豆の区分			膨張炭化物（米・豆）	籾米	
			中粒	小粒	半片粒			
1）粒 g	2000（87.3） 19.4（77.6）	196（ 8.6） 4.1（16.4）	27（ 1.2） 0.8（ 3.2）	107（ 4.7） 1.9（ 7.6）	62（ 2.7） 1.4（ 5.6）	93（ 4.1） 1.5（ 6.0）	3	2292（ 100） 25.0（ 100）
2）粒 g	2000（74.3） 19.1（57.2）	632（23.5） 12.8（38.3）	120（ 4.5） 4.1（12.3）	300（11.1） 6.0（18.0）	212（ 7.8） 2.7（ 8.0）	59（ 2.1） 1.5（ 4.5）	2	2693（99.9） 33.4（ 100）
3）粒 g	2000（85.4） 18.3（72.6）	279（11.9） 5.1（20.2）	33（ 1.4） 1.0（ 4.0）	181（ 7.7） 3.1（12.3）	65（ 2.8） 1.0（ 4.0）	60（ 2.6） 1.8（ 7.2）	1	2340（99.9） 25.2（ 100）
計 粒 g	6000（81.9） 56.8（68.8）	1107（15.1） 22.0（26.6）	180（ 2.5） 5.9（ 7.1）	588（ 8.0） 11.0（13.3）	339（ 4.6） 5.1（ 6.2）	212（ 2.9） 1.8（ 4.6）	6	7325（99.9） 82.6（ 100）

備考　1）試料から炭化米2,000粒を数えながら、その中から炭化米と膨張炭化物にわけて、それぞれ粒数、重量を計った。その他、炭化屑が全部で6.2 g であった。

2）炭化米1,000粒重は9.5、9.6、9.0、9.3、9.5 g、平均9.4 g である。

3）炭化豆の500粒重は中粒20.1 g、小粒11.3 g、半片粒6 g である。

4）本遺跡の出土炭化物塊、米、豆には　黄褐色の土がかなりまぶれていた。

第4表　案内Ⅲの炭化物（その2）

	炭化豆					炭化米	計
1）	膨張粒（4 mm以上）	大粒（4 mm以上）	中粒（2.5－4 mm）	小粒（1－2.5 mm）	半片粒		
粒 g	675（ 7.8） 27.8（12.8）	334（ 3.9） 17.6（ 8.2）	5340（61.9） 141.5（65.6）	268（ 3.1） 3.5（ 1.6）	1222（14.2） 18.9（ 8.8）	789（ 8.1） 6.5（ 3.0）	8628（100） 215.8（100）

	炭化豆					炭化米	計
2）	膨張粒	大粒	中粒	小粒	半片粒		
粒 g	47（11.0） 3.7（28.2）	22（ 5.1） 1.0（ 7.6）	114（26.7） 3.8（29.0）	138（32.3） 3.2（24.4）	87（20.4） 1.2（ 9.2）	19（ 4.4） （ 1.5）	427（100） 13.1（100）

炭化豆　1000粒重（500粒重×2）

3）	膨張粒	大粒	中粒	小粒	半片粒
g	60.6	46.7	35.5	21.2	15.4

備考　1）サンプル220 g を篩でおろし、膨張、半片、炭化米をより出した。

2）膨張粒の多くがダイズ、その他はアズキの炭化豆と推定できる。

第5表　焼（炭化）米粒の大きさ測定

サンプル	妻の神Ⅰ				案内Ⅲ				備考
	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長／幅	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長／幅	
1	4.8	2.5	2.2	1.9	4.5	2.5	2.0	1.8	両試料とも無傷の粒約200粒の中から細、丸、普通粒を採って測定した。
2	5.3	3.9	2.5	1.4	4.1	3.0	2.1	1.4	
3	5.0	3.0	2.3	1.7	4.0	2.5	2.2	1.6	
4	5.4	2.7	2.1	2.0	4.0	3.1	2.2	1.3	
5	5.5	3.8	2.5	1.4	4.2	2.2	2.1	1.9	
6	3.8	2.2	2.0	1.7	4.5	2.5	2.0	1.8	
7	5.5	3.1	2.4	1.8	3.8	2.8	2.0	1.9	
8	4.5	3.1	2.1	1.5	4.3	3.0	2.3	1.4	
9	4.3	3.7	2.2	1.2	4.5	3.0	2.5	1.5	
10	5.0	3.0	2.1	1.7	4.1	2.8	2.0	1.5	
平均	4.9	3.1	2.2	1.6	4.2	2.7	2.1	1.6	
11	4.7	3.0	2.1	1.6	4.9	2.6	2.4	1.9	
12	4.9	2.5	1.9	2.0	4.7	2.8	2.3	1.7	
13	3.8	2.4	2.1	1.6	3.8	3.0	2.7	1.3	
14	3.9	2.3	2.1	1.7	4.0	3.4	2.2	1.2	
15	5.0	2.6	2.1	1.9	4.3	2.4	2.1	1.8	
16	4.1	3.0	2.0	1.4	4.5	3.1	2.3	1.5	
17	4.8	3.0	2.1	1.6	4.3	2.2	2.0	2.0	
18	5.2	3.0	2.2	1.7	3.8	2.2	2.0	1.7	
19	5.4	2.7	2.5	2.0	4.1	2.2	2.1	1.9	
20	5.1	2.6	2.4	1.9	3.9	2.3	2.1	1.7	
平均	4.7	2.7	2.2	1.7	4.2	2.6	2.2	1.6	

第6表　焼（炭化）豆の大きさ測定

サンプル	大粒			中粒			小粒		
	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	長さ mm	幅 mm	厚さ mm
1	7.0	5.5	5.0	5.0	3.2	3.0	4.0	3.0	2.7
2	7.0	5.3	4.8	5.1	3.1	3.0	3.1	2.7	2.5
3	7.0	5.0	4.5	5.0	3.1	3.0	4.0	3.1	3.1
4	7.5	5.5	5.5	4.0	3.5	3.1	3.7	3.0	2.2
5	7.2	5.1	5.0	4.5	3.2	3.0	4.0	2.6	2.5
6	7.0	5.0	4.8	4.6	3.2	3.1	4.1	3.0	2.8
7	8.3	7.5	5.5	5.2	4.0	3.5	3.1	2.7	2.5
8	8.7	5.7	5.5	4.2	4.1	3.5	3.8	2.8	2.7
9	7.5	6.0	5.4	4.1	3.1	3.1	3.1	3.0	2.9
10	7.0	5.2	4.8	5.0	3.5	3.2	3.5	2.3	2.4
平均	7.4	5.6	5.1	4.77	3.4	3.2	3.6	2.8	2.6

備考　炭化豆は大中小粒の500粒重測定の中から平均的な粒を測定した。

文　　献

星川清親；栽培植物の起源と伝播，P. 275　（1977）　二宮書店

笠原安夫；二本木遺跡、33号住居跡内出土のアズキ状種子について
大野原の遺跡 P. 233～234　（1980）

笠原安夫；走査電子顕微鏡で見た雑草種実の造形，P. 130　（1976）養賢堂

笠原安夫；鳥浜貝塚の植物種実の検出とエゴマ・シソ種実・タール状塊について
鳥浜貝塚　P. 65～87（1981）　1980年度発掘調査概報，福井県教育委員会

笠原安夫；草戸千軒町遺跡および尾道市街地地下遺跡における種実の検出・同定について
第28，29次草戸千軒町発掘調査概要　P. 98～162　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
（1980）

笠原安夫、武田満子；岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究
― 日本各地遺跡間の残存種実の比較とそれから見た農耕の伝播と形態の推定 ―
農学研究　58巻，3，4号，P. 117～179，（1979）

近藤萬太郎；日本農林種子学，後編，P. 885（1934）養賢堂

前田和美；縄文遺跡出土の豆類，とくにリョクトウについて、文部省特定研究
「古文化財」シンポジウム"縄文農耕の実証性„1月20日　東京中野サンプラザにて(1981)

松谷暁子、笠原安夫；縄文農耕出土タール状小種子塊を炭化エゴマと同定するまでの経過と各地
出土のアワ，ヒエ，キビの灰像および走査電顕図について
文部省特定研究「古文化財」1980年次報告書　P. 128～134（1981）

松本　豪；緑豆，鳥浜貝塚，第3節，P. 162～163（1979）福井県教育委員会

中尾佐助；栽培植物の世界，P. 250　（1975）中央公論社

佐藤敏也；日本の古代米，P. 346，雄山閣

西田正規；植物遺体，鳥浜貝塚，第3節，P. 162～163（1979）福井県教育委員会

佐藤正己；有用植物分類学　P. 530（1957）養賢堂

菅原清康；焼畑農法の中における雑草防除対策，雑草研究　25（4）P. 300～303　（1980）

戸苅義次、菅六郎；食用作物　P. 497（1957）養賢堂

渡辺忠世、森脇勉；インド亜大陸産リョクトウ類の栽培学的諸特性　P47～92（1977）
日本豆類基金協会

垂柳遺跡　昭和57年度発掘調査会議資料（1982）青森県埋蔵文化財調査センター

笠原安夫；菜畑縄文晩期（山の寺）層から出土の炭化ゴボウ，アズキ，エゴノキと未炭化メロン
種子の同定P. 447～463，唐津市菜畑遺跡（1983）唐津市教育委員会

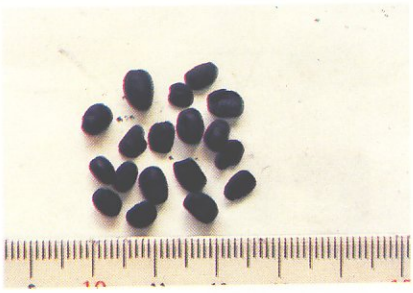
カラー１図　妻の神Ⅰ出土炭化粒

a 焼籾米

b 焼玄米

カラー２図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

a 焼アズキ



カラー３図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

a 焼アワ粒塊

b 焼稲穂塊

c 焼籾米とアワ粒塊

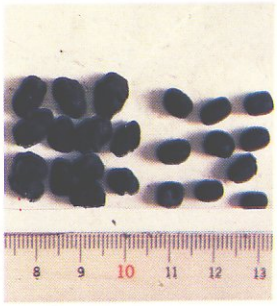
d 焼アワ粒と茎葉(稈) 塊

カラー４図　案内Ⅲ出土炭化粒

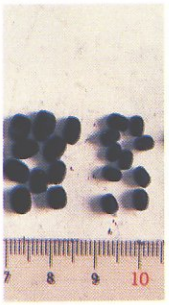
a 焼米塊

b 焼米塊

c 焼　豆

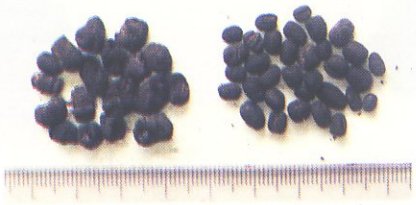


膨脹粒　　大粒



中粒　　小粒

d 焼豆の篩別け

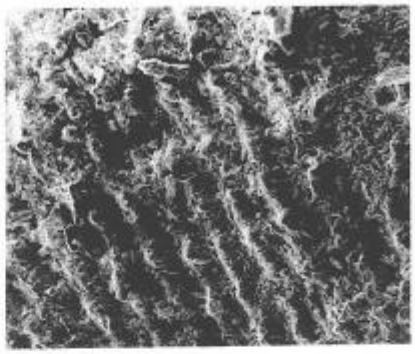


4 ㎜以上　　2.5～4 ㎜

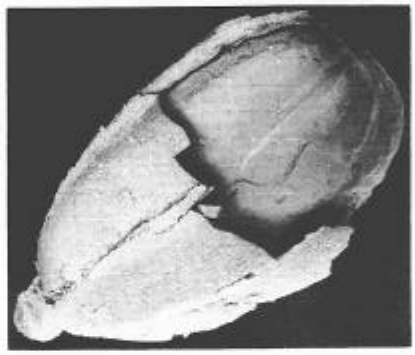
第1図　妻の神Ⅰ出土炭化粒

a 籾　×10

b 籾穀片　×100



c 籾と玄米　×10



第2図　妻の神Ⅰ出土炭化粒

a 玄米(丸)　×10

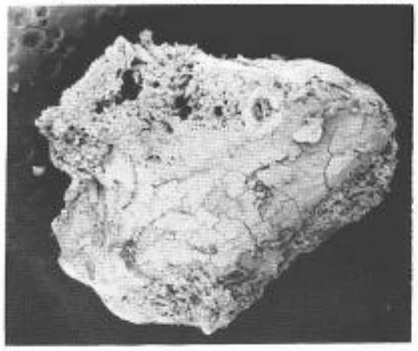
b 玄米(細長)　×10

c 玄米(普通)　×10

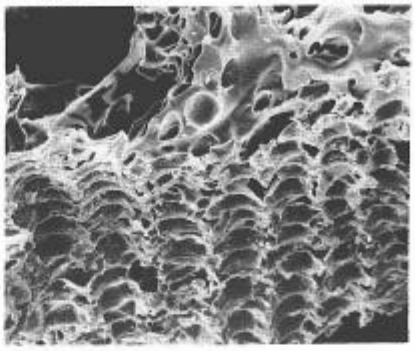
d 玄米横断面　×10

第３図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

a　籾片のある膨脹米　×10

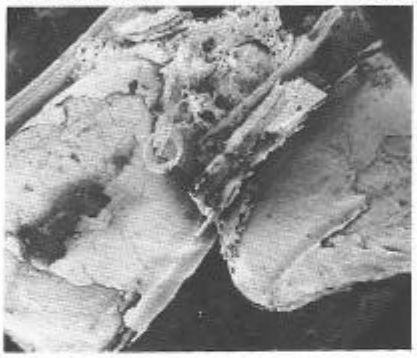


b　同左の籾片　×100

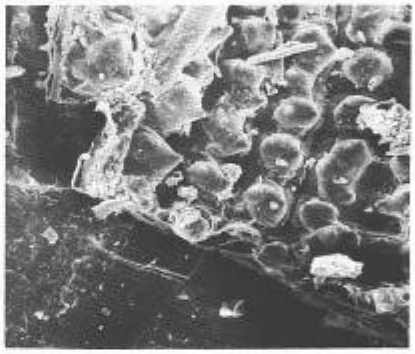


第４図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

a　穂軸と籾米　×10

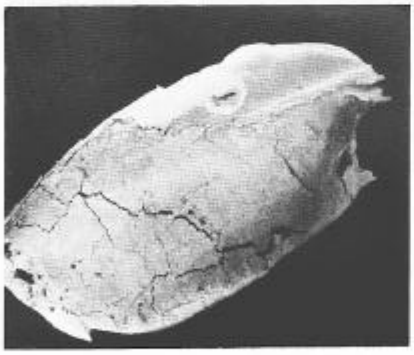


b　同左の籾片

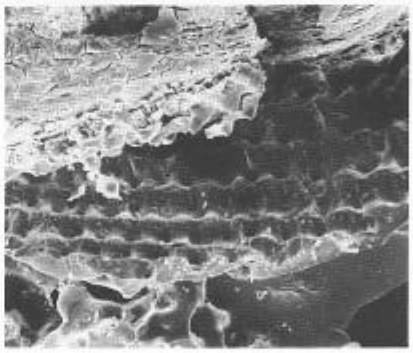


第５図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

a　玄米と籾片　×10

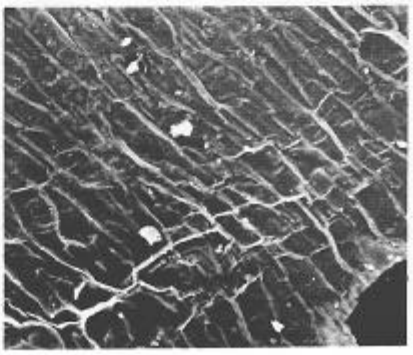


b　同左の籾片　×100



c　同上の籾片　×100

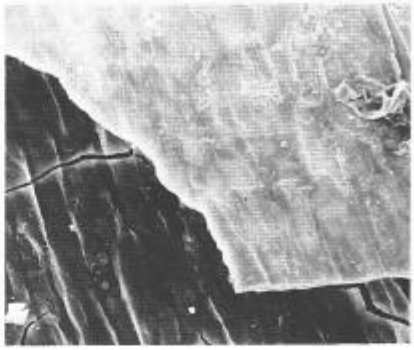
d　同上の玄米の部分　×200



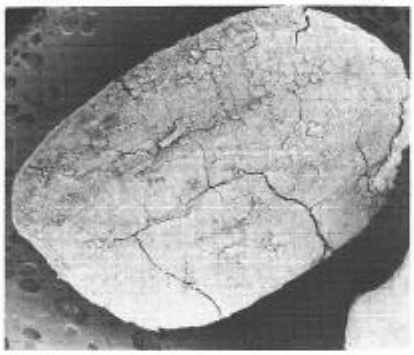
第6図　案内Ⅲ出土炭化粒

a 玄米と籾片　×10

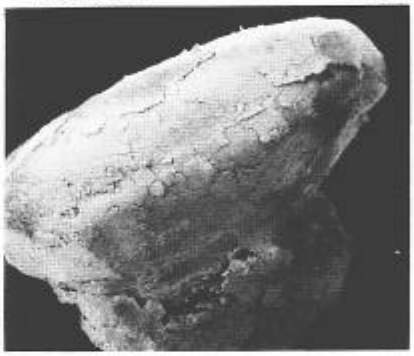
b 玄米と籾片　×500



c 玄　米　×10

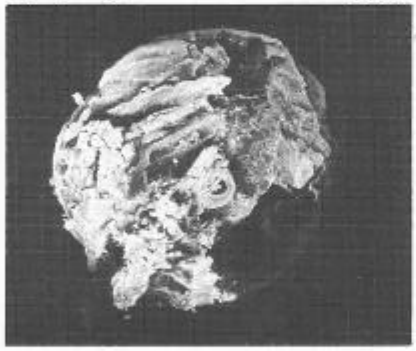


d 膨脹玄米　×10

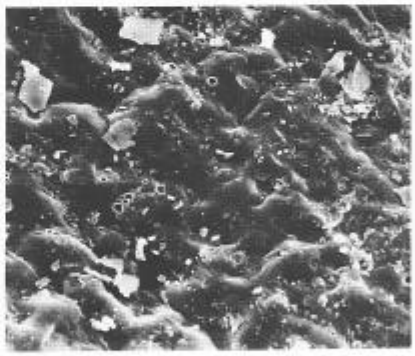


第7図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

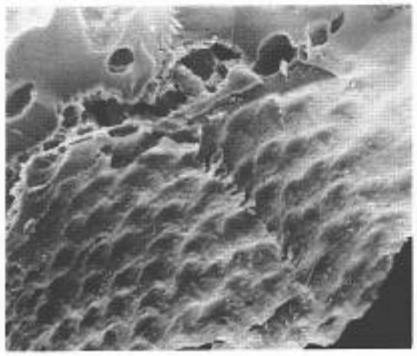
a ア　ワ　×25



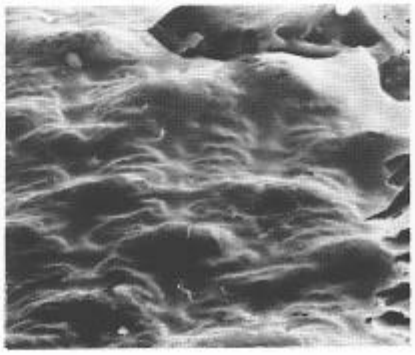
b 同　左　×500



c 同　上　×150

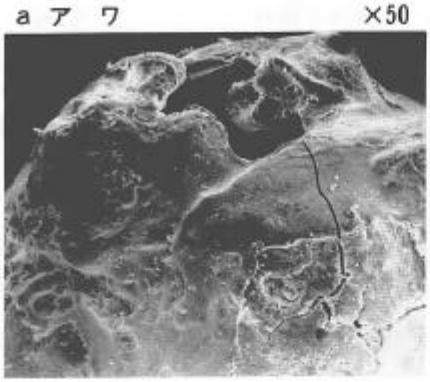


d 同　左　×500



第8図　妻の神III出土炭化粒

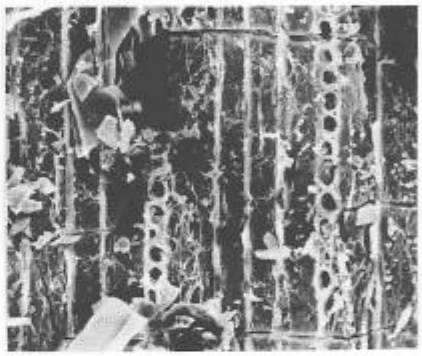
a アワ　×50



b 同左　×250

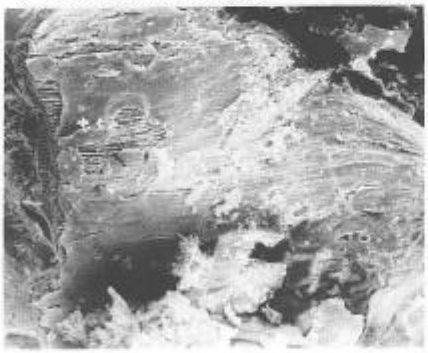
c アワ塊　×10

d 炭化木片　×200

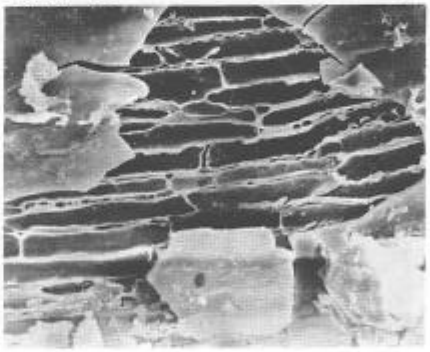


第9図　妻の神III出土炭化粒

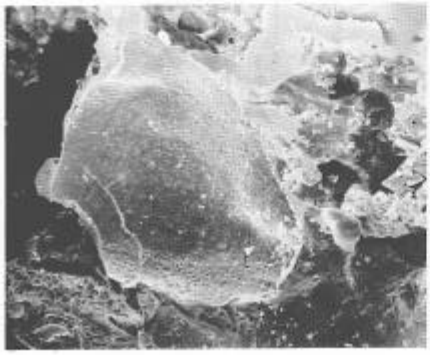
b シソ類の粒片の表面　×50



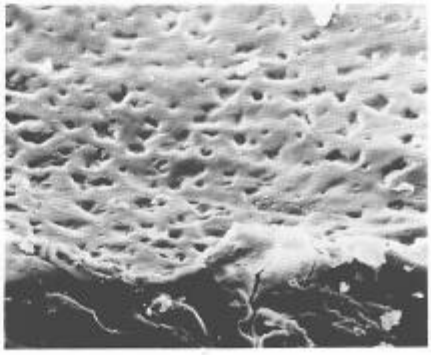
b 同左　×250



c シソ類粒の内果皮片　×50

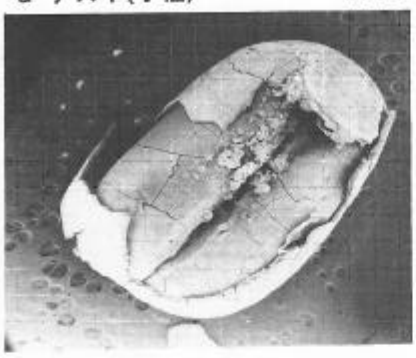


d 同左　×250



第10図　案内Ⅲ出土炭化粒

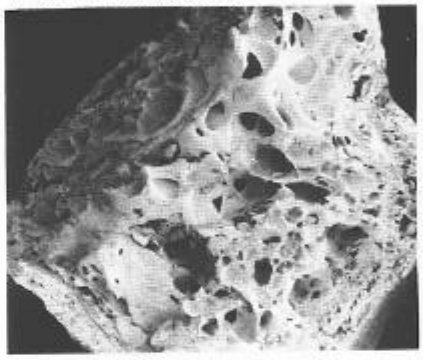
a アズキ(小粒)　×10



b アズキ(中粒)　×10

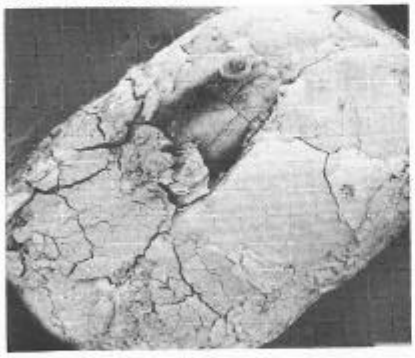
c アズキ(膨脹粒)　×10

d ダイズ？(膨脹粒)　×10



第11図　妻の神Ⅲ出土炭化粒

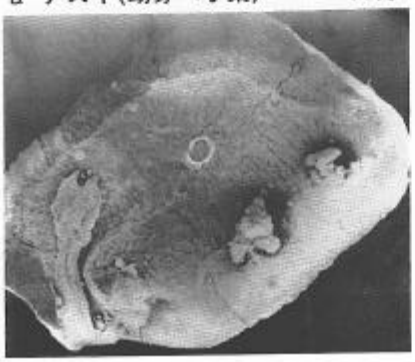
a アズキ(大粒)　×10



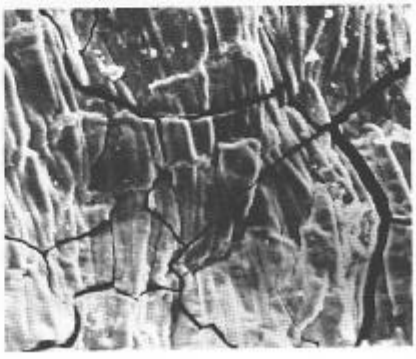
b 同　左　×1000

第12図　案内Ⅲ出土炭化粒

a アズキ(幼芽・子葉)　×10

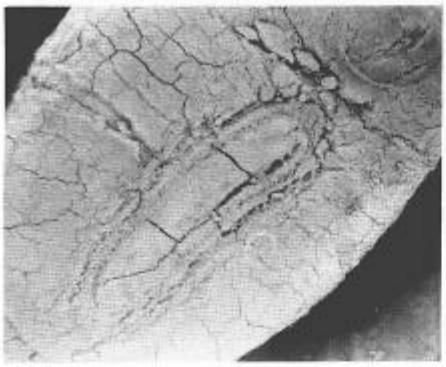


b 同左(子葉)　×250

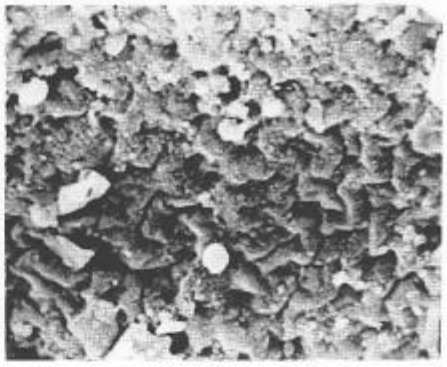


第13図　案内Ⅲ出土炭化粒

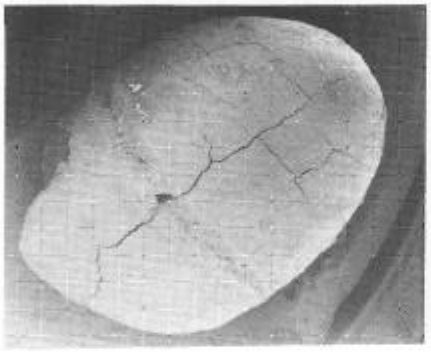
a アズキ(膨脹粒)　×10



b 同　左(大粒)　×2500



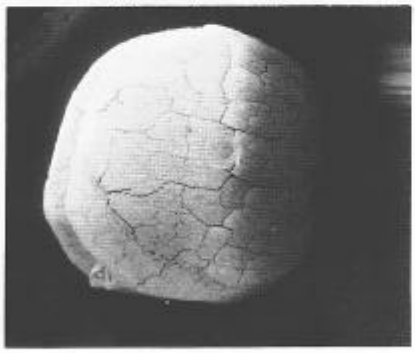
c 同　上(中粒)　×10



d 同　左(中粒)　×10

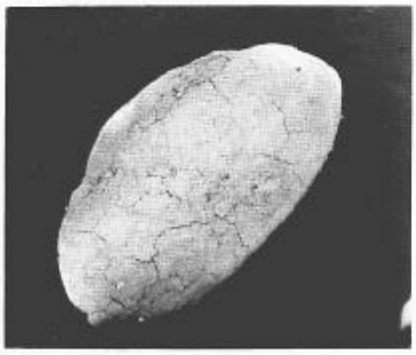
第14図　案内Ⅲ出土炭化粒

a マメ類(小粒)　×10

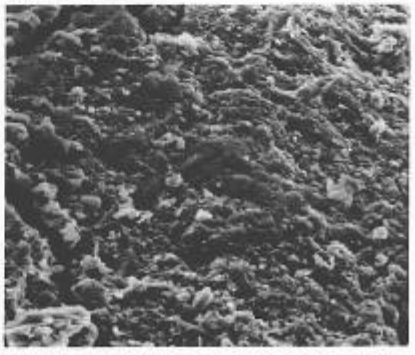


b 同　左　×500

c マメ類(小粒)

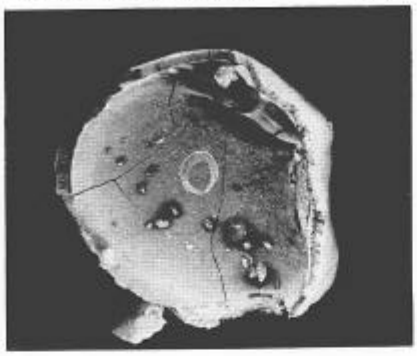


d 同　左　×500

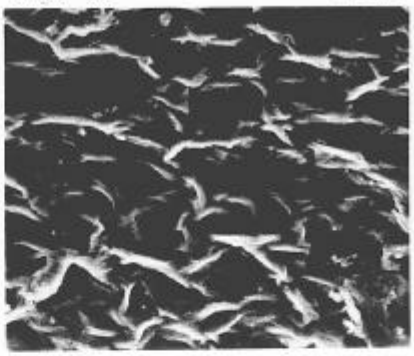


第15図　案内Ⅲ出土炭化粒

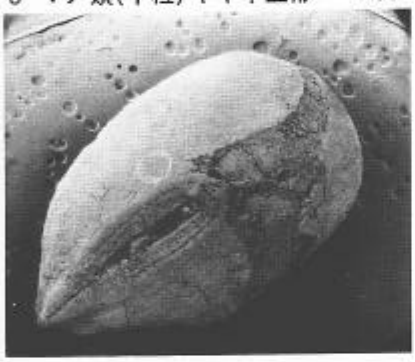
a マメ類種皮の内側　×10



b 同　左　×500



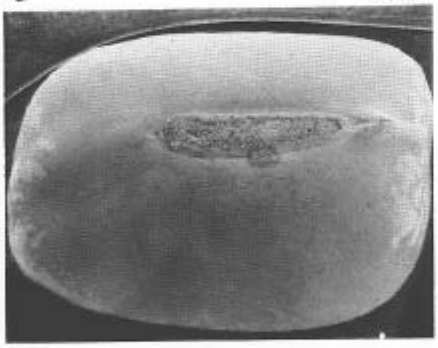
c マメ類(中粒)やや不正形　×10



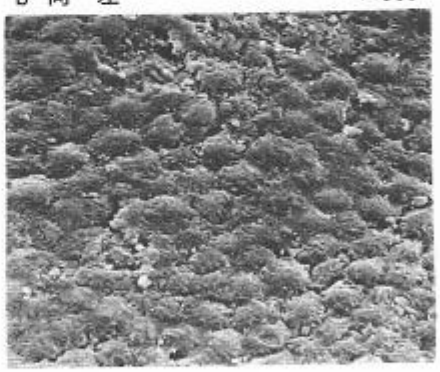
d 同左(アズキ？)　×1500

第16図　現生アズキ種子

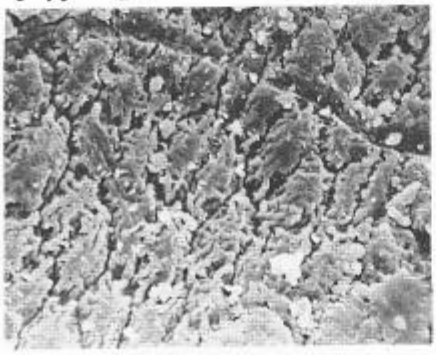
a　×10



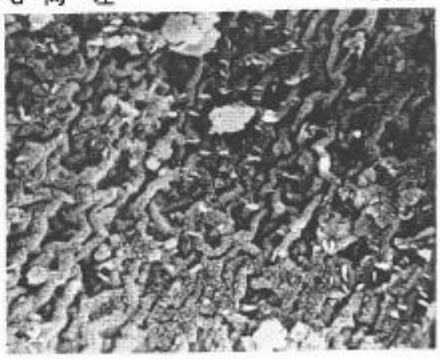
b 同　左　×500



c 同　上　×1000



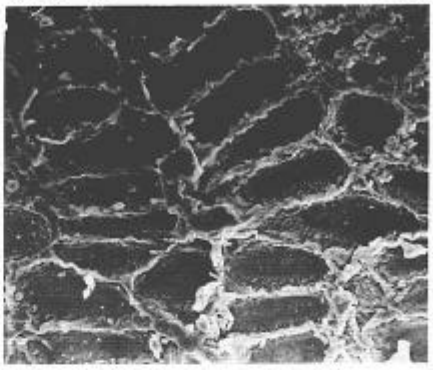
d 同　左　×2000



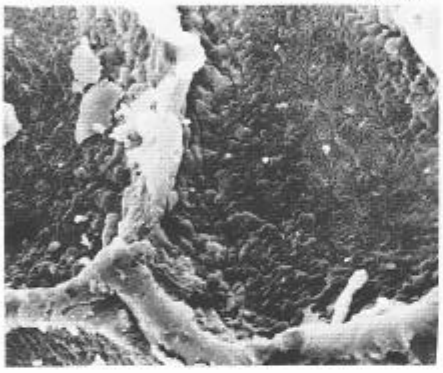
第17図　現生リョクトウ種子

a　×10

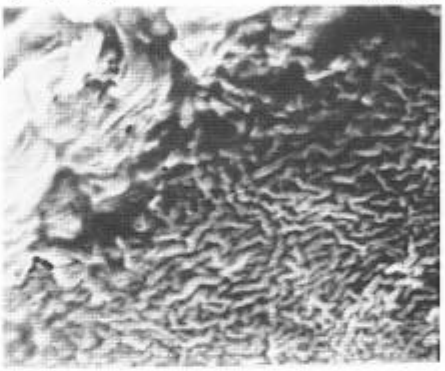
b 同　左　×200



c 同　上　×1000



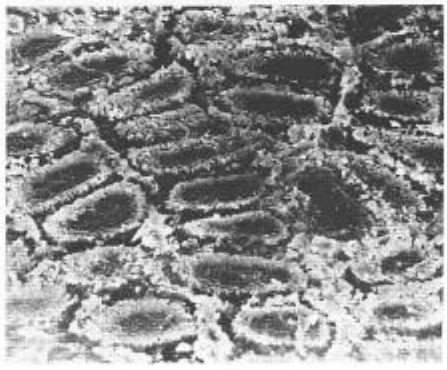
d 同　左　×2500



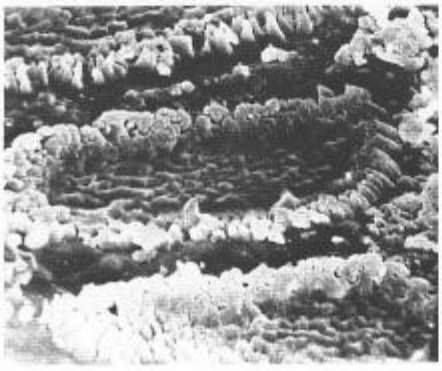
第18図　現生ケツルアズキ種子

a　×10

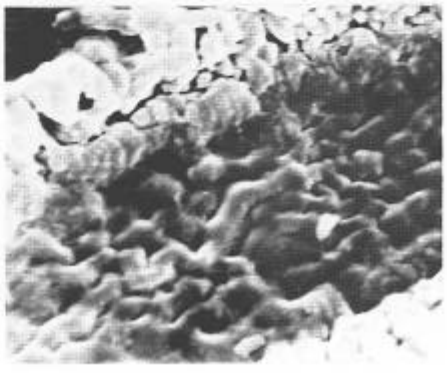
b 同　左　×250



c 同　上　×1000

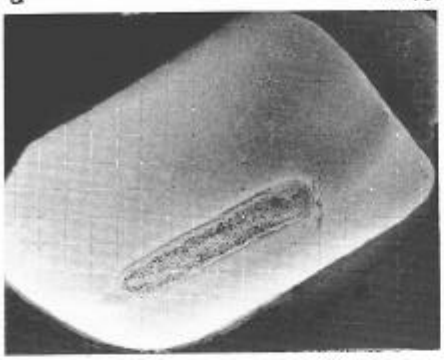


d 同　左　×2500

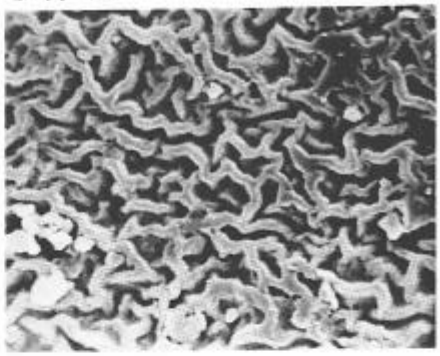


第19図　現生雑草アズキ種子

a　×10



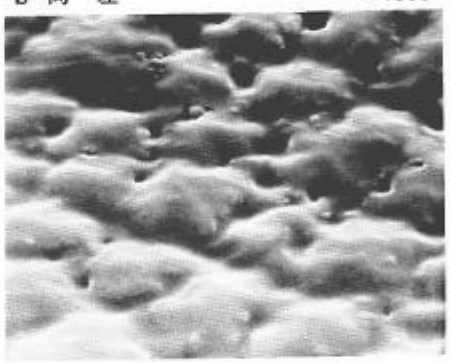
b 同　左　×2500



第20図　現生アカマミ種子

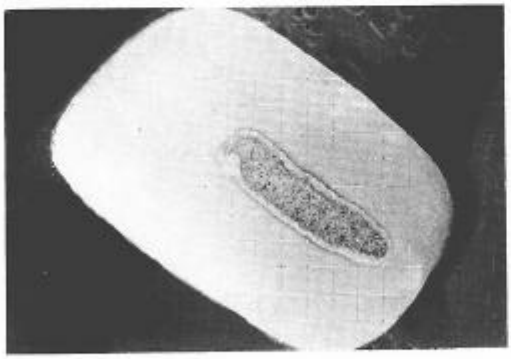
a　×20

b 同　左　×1500

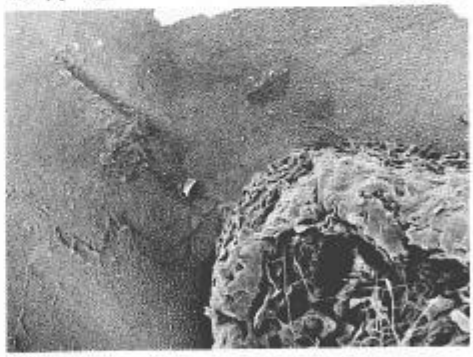


第21図　現生ヤブツルアズキ種子

a　×10



b 同　左　×150



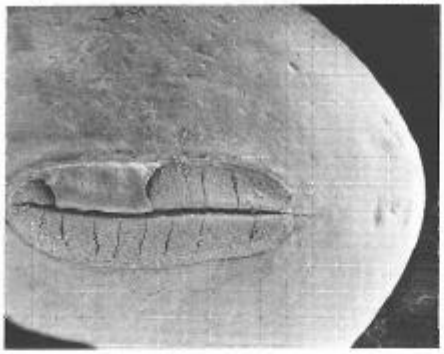
第22図　現生焼畑ダイズ種子

a　×10

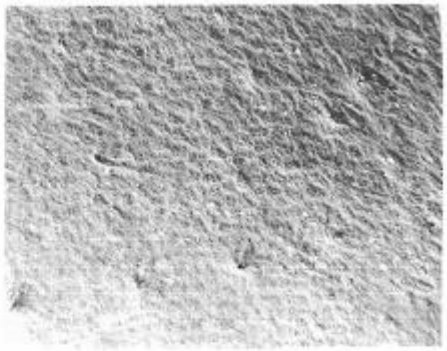
b 同　左　×100

第23図　現生ダイズ種子

a　×10

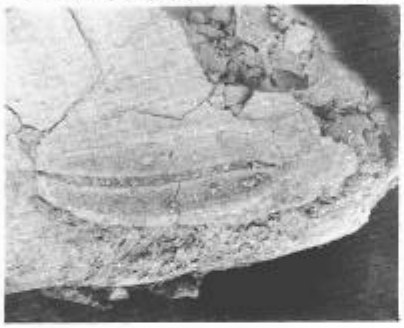


b 同　左　×250



第24図　案内III出土炭化ダイズ種子

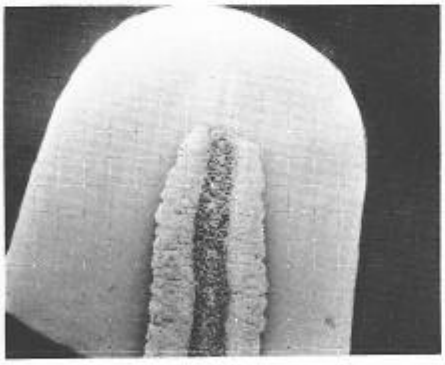
a ダイズ膨脹粒(1)　×20



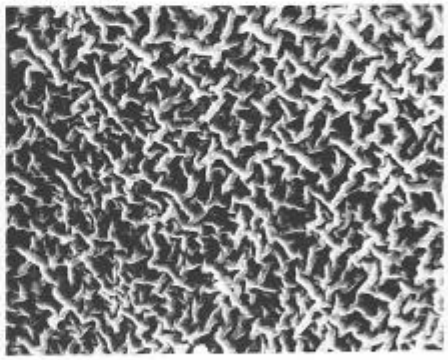
b 同左　膨脹粒(2)　×20

第25図　現生ツルアズキ種子

a　×10

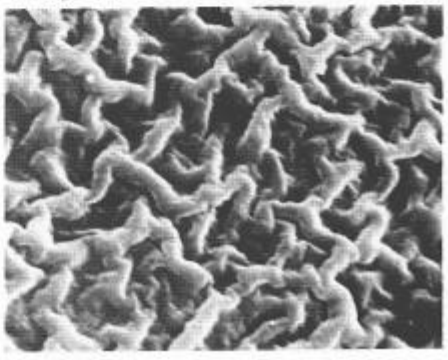


b 同　左　×1000



c 同　上　×10

d 同　上　×2500



乳牛平遺跡

遺跡番号	No.25
所在地	鹿角市花輪字乳牛平16番地他
調査期間	昭和56年4月16日～8月11日
発掘調査予定面積	5,622㎡
発掘調査面積	3,000㎡

1．遺跡の概観

花輪盆地北東部には、奥羽山脈と盆地平野部との間に標高150 ～ 160ｍの平坦かつ広大な台地があり、草木川、間瀬川、不動川その他の中小河川がこれを開析して、東から西へ向かって細長く延びる舌状地形を発達させている。

この台地上には縄文遺跡の他、その後の平安・中世遺跡も多く、殊に平野部に臨む舌状地形末端部には、乳牛平遺跡から北わずか4 kmの間に柴内、高市、小平、新斗米の各館が開析谷を挟んで指呼の間に連続するという状況である。

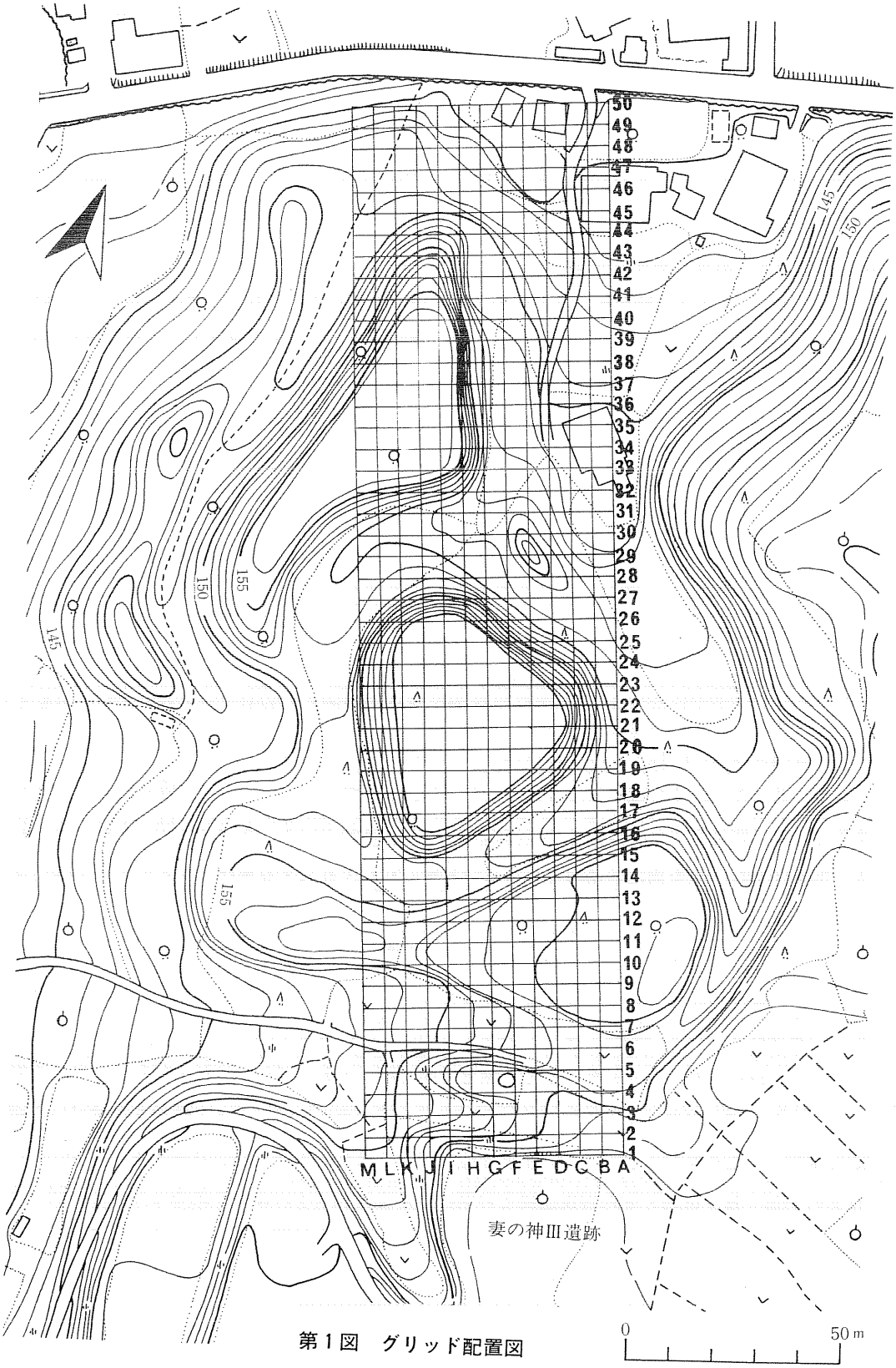
乳牛平遺跡は、国鉄花輪線陸中花輪駅の北東 2.5kmに位置し、標高 155～ 160ｍの台地末端部にある。館西側を乳牛川が北流し、現水田面と郭平場との比高は20ｍほどを計る。遺跡南方には妻の神Ⅲ・Ⅱ・Ⅰ遺跡が連続し、北方には谷を挟んで乳牛・西町Ⅰ・Ⅱ遺跡が存在する。Ⅰ郭平場からは柴内館が北東方向に見られる。

2．調査の方法

乳牛平遺跡は妻の神Ⅲ遺跡も含めて、郭と掘との地形観察からおおよその範囲を推定できるが、調査前には南に隣接する妻の神Ⅲ遺跡とは別個の遺跡と考えられ、Ⅲ・Ⅳ郭の南側に東西に走る小道あたりがその境として考えられていた。したがって、グリッドの設定もこの付近を南限として、県道大湯・花輪線をその北限とすべく、Ⅱ郭上のＳＴＡ 159＋20とⅠ郭上のＳＴＡ 159＋60を結ぶ線を南北の基線とし、この基線に対して直交する東西ラインをもって設定したのである。

グリッドの呼称は東西ラインには南からアラビア数字、南北ラインには東からアルファベッドを付し、両者の組み合わせで呼ぶこととし、各グリッド東南隅の杭をグリッド呼称のために用い、東西60ｍ、南北 245ｍの挟長な範囲をその中に組み入れた。

この中には郭と掘の存在が明らかで、郭は北から順にⅠ郭・Ⅱ郭・Ⅲ郭と呼称し、Ⅲ郭西側にある低平な郭をⅣ郭、またⅠ郭西側にありながら既に土取工事によって破壊を受けている南北に細長い小山をⅤ郭とし、このうち調査範囲内に含まれるⅠ郭東半、Ⅱ郭全域、Ⅲ郭西半、Ⅳ郭の一部、及びⅢ郭と妻の神Ⅲ遺跡との間にある土塁状の小山までを調査した。郭周囲の堀はⅠ郭北側にＡトレンチ、Ⅰ・Ⅱ郭間にＢトレンチ、Ⅱ・Ⅲ郭間にＣトレンチ、Ⅲ郭から妻の神Ⅲ遺跡との間にＤトレンチを設定し、その形状と規模の把握に努めた。しかし堀内堆積土層の崩壊が激しく、堀底面までの調査は完遂できなかった。


乳牛平遺跡
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
M L K J I H G F E D C B A
145
150
155
妻の神III遺跡
0
50 m

第1図　グリッド配置図

Ⅰ～Ⅲ郭上の表土除去は、調査の迅速化を図るため重機を用いて行ない、その後人力による粗掘、精査を行なって遺構、遺物の検出にあたった。

遺構等の実測にあたっては各グリッド隅の杭を利用して簡易遣り方測量によったが、一部で平板も用いた。

遺構は35㎜判と6×4.5判カメラを用い、モノクロ、カラーリバーサル写真を撮影した。また、航空写真測量により、遺構配置図、地形図を作成した。

3．調査の経過

調査は昭和56年4月16日から8月11日まで行なったが、7月2日からは明堂長根遺跡の表土除去作業と並行した。調査経過の概略は以下のとおりである。

4月16～21日　立木伐採後の枝の処理
4月22日～　Ⅱ郭粗掘作業開始
4月24日～　Ⅰ郭重機導入、抜根作業
5月1日～　Ⅱ郭精査開始
5月8日～　Ⅰ郭精査開始
5月13日～　Ⅲ郭重機導入、抜根作業開始
5月30日～　Ⅲ郭精査開始
7月22日～　Ⅳ郭精査開始
7月23日～　航空写真撮影
8月11日　調査完了

4．遺跡の層序

Ⅲ郭中央部を南北に通るAラインで土層断面図を作成したが、それによると基本層位はほぼ以下のとおりである。

第Ⅰ層：10YR3/2　黒褐色土、粘性中、黄褐色土粒子少量混入、植物根多い。耕作土である。
第Ⅱ層：10YR3/2　黒褐色土、粘性強、色調は第Ⅰ層と同じであるが、径1㎜以下の白色浮石粒が全体に混入している。中世の遺構はこの層を掘り込んで構築されている。
第Ⅲ層：10YR5/6　黄褐色土　10YR4/4　褐色土及び10YR3/2　黒褐色土が層全体に少量混入する。第Ⅱ層と地山の漸移層である。縄文時代の遺構はこの土層より掘り込まれている。

第Ⅳ層：10Y R6/2　灰黄褐色、地山シラス層

5．遺構と遺物

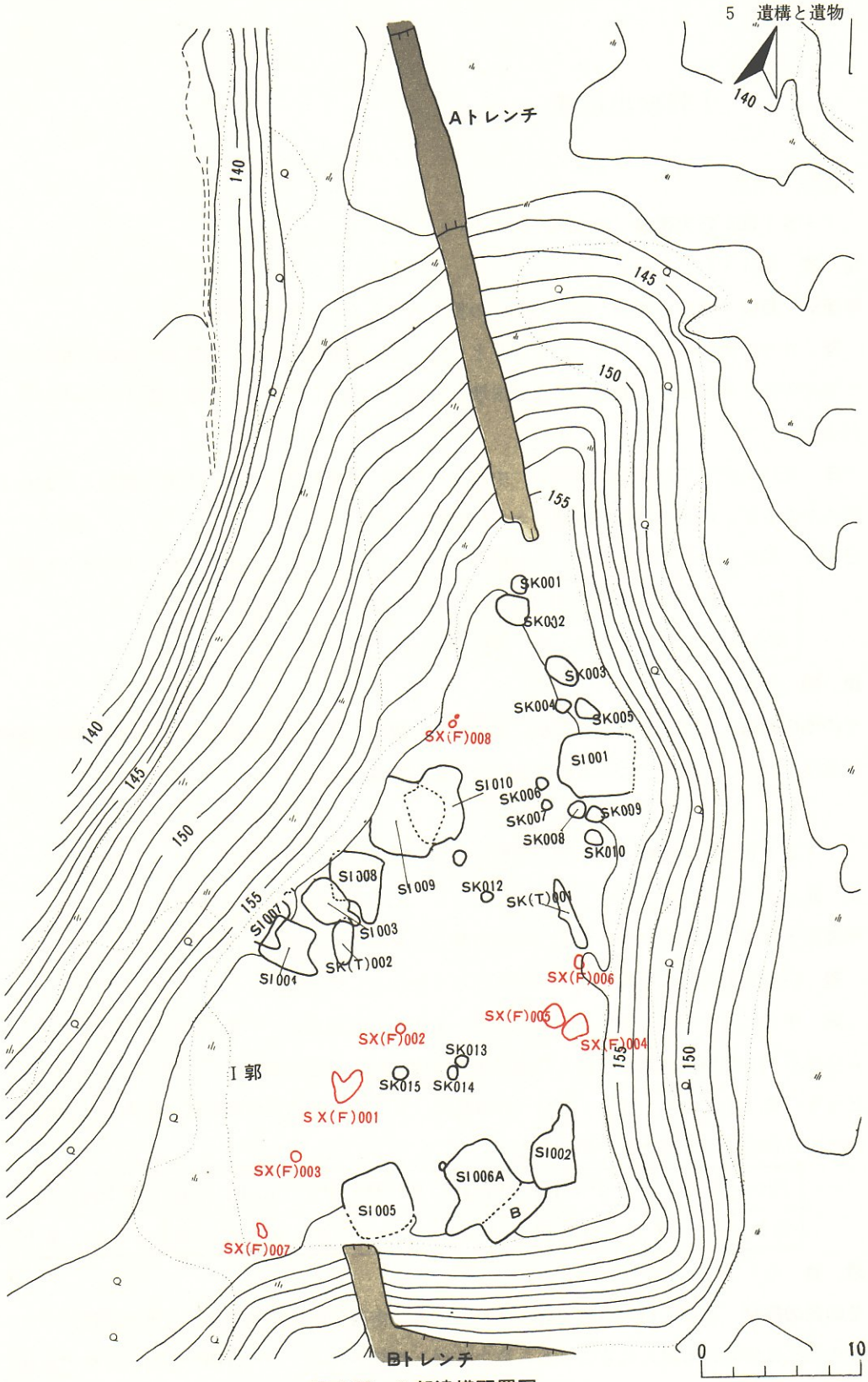
前述の様に、乳牛平遺跡は妻の神Ⅲ遺跡に連続し、南北に細長い形状を示している。Ⅴ郭西側斜面はⅠ～Ⅲ郭の斜面に比べ、かなり緩やかとなっており、恐らく削り出しによらない自然地形であろうと思われる。Ⅰ・Ⅱ郭中間部の東側には土塁状の小山があるが、この西側は堀の構築による削り出しを受けているが、東側は自然地形のままの斜面であり、妻の神Ⅲ遺跡から延びる標高 160ｍほどの台地との間に自然の沢が入り込む。

こうしたことから、乳牛平遺跡はおおよそ幅 120ｍほどの南北に延びる舌状台地を利用して堀を巡らし、郭を造築したことがわかる。

郭、堀自体も館の一部分を構成する遺構であるが、郭上の平場からは館に付随する遺構の他、縄文時代の遺構、遺物、弥生時代の遺物が検出された。遺構は郭ごとに発見順に番号を付し、通常の遺構番号の前に郭番号を付し、例えばⅠ・ＳＩ001のように標示した。館に付随すると考えられる遺構に確実に伴って出土した遺物は皆無であり、むしろ、縄文・弥生土器の方が量的に多い。しかし遺物総量はコンテナ３箱に収まり、極めて少ないと言える。

郭平場から検出された遺構、遺物は以下のとおりである。

Ⅰ郭	竪穴遺構	10	焼土遺構	8			
	土　　壙	2	Ｔピット	2			
Ⅱ郭	竪穴遺構	18	焼土遺構	33	柱　　列	1	土　　壙　24
	Ｔピット	6	溝	2	その他の遺構	4	
Ⅲ郭	竪穴遺構	4	焼土遺構	10	柱　　列	1	掘立柱建物跡　2
	溝	6	土　　壙	6	Ｔピット	6	その他の遺構　4
Ⅳ郭	溝	1					


Aトレンチ
Bトレンチ
140
145
150
155
SK001
SK002
SK003
SK004
SK005
SX(F)008
SI001
SI010
SK006
SK007
SK009
SK008
SK010
SI008
SI009
SK012
SK(T)001
SI007
SI003
SK(T)002
SI004
SX(F)006
SX(F)005
SX(F)004
SX(F)002
SK013
I郭
SK015
SK014
SX(F)001
SI002
SX(F)003
SI006A
B
SI005
SX(F)007
0
10m

第2図　Ⅰ郭遺構配置図

（1）　Ⅰ郭検出遺構

①竪穴遺構

Ⅰ・ＳＩ001 竪穴遺構（第３図、図版４）

位　置　38H・Ⅰグリッド

平面形・規模　東西 430cm、南北 370cmの長方形である。面積14.3㎡。

壁　外方に傾斜しながらも、しっかりとしている。西壁31～37cm、南壁10～34cm、北壁は０～36cmの高さを測るが、東壁は平場の崩壊も加わって消失している。南壁に若干の歪みが見られる。

床　東に向かってわずかに傾斜し、中央より東側に凹凸が見られる。中央に炉跡と思われる凹みがあるが、焼土、焼面が確認できず断定はしがたい。

ピット　壁に沿う形で16個のピットが検出された。Ｐ１～10がこの遺構の柱穴と考えられる。

Pit　No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
深さ(cm)	64	64	54	65	89	55	65	62	69	76	19	15

遺　物　なし。

その他の観察　南壁に否みがあるが、土層断面の観察と柱穴の配置状況から、別棟の竪穴遺構の重複ではなく、改築によるものであると考えられる。

Ⅰ・ＳＩ002 竪穴遺構（第４図、図版４・５・６・11）

位　置　33・34Ⅰグリッド

平面形・規模　東西 270cm、南北 340cmの長方形を呈する。面積9.7㎡

壁　四壁ともにほぼ垂直に立ち上がり、しっかりとしている。

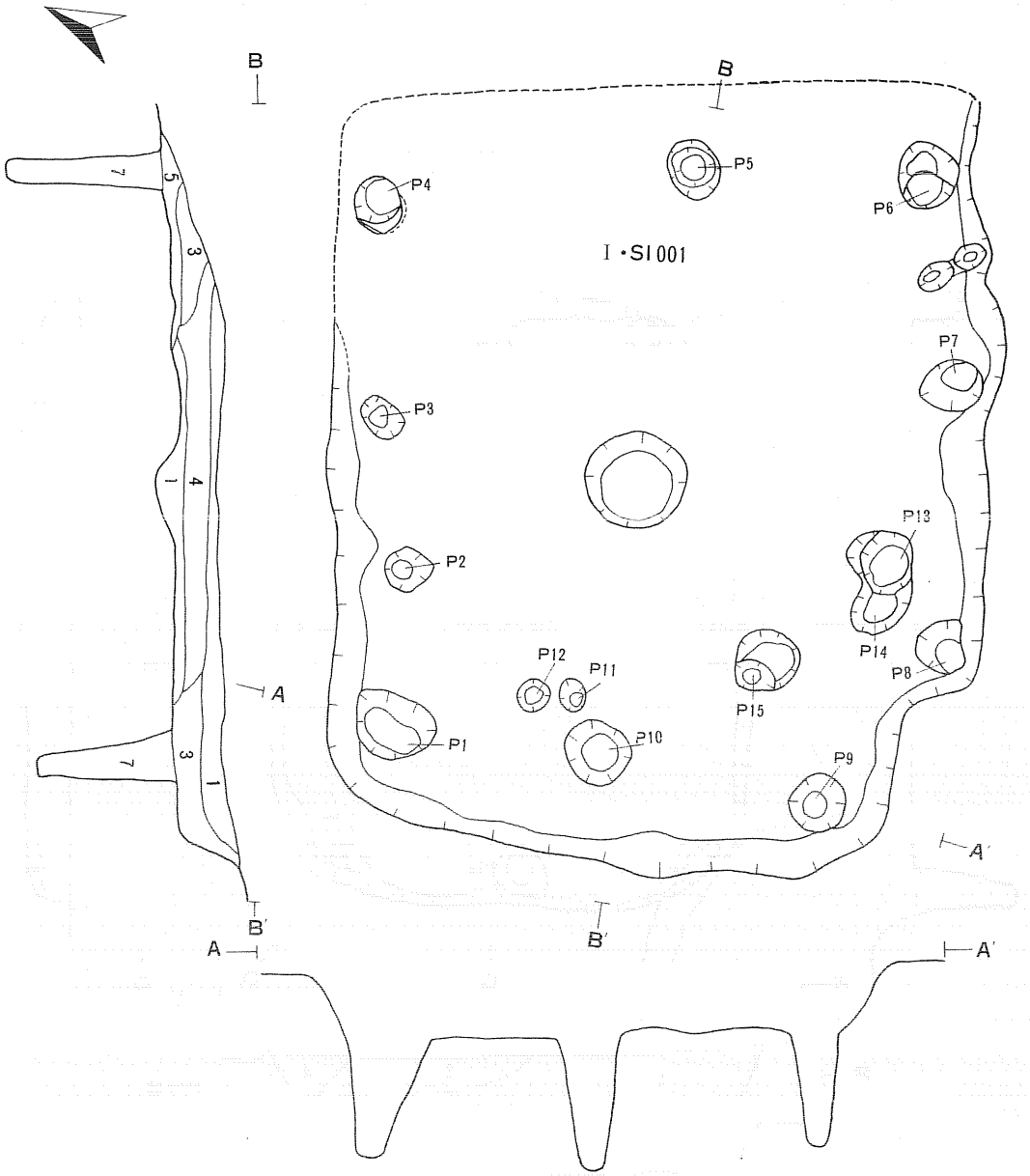
床　中心に向かって若干傾斜しているが、全体的にはおおよそ平坦で堅い。中央部北寄りから自然石が多数検出された。出入口部の床面は内部から外方へ向かってしだいに立ち上がる。

ピット　Ｐ１・２・４・５・９・11～13は柱穴、Ｐ７・８は出入口部の柱穴である。住居中央部にも２個のピットがあるが炉ではない。

Pit　No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15
深さ(cm)	43	66	30	31	53	9	41	37	46	49	31	58	67	24	7

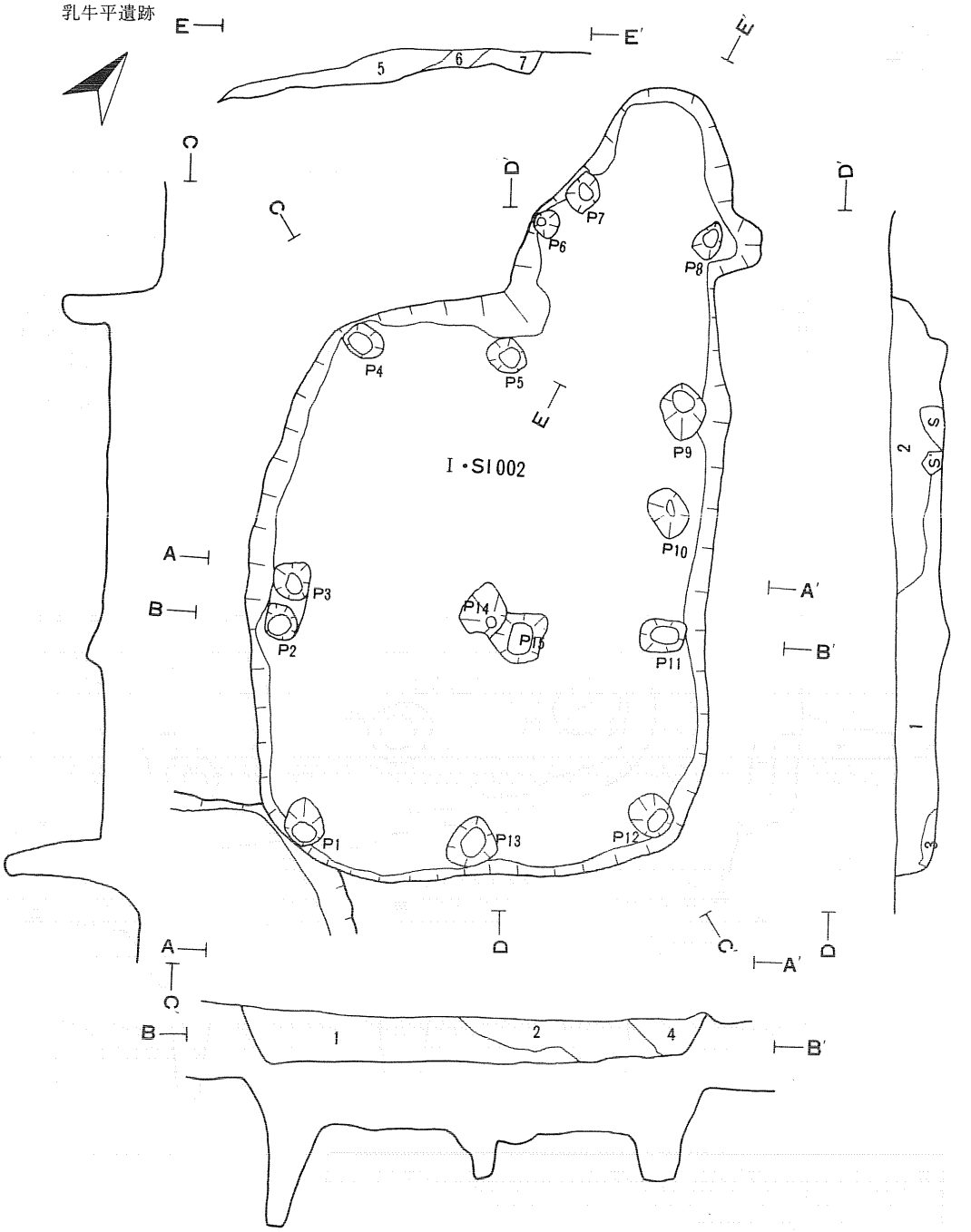
遺　物　なし。

その他の観察　北壁に出入口部が付設されている。南西部に炭化物を含んだ焼土が確認され、中央部には炭化材も見られることから焼失家屋と判断される。出入口部からは灰が検出された



層	土色	備考
1	黒色 (10YR 3/1)	粘性強，白色粒子，黄褐色粒子微量混入
2	黒褐色 (10YR 3/2)	粘性強，白色粒子，黄褐色粒子微量混入
3	黒褐色 (10YR 3/2)	粘性強，白色粒子微量，黄褐色粒子多量，壁側に黄褐色小ブロック微量混入
4	黒褐色 (10YR 3/2)	粘性強，白色粒子，黄褐色粒子微量混入
5	黒褐色 (10YR 3/2)	粘性強，下部に黄褐色粒子微量混入
6	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	粘性弱，白色粒子微量，黒色土多量混入
7	褐色 (10YR 4/6)	上部に砂混入

第3図　I・SI00 竪穴遺構実測図



層	土　色	備　考
1	黒 褐 色(10YR 3/2)	粘性強，黄褐色粒子微量混入
2	暗 褐 色(10YR 3/3)	黄褐色粒子少量混入
3	明黄褐色(10YR 6/6)	粘性弱，黄橙色粒子微量混入
4	明黄褐色(10YR 6/6)	褐色土少量混入
5	黒 褐 色(10YR 3/2)	粘性強，黄褐色粒子微量炭化物少量混入
6	黒 褐 色(10YR 3/2)	粘性強，炭化物多量混入
7	褐　色(10YR 4/4)	黒褐色土多量混入

第4図　I・SI002竪穴遺構実測図

が、住居内部に近い所では２～３cmの厚さに堆積していた。

Ⅰ・ＳⅠ003 竪穴遺構（付図３、図版７～９・13・14・16）

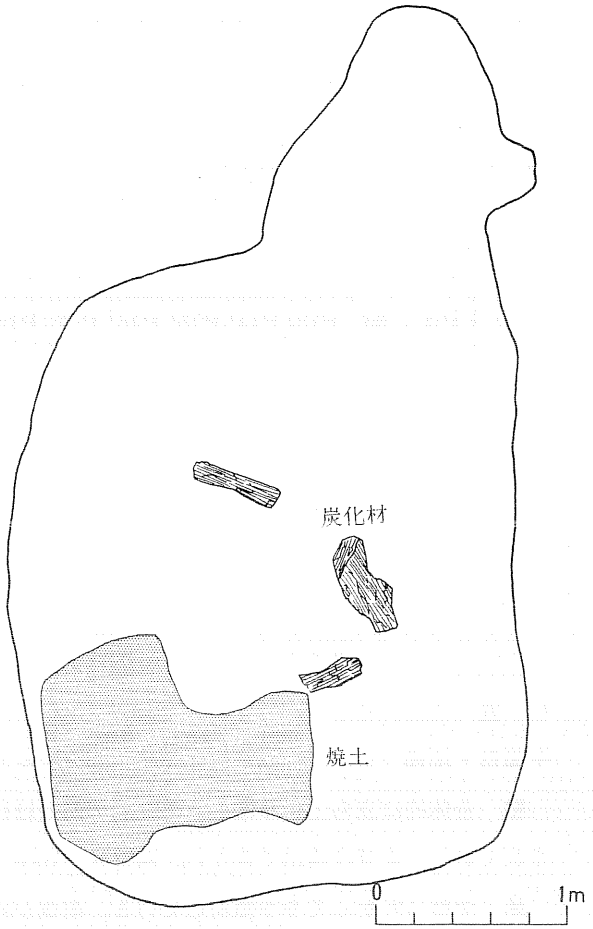
位　置　36K・L、37Lグリッド

平面形・規模　東西 250cm、南北 240cmの方形である。面積6.6㎡

壁　南壁はほぼ垂直に立ち上がり、その他の壁も急角度で立ち上がり、しっかりとしている。東壁14～26cm、西壁10～17cm、南壁13～28cm、北壁17～24cmの高さを測る。

床　西壁に向かってやや傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山が床面になっており堅い。出入口部床面は遺構内から外方へしだいに浅くなる。

ピット　Ｐ１～８が柱穴である。Ｐ８は重複するＳＩ 008の柱穴を再使用している。



第５図　Ⅰ・SI 002竪穴遺構焼土・炭化材分布図

Pit　No.	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８
深さ(cm)	64	70	61	65	51	76	51	28

遺　物　なし。

その他の観察　東壁に出入口が付設されている。焼失家屋で北側と東、西壁に沿って焼土が検出され、床面一帯に炭化材、炭化カヤが分布する。炭化材の方向は、ほぼ南北方向に一定している。ＳＩ008、ＳＫ（Ｔ）002と重複しており、これら遺構よりも新しい。

Ⅰ・ＳⅠ004 竪穴遺構（第６図、図版９・10・13・14）

位　置　36Lグリッド。

平面形・規模　東西 270cm、南北 270cmの方形である。面積 8.2㎡

壁　四壁ともほぼ垂直に立ち上がりしっかりしている。東壁11～18cm、西壁９～14cm、南壁９～18cm、北壁７～19cmの高さを測る。

床　北西コーナーに向って傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山を床面としており堅いが、ＳＩ 007との重複部分は軟弱である。 出入口部は遺構中央部から緩やかに立ち上がり、外方未端部はほとんど壁をなさない。

ピット　Ｐ１・３・７～12が柱穴。Ｐ５・20は出入口部の柱穴である。

Pit　No.	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９	Ｐ10	Ｐ11	Ｐ12
深さ(cm)	45	26	66	17	38	16	34	40	47	50	37	32
Pit　No.	Ｐ13	Ｐ14	Ｐ15	Ｐ16	Ｐ17	Ｐ18	Ｐ19	Ｐ20	Ｐ21	Ｐ22	Ｐ23	
深さ(cm)	21	14	22	17	8	48	19	40	70	32	39	

遺　物　なし。

その他の観察　東壁に出入口が付設されている。中央南側と東側に焼土の塊が検出され、炭化材、炭化カヤも見られることから焼失家屋と判断される。 ＳＩ 007と重複しており、 ＳＩ 007よりも新しい。

Ｉ・ＳＩ005竪穴遺構（第７図、図版11・12）

位　置　33K グリッド。

平面形・規模　東西 380cm、南北 340cmの方形を呈する。面積12.9㎡

壁　全体的に立ち上がりは小さい。北・西壁はほぼ確認できるが、南壁は木根によって攪乱されており、東壁は検出できない。西壁８～16cm、南壁０～12cm、北壁４～18cmの高さである。

床　南壁に向かってやや傾斜している。南側が木根によって攪乱されているが全体的に平坦である。地山が床面になっており堅い。

ピット　Ｐ１～９はこの住居跡の柱穴と思われるが、東西の柱穴が不揃いである。南壁Ｐ１・２間にも存在したはずであるが消失している。Ｐ８の掘り方も木根によって破壊されている。

Pit　No.	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６	Ｐ７	Ｐ８	Ｐ９
深さ(cm)	52	69	70	52	60	59	63	82	28

遺　物　なし。

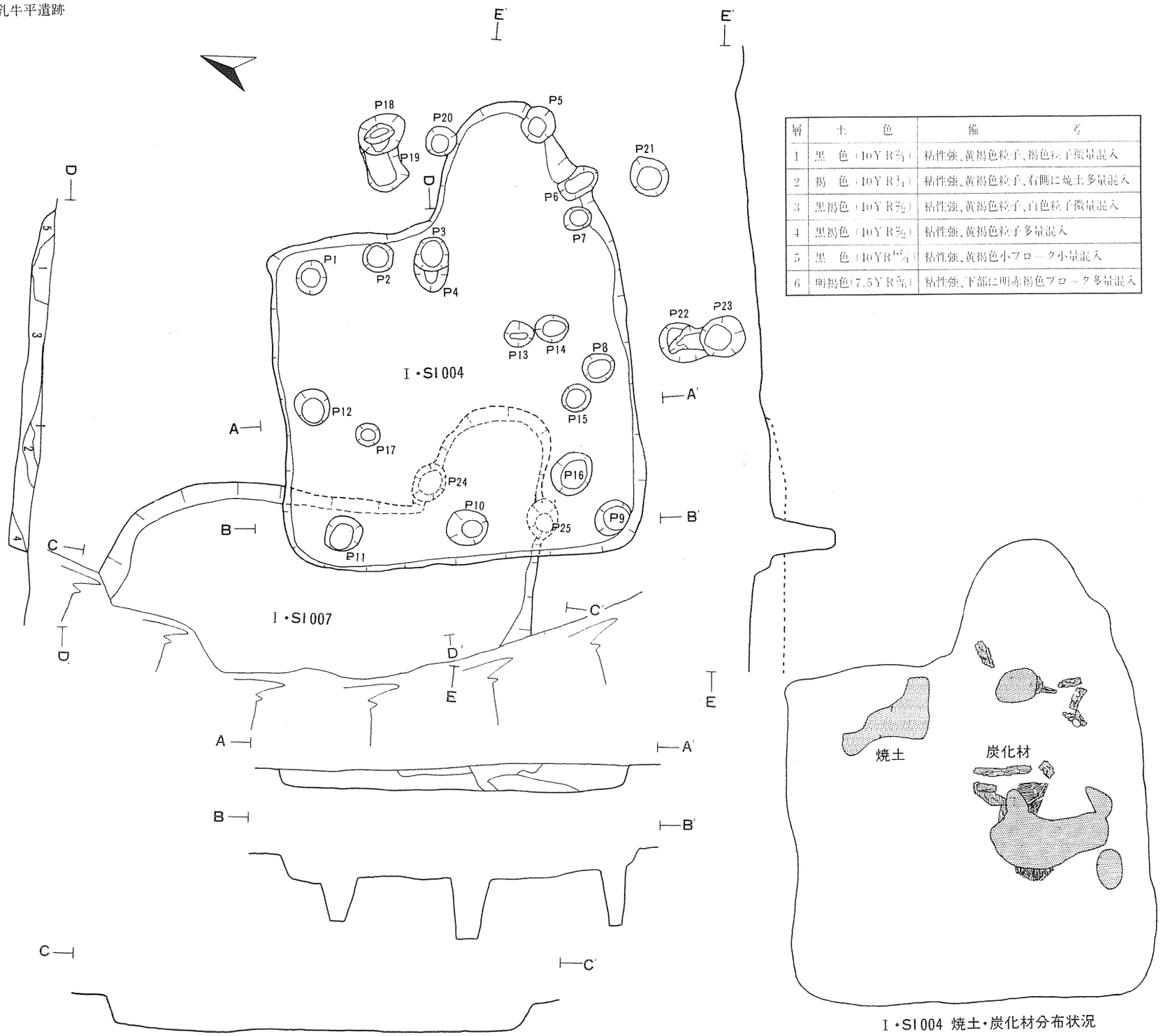
その他の観察　北東隅も木根により攪乱を受けている。

Ｉ・ＳＩ006－Ａ竪穴遺構（第８図、図版11・12）

位　置　32J 、33I ・J グリッド。

平面形・規模　東西 420cm、南北 350cmの長方形を呈する。面積16.4㎡

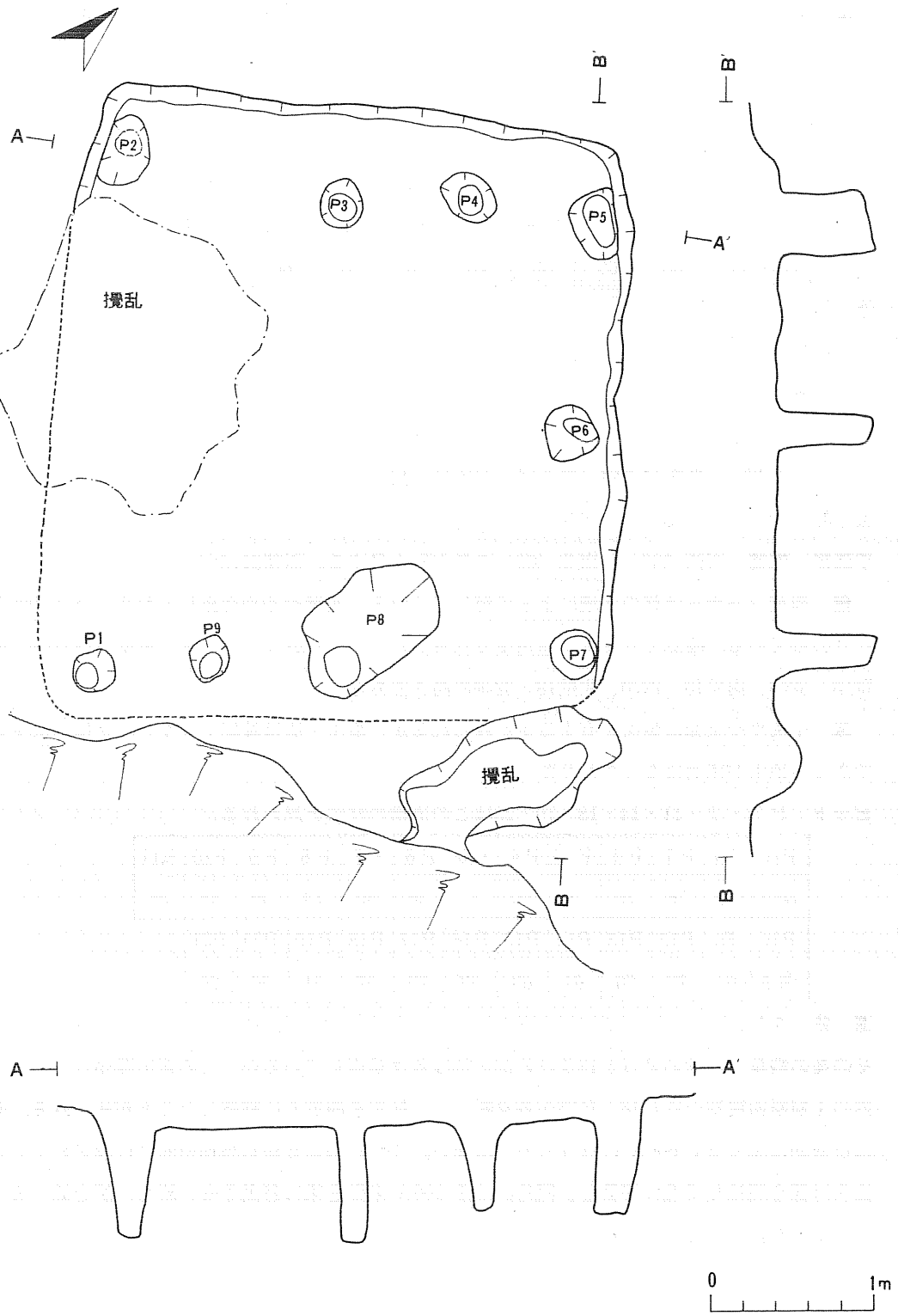
壁　ほぼ垂直に立ち上がり、しっかりしている。東壁は改築によって消失している。西壁23～32cm、南壁19～27cm、北壁18～32cmの高さである。



層	土　色	備　考
1	黒　色（10YR2/1）	粘性強、黄褐色粒子、褐色粒子微量混入
2	褐　色（10YR4/4）	粘性強、黄褐色粒子、右側に焼土多量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性強、黄褐色粒子、白色粒子微量混入
4	黒褐色（10YR3/2）	粘性強、黄褐色粒子多量混入
5	黒　色（10YR1.7/1）	粘性強、黄褐色小ブロック小量混入
6	明褐色（7.5YR5/6）	粘性強、下部に明赤褐色ブロック多量混入

I・SI004 焼土・炭化材分布状況

第6図　I・SI004・007竪穴遺構実測図



第7図　Ⅰ・SI005竪穴遺構実測図

床　地山が床面となっており、全体的に平坦である。東側の炉は建て替え後に付設されたものである。

ピット　P 1 ～ 7 、17・19～22がこの住居の柱穴で、P 15・16は出入口部の柱穴である。

Pit No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P15
深さ(cm)	76	70	76	60	37	36	60	29
Pit No.	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23
深さ(cm)	33.	69	33	73	57	51	66	29

遺　物　なし。

その他の観察　南壁に出入口が付設されている。北壁でＳＫ016と重複しているが、新旧関係は不明である。

Ｉ・ＳＩ 006－Ｂ竪穴遺構（第８図、図版11・12）

位　置　32I ・J 、33I ・J グリッド。

平面形・規模　東西 580cm、南北 430cmの長方形を呈する。面積21.6㎡

壁　南東コーナーは郭の崩壊によって消失している。北壁がやや突出しており、 ＳＩ 002と切り合っている。確認できる壁は急角度で立ち上がり、しっかりしている。東壁11～18cm、西壁23～32cm、南壁18～27cm、北壁18～32cmの高さである。

床　中央やや東側に焼面を有する炉がみられるが、焼土・灰は確認できない。全体的に平坦である。地山が床面になっており堅い。

ピット　P 1 ・ 7 ・11・14・18・19・23はこの遺構の柱穴と思われる。

Pit No.	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P10	P11
深さ(cm)	76	70	76	60	37	36	60	13	39	58	36
Pit No.	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	
深さ(cm)	72	76	61	63	33	73	57	51	66	29	

遺　物　なし。

その他の観察　南壁のＰ17と18及びＰ22と23は各々重複しているが、この新旧関係は、ピット内の土層断面観察からＰ18とＰ23が各々新しく、柱穴を西寄りに移築したことが知られる。炉は位置的に見てＳＩ 006A に伴うものではない。これらのことから当初南向に付設されていた出入口部を廃絶して北に移築し、同時にＳＩ 006A 東壁を東に移動させ、新たに炉を設けるという改築を行ったと判断される。

層	土　　色	備　　考
1	黒　色（10YR2/1）	粘性強，下部に褐色土少量混入

I・SK016

I・SI006A

I・SI006B

I・SI006

層	土　　色	備　　考
1	黒褐色（10YR3/2）	黄褐色粒子多量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性強、黄褐色粒子微量混入
3	黒　色（10YR1.7/1）	粘性強
4	黒　色（10YR2/1）	黄褐色小ブロック少量混入
5	黒褐色（10YR3/2）	粘性強、黄褐色粒子小量混入
6	黄褐色（10YR5/6）＋明褐色（10YR5/8）	

0　1m

第8図　I・SI006竪穴遺構・SK016土壙実測図

Ⅰ・ＳＩ007 竪穴遺構（第19図、図版13・14）

位　置　36Ｍグリッド。

平面形・規模　南北 340cmを測るが、東側は崩壊しており、全体の規模は不明である。

壁　東壁の全体と北・南壁のごく一部が確認されるのみで、その他は郭の崩壊により、消失している。確認できる部分はほぼ垂直に立ち上がってしっかりしている。東壁のほとんどもＳＩ004 によって切られているが、壁高が35cm以上を測るので、重複部分も残存している。

床　半分以上崩壊しているが、確認できる部分は平坦で、北壁に向かってやや傾斜している。地山が床面になっており堅い。

ピット　Ｐ25・26は出入口の柱穴と思われる。床面には検出されなかった。

Pit　No.	Ｐ24	Ｐ25
深さ(cm)	48	68

遺　物　なし。

その他の観察　東壁に出入口が付設されている。ＳＩ004と重複しており、ＳＩ004より古い。

Ⅰ・ＳＩ008（付図３、図版13・14・16）

位　置　36Ｋ、37Ｋ・Ｌグリッド。

平面形・規模　東西 300cm、南北 320cmの方形を呈する。面積10.4㎡。

壁　東壁はほぼ全体を確認できるが、17cmほどの高さに緩やかに立ち上がっている。北壁は全く検出されず、南壁、西壁も一部が検出されただけであるが、それぞれ11～17cm、３cmの高さである。

床　おおよそ平坦であるが、東壁に向かってやや傾斜している。地山が床面になっており堅い。

ピット　Ｐ８～10・13・14・20・30・32・37・39・41と崩壊部の一個を含んだ12本が柱穴である。

Pit　No.	Ｐ9	Ｐ10	Ｐ11	Ｐ12	Ｐ13	Ｐ14	Ｐ15	Ｐ16	Ｐ17	Ｐ18	Ｐ19	Ｐ20	Ｐ21	Ｐ22	Ｐ23	Ｐ29
深さ(cm)	26	25	47	15	24	43	39	10	41	15	14	20	45	42	48	37
Pit　No.	Ｐ30	Ｐ31	Ｐ32	Ｐ33	Ｐ34	Ｐ35	Ｐ36	Ｐ37	Ｐ38	Ｐ39	Ｐ40	Ｐ41	Ｐ42	Ｐ43	Ｐ44	Ｐ45
深さ(cm)	28	28	42	61	37	15	66	42	32	40	28	26	31	20	21	26

遺　物　なし。

その他の観察　南壁に出入口が付設されている。出入口部の壁は外方に緩やかな立ち上がりを示すが、90cmほどの高さを有する。この出入口部と竪穴床面に焼土を含む盛り上がりが見られ、

炭化材はないが、焼失家屋であると判断される。北西隅は郭の崩壊によって消失し、南西隅がＳＩ 003によって切られている。ＳＩ 009との新旧関係は定かでない。

Ｉ・ＳＩ009 竪穴遺構（付図３、図版13・14・15）

位　置　37J ・K、38J ・Kグリッド。

平面形・規模　東西 425cm、南北 410cmの方形を呈する。面積16.6㎡。

壁　東壁は遺構確認面では全く確認できなかったが、土層断面ではＳＩ010との間に土色の違いが見られた。西壁は郭の崩壊で確認できない。南壁は大部分が残っているが立ち上がりはそれほど急角度ではない。北壁では一部であるがしっかりとした状況がみられる。東壁12～20cm、南壁11～22cm、北壁22～38cmの高さである。

床　中西部に炉があり、炭化物、灰、焼土が確認できる。全体的に平坦である。地山が床面になっており堅い。

ピット　Ｐ46・50・52・55～58・64・65・67・69～72・76～78がＳＩ 009の柱穴であるが、重複状況から、Ｐ64よりもＰ65が、Ｐ84よりもＰ85が、Ｐ77よりＰ78がそれぞれ新しい。このことと柱穴の配列状況から２度の建て替えが知られる。

Pit　No.	P24	P25	P26	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P52	P53	P54	P55	P56	P57
深さ(cm)	62	22	71	99	60	37	59	43	23	42	76	36	52	36	41
Pit　No.	P58	P59	P60	P61	P62	P64	P65	P66	P67	P68	P69	P70	P71	P72	P73
深さ(cm)	28	64	38	43	40	70	61	54	36	37	36	29	44	70	68
Pit　No.	P74	P75	P76	P77	P78	P79	P80	P81	P82	P83	P84	P85	P86		
深さ(cm)	15	18	63	57	82	72	47	67	10	31	90	19	27		

遺　物　なし。

その他の観察　ＳＩ 010と重複しており、本遺構の方が新しい。

Ｉ・ＳＩ010 竪穴遺構（付図３、図版13・14・15）

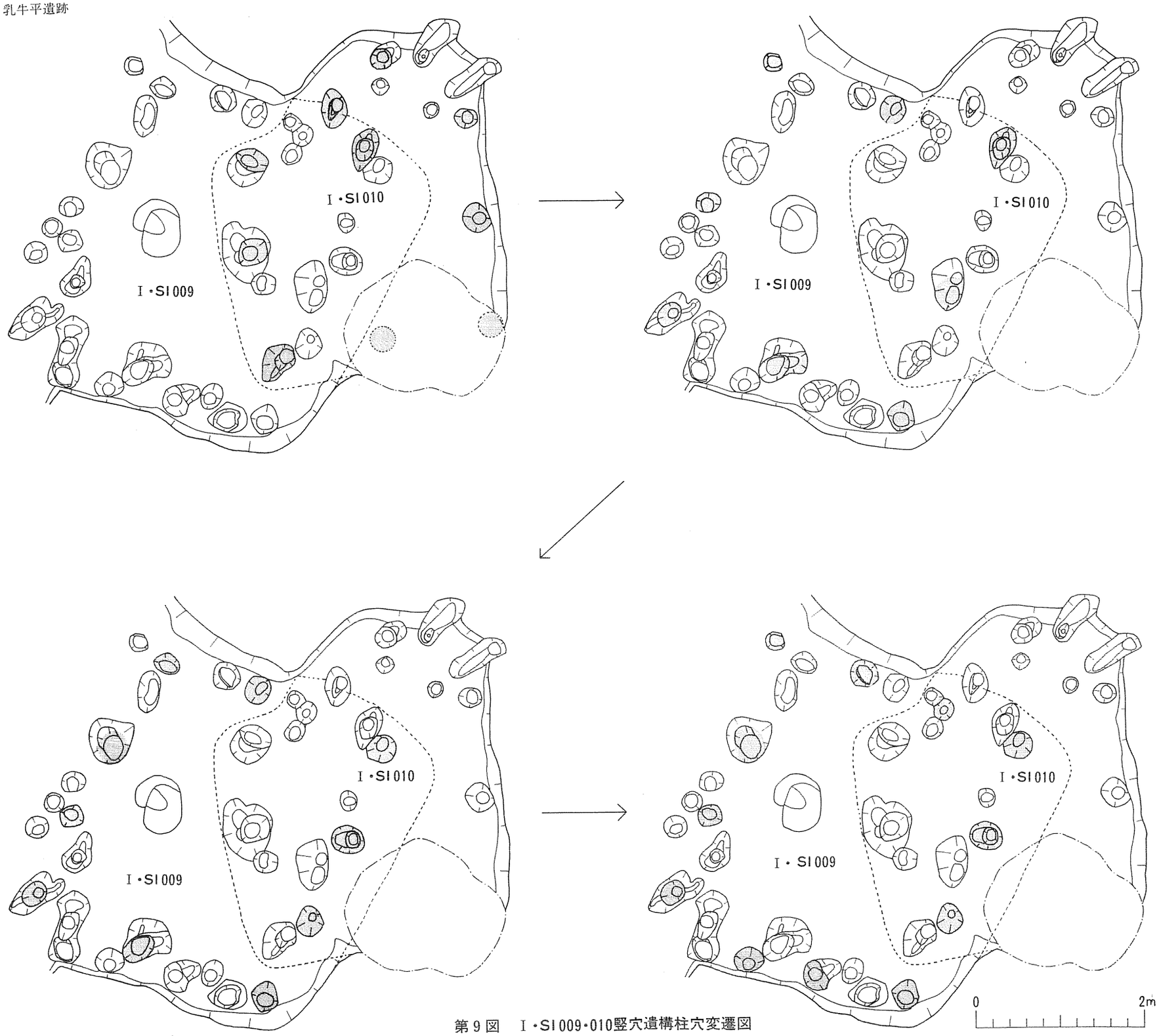
位　置　37・38J グリッド。

平面形・規模　東西 390cm、南北 330cmの方形を呈する。面積11.2㎡。

壁　ＳＩ 009と木根の攪乱によって大部分が破壊されており、東壁と出入口部の壁しか残存しない。東壁は低く、外方に緩やかに傾斜している。

床　地山が床面になっており堅いが、全体的に若干の凹凸がみられる。

ピット　Ｐ59・64・71・84・94・95が柱穴であるが、南側の２個を欠く。Ｐ63・88・91・92は出入口部の柱穴と思われるが定かでない。



第9図　I・SI009・010竪穴遺構柱穴変遷図

Pit　No.	P63	P87	P88	P89	P90	P91	P92	P93	P94	P95	P96
深さ(cm)	40	28	40	25	39	35	34	10	11	39	49

遺　物　なし。

その他の観察　北壁に出入口が構築されている。他の遺構の出入口部とは若干形態を異にし、壁は10cm前後を測る。ＳＩ009と重複しており、ＳＩ009より古い。

②焼土遺構（第10・11図、図版20）

焼土遺構は８基確認された。他の遺構との重複はなく、特定地点への集中も見られない。

第１表　Ｉ・ＳＸ(Ｆ)焼土遺構観察表

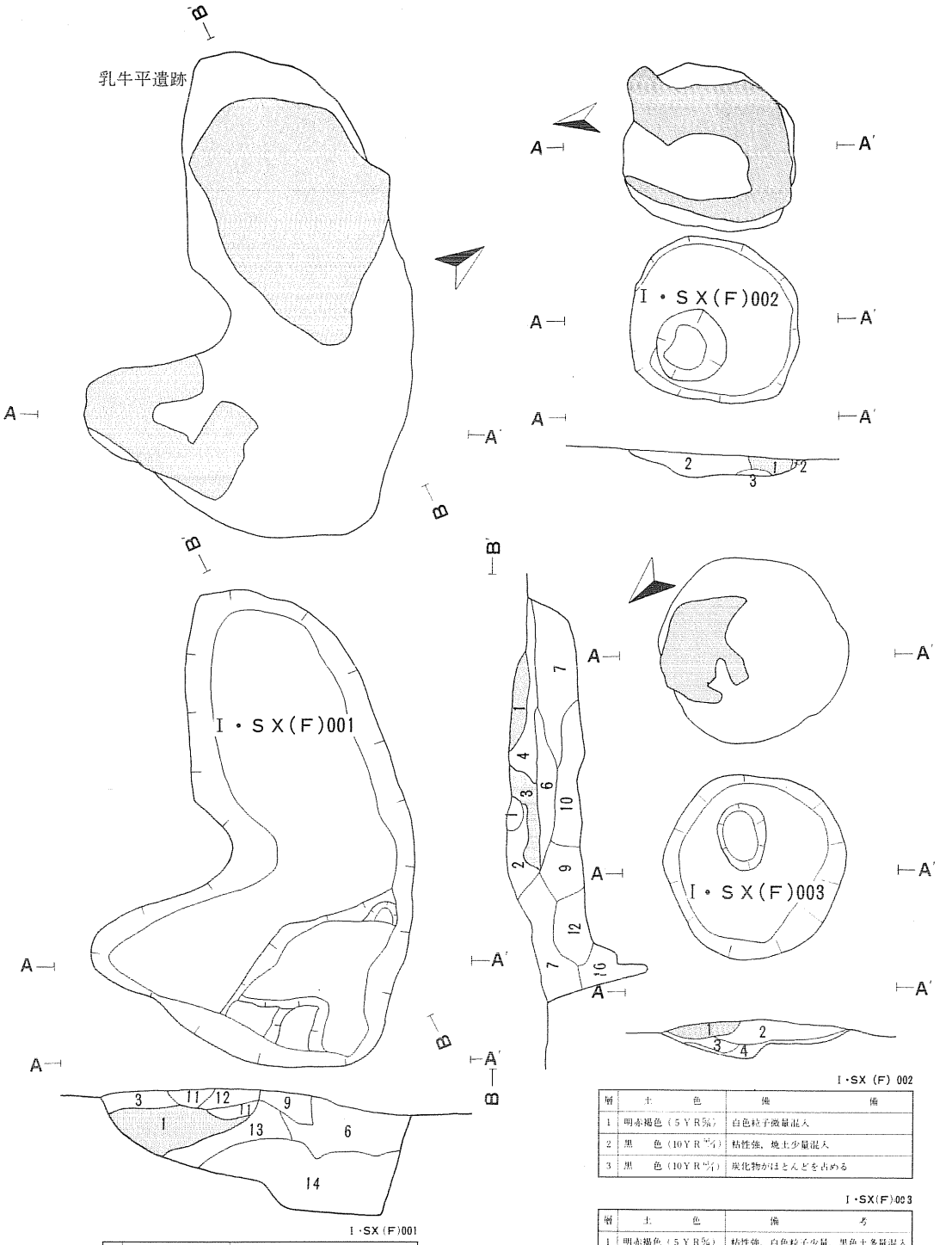
遺構番号	検出位置	法量			遺物
		長径	短径	深さ	
ＳＸ（Ｆ）001	34－Ｋ，34－Ｌ	226cm	157cm	19～50cm	なし
ＳＸ（Ｆ）002	35－Ｋ	79cm	75cm	4～11cm	なし
ＳＸ（Ｆ）003	33－Ｌ	85cm	84cm	8～17cm	なし
ＳＸ（Ｆ）004	35－Ｈ，35－Ｉ	191cm	129cm	9～13cm	なし
ＳＸ（Ｆ）005	35－Ｉ	147cm	140cm	6～42cm	なし
ＳＸ（Ｆ）006	35－Ｈ，36－Ｈ 35－Ｉ，36－Ｉ	79cm	54cm	5～ 9cm	なし
ＳＸ（Ｆ）007	32－Ｌ，32－Ｍ	127cm	88cm	2～12cm	なし
ＳＸ（Ｆ）008	38－Ｊ，39－Ｊ	49cm 22cm	41cm 18cm	3～ 6cm 7cm	なし

③Ｔピット（第15図、図版21）

縄文時代のＴピットが２基検出された。

第２表　Ｉ・ＳＫ(Ｔ)Ｔピット観察表

遺構番号	検出位置	法量			長軸方位	遺物
		長径	短径	深さ		
ＳＫ（Ｔ）001	36－Ｈ，36－Ｉ 37－Ｉ	463cm	69cm	90～107cm	Ｎ－54.5°－Ｗ	なし
ＳＫ（Ｔ）002	36－Ｋ，36－Ｌ	234cm	132cm	79～102cm	Ｎ－29.5°－Ｅ	なし



I・SX (F) 001

層	土色	備考
1	赤褐色（5YR5/6）	白色粒子少量混入，焼土
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，白色粒子少量，焼土多量混入
3	明赤褐色（5YR5/6）	粘性強，白色粒子，黒色土微量混入，焼土
4	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子，焼土，灰微量混入
5	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，白色粒子，焼土少量混入
6	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子多量混入
7	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，白色粒子少量混入
8	暗褐色（10YR3/3）	粘性強，黄褐色土，黒色土少量混入
9	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子，褐色土少量混入
10	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子多量混入
11	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子微量混入
12	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，焼土，灰多量混入
13	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子，焼土，灰多量混入
14	暗褐色（10YR3/3）	粘性強，右側に黒色土，焼土少量混入

I・SX (F) 002

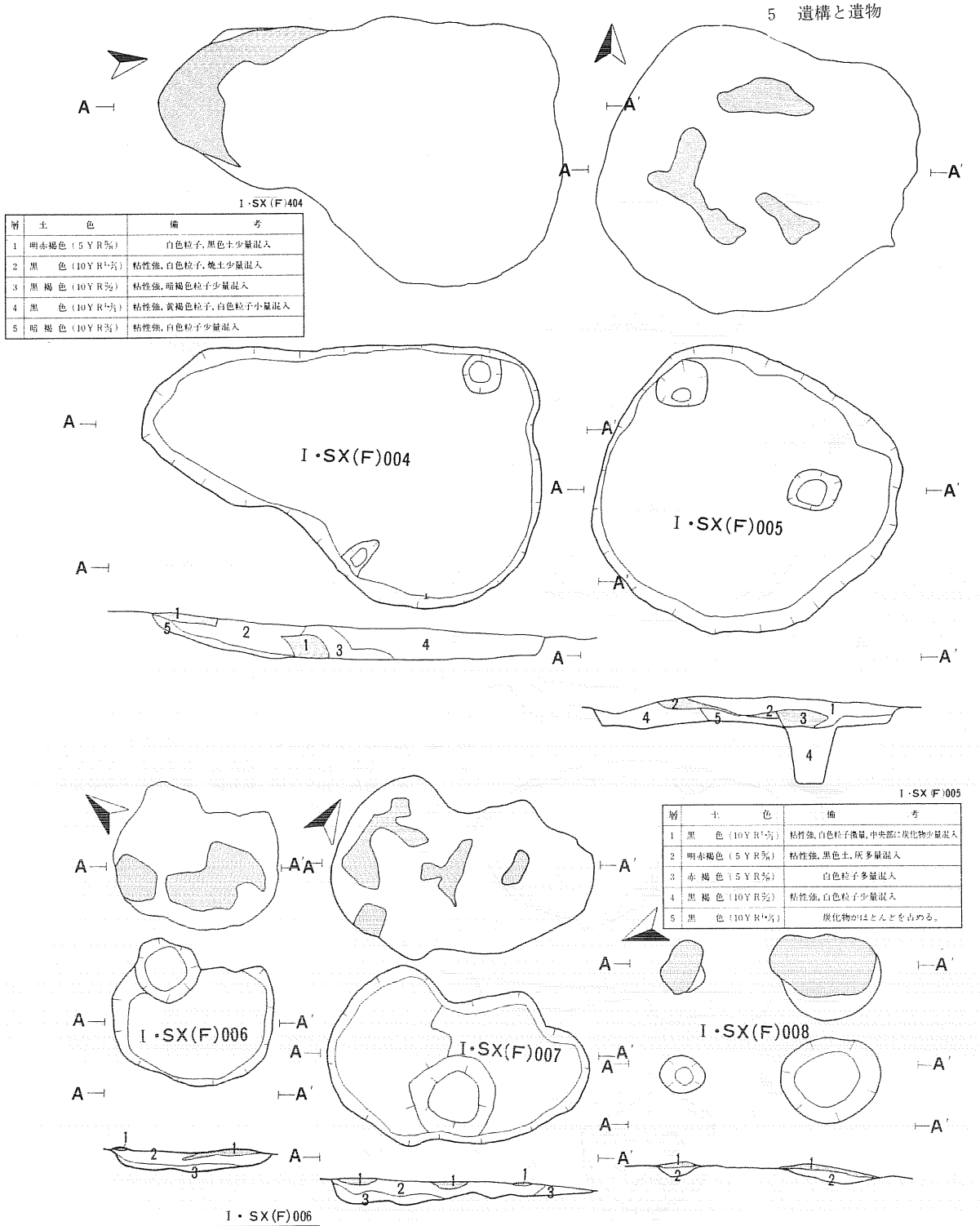
層	土色	備考
1	明赤褐色（5YR5/6）	白色粒子微量混入
2	黒色（10YR2/1）	粘性強，焼土少量混入
3	黒色（10YR2/1）	炭化物がほとんどを占める

I・SX(F)003

層	土色	備考
1	明赤褐色（5YR5/6）	粘性強，白色粒子少量，黒色土多量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，炭化物多量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	暗褐色土少量混入
4	暗褐色（10YR3/3）	

0 1m

第10図　I・SX(F)001～003焼土遺構実測図



I・SX(F)404

層	土色	備考
1	明赤褐色（5YR5/6）	白色粒子，黒色土少量混入
2	黒色（10YR1.7/1）	粘性強，白色粒子，焼土少量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，暗褐色粒子少量混入
4	黒色（10YR1.7/1）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子小量混入
5	暗褐色（10YR3/3）	粘性強，白色粒子少量混入

I・SX(F)005

層	土色	備考
1	黒色（10YR1.7/1）	粘性強，白色粒子微量，中央部に炭化物少量混入
2	明赤褐色（5YR5/6）	粘性強，黒色土，灰多量混入
3	赤褐色（5YR4/6）	白色粒子多量混入
4	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，白色粒子少量混入
5	黒色（10YR1.7/1）	炭化物がほとんどを占める。

I・SX(F)006

層	土色	備考
1	赤褐色（5YR4/6）	粘性強，白色粒子，黒色土少量混入
2	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子，焼土量混入
3	暗褐色（10YR3/3）	黄褐色粒子少量混入

I・SX(F)007

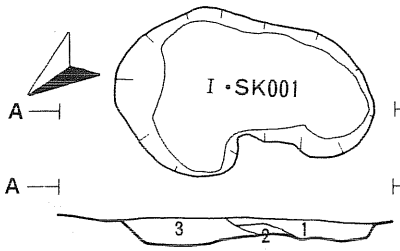
層	土色	備考
1	明赤褐色（5YR5/6）	白色粒子少量に混入
2	黒褐色（10YR3/2）	黄褐色粒子，黒色土少量混入
3	褐色（10YR4/6）	

I・SX(F)008

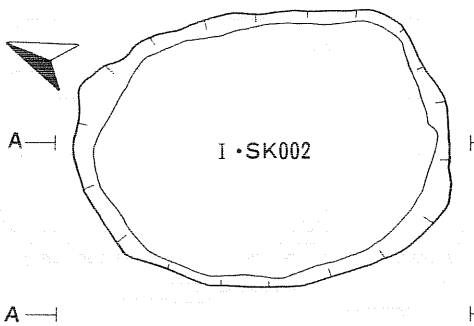
層	土色	備考
1	明赤褐色（5YR5/6）	炭化物少量混入，焼土
2	黒褐色（10YR3/3）	

第11図　I・SX(F)004～008焼土遺構実測図

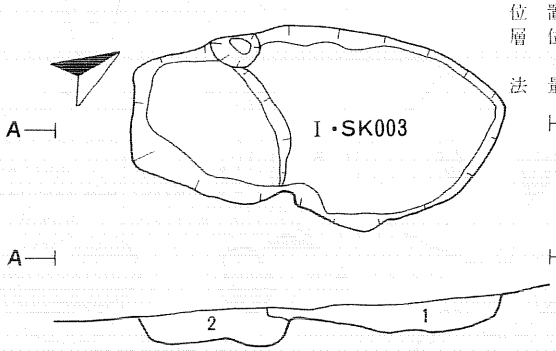
④土　壙（12・13・14・17図、図版16・17・18・19・20）



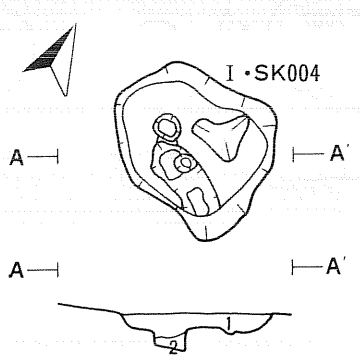
位　置　40－1 グリッド
層　位　1．黒褐色（10YR3/2）黄褐色粒子微量混入
　　2．黄褐色（10YR5/6）粘性強，明黄褐色粒子微量混混入
　　3．暗褐色（10YR3/3）黄褐色粒子微量混入
法　量　径 138～90cm
　　深さ　21cm



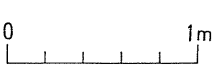
位　置　40－I グリッド
層　位　1．黒　色（10YR2/1）粘性強，黄褐色粒子微量混入
　　2．黒褐色（10YR3/2）粘性強，黄褐色粒子多量混入
法　量　径 206～154cm
　　深さ　20.7cm



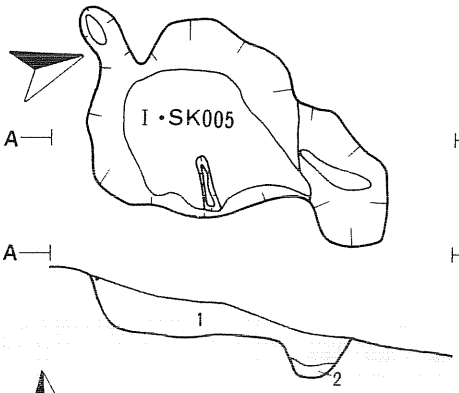
位　置　39－H，I グリッド
層　位　1．黒色（10YR2/1）粘性強，黄褐色粒子多量混入
　　2．黒色（10YR1.7/1）粘性強，黄褐色粒子微量混入
法　量　径　198～106cm
　　深さ　17.5cm



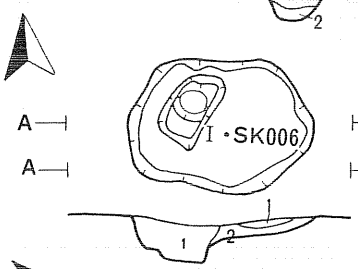
位　置　39－I グリッド
層　位　1．黒褐色（10YR3/2）黄褐色粒子微量混入
　　2．暗褐色（10YR3/3）黄褐色粒子少量混入
法　量　径　96～86cm
　　深さ　21.5cm



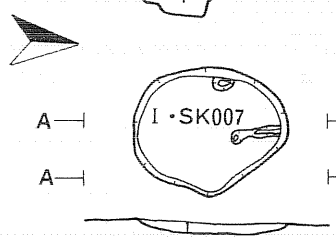
第12図　I SK001～004土壙実測図



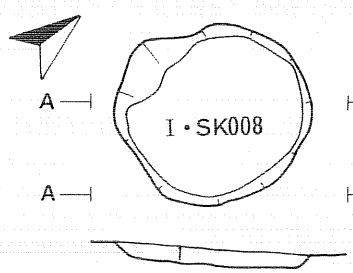
位　置　39－Hグリッド
層　位　1．黒褐色（10YR⅔）黄褐色粒子微量混入
　　2．黄褐色（10YR⅝）粘性弱，黄錆色土微量混入
法　量　径　170～106cm
　　深さ　36.9cm



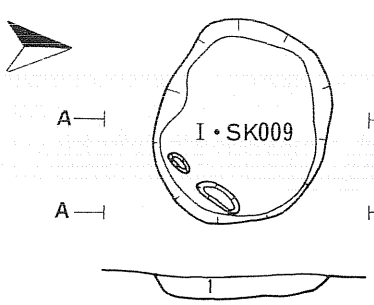
位　置　38－Iグリッド
層　位　1．黒褐色（10YR⅔）黄褐色粒子微量混入
　　2．明黄褐色（10YR⅞）粘性弱，にぶい黄橙色土微量混入
法　量　径　98～70cm
　　深さ　21cm



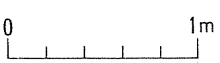
位　置　37－I，38－Iグリッド
層　位　1．黒色（10YR⅔）粘性強，黄褐色粒子微量混入
法　量　径　82～68cm
　　深さ　5.4cm



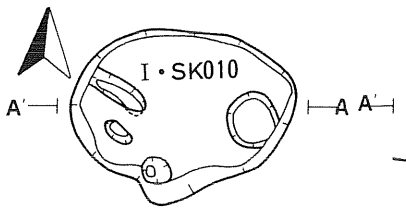
位　置　37－H，I，38－H，Iグリッド
層　位　1．黒褐色（10YR⅔）粘性強，黄褐色粒子
　　下部に黄褐色小ブロック微量混入
法　量　径　102～100cm
　　深さ　13.7cm



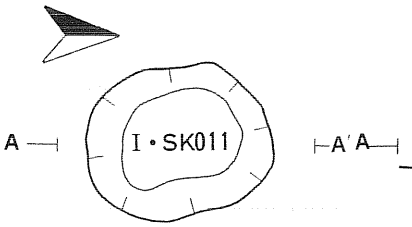
位　置　37－Hグリッド
層　位　1．黒褐色（10YR⅔）粘性強，黄褐色粒子少量混入
法　量　径　108～92cm
　　深さ　17.6cm



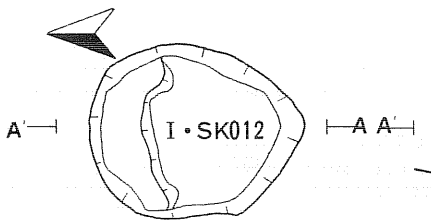
第13図　I・SK005～009土壙実測図



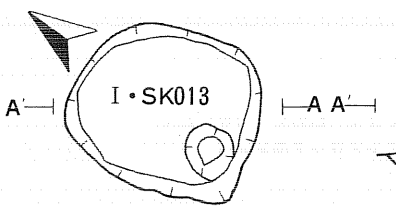
位　置　37－Hグリッド
層　位　1．黒　色（10YR2/1）粘性強，黄褐色粒子微量混入
　　2．暗褐色（10YR3/3）粘性強，黄褐色粒子多量混入
法　量　径　120～94cm
　　深さ　9.5cm



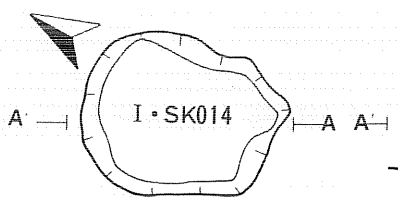
位　置　37－Jグリッド
層　位　1．黒色（10YR2/1）粘性強，黄褐色粒子少量混入
法　量　径　100～84cm
　　深さ　26.8cm



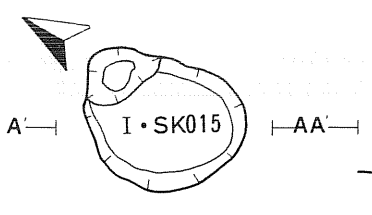
位　置　36－Jグリッド
層　位　1．黒色（10YR2/1）粘性強，黄褐色粒子微量混入
法　量　径　114～94cm
　　深さ　11.7cm



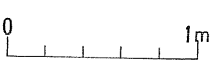
位　置　34－Jグリッド
層　位　1．黒　色（10YR1.7/1）粘性強，黄褐色粒子，白色粒子微量混入
　　2．黒褐色（10YR3/2）粘性強，黄褐色粒子，白色粒子微量混入
法　量　径　104～90cm
　　深さ　9.6cm



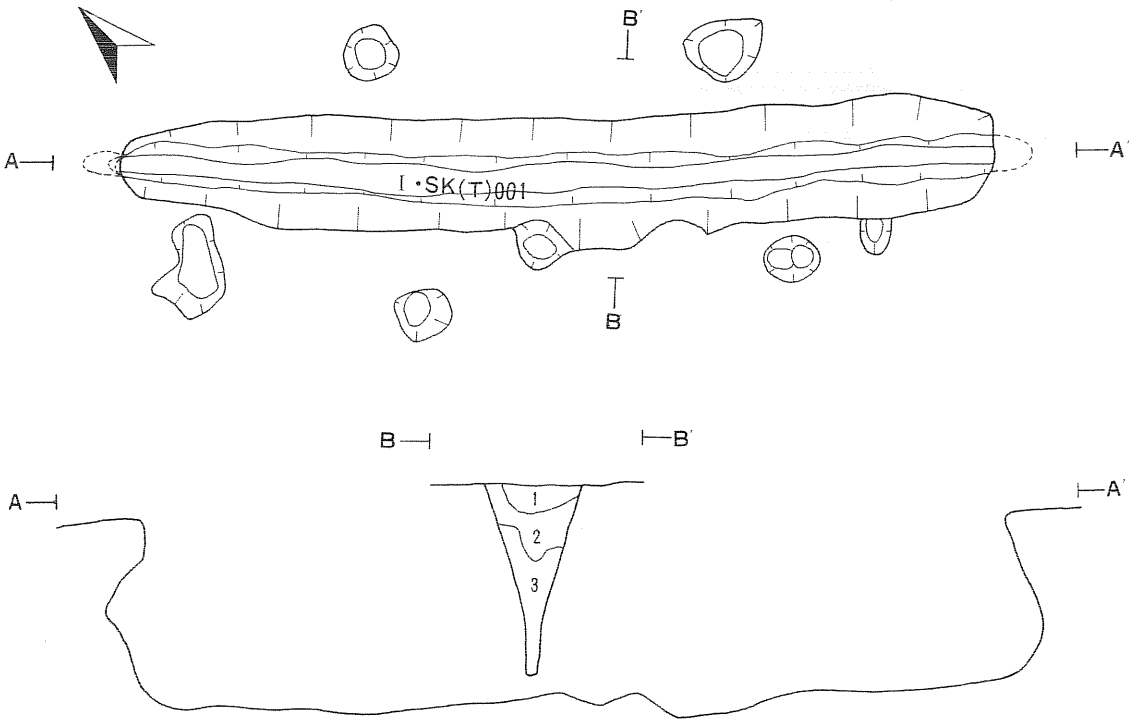
位　置　34－Jグリッド
層　位　1．黒褐色（10YR3/2）粘性強，黄褐色粒子微量混入
法　量　径　110～86cm
　　深さ　10.2cm



位　置　34－Kグリッド
層　位　1．黒　色（10YR2/1）粘性質，黄褐色粒子微量混入
　　2．褐　色（10YR3/4）黒褐色土微量混入
　　3．黄橙色（10YR7/8）黄褐色粒子微量混入
法　量　径　90～70cm
　　深さ　13.3cm



第14図　I・SK010～015土壙実測図



層	土　　色	備　　考
1	黒　　色（10YR$^{2}/_{1}$）	粘性強，黄褐色粒子微量混入
2	黒 褐 色（10YR$^{2}/_{2}$）	粘性強，黄褐色粒子微量混入
3	黒 褐 色（10YR$^{3}/_{3}$）	粘性強，黄褐色粒子多量混入

第15図　I・SK(T)001Tピット実測図

(2)　II郭検出遺構

①　竪穴遺構

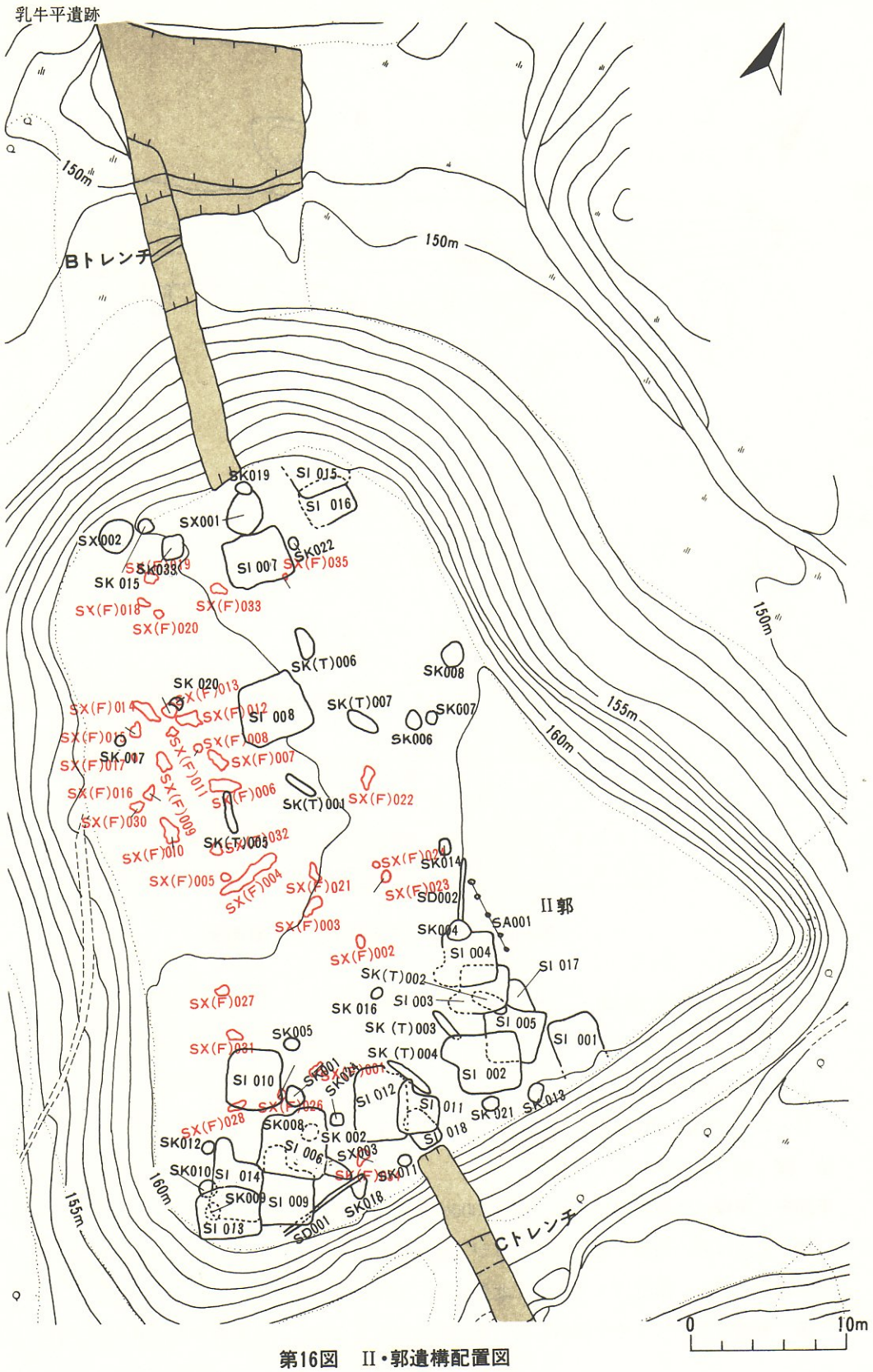
II・SI001竪穴遺構（第17・18図、図版24・25）

位　置　18・19Eグリッド

平面形・規模　東西推定 380cm、南北 300cmの長方形を呈する。

壁　東壁は郭の崩壊で消失しているが、他の壁は急角度で立ち上がり、しっかりとしている西壁は12～20cm、南壁は３～16cm、北壁は18～27cmの高さである。

床　東側に向かってやや傾斜している。西側にSKO23による凹みが見られるが、おおよそ



第16図　II・郭遺構配置図

平坦である。地山を床面としているが、それほど堅くない。

ピット

Pit No	P1	P2	P3
深さ(cm)	62	44	55

P1～3はこの遺構の柱穴であるが、北東隅の柱穴は消失している。

遺　物　なし。

その他の観察　西壁に住居床面を掘り凹めて焼土・炭化物を含む盛り上がりが見られ、付近の床に40×42cmの範囲で焼面がある。袖・煙道部・煙出はなく、カマドとは断定し難い。遺構確認面からSK023 が掘り込まれている。

II・SI002竪穴遺構（付図4、図版24・25）

位　置　18F・Gグリッド

平面形・規模　東西 320cm、南北 220cmの正方形を呈する。面積16.7m²。

壁　四壁とも緩やかな立ち上がりであるが、しっかりしている。

床　全体的に平坦で傾斜もみられない。地山を床面としているが、それほど堅くない。

ピット　P1・2・5・7・9・10・15・29・32・36・37・40は柱穴で一様に深い。P21・28は出入口部の柱穴である。

遺　物　なし。

その他の観察　西壁に出入口が付設されている。SI005 と重複しており、SI 005より新しく、床面も低い。

II・SI003竪穴遺構（付図4、図版25）

位　置　19F・Gグリッド

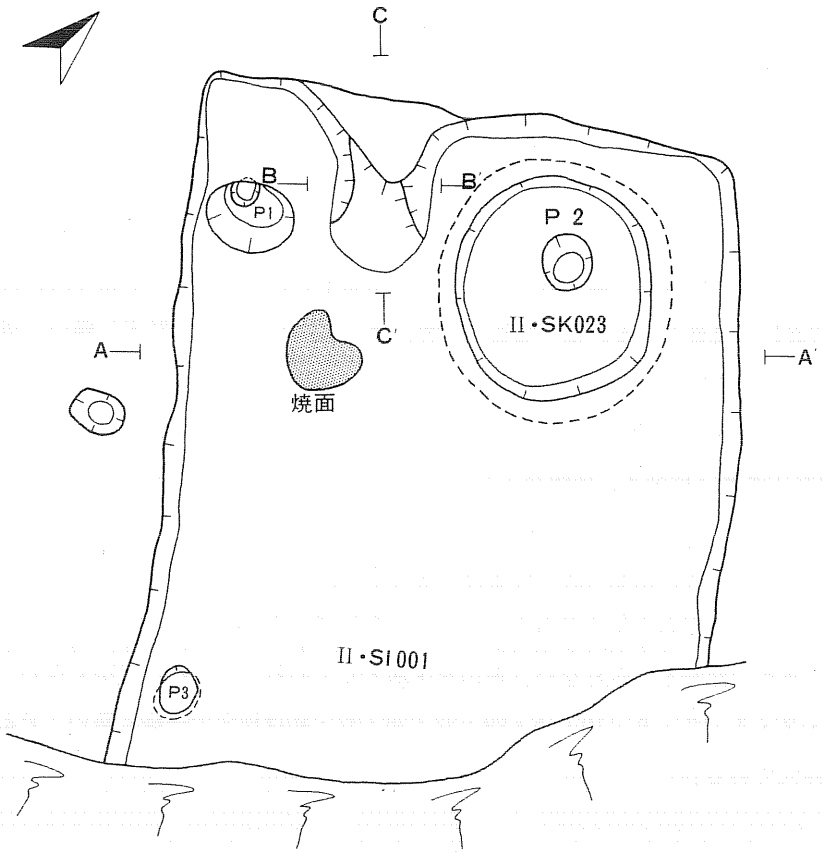
平面形・規模　東西 315cm、南北 325cmの方形を呈する。面積推定12.2m²。

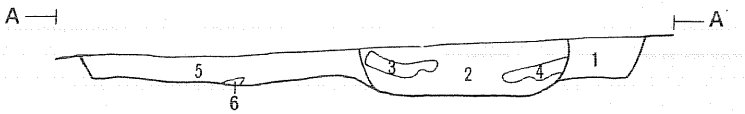
壁　東壁は急角度で立ち上がり、しっかりした状況で確認できるが、西壁と北壁は大部分SI 004に切られて確認できない。南壁は一部確認できるが緩やかな立ち上がりで、西に向かって漸次低くなり消失している。東壁17～32cm、南壁4～14cm、北壁23cmの高さである。

床　中央南寄り床面下にSK（T）002 があり、この埋土上に粘質土で貼床を施している。同じ粘質土で出入口部にも小範囲の貼床が見られる。他は地山をそのまま床面としており堅い。

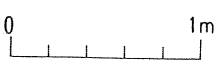
ピット　P63・65・66・67・73・120・125は柱穴と思われる。北壁は切られているためか、中間の柱穴が確認できない。P75・82は出入口部柱穴である。

その他の観察　柱穴配置と貼床の状況から、出入口部は西側に付設されていることがわかる。SK（T）002 、SI004 、SI017 と重複しているが、SI004 より古く、SK（T）002、

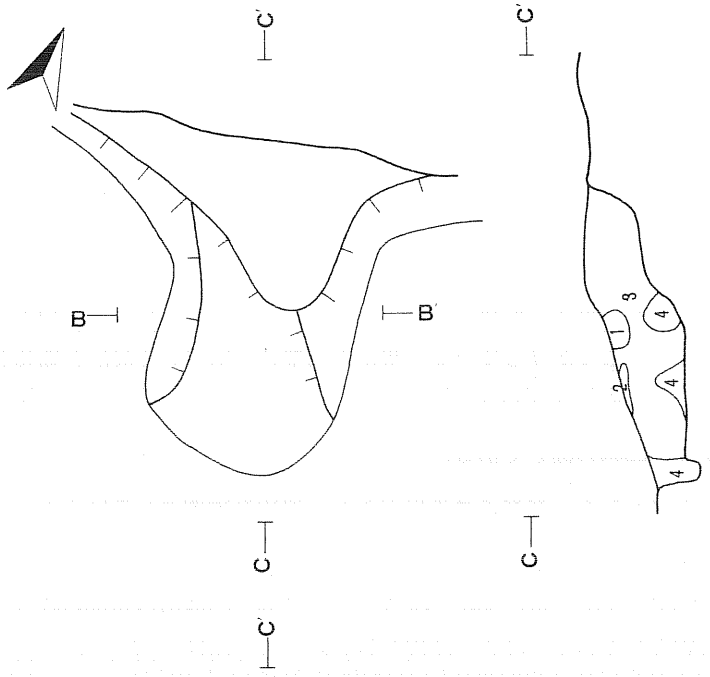


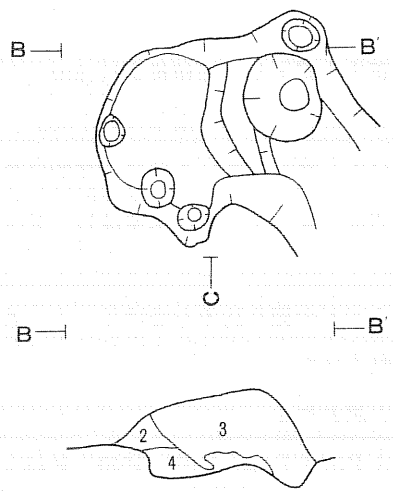


層	土色	備考
1	明褐色（10YR5/6）	粘性弱，黄褐色小ブロック微量混入
2	暗褐色（10YR3/4）	黄褐色小ブロック微量混入
3	にぶい黄褐色（10YR4/4）	粘性強，粘土質
4	明黄褐色（10YR7/6）	白色粒子少量混入
5	褐色（10YR4/6）	粘性弱，黄褐色小ブロック少量混入
6	黒褐色（10YR3/2）	

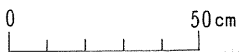


第17図　II・SI001竪穴遺構・SK023土壙実測図





層	土　　色	備　　考
1	黒　　色（10YR2/1）	粘性強，炭化物がほとんどを占める。
2	暗 褐 色（10YR3/4）	黄褐色粒子少量混入
3	暗 褐 色（10YR3/3）	焼土，炭化物少量混入
4	黄 褐 色（10YR5/6）	



第18図　II・SI001竪穴遺構カマド実測図

ＳＩ017 より新しい。

II・ＳＩ004 竪穴遺構（付図４、図版25・26）

位　置　19Ｆ・Ｇ、20Ｆ・Ｇグリッド

平面形・規模　東西 335cm、南北 370cmの方形を呈する。面積13.2m²。

竪　西壁は消失して確認できず、北西コーナーもＳＫ004 によって切られている。他の三壁はほぼ急角度で立ち上がりしっかりしている。東壁と南壁の一部でＳＩ003 と重複している部分は埋土が明瞭に区別できず、確認段階で壁線をとらえることができなかった。東壁４～33cm 南壁11～13cm、北壁15～29cmの高さである。

床　傾斜はほとんどみられず、おおよそ平坦である。地山を床面としているが、それほど堅くない。

ピット　Ｐ96・114・116・117・121・123・128は柱穴、Ｐ83・90は出入口部の柱穴と思われる。

その他の観察　壁は存在しないが、柱穴の状況から判断すると西壁に出入口の付設が見られる。西側に深さ３～７cm、幅20～30cmの溝がある。ＳＩ003 より新しく、ＳＫ004 より古い。

遺　物　なし。

II・ＳＩ005 竪穴遺構（付図４、図版25・26）

位　置　18Ｅ・Ｆ，19Ｅ・Ｆグリッド

平面形・規模　東西 350cm、南北 340cmの正方を呈する。面積推定11.5m²

壁　東壁は全体が確認できるが、西壁はＳＩ002 ・ 003、南壁はＳＩ002 、北壁はＳＩ003 によってそれぞれ切られ、一部が消失している。残存している壁は全体的に急角度で立ち上がり、しっかりしており、東壁に向かって漸次高くなっている。東壁は11～35cm、北壁は19～26cmの高さである。

床　南西コーナーから中央部にかけてＳＩ002 の掘り込みを受けている。若干の凹凸がみられる。地山を床面としているが、それほど堅くはない。

ピット　Ｐ34・42・46・49～51、64は柱穴と思われる。

Pit　No	P33	P34	P35	P36	P37	P38	P39	P40	P42	P43
深　さ(cm)	48	10	16	70	43	13	62	48	38	36
Pit　No	P44	P45	P46	P47	P48	P49	P50	P51	P64	
深　さ(cm)	16	66	65	35	37	62	50	42	70	

遺　物　なし。

その他の観察　ＳＩ002 、003 と重複しており両遺構より古い。

II・SI006 竪穴遺構（付図5　図版27・28）

位　置　17H・Iグリッド

平面形・規模　東西 400cm、南北 400cmの方形を呈する。面積17.6m²。

壁　四壁とも全体が確認できる。西壁北側の立ち上がりがやや緩かで、他はそれほど高くないが急角度で立ち上がり、しっかりしている。

床　中央に向かって若干傾斜がみられるが、おおよそ平坦である。地山を床面にしているがやわらかい。中央南寄りに木遺構より古いSK002 があり、この上と南西隅のSI009 出入口の上に貼床が施されている。

ピット　P2・6・11・14・20・27・29・37・39・47は柱穴である。P17・44を棟柱とする時期があったことも考えられるが、前後関係ははっきりしない。P1・46は出入口部柱穴であろう。

遺　物　なし。

その他の観察　北壁に出入口が付設されている。南東コーナーの突出（SX005）は本遺構より古い。SK002、SI009と重複しているが本遺構が新しい。

II・SI007竪穴遺構（第19図、図版27）

位　置　24・25グリッド

平面形・規模　東西 330cm、南北 320cmの方形を呈す。面積10.4m²。

壁　東・北壁は高く、ほぼ垂直に立ち上がってしっかりしている。西、南壁は低く南西コーナーに向って漸次低くなる。東壁13～30cm、西壁3～16cm、南壁3～24cm、北壁22～34cmの高さである。

床　北面隅に向っていくぶん傾斜している。中央付近に炉（45×36cm）が構築されている。地山を床面としており堅い。

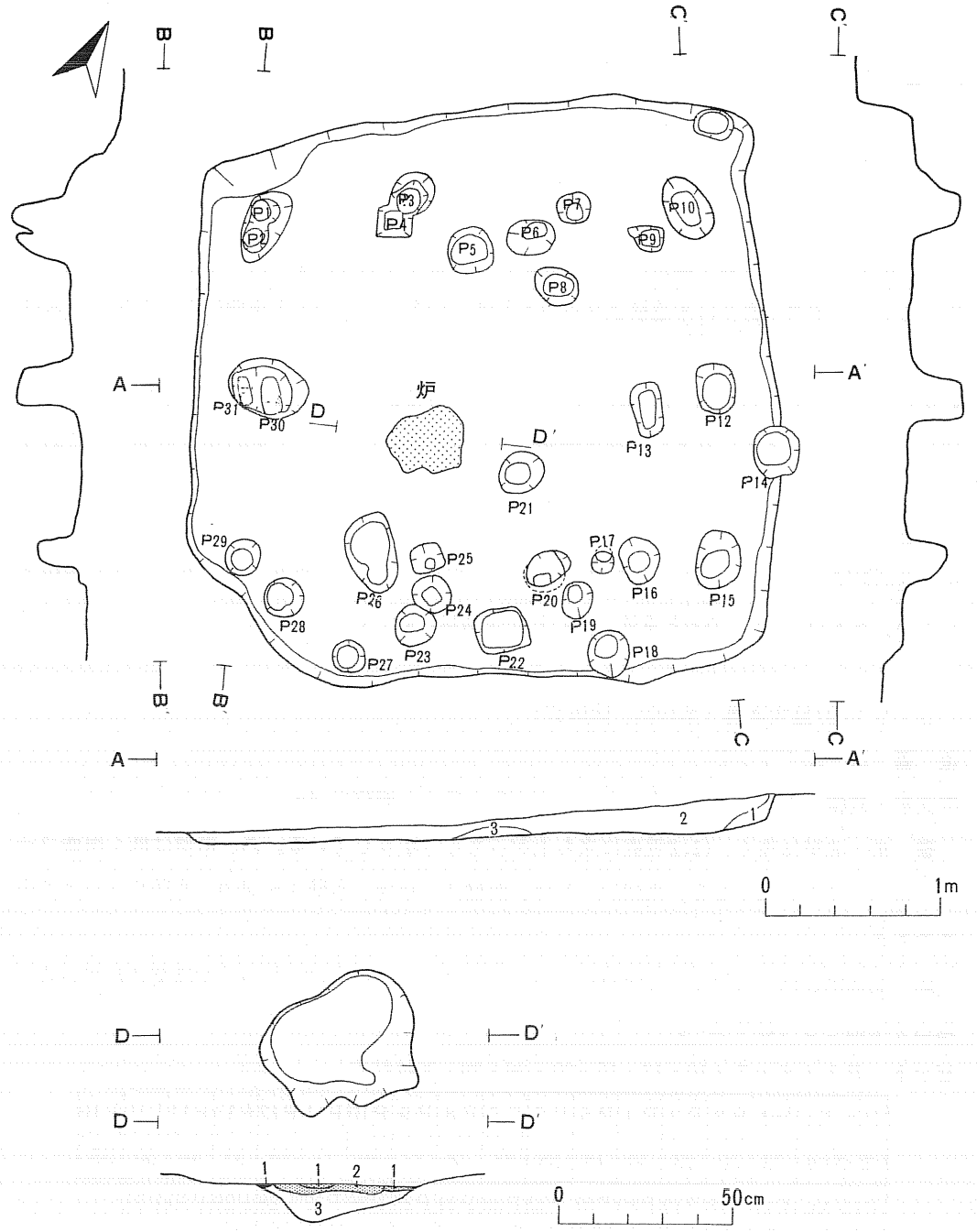
ピット　P1・4・7・10・12・15・20・26・29・30は柱穴

Pit No	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16
深さ(cm)	33	30	23	30	18	28	23	22	23	30	11	24	33	40	30	35
Pit No	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	
深さ(cm)	16	24	30	30	44	9	6	25	23	20	13	22	22	38	37	

遺　物　なし。

II・SI008 竪穴遺構（第20図、図版28）

位　置　22I・J，23I・Jグリッド



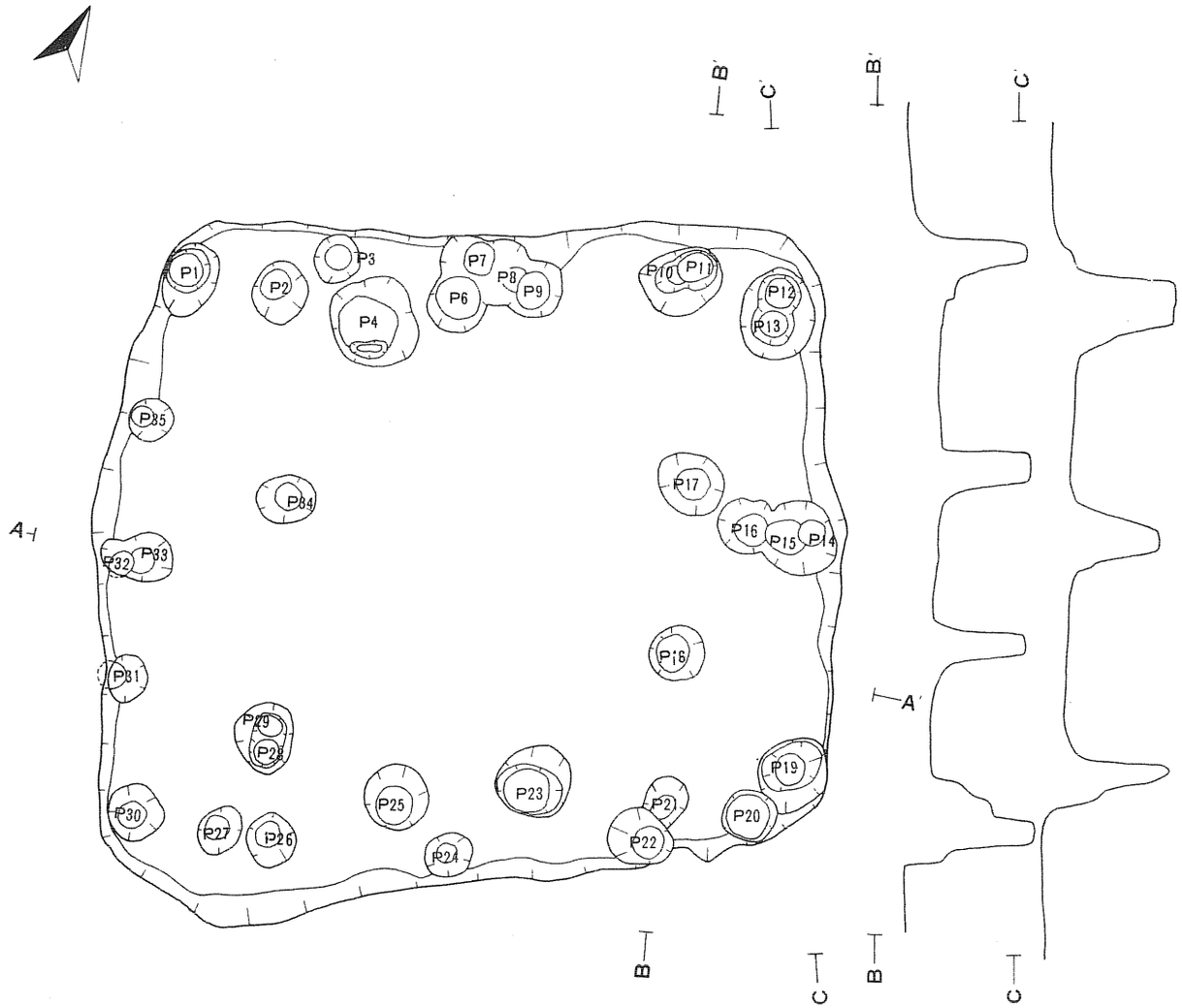
II・SI007

層	土色	備考
1	黒色（10YR2/1）	やわらかい
2	黒色（5YR1.7/1）	やわらかい
3	黒色（5YR1.7/1）＋明黄褐色（10YR7/6）	

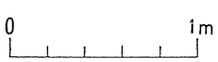
炉

層	土色	備考
1	明褐色（7.5YR5/6）	灰を少量含んだ焼土
2	褐灰色（10YR6/1）	粘性弱、炭化物を少量含んだ灰
3	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘性弱、焼土、灰少量混入、もろい

第19図　II・SI007竪穴遺構実測図



炭化材出土状況



第20図　II・SI008竪穴遺構実測図

平面形・規模　東西 420cm、南北 400cmの方形を呈す。面積14.9m²。

壁　東、南壁が比較的高く急角度で立ち上がっているが西、北壁は低い。

床　西壁に向かって若干傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山が西側に急傾斜しており、中央から東側は地山を床面としているが、西側は黒褐色土を固めた床面になっている。

ピット

Pit No	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P10	P11	P12
深　さ(cm)	67	63	44	16	26	65	48	49	63	44	53	55
Pit No	P13	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24
深　さ(cm)	52	50	28	21	55	52	70	22	38	73	54	61
Pit No	P25	P26	P27	P28	P29	P30	P31	P32	P33	P34	P35	
深　さ(cm)	74	31	32	50	49	58	62	56	48	59	50	

2度の建替えに伴なう各々の柱穴は以下の通りである。**A**、P 2 ・ 9 ・12・13・15・19・23・28・29・34**B**、P 1 ・ 6 ・10・17・18・21・25・30・33 **C**、P 1 ・ 3 ・ 8 ・11・17・18・22・24・26・30・31・32・35

遺　物　砥石

その他の観察　多量の焼土と炭化材がみられることから焼失家屋と思われる。P 6 ～ 9 の切り合いを見るとP 8 はP 6 ・ 9 よりも新しく、柱穴の配置から、2度の建替えが行なわれている。焼失遺材は、最も新しい時期の住居に伴なうものである。

II・**S I 009 竪穴遺構**（第21図、付図5、図版28・31）

位　置　16H・I，Iグリッド

平面形・規模　東西 340cm、南北 350cmの方形を呈する。面積12.4m²。

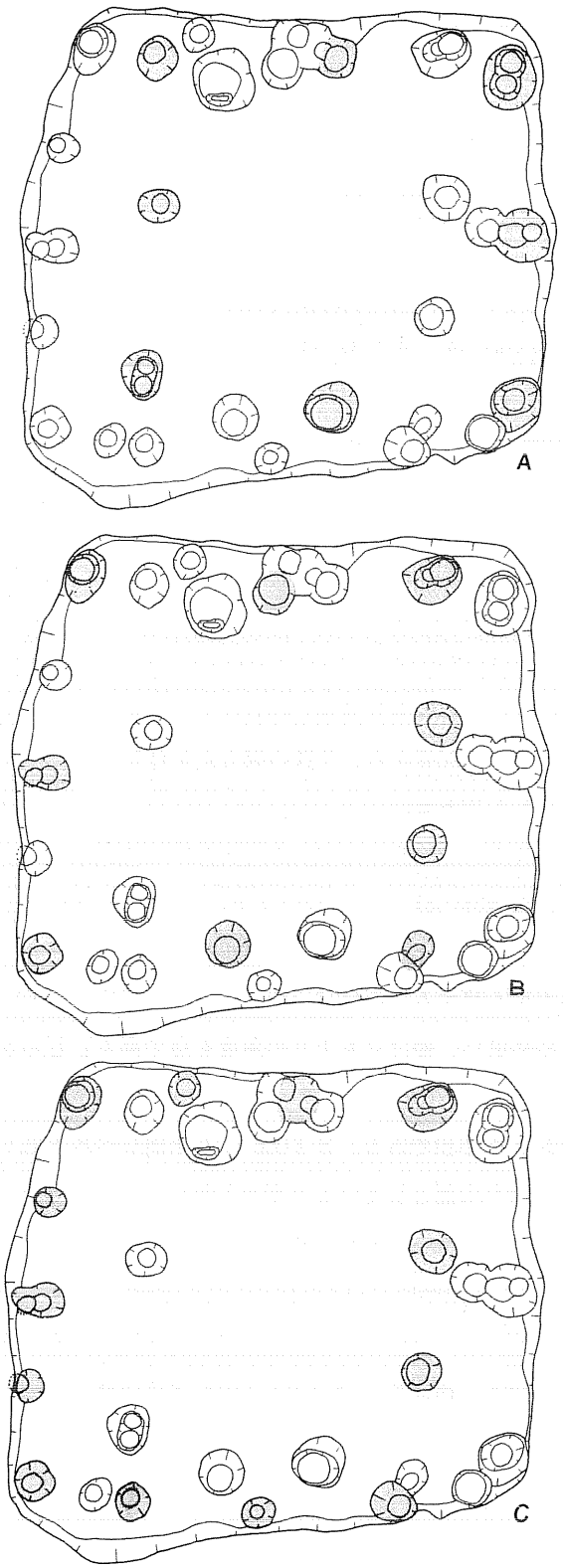
壁　西壁はS I 013 と接しているためかやや低い。他は立ち上りの角度も急で高く、しっかりしている。東壁19～35cm、西壁 8 ～16cm、南壁 4 ～15cm、北壁 9 ～22cmの高さである。

床　南壁に向って若干傾斜しており、おおよそ平坦である。S I 006 より床面レベルが低く重複部分の床面はそのまま残存している。地山を床面としているがやわらかい。

ピット　P26・65・66・68～72が柱穴であり一様に深い。P21・22・28は出入口部柱穴であろう。

遺　物　なし。

その他の観察　北側に出入口部が付設されている。西側ではS I 013・014 とほぼ接しているが、S I 013 がS I 009 よりも新しいS D001 を切っているとすると、S I 013 の方が本遺構よりも新しいことになる。S I 014 との新旧関係は不明である。



第21図　II・SI 009竪穴遺構柱穴変遷図

II・S I 010 竪穴遺構

（第22図、図版28）

位　置　17・18 J グリッド

平面形・規模　東西320 cm、南北360 cm の方形を呈する。面積11.3m²。

壁　東壁の立ち上がりは緩やかだが、他の壁は急角度で立ち上がり、しっかりしている。

床　若干の凹凸があるが、傾斜はほとんどみられない。地山を床面としており堅い。

ピット　P 1・3・7・11・15・17・18・23は柱穴と思われる。

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ(cm)	43	14	51	16	17	29
Pit No.	P7	P8	P9	P10	P11	P12
深さ(cm)	53	22	31	38	53	23
Pit No.	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ(cm)	12	21	57	43	39	34
Pit No.	P19	P20	P21	P22	P23	P24
深さ(cm)	26	56	15	17	64	23
Pit No.	P25	P26	P27	P28	P29	P30
深さ(cm)	14	15	29	46	48	21
Pit No.	P31	P32	P33	P34	P35	
深さ(cm)	27	15	15	32	40	

遺　物　なし。

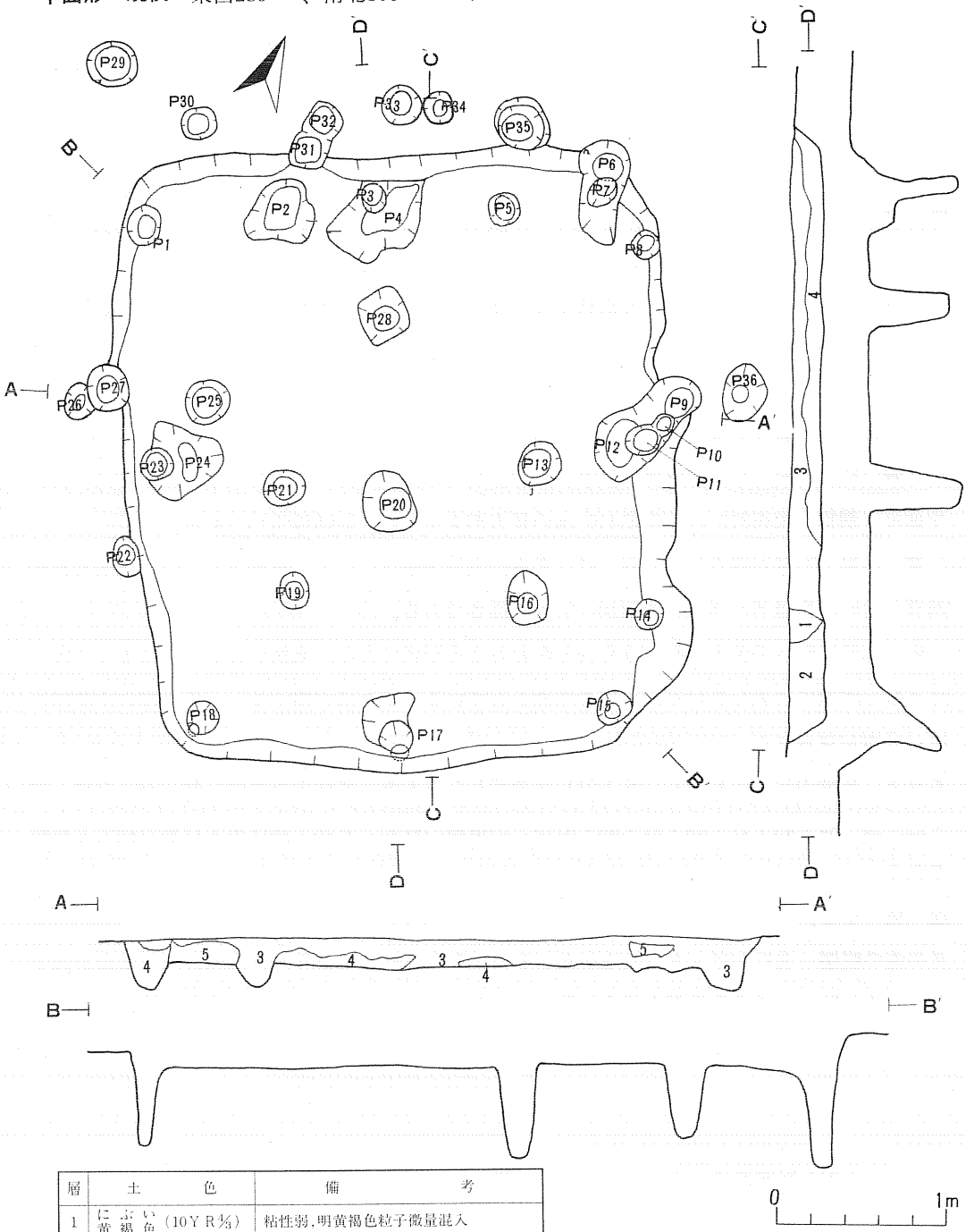
備　考　S X（f）028 と重複するが、S X（f）028 より古い。遺構内外に時期の異るピットが多い。

II・S I 011 竪穴遺構

（第23図、図版29）

位　置　17・18Gグリッド

平面形・規模　東西280 cm、南北300 cm の方形を呈する。面積9.24m²。



層	土　色	備　考
1	にぶい黄褐色（10YR⅓）	粘性弱，明黄褐色粒子微量混入
2	にぶい黄褐色（10YR⅓）	粘性弱，明黄褐色小ブロック多量混入
3	暗褐色（10YR⅜）	明黄褐色小ブロック多量混入
4	黒褐色（10YR⅔）	粘性弱，明黄褐色小ブロック多量混入
5	灰黄褐色（10YR½）	粘性強

第22図　II・SI010竪穴遺構実測図

壁　南壁はＳＩ008によって切られ消失しているが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がっており、高いしっかりとした作りで残存している。

床　部分的に地山の軽石が突き出したり凹凸も若干みられるが、傾斜はほとんど見られない。地山を床面としているが、それほど堅くない。ＳＩ018による床面の攪乱は見られない。

ピット　Ｐ７・15・23は柱穴の一部であろうが、東側及び南側では検出されなかった。Ｐ２・25は出入口部の柱穴であろう。

遺　物　なし。

その他の観察　北壁に出入口が付設されており、この部分のみに灰の堆積が見られた。ＳＩ012・ＳＩ018・ＳＫ（Ｔ）004と重複しているが、ＳＩ012・ＳＫ（Ｔ）004より新しく、ＳＩ018よりは古い。

Ⅱ・ＳＩ012竪穴遺構（第23図、図版29）

位　置　17Ｇ・Ｈ，18Ｇ・Ｈグリッド

平面形・規模　東西310 cm、南北410 cmの長方形を呈する、面積推定13.79 ㎡。

壁　南壁と西壁が残存しており、ほぼ垂直に立ち上がっている。東壁はＳＩ011に切られて残存しない。南壁８～26cm、西壁10～22cmの高さである。

床　北壁に向って若干傾斜がみられるがおおよそ平坦である。東側がＳＩ011によって掘り込まれ、床面は消失している。地山を床面としているがそれほど堅くない。中央部に広範囲に灰の分布が見られた。

ピット　後世のピットも多く、ＳＩ011との切り合いもあって柱穴を決定し難いが、Ｐ15・17・22・24・34・45・47・49・51・55・57がこの遺構の柱穴、Ｐ26・28は出入口部の柱穴と判断される。

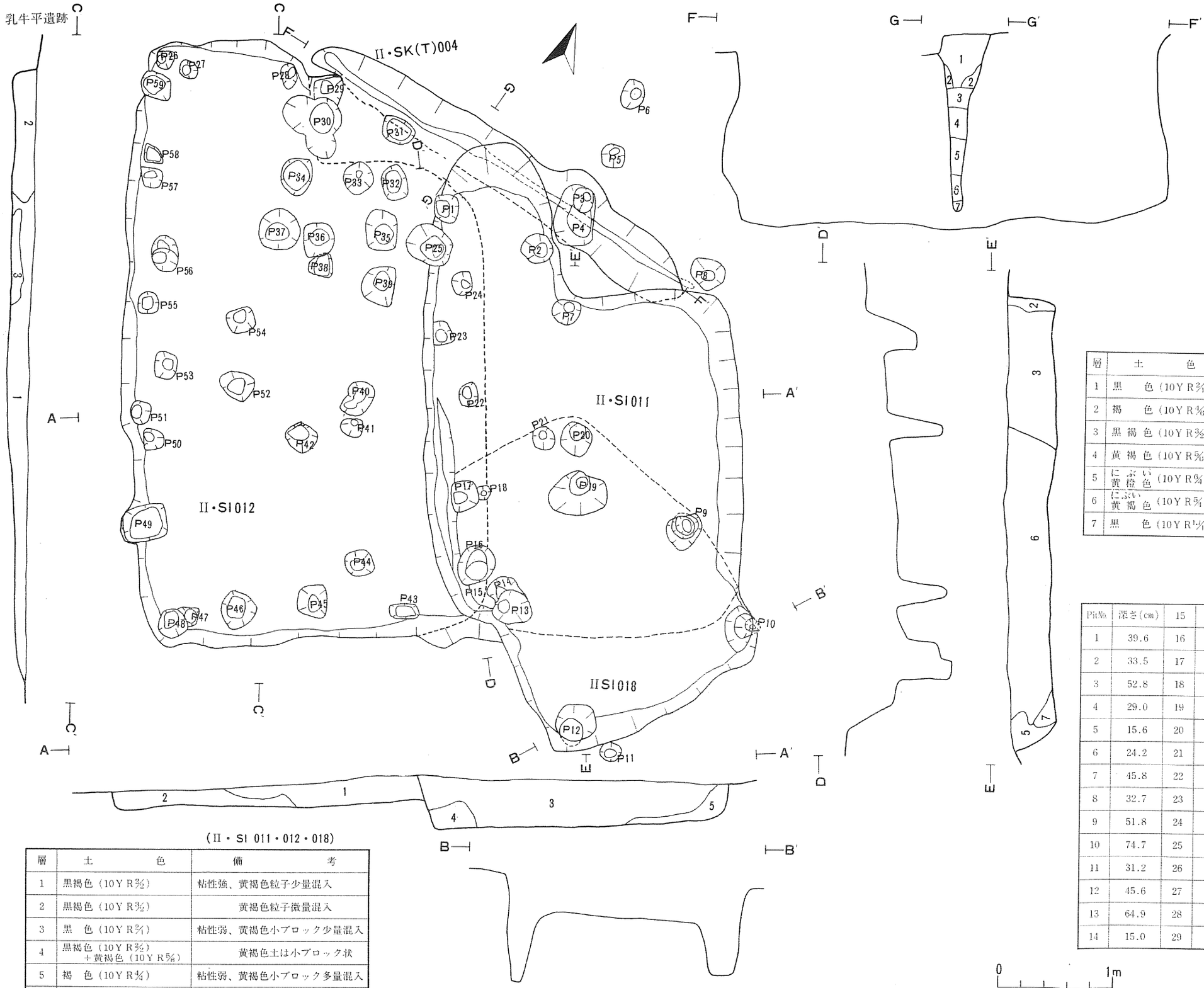
遺　物　なし。

その他の観察　北壁がはっきりしないが、Ｐ34・Ｐ57を結ぶあたりから北へ次第に床面が浅くなり、これによって出入口部を推定し得る。ＳＩ011・ＳＫ（Ｔ）004と重複しているが、ＳＩ011より古く、ＳＫ（Ｔ）004よりは新しい。

Ⅱ・ＳＩ013竪穴遺構（第24図、付図５、図版30・31）

位　置　16Ｉ・Ｊグリッド

平面形・規模　東西390 cm、南北300 cmの長方形を呈する。面積11.6㎡。



(II・SI 011・012・018)

層	土色	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	粘性強、黄褐色粒子少量混入
2	黒褐色（10YR3/1）	黄褐色粒子微量混入
3	黒　色（10YR2/1）	粘性弱、黄褐色小ブロック少量混入
4	黒褐色（10YR3/2）＋黄褐色（10YR5/6）	黄褐色土は小ブロック状
5	褐　色（10YR4/4）	粘性弱、黄褐色小ブロック多量混入
6	黒褐色（10YR3/2）	粘性弱、炭化物多量混入
7	明赤褐色（5YR5/8）	粘性強、焼土

II・SK（T）004

層	土色	備考
1	黒　色（10YR2/1）	下部に褐色土少量混入
2	褐　色（10YR4/6）	粘性強，黒色土微量混入，もろい
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性弱，白色粒子，褐色土少量混入，もろい
4	黄褐色（10YR5/6）	粘性強，下部に黒褐色土多量混入
5	にぶい黄橙色（10YR6/4）	灰白色粗砂少量混入
6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘性強，やわらかい
7	黒　色（10YR1.7/1）	粘性強

Pit No.	深さ(cm)	15	46.7	30	19.8	45	72.2
1	39.6	16	40.7	31	25.3	46	33.1
2	33.5	17	43.0	32	32.0	47	25.9
3	52.8	18	40.5	33	42.7	48	8.6
4	29.0	19	69.7	34	66.4	49	46.1
5	15.6	20	51.9	35	23.4	50	51.9
6	24.2	21	29.5	36	37.2	51	28.5
7	45.8	22	55.6	37	69.5	52	17.2
8	32.7	23	47.5	38	14.6	53	23.4
9	51.8	24	58.8	39	35.5	54	25.2
10	74.7	25	27.5	40	11.9	55	32.5
11	31.2	26	72.2	41	19.4	56	14.8
12	45.6	27	15.9	42	18.7	57	38.6
13	64.9	28	54.0	43	43.0	58	22.1
14	15.0	29	30.5	44	33.1	59	35.2

0　1m

第23図　II・SI011・012・018竪穴遺構・SK(T)004土壙実測図

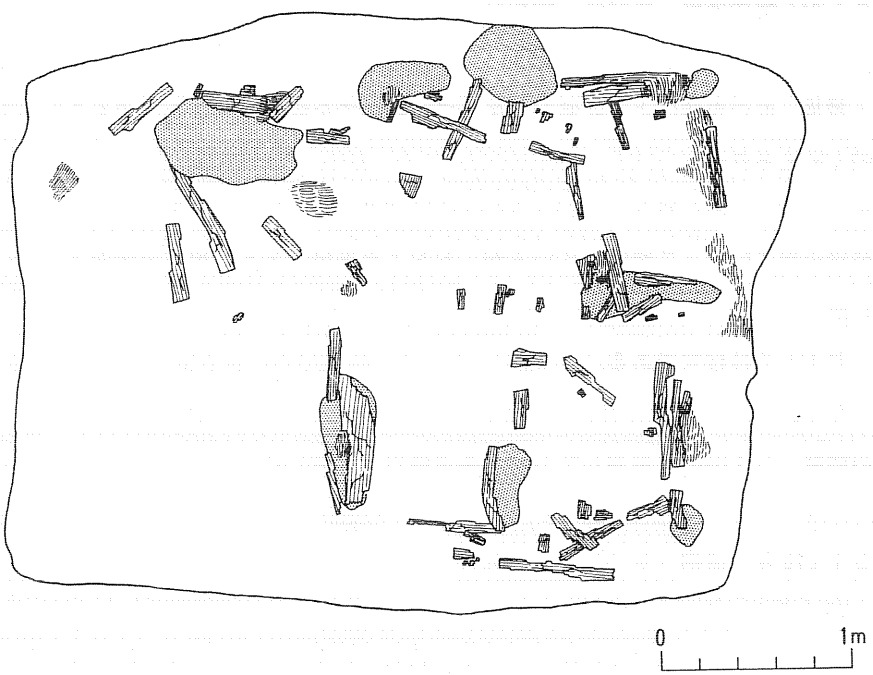
壁　南東コーナーは郭の崩壊で消失しており、東壁も一部ＳＩ009 によって攪乱されているが全体的にしっかりしている。とくに北壁は垂直に立ち上がり高い。南壁に向って漸次低くなる。東壁９～30cm、西壁11～25cm、南壁９～18cm、北壁25～37cmの高さである。

床　おおよそ平坦で傾斜もみられない。地山を床面としているが、非常にやわらかい。

ピット　P75・76・78・79・81・83・84・90・91・93・95・96はこの遺構の柱穴と思われる。

遺　物　なし。

その他の観察　焼土・炭化材・カヤ状炭化物が密集していることから焼失家屋である。遺材の状況から屋根材の崩落を思わせる。ＳＩ009 ・014 と重複しているが本遺構が新しい。また、ＳＫ009 はＳＩ013 の覆土上面より約10cmほど上に底面をもつ遺構で、地山上の黒色土を掘り込んだ新しい遺構である。ＳＫ010 も同様だが地山が高くなっているのでわずかに地山を掘り込んでいる。



第24図　II・SI013竪穴遺構焼土・炭化材出土状況

II・SI014竪穴遺構（付図5、図版31）

位　置　16I・J，17I・Jグリッド

平面形・規模　東西300 cm、南北350cm の方形を呈する。面積12.6m²。

壁　東、西壁の半分と南壁がSI013 に切られて消失している。他は良好に残存しており、垂直に立ち上がって高い。

床　南に向かって若干傾斜が見られるが、おおよそ平坦である。地山を床面としているが、非常にやわらかい。

ピット　P77・85・86・91・94・98は柱穴である。P99・100 ・101 ・103 ・104 は出入口部柱穴である。

遺　物　なし。

その他の観察　北壁に出入口部が付設されている。出入口部床面は次第に浅くなり、消失して壁をなさない。SK013 ・SK010 よりも古い。

II・SI015竪穴遺構（第25図、図版32）

位　置　25H・Iグリッド

平面形・規模　郭の崩壊により北側が消失しているので全体の規模は不明であるが、方形を呈するものと考えられる。

壁　東・南壁の一部が残存し、26cmの高さにほぼ垂直な立ち上がりを示している。

床　郭縁辺部に向かって傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山を床面としているが非常に軟らかい。

ピット　P1～5は柱穴である。

遺　物　なし。

その他の観察　SI016 と重複しており、本遺構の方が新しい。

II・SI016竪穴遺構（第25図、図版32）

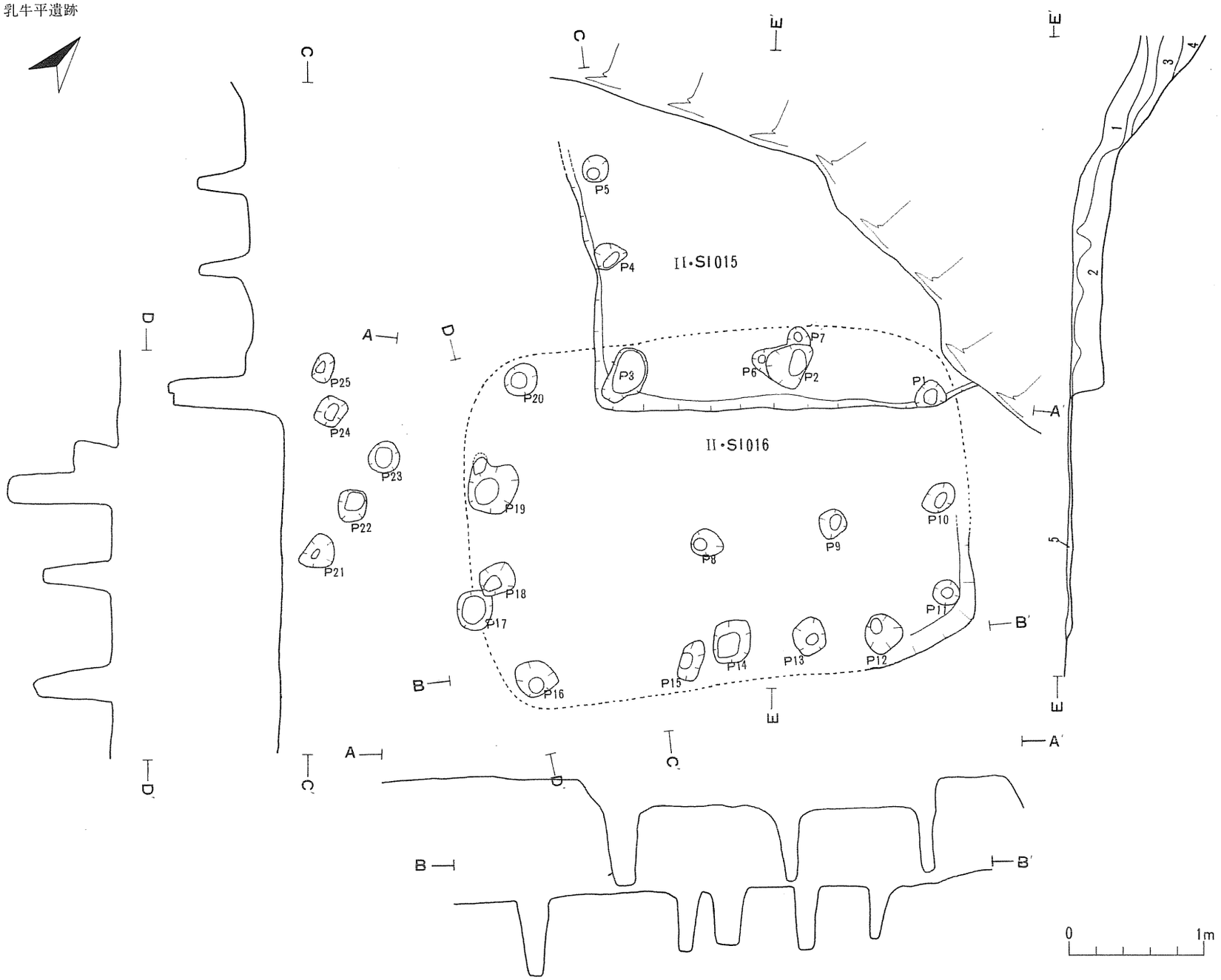
位　置　25Hグリッド

平面形・規模　壁がほとんどないが、ピットの状態から東西260 cm、南北370 cmに推定される。面積推定9.14m²。

壁　北東部にわずかに緩やかな立ち上りを確認できるのみで、他は消失している。

床　平坦で、傾斜は見られない。西側はSI015 によって掘り込まれて消失している。地山を床面としており堅い。

ピット　P10・11・13・15・16・18・19が柱穴と思われる。西側はSI015 の掘り込みによっ



層	土　　色	備　　考
1	灰黄褐色（10YR½）	黄褐色粒子微量混入
2	にぶい黄褐色（10YR⅝）	もろい
3	灰黄褐色（10YR⅝）	粘性強，もろい
4	にぶい黄橙色（10YR⅔）	粘性強
5	黒褐色（10YR⅔）	粘性強，白色粒子，黄褐色小ブロック少量混入

第25図　II・SI015・016竪穴遺構実測図

てＰ６が痕跡的に残存するのみである。

遺　物　なし

その他の観察　ＳＩ015 によって切られている。

II・ＳＩ017 竪穴遺構（付図４、図版25）

位　置19Ｆグリッド

平面形・規模　ＳＩ003 と005 に切られており不明だが、おそらく方形を呈するものと思われる。

壁　東壁は北東コーナーでわずかに急角度な立ち上がりが確認されるが、しだいに低くなり消失している。西壁７～８cm、北壁０～８cm。

床　北壁に向って若干傾斜がみられるが、おおよそ平坦である。

ピット　Ｐ69～72は本遺構の柱穴であると思われる。

PitNo.	P68	P69	P70	P71	P72
深さ(cm)	35	41	31	38	23

遺　物　なし

その他の観察　ＳＩ003 ・005 に切られている。

II・ＳＩ018 竪穴遺構（第26図、図版29）

位　置　17グリッド

平面形・規模　東西210 cm、南北270 cmの方形を呈する。面積5.1 ㎡。

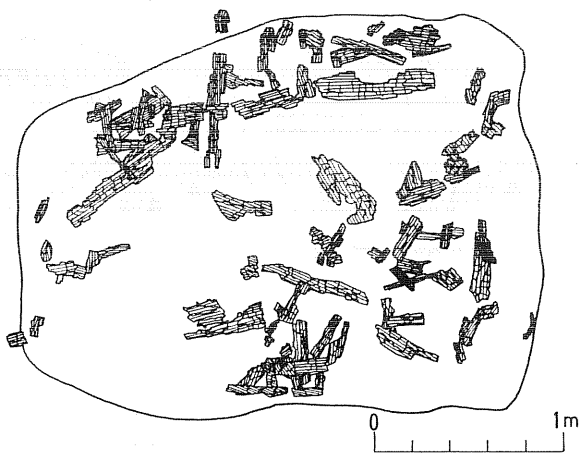
壁　南壁の一部と東壁が残存しており、ほぼ垂直に立ち上がってしっかりとしている。

床　西壁に向かって若干傾斜しているが、おおよそ平坦である。地山を床面としているがやわらかい。床面レベルはＳＩ018 と同一である。

ピット　Ｐ９・10・12・13・17・20は柱穴と思われる。

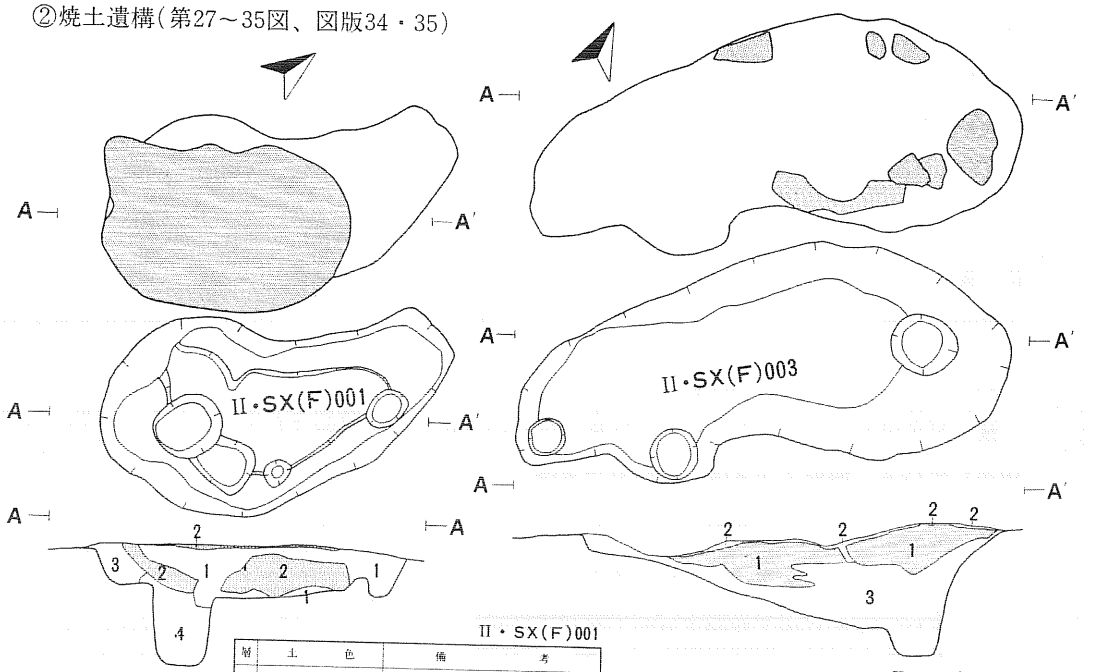
遺　物　なし。

その他の観察　床面一帯に炭化物と焼土が密集していることから焼失家屋である。ＳＩ011 と重複しており、ＳＩ011 より新しい。が、遺構確認面での切り合い関係は把握できなかった。



第26図　II・SI018炭化材出土状況図

②焼土遺構（第27～35図、図版34・35）

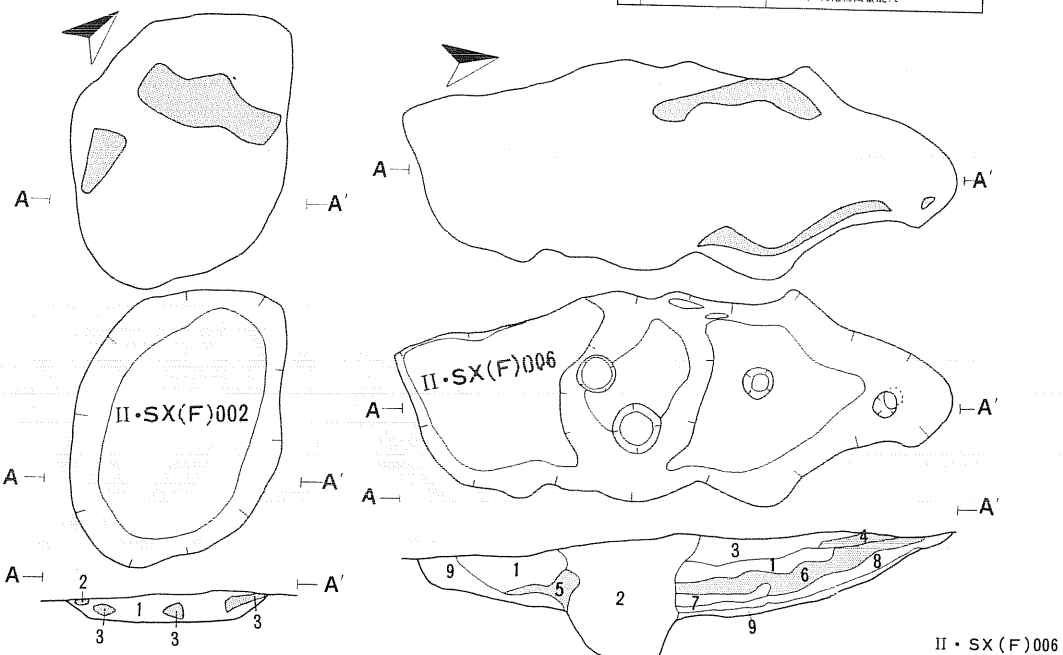


II・SX(F)001

層	土色	備考
1	黒　色(7.5YR1/1)	粘性強，焼土，炭化物少量混入
2	明赤褐色(5YR5/6)	粘性強，下部に灰多量混入，焼土
3	暗褐色(10YR3/3)	粘性強，炭化物少量混入
4	黒　色(7.5YR1/1)	粘性強

II・SX(F)003

層	土色	備考
1	明赤褐色（5YR5/6）	
2	黒褐色（10YR2/2）	粘性強，炭化物，焼土少量混入
3	黒　色（10YR2/1）	粘性強，炭化物微量混入



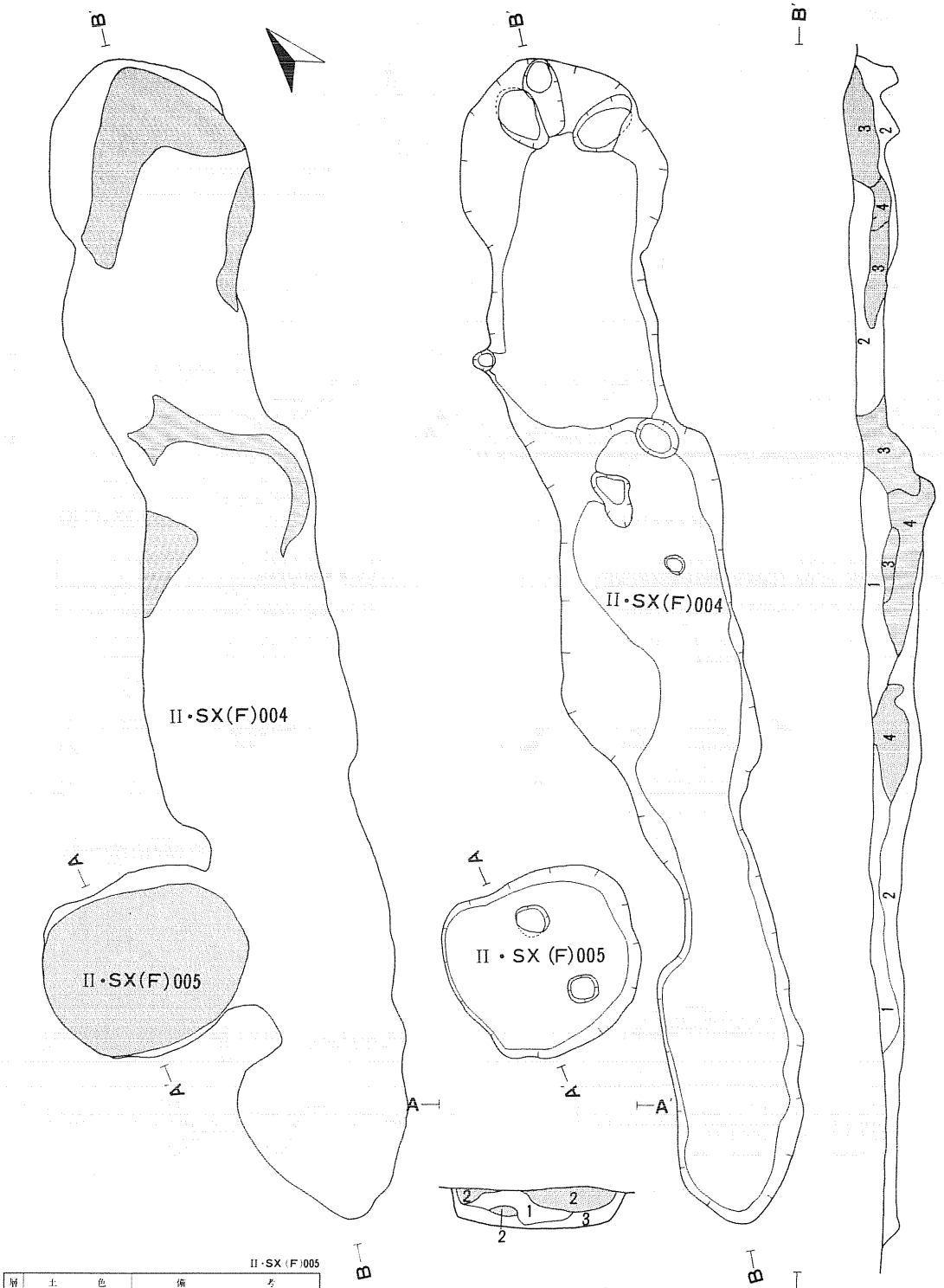
II・SX(F)002

層	土色	備考
1	黒褐色（10YR2/2）	
2	赤褐色（5YR4/6）	礫混入，焼土
3	黒褐色（10YR2/2）	粘性強，焼土多量に混入

II・SX(F)006

層	土色	備考
1	黒　色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子微量混入
2	黒褐色（10YR2/2）	粘性弱，黄褐色粗砂微量混入
3	黒褐色(7.5YR2/2)	黄褐色粗砂微量，炭化物少量混入
4	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性弱，灰白色礫，粗砂で構成
5	褐　色(7.5YR4/3)	粘性強，灰白色礫微量混入
6	橙　色(7.5YR6/6)	粘性強
7	黒褐色（10YR3/2）	粘性強
8	黒　色（10YR1/1）	灰化物がほとんどを占める。
9	黒　色（10YR2/1）	粘性強

第27図　II・SX(F)001～003・006焼土遺構実測図



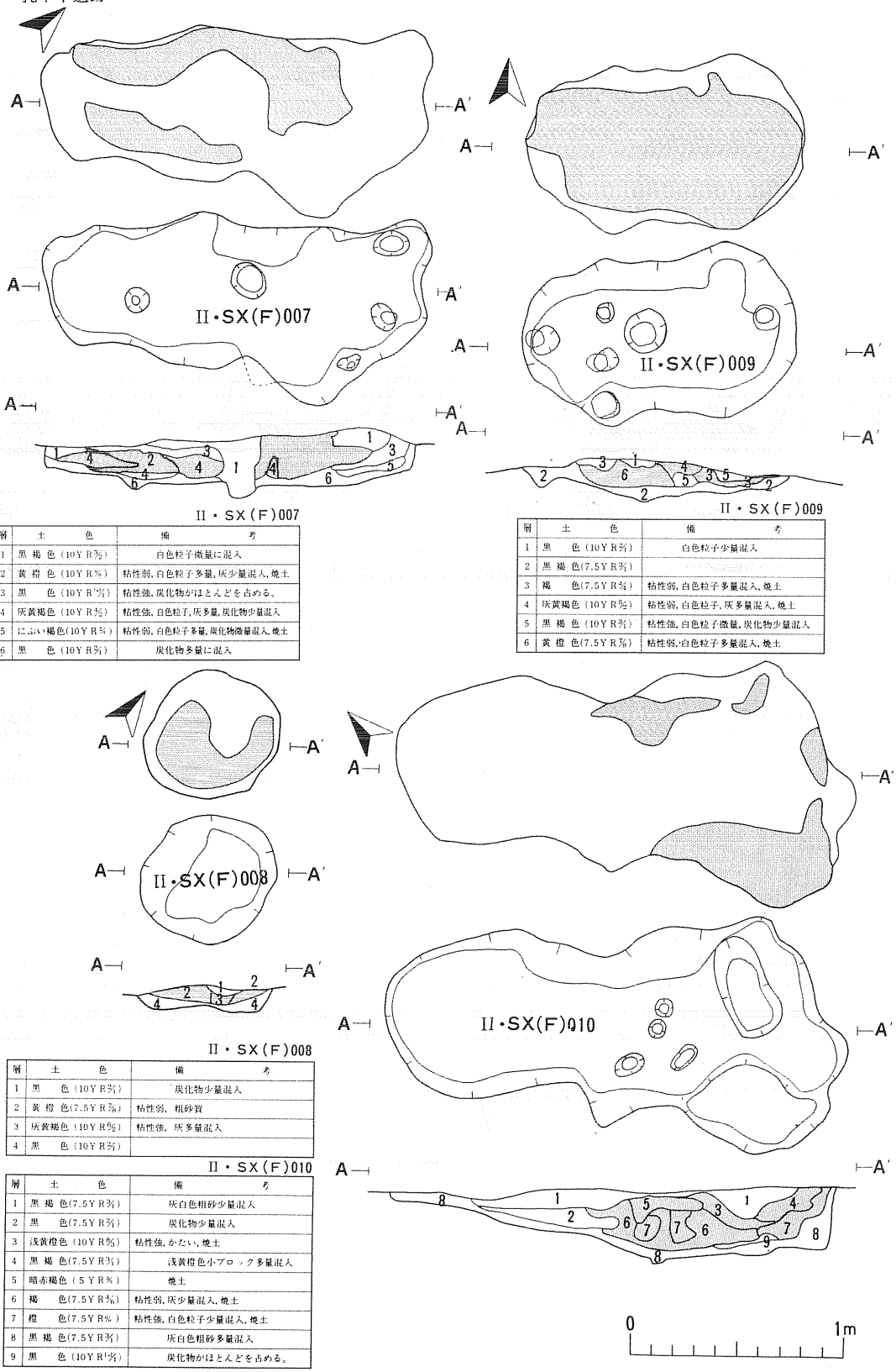
II・SX(F)005

層	土色	備考
1	黒褐色（10YR3/1）	
2	明黄褐色（10YR7/6）	粘性弱，炭化物微量混入，粗砂質，焼土
3	黒色（10YR1.7/1）	白色粒子微量，炭化物少量混入

II・SX(F)004

層	土色	備考
1	黒色（10YR1.7/1）	白色粒子少量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	
3	橙色（7.5YR6/8）	粘性弱，炭化物微量混入，焼土
4	灰黄褐色（10YR6/2）	粘性弱，炭化物微量混入，灰がほとんどを占める。

第28図　II・SX(F)004・005焼土遺構実測図



II・SX(F)007

層	土色	備考
1	黒褐色(10YR⅔)	白色粒子微量に混入
2	黄橙色(10YR⅝)	粘性弱,白色粒子多量,灰少量混入,焼土
3	黒色(10YR¹⁄₁)	粘性強,炭化物がほとんどを占める。
4	灰黄褐色(10YR⅔)	粘性強,白色粒子,灰多量,炭化物少量混入
5	にぶい褐色(10YR⅝)	粘性弱,白色粒子多量,炭化物微量混入,焼土
6	黒色(10YR²⁄₁)	炭化物多量に混入

II・SX(F)009

層	土色	備考
1	黒色(10YR²⁄₁)	白色粒子少量混入
2	黒褐色(7.5YR³⁄₁)	
3	褐色(7.5YR⅝)	粘性弱,白色粒子多量混入,焼土
4	灰黄褐色(10YR⅝)	粘性弱,白色粒子,灰多量混入,焼土
5	黒褐色(10YR³⁄₁)	粘性強,白色粒子微量,炭化物少量混入
6	黄橙色(7.5YR⅞)	粘性弱,白色粒子多量混入,焼土

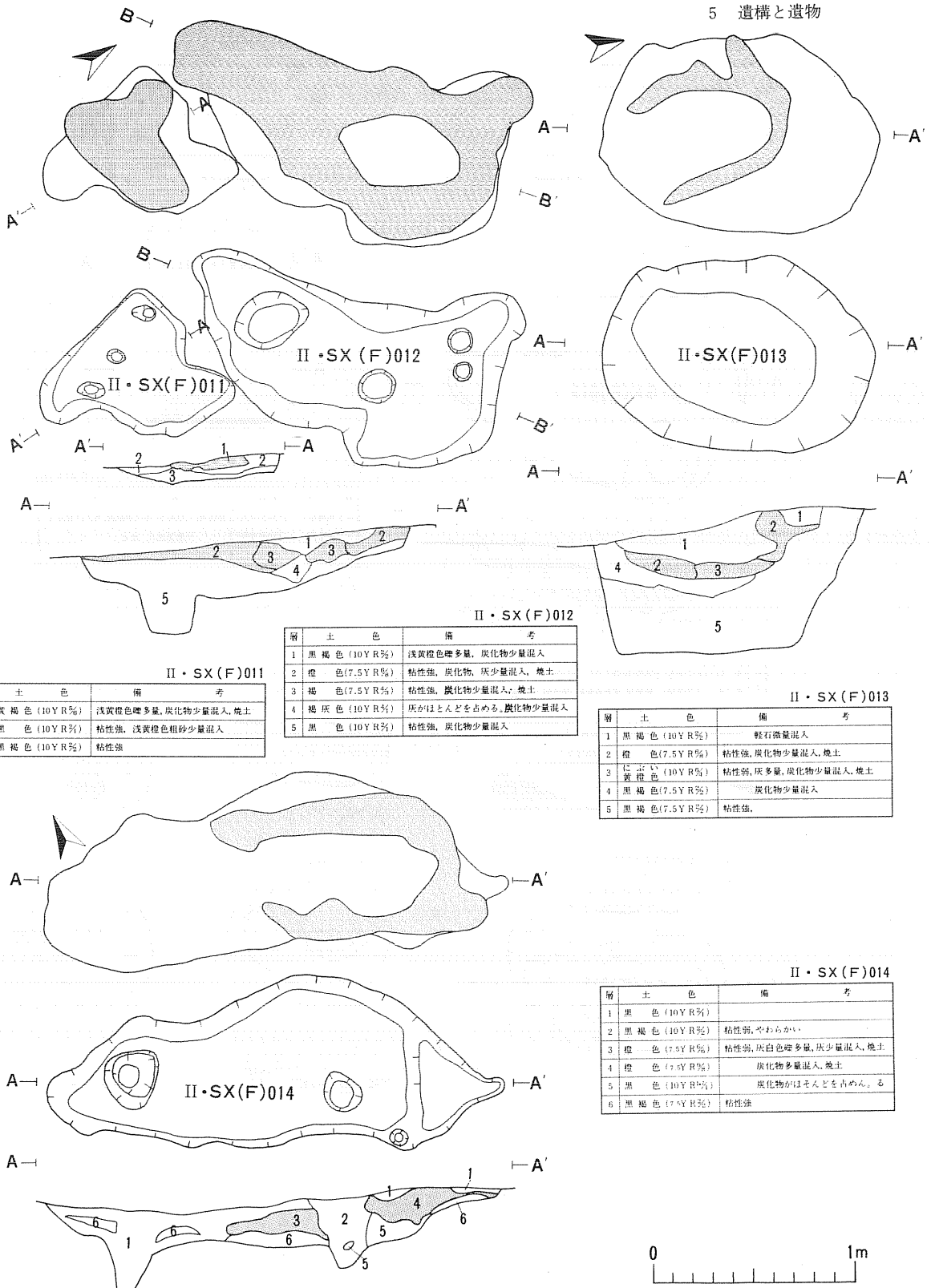
II・SX(F)008

層	土色	備考
1	黒色(10YR²⁄₁)	炭化物少量混入
2	黄橙色(7.5YR⅞)	粘性弱,粗砂質
3	灰黄褐色(10YR⅝)	粘性強,灰多量混入
4	黒色(10YR²⁄₁)	

II・SX(F)010

層	土色	備考
1	黒褐色(7.5YR³⁄₁)	灰白色粗砂少量混入
2	黒色(7.5YR²⁄₁)	炭化物少量混入
3	浅黄橙色(10YR⅝)	粘性強,かたい,焼土
4	黒褐色(7.5YR³⁄₁)	浅黄橙色小ブロック多量混入
5	暗赤褐色(5YR⅜)	焼土
6	褐色(7.5YR⅝)	粘性弱,灰少量混入,焼土
7	橙色(7.5YR⅞)	粘性強,白色粒子少量混入,焼土
8	黒褐色(7.5YR³⁄₁)	灰白色粗砂多量混入
9	黒色(10YR¹⁄₁)	炭化物がほとんどを占める。

第29図　II・SX(F)007～010焼土遺構実測図



II・SX(F)011

層	土　色	備　考
1	黄褐色（10YR5/6）	浅黄橙色礫多量，炭化物少量混入，焼土
2	黒　色（10YR2/1）	粘性強，浅黄橙色粗砂少量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性強

II・SX(F)012

層	土　色	備　考
1	黒褐色（10YR3/2）	浅黄橙色礫多量，炭化物少量混入
2	橙　色(7.5YR6/6)	粘性強，炭化物，灰少量混入，焼土
3	褐　色(7.5YR5/3)	粘性強，炭化物少量混入，焼土
4	褐灰色（10YR5/1）	灰がほとんどを占める。炭化物少量混入
5	黒　色（10YR2/1）	粘性強，炭化物少量混入

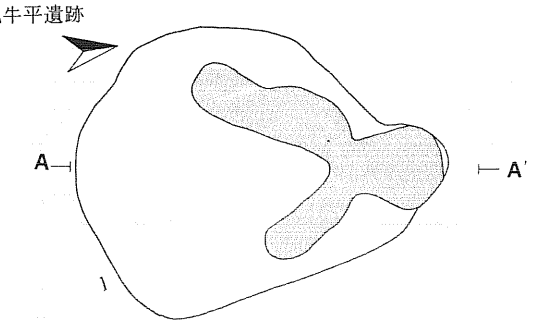
II・SX(F)013

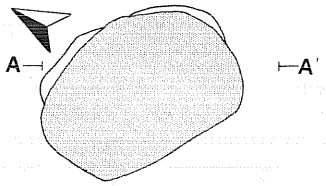
層	土　色	備　考
1	黒褐色（10YR3/2）	軽石微量混入
2	橙　色(7.5YR6/6)	粘性強，炭化物少量混入，焼土
3	にぶい黄橙色（10YR6/3）	粘性弱，灰多量，炭化物少量混入，焼土
4	黒褐色(7.5YR3/2)	炭化物少量混入
5	黒褐色(7.5YR3/2)	粘性強，

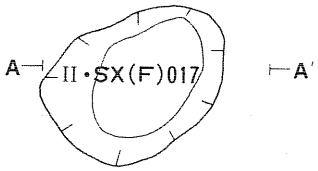
II・SX(F)014

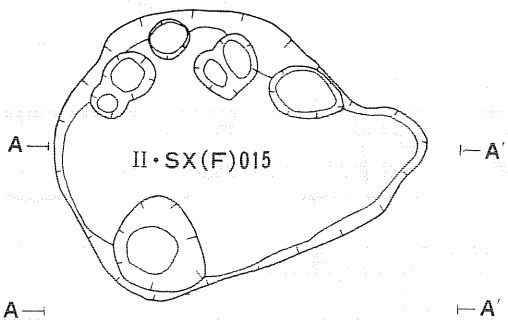
層	土　色	備　考
1	黒　色（10YR2/1）	
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性弱，やわらかい。
3	橙　色（7.5YR6/6）	粘性強，灰白色礫多量，灰少量混入，焼土
4	橙　色（7.5YR6/6）	炭化物多量混入，焼土
5	黒　色（10YR1.7/1）	炭化物がほとんどを占める。
6	黒褐色（7.5YR3/2）	粘性強

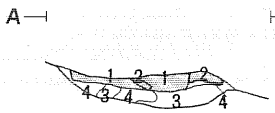
第30図　II・SX(F)011～014焼土遺構実測図





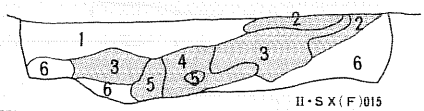






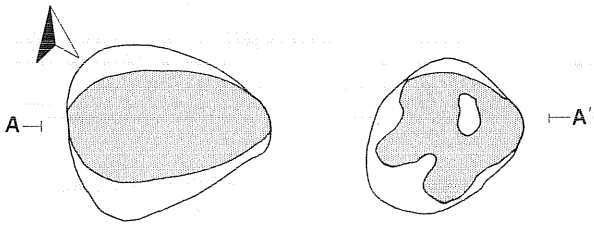
II・SX(F)017

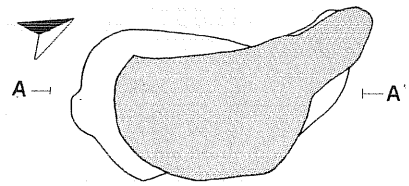
層	土　色	備　考
1	黒褐色　(10YR3/1)	粘性強，白色粒子，炭化物微量，焼土少量混入
2	黄褐色　(10YR5/6)	灰微量混入，焼土
3	黒褐色　(10YR3/2)	
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘性弱，灰白色礫がほとんどを占める。

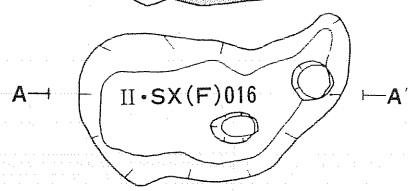


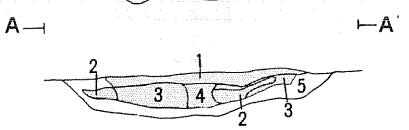
II・SX(F)015

層	土　色	備　考
1	黒　色　(10YR3/1)	軽石微量混入
2	褐　色　(10YR4/4)	粘性強，焼土多量，炭化物少量混入，焼土
3	橙　色　(5YR6/8)	粘性強，灰白色粗砂，炭化物，灰少量混入，焼土
4	黒　色　(10YR1.7/1)	粘性弱，炭化物がほとんどを占める。灰少量混入
5	灰黄褐色(10YR5/2)	粘性強，灰多量，炭化物少量混入
6	黒褐色　(7.5YR3/2)	炭化物微量混入



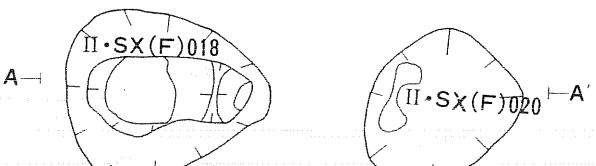


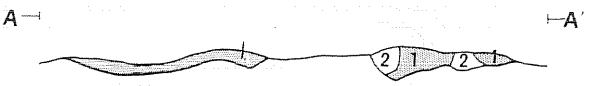




II・SX(F)016

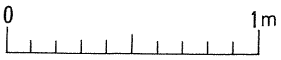
層	土　色	備　考
1	黒褐色　(10YR3/1)	粘性強，灰白色小ブロック微量，焼土少量混入
2	灰褐色　(7.5YR5/2)	粘性強，炭化物，灰少量混入，焼土
3	橙　色　(7.5YR6/6)	焼土
4	灰褐色　(7.5YR5/2)	粘性弱，灰多量混入
5	黒　色　(10YR3/1)	粘性強，



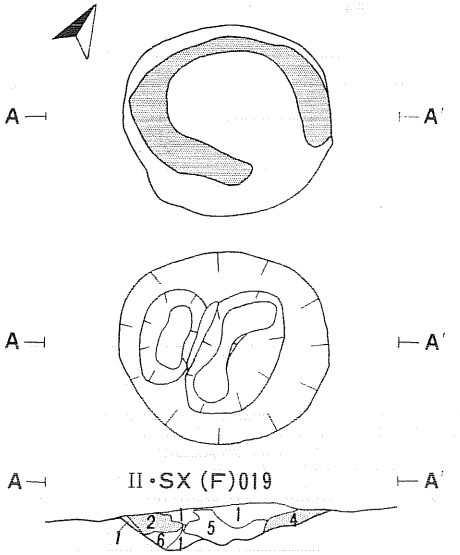


II・SX(F)018・020

層	土　色	備　考
1	褐　色　(7.5YR4/6)	粘性強，焼土
2	黒　色　(7.5YR1.7/1)	粘性強

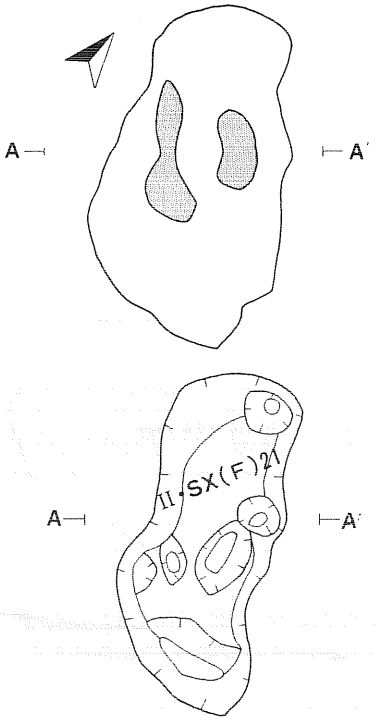


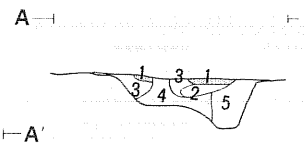
第31図　II・SX(F)015～018・020焼土遺構実測図



II・SX(F)019

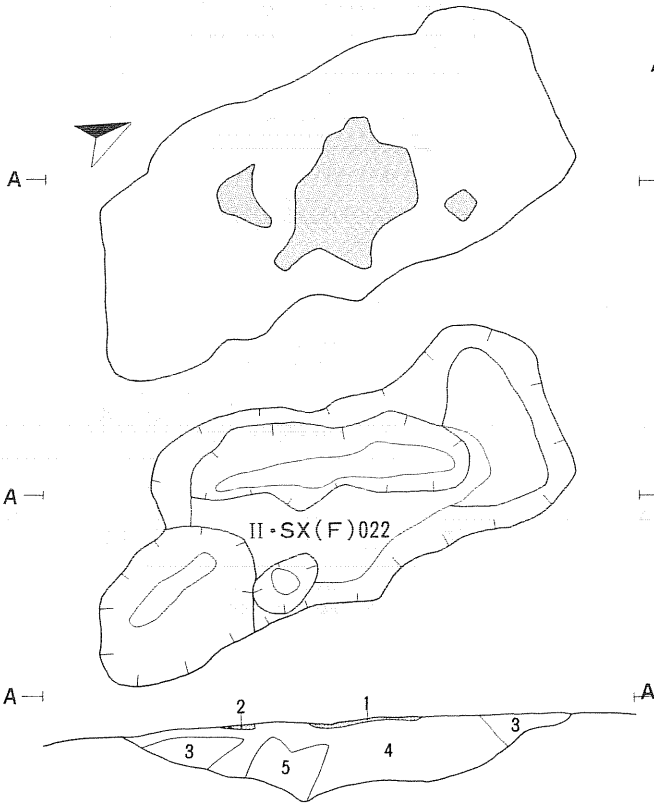
層	土色	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	粘性強
2	明黄褐色(7.5YR5/6)	粘性弱，黒色土微量混入，焼土
3	褐色土(7.5YR3/3)	粘性弱，焼土
4	黒色土（10YR1.7/1）	粘性強，白色粒子，炭化物少量混入





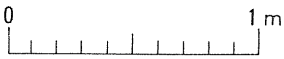
II・SX(F)021

層	土色	備考
1	褐色(7.5YR4/6)	粘性弱，焼土
2	黒色（10YR1.7/1）	粘性強，灰少量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	焼土少量混入
4	黒色（10YR3/1）	粘性強
5	黒色（10YR3/1）	粘性強，焼土少量混入

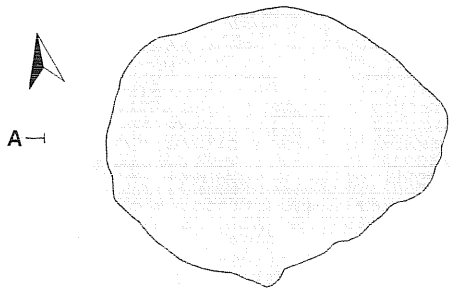


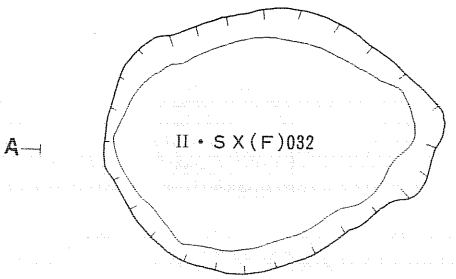
II・SX(F)022

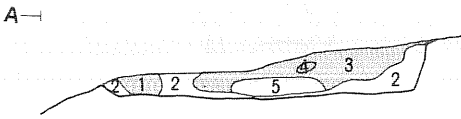
層	土色	備考
1	黒色（10YR1.7/1）	粘性強，炭化物，灰，焼土多量混入
2	明褐色(7.5YR5/6)	粘性弱，焼土
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色土微量混入
4	黒色（10YR3/1）	粘性強，黄褐色土微量，焼土少量混入
5	黒色（10YR1.7/1）	粘性強，やわらかい



第32図　II・SX(F)019・021・022焼土遺構実測図

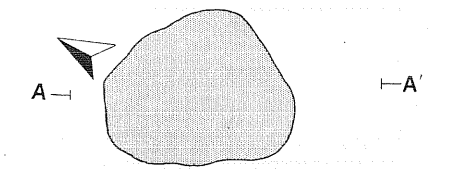






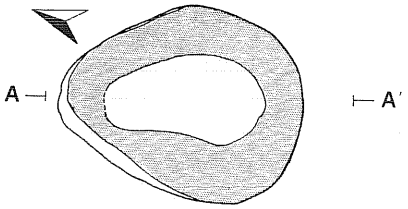
II・SX(F)023

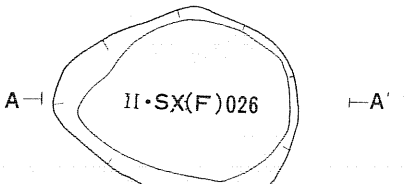
層	土色	備考
1	黒褐色 (10YR3/2) ＋明黄褐色(10YR6/6)	粘性弱，白色粒子，炭化物少量混入，焼
2	黒褐色 (10YR3/3)	白色粒子微量混入
3	橙 色 (10YR6/8)	炭化物少量混入，焼土
4	褐灰色 (10YR4/1)	粘性強，灰がほとんどを占める。
5	黒 色 (10YR1.7/1)	炭化物がほとんどを占める。

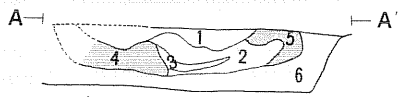


II・SX(F) 024

層	土色	備考
1	明黄褐色 (10YR7/6)	粘性強、炭化物少量混入、焼土
2	黒 褐 色 (10YR3/2)	焼土、炭化物少量混入
3	黒 褐 色 (10YR3/3)	炭化物微量混入



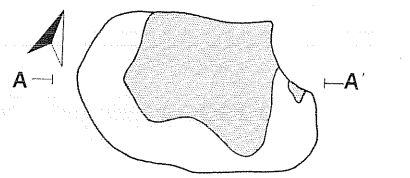


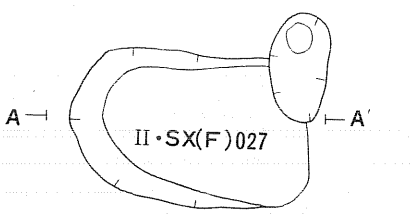


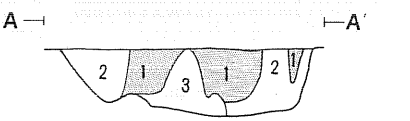
S I 010 床

II・SX(F)026

層	土色	備考
1	黒褐色 (7.5YR3/1)	
2	黒 色 (10YR1.7/1)	粘性弱，炭化物少量混入、やわらかい
3	黒褐色 (10YR3/2)	にぶい黄橙色土少量混入
4	明褐色 (7.5YR5/6)	焼土
5	黒褐色 (10YR3/2)	黄褐色土多量に混入

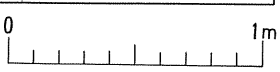




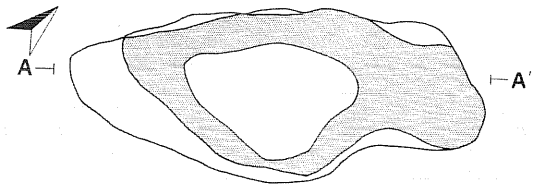


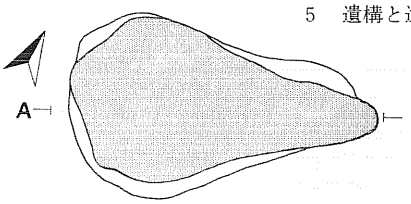
II・SX(F) 027

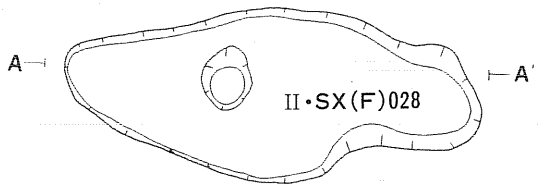
層	土色	備考
1	橙 色(7.5YR6/6)	粘性弱、焼土
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘性強、焼土少量混入
3	黒 色 (10YR2/1)	粘性強、黄褐色粒子少量混入

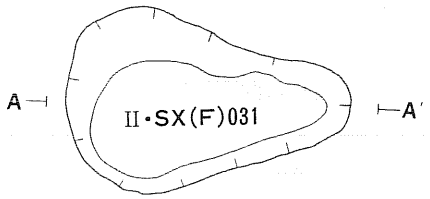


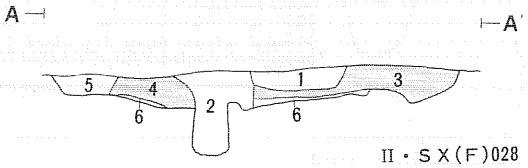
第33図　II・SX(F)023・024・026・027焼土遺構実測図





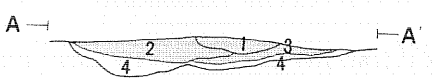






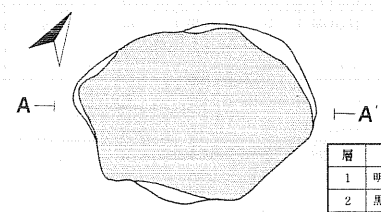
II・SX(F)028

層	土　色	備　考
1	黒褐色（10YR2/3）	
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性弱、やわらかい
3	赤褐色（5YR4/8）	粘性強、焼土
4	赤褐色（5YR4/6）	黒褐色土少量混入、焼土
5	黒褐色（10YR2/3）	焼土少量混入、やわらかい
6	黒　色（10YR1.7/1）	炭化物がほとんどを占める。

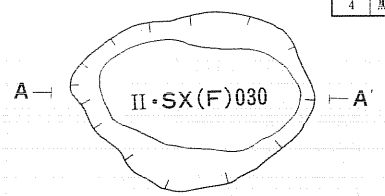


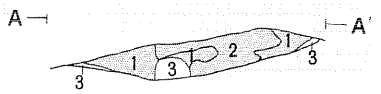
II・SX(F)031

層	土　色	備　考
1	明褐色(7.5YR5/6)	粘性強、炭化物、灰多量混入、焼土
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性弱、炭化物、灰多量混入
3	橙　色（(7.5YR6/8)	粘性強、灰少量混入、焼土
4	褐　色（10YR4/4）	粘性弱、もろい



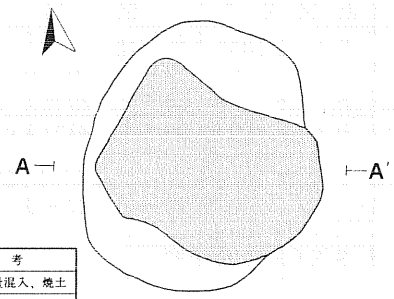
層	土　色	備　考
1	明黄褐色（10YR7/6）	浅黄橙色粒子、炭化物多量混入、焼土
2	黒　色(7.5YR3/1)	炭化物少量混入
3	黒　色（10YR3/1）	
4	黒 褐 色（10YR3/2）	粘性強

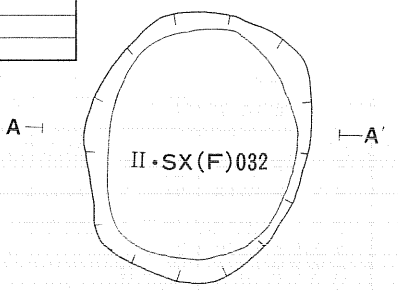


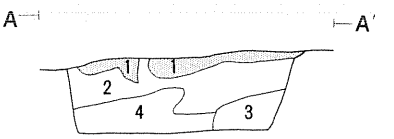


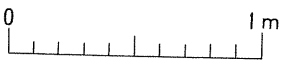
II・SX(F)030

層	土　色	備　考
1	黄 橙 色(7.5YR7/8)	粘性強、浅黄橙色粒子多量混入、焼土
2	灰黄褐色（10YR5/2）	炭化物少量混入、焼土
3	褐 灰 色（10YR4/1）	粘性弱、炭化物、灰多量混入

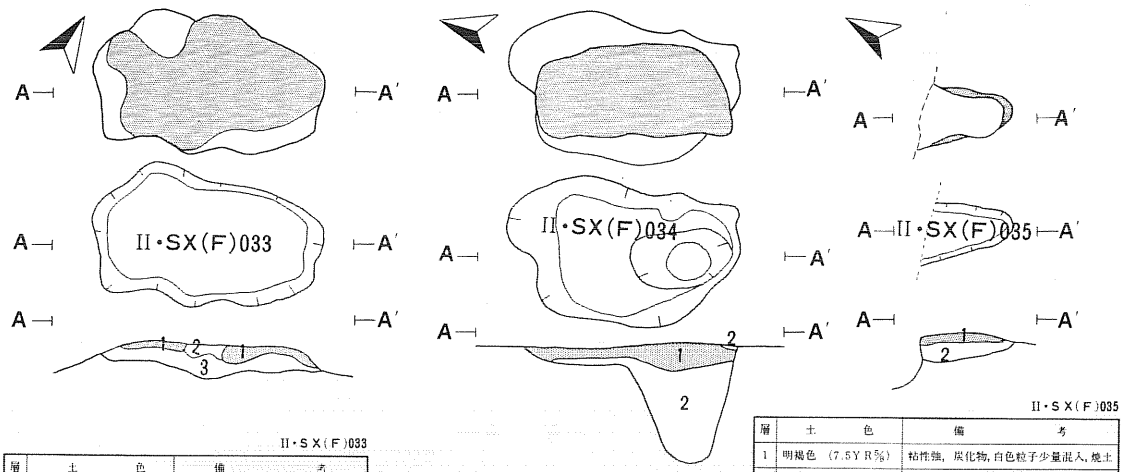








第34図　II・SX(F)028・030～032焼土遺構実測図



II・SX(F)033

層	土色	備考
1	橙色 (7.5YR⅝)	粘性強，炭化物少量混入
2	明褐色 (7.5YR⅝)	灰少量混入
3	にぶい黄褐色 (10YR⅝)	炭化物少量混入

II・SX(F)034

層	土色	備考
1	黒褐色 (10YR⅜)	粘性強，焼土多量混入
2	にぶい黄褐色 (10YR⅝)＋黒褐色 (10YR⅜)	炭化物少量混入，もろい

II・SX(F)035

層	土色	備考
1	明褐色 (7.5YR⅝)	粘性強，炭化物，白色粒子少量混入，焼土
2	黒褐色 (7.5YR⅜)	炭化物少量混入

第35図　II・SX(F)033～035焼土遺構実測図

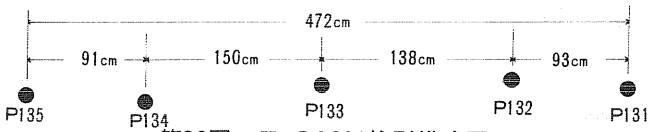
第3表　II・SX(F)焼土遺構観察表

遺構番号	検出位置	法量 長径	法量 短径	法量 深さ	遺物
SX(F)001	18－H	143cm	82cm	16～48cm	なし
SX(F)002	19－H，20－H	120cm	84cm	8～11cm	なし
SX(F)003	20－H，20－I	199cm	84cm	7～53cm	なし
SX(F)004	20－I，21－I，20－J	541cm	95cm	5～34cm	なし
SX(F)005	20－I，20－H	93cm	91cm	14～18cm	なし
SX(F)006	21－I，22－I，21－J，22－J	213cm	83cm	3～47cm	なし
SX(F)007	22－I，22－J	180cm	85cm	10～27cm	なし
SX(F)008	22－J	67cm	60cm	9～11cm	なし
SX(F)009	22－J	128cm	83cm	5～20cm	なし
SX(F)010	21－J	213cm	111cm	5～34cm	なし
SX(F)011	22－J	81cm	73cm	5～10cm	なし
SX(F)012	22－J	170cm	100cm	11～41cm	なし
SX(F)013	22－J，23－J	135cm	96cm	57～68cm	なし
SX(F)014	22－J，22－K，23－K	451cm	161cm	5～41cm	なし
SX(F)015	22－K	147cm	112cm	22～33cm	なし
SX(F)016	21－J，21－K	105cm	60cm	11～17cm	なし
SX(F)017	22－K	74cm	56cm	8～13cm	なし
SX(F)018	24－J，24－K	81cm	69cm	3～6cm	なし
SX(F)019	24－J，24－K	84cm	77cm	7～16cm	なし
SX(F)020	24－J	63cm	54cm	2～13cm	なし
SX(F)021	20－H	134cm	54cm	10～19cm	なし
SX(F)022	21－H，22－H	204cm	86cm	5～31cm	なし
SX(F)023	20－H，21－H	134cm	103cm	8～20cm	なし
SX(F)024	21－G，21－H	75cm	70cm	3～12cm	なし
SX(F)026	18－I	97cm	78cm	23～25cm	なし
SX(F)027	J－19	96cm	60cm	20～26cm	なし
SX(F)028	17－I，18－I	166cm	69cm	8～33cm	なし
SX(F)030	21－K	96cm	71cm	2～14cm	なし
SX(F)031	18－I	113cm	74cm	2～15cm	なし
SX(F)032	21－J	107cm	88cm	27～31cm	なし
SX(F)033	24－I，24－J	89cm	52cm	4～14cm	なし
SX(F)034	17－H	93cm	57cm	5～47cm	なし
SX(F)035	24－J	(35cm)	(23cm)	(3～11cm)	なし

③柱　　列

ＳＡ001 柱列（付図４、図版36）

ＳＩ004 の北側に柱穴５個からなる柱列が構築されており、地山面で確認された。ピットの深さはＰ１・53cm、Ｐ２・42cm、Ｐ３・72cm、Ｐ４・47cm、Ｐ５・19cmで、方位はＮ50°Ｗを測る。



第36図　II・SA001柱列模式図

④　溝

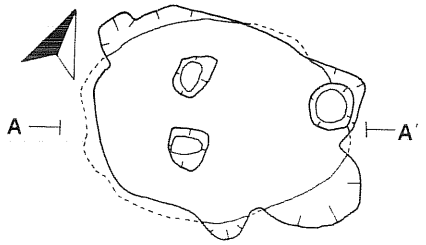
ＳＤ001 溝（付図５）

16Ｈ・Ｉグリッド内にあり、ＳＸ005 東端付近を起点として約７ｍほど直線的に延びているが、ＳＩ013 竪穴遺構東南隅付近で消失している。深さ６～12cm、幅30cmで底面は平坦である。ＳＩ009 竪穴遺構埋没後に構築されたものである。

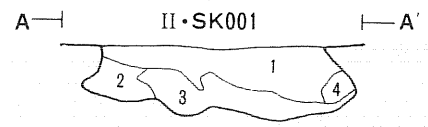
ＳＤ002 溝（付図４）

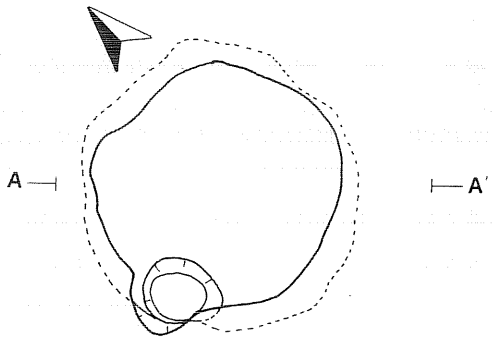
20Ｇ～21Ｇグリッド杭付近にかけて南北に延びる溝である。幅約20cm、深さ５～８cmと非常に浅く、地山面では確認されたが他の遺構と重複する部分では確認できず、新旧関係は不明である。

⑤土　壙（第37～41図、図版36～40・43）

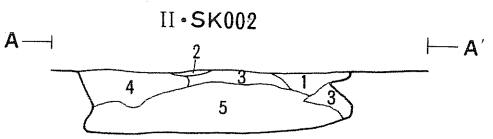


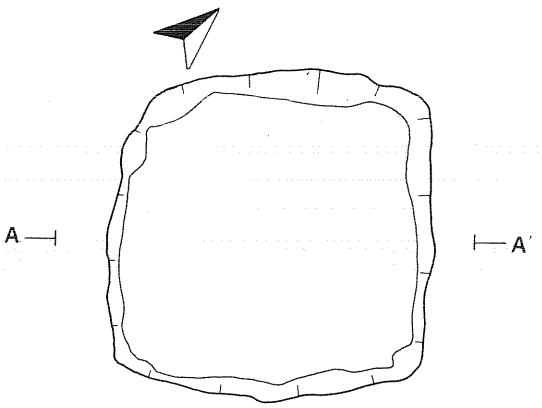
位　置　18－Ⅰグリッド
層　位　1，黒　色（10YR2/1）粘性強，黄褐色土微量混入
　　2，暗褐色（10YR3/3）粘性強，黄褐色土少量混入
　　3，暗褐色（10YR3/3）粘性強，黄褐色は小ブロック状
　　4，黒褐色（10YR3/2）粘性強，黄褐色土少量混入
法　量　径　146～114cm
　　深さ　36.2cm



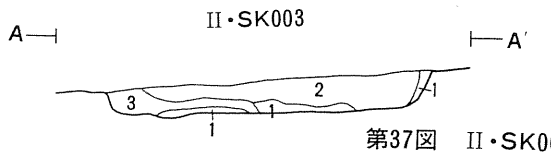


位　置　17－H・Ⅰグリッド
層　位　1，暗褐色（10YR3/4）粘性弱
　　2，褐　色（10YR4/6）粘性弱
　　3，黒　色（10YR2/1）粘性強，黄褐色土微量混入
　　4，にぶい黄褐色（10YR4/3）黄褐色小ブロック多量混入
　　5，黄褐色（10YR5/6）粘性強
法　量　径　156～146cm
　　深さ　34cm

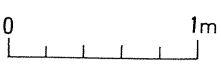




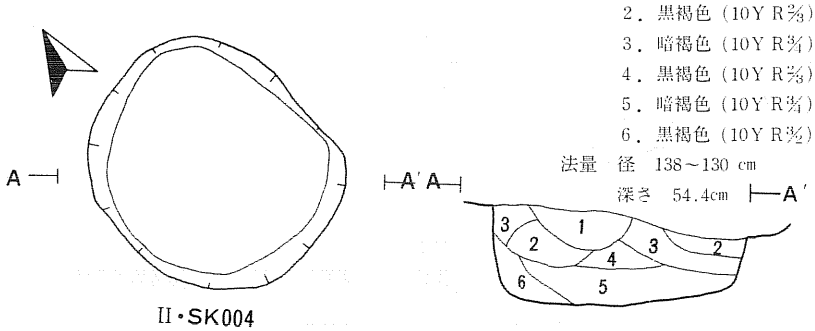
位　置　24－J，25－Jグリッド
層　位　1，黒褐色（10YR3/2）やわらかい
　　2，黒　色（10YR2/1）やわらかい
　　3，黒　色（10YR1.7/1）やわらかい
法　量　径　212～200cm
　　深さ　26.7cm



第37図　II・SK001～003土壙実測図

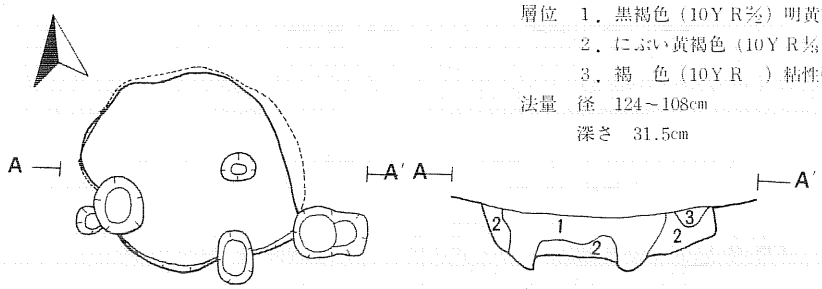


位置　20－FGグリッド
層位　1．黄褐色（10YR5/6）粘性弱，小ブロック状
　　2．黒褐色（10YR3/3）粘性弱
　　3．暗褐色（10YR3/4）粘性弱，黄褐色小ブロック少量混入
　　4．黒褐色（10YR3/3）黄褐色小ブロック少量混入
　　5．暗褐色（10YR3/4）粘性強
　　6．黒褐色（10YR3/2）黄褐色小ブロック微量混入
法量　径　138～130 cm
　　深さ　54.4cm



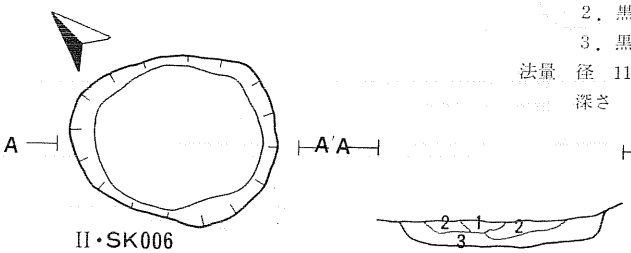
II・SK004

位置　18－H　Iグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）明黄褐色粒子微量混入
　　2．にぶい黄褐色（10YR5/3）明黄褐色粒子微量混入
　　3．褐　色（10YR　）粘性強，かたい
法量　径　124～108cm
　　深さ　31.5cm



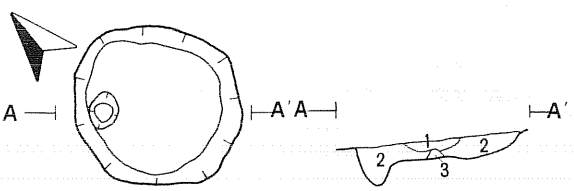
II・SK005

位置　23－G　グリッド
層位　1．にぶい黄褐色（10YR5/3）粘性強
　　2．黒褐色（10YR3/1）白色粒子微量混入
　　3．黒　色（10YR2/1）
法量　径　111～90cm
　　深さ　29.3cm



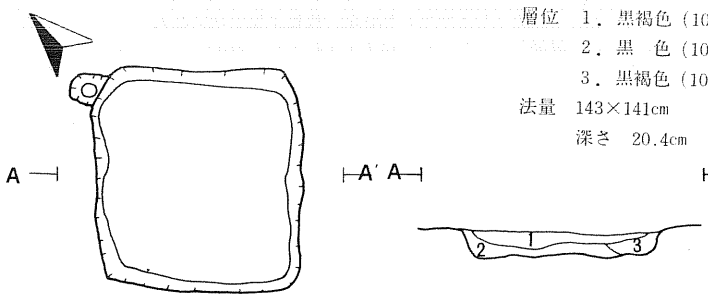
II・SK006

位置　23－G　グリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）粘性強　　2/3
　　2．黒　色（10YR2/1）白色粒子少量混入
　　3．明褐色（7.5YR5/6）粘性強，かたい
法量　94～88cm
　　深さ　14cm

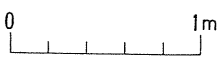


II・SK007

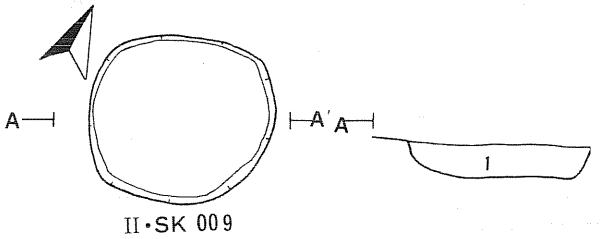
位置　23－F　G　グリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/1）白色粒子微量混入
　　2．黒　色（10YR2/1）
　　3．黒褐色（10YR3/1）粘性強
法量　143×141cm
　　深さ　20.4cm



II・SK008

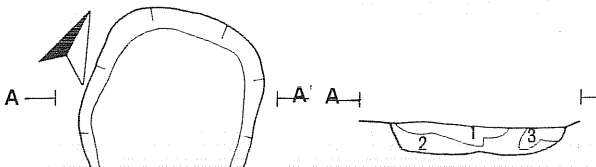


第38図　II・SK004～008土壙実測図



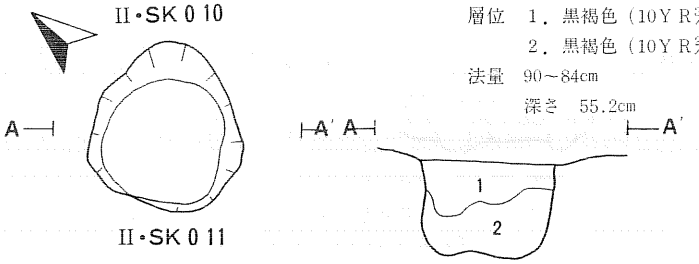
II・SK 009

位置　16－Jグリッド
層位　1．黒褐色（10YR2/3）やわらかい
法量　径　106～96cm
　　深さ　20cm



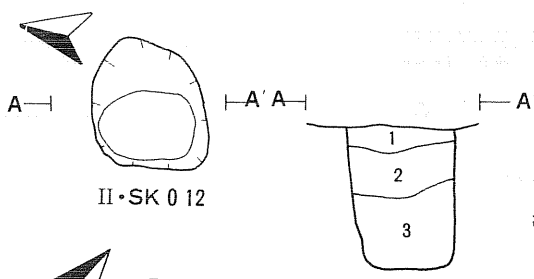
II・SK 010

位置　16－J　17－Jグリッド
層位　1．黄褐色（10YR5/6）暗褐色土多量混入
　　2．暗褐色（10YR3/4）粘性強
　　3．黒褐色（10YR2/3）
法量　径　115～97cm
　　深さ　24.5cm



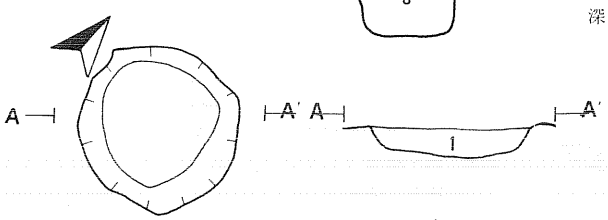
II・SK 011

位置　17－Gグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）明黄褐色小ブロック微量混入
　　2．黒褐色（10YR2/2）明黄褐色小ブロックは1層より小さい
法量　90～84cm
　　深さ　55.2cm



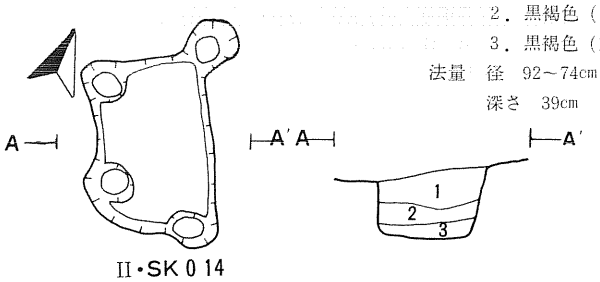
II・SK 012

位置　17－Jグリッド
層位　1．灰黄褐色（10YR4/2）
　　2．にぶい黄褐色（10YR6/4）粘性弱，白色粒子微量混入，やわらかい
　　3．にぶい黄橙色（10YR7/3）粘性弱，白色粒子微量混混入，やわらかい
法量　径　80～60cm
　　深さ　79cm



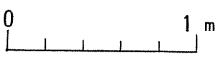
II・SK 013

位置　18－EFグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/6）粘弱，もろい
法量　径　90～86cm
　　深さ　25cm

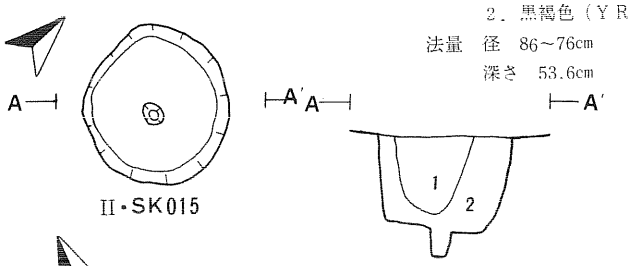


II・SK 014

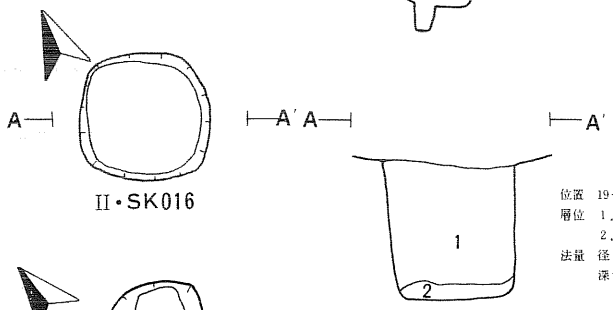
位置　21－Gグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）粘性弱，褐色土小ブロック状に混入もろい
　　2．黒褐色（10YR3/2）粘性弱，褐色土粒子状に混入
　　3．黒褐色（10YR3/2）褐色土が粒子状で微量混入もろい
法量　径　92～74cm
　　深さ　39cm



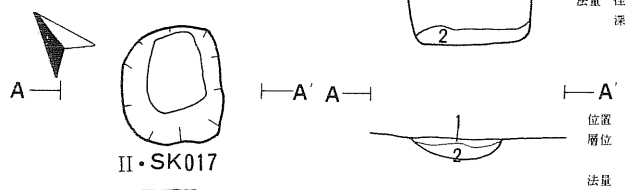
第39図　II・SK009～014土壙実測図



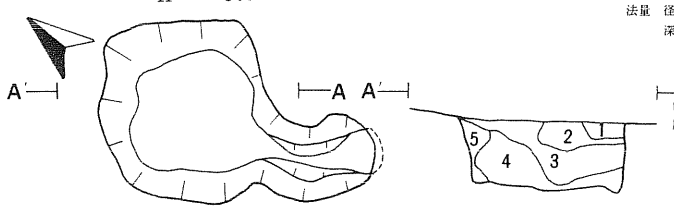
位置　25－J・Kグリッド
層位　1．黒　色(10YR1.7/1)粘性強，黄褐色粒子少量混入
　　2．黒褐色（YR3/2）粘性強，黄褐色粒子少量混入
法量　径　86～76cm
　　深さ　53.6cm



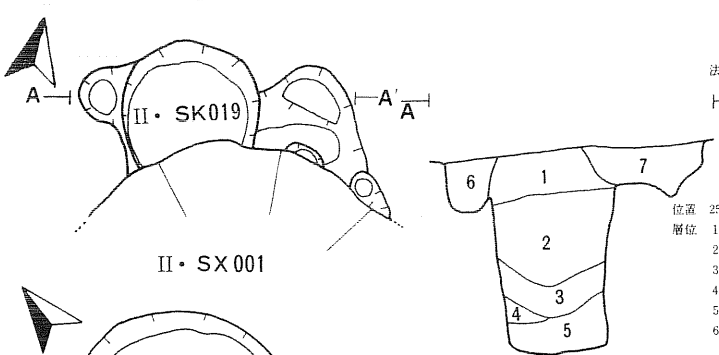
位置　19－Hグリッド
層位　1．黒色（10YR3/1）粘性強，黄褐色小ブロック多量混入
　　2．にぶい黄褐色（10YR4/3）粘性強，黒色土少量混入
法量　径　78～74cm
　　深さ　76cm



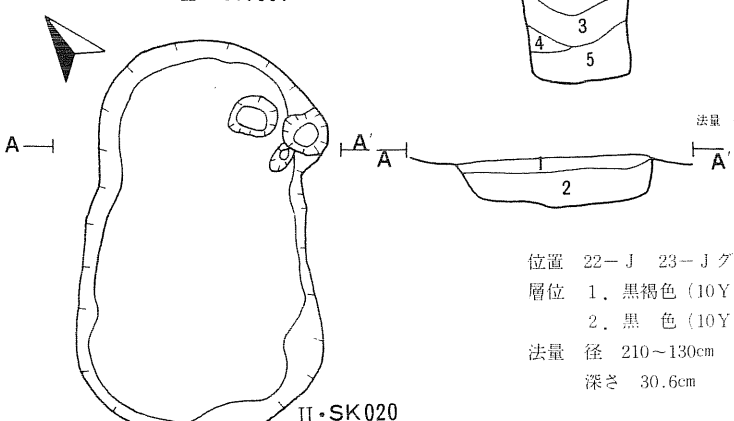
位置　22－Kグリッド
層位　1．黒　色（10YR3/1）粘性強，黄褐色粒子少量混入
　　2．黄褐色（10YR5/6）黒褐色土少量混入
法量　径　64～60cm
　　深さ　14cm



位置　17－H，18－Hグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）粘性弱，明黄褐色粒子微量混入，もろい
　　2．にぶい黄褐色（10YR5/3）粘性弱，黒褐色土多量混入
　　3．黒褐色（10YR3/2）粘性弱，明黄褐色粒子微量混入，もろい
　　4．黒褐色（10YR3/2）明黄褐色小ブロック黒色土少量混入
　　5．にぶい黄橙色（10YR6/4）粘性強，黒褐色土微量混入
法量　径　156～102cm
　　深さ　45.7cm



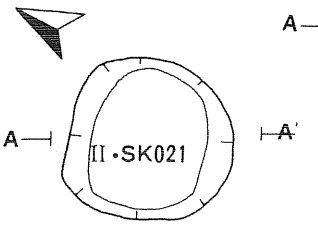
位置　25－Iグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）粘性強，明黄褐色粒子少量混入
　　2．黒褐色（10YR3/2）粘性強，明黄褐色小ブロック微量混入
　　3．黒褐色（10YR3/2）明黄褐色粒子微量混入
　　4．黒褐色（10YR3/1）粘性強
　　5．黒　色（10YR3/1）粘性弱，もろい
　　6．黒　色（10YR3/1）粘性弱，黄褐色小ブロック少量混入　ピット埋土
　　7．黒褐色（10YR3/2）黄褐色粒子微量混入，ピット埋土
法量　径　74～78cm
　　深さ　114.6cm

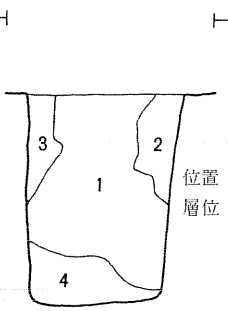


位置　22－J　23－Jグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）白色粒子少量混入，かたい
　　2．黒　色（10YR3/1）白色粒子微量褐色土少量混入
法量　径　210～130cm
　　深さ　30.6cm

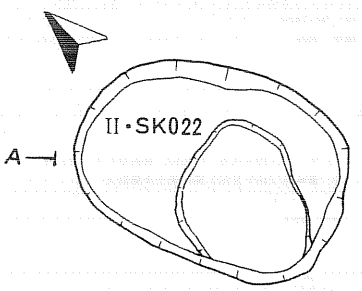
0　1m

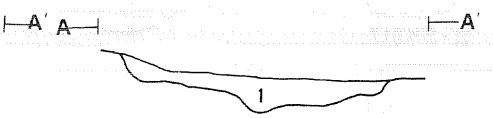
第40図　II・SK015～020土壙実測図



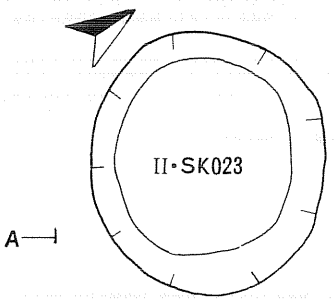


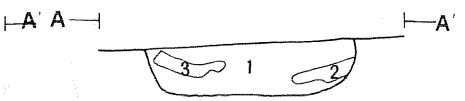
位置　17F　18－Fグリッド
層位　1．黒　色(10YR2/1)粘性強,黄褐色小ブロック少量混入
　　2．暗褐色(10YR3/4)粘性強,褐色土少量混入
　　3．黒褐色(10YR2/2)
　　4．黒褐色（10YR3/3）粘性強　黄褐色少ブロック微量混入
法量　径　94～92cm
　　深さ　86cm



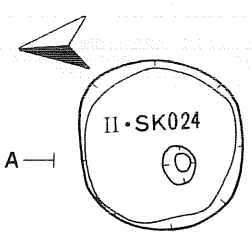


位置　24－I　25－Iグリッド
層位　1．黒褐色（10YR3/2）粘性強，黄褐色粒子多量混入
法量　径　148cm～106cm
　　深さ　14.5cm

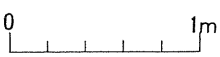




位置　18－F　18－Fグリッド
層位　1．暗褐色（10YR5/6）黄褐色小ブロック微量混入
　　2．にぶい黄橙色（10YR7/4）粘性強，粘質
　　3．明黄褐色（10YR7/6）白色粒子少量混入
法量　径　125～140cm
　　深さ　29cm

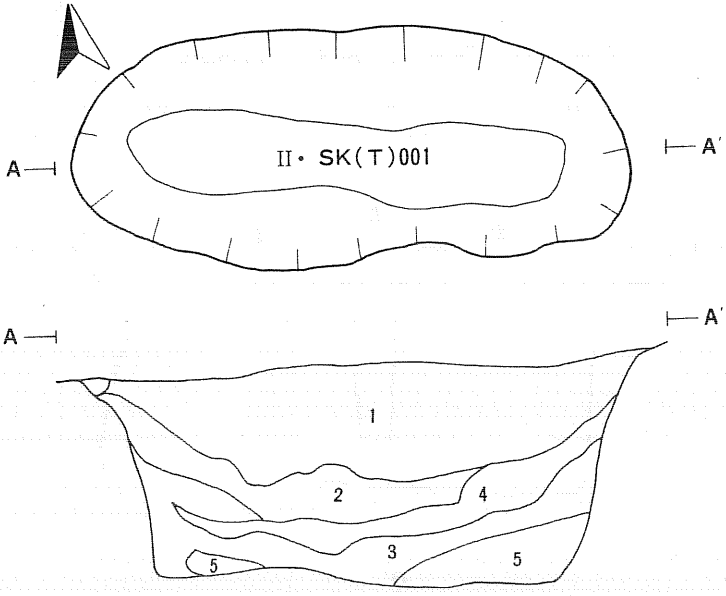


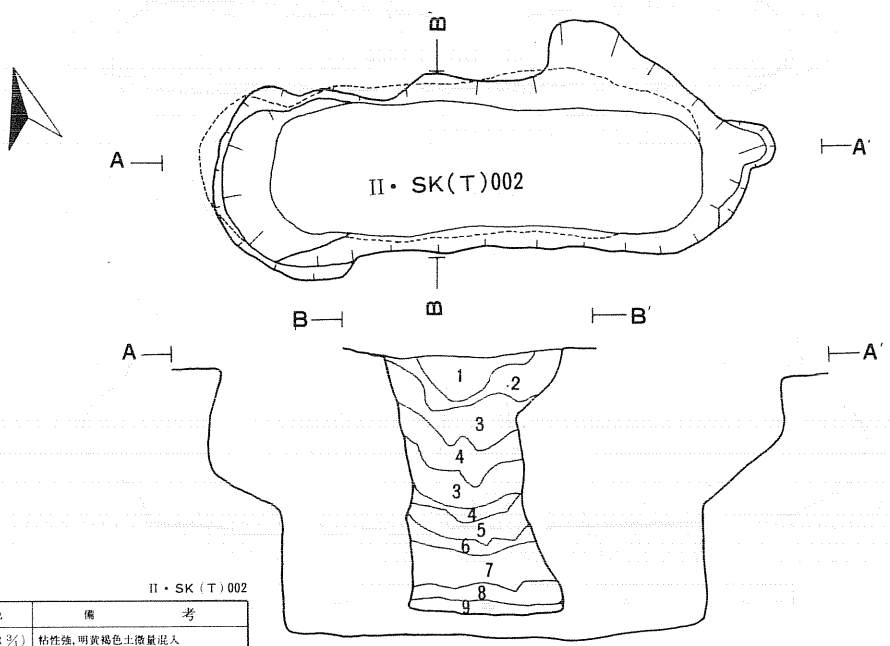
位置　H－18グリッド
層位
法量　径　85～90cm
　　深さ　27cm



第41図　II・SK021～024土壙実測図

⑥Tピット（第42～45図、図版41・42）





II・SK（T）002

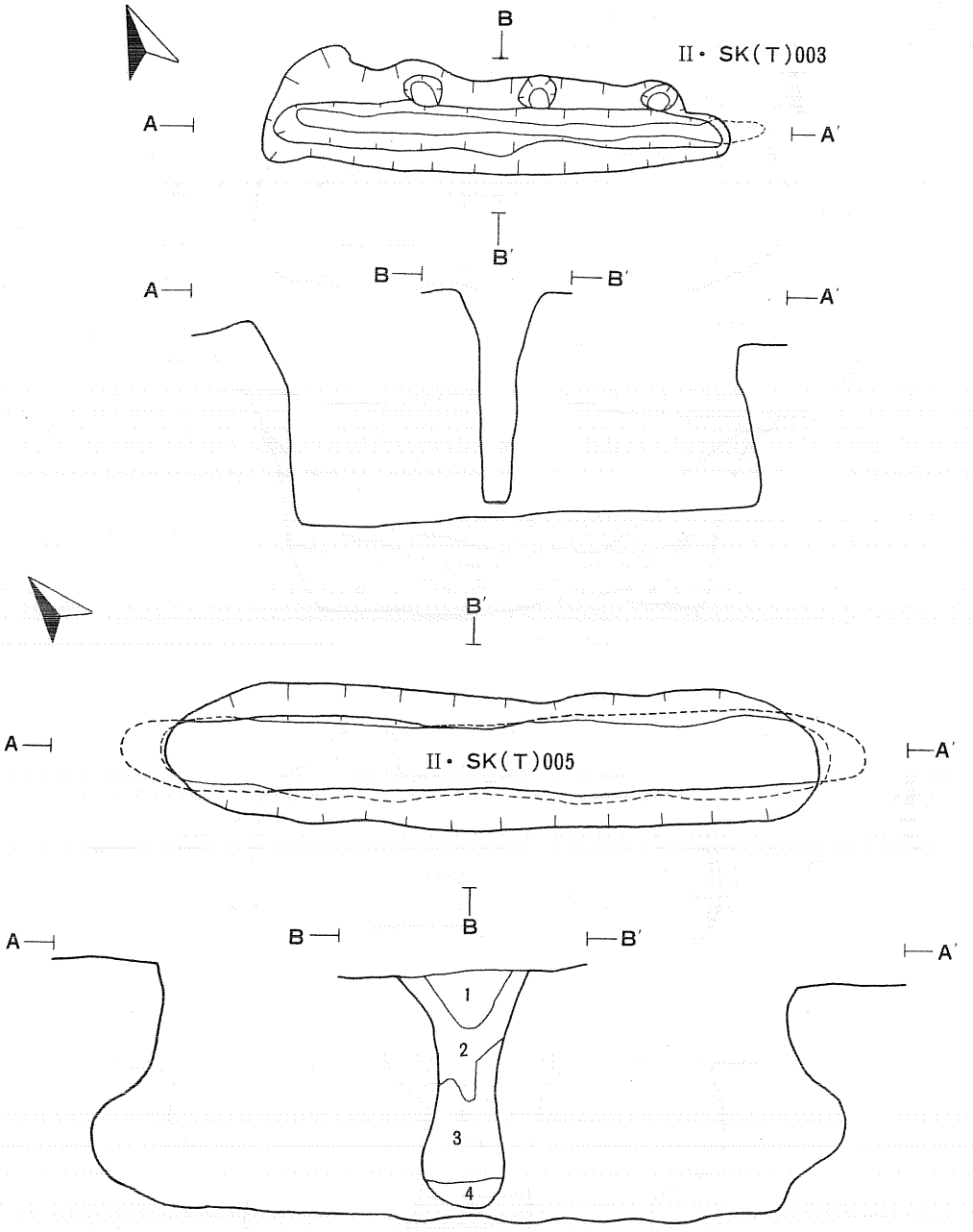
層	土　色	備　考
1	黒 褐色 （7.5YR 3/1）	粘性強，明黄褐色土微量混入
2	明黄褐色（10RY 5/8 ＋褐色 （10YR 3/2）	軽石少量混入
3	明黄褐色（ 10YR 5/6）	軽石微量混入
4	明黄褐色（10YR 5/6） ＋黒褐色（10YR 2/2）	にぶい黄橙色土少量混入
5	明黄褐色 （10YR 3/6）	粘性弱，やわらかい
6	にぶい黄橙色10YR 3/2）	粘性強，やわらかい
7	明黄褐色 （10YR 5/6）	黒褐色土多量，にぶい黄橙色土少量混入
8	黒 褐 色（7.5YR 3/2）	粘性弱，浅黄橙色土色少量混入，やわらかい
9	にぶい黄褐色(10YR 5/2）	黒褐色土，軽石微量混入

II・SK（T）002

層	土　色	備　考
1	黒　色（ 7.5YR 1/1）	粘性弱，黄橙色粒子少量混入
2	黒　色（ 7.5YR 2/1）	粘性弱，黄橙色粒子少量混入
3	黒褐色（ 7.5YR 2/2）	粘性弱，黄橙色小ブロック少量混入
4	黒褐色（ 7.5YR 3/2）	黄橙色小ブロック（3層より大）少量混入
5	黒褐色（ 7.5YR 2/2）	粘性弱，黄橙色小ブロック多量に混入
6	暗褐色（ 7.5YR 3/3）	粘性弱

0　1m

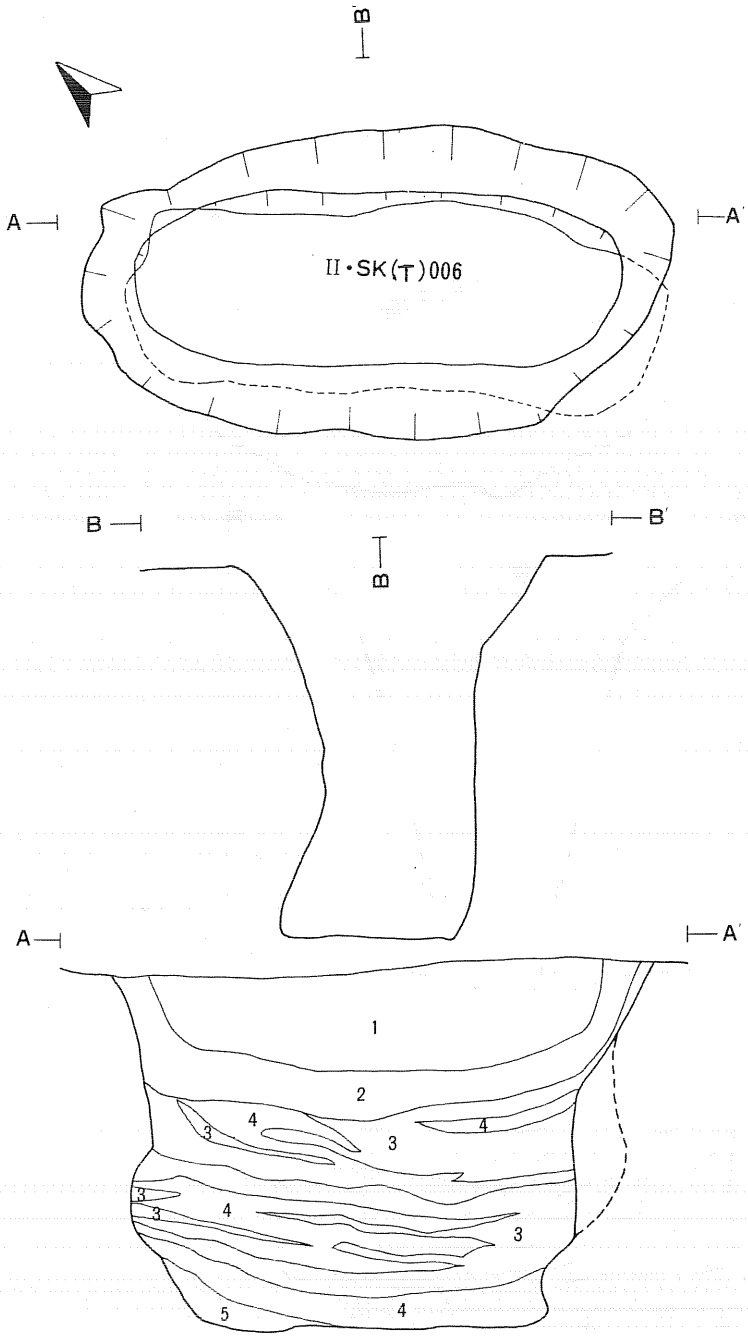
第42図　II・SK(T)001・002Tピット実測図



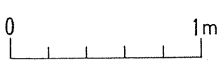
層	黒土色	備考
1	黒色 (10YR1/1)	粘性強, 黄褐色粒子, 白色粒子少量混入
2	黄褐色 (10YR3/2)	粘性強, 黄褐色粒子, 白色粒子多量混入
3	黄褐色 (10YR5/6)	粘性強, 黒色土少量混入
4	黒色 (10YR1/1)	粒性強, 黄褐色粒子多量混入

0 1m

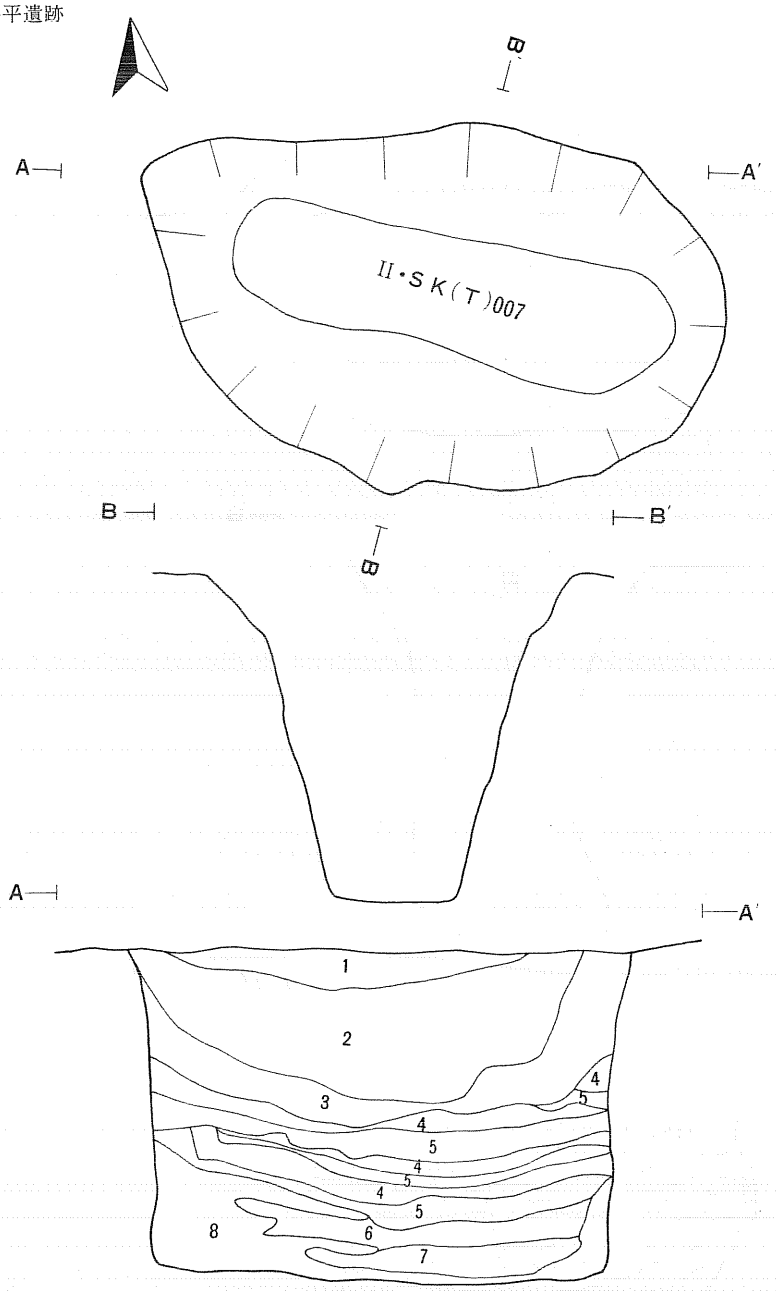
第43図　II・SK(T)003・005Tピット実測図



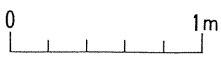
層	土　　色	備　　考
1	黒　色　(10YR1/1)	粘性強, 黄褐色粒子少量, 白色粒子多量混入
2	黒褐色　(10YR3/2)	粘性強, 黄褐色土多量, 白色粒子少量混入
3	黄褐色　(10YR5/8)	粘性弱, 白色粒子少量混入, 砂質
4	黒褐色　(10YR3/2)	粘性強, 軽石少量混入
5	にぶい黄橙色 10YR7/4)	粘性強, 白色粒子, 黒色土少量混入



第44図　II・SK(T)006Tピット実測図



層	土色	備考
1	明黄褐色 (10YR⅝)	白色粒子多量, 黒色土少量混入
2	黒色 (10YR1/1)	粘性強, 黄褐色粒子, 多量混入
3	黒褐色 (10YR⅔)	粘性強, 黄褐色小ブロック, 白多粒子多量混入
4	黄褐色 (10YR⅝)	粘性強, 白色粒子, 黒色土少量混入
5	黒色 (10YR1/1)	粘性強, 黄褐色小ブロック多量混入
6	にぶい褐色 (10YR5/4)	粘性強, 黒色土少量混入
7	褐色 (10YR⅘)	粘性強, 軽石, 黒色土多量に混入
8	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	粘性強, 軽石, 細砂少量混入



第45図　II・SK(T)007Tピット実測図

第4表　II・SK(T)Tピット観察表

遺構番号	検出位置	法量			長軸方位	遺物
		長径	短径	深さ		
SK(T)001	21－H，22－H 21－I，22－I	298cm	127cm	104～117cm	N－90°－W	なし
SK(T)002	19－F	300cm	122cm	135～140cm	N－98.5°－W	なし
SK(T)003	18－G，19－G	259cm	53cm	92～112cm	N－65.5°－W	なし
SK(T)005	22－I，21－J，22－J	311cm	78cm	126～135cm	N－43°－W	なし
SK(T)006	23－H，23－I，24－I	317cm	165cm	185～200cm	N－54°－W	なし
SK(T)007	22－H，23－H	316cm	200m	168～173cm	N－80.5°－W	なし

⑦その他の遺構

II・SX001　（第46図、図版43）

II郭北西端にあり、SK019 土壙を切っている。逆円錐形で、口径230 ～250 cm、深さ200 cmで、埋土は上層から下層に至るまで非常に堅いが自然堆積の状態を示している。遺物は出土しなかった。

II・SX002　（第47図、図版43）

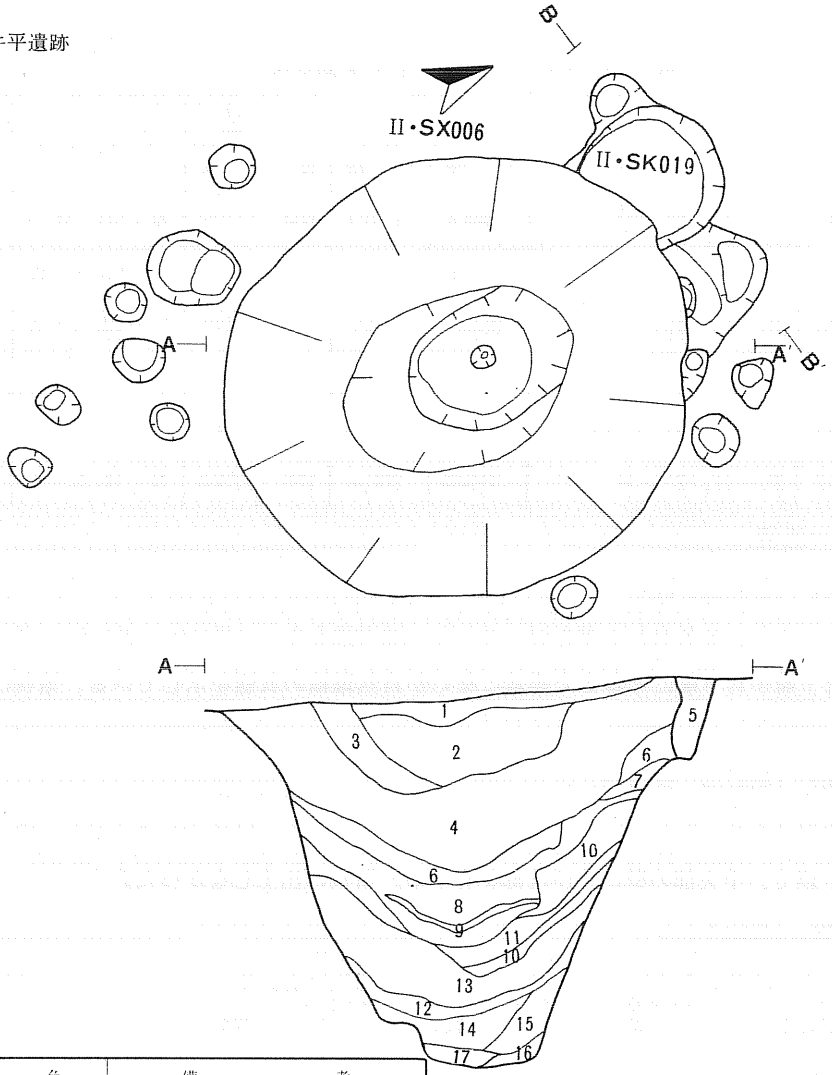
II郭の北西端にあり、郭の崩壊により、一部が崩落している。口径220 cmほどで、深さ160 cm、底面は平坦で、中央部の壁にくびれ部を有する。遺物は出土しなかった。

II・SX003　（付図5）

17Hグリッドにあり、SI006 南東コーナーに切られている。幅約90cm、深さ7～10cmで、西方向に延びるものらしい。底面は平坦で、遺物はなく、性格も不明である。

II・SX004　（付図5）

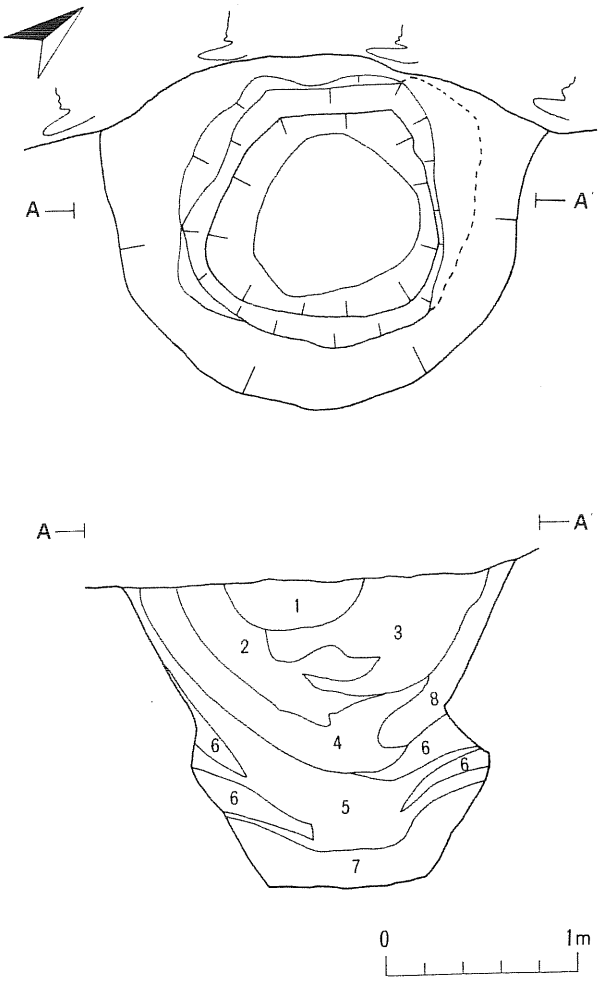
II郭の最南端に検出された。郭の崩壊により全容は不明であるが、竪穴遺構と同様の壁が高さ5～10cmで南北方向に2本残存し、これがSI013 ・014 などと同一の方向を示している。底面は平坦で、東西幅は280 cmである。恐らく竪穴遺構であろうと考えるが、この遺構に確実に付随するピットはない。



層	土色	備考
1	黒色 (10YR 1/1)	粘性強
2	黒色 (10YR 2/1)	粘性強, 明黄褐色小ブロック軽石微量混入
3	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	粘性強, 白色粒子, 灰白色粗砂多量混入
4	黒褐色 (10YR 3/2)	粘性強, 黄褐色粒子, 軽石微量混入かたい
5	暗褐色 (10YR 3/4)	粘性弱, もろい, ピット埋土
6	褐色 (10YR 4/4)	粘性強, 黄褐色粒子多量, 白色粒子少量混入
7	明黄褐色 (10YR 6/6)	粘性強, 白色粒子少量混入, かたい
8	暗褐色 (10YR 3/3)	粘性強, 黄褐色粒子多量, 白色粒子少量混入
9	黒色 (10YR 1/1)	白色粒子少量, 炭化物多量混入
10	にぶい黄褐色 (10YR 4/3) + 黄褐色 (10YR 5/6)	白色粒子微量黒褐色土微量混入
11	黒褐色 (10YR 3/2)	粘性強, 黄褐色小ブロック多量, 白色粒子少量混入
12	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	粘性強, 黄褐色小ブロック多量, 白色粒子少量混入
13	灰黄褐色 10YR 5/2	黒褐色土, にぶい黄橙色土少量混入
14	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	粘性弱, 黄褐色小ブロック少量混入
15	明黄褐色 10YR 6/8	粘性強, ブロック状
16	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	黒褐色土少量, 灰白色粗砂多量混入

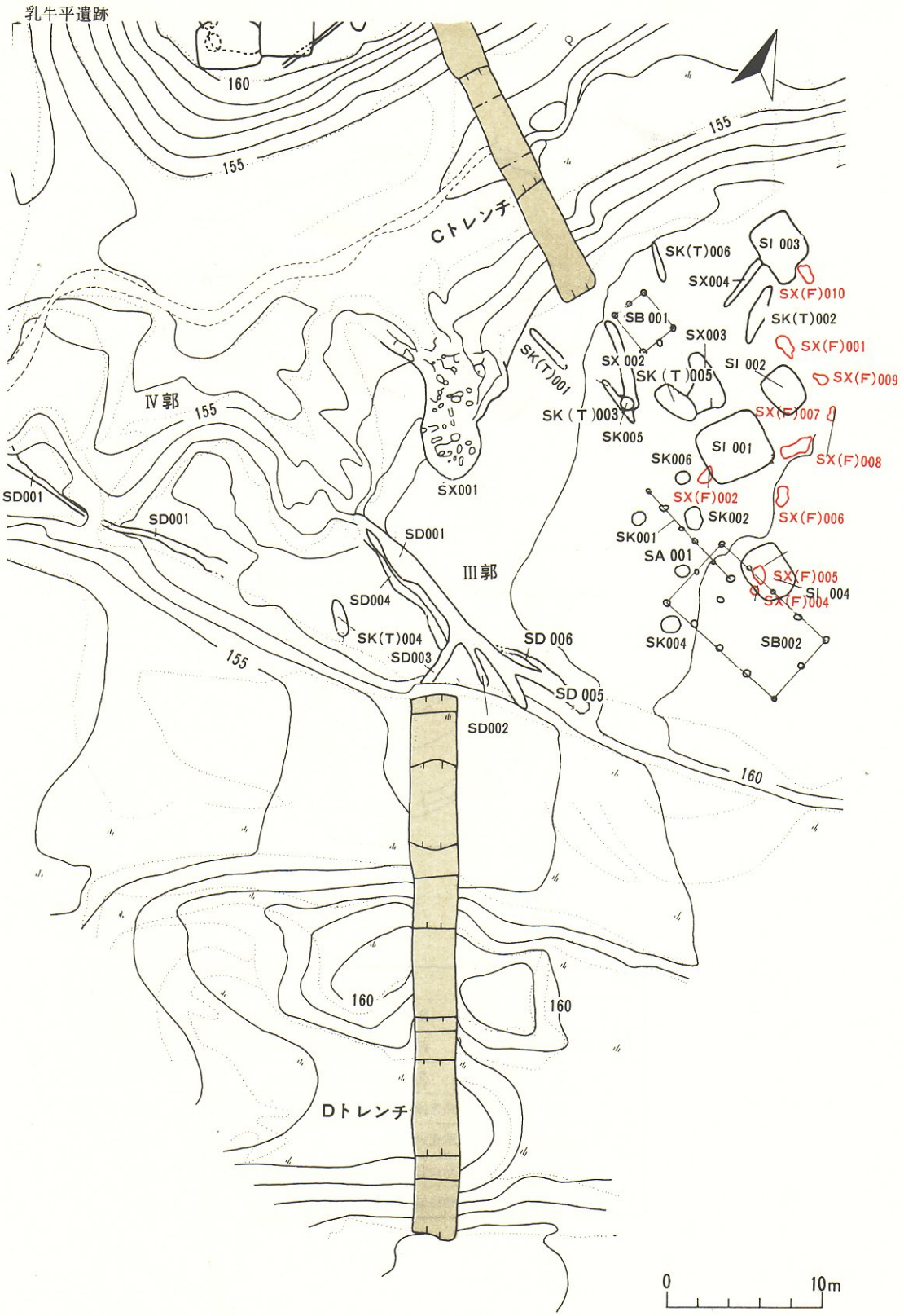
0 1m

第46図　II・SK019土壙・SX001その他の遺構



層	土　　色	備　　考
1	黒　　色（10YR1/1）	黄褐色粒子，小ブロック多量混入
2	黒 褐 色（10YR3/1）	黄褐色粒子多量，黒色土少量混入
3	黒　　色（10YR2/1）	黄褐色小ブロック多量混入
4	黒　　色（10YR1/1）	粘性強，黄褐色粒子多量混入
5	黒　色（10YR1/1） ＋黄褐色（10YR5/6）	粘性強
6	黄 褐 色（10YR5/6）	粘性弱，黒色土少量混入
7	明黄褐色（10YR5/6）	粘性弱，白色粒子，黒色土少量混入

第47図　II・SX002その他の遺構実測図



第48図　Ⅲ・Ⅳ郭遺構配置図

（３）　Ⅲ郭検出遺構

①　竪穴遺構

Ⅲ・ＳＩ001竪穴遺構（第49図、図版46）

位　置　11Ｃグリッド

平面形・規模　東西430cm、南北 380cmの方形を呈す。面積15.1㎡

壁　四壁ともやや外方に傾斜して立ち上がり、高いしっかりとしたつくりである。

床　傾斜もみられず平坦である。地山を床面としており堅い。

ピット　Ｐ１はこの遺構には伴わない後世のピットと思われる。この他は検出されなかった。土層断面図中にも後世のピットが現われている。

pitNo.	Ｐ１
深さ	8 (cm)

遺　物　なし。

その他の観察　南壁に本遺構よりも新しいＳＸ（ｆ）002が重複する。本遺構に伴う柱穴、炉は全く検出されなかった。

Ⅲ・ＳＩ002竪穴遺構（第50図　図版46・47）

位　置　12Ｂ・Ｃグリッド

平面形・規模　東西 280cm、南北 210cmの方形を呈す。面積 6.0㎡

壁　四壁ともほぼ垂直に立ち上がりしっかりとした作りである。西コーナーに向かって漸次低くなる。西壁に比べ東壁が短い。

床　全体的に、おおよそ平坦である。

ピット　Ｐ1～3・5・7～9・11がこの遺構の主たる柱穴であろう。

Pit　No.	Ｐ1	Ｐ2	Ｐ3	Ｐ4	Ｐ5	Ｐ6	Ｐ7	Ｐ8	Ｐ9	Ｐ10	Ｐ11	Ｐ12
深さ(cm)	20	46	54	14	47	10	39	22	13	45	29	34

遺物　なし。

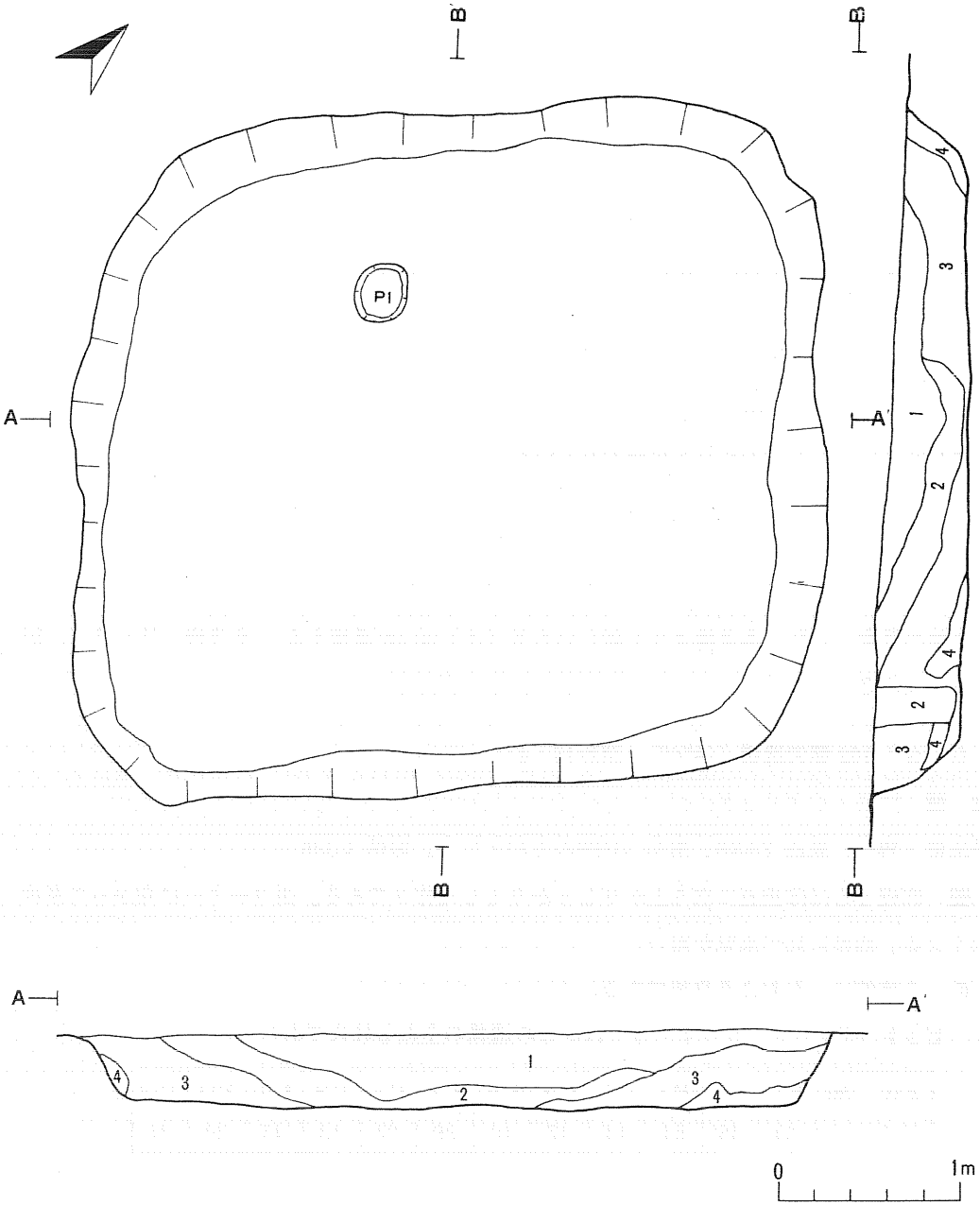
その他の観察　床面一帯に焼土と炭化材が見られることから焼失家屋である。

Ⅲ・ＳＩ003竪穴遺構（第51図　図版47・48）

位　置　13Ｂ・Ｃ，14Ｂ・Ｃグリッド

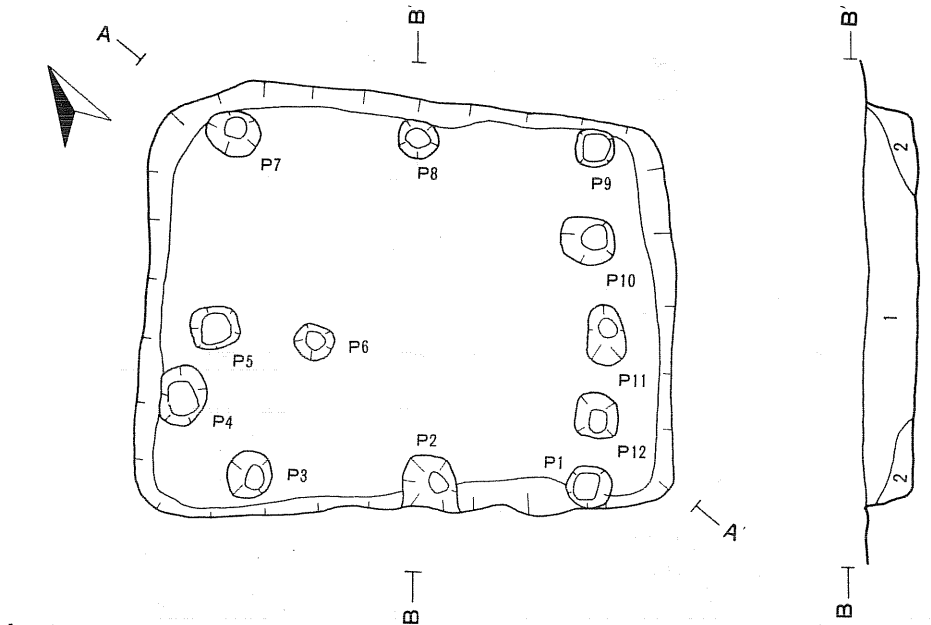
平面形・規模　東西280 cm、南北330 cmの方形を呈す。面積9.9 ㎡

壁　四壁とも完全に残存しており、緩かな立ち上がりではあるが、しっかりした作りである。北壁ほど高く南西コーナーに向かって漸次低くなる。

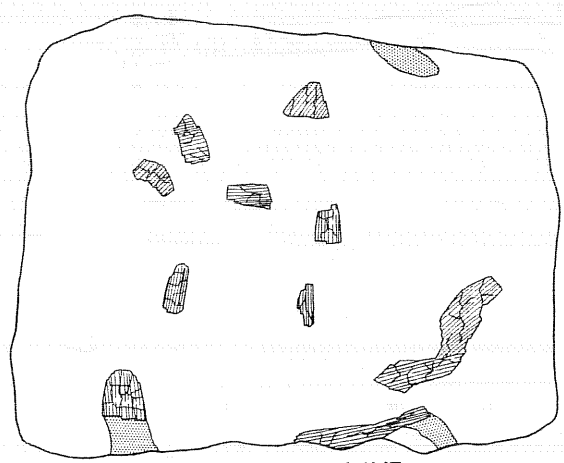


層	土　　色	備　　考
1	黒褐色(10YR⅔)	粘性弱，黄褐色小ブロック，軽石微量混入
2	黒　色(10YR⅓)	粘性弱，黄褐色小ブロック，軽石微量混入
3	黒褐色(10YR⅔)	粘性強、黄褐色小ブロック多量混入
4	黒褐色(10YR⅔)	粘性強

第49図　III・SI001竪穴遺構実測図



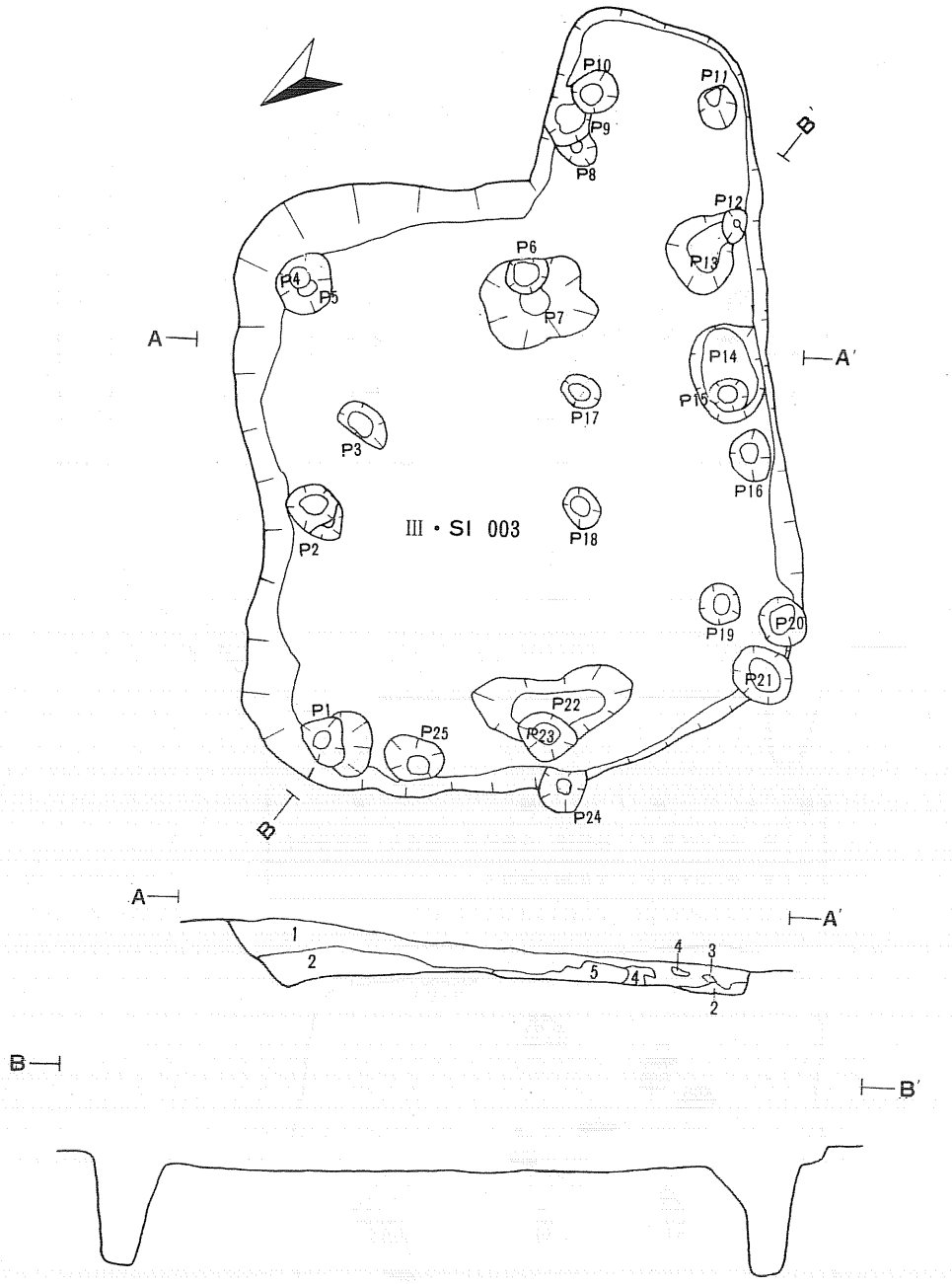
層	土　　色	備　　考
1	黒　色(10YR2/1)	粘性強，白色粒子少量混入，炭化物含む
2	黒　色(10YR2/1)	炭化物少量混入



炭化材・焼土検出状況

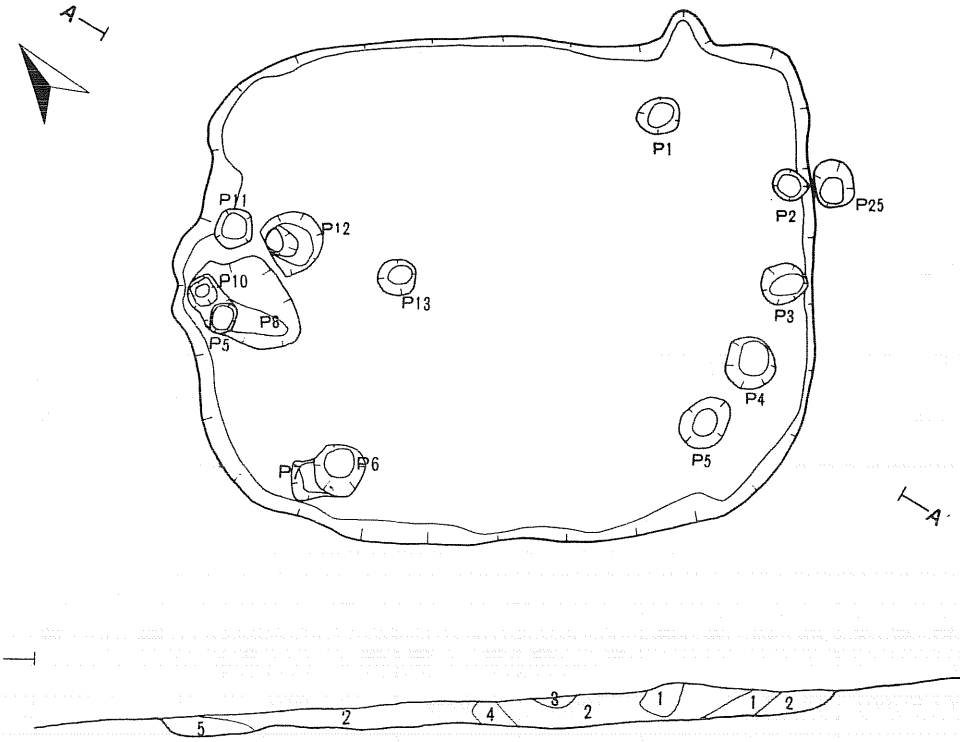
0　1m

第50図　Ⅲ・SI002竪穴遺構実測図



層	土　　色	備　　考
1	黒　色(10YR 1.7/1)	粘性強，黄褐色粒子少量混入
2	黒褐色(10YR 3/1)	黄褐色小ブロック少量混入
3	褐　色(5YR 4/6)	粘性強
4	褐　色(10YR 4/4)	白色粒子微量，黒色土多量混入
5	黄褐色(10YR 5/8)	下部に黒色土少量混入

第51図　III・SI 003竪穴遺構実測図



層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR2/1)	粘性強，白色粒子少量，黄褐色土多量混入
2	黒　色(10YR2/1)	粘性強，黄褐色土少量混入
3	黒　色(10YR1/1)	粘性強
4	黒褐色(10YR3/2)	粘性強

第52図　Ⅲ・SI004竪穴遺構実測図

床　北壁コーナーに向かって若干の傾斜、凸凹が見られる。地山を床面としており堅い。

ピット　P1・2・4・6・16・21・23は柱穴で、P10・12は出入口部の柱穴と思われる。

Pit No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
深さ(cm)	54	60	12	67	17	62	23	10	35	29	37	57	17
Pit No.	P14	P15	P16	P17	P18	P19	P20	P21	P22	P23	P24	P25	
深さ(cm)	13	29	55	22	9	21	20	25	24	58	40	30	

遺　物　なし。

その他の観察　東壁に出入口が付設されている。出入口部床面は、遺構内床面よりもいくぶん高くなるが、壁も10cm前後で形成されている。

Ⅲ・SI004竪穴遺構　（第52図、図版48）

位　置　9B・C，10B・Cグリッド

平面形・規模　東西 330cm、南北 360cmの方形を呈す。面積8.1㎡

壁　四壁とも急角度で立ち上がりしっかりしているが全体的に低い。

床　北西コーナーに向かって若干傾斜しているが、おおよそ平坦である。

ピット　遺構内のピットの配置は規則性に乏しく柱穴を決定し難いがＰ３～９は棟持柱かと考えられる。

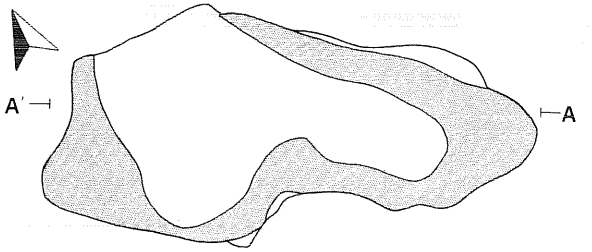
遺　物　なし。

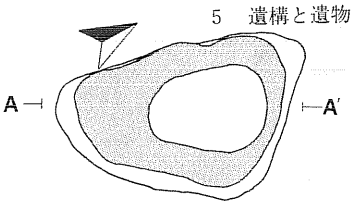
②焼土遺構（第53・54図、図版50）

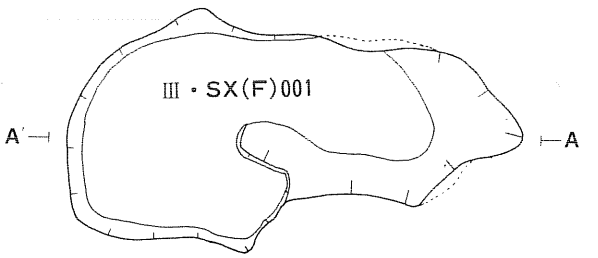
９基検出したが、このうち３基は竪穴遺構と重複する。郭縁辺部にはなく、中央部に集中する傾向が読みとれる。

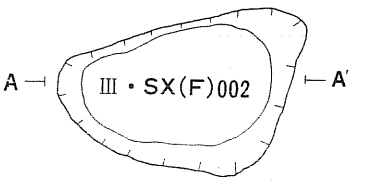
第５表　Ⅲ・ＳＸ(Ｆ)焼土遺構観察表

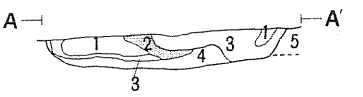
遺構番号	検出位置	法量			遺物
		長径	短径	深さ	
ＳＸ(Ｆ)001	12－Ｂ	180cm	92cm	7～26cm	なし
ＳＸ(Ｆ)002	11－Ｃ	91cm	64cm	11～14cm	なし
ＳＸ(Ｆ)004	9－Ｃ	71cm	70cm	10～15cm	なし
ＳＸ(Ｆ)005	9－Ｃ	130cm	86cm	7～18cm	なし
ＳＸ(Ｆ)006	10－Ｂ	142cm	87cm	3～15cm	なし
ＳＸ(Ｆ)007	11－Ｂ	203cm	89cm	3～19cm	なし
ＳＸ(Ｆ)008	11－Ｂ，12－Ｂ	(87cm)	(39cm)	(3～12cm)	なし
ＳＸ(Ｆ)009	12－Ａ	139cm	79cm	6～22cm	なし
ＳＸ(Ｆ)010	13－Ｂ	124cm	68cm	3～16cm	なし





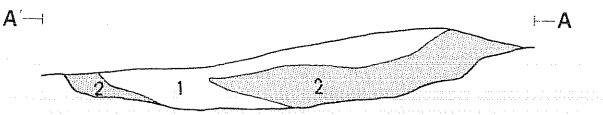






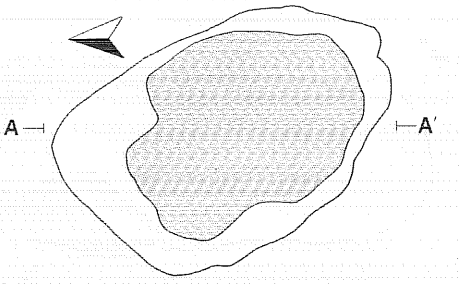
Ⅲ·SX(F) 002

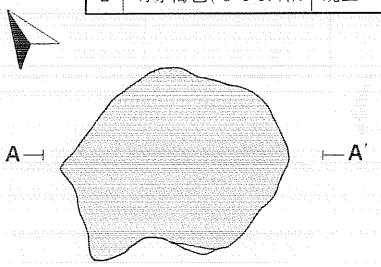
層	土　　色	備　　考
1	黄橙色(7.5YR 7/4)	粘性強，焼土，炭化物少量混入
2	褐灰色(10Y R 5/1)	灰多量混入
3	黒褐色(10Y R 3/2)	炭化物少量混入
4	褐　色(10Y R 4/4)	粘性弱，もろい
5	黒　色(10Y R 2/1)	白色粒子少量混入

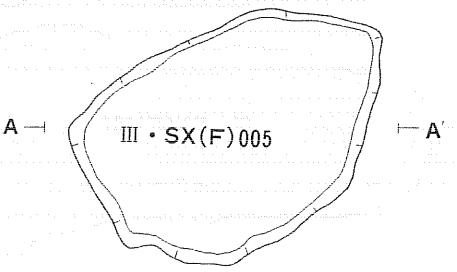


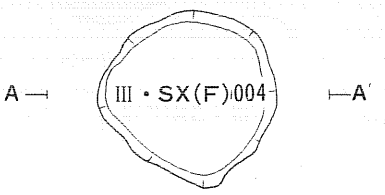
Ⅲ·SX(F) 001

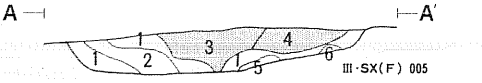
層	土　　色	備　　考
1	黒　　色(10Y R 2/1)	白色粒子微量混入
2	明赤褐色(5 Y R 5/6)	焼土





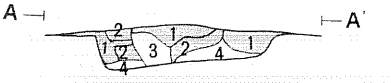






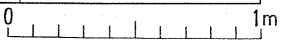
Ⅲ·SX(F) 005

層	土　　色	備　　考
1	黒　　色(10Y R 2/1)	粘性強，白色粒子，黄褐色粒子少量混入
2	褐　　色(10Y R 4/4)	黒色土多量混入
3	明赤褐色(5 Y R 5/6)	白色粒子，黒色土少量混入
4	赤 褐 色(5 Y R 4/4)	白色粒子，黒色土少量混入
5	暗褐色 (7.5Y R 3/4)	白色粒子少量混入
6	黄 褐 色(10Y R 5/6)	ブロック状

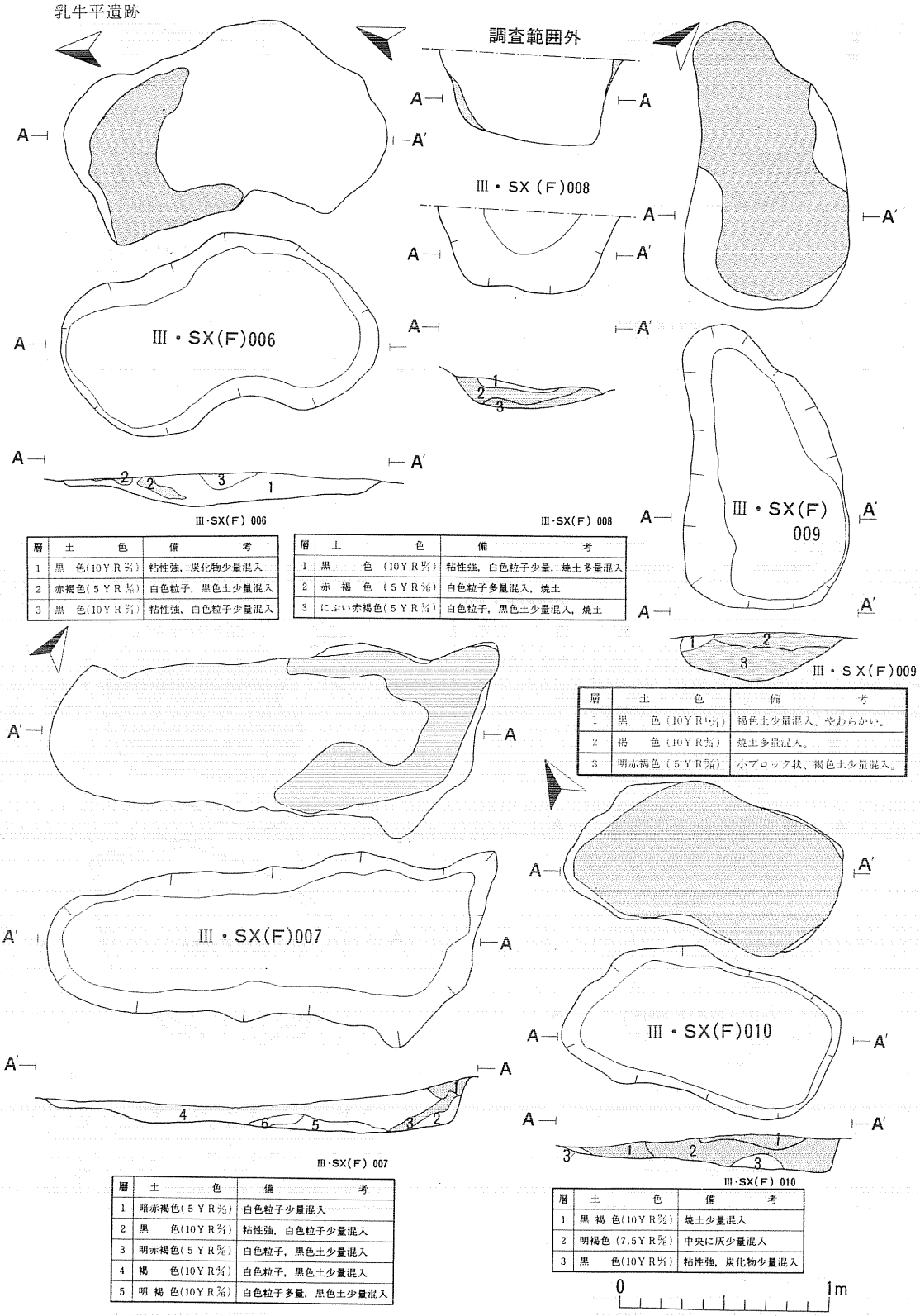


Ⅲ·SX(F) 004

層	土　　色	備　　考
1	黒　　色(10Y R 2/1)	粘性強，白色粒子，上面に焼土多量混入
2	明赤褐色(5 Y R 5/6)	白色粒子，黒色土少量混入
3	黒　　色(10Y R 2/1)	粘性強，白色粒子，焼土少量混入
4	黒褐色　(10Y R 2/2)	粘性強，黄褐色土，黒色土少量混入



第53図　Ⅲ・ＳＸ(Ｆ)001・002．004．005焼土遺構実測図



III·SX(F) 006

層	土色	備考
1	黒 色(10YR 2/1)	粘性強，炭化物少量混入
2	赤褐色(5YR 3/4)	白色粒子，黒色土少量混入
3	黒 色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子少量混入

III·SX(F) 008

層	土色	備考
1	黒 色 (10YR 2/1)	粘性強，白色粒子少量，焼土多量混入
2	赤 褐 色 (5YR 3/4)	白色粒子多量混入，焼土
3	にぶい赤褐色(5YR 3/4)	白色粒子，黒色土少量混入，焼土

III・SX(F)009

層	土色	備考
1	黒 色 (10YR 2/1)	褐色土少量混入、やわらかい。
2	褐 色 (10YR 3/3)	焼土多量混入。
3	明赤褐色 (5YR 5/6)	小ブロック状、褐色土少量混入。

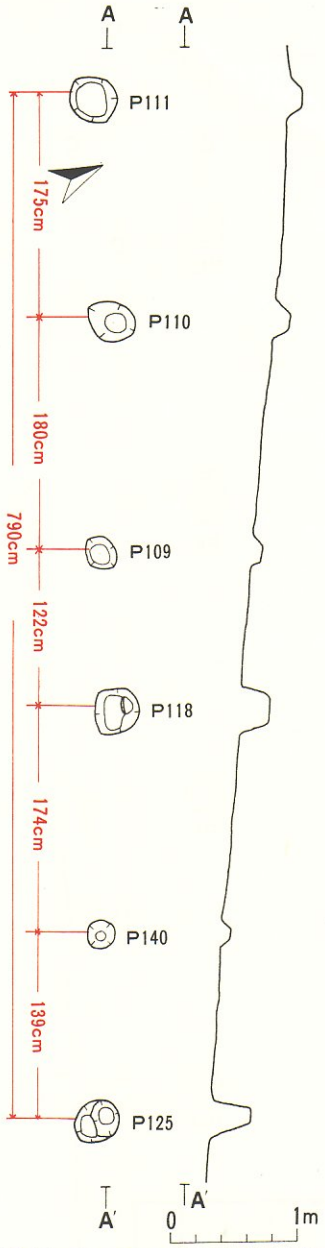
III·SX(F) 007

層	土色	備考
1	暗赤褐色(5YR 3/3)	白色粒子少量混入
2	黒 色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子少量混入
3	明赤褐色(5YR 5/6)	白色粒子，黒色土少量混入
4	褐 色(10YR 4/4)	白色粒子，黒色土少量混入
5	明 褐 色(10YR 5/6)	白色粒子多量，黒色土少量混入

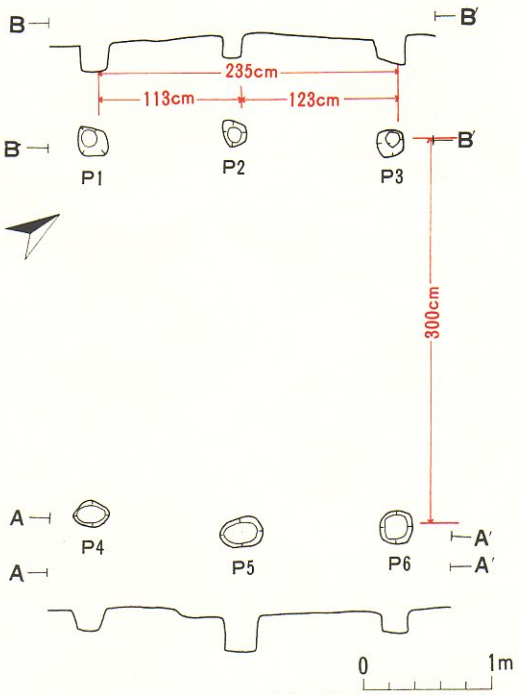
III·SX(F) 010

層	土色	備考
1	黒 褐 色(10YR 2/2)	焼土少量混入
2	明褐色 (7.5YR 5/6)	中央に灰少量混入
3	黒 色(10YR 2/1)	粘性強，炭化物少量混入

第54図　III・SX(F)006～010焼土遺構実測図



第55図　Ⅲ・ＳＡ001柱列実測図



第56図　Ⅲ・ＳＢ001掘立柱建物跡実測図

③柱　　列　（第55・56図）

ＳＡ001柱列（第55図）

９Ｄ・Ｅ、10Ｄ・Ｅグリッドに５個の柱穴からなる柱列が確認された。方位はＮ66°Ｗを測る。

④掘立柱建物跡

ＳＢ001掘立柱建物跡（第56図）

12、13Ｄグリッドにあり、桁行１間、梁行２間、柱間平均はそれぞれ295 cm、119 cm、桁行方位はＮ61°Ｗである。

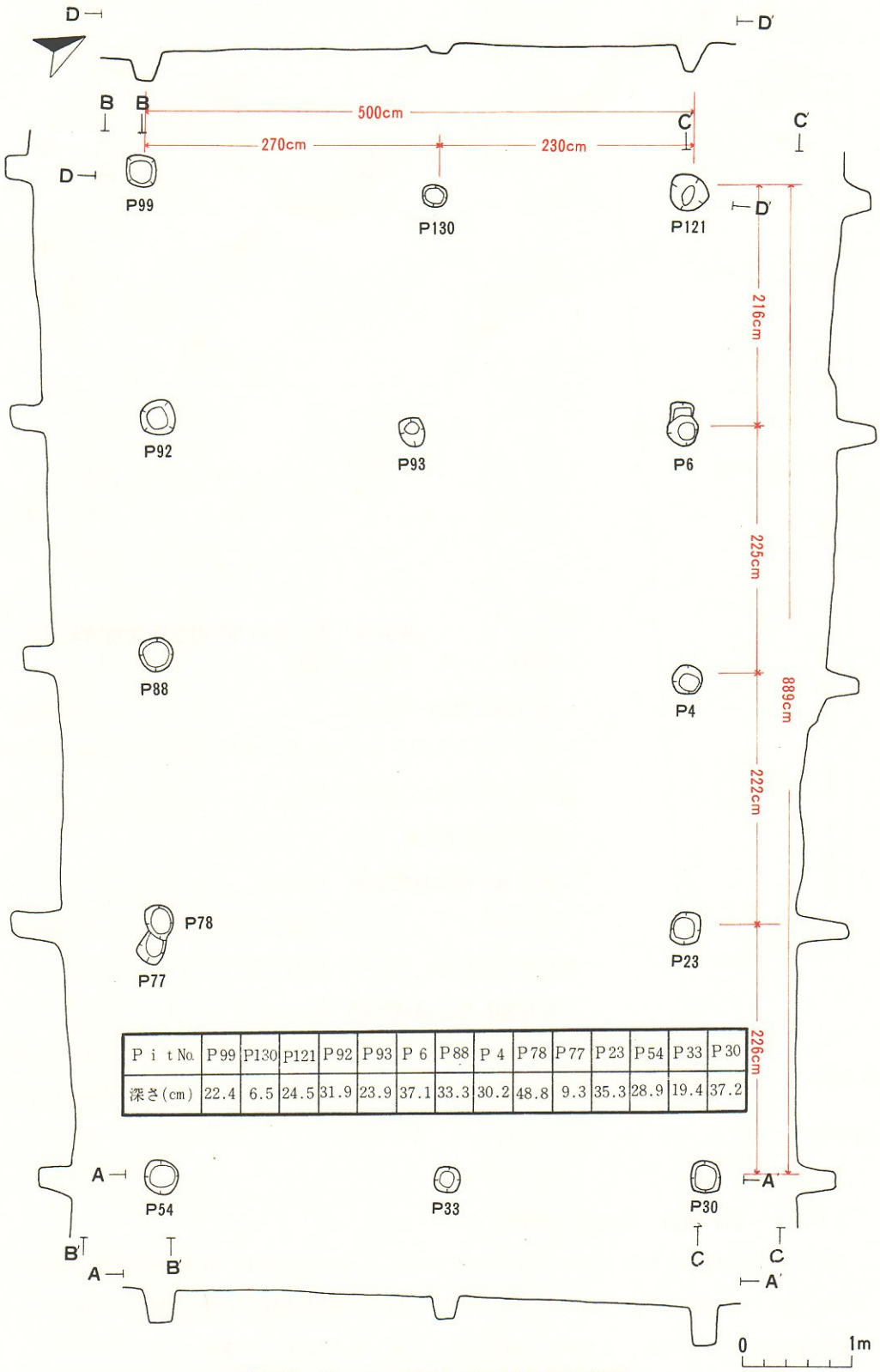
ＳＢ002 掘立柱建物跡（第57図）

８Ｃ・Ｄ、９Ｃ・Ｄ、グリッドにあり、ＳＡ001 柱列と重複するが、新旧関係は不明である。桁行４間、梁行２間、柱間平均はそれぞれ225 cm、250 cm、桁行方位はＮ70°Ｗである。

⑤　溝　　跡

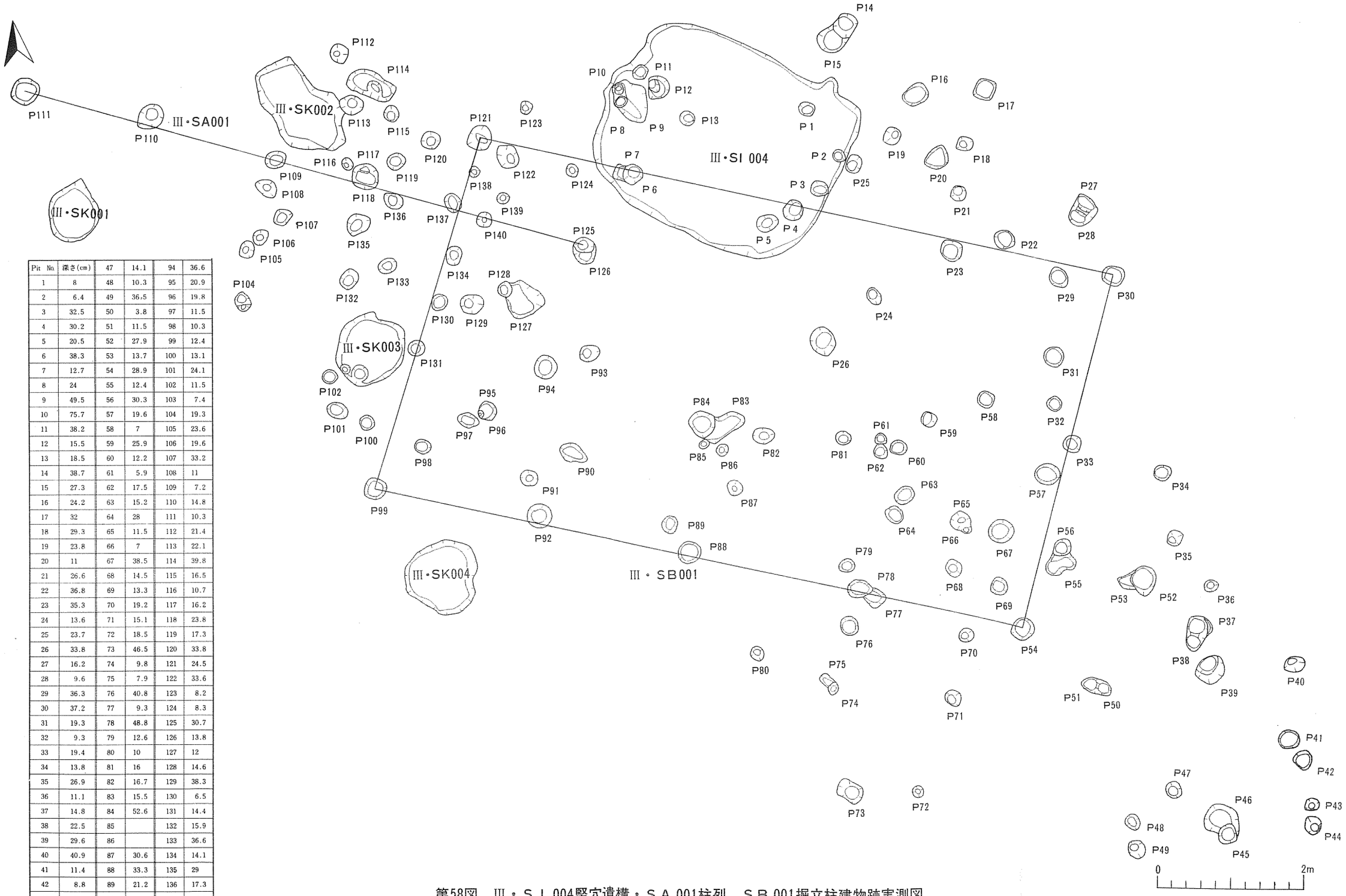
ＳＤ001 ～006 溝跡（第59図　図版51・52）

Ⅲ郭の西端に構築された６条の重複する溝である。この付近はⅢ、Ⅳ郭の接点にあたるが、両郭は掘によって切断されてはいないことから、郭の防禦的性格を有する遺構かと考える。柱痕跡は検出されなかった。ＳＤ001 が殊に深く、180 cmの深さを測る。



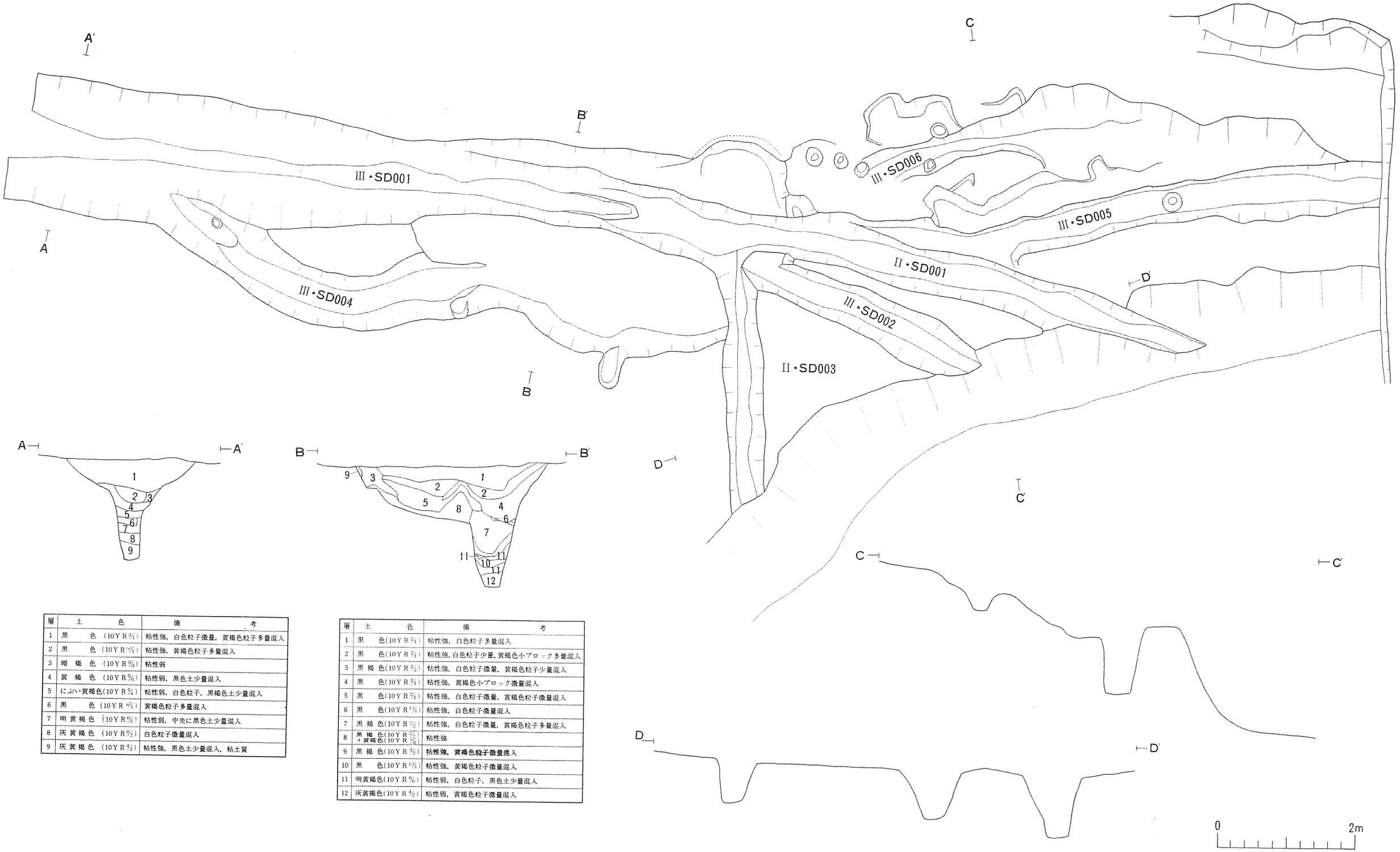
Pit No.	P99	P130	P121	P92	P93	P6	P88	P4	P78	P77	P23	P54	P33	P30
深さ(cm)	22.4	6.5	24.5	31.9	23.9	37.1	33.3	30.2	48.8	9.3	35.3	28.9	19.4	37.2

第57図　Ⅲ・ＳＢ002掘立柱建物跡実測図



Pit No.	深さ(cm)				
1	8	47	14.1	94	36.6
2	6.4	48	10.3	95	20.9
3	32.5	49	36.5	96	19.8
4	30.2	50	3.8	97	11.5
5	20.5	51	11.5	98	10.3
6	38.3	52	27.9	99	12.4
7	12.7	53	13.7	100	13.1
8	24	54	28.9	101	24.1
9	49.5	55	12.4	102	11.5
10	75.7	56	30.3	103	7.4
11	38.2	57	19.6	104	19.3
12	15.5	58	7	105	23.6
13	18.5	59	25.9	106	19.6
14	38.7	60	12.2	107	33.2
15	27.3	61	5.9	108	11
16	24.2	62	17.5	109	7.2
17	32	63	15.2	110	14.8
18	29.3	64	28	111	10.3
19	23.8	65	11.5	112	21.4
20	11	66	7	113	22.1
21	26.6	67	38.5	114	39.8
22	36.8	68	14.5	115	16.5
23	35.3	69	13.3	116	10.7
24	13.6	70	19.2	117	16.2
25	23.7	71	15.1	118	23.8
26	33.8	72	18.5	119	17.3
27	16.2	73	46.5	120	33.8
28	9.6	74	9.8	121	24.5
29	36.3	75	7.9	122	33.6
30	37.2	76	40.8	123	8.2
31	19.3	77	9.3	124	8.3
32	9.3	78	48.8	125	30.7
33	19.4	79	12.6	126	13.8
34	13.8	80	10	127	12
35	26.9	81	16	128	14.6
36	11.1	82	16.7	129	38.3
37	14.8	83	15.5	130	6.5
38	22.5	84	52.6	131	14.4
39	29.6	85		132	15.9
40	40.9	86		133	36.6
41	11.4	87	30.6	134	14.1
42	8.8	88	33.3	135	29
43	8.1	89	21.2	136	17.3
44	54	90	13.6	137	6.3
45	20.3	91	24.1	138	11.9
46	14.6	92	33.6	139	11.4
		93	24	140	6.6

第58図　III・SI 004竪穴遺構・SA 001柱列、SB 001掘立柱建物跡実測図

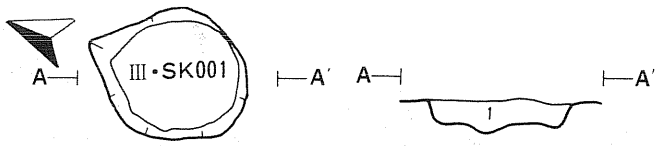


層	土色	備考
1	黒色 (10YR 2/1)	粘性強，白色粒子微量，黄褐色粒子多量混入
2	黒色 (10YR 1.7/1)	粘性強，黄褐色粒子多量混入
3	暗褐色 (10YR 3/3)	粘性弱
4	黄褐色 (10YR 5/6)	粘性弱，黒色土少量混入
5	にぶい黄褐色(10YR 5/4)	粘性弱，白色粒子，黒褐色土少量混入
6	黒色 (10YR 1.7/1)	黄褐色粒子多量混入
7	明黄褐色 (10YR 6/6)	粘性弱，中央に黒色土少量混入
8	灰黄褐色 (10YR 6/2)	白色粒子微量混入
9	灰黄褐色 (10YR 4/2)	粘性強，黒色土少量混入，粘土質

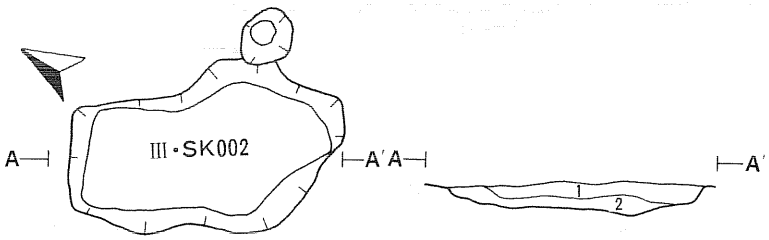
層	土色	備考
1	黒色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子多量混入
2	黒色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子少量，黄褐色小ブロック多量混入
3	黒褐色(10YR 3/2)	粘性強，白色粒子微量，黄褐色粒子少量混入
4	黒色(10YR 2/1)	粘性強，黄褐色小ブロック微量混入
5	黒色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子微量，黄褐色粒子微量混入
6	黒色(10YR 1.7/1)	粘性強，白色粒子微量混入
7	黒褐色(10YR 3/1)	粘性強，白色粒子微量，黄褐色粒子多量混入
8	黒褐色(10YR 3/2) ＋黄褐色(10YR 5/6)	粘性強
9	黒褐色(10YR 3/2)	粘性強，黄褐色粒子微量混入
10	黒色(10YR 1.7/1)	粘性強，黄褐色粒子微量混入
11	明黄褐色(10YR 6/6)	粘性弱，白色粒子，黒色土少量混入
12	灰黄褐色(10YR 4/2)	粘性弱，黄褐色粒子微量混入

第59図　III・SD 001～006溝実測図

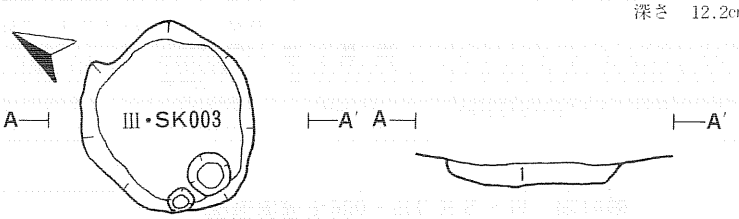
⑥土　壙（第60・61図、図版53）



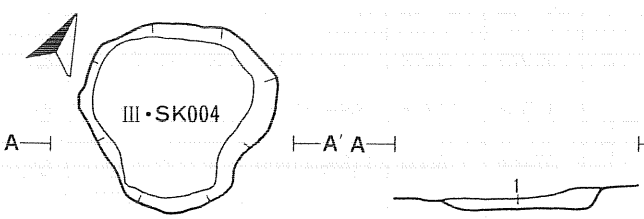
位　置　10—Dグリッド
層　位　1.黒褐色（10YR3/2）黄褐色小ブロック多量混入
法　量　径　90～70cm
　　深さ　15.8cm



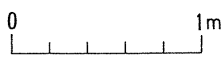
位　置　10—C、Dグリッド
層　位　1.黒色（10YR1.7/1）粘性強、黄褐色粒子少量混入
　　2.黒色（10YR2/1）粘性強、黄褐色粒子微量混入
法　量　径　162～92cm
　　深さ　12.2cm



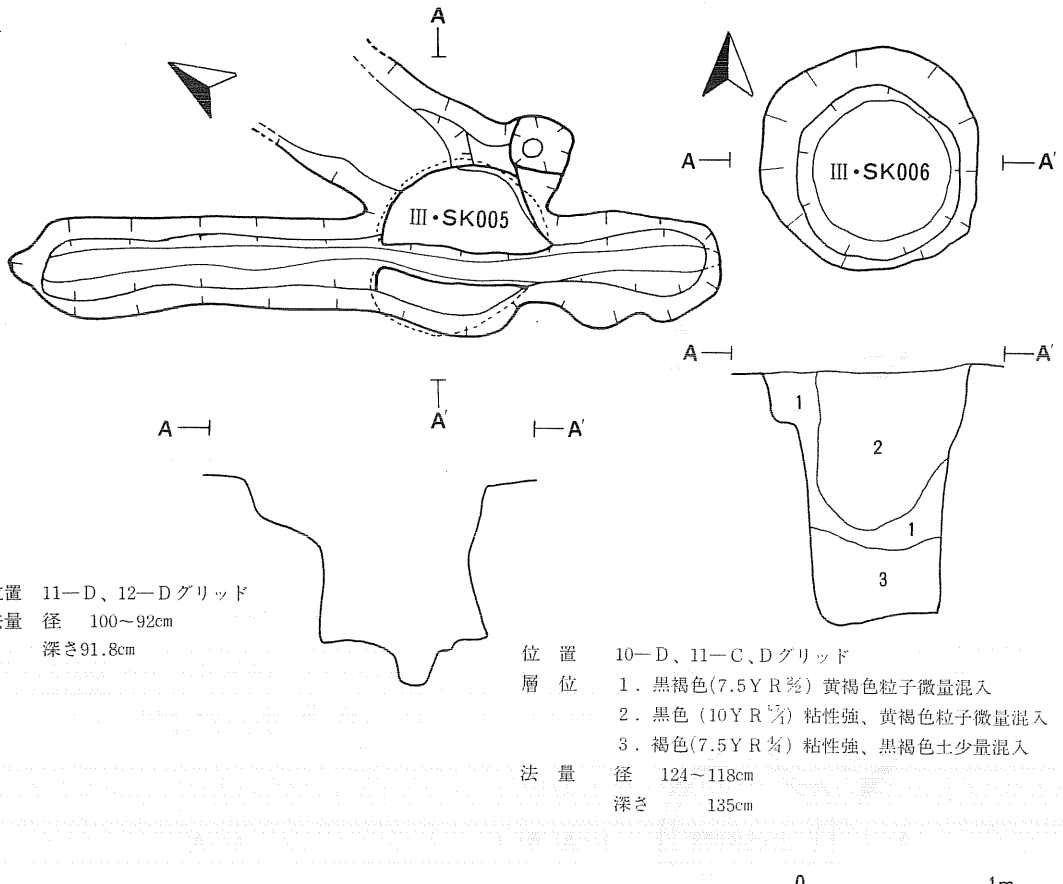
位　置　9Dグリッド
層　位　1.黒色（10YR2/1）粘性強、白色粒子、黄褐色粒子少量混入
法　量　径　102～82cm
　　深さ　13.5cm



位　置　9—Dグリッド
層　位　1.黒褐色（10YR3/2）黄褐色粒子少量混入
法　量　径　104～103cm
　　深さ　15.1cm



第60図　III・SK001～004土壙実測図



位置　11—D、12—Dグリッド
法量　径　100～92cm
　　深さ91.8cm

位　置　10—D、11—C、Dグリッド
層　位　1．黒褐色(7.5YR⅔) 黄褐色粒子微量混入
　　2．黒色 (10YR⅟₇) 粘性強、黄褐色粒子微量混入
　　3．褐色(7.5YR¾) 粘性強、黒褐色土少量混入
法　量　径　124～118cm
　　深さ　135cm

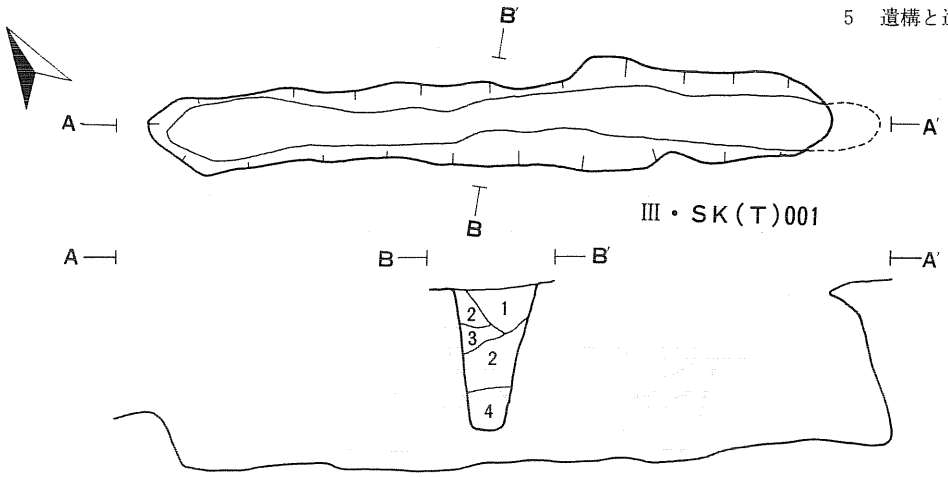
0　1m

第61図　III・SK 005・006土壙実測図

⑦　Tピット（第62・63・66図、図版53）

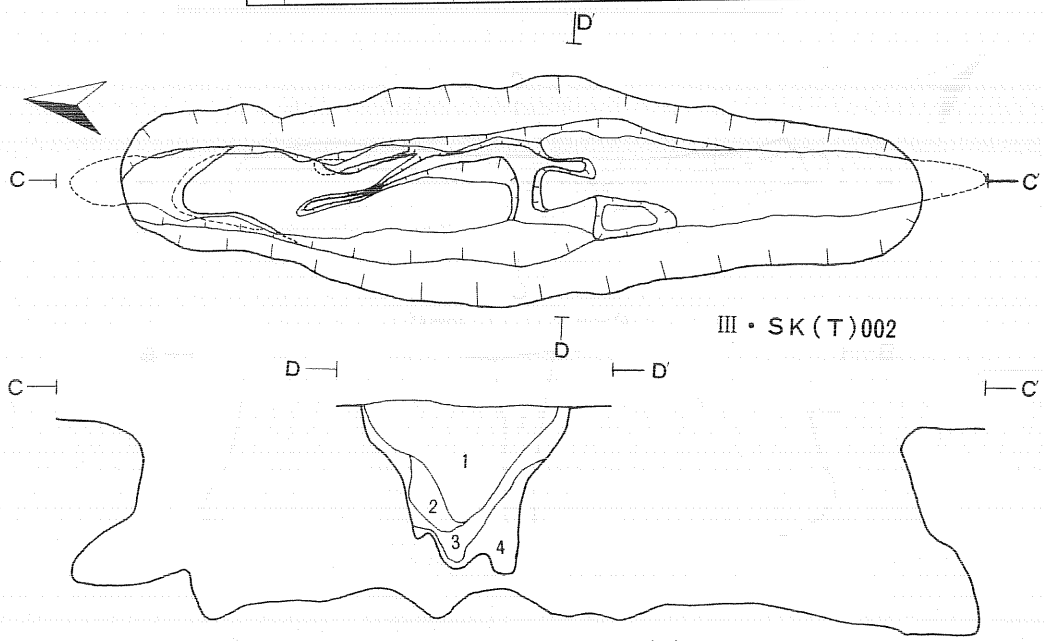
第6表　III・SK(T)Tピット観察表

遺構番号	検出位置	法量 長径	法量 短径	法量 深さ	長軸方位	遺物
SK(T)001	12—E, 12—F	360cm	61cm	73～ 74cm	N—72.5°—W	な　し
SK(T)002	13—B 12—C, 13—C	4 5cm	118cm	68～105cm	N—41°—W	な　し
SK(T)003	11—D, 12—D 12—E	374cm	65cm	115～116cm	N—72°—W	な　し
SK(T)004	9—H	258cm	100cm	52～ 73cm	N—43.5°—W	な　し
SK(T)005	11—C, 12—C 11—D, 12—D	345cm	175cm	130～155cm	N—84°—W	な　し
SK(T)006	13—D, 14—D	305cm	45cm	61～ 90cm	N—47°—W	な　し



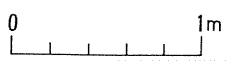
Ⅲ・SK(T) 001

層	土　色	備　考
1	黒褐色(10YR 3/2)	粘性強，黄褐色粒子多量黒色土少量混入
2	黄褐色(10YR 5/6)	粘性強，白色粒子，黒色土少量混入
3	黒褐色(10YR 3/2)	粘性強，黄褐色粒子少量混入
4	黒　色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子少量混入

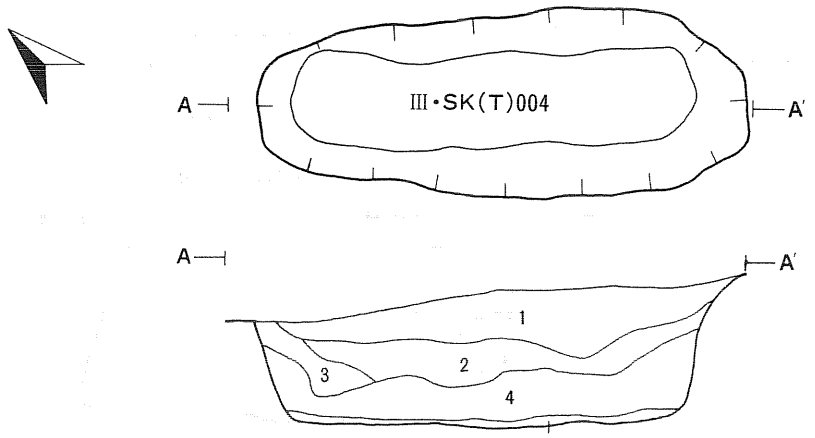


Ⅲ・SK(T)002

層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR 2/1)	粘性強，黄褐色粒子多量混入
3	黒　色(10YR 2/1)	粘性強，黄褐色粒子少量混入
3	黒褐色(10YR 2/2)	粘性強，黄褐色粒子多量混入
4	黄褐色(10YR 5/6)	粘性強，黒色土少量混入

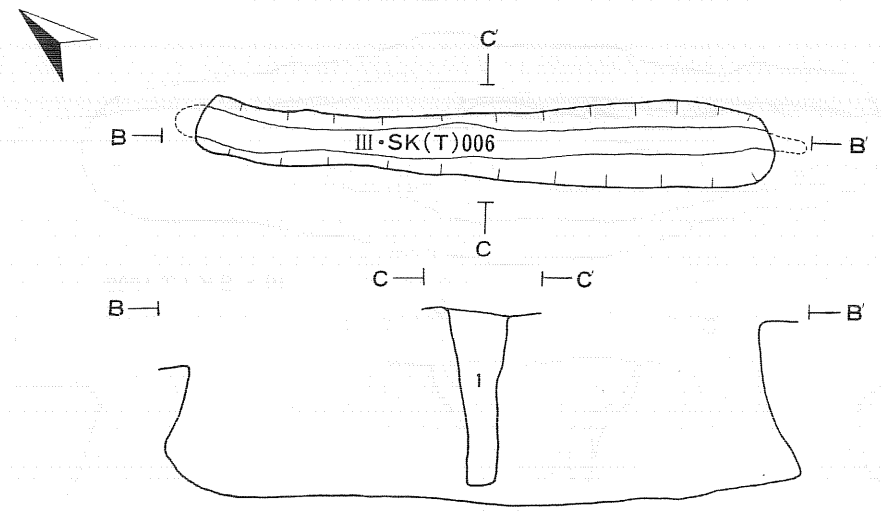


第62図　Ⅲ・SK(T)001・002Tピット実測図



Ⅲ・SK(T) 004

層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR 1/1)	粘性強，白色粒子少量，黄褐色粒子微量混入
2	黒　色(10YR 2/1)	粘性強，黄褐色粒子多量混入
3	黒褐色(10YR 3/2)	粘性強，黄褐色粒子多量混入
4	黄褐色(10YR 5/6)	粘性強，黒褐色土少量混入



Ⅲ・SK(T) 006

0　1m

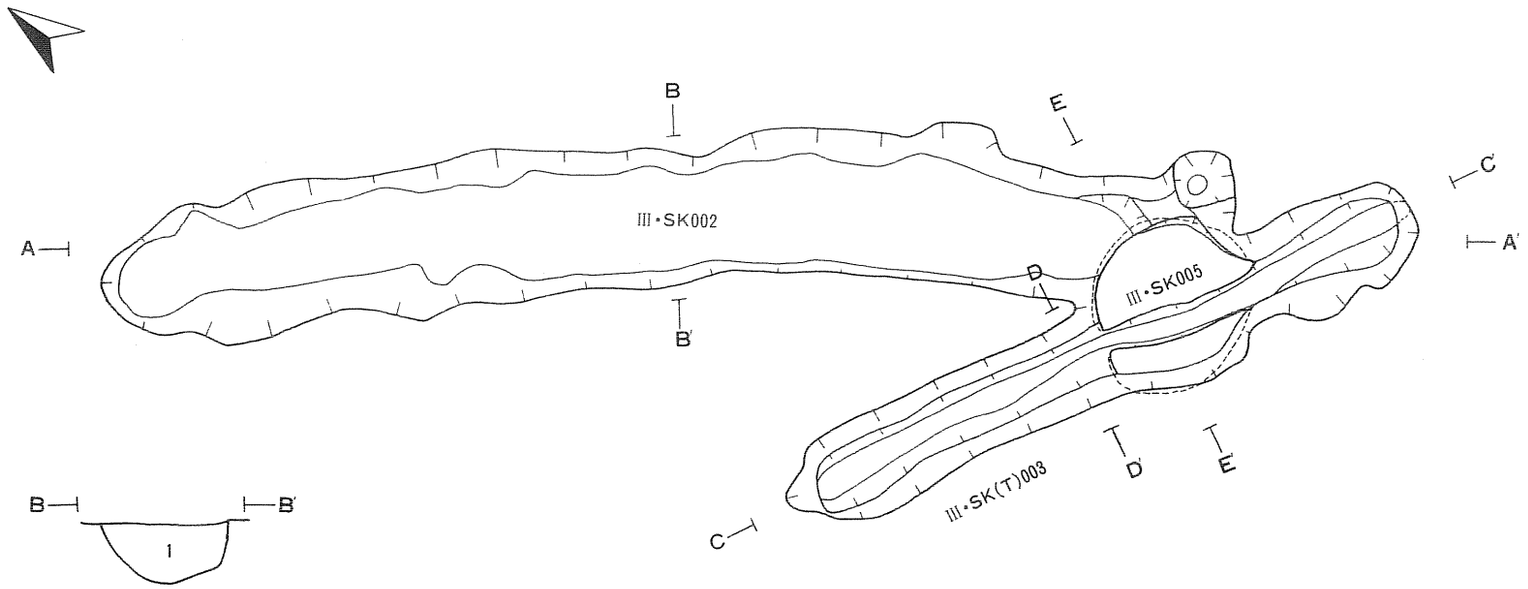
層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR 1/1)	粘性強，黄褐色粒子微量混入

第63図　Ⅲ・ＳＫ(Ｔ)004・006Ｔピット実測図

⑧　その他の遺構（第64・66・67図、図版54～56）

層	土色	備考
1	黒色（10YR 2/1）	明黄褐色粒子，白色粒子微量混入
2	黒色（10YR 3/1）	明黄褐色小ブロック微量混入
3	褐灰色（10YR 5/1）	粘性強
4	にぶい黄褐色（10YR 3/3）＋明黄褐色（10YR 6/6）	明黄褐色はブロック状
5	黒色（10YR 3/1）	明黄褐色小ブロック多量混入
6	灰黄褐色（10YR 5/2）	黒色土少量混入
7	黒褐色（10YR 3/2）	明黄褐色粒子，白色粒子微量混入
8	黒色（10YR 2/1）	粘性強，明黄褐色小ブロック微量混入
9	黄褐色（2.5Y 5/3）	粘性弱，砂質
10	黒色（10YR 3/1）	粘性強
11	黒褐色（2.5Y 3/2）	粘性弱，明黄褐色土多量混入
12	黒褐色（10YR 3/2）	
13	灰白色（10YR 7/1）	粘性弱，黒色土少量混入
14	暗褐色（10YR 3/3）	白色粒子，明黄褐色土，灰白色土微量混入
15	黒色（10YR 2/1）	白色粒子微量混入
16	灰白色（10YR 7/1）＋明黄褐色（10YR 6/6）	明黄褐色はブロック状
17	黒色（10YR 2/1）＋明黄褐色（10YR 6/6）	粘性強，明黄褐色は小ブロック状
18	黒色（10YR 2/1）	
19	暗褐色（10YR 3/3）	粘性強
20	黒色色（10YR 2/1）	粘性弱，白色粒子微量混入
21	黄褐色（10YR 5/6）	粘性弱，砂質でもろい
22	黄褐色（10YR 5/6）	粘性弱，大ブロック状
23	黒褐色（10YR 3/2）	粘性強，明黄褐色ブロック多量混入
24	黒褐色（7.5YR 3/2）	粘性強
25	黒色（10YR 2/1）	明黄褐色小ブロック多量混入
26	灰黄褐色（10YR 5/2）	粘性強
27	灰白色（10YR 7/1）	粘性弱，白砂
28	黒色（10YR 2/1）	粘性強，灰白色小ブロック多量混入
29	灰黄褐色（10YR 6/2）	明黄褐色土，灰白色土多量混入
30	暗褐色（10YR 3/3）	黄褐色土微量，灰黄褐色土多量混入
31	黒褐色（10YR 3/2）	粘性強，明黄褐色小ブロック少量混入
32	暗褐色（10YR 3/3）	灰白色粒子微量混入
33	暗褐色（10YR 3/3）	明黄褐色土微量，黒色土少量混入
34	にぶい黄橙色（10YR 7/4）	灰白色土多量混入
35	黄褐色（10YR 5/6）	ブロック状，黒色土少量混入
36	黒褐色（10YR 3/2）	明黄褐色土，白色粒子微量混入
37	にぶい黄褐色（10YR 5/4）	粘性強，灰白色土多量混入
38	黒色（10YR 2/1）	明黄褐色小ブロック，灰白色小ブロック微量混入
39	黒褐色（10YR 3/1）	明黄褐色土，灰白色土微量混入
40	黒褐色（10YR 3/1）	粘性強，明黄褐色小ブロック，灰白色小ブロック微量混入
41	黒褐色（10YR 3/2）	粘性強，明黄褐色ブロック少量混入
42	灰黄褐色（10YR 5/2）	粘性強，軽石微量混入
43	灰黄褐色（10YR 5/2）	粘性強，白色粒子微量混入
44	にぶい黄橙色（10YR 7/4）	粘性強，軽石微量混入
45	黒褐色（10YR 3/2）	灰黄褐色土，白色粒子少量混入

第64図　Ⅲ・ＳＸ001実測図



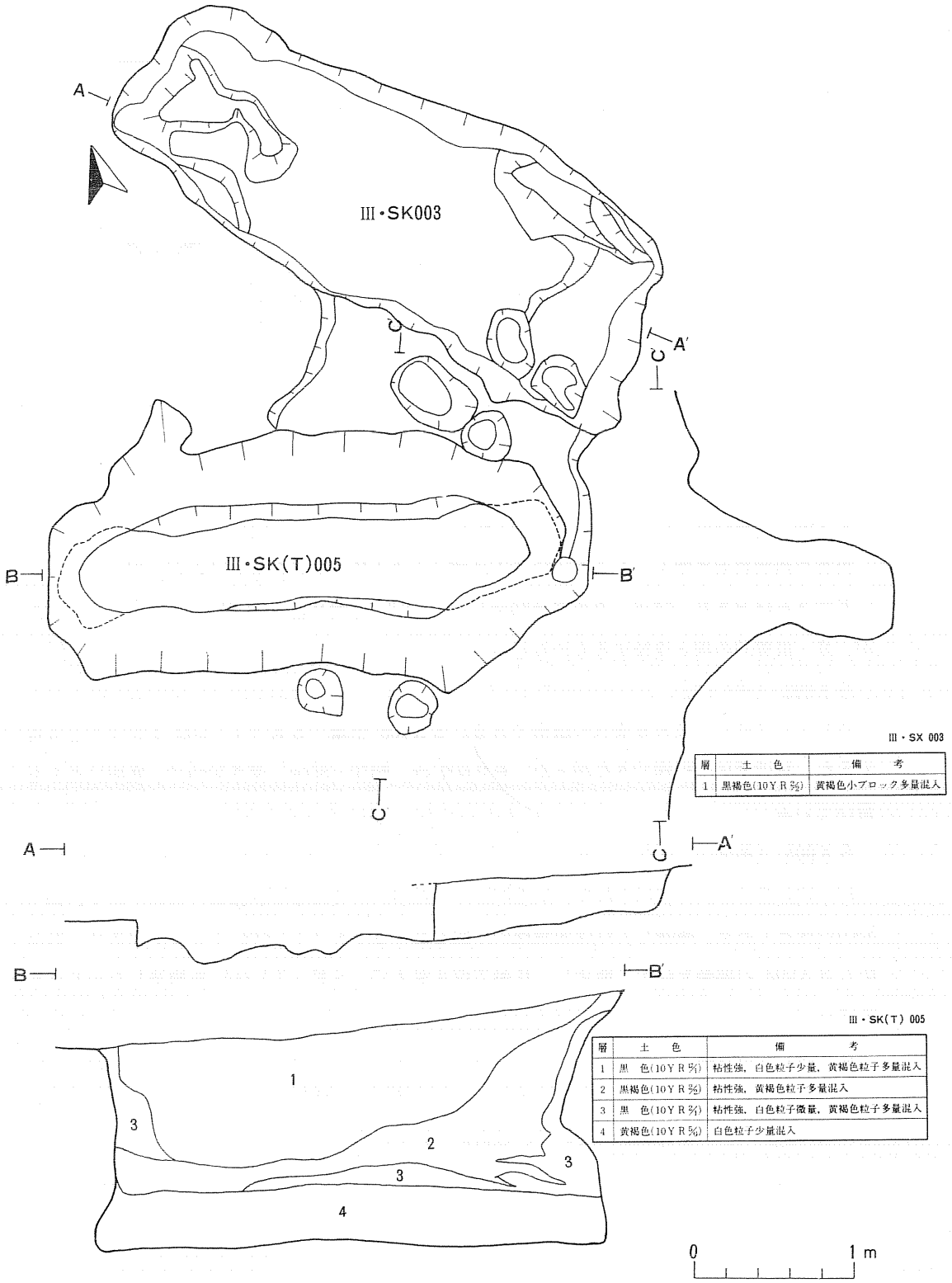
III・SX 002

層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR 2/1)	粘性強，黄褐色小ブロック多量混入

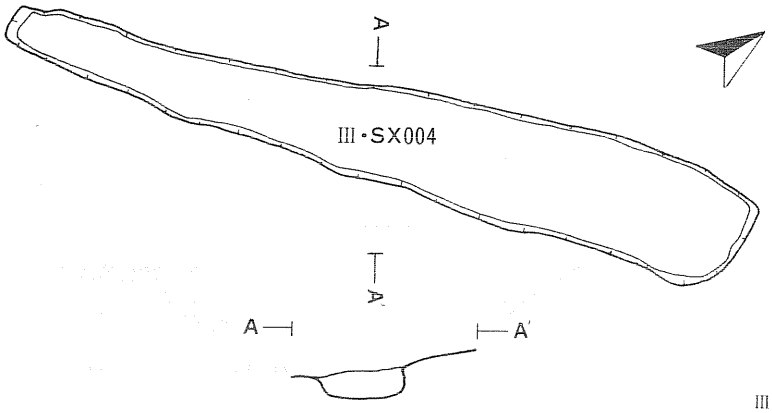
III・SK(T) 003

層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR 1/1)	粘性強，白色粒子微量混入
2	黄褐色(10YR 5/6)	白色粒子微量混入
3	黒褐色(10YR 2/3)	白色粒子黄褐色粒子微量混入

第65図　III・SK 005土壙・SK(T)003TピットSX 002実測図



第66図　Ⅲ・ＳＫ(Ｔ)005Ｔピット・ＳＸ 003実測図



III・SX 004

層	土　色	備　考
1	黒　色(10YR 2/1)	粘性強，白色粒子多量，褐色土少量混入

0　1 m

第67図　III・SX 004その他の遺構実測図

SX001（第64図、図版54・55）

III郭の西側斜面を穿ち、その中に地山土のブロックを投げ込んだものである。掘り込みは深い所で2mほどあり、ブロックの径は50cm～100cmである。掘り込みの西端は調査できなかったが、II・III郭間の堀と連続するものらしい。

SX002（第65図）

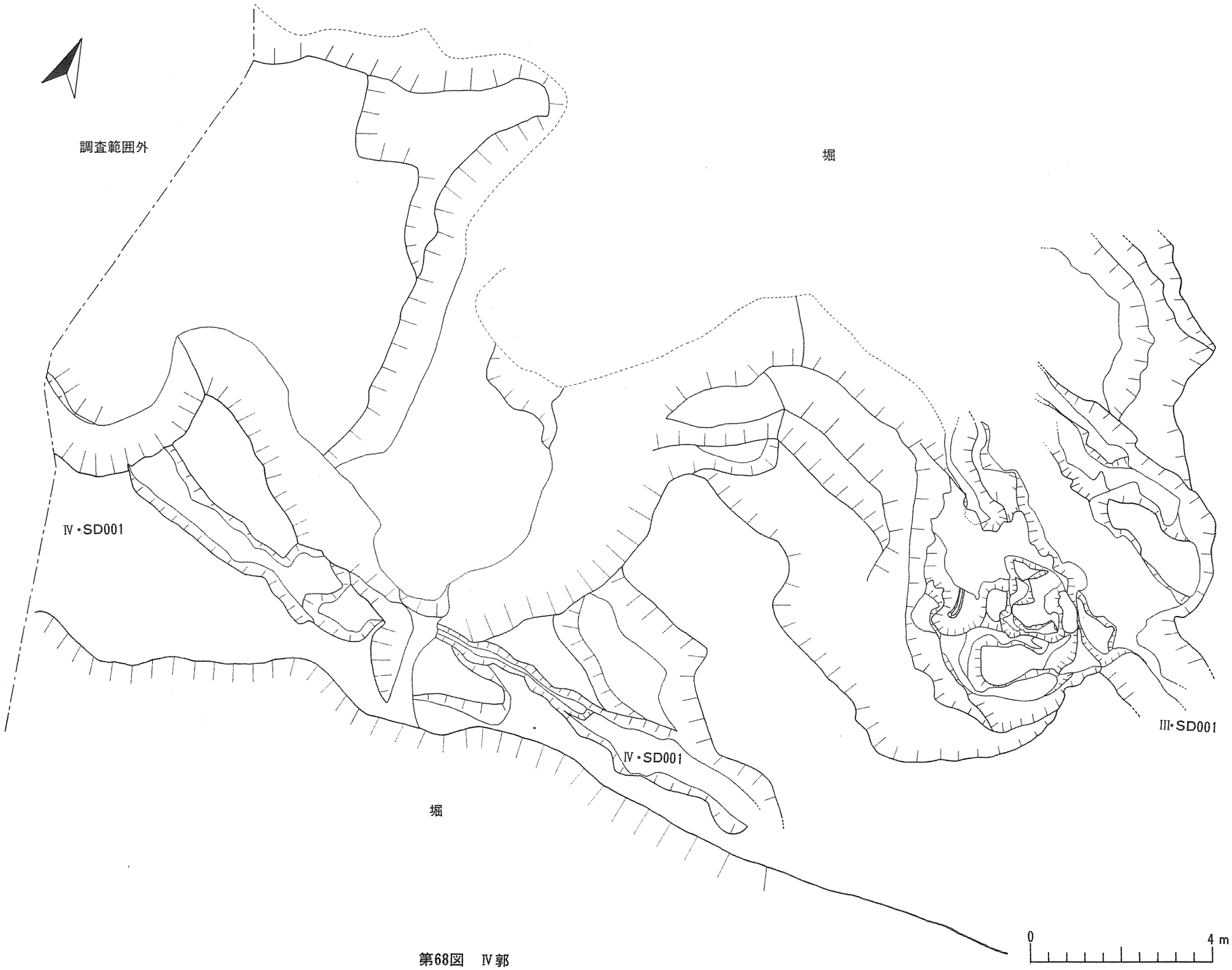
12D・Eグリッドにある溝状の遺構である。SK005 土壙、SK（T）003 Tピットと重複するが、新旧関係は把握できなかった。長さ600 cm、幅70～80cm、深さ30cmで、底面は丸みを帯びている。

SX003（第66図、図版55・56）

12・13Dグリッドに検出された。長さ375 cm、幅140 cmであるが、底面に凹凸があり、20～35cmの深さである。隣接してほぼ同規模の平面を有するSK（T）005 Tピットがあり、あたかもSX003 の構築を途中で断念し、長軸方位を変えて、SK（T）005 を構築したかの感を受ける。

SK004（第67図）

13Cグリッド内にあり、その北端はSI003 とほぼ接し、確認面も同一面である。長さ405 cm、最大幅60cm、深さ10～15cmを測り、底面は平坦である。



第68図　Ⅳ郭

（４）　Ⅳ郭検出遺構

①　溝　　跡

ＳＤ001 溝（第68図、図版51）

Ⅳ郭はⅢ郭側のごく一部が調査範囲に入ったのみであるが、Ⅳ郭東南端の郭縁辺に沿って検出された。長さ約８ｍを測るが、幅は狭い部分で30cm、広い所で150 cmを測り、深さも部分的に差があり、30～50cmである。柱痕跡は認められなかった。

（５）　トレンチ

Ａトレンチ（第69図）

Ⅰ郭上39Ⅰグリッド杭、Ⅰ郭下の48Ｋグリッド杭を結ぶラインを設定し、このライン上のⅠ郭東端からトレンチを設け、トレンチ東側で土層断面図を作成した。郭斜面からそのまま連続して堀へ連なるが、堀の北西側に地山の削り出しによる土塁が見られる。堀内の堆積土はシラスとシラス混じりの黒褐色土であるため、崩壊が激しく底部はボーリング探査によったが、堀底と土塁上との高底差は450 cm、Ⅰ郭上の平場との高底差は1700cmを測る。Ⅰ郭西側は土取場となりⅤ郭が破壊されているが、Ａトレンチの西にある法面には、Ａトレンチで確認された堀が現われており、その方向からⅤ郭の北西端へと向かうらしいことがうかがえる（図版60）。

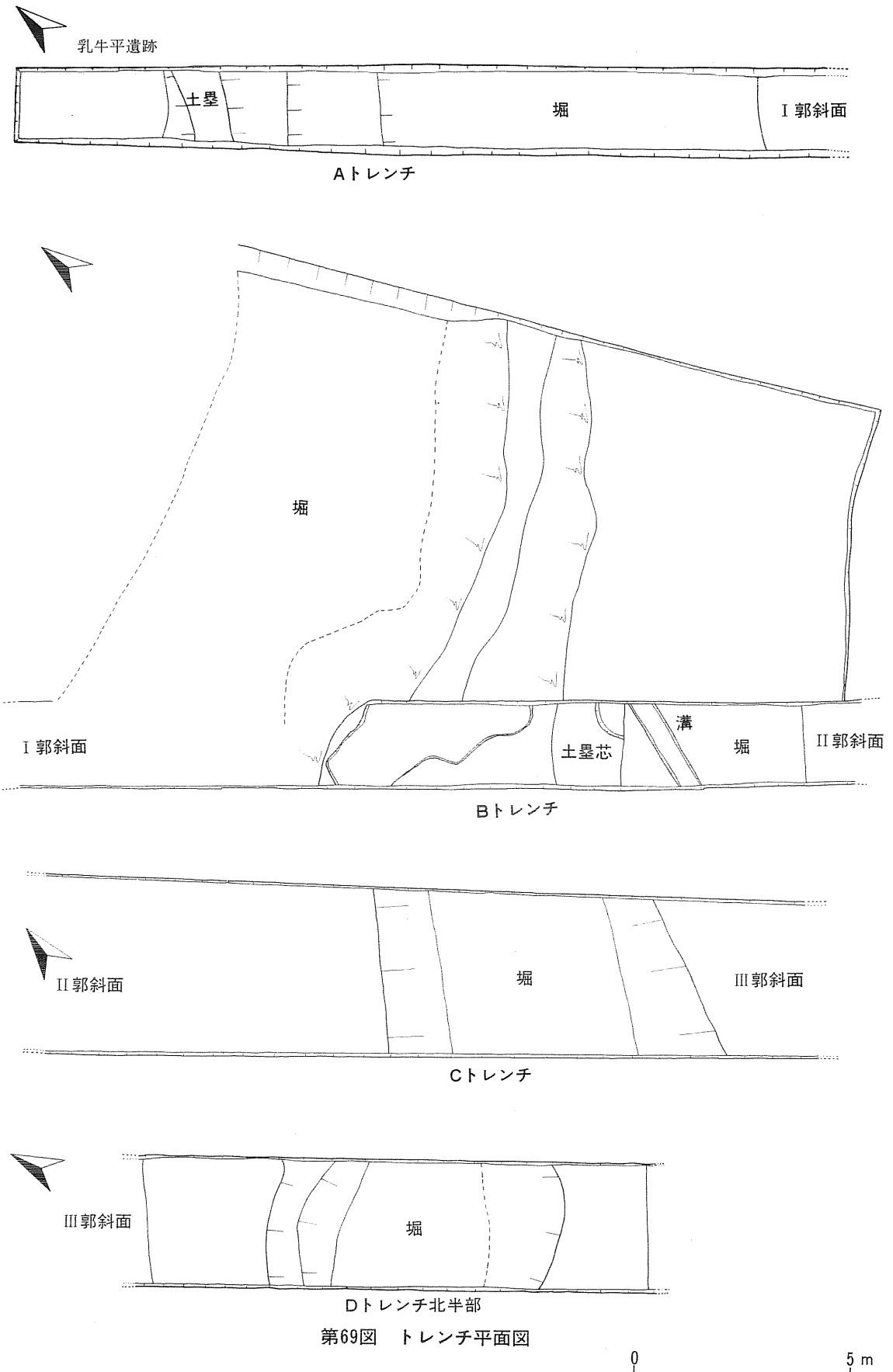
また、Ⅰ郭斜面下方西側の法面には、法面に沿って堀内の土層断面が現われており、これがⅠ郭とⅤ郭間の堀であると観察される。

Ｂトレンチ（第70図）

Ⅰ郭上33Ｌグリッド杭とⅡ郭上25Ｊグリッドを結ぶラインにトレンチを設定し、トレンチ西側で土層断面図を作成した。トレンチ内には、２本の堀とその中間に土塁が認められた。Ⅰ郭側の堀は、これも土層の崩壊が激しく、底部の確認はボーリング探査によったが、ほぼ平坦で堀底の幅約400cm、現地表からⅠ郭、Ⅱ郭平場との高底差は、それぞれ1170cm、1550cmを測る。Ⅱ郭側の堀は堀底が平坦で、幅440cm、現地表から260cm、Ⅱ郭平場との高底差は1120cmを測る。堀底には幅60cm、深さ80cmで南北方向に走る溝があり、おそらく土塁の下を通ってⅠ郭側の堀に通じる排水溝であろうと思われる。Ⅰ郭側堀とⅡ郭側堀との間には土塁が存在する。Ⅰ郭側堀に連なる箇所には、郭上方に見られる黄褐色シラスのブロックを用いて盛り土部を作り、これと地山削り出しによる芯との間に、にぶい黄褐色シラスと灰黄褐色シラスを用いた版築による土塁である。土塁上とⅠ郭側堀底部との高低差は6800cm、Ⅱ郭側堀との高低差は2400cmで、芯南端からⅠ郭堀への傾斜面までの幅は700 cmを測る。

Ｃトレンチ（第71図）

Ⅱ郭上19Ｈグリッド杭とⅢ郭上の13Ｆグリッド杭を結ぶラインでトレンチを設定し、その西

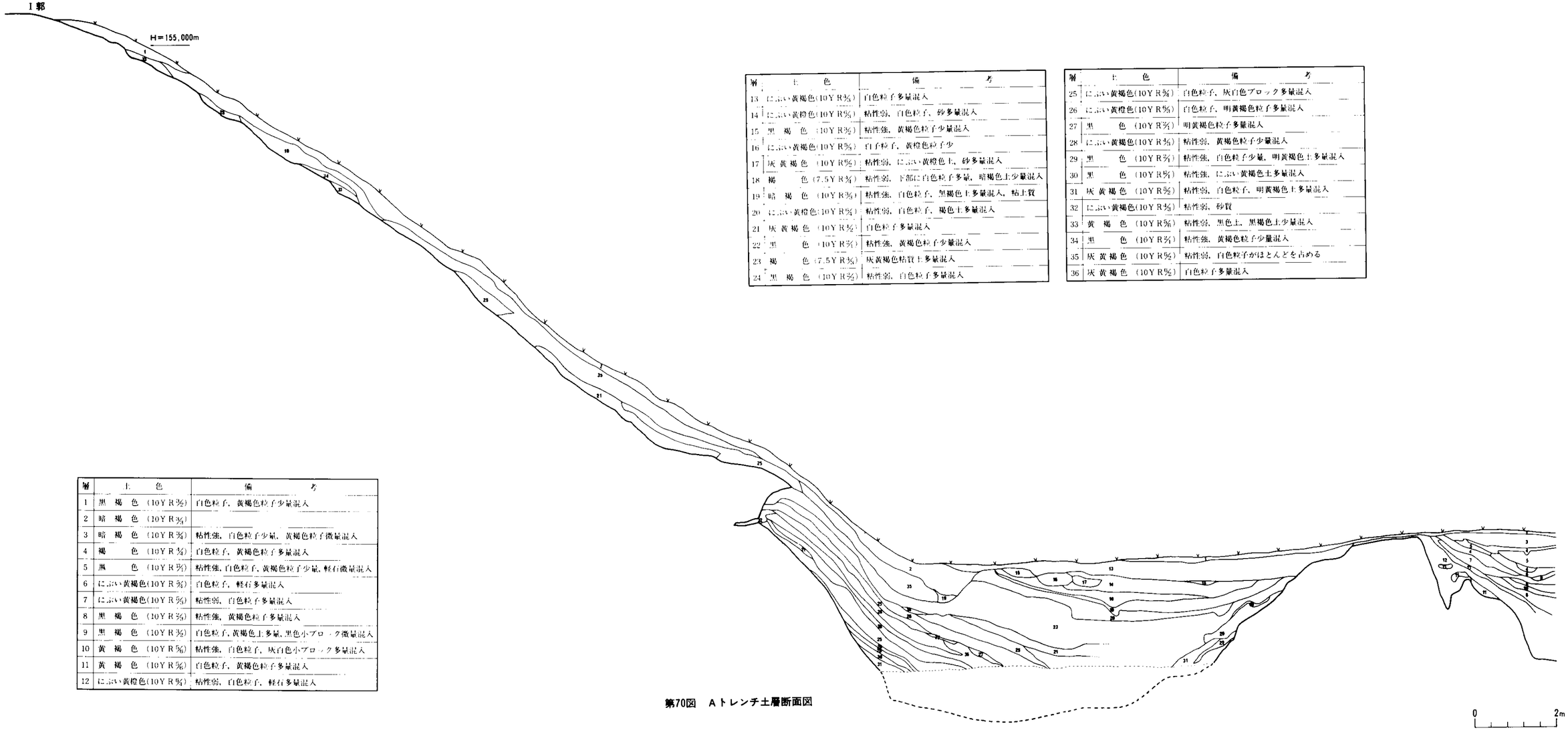


第69図　トレンチ平面図

乳牛平遺跡

I 郭

H=155.000m



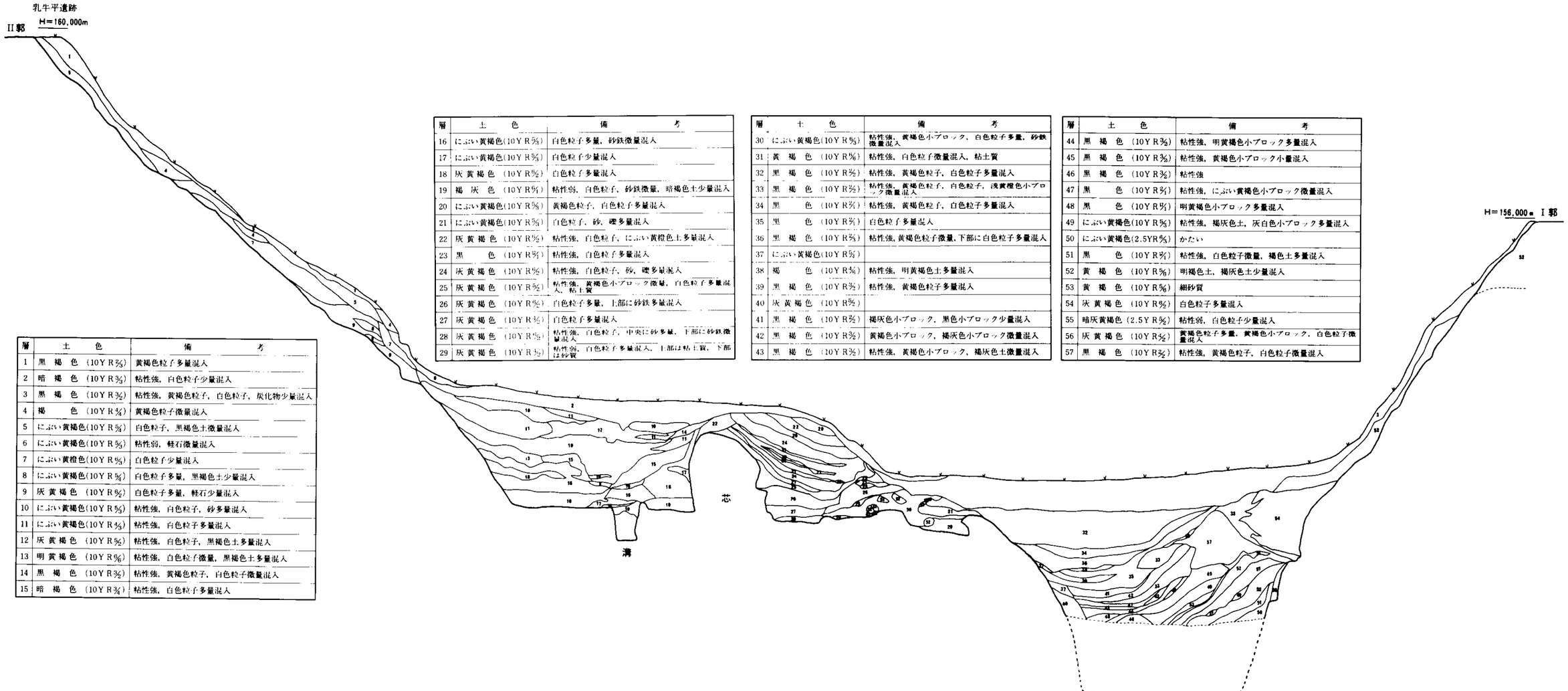
層	土色	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	白色粒子，黄褐色粒子少量混入
2	暗褐色（10YR3/4）	
3	暗褐色（10YR3/4）	粘性強，白色粒子少量，黄褐色粒子微量混入
4	褐色（10YR4/4）	白色粒子，黄褐色粒子多量混入
5	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子，黄褐色粒子少量，軽石微量混入
6	にぶい黄褐色（10YR5/4）	白色粒子，軽石多量混入
7	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘性弱，白色粒子多量混入
8	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子多量混入
9	黒褐色（10YR3/2）	白色粒子，黄褐色土多量，黒色小ブロック微量混入
10	黄褐色（10YR5/6）	粘性強，白色粒子，灰白色小ブロック多量混入
11	黄褐色（10YR5/6）	白色粒子，黄褐色粒子多量混入
12	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘性弱，白色粒子，軽石多量混入

層	土色	備考
13	にぶい黄褐色（10YR5/4）	白色粒子多量混入
14	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘性弱，白色粒子，砂多量混入
15	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子少量混入
16	にぶい黄褐色（10YR5/3）	白子粒子，黄橙色粒子少
17	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性弱，にぶい黄橙色土，砂多量混入
18	褐色（7.5YR4/4）	粘性弱，下部に白色粒子多量，暗褐色土少量混入
19	暗褐色（10YR3/4）	粘性強，白色粒子，黒褐色土多量混入，粘土質
20	にぶい黄橙色（10YR6/4）	粘性弱，白色粒子，褐色土多量混入
21	灰黄褐色（10YR4/2）	白色粒子多量混入
22	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子少量混入
23	褐色（7.5YR4/4）	灰黄褐色粘質土多量混入
24	黒褐色（10YR3/2）	粘性弱，白色粒子多量混入

層	土色	備考
25	にぶい黄褐色（10YR5/4）	白色粒子，灰白色ブロック多量混入
26	にぶい黄橙色（10YR6/4）	白色粒子，明黄褐色粒子多量混入
27	黒色（10YR2/1）	明黄褐色粒子多量混入
28	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘性弱，黄褐色粒子少量混入
29	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子少量，明黄褐色土多量混入
30	黒色（10YR2/1）	粘性強，にぶい黄褐色土多量混入
31	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性弱，白色粒子，明黄褐色土多量混入
32	にぶい黄褐色（10YR5/3）	粘性弱，砂質
33	黄褐色（10YR5/6）	粘性弱，黒色土，黒褐色土少量混入
34	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子少量混入
35	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性弱，白色粒子がほとんどを占める
36	灰黄褐色（10YR5/2）	白色粒子多量混入

0 2m

第70図　Aトレンチ土層断面図



層	土色	備考
1	黒褐色（10YR3/2）	黄褐色粒子多量混入
2	暗褐色（10YR3/3）	粘性強，白色粒子少量混入
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子，炭化物少量混入
4	褐色（10YR4/4）	黄褐色粒子微量混入
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	白色粒子，黒褐色土微量混入
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘性弱，軽石微量混入
7	にぶい黄橙色(10YR6/3)	白色粒子少量混入
8	にぶい黄褐色(10YR5/4)	白色粒子多量，黒褐色土少量混入
9	灰黄褐色（10YR6/2）	白色粒子多量，軽石少量混入
10	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘性強，白色粒子，砂多量混入
11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘性強，白色粒子多量混入
12	灰黄褐色（10YR6/2）	粘性強，白色粒子，黒褐色土多量混入
13	明黄褐色（10YR6/6）	粘性強，白色粒子微量，黒褐色土多量混入
14	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子微量混入
15	暗褐色（10YR3/4）	粘性強，白色粒子多量混入

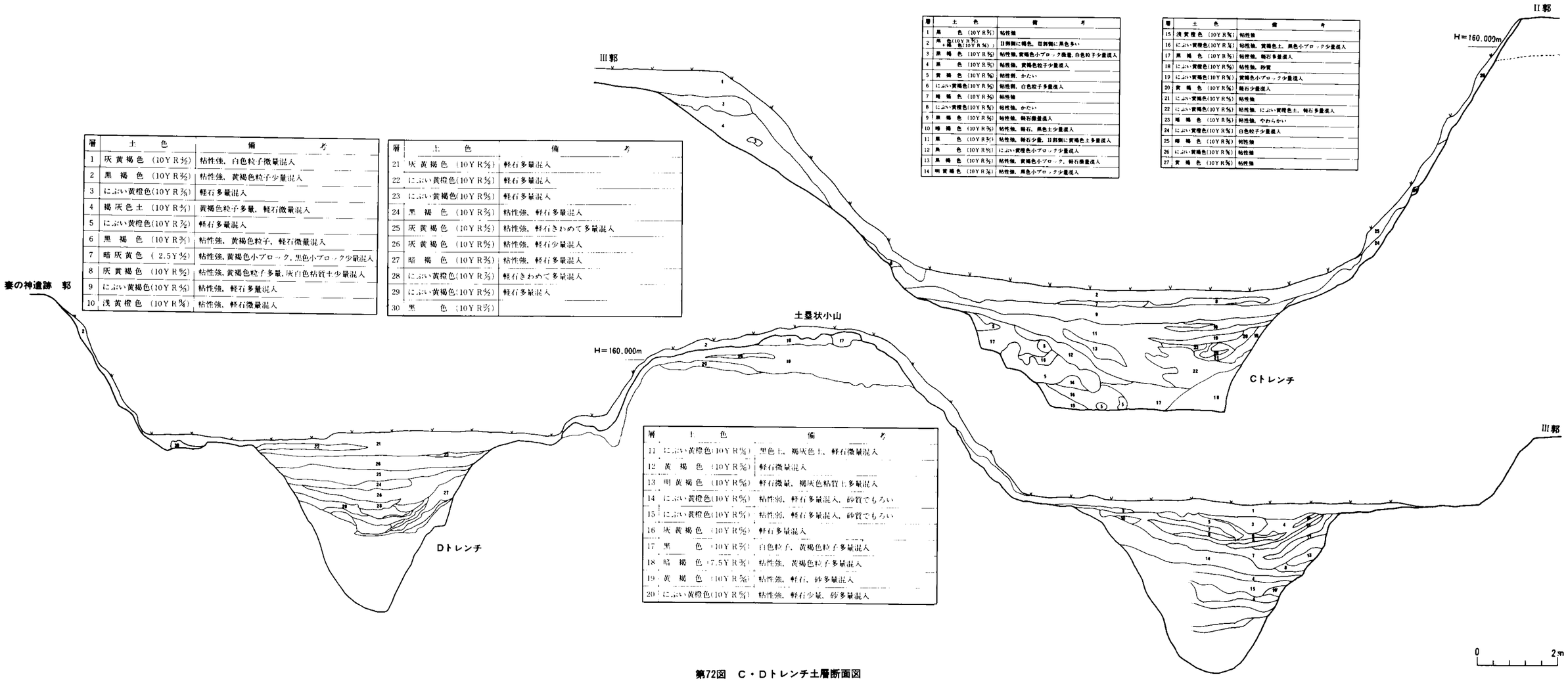
層	土色	備考
16	にぶい黄褐色(10YR5/3)	白色粒子多量，砂鉄微量混入
17	にぶい黄褐色(10YR5/4)	白色粒子少量混入
18	灰黄褐色（10YR5/2）	白色粒子多量混入
19	褐灰色（10YR5/1）	粘性弱，白色粒子，砂鉄微量，暗褐色土少量混入
20	にぶい黄褐色(10YR5/3)	黄褐色粒子，白色粒子多量混入
21	にぶい黄褐色(10YR5/3)	白色粒子，砂，礫多量混入
22	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，白色粒子，にぶい黄橙色土多量混入
23	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子多量混入
24	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，白色粒子，砂，礫多量混入
25	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，黄褐色小ブロック微量，白色粒子多量混入，粘土質
26	灰黄褐色（10YR5/2）	白色粒子多量，上部に砂鉄多量混入
27	灰黄褐色（10YR5/2）	白色粒子多量混入
28	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，白色粒子，中央に砂多量，下部に砂鉄微量混入
29	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性弱，白色粒子多量混入，上部は粘土質，下部は砂質

層	土色	備考
30	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘性強，黄褐色小ブロック，白色粒子多量，砂鉄微量混入
31	黄褐色（10YR5/6）	粘性強，白色粒子微量混入，粘土質
32	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子多量混入
33	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子，浅黄橙色小ブロック微量混入
34	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子多量混入
35	黒色（10YR2/1）	白色粒子多量混入
36	黒褐色（10YR3/3）	粘性強，黄褐色粒子微量，下部に白色粒子多量混入
37	にぶい黄褐色(10YR5/3)	
38	褐色（10YR4/4）	粘性強，明黄褐色土多量混入
39	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子多量混入
40	灰黄褐色（10YR5/2）	
41	黒褐色（10YR3/2）	褐灰色小ブロック，黒色小ブロック少量混入
42	黒褐色（10YR3/2）	黄褐色小ブロック，褐灰色小ブロック微量混入
43	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色小ブロック，褐灰色土微量混入

層	土色	備考
44	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，明黄褐色小ブロック多量混入
45	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色小ブロック小量混入
46	黒褐色（10YR3/2）	粘性強
47	黒色（10YR2/1）	粘性強，にぶい黄褐色小ブロック微量混入
48	黒色（10YR2/1）	明黄褐色小ブロック多量混入
49	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘性強，褐灰色土，灰白色小ブロック多量混入
50	にぶい黄褐色(2.5YR5/3)	かたい
51	黒色（10YR2/1）	粘性強，白色粒子微量，褐色土多量混入
52	黄褐色（10YR5/6）	明褐色土，褐灰色土少量混入
53	黄褐色（10YR5/6）	細砂質
54	灰黄褐色（10YR5/2）	白色粒子多量混入
55	暗灰黄褐色（2.5YR5/2）	粘性弱，白色粒子少量混入
56	灰黄褐色（10YR5/2）	黄褐色粒子多量，黄褐色小ブロック，白色粒子微量混入
57	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子，白色粒子微量混入

0 2m

第71図　Bトレンチ土層断面図



層	土色	備考
1	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，白色粒子微量混入
2	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色粒子少量混入
3	にぶい黄橙色(10YR7/4)	軽石多量混入
4	褐灰色土（10YR4/1）	黄褐色粒子多量，軽石微量混入
5	にぶい黄橙色(10YR7/2)	軽石多量混入
6	黒褐色（10YR3/1）	粘性強，黄褐色粒子，軽石微量混入
7	暗灰黄色（2.5Y5/2）	粘性強，黄褐色小ブロック，黒色小ブロック少量混入
8	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，黄褐色粒子多量，灰白色粘質土少量混入
9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘性強，軽石多量混入
10	浅黄橙色（10YR8/4）	粘性強，軽石微量混入

層	土色	備考
21	灰黄褐色（10YR5/2）	軽石多量混入
22	にぶい黄橙色(10YR5/4)	軽石多量混入
23	にぶい黄褐色(10YR5/4)	軽石多量混入
24	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，軽石多量混入
25	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，軽石きわめて多量混入
26	灰黄褐色（10YR5/2）	粘性強，軽石少量混入
27	暗褐色（10YR3/3）	粘性強，軽石多量混入
28	にぶい黄橙色(10YR7/3)	軽石きわめて多量混入
29	にぶい黄褐色(10YR5/4)	軽石多量混入
30	黒色（10YR2/1）	

層	土色	備考
1	黒色（10YR2/1）	粘性強
2	黒色（10YR2/1）＋暗褐色（10YR3/4）	II郭側に褐色，III郭側に黒色多い
3	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色小ブロック微量，白色粒子少量混入
4	黒色（10YR2/1）	粘性強，黄褐色粒子少量混入
5	黄褐色（10YR5/6）	粘性弱，かたい
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘性弱，白色粒子多量混入
7	暗褐色（10YR3/3）	粘性強
8	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘性強，かたい
9	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，軽石微量混入
10	明褐色（10YR5/6）	粘性強，軽石，黒色土少量混入
11	黒色（10YR3/1）	粘性強，軽石少量，II郭側に黄褐色土多量混入
12	黒色（10YR3/1）	にぶい黄橙色小ブロック少量混入
13	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，黄褐色小ブロック，軽石微量混入
14	明黄褐色（10YR7/6）	粘性強，黒色小ブロック少量混入

層	土色	備考
15	浅黄橙色（10YR8/4）	粘性強
16	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘性強，黄褐色土，黒色小ブロック少量混入
17	黒褐色（10YR3/2）	粘性強，軽石多量混入
18	にぶい黄橙色(10YR6/3)	粘性強，砂質
19	にぶい黄褐色(10YR5/4)	黄褐色小ブロック少量混入
20	黄褐色（10YR5/6）	軽石少量混入
21	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘性強
22	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘性強，にぶい黄橙色土，軽石多量混入
23	暗褐色（10YR3/3）	粘性強，やわらかい
24	にぶい黄橙色(10YR6/4)	白色粒子少量混入
25	暗褐色（10YR3/4）	粘性強
26	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘性強
27	黄褐色（10YR5/6）	粘性強

層	土色	備考
11	にぶい黄橙色(10YR6/4)	黒色土，褐灰色土，軽石微量混入
12	黄褐色（10YR5/6）	軽石微量混入
13	明黄褐色（10YR6/6）	軽石微量，褐灰色粘質土多量混入
14	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘性弱，軽石多量混入，砂質でもろい
15	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘性弱，軽石多量混入，砂質でもろい
16	灰黄褐色（10YR5/2）	軽石多量混入
17	黒色（10YR2/1）	白色粒子，黄褐色粒子多量混入
18	暗褐色（7.5YR3/3）	粘性強，黄褐色粒子多量混入
19	黄褐色（10YR5/6）	粘性強，軽石，砂多量混入
20	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘性強，軽石少量，砂多量混入

第72図　C・Dトレンチ土層断面図

側で土層断面を観察した。堀は底面が平坦で、幅 430cm、現地表から 300cmの深さを測る。II II郭平場との高低差は 980cm、III郭平場との高低差は約 850cmを測る。

Dトレンチ（第71図）

III郭上９Ｇグリッド杭からＧラインに沿って、妻の神III遺跡の平場へ向けてトレンチを設定し、その東側で土層断面図を作成した。III郭と妻の神III遺跡との間には、土塁状の小山があることが調査前から明らかであったが、この両側に堀が検出された。いずれも郭と土塁状小山との間に平坦面を有し、そこからＶ字状の薬研堀を掘り込んでいる。III郭側の堀は、現地表からの深さが 420cm、III郭との高低差は約 600cm、妻の神III遺跡側の堀は、現地表からの深さ440cm、妻の神III遺跡の郭との高低差は 780cmを測る。

以上のＡ～Ｄトレンチの調査結果と郭周辺の地形観察から、各郭の周辺には堀が巡り、要所に土塁の存在することがほぼ明らかである。

(6) 遺　物

ａ．土　器（第73～79図、図版69～71）

出土した土器はごく少量であるが、以下の９類に分類され、時間的に大きな幅を有している。

第１類（１～11）：表裏縄文が施され、多くは胎土に繊維を含み、尖底らしいものも見られる。縄文時代早期長七谷地第III群か早稲田６類に位置付けられる。

第２類（12・13）：第１類よりも器厚が厚く、突帯、絡条体圧痕の見られるもの。縄文時代前期、円筒下層ａ式かと考える。

第３類（13～33・46）：沈線により流動的なモチーフの描かれたもので、磨消縄文の施されたものを含む。縄文時代後期、十腰内Ｉ式か。

第４類（34）：沈曲線と磨消縄文の見られる土器であるが、第３類のモチーフとは異なり、口縁部も小波状となって、第３類とは区別されるもの。晩期の新しい時期のものか。

第５類（35～44）：縄文あるいは撚糸文のみのもの。

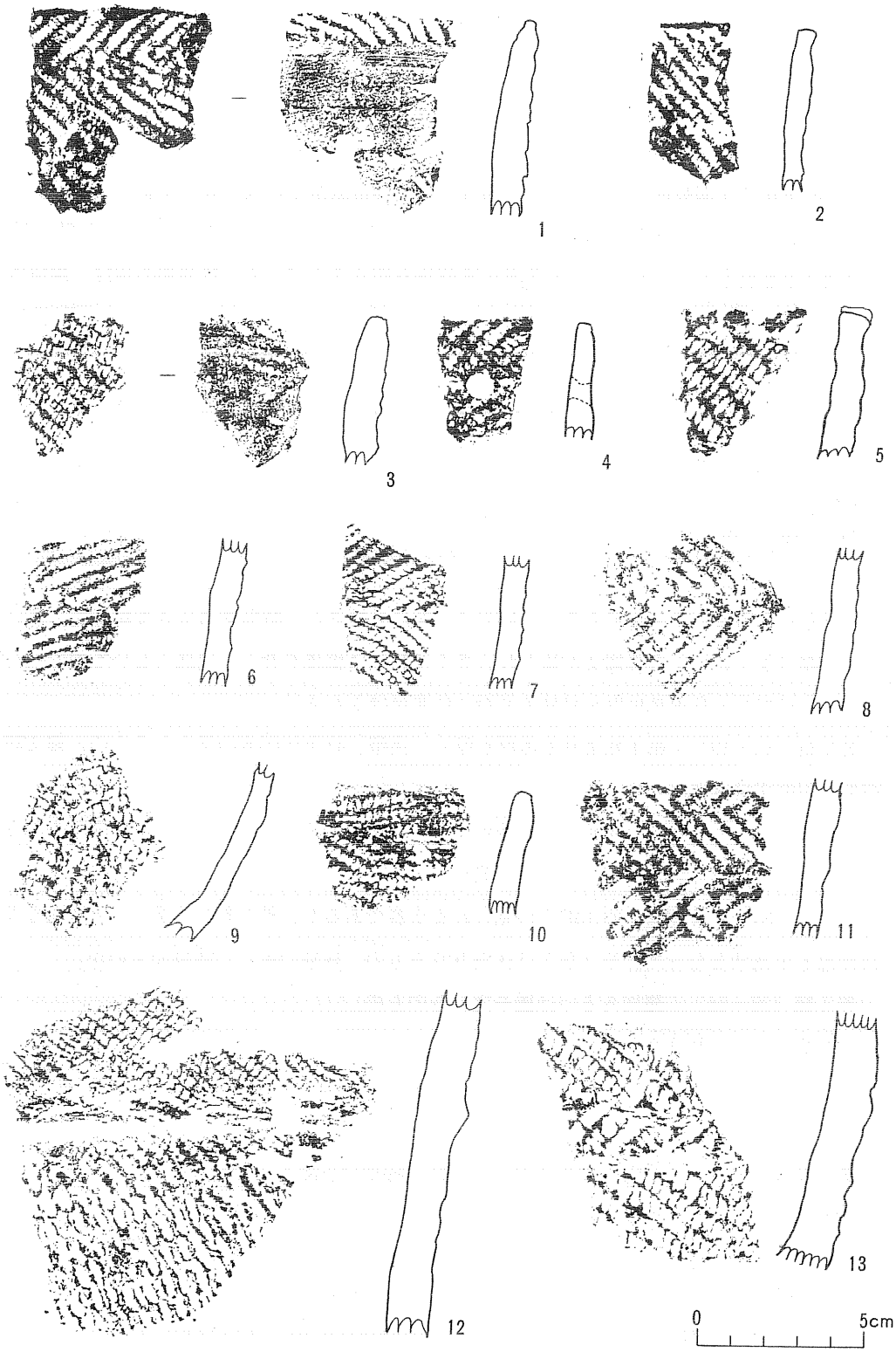
第６類（45）：無文のもの。

第７類（47～50）：縄文、平行沈線文、鋸歯状文の施されたもの。47、50は弥生時代の田舎館式であろう。

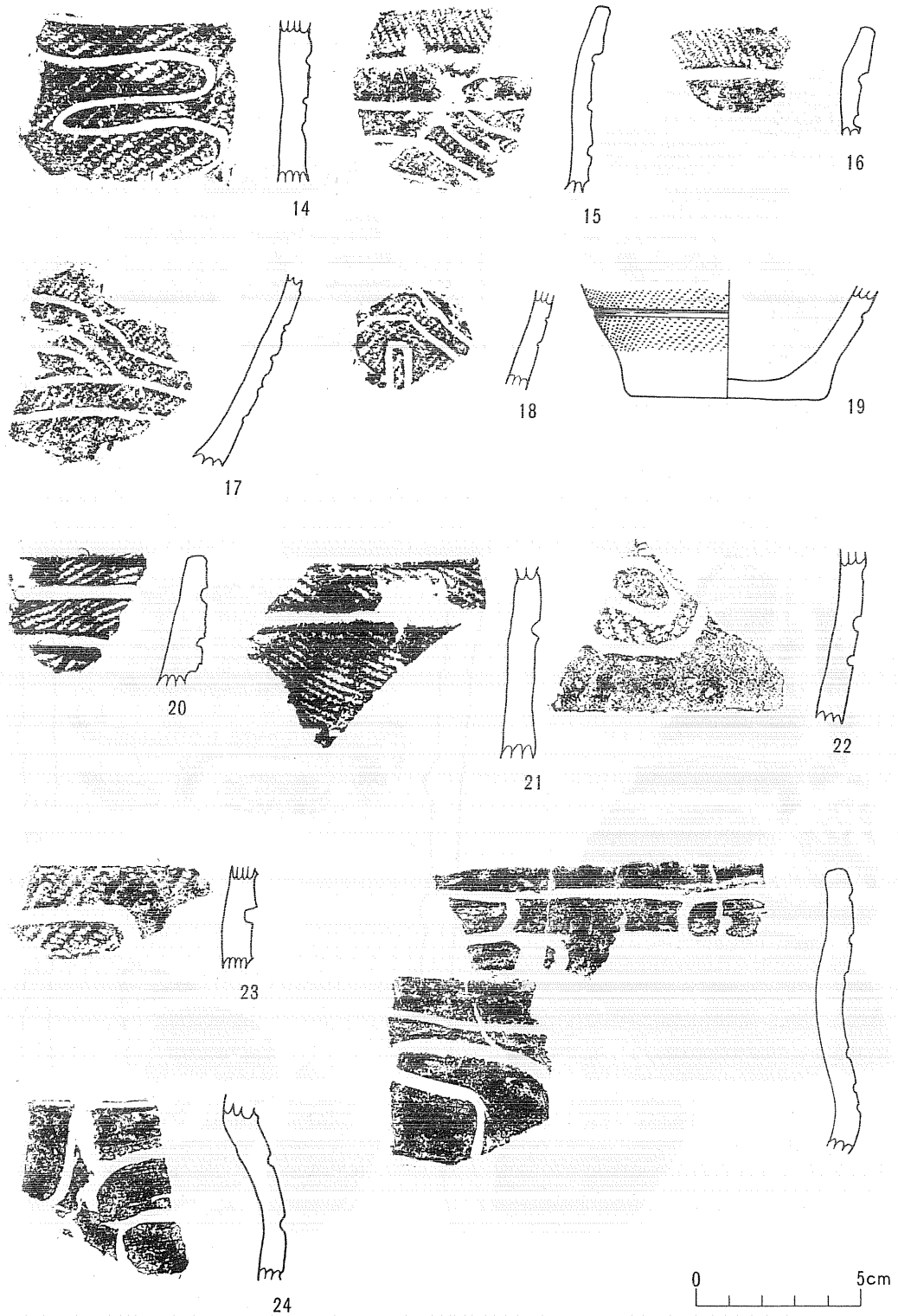
第８類（51～58）：：撚糸文のみのもの。弥生時代の小坂Ｘ式である。

第９類（59～64）：中世陶器。

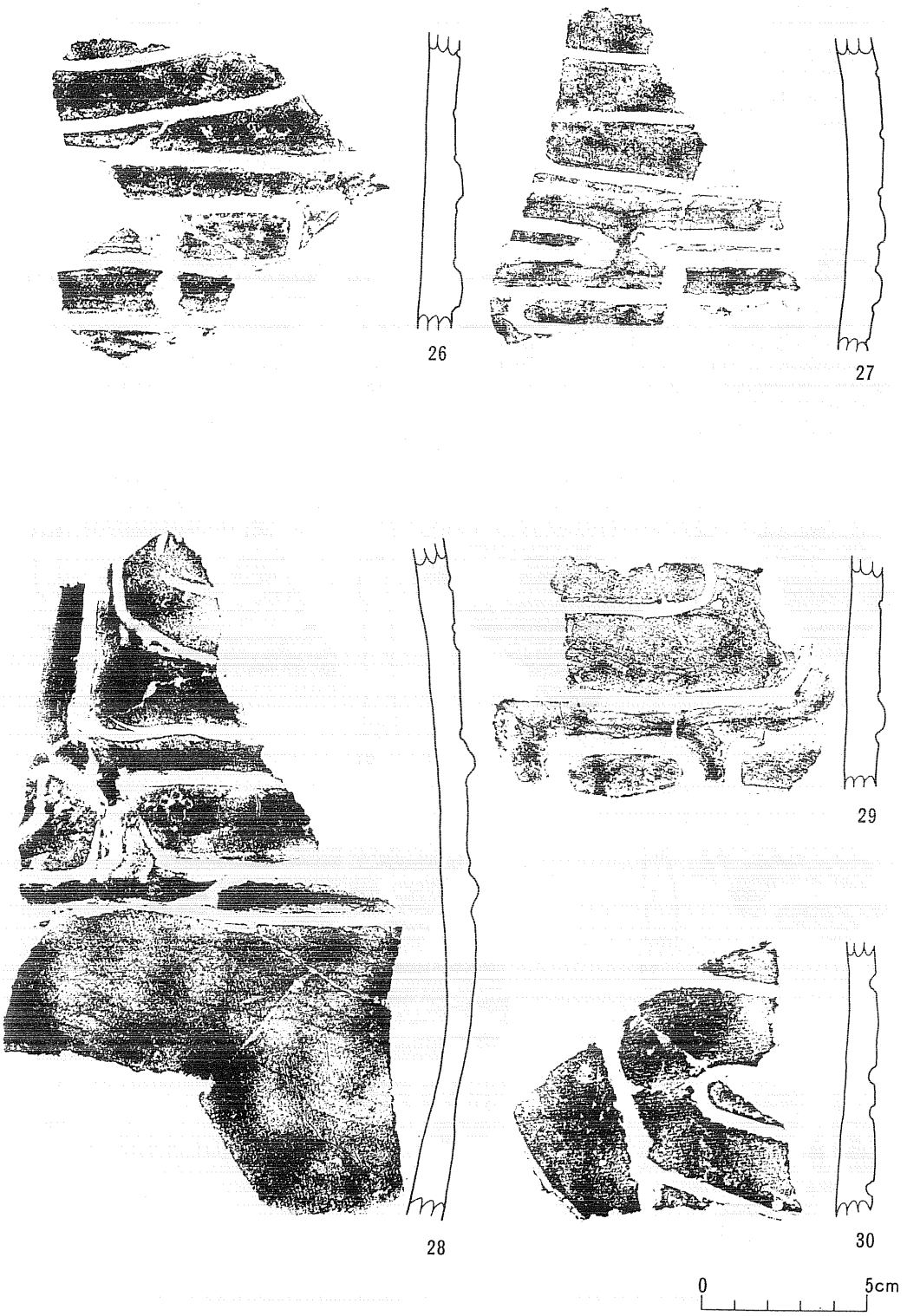
以上のように館造築以前の縄文時代早期末葉、前期初頭、後期前葉、晩期前葉、弥生時代中・後期にわたる土器が出土しているが、館に伴う中世陶器はわずか６片にすぎない。



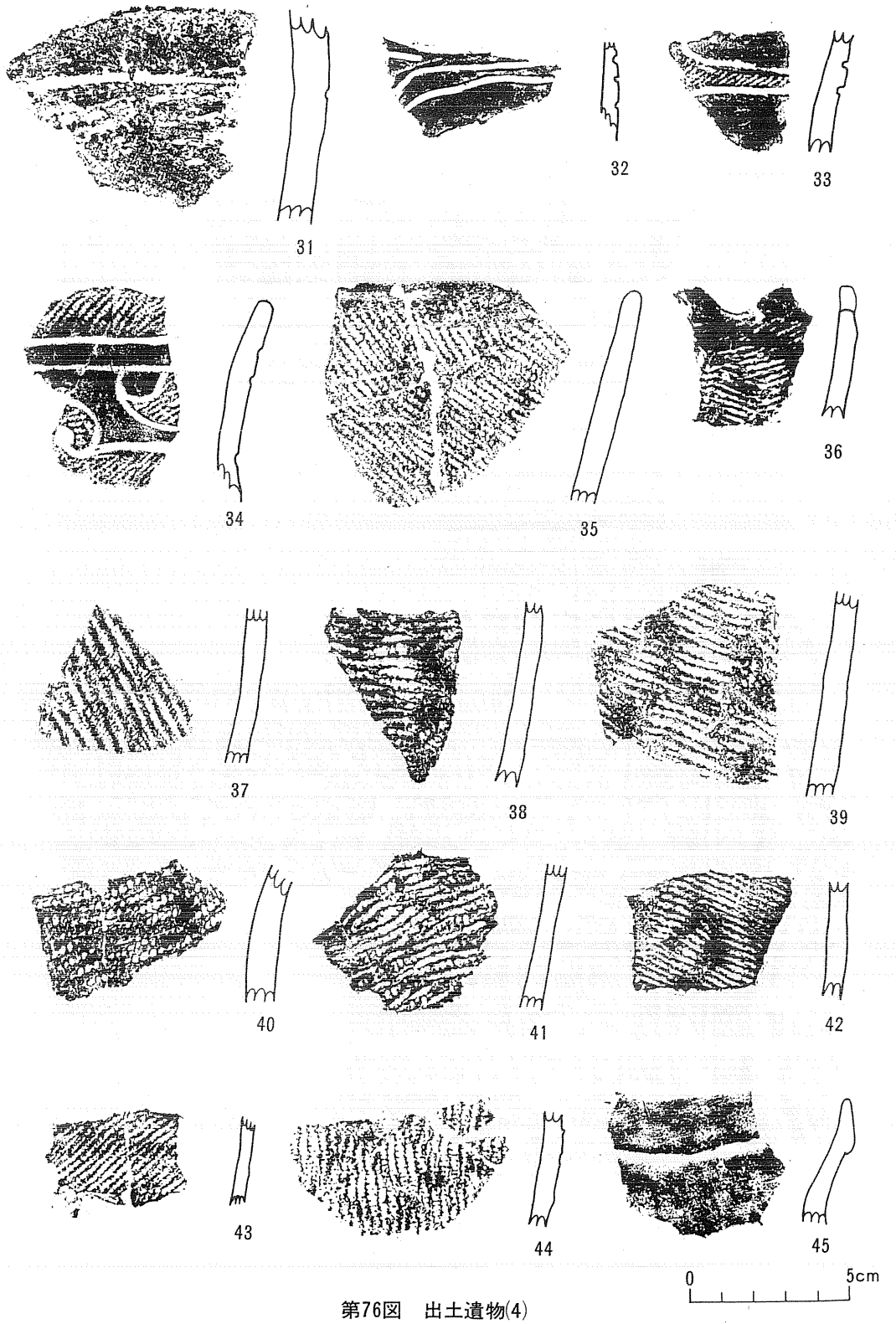
第73図　出土遺物(1)



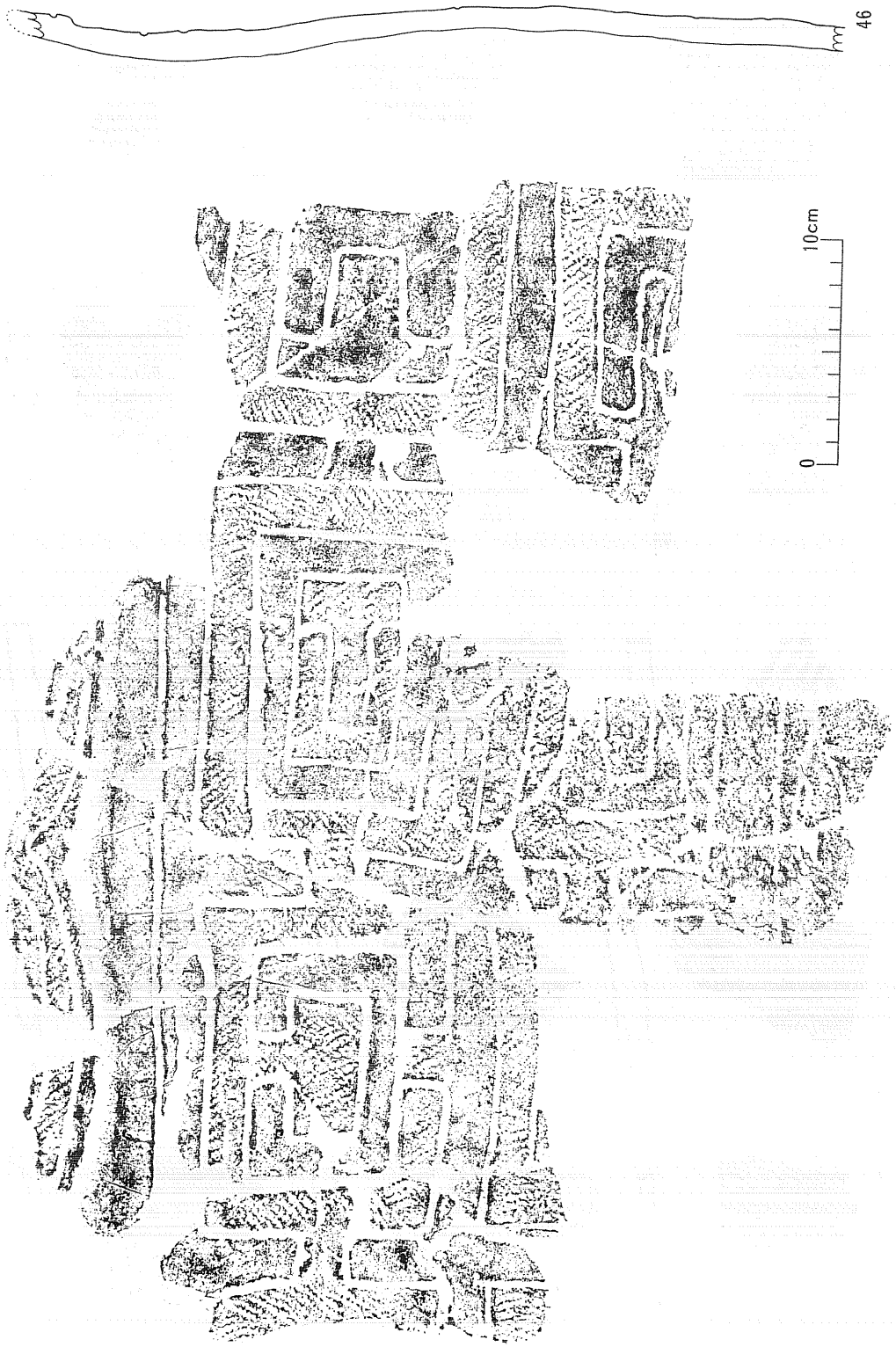
第74図　出土遺物(2)



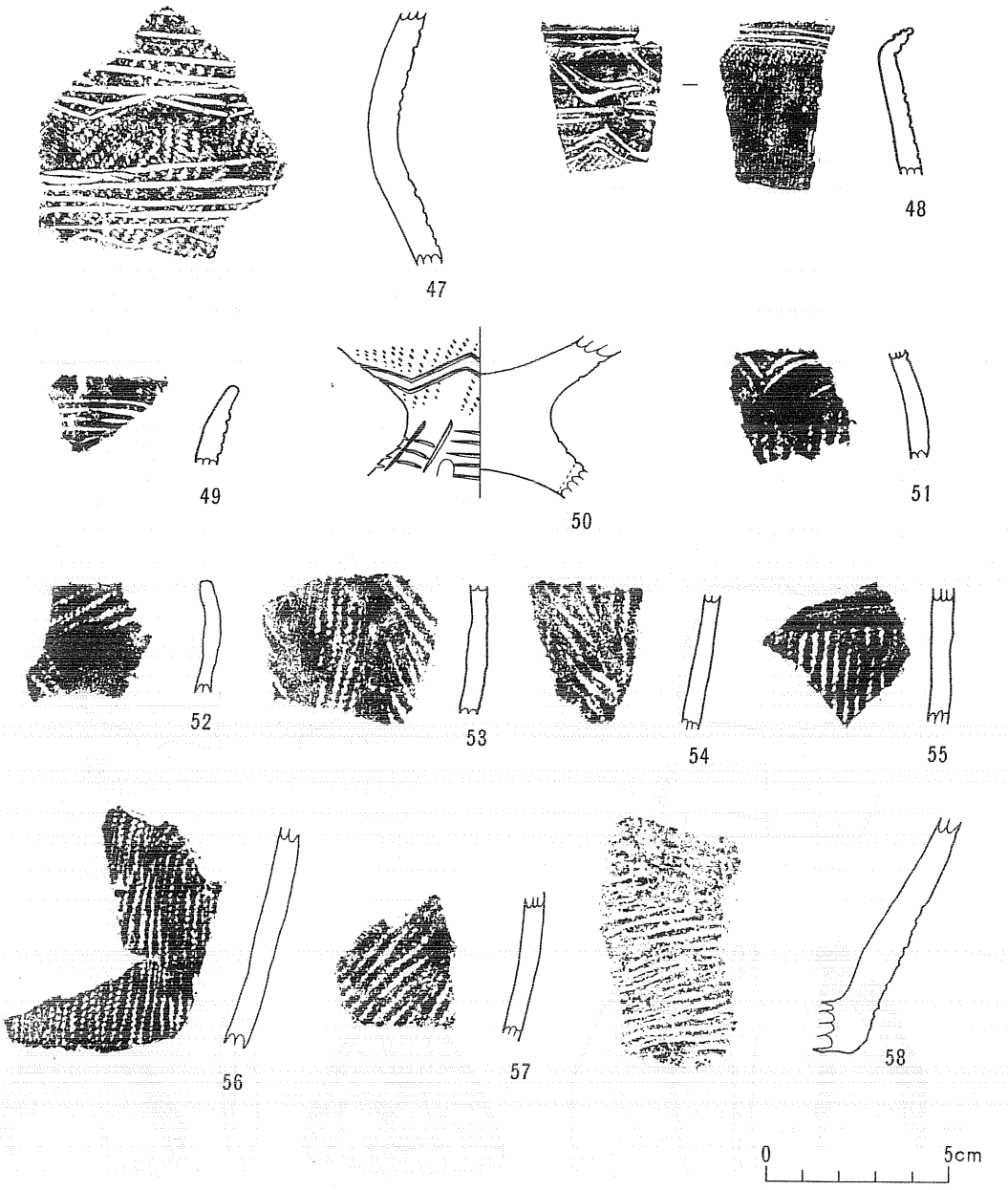
第75図　出土遺物(3)



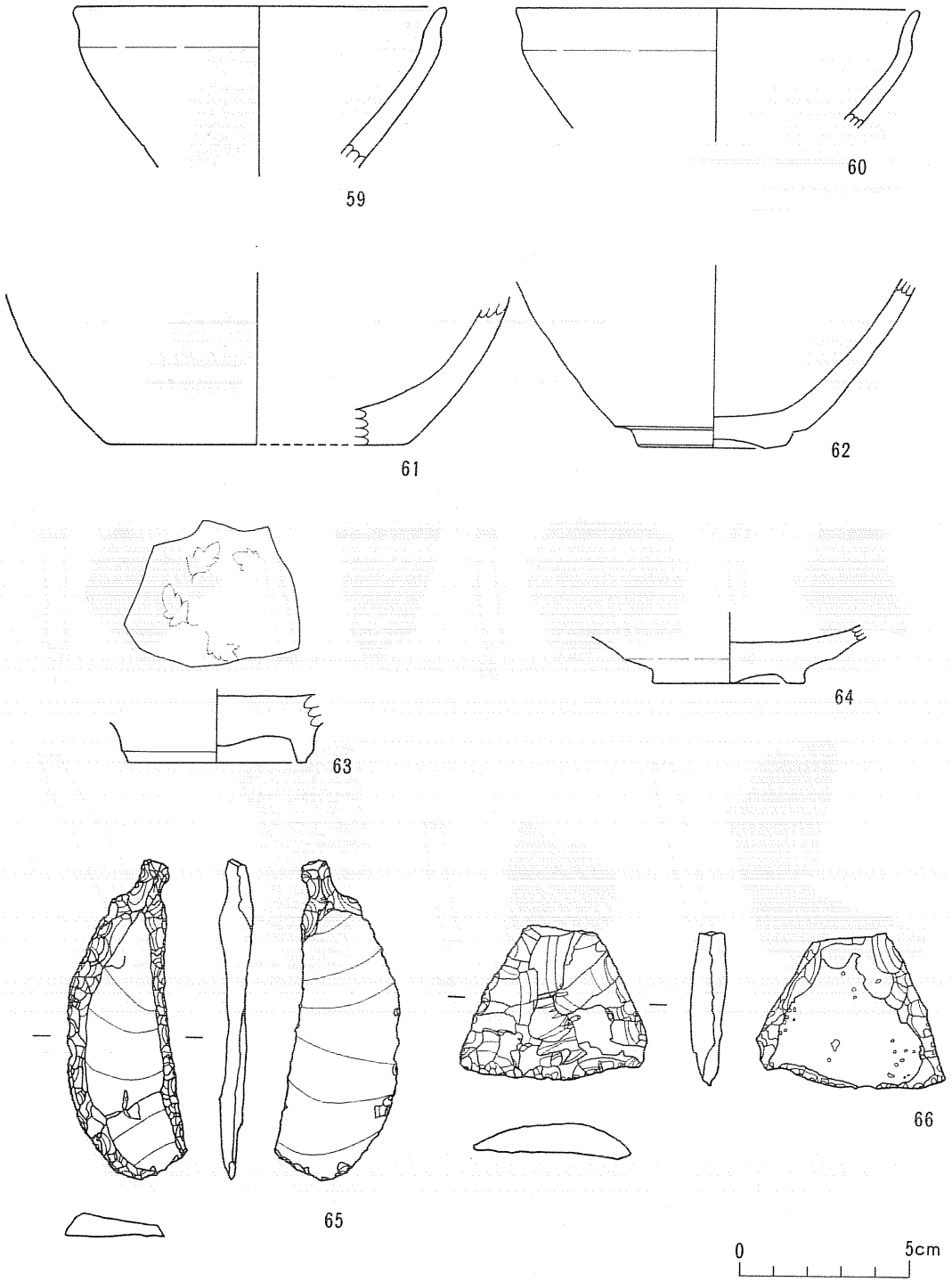
第76図　出土遺物(4)



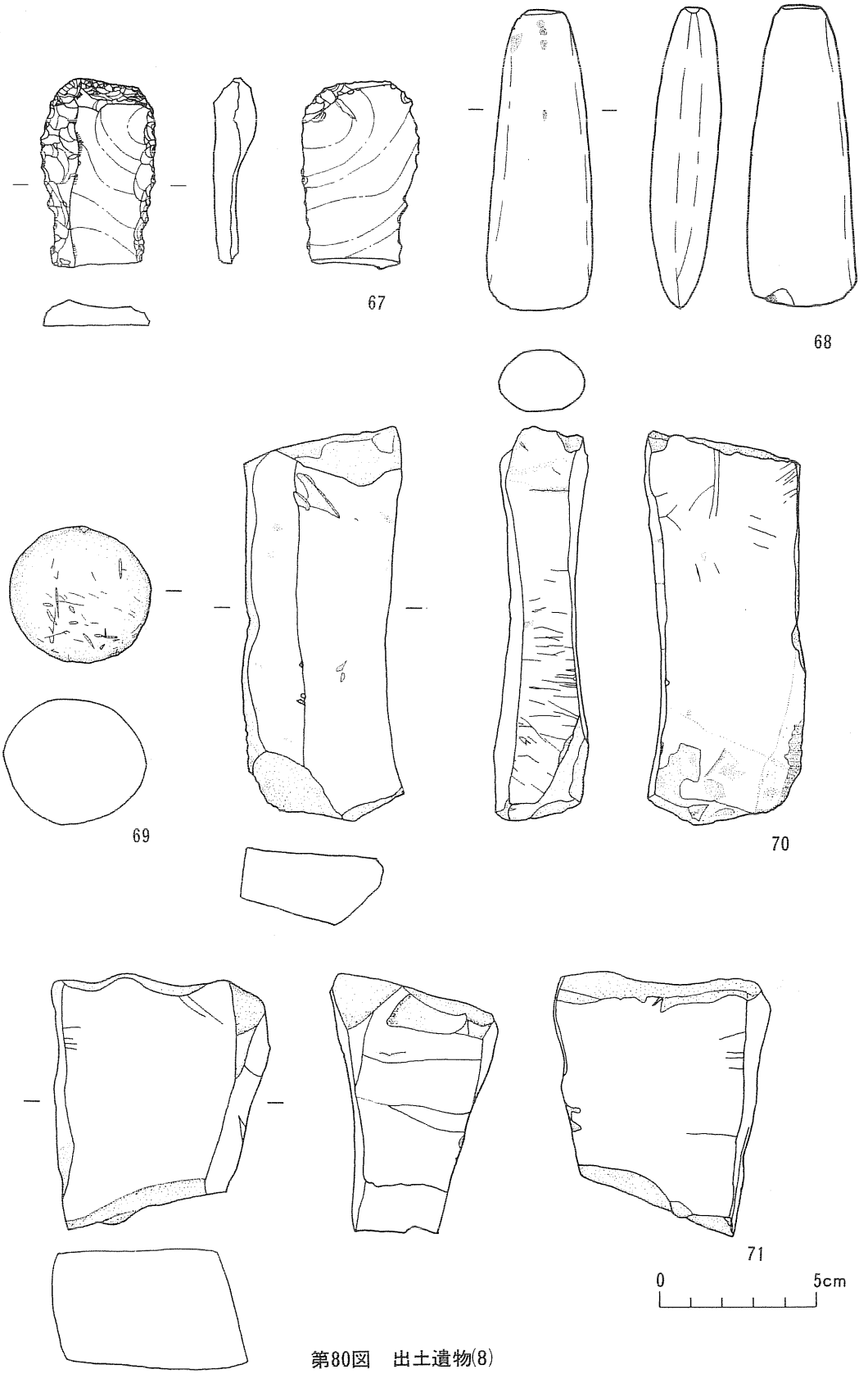
第77図　出土遺物(5)



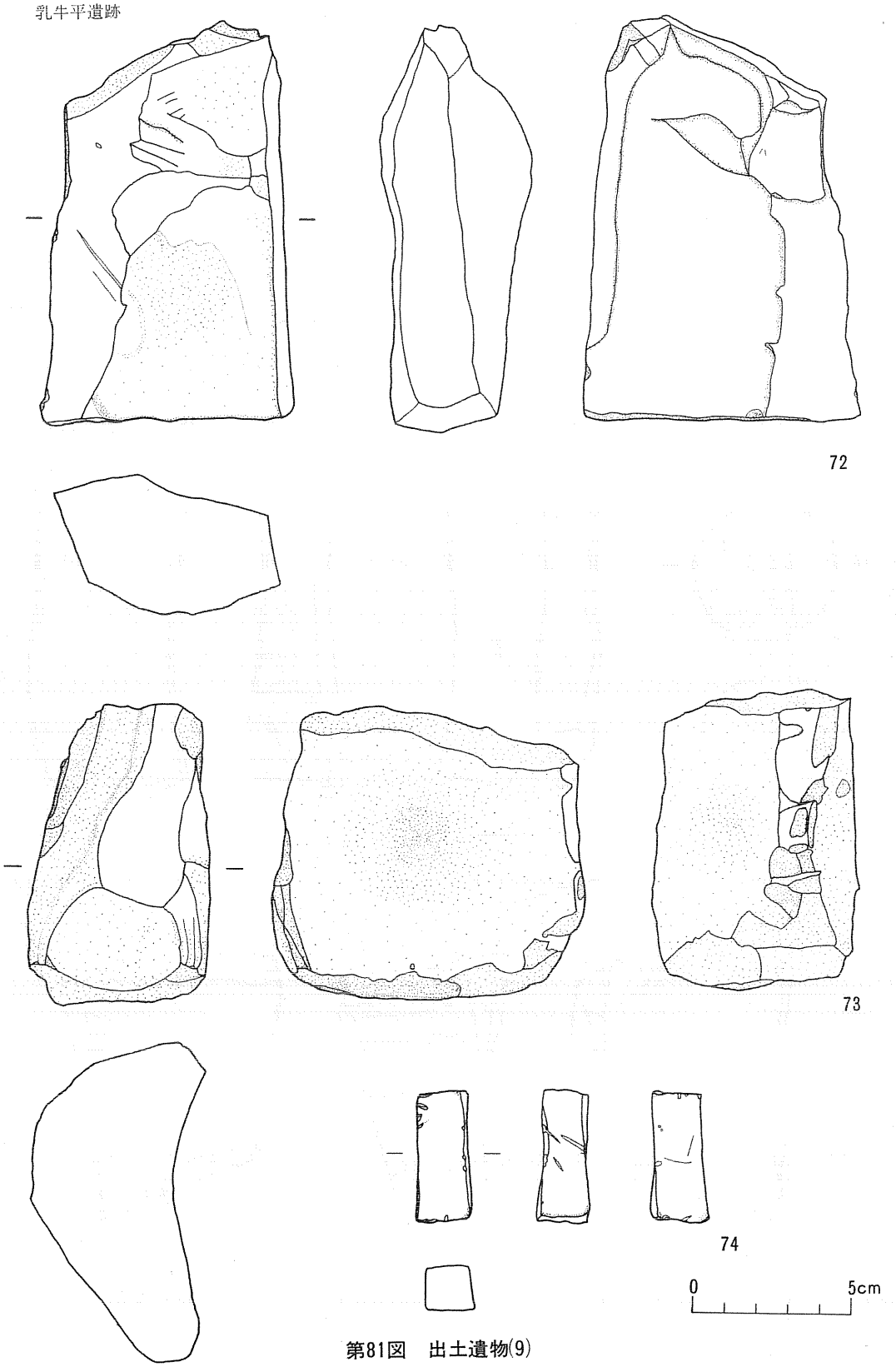
第78図　出土遺物(6)



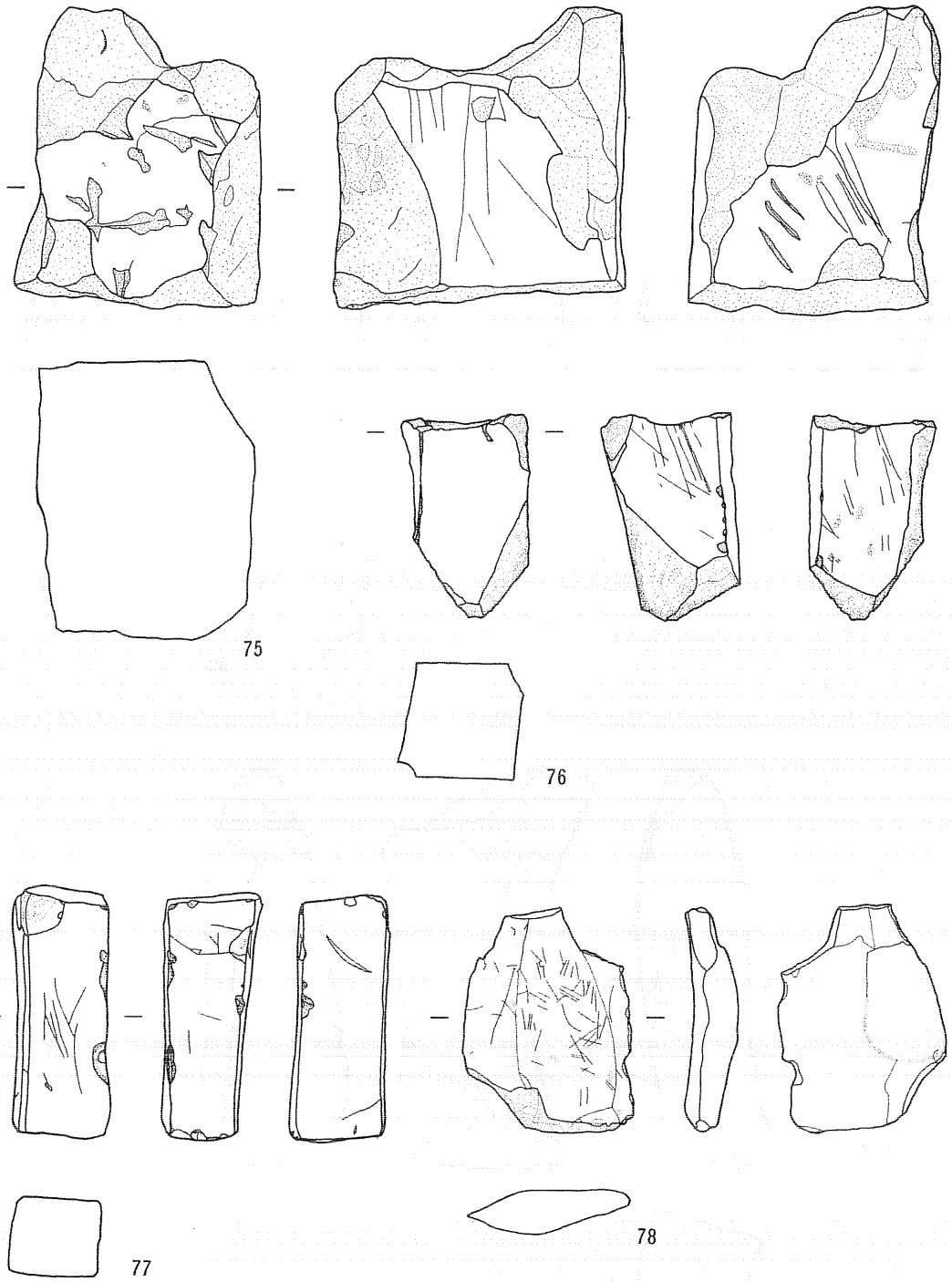
第79図　出土遺物(7)



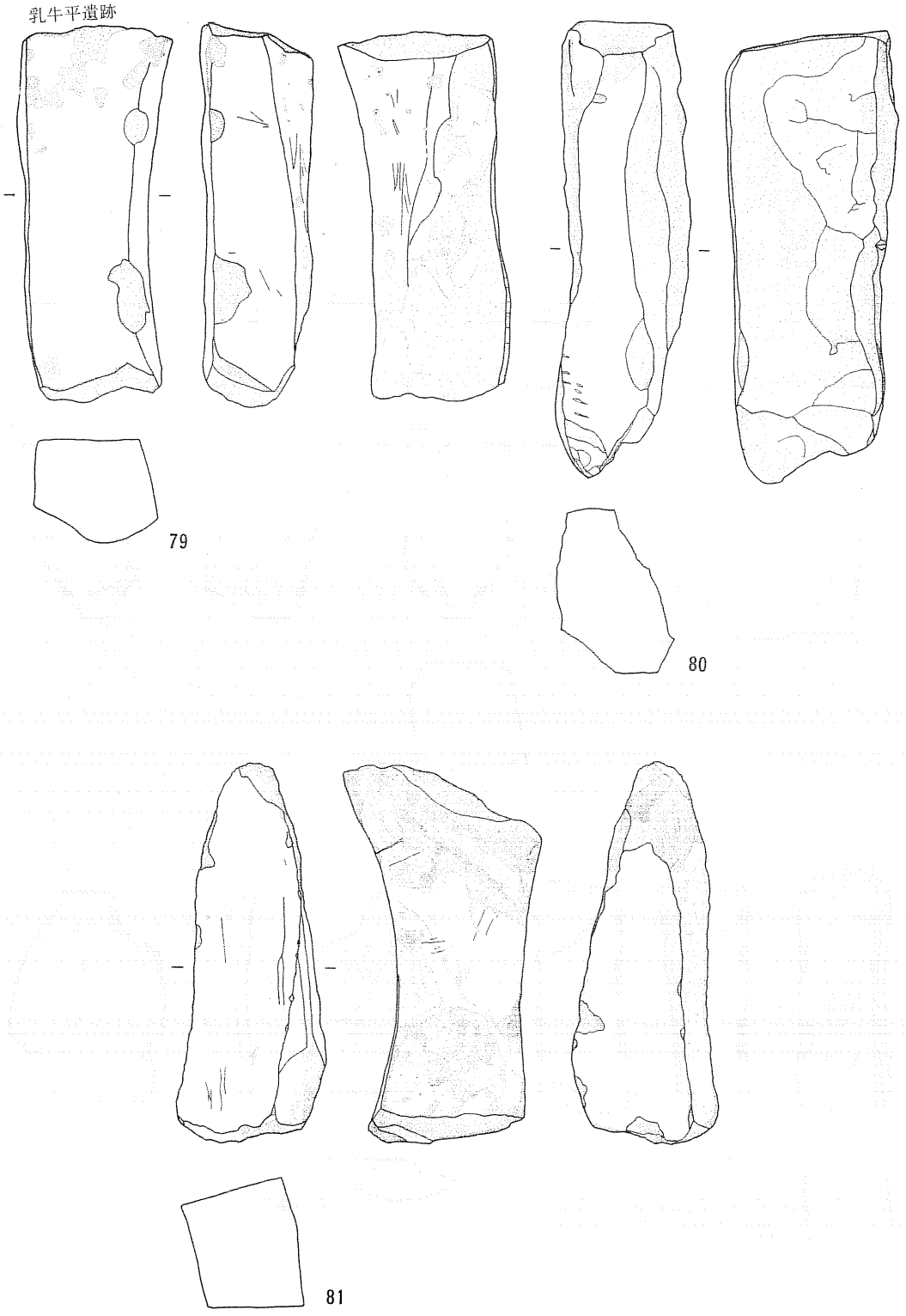
第80図　出土遺物(8)



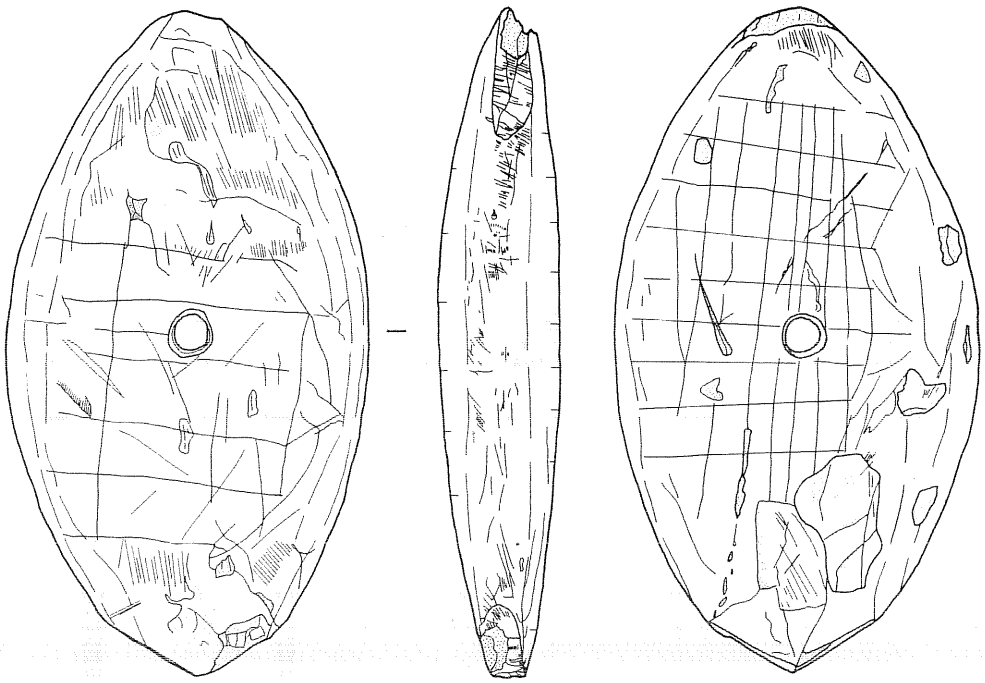
第81図　出土遺物(9)



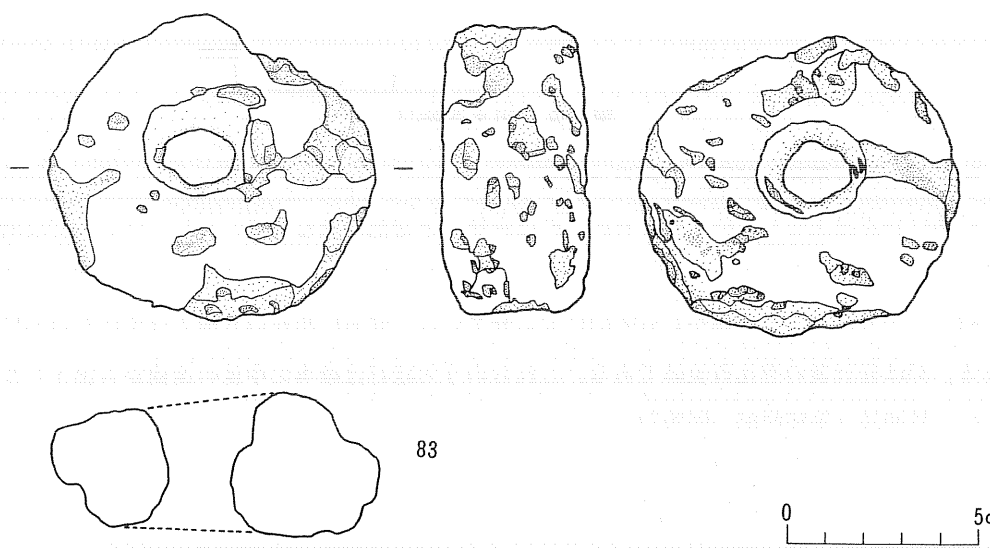
第82図　出土遺物(10)



第83図　出土遺物(11)



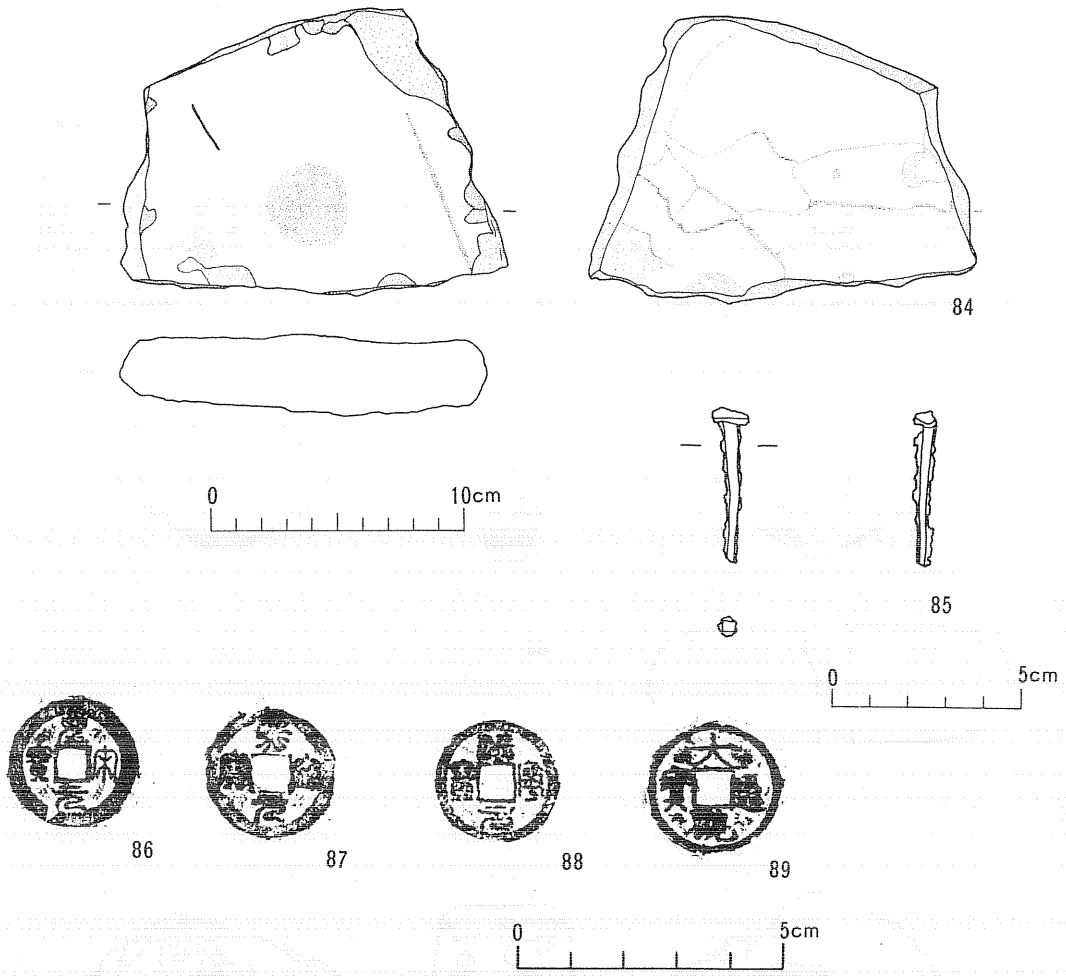
82



83

0 5cm

第84図　出土遺物(12)



第85図　出土遺物(13)

b．石　器（第80～85図、図版71～72）

石器は19点出土した。65・66は石匙、67は両側縁と端部に調整剝離を有している。69は磨製石斧。69は全面が研磨されて球形を呈するものである。79～81、84は砥石である。82は全体を研磨し、一方の端部を両側から直線的に尖らせている。底面に細かい碁盤の目状の刻線が見られる。83は軽石製の有孔石製品である。これらのうち砥石は確実に中世の遺構から出土した。

c．鉄製品（第85図85、図版72）

II郭ＳＩ009から釘が出土した。

d．貨　幣（第85図86～89、図版72）

５点出土したが、１点は銭名が不明である。

〔土　器〕

第7表　遺　物　観　察　表

挿図番号	図版番号	出　土　地　点	部　位	外面 文様	外面 色調	内面 色調	器厚 (mm)	胎　土	焼　成	備　考
73－1	69－1	(I)S I 006・007	口 縁 部	R L 縄文	にぶい黄橙 10Y R 7/4	明黄橙 10Y R 7/6	11	砂，礫（2 mm）	良　好	表裏縄文
2	2	(I) S I 006	口 縁 部	R L 縄文	灰黄褐 10Y R 6/2	灰黄褐 10Y R 5/2	7	砂	良　好	
3	3	(I) S I 006	口 縁 部	R L 縄文	にぶい橙 7.5Y R 6/4	にぶい橙 7.5Y R 7/4	11	細かい砂微量	良　好	表裏縄文
4	4	34 — L	口 縁 部	L R 縄文	にぶい褐 7.5Y R 5/3	にぶい黄橙 10Y R 7/3	8	砂微量	良　好	
5	5	(I) S I 006	口 縁 部	R L 縄文	にぶい黄橙 10Y R 7/3	にぶい橙 7.5Y R 5/3	10.5	細かい砂微量	良　好	
6	6	(I)S I 006・007	胴　部	L R 縄文	にぶい橙 7.5Y R 6/4	明褐 7.5Y R 5/6	9	砂微量	良　好	
7	7	Bトレンチ	胴　部	結　束	灰褐 7.5Y R 4/2	にぶい褐 7.5Y R 5/3	8	砂微量，礫（3 mm）	良　好	
8	8	Bトレンチ	胴　部	結　束	褐 7.5Y R 4/4	にぶい褐 7.5Y R 5/3	9	砂	良　好	
9	9	34 — L	胴　部	L R 縄文	橙 5 Y R 6/6	にぶい褐 7.5Y R 5/3	8	砂，礫（2 mm）	良　好	
10	10	(I) S I 009	口 縁 部	L R 縄文	にぶい黄橙 10Y R 7/4	橙 7.5Y R 7/6	8	細かい砂	良　好	
11	11	35 — I	胴　部	結　束	橙 7.5Y R 6/6	にぶい褐 7.5Y R 5/3	10	砂	良　好	
12	12	土塁上覆土	胴　部	R L 縄文，多軸絡条体回転文	浅黄橙 10Y R 8/4	にぶい橙 7.5Y R 6/4	16	砂微量，礫（2 mm）	良　好	
13	13	33 — I	胴　部	R L 縄文	橙 7.5Y R 7/6	にぶい褐 7.5Y R 5/3	15	礫（2～3 mm）	良　好	
74－14	14	12 — F	胴　部	R撚糸文→沈線	橙 7.5Y R 6/6	橙 5 Y R 6/6	10	砂，礫（2～5 mm）	良　好	
15	15	(I) S K002	口 縁 部	R撚糸文→沈線	橙 5 Y R 6/6	褐灰 5 Y R 4/1	6	砂微量，礫（2 mm）	良　好	
16	16	(I) S K002	口 縁 部	R撚糸文→沈線	にぶい橙 5 Y R 7/4	褐灰 5 Y R 4/1	7	細かい砂	良　好	
17	17	(I) S K002	胴　部	R撚糸文→沈線	にぶい橙 5 Y R 6/4	褐灰 7.5Y R 4/1	8	砂やや多量	良　好	
18	18	(I) S K002	胴　部	R撚糸文→沈線	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	黒褐 5 Y R 3/1	7	細かい砂	良　好	
19	な　し	(I) S K002	胴部～底部	R撚糸文	にぶい黄褐 10Y R 5/3	黒褐 10Y R 3/1	胴 7 底 5	砂多量（1～2 mm）	良　好	
20	19	(I) S K002	口 縁 部	R L 縄文→沈線	褐灰 7.5Y R 4/1	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	11	細かい砂	良　好	
21	20	(I) S K002	胴　部	R L 縄文→沈線	にぶい橙 5 Y R 6/4	橙 7.5Y R 6/6	9	砂少量，礫（3 mm）	良　好	
22	21	Aトレンチ	胴　部	沈線	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	暗赤褐 5 Y R 3/6	8	砂多量，礫（3～7 mm）	良　好	
23	22	Aトレンチ	胴　部	R L 縄文→沈線	にぶい赤褐 5 Y R 5/4	暗赤褐 5 Y R 3/6	9	砂多量，礫（3 mm）	良　好	
24	23	(I) S K002	胴　部	沈線	橙 7.5Y R 7/6	橙 5 Y R 6/6	11	細かい砂）	良　好	

〔土　器〕

第8表　遺　物　観　察　表

挿図番号	図版番号	出　土　地　点	部　位	外面 文様	外面 色調	内面 色調	器厚（mm）	胎　土	焼　成	備　考
74－25	69－24	(I) S K002	口 縁 部	沈線	褐灰 7.5YR4/1	黒褐 10YR3/1	9	細かい砂	良　好	
75－26	25	(I) S K001	胴　部	隆帯文	にぶい褐 7.5YR5/3	橙 7.5YR7/6	13	細かい砂	良　好	
27	26	(I) S K001	胴　部	隆帯文	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	12	砂，礫（2～3mm）	良　好	
28	70－27	(I) S K001	胴　部	隆帯貼付文	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	12	砂，礫（3mm）	良　好	
29	28	(I) S K001	胴　部	隆帯文	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	12	砂，礫（3mm）	良　好	
30	29	(I) S K001	胴　部	沈線	にぶい褐 7.5YR5/4	褐 7.5YR5/6	11	砂，礫（2～4mm）	良　好	
76－31	30	(I) S K002	胴　部	沈線	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	11	砂多量，礫（2～4mm）	普　通	
32	31	12 － C	胴　部	沈線	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 5YR6/4	5	細かい砂	良　好	
33	33	(I) S I009	胴　部	L撚糸文→沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	7	細かい砂	良　好	
34	34	22 － J	口 縁 部	LR縄文→沈線	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR7/3	7.5	砂	良　好	
35	35	B堀内－2～3m	口 縁 部	RL縄文	にぶい橙 5YR6/4	にぶい赤褐 5YR5/4	9	細かい砂	良　好	
36	36	29－H，G	口 縁 部	L撚糸文	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	6.5	細かい砂	良　好	
37	37	B堀内－2～3m	胴　部	RL縄文	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/3	7	砂，礫（7mm）	良　好	
38	38	(II) S K002	胴　部	LR縄文	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	7	砂	良　好	
39	39	35 － J	胴　部	LR縄文	にぶい黄橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	9	礫（1～3mm）多量	良　好	
40	40	(I) S X(F)001	胴　部	LR縄文	にぶい橙 5YR7/4	にぶい赤褐 5YR5/4	9.5	礫（1～2mm）	良　好	
41	41	(I) S I006	胴　部	LR縄文	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	6	砂	良　好	
42	42	20－H，G	胴　部	L撚糸文	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	6.5	細かい砂	良　好	
43	43	23 － I	胴　部	LR縄文	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3	4	細かい砂	良　好	
44	44	(II) S I006	胴　部	RL縄文	灰　白 10YR8/1	浅黄橙 10YR8/3	6	砂	良　好	
45	45	(I) S K002	口 縁 部	隆帯文	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	7	砂	良　好	
77－46	32	(I) S K002 RP8	胴　部	RL縄文→沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	14	砂荒い	良　好	
78－47	46	(I) S I001	胴　部	LR縄文→沈線	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR6/3	9	細かい砂	良　好	
48	47	35－J	口 縁 部	L撚糸文→沈線	にぶい赤褐 5YR3/4	にぶい黄褐 10YR5/3	6	細かい砂	良　好	

〔土　器〕

第9表　遺　物　観　察　表

挿図番号	図版番号	出　土　地　点	部　位	外面 文様	外面 色調	内面 色調	器厚 (mm)	胎　土	焼　成	備　考
78－49	70－48	(I) 35 － L	口 縁 部	L撚糸文→沈線	にぶい橙 5 YR 6/4	にぶい橙 7.5 YR 6/4	6	細かい砂	良　好	
50	49	Bトレンチ	底部～台部	LR縄文→沈線	橙 7.5 YR 6/6		27		良好で堅い	
51	50	(III) SD001	胴　部	RL縄文→沈線	にぶい黄橙 10 YR 6/4	にぶい黄橙 10 YR 7/3	6	砂、礫（3 mm）	良　好	
52	51	(II) SD001	口 縁 部	LR縄文	にぶい黄橙 10 YR 7/3	にぶい黄橙 10 YR 7/3	5	砂	良　好	
53	71－52	(III) SD001	胴　部	LR，RL縄文	にぶい褐 7.5 YR 5/3	にぶい橙 7.5 YR 7/4	5.5	砂微量	良　好	
54	53	(III) SX001	胴　部	LR縄文	にぶい褐 7.5 YR 5/3	にぶい橙 7.5 YR 7/4	5	砂多量	良　好	
55	54	(III) SD001	胴　部	RL縄文	にぶい黄橙 10 YR 7/4	浅黄橙 10 YR 8/3	6	砂微量、礫（1～3 mm）	良　好	
56	55	(III) SD001	胴　部	RL縄文	黒褐 10 YR 3/1	にぶい黄橙 10 YR 7/4	7	砂、礫（3 mm）	良　好	
57	56	(III) SD001	胴　部	RL縄文	にぶい黄橙 10 YR 7/3	にぶい黄橙 10 YR 7/4	5.5	砂	良　好	
58	57	11－H，G	胴部～底部	LR縄文	浅黄橙 10 YR 8/3	浅黄橙 7.5 YR 8/3	11	砂、礫（2～3 mm）	普　通	

挿図番号	図版番号	出　土　地　点	口　径 (mm)	底　径 (mm)	器　高 (mm)	外面 色調	内面 色調	備　考
79－59	71－58	Bトレンチ	(推) 110	—	—	暗褐色 7.5 YR 3/4 にぶい橙 7.5 YR 7/3		天　目
60	59	(III) 11 － B	(推) 119	—	—	黒 N 2/0	黒 N 2/0	天　目
61	60	Bトレンチ内	—	(推) 88	—	極暗赤褐 2.5 YR 2/3	浅黄 7.5 YR 7/3 ないしオリーブ黒 10 Y 3/2	中国製
62	63	(II) SI009	—	44	—	暗褐 7.5 YR 3/3 灰白 10 YR 8/1	暗褐 7.5 YR 3/3	天　目
63	61	Aトレンチ	—	45	—	にぶい褐色 7.5 YR 5/4	灰オリーブ 5 Y 5/2	唐　津
64	62	Bトレンチ	—	52	—			青　磁

第10表　遺　物　観　察　表

〔石　器〕

挿図番号	図版番号	名　称	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備　考
79－65	71－64	石　匙	(II)20－G	9.4	3.2	1.0	22.9	頁岩	
66	65	石　匙	(III)SD001	4.5	5.7	1.0	24.6	頁岩	
80－67	66		(III) 6－G	6.1	3.7	1.4	26.8	頁岩	
68	67	磨製石斧	(III)SX001	9.6	3.4	2.1	106.0		
69	68		(II) 23－H	4.4	4.5	—	68.0		
70	69	砥　石	(II) 18－G	12.4	4.9	3.0	185.0		
71	70	砥　石	(II)SI004	8.1	6.8	5.1	314.0	凝灰岩	
81－72	71		Bトレンチ堀内	12.5	8.1	4.7	460.0	凝灰岩	
73	72		Bトレンチ堀内	9.4	5.7	9.8	455.0		
74	72－73	砥　石	(III)SI001	4.1	1.7	1.6	18.0		
82－75	74	砥　石	Bトレンチ堀内	8.4	7.1	8.3	604.0	凝灰岩	
76	75	砥　石	Bトレンチ	5.6	3.7	3.8	78.7		
77	76	砥　石	(II)17－J	7.1	2.8	2.8	78.9		
78	77		II. SX013	6.5	4.8	1.3	32.1		
83－79	78	砥　石	II. G－19	17.2	6.9	5.0	635.0		
80	79	砥　石	Bトレンチ堀内	21.0	5.6	7.9	1100.0	凝灰岩	
81	80	砥　石	(II)SI008	17.3	7.9	6.4	810.0		
84－82	81		(II) 19－G	17.5	9.5	3.2	775.0		
83	82		(II)SX013	8.0	8.6	3.9	33.2	軽　石	
85－84	83		(II)SI001	11.0	15.4	—	620.0	安山岩	

〔貨　幣〕

85－86	72－84	聖宋元宝	(II)22－J
87	85	熙寧元宝	(III)12－F
88	86	熙寧元宝	(II)22－K
89	87	大観通宝	(I)33－I

6．ま と め

乳牛平遺跡からは、縄文時代・弥生時代・中世の各時代にわたる遺構、遺物が検出された。

郭平場から検出された遺構のうち、断面がフラスコ状となる土壙、Tピットは伴出遺物はないが縄文時代の遺構であると考えられる。

乳牛平遺跡においては大湯浮石層と遺構との関係は明確でない。大湯浮石層はII郭中央部の黒褐色土上面にごく小範囲で極めて薄い堆積層が見られただけであるが、妻の神III遺跡では竪穴遺構、焼土遺構、掘立柱建物跡が確実に大湯浮石層を掘り込んで構築されている。竪穴遺構は中世遺跡からの発見例が多く、乳牛平遺跡の竪穴遺構、焼土遺構、掘立柱建物跡、柱列は中世に属するもので、郭平場に伴うものであると考える。また、郭の周囲は堀、土塁で防禦されており、乳牛平遺構は『鹿角由来記』(註1)に見える乳牛館であると考えられる。

乳牛館は乳牛平遺跡だけで完結するものではなく、南方の妻の神III遺跡をも含んでいる。V郭西側の住宅付近には段差が見られ、その形状がI・II郭間の土塁の調査前の状態とよく似ており、ここに土塁の存在が予想される。また『ほ場整備地域内（鹿角北東地区）遺跡分布地図』(註2)によると、乳牛館の範囲はおおよそ東西、南北とも 540m、面積約 2000,000 ㎡の規模に推定されている。

乳牛平遺跡のI～III郭の平場面積と各郭ごとの確実な中世遺構は以下のとおりである。

I郭：	1,040㎡	竪穴遺構10	焼土遺構８			
II郭：	1,250㎡	竪穴遺構18	焼土遺構33	柱列１		
III郭：	1,740㎡	竪穴遺構４	焼土遺構10	柱列１	掘立柱建物跡２	溝６

竪穴遺構はI、II郭においては平場中央部にほとんどなく、郭縁辺部に構築されている。II郭のSI 001 1棟のみカマドらしいものかがあるが、他にはカマドは付設されていない。こうした竪穴遺構は県内にも多く、大館市片山館(註3)コ、比内町谷地中館(註4)、鹿角市小枝指七館(註5)、小平(註6)、新斗米館(註7)、高市向館(註8)、御休堂(註9)、歌内(註10)、小豆沢館(註11)などに類例が検出され、このうち御休堂では一部に平安時代にまで遡及する可能性も考えられているが、他の多くは中世に属している。また館に付随するものでも炉、出入口部のあるものとないものとがあり、その用途についても例えば簡易宿舎(註12)、掘立柱建物跡に共伴する土座居住居(註13)、住居もしくは作業場(註14)、土倉、矢倉(註15)、物置(註16)、家畜小屋(註17)などの諸説があって定かでない。III郭や妻の神III遺跡では掘立柱建物跡と共存する可能性を指摘するに留めたい。

焼土遺構は、竪穴遺構とほぼ同一の確認面にあり、竪穴遺構と重複する場合、竪穴遺構を切るものと、切られるものとが見られる。掘立柱建物跡のないI・II郭にも多く、掘立柱建物跡

との関連よりはむしろ竪穴遺構の使用と何らかの関連を有するものと考えられる。鞴羽口らしいものがⅠ郭から出土しているが鉄滓はなく、鍛治場とは断定し難い。

乳牛平遺跡は前述のように、妻の神Ⅲ遺跡から連続する乳牛館の一部であるが、掘立柱建物跡がⅢ郭の調査範囲内に2棟検出されたにすぎないこと、及びⅠ～Ⅳ郭の平場は妻ノ神Ⅲ遺跡に比べ極めて小規模であり、通常の生活の場とは考えられないことなどから、妻の神Ⅲ遺跡側との間には大きな相違点を指摘できる。加えて妻の神Ⅲ遺跡と乳牛平遺跡Ⅲ・Ⅳ郭との間には二重の堀、土塁状小山が存在し、Ⅲ・Ⅳ郭には妻の神Ⅲ遺跡側からの防禦性、隔絶性がうかがえる。こうしたことから、広い郭面積を有し、多くの掘立柱建物跡が構築され、内部に土壙墓をも有する妻の神Ⅲ遺跡側を主郭と考えると、乳牛平遺跡は戦時に備えた軍事的施設である色彩が強く、乳牛館の如く必ずしも交通の要所ではなくとも、軍事的色彩の濃厚な部分を鹿角地方の中世城館は備えていると言える。

これまで鹿角地方における中世城館は、軍事的性格よりも行政的性格が強かったことが強調されているが[註18]、安村二郎氏が鹿角地方の中世城館の観察と、その歴史的背景から洞察しているように[註19]、軍事的色彩は濃厚である。

鹿角地方における中世城館は、堅固な軍事施設を備えたものが当時50戸前後ないし100戸を越えることのない村力[註20]で、しかも典形的な一村一館形式で至近距離の間に連立するが、その有様の一端を乳牛館が示しているように考えられる。

註1　「鹿角由来記」　『南部叢書』　第1冊　南部叢書刊行会　1927年

註2　昭和51～53年度にわたり実施した、国営総合農地開発事業・鹿角北東地区内の遺跡分布調査報告書

註3　板橋芳範「古代・中世の文化」　『大館市史』　第1巻　大館市　1979年

註4　畠山憲司『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』　比内町教育委員会　1978年

註5　江上波夫・他『館址』　東京大学出版会　1958年

註6　庄内昭男『小平遺跡発掘調査報告』　鹿角市教育委員会　1979年

註7 a　伊藤種秋『新斗米館跡　鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書』　鹿角市教育委員会　1981年

b　秋元信夫『新斗米館跡　鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書』　鹿角市教育委員会　1982年

註8　秋元信夫『高市向館発掘調査報告書』　鹿角市教育委員会　1982年

註9　秋元信夫『御休堂遺跡発掘調査報告書』　鹿角市教育委員会　1981年

註10　小玉準『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』　秋田県教育委員会　1982年

註11　桜田隆「小豆沢館遺跡」　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』　秋田県教育委員会　1982年

註12　註７ｂに同じ。

註13　高橋与右ェ門『二戸市沢内Ｂ遺跡（昭和53年度）』（財）岩手県埋蔵文化財センター　1979年

註14　大橋康二「考古学的考察」　『尻八館調査報告書』　青森県立郷土館　1981年

註15　工藤清泰『浪岡城跡Ⅲ』　浪岡町教育委員会　1981年

註16　昆野靖「大瀬川Ｃ遺跡」　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』　岩手県教育委員会・日本道路公団』　1981年

註17　註５に同じ。

註18ａ塩谷順耳「鹿角地方の館」　『秋田県立博物館研究報告』　第３号　秋田県立博物館 1978年，

「結局戦国・織豊期の村の支配者は、系譜的に鎌倉期の地頭につながり、長期に亘って分派しながら村に定着し、地名を性として館を本拠としていたものである。従って村を支配するための館は軍事的性格より行政的性格が強かったと言えよう。」

ｂ塩谷順耳「文化財レポート（129）秋田の中世城館」　『日本歴史』　第386号　1980年

「例えば鹿角郡（中世後期を通じ南部氏領）であれば、東からのびる舌状台地突端部を利用し、その基部を空堀で区切り単郭、或いは連郭状平坦面を構成、時にそれに帯郭・腰郭をめぐらしている。従って単純な形を示し、水田面からの高さも20～30メートルのものが多く、軍事的機能はあまりもっていない。城というよりは地侍の居館的性格がつよく、そのために麓に中世の集落をもっている。」

「要するに館は、村を支配する地侍が、村民労働力を徴集して造ったものであり、そのため村落単位に構築され、故に軍事的機能よりは行政的要素をもつものであった。」

註19ａ安村二郎「新斗米館の歴史的環境」　『新斗米館跡』　鹿角市教育委員会　1981年

「室町・織豊期において鹿角四氏とくに奈良・安保両氏は、天正十九年奥州仕置軍に制圧されるまでは、鎌倉以来の鹿角の地主として、久しく繰り返された南部氏、浅利氏、秋田氏の鹿角侵略の手から、相伝の土地を保守すべく、時には和し、時には抗し、絶えず権謀術策の渦中にあったことを示しているように思われる。

新斗米館が、史書にその名を留めることのない小館であったにしても、相当の規模のもとに郭を営み、壕を掘り、塁を固め、防備堅固の跡を偲ばせているのは、かかる状況の然らしむるところと云えよう。また、新斗米館から北に小平館、小枝指館と続き、南に高市館、柴内館、乳牛館と極めて近距離のうちに相接しているのは、鹿角四氏がその移住以来同族的結束をつよめながら四囲の侵略勢力に相対してきたことを物語るものでなかろうか。」

ｂ安村二郎「小枝指館跡　１、館の位置と歴史的環境」　『鹿角の館』　鹿角市教育委員会　1982年

「小枝指館は、戦国動乱の世にあって、他の鹿角地士と同じように南部氏、秋田氏、浅利氏諸勢力の激突する中で、辛うじて伝来の地を守り続けた苦悩をその壕溝の深さに留めている。」

c 安村二郎・片岡正一「鹿角の中世城館」　『鹿角市史』　第1巻　1982年

「このような規模は、郡内四氏の多党支配による蝸牛角上の勢力争いというよりは、やはり国人連合による南部党・秋田安東党との抗争に原因があるように思われる。」

註20 a 註18 a に同じ。

「江戸中期の史料から推測しても、戦国・織豊期において100戸を越えるような村は鹿角地方に殆んど存在しなかった。

「総じて、戦国・織豊期、鹿角地方における館主の支配する村は決して大きいものでなく、100戸以下か或いは50戸にも満たない集落であったのであり、館主も地侍である反面、有力農民の性格が強かったと言い得るのである。」

b 塩谷順耳「由利諸党と館――下村・玉米領を中心に――」　『秋田地方史論集』　半田市太郎教授退官記念会編　1981年

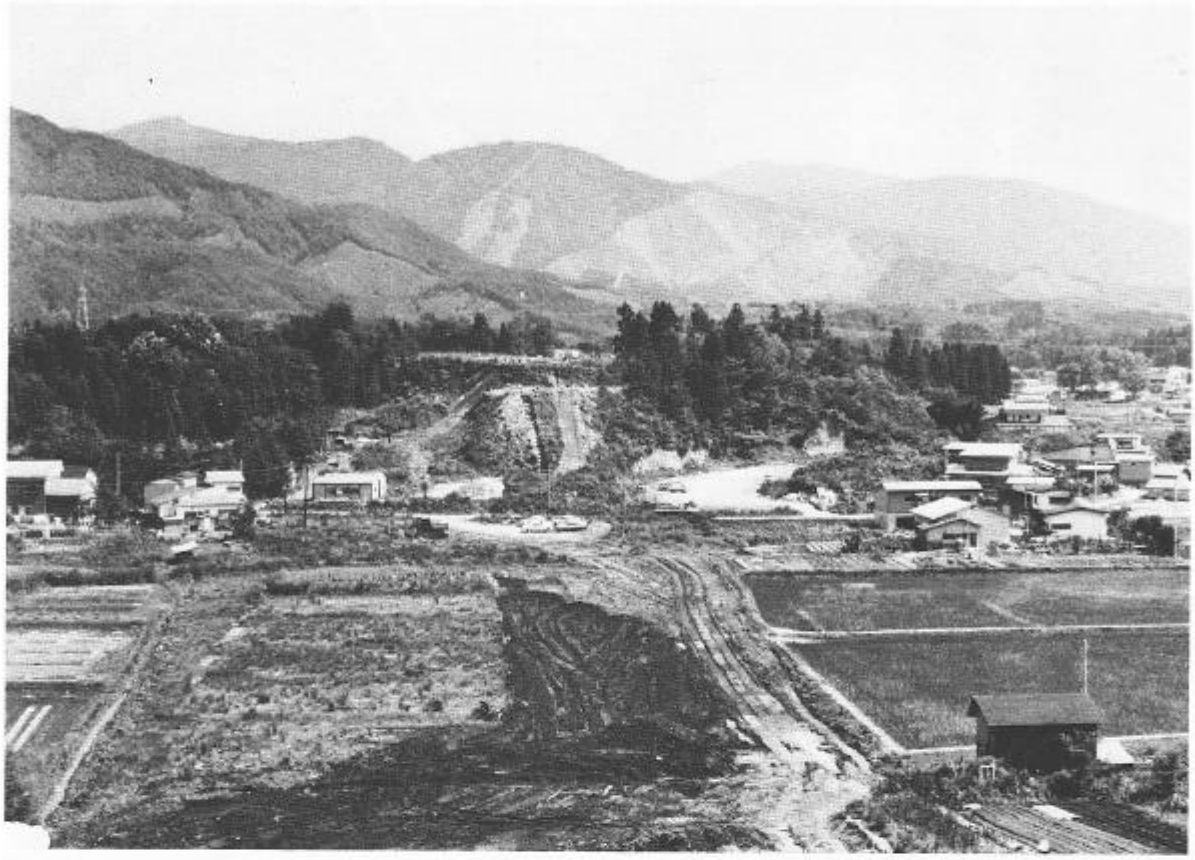
「結局、館は必ずしも大村にばかり出来るわけでなく、50戸前後の村力でも造り得た」

発掘調査参加者

浅石　清一　浅石林一郎　大信田　学　小田島健一　川又　康彦　木村　留吉　木村　善男
佐藤　光雄　佐藤　由蔵　関本　芳雄　田中　敬二　田中権四郎　奈良正次郎　畠山　市助
浅石　イソ　浅石　ヒサ　浅石　ミヨ　浅石　ヨエ　阿部　妙子　阿部　玲子　安保　カヨ
安保ハルエ　安保ユキ子　大森　栄子　金沢実津子　川又　スエ　川又　ソヨ　川又　千代
久慈　チヤ　児玉ハツエ　斉藤　久子　佐藤　トシ　佐藤フミエ　高橋　ミワ　豊田　コヨ
苗代沢良子　中村　陽子　根本　キワ　根本　シエ　橋場　トシ　古家カツ子　古家　一子
村木　繁子　米田　ノリ　宮沢　カヨ　柳沢　光子　山口チヨ子

図版1　遺　跡　　空から見た乳牛平遺跡

図版1　遺　　跡　　空から見た乳牛平遺跡



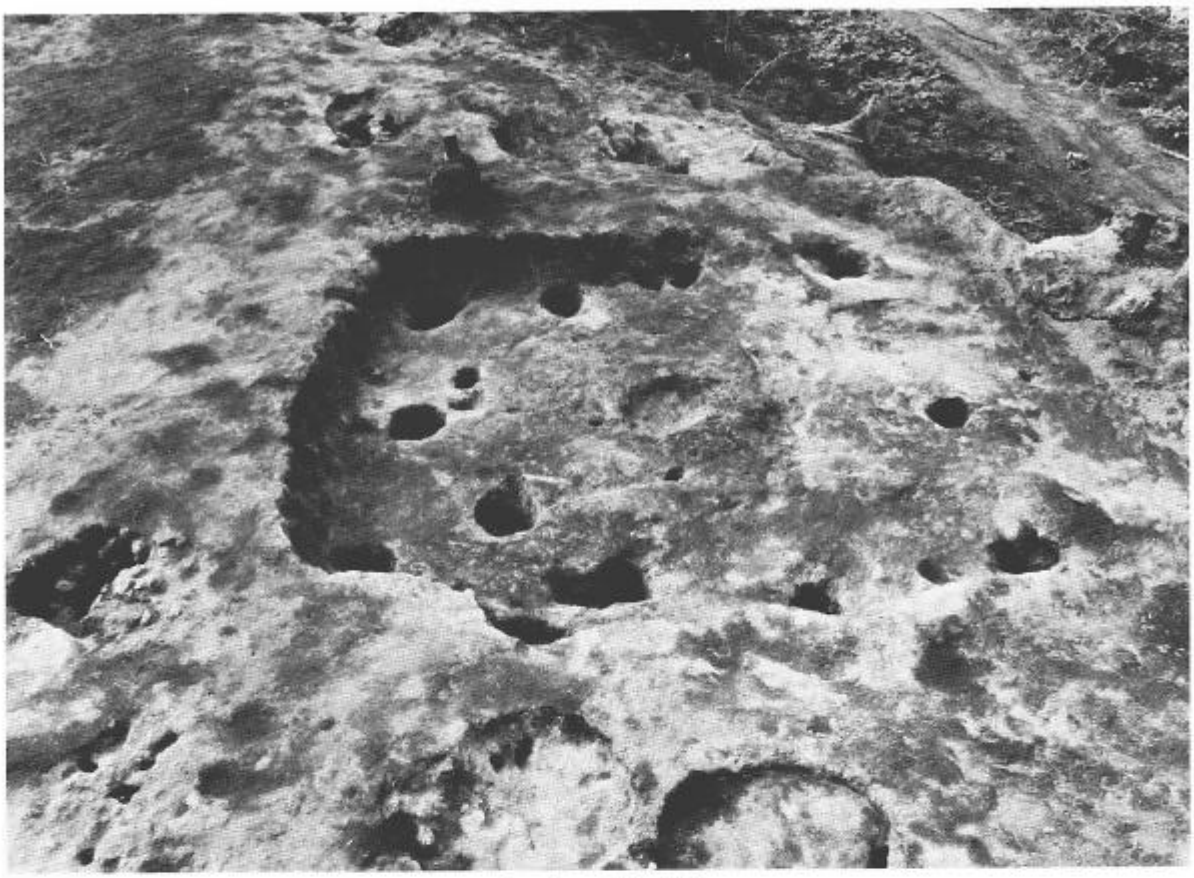
1　西町Ⅰ遺跡より見た乳牛平遺跡

2　柴内館から見た乳牛平遺跡

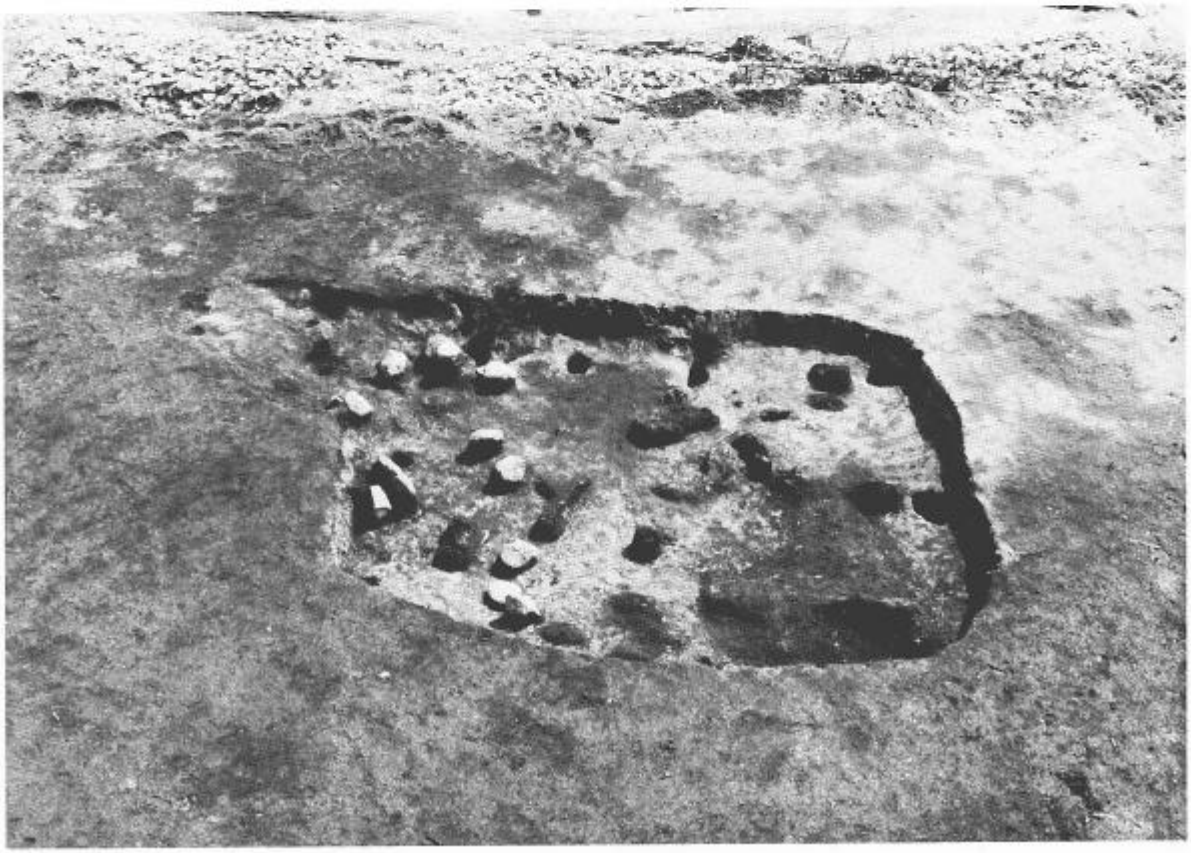
1　I郭調査前

2　同　上

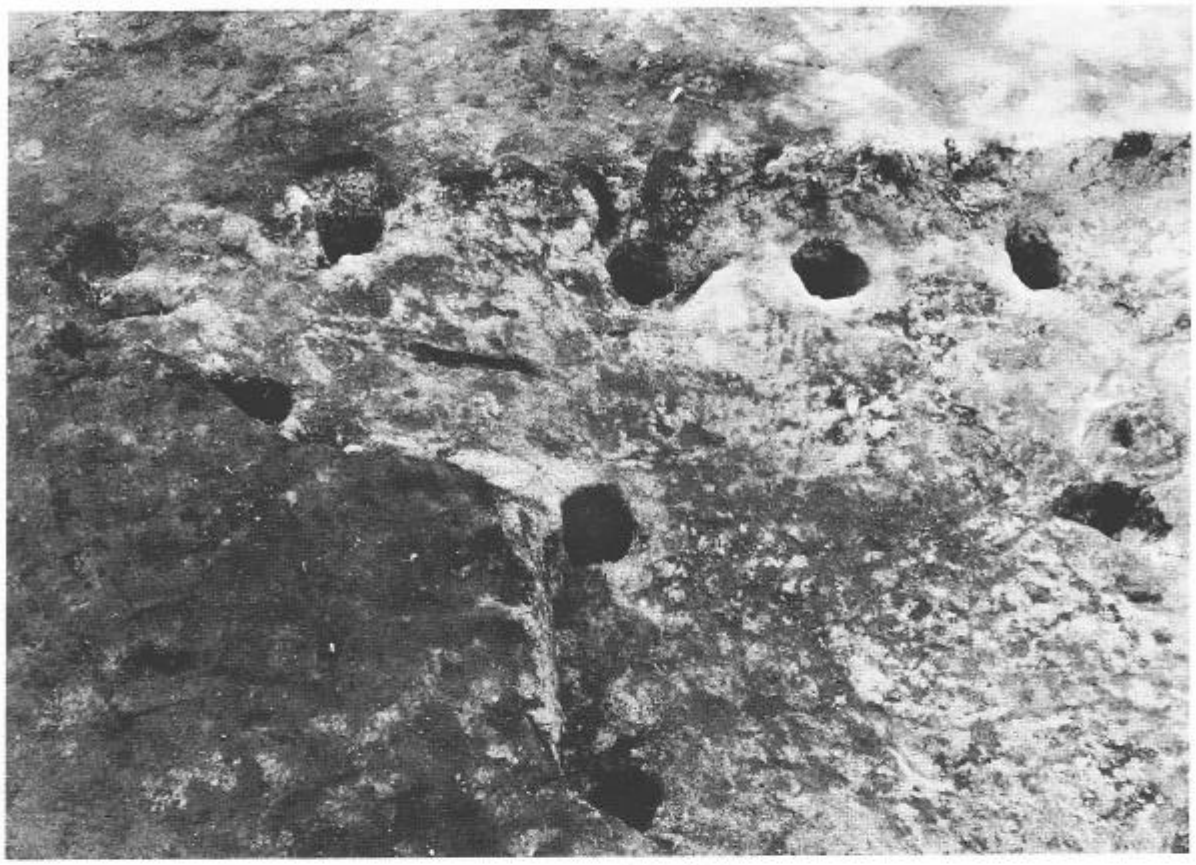
図版3　遺　跡



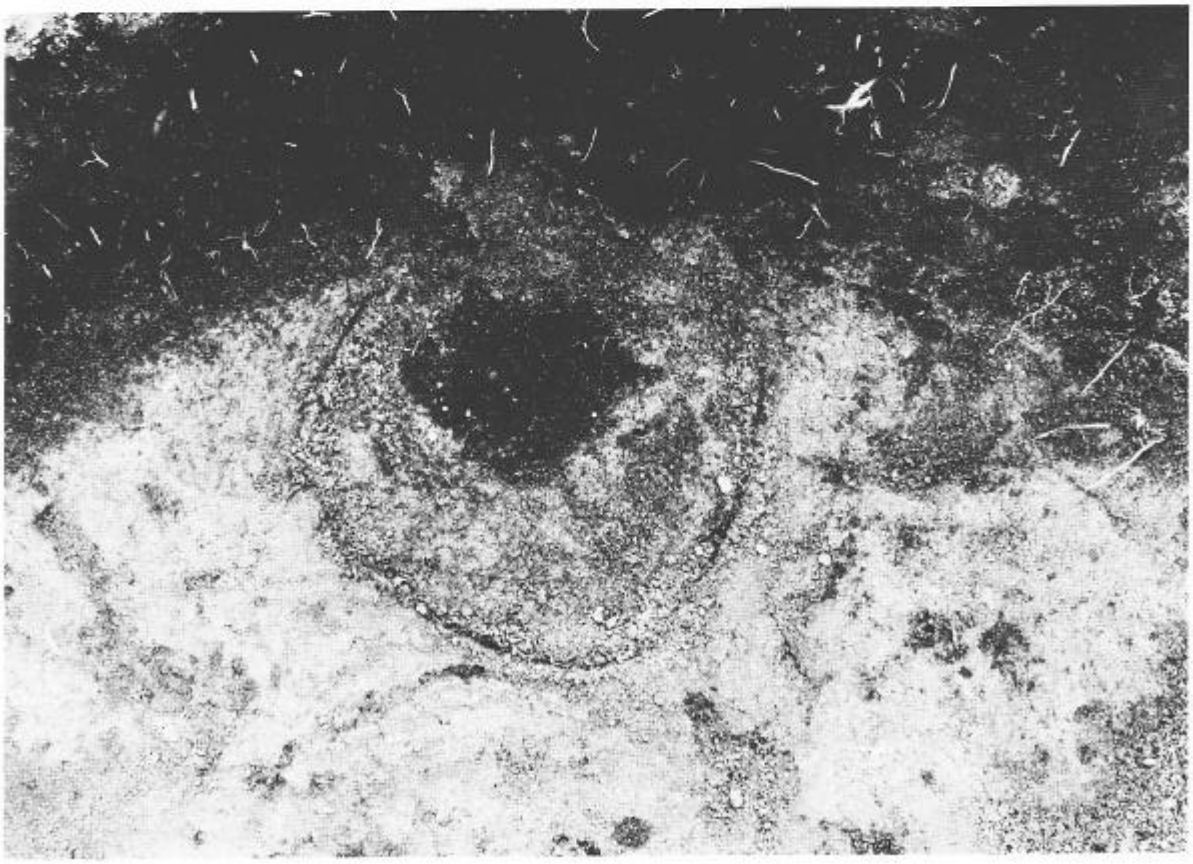
1　I・SI 001



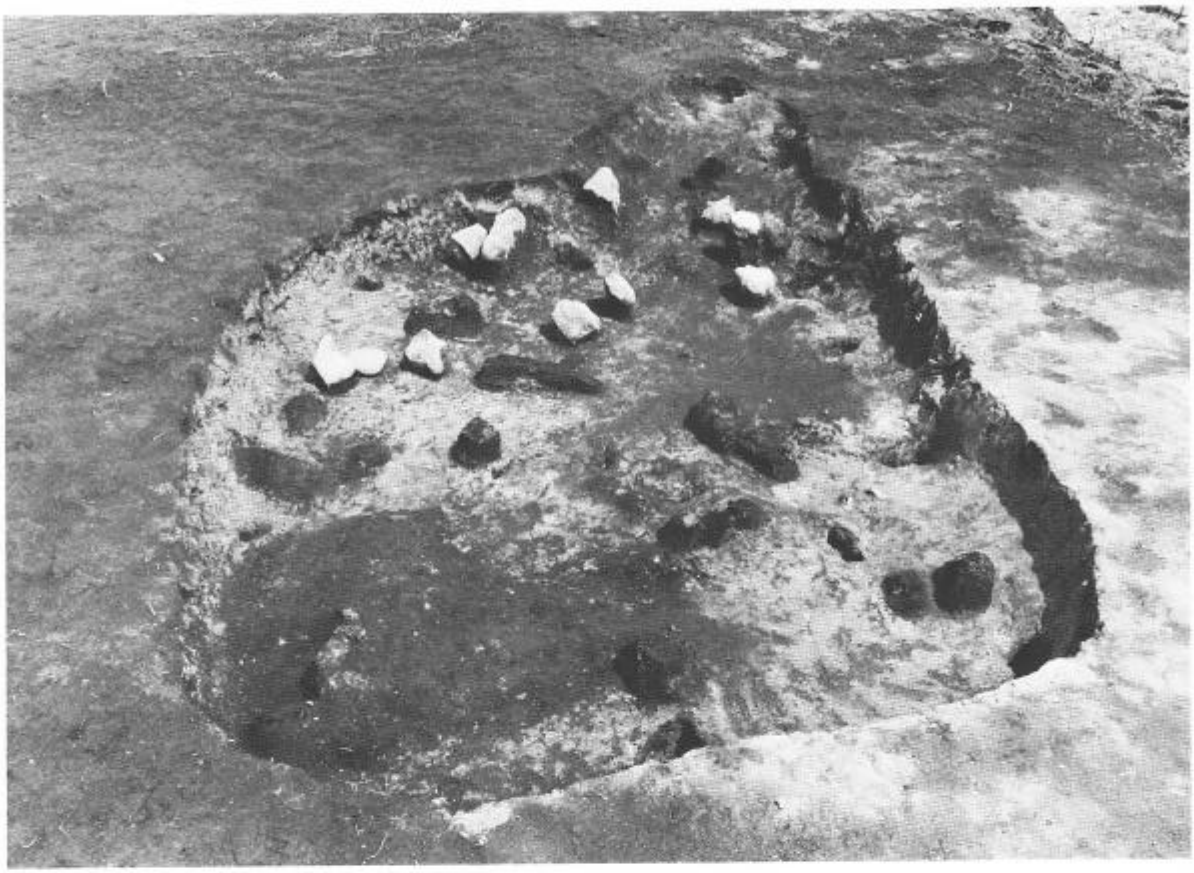
図版4　遺　跡　　2　I・SI 002



1　I・SI 002



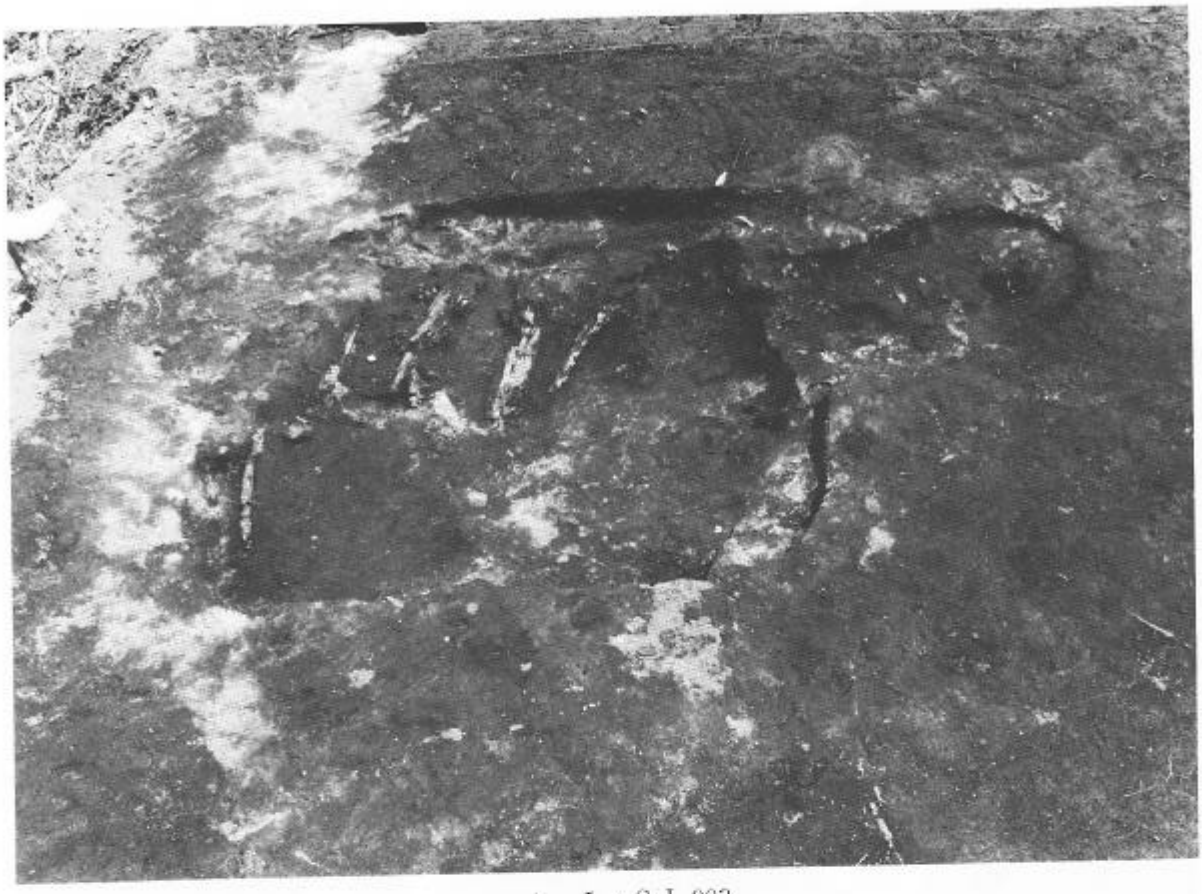
図版5　遺　跡　　2　I・SI 002南西コーナー柱痕跡



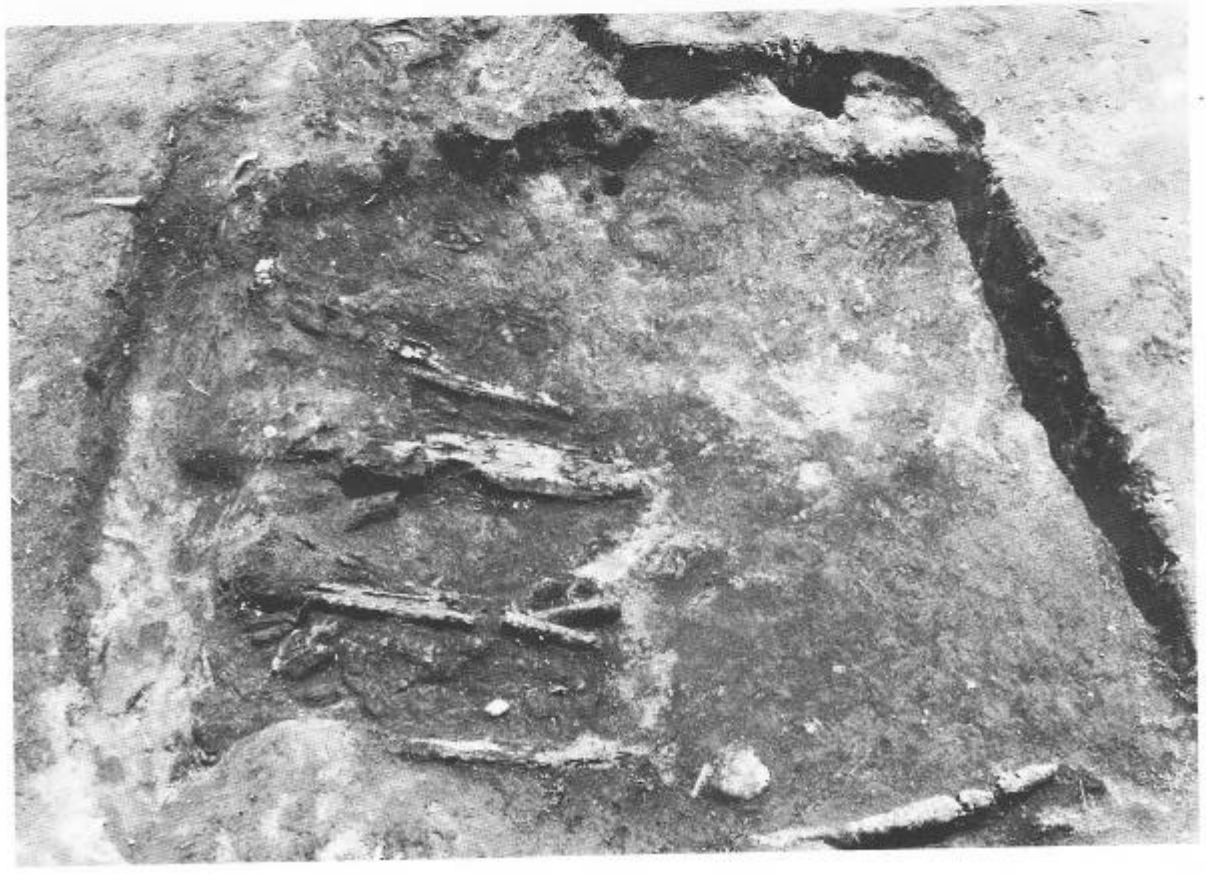
1　I・SI 002

2　I・SI 002

図版6　遺　跡



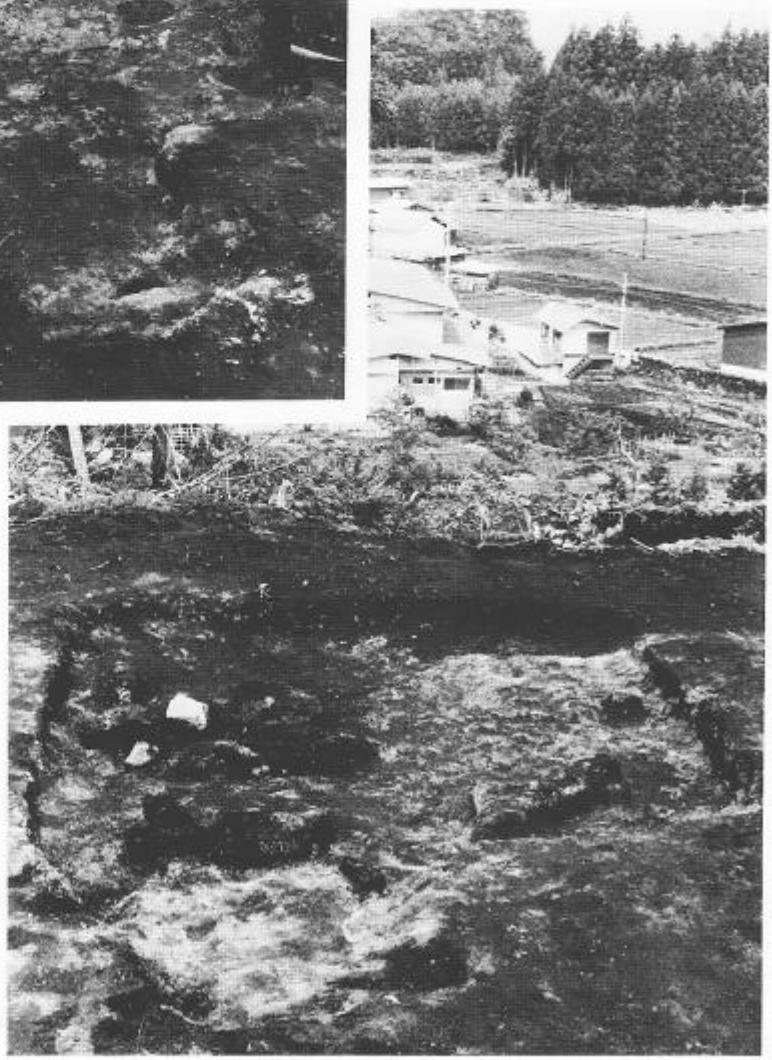
1　I・SI 003



2　I・SI 003

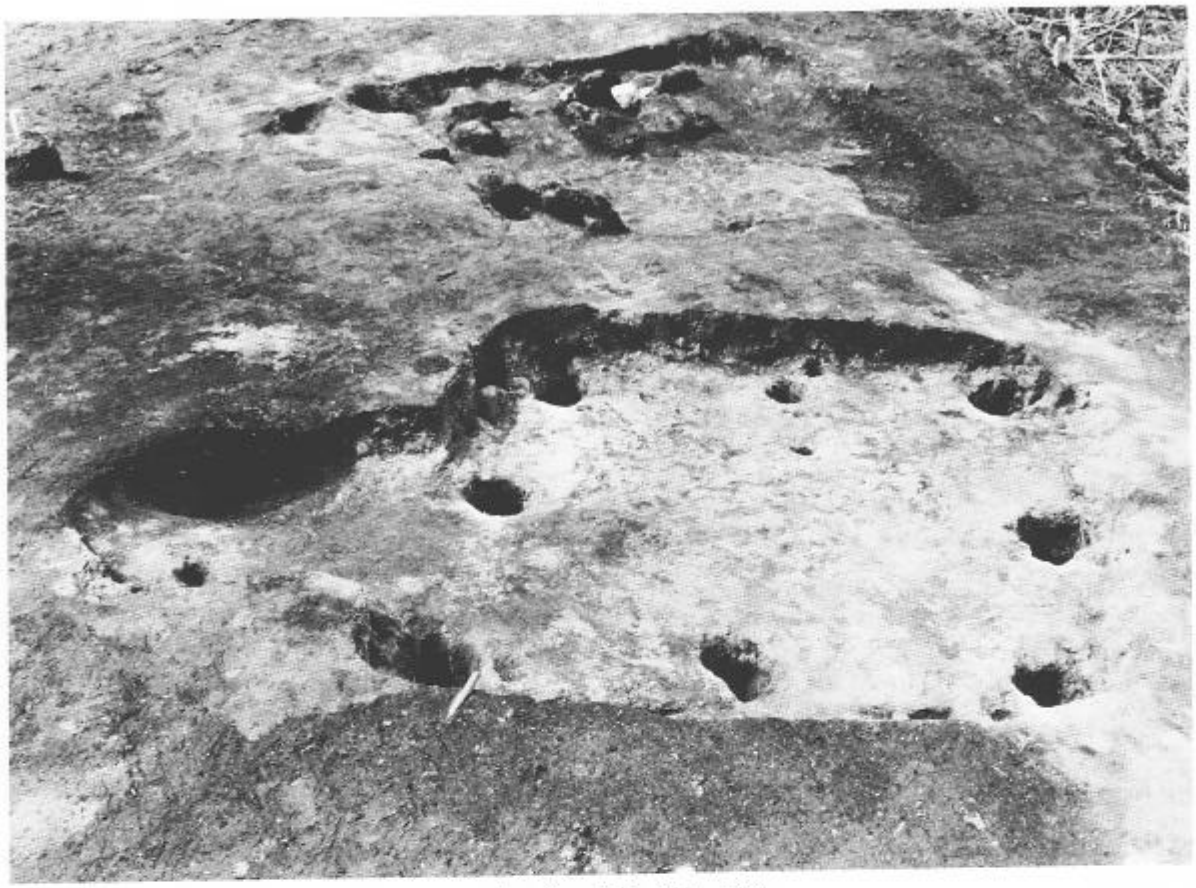
図版7　遺　跡

1　I・SI 003



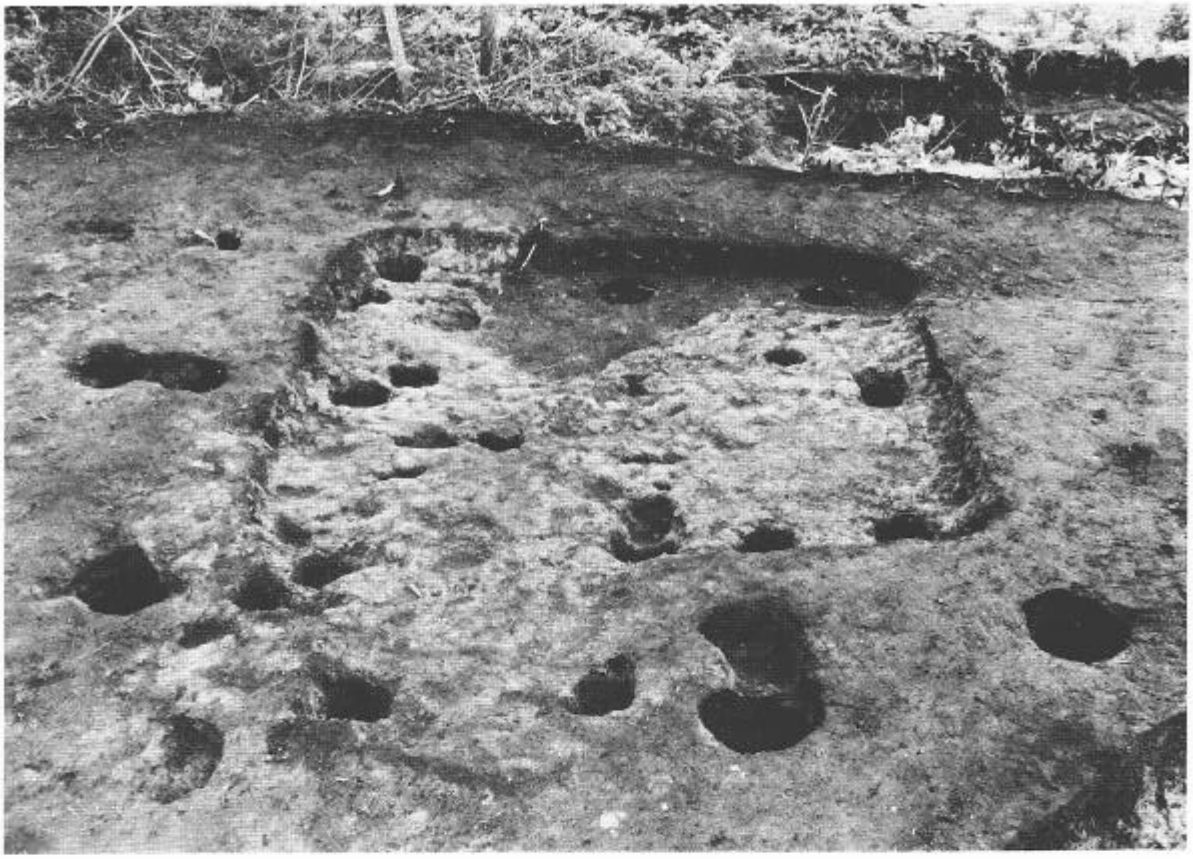
2　I・SI 004

図版8　遺　　跡



1　I・SI 003・004

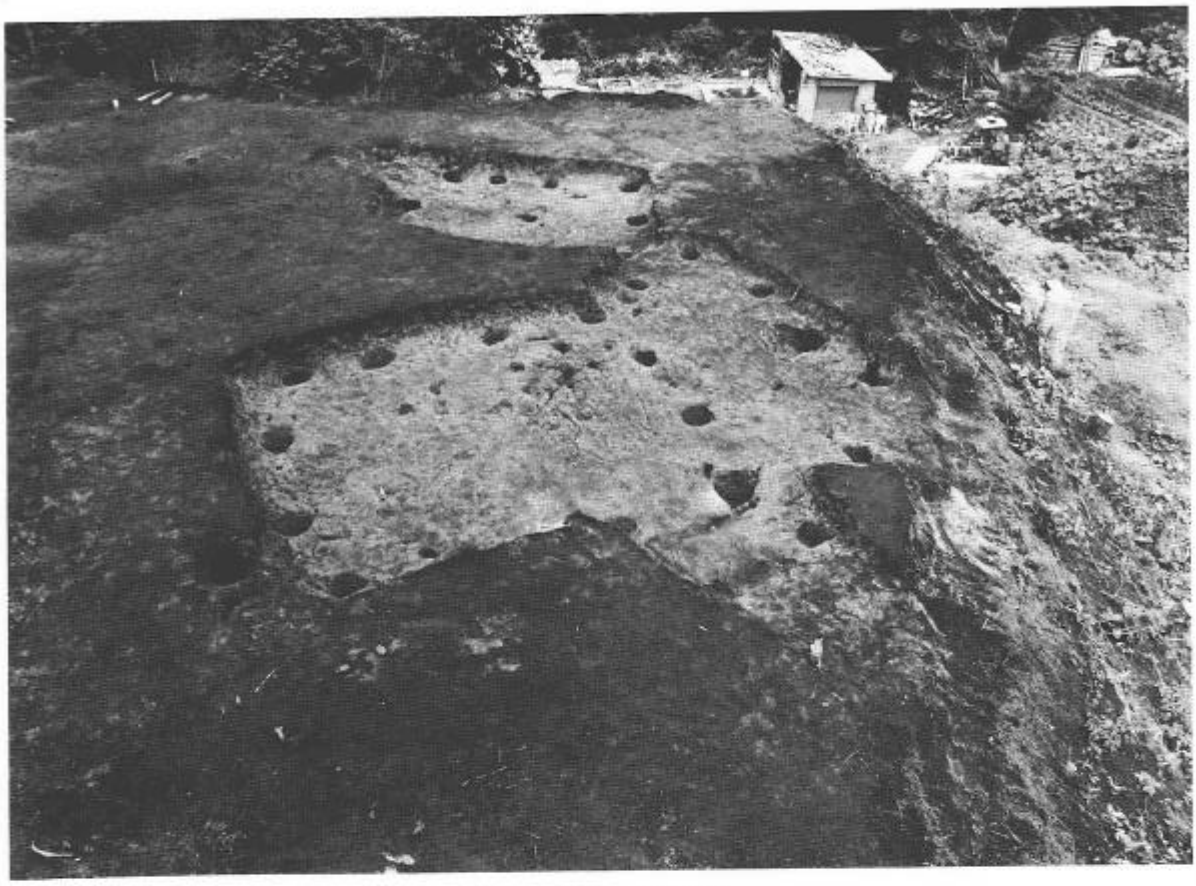
図版9　遺　跡　　2　I・SI 003・004



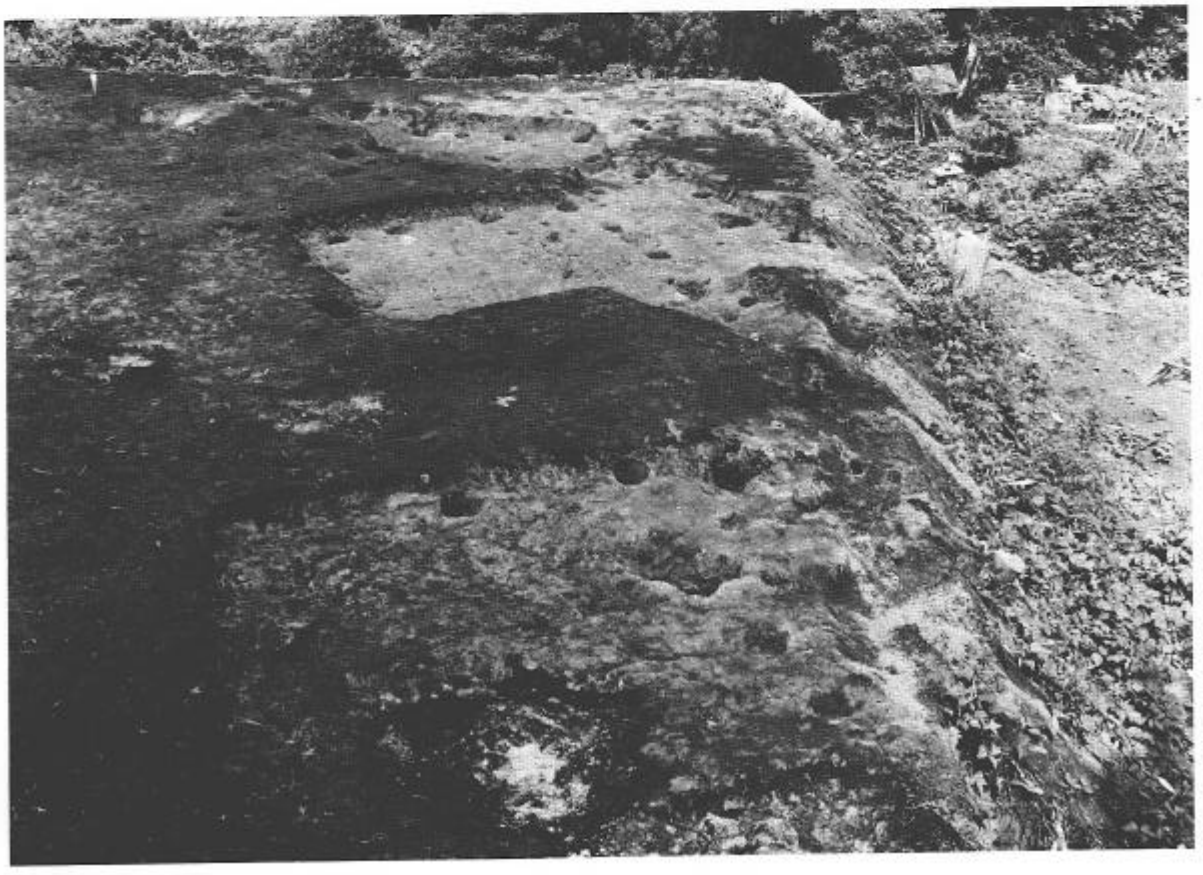
1　I・SI 004

2　I・SI 004

図版10　遺　　跡

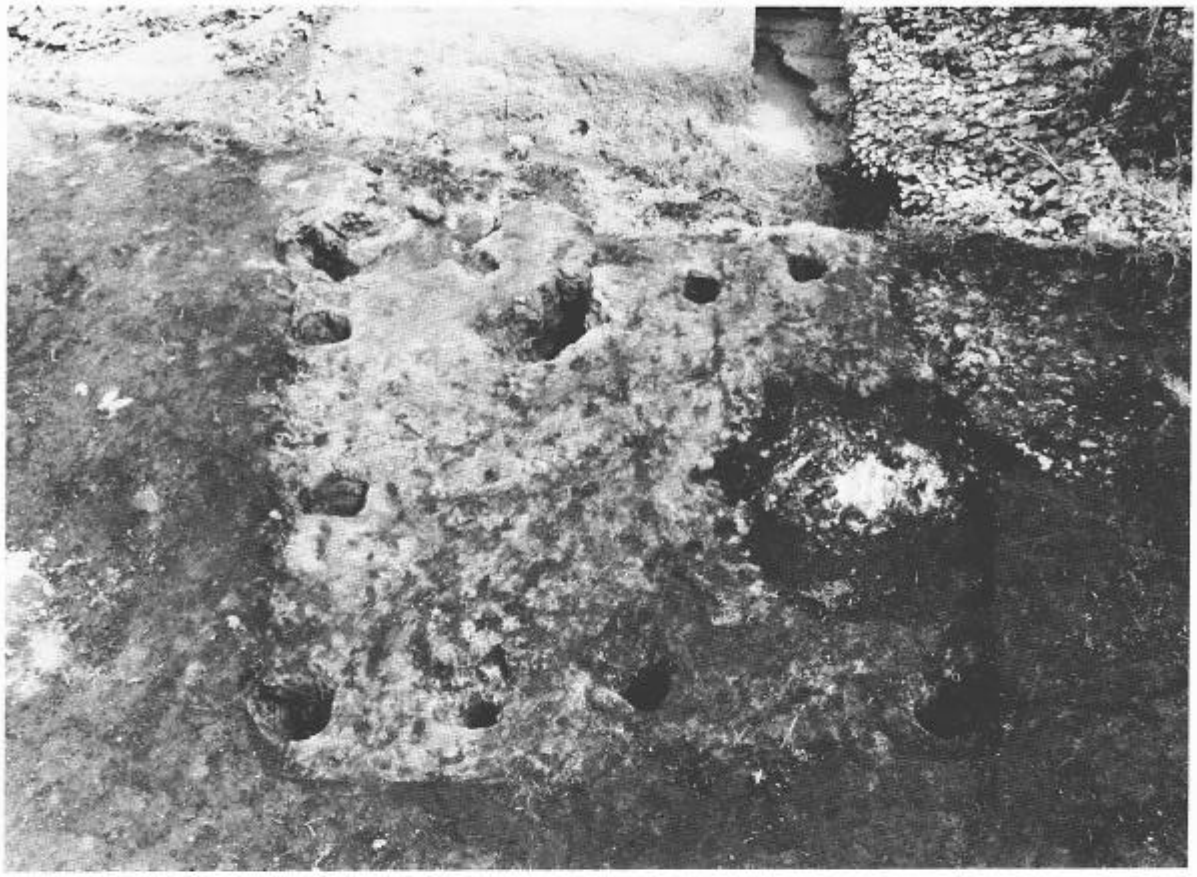


1　I・SI002・006

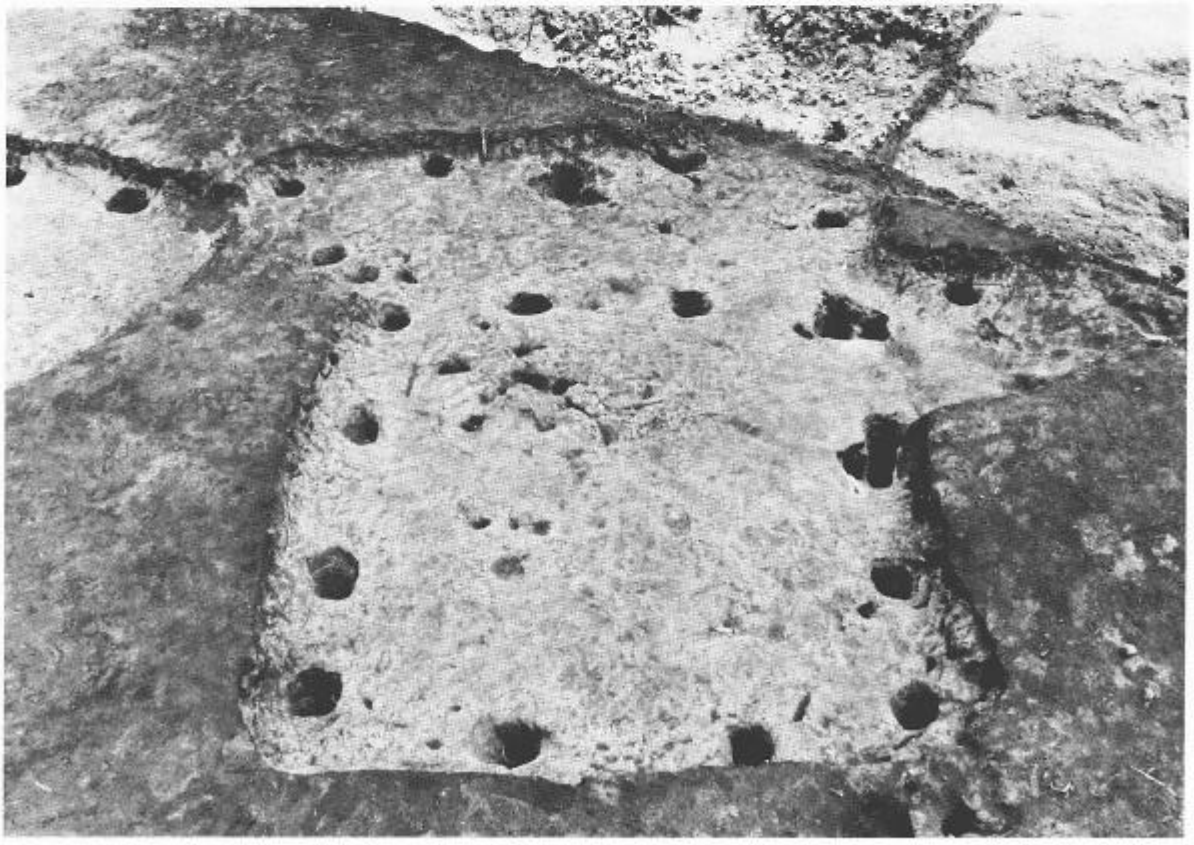


2　I・SI 002・005・006

図版11　遺　　跡



1　I・SI 005

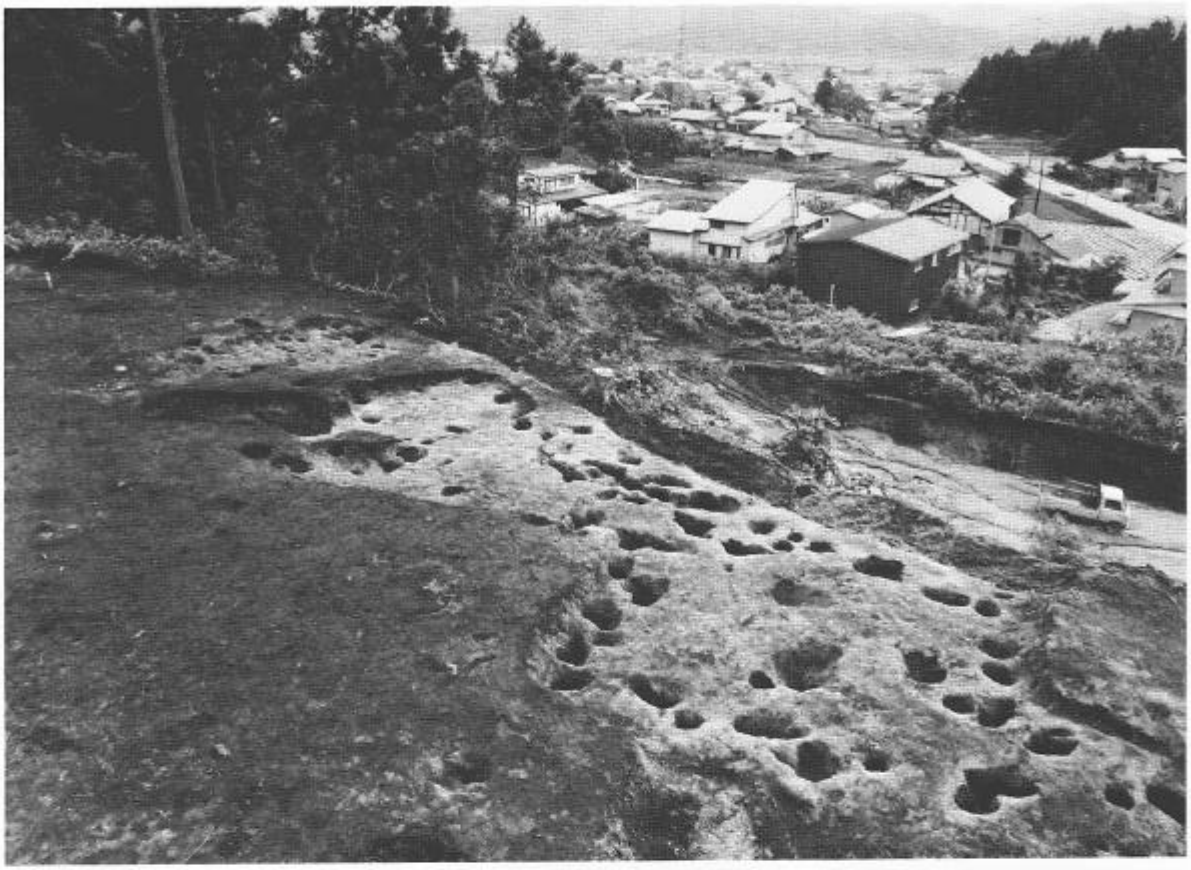


図版12　遺　跡　　2　I・SI 006

1　I・SI 003・004
007～010

2　I・SI 003・004・007～010

図版13　遺　　跡

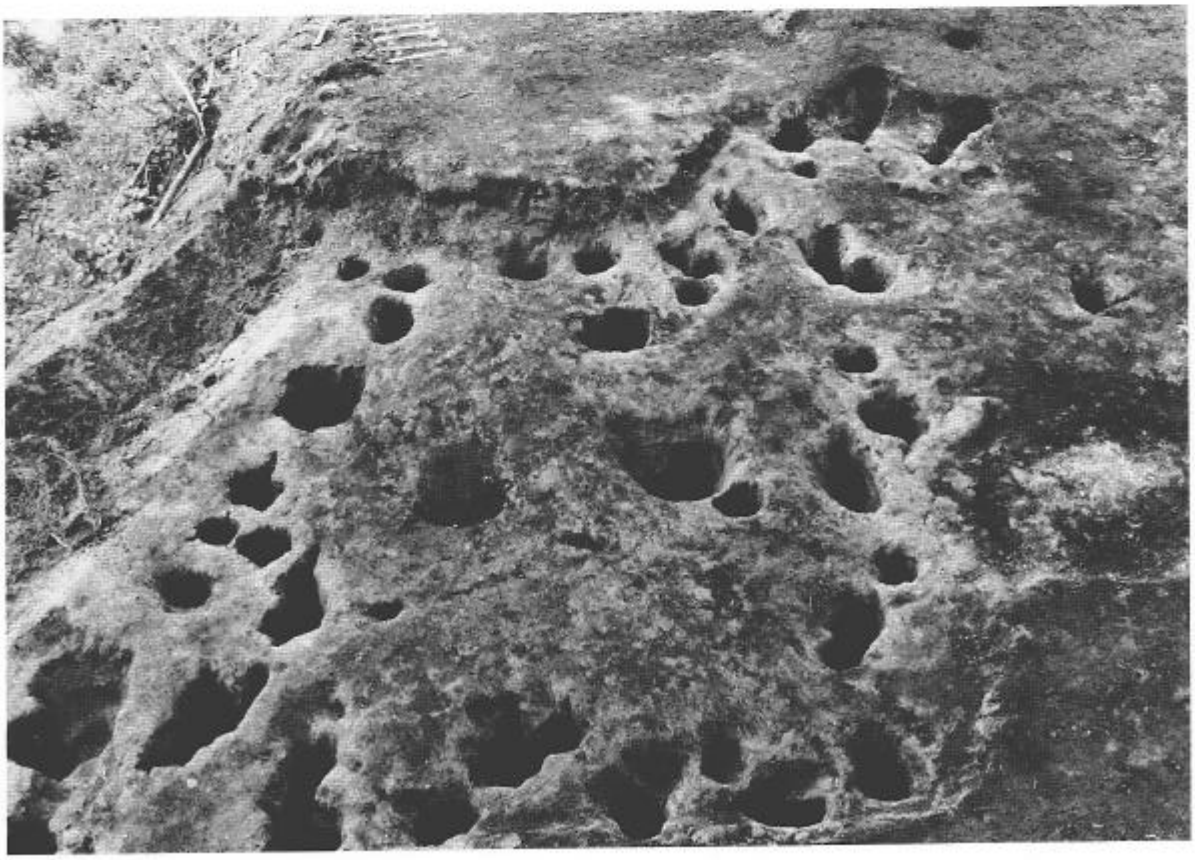


1　I・SI 003・004
007～010

2　I・SI 003・004・007～010

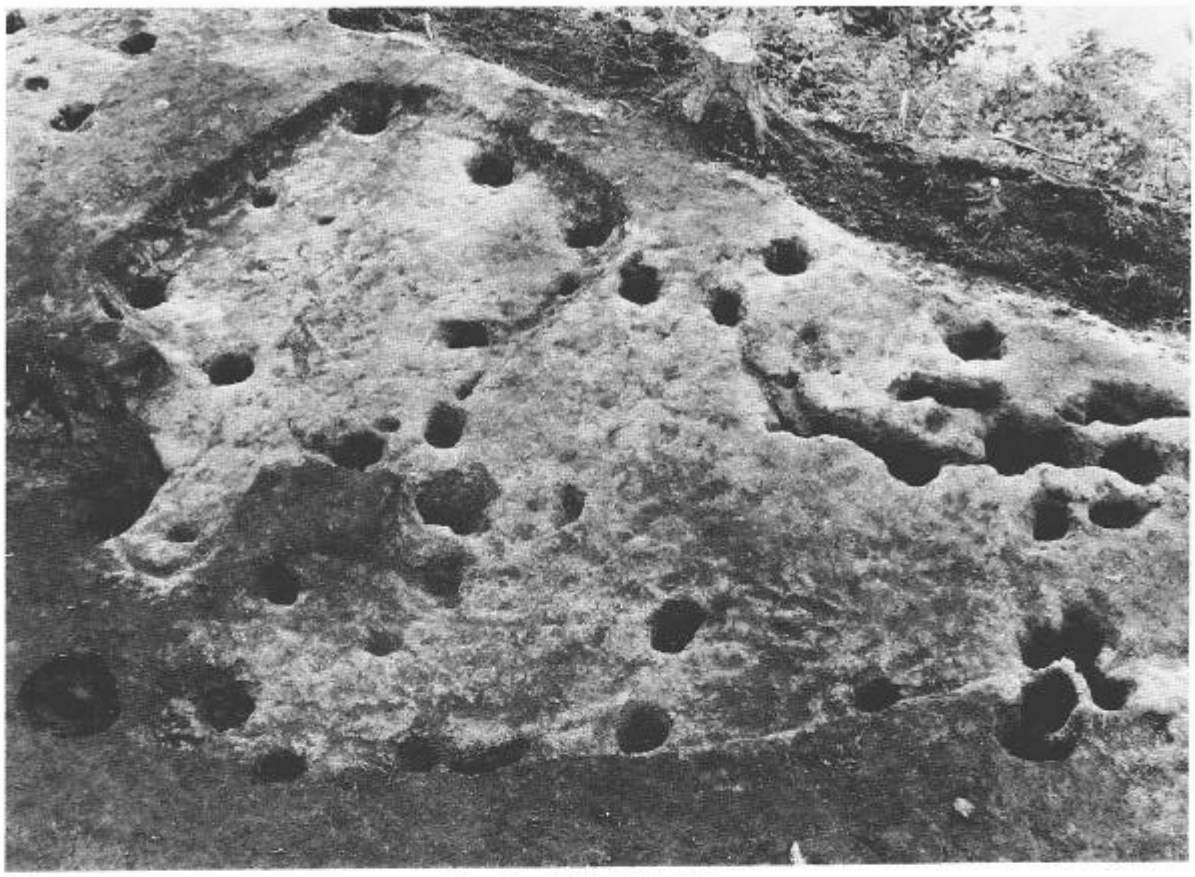
図版14　遺　跡

1　I・SI 009・010



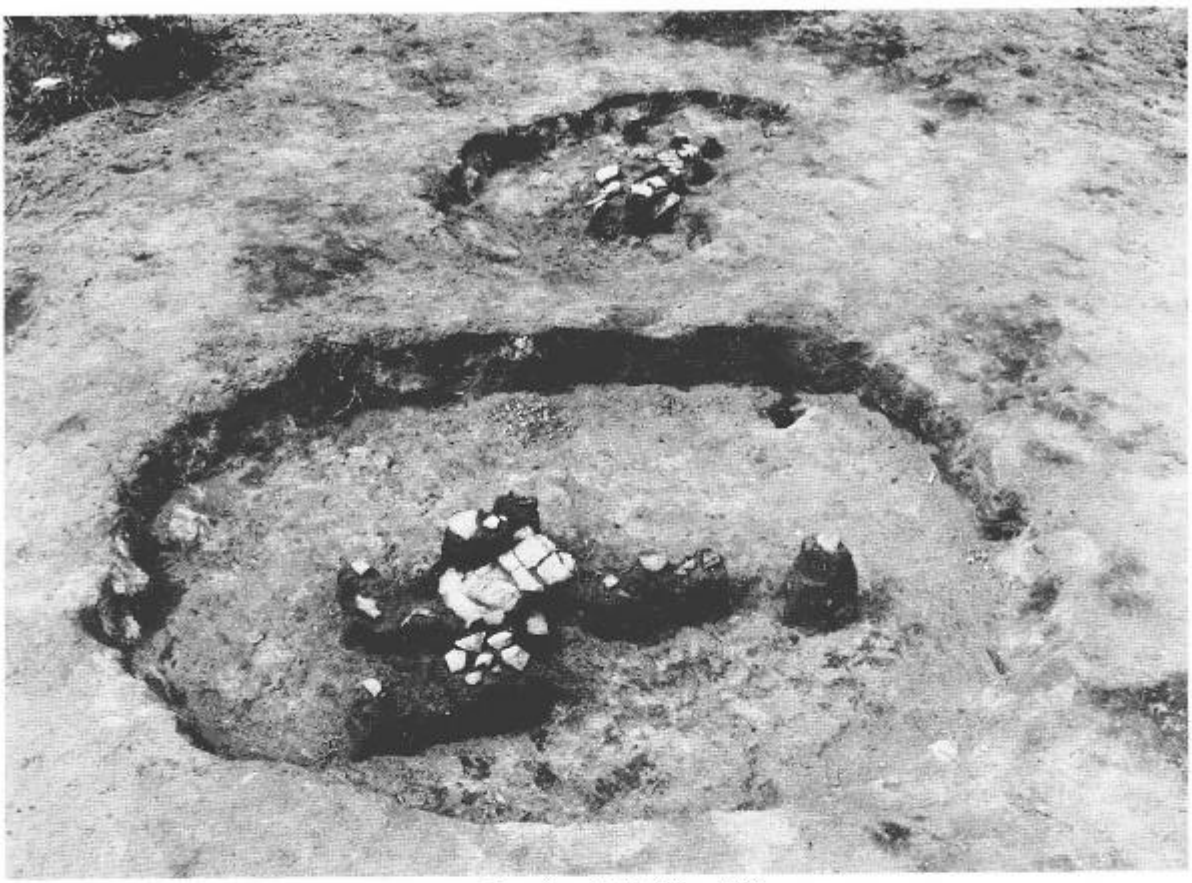
2　I・SI 009・010

図版15　遺　跡

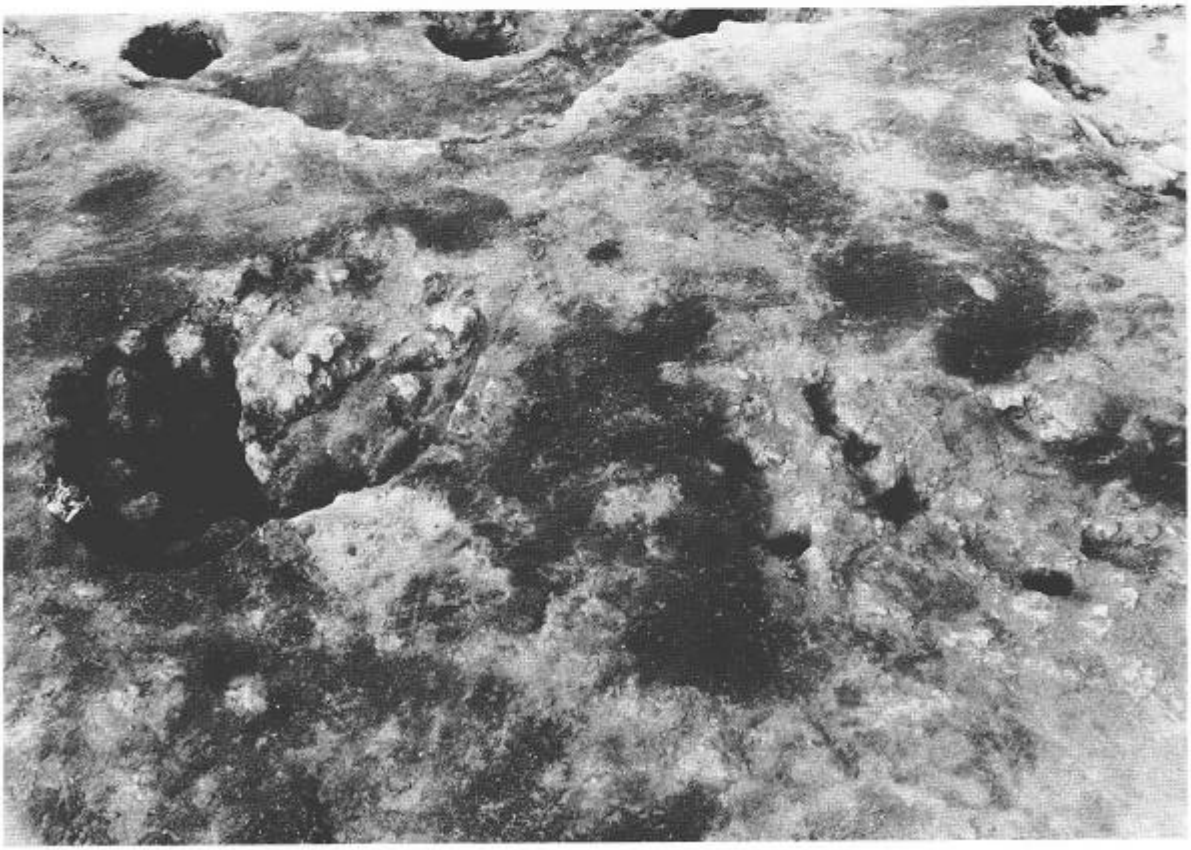


1　I・SI 003・008

図版16　遺　　跡　　2　I・SK 001・002

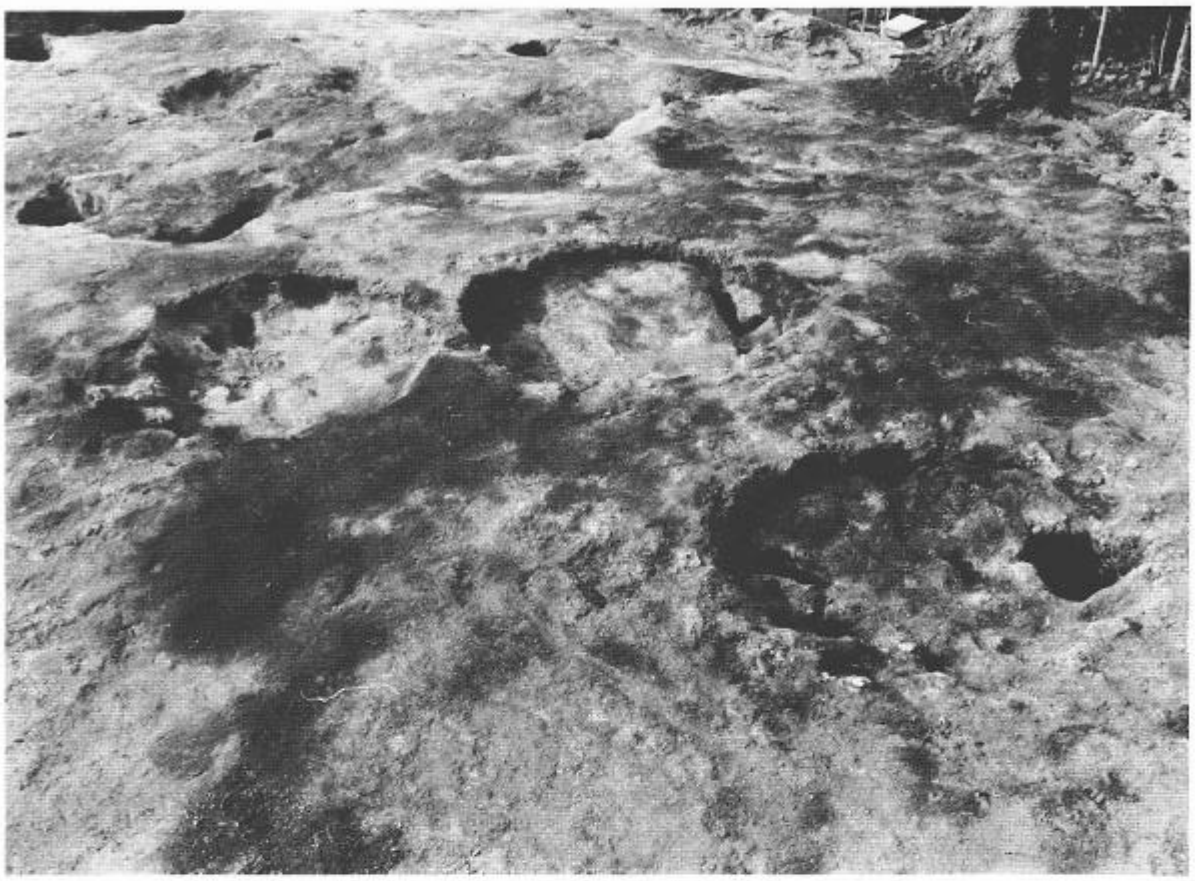


1　I・SK 001・002

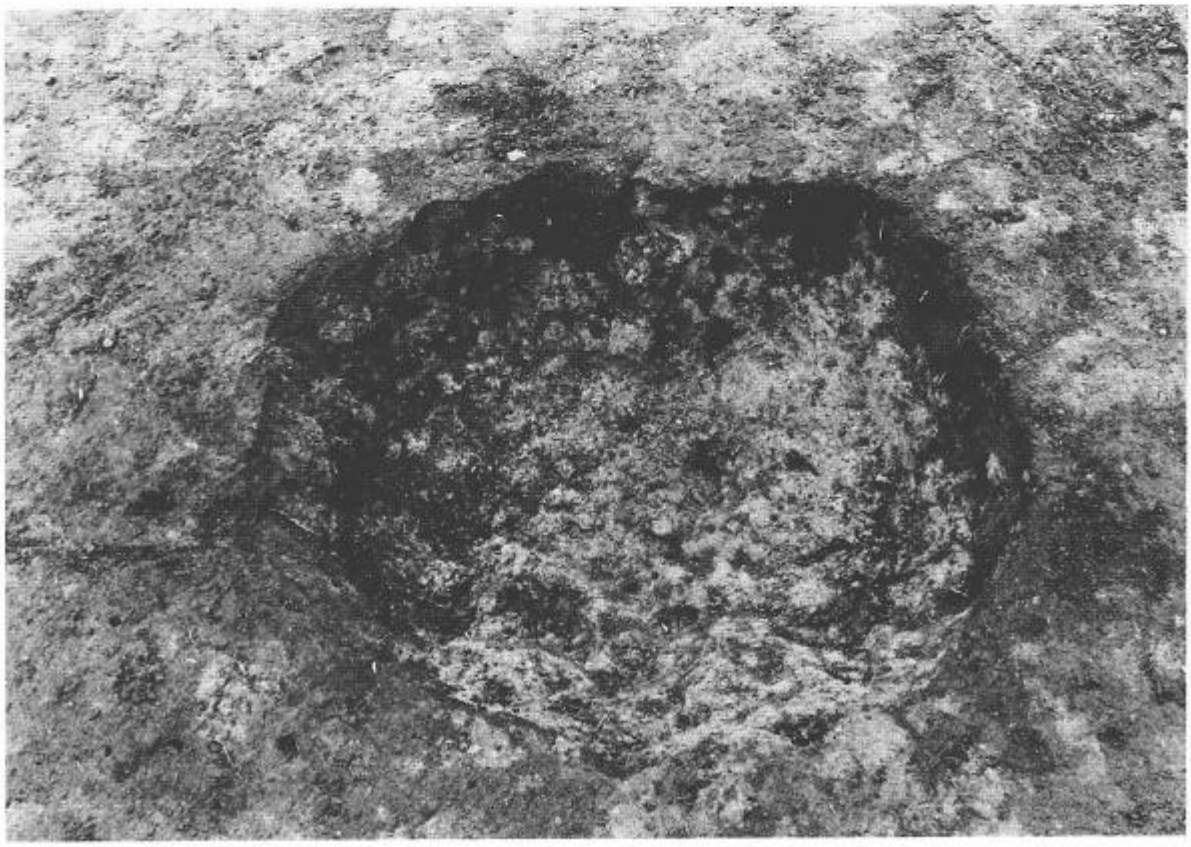


2　I・SK 006・007

図版17　遺　跡

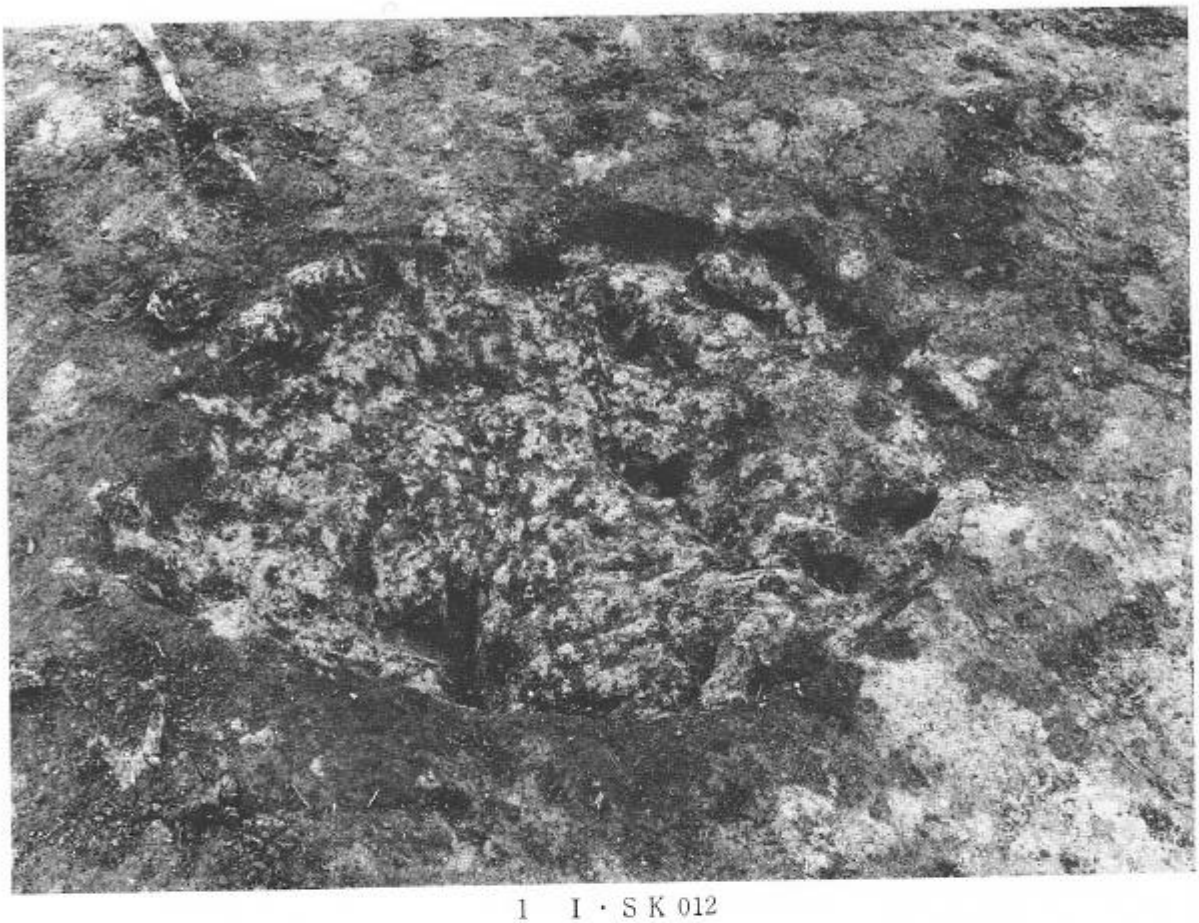


1　I・SK 008~010

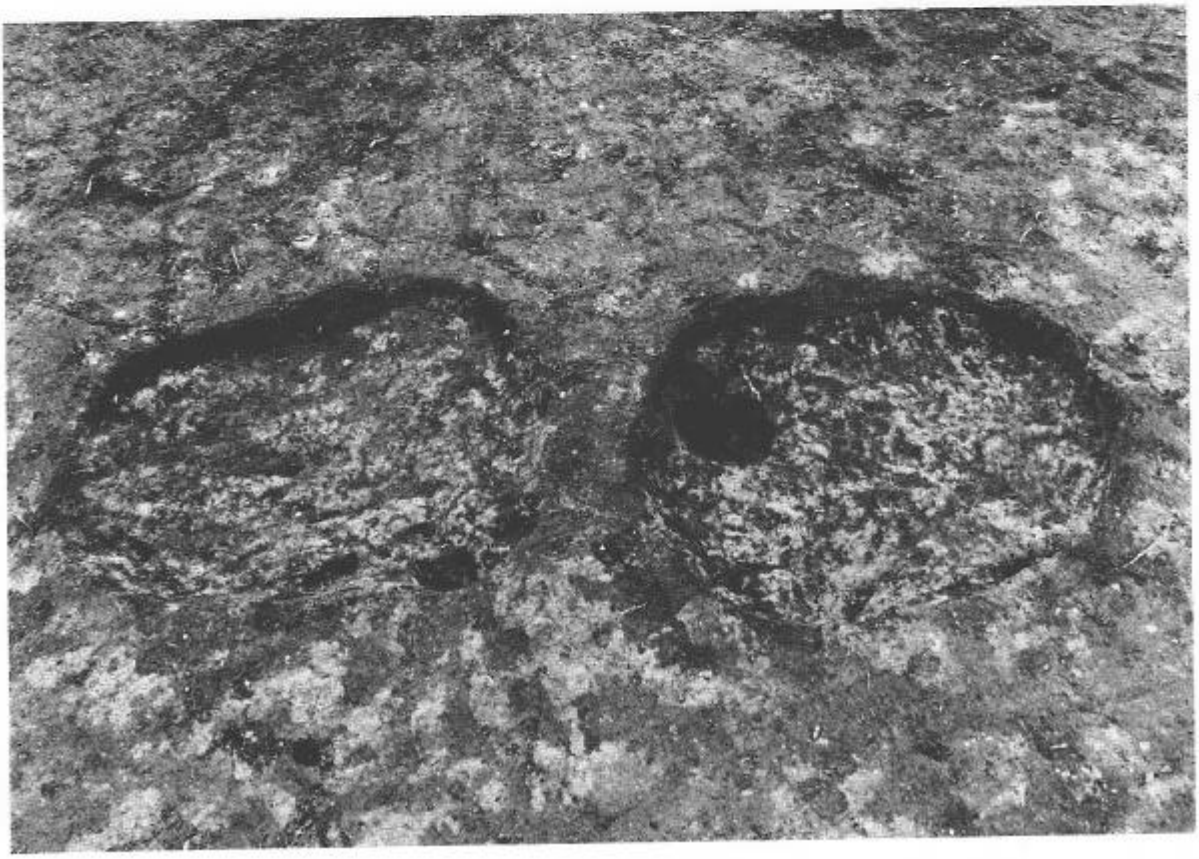


2　I・SK 011

図版18　遺　跡



1　I・SK012

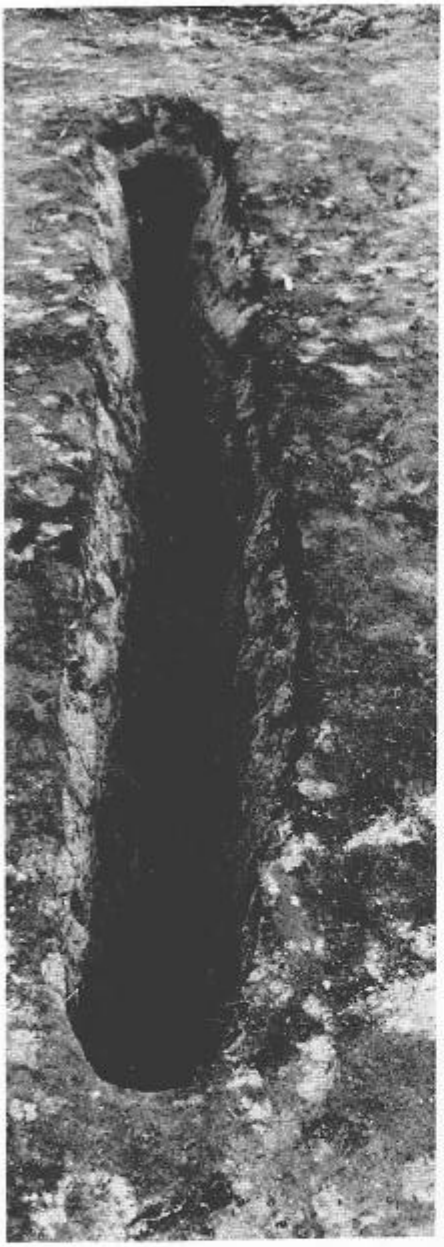


2　I・SK013・014

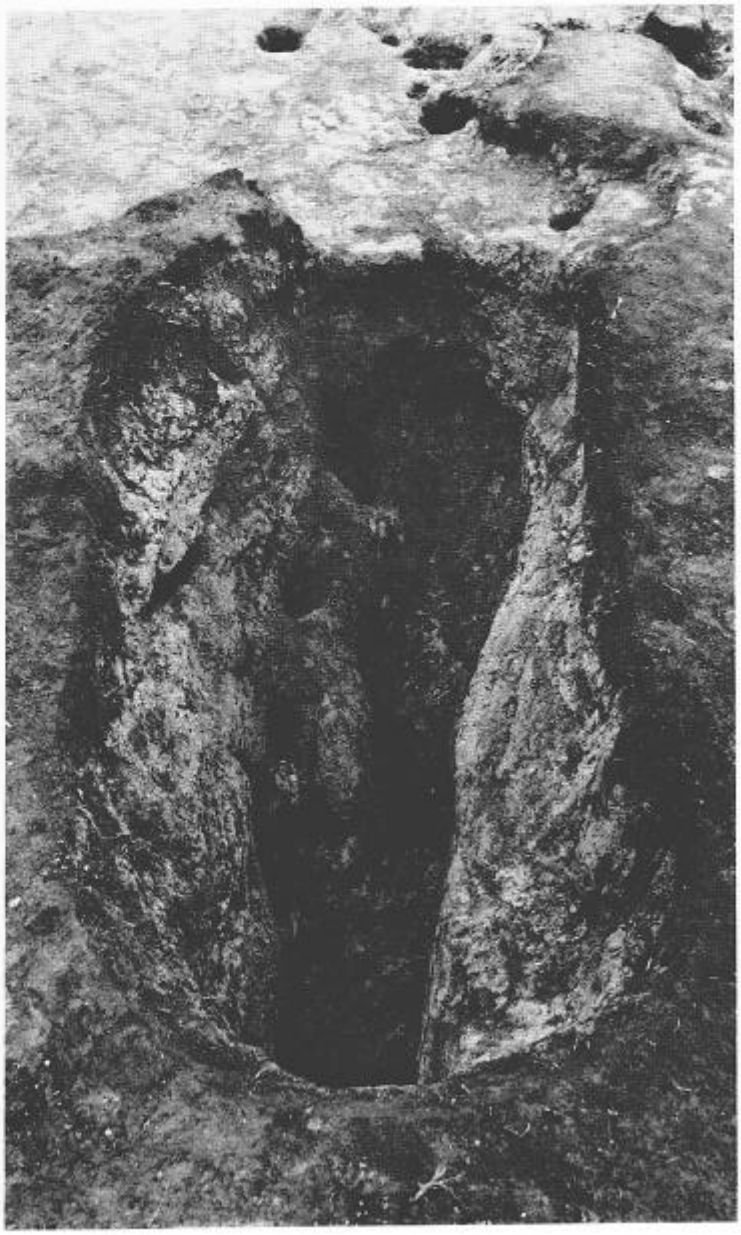
図版19　遺　　跡

1　I・SK 015

図版20　遺　跡　　2　I・SK（F）002



1　I・SK（T）001



2　I・SK（T）002

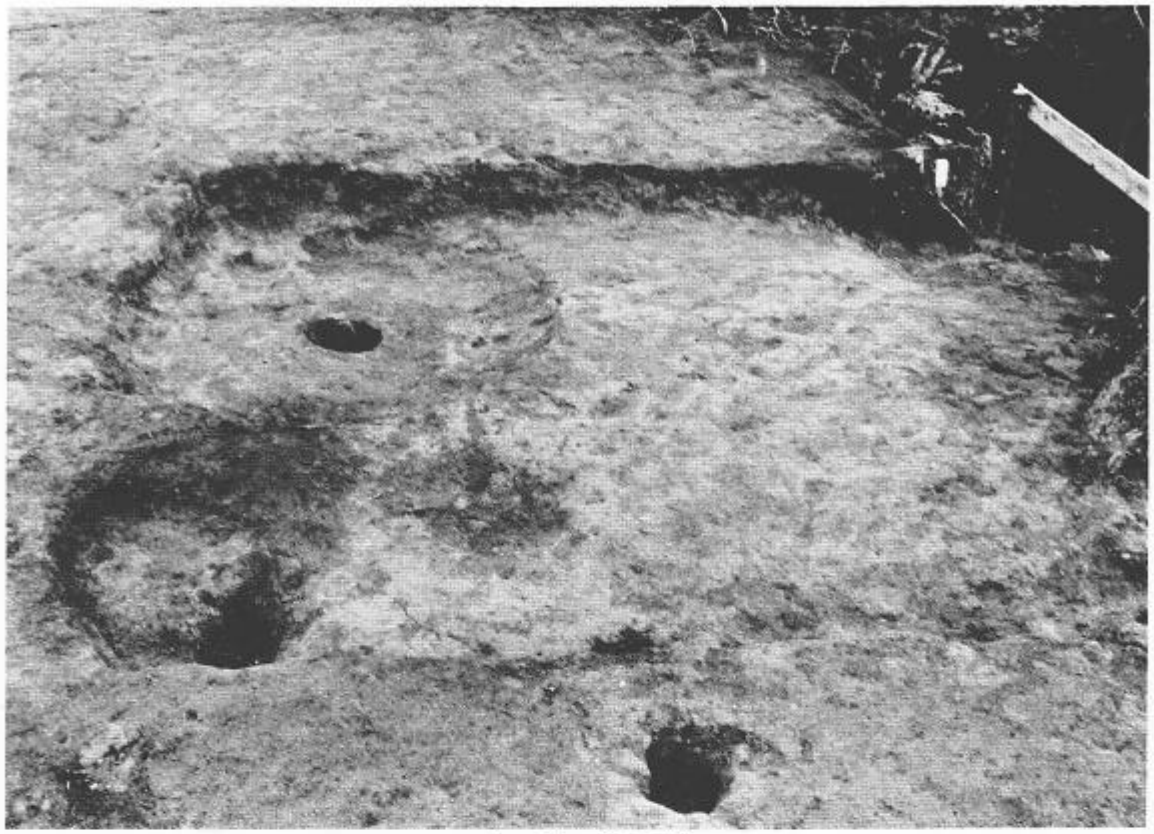
図版21　遺　跡

1　I郭全景

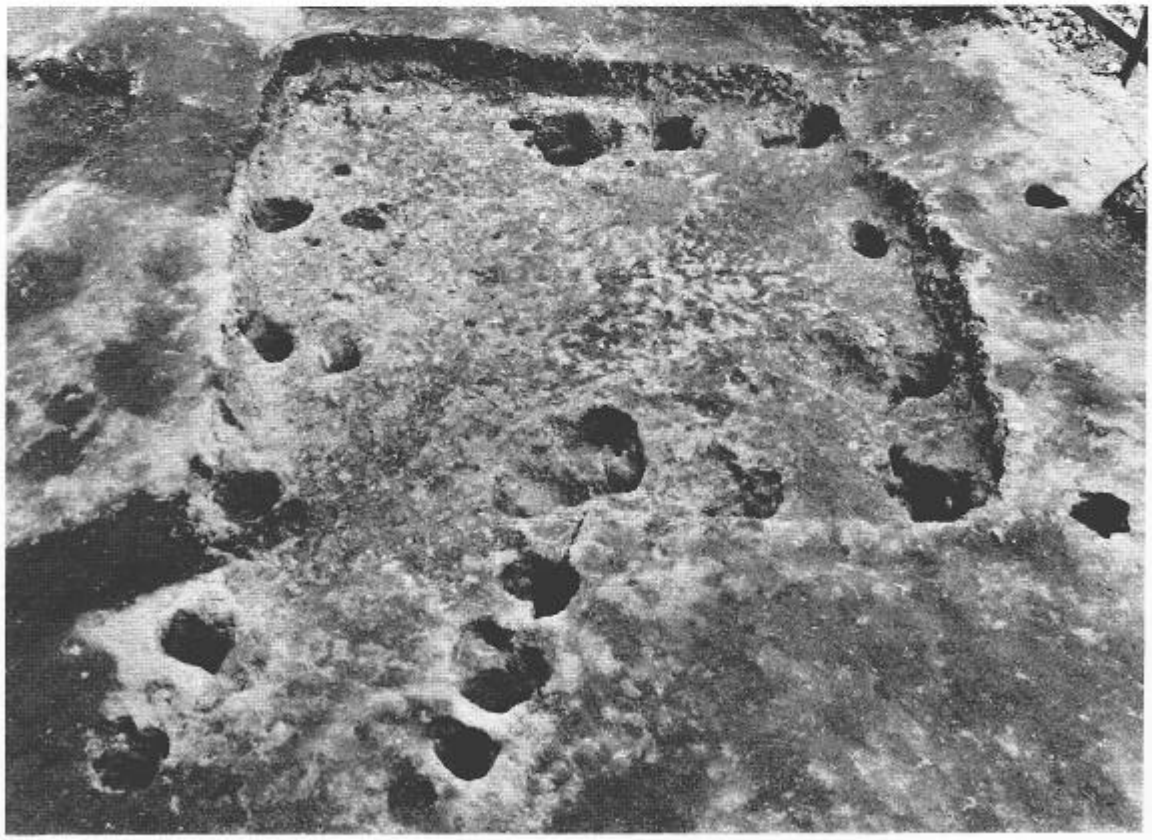
図版22　遺　　跡　　2　I郭全景

1　Ⅰ郭から見たⅡ郭

図版23　遺　　跡　　2　Ⅱ郭調査状況



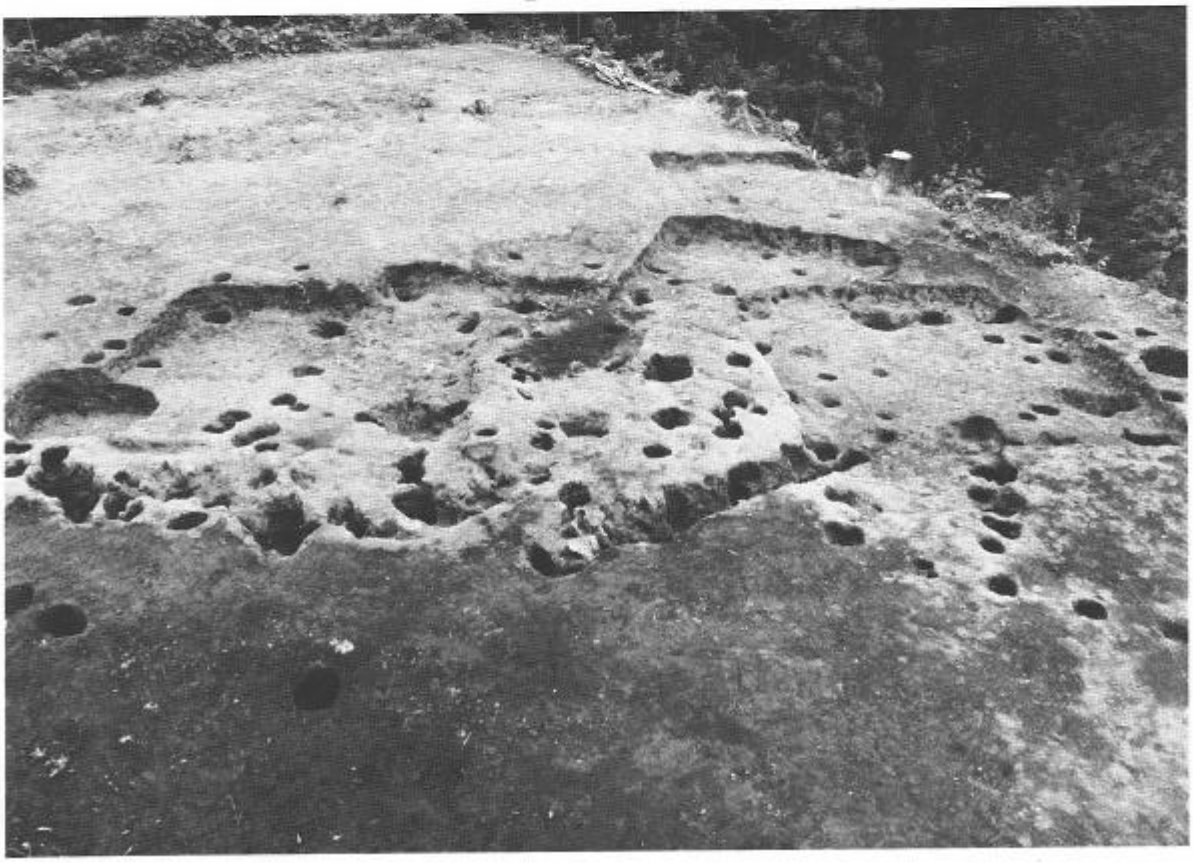
1　II・S I 001



2　II・S I 002

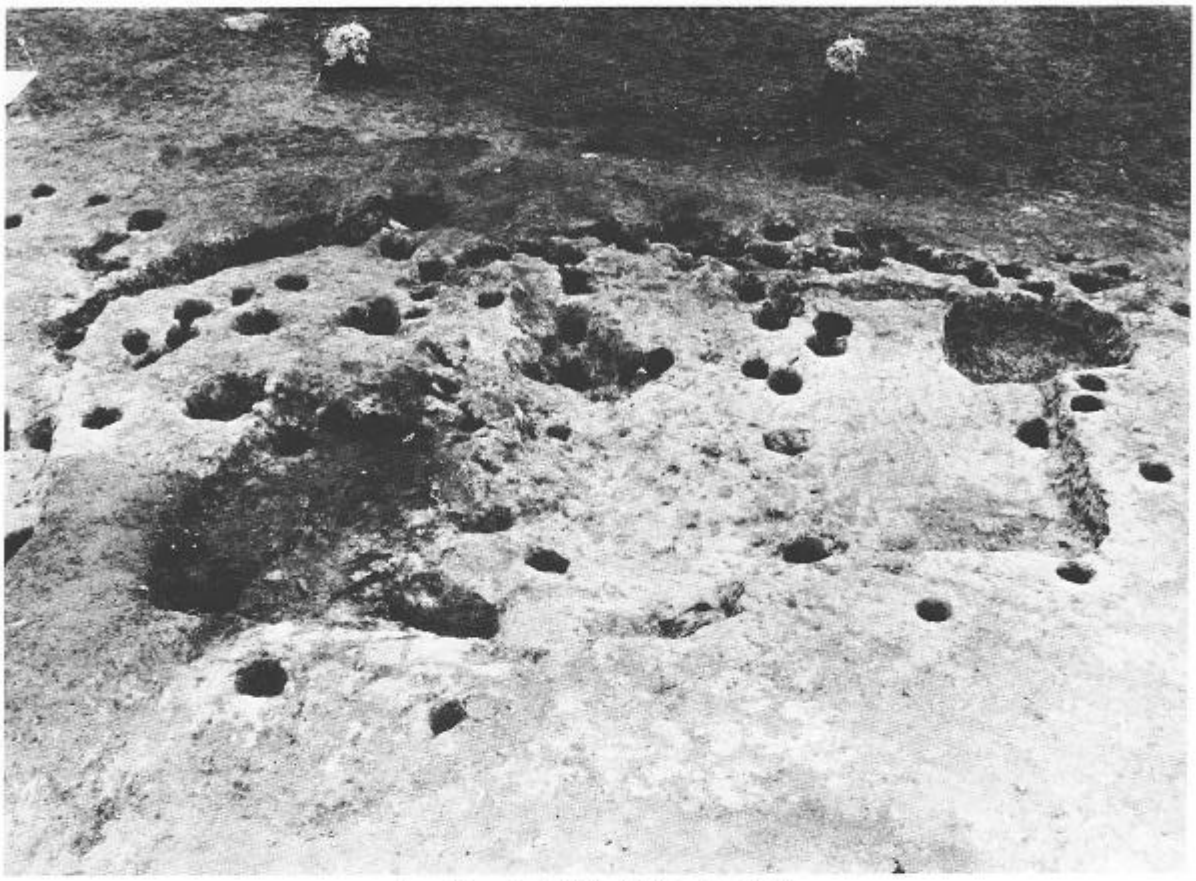
図版24　遺　跡

1　II・S I 001～005

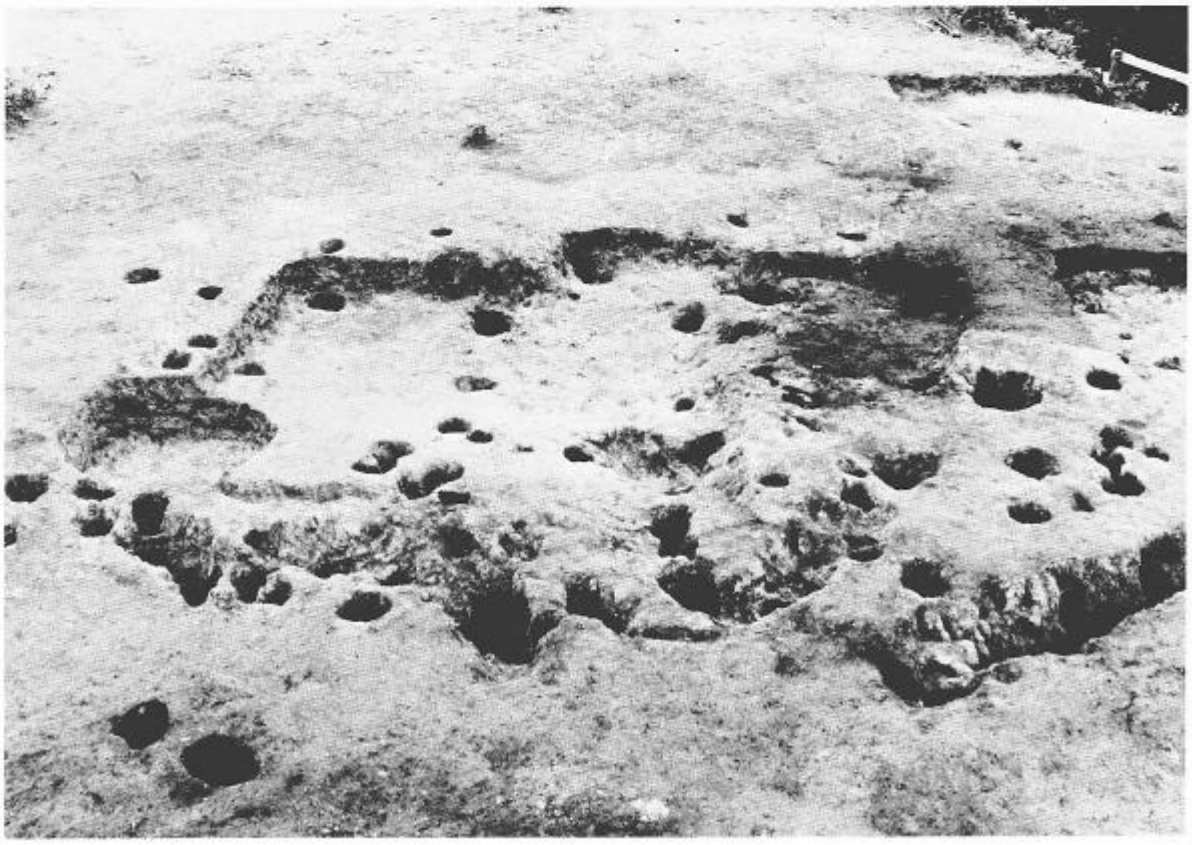


2　II・S I 001～005・017

図版25　遺　　跡

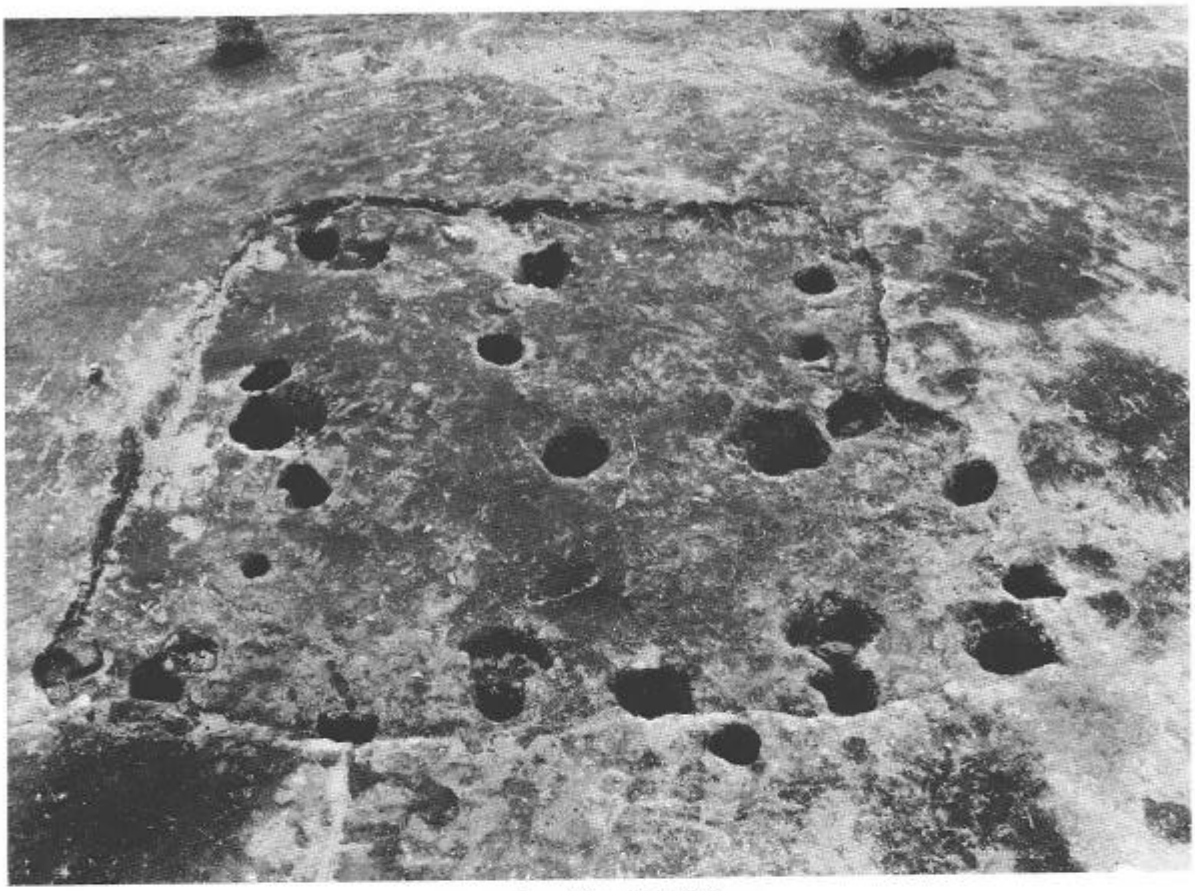


1　II・S I 004・005・S K 004

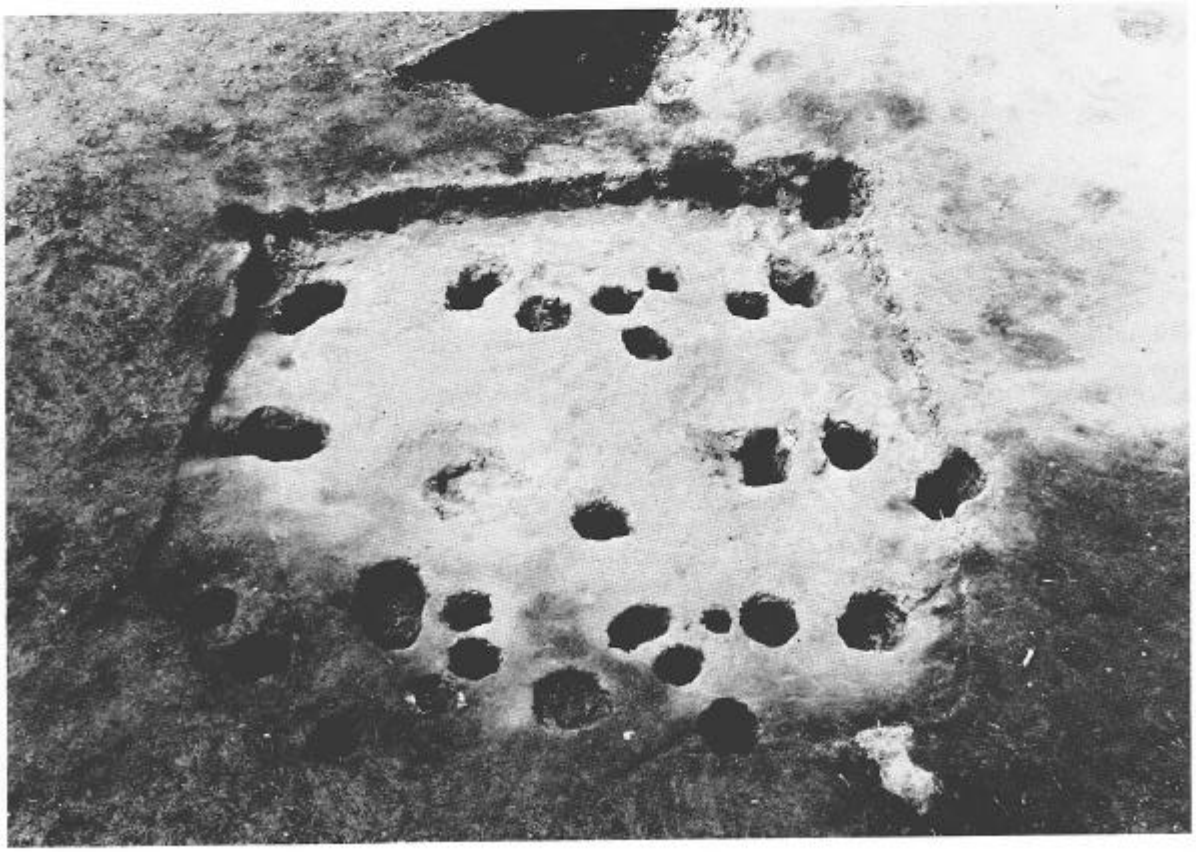


2　II・S I 004・005・S K 004

図版26　遺　　跡

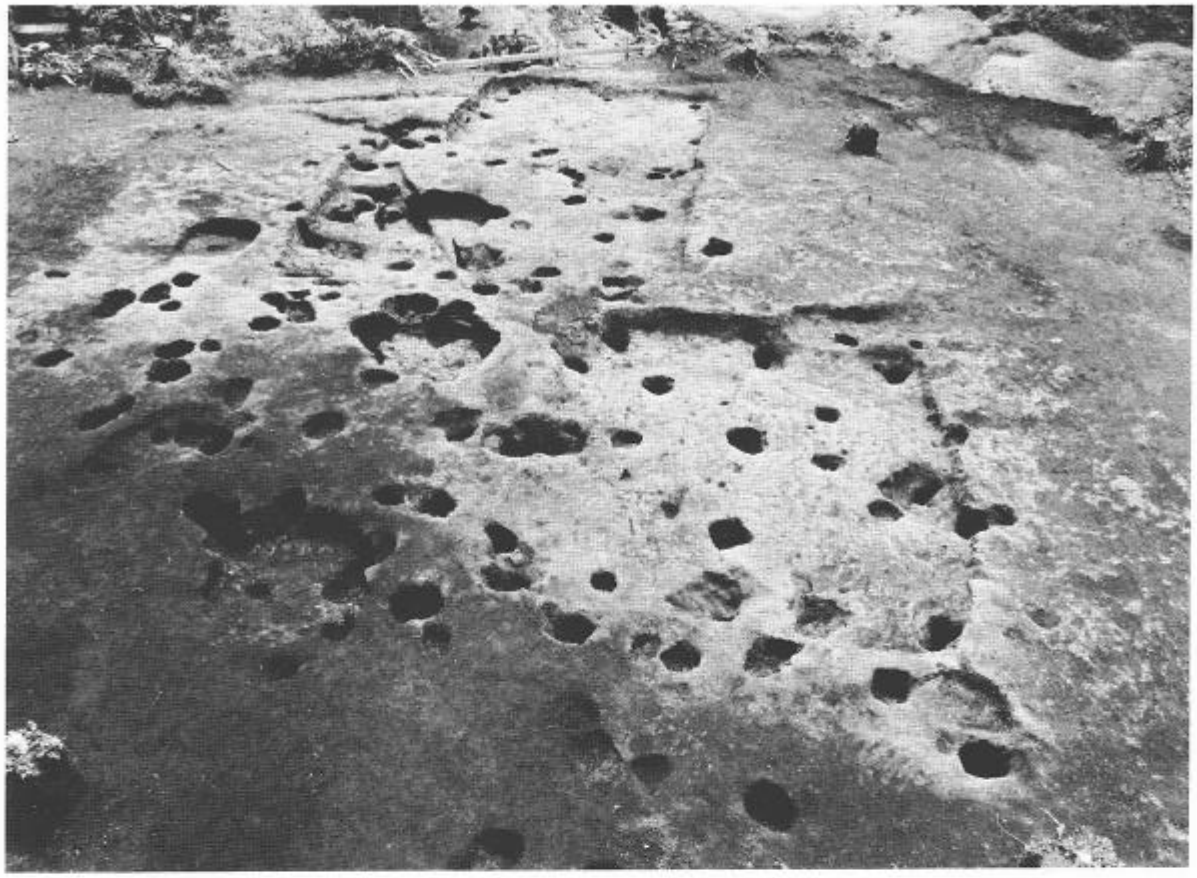


1　II・S I 006

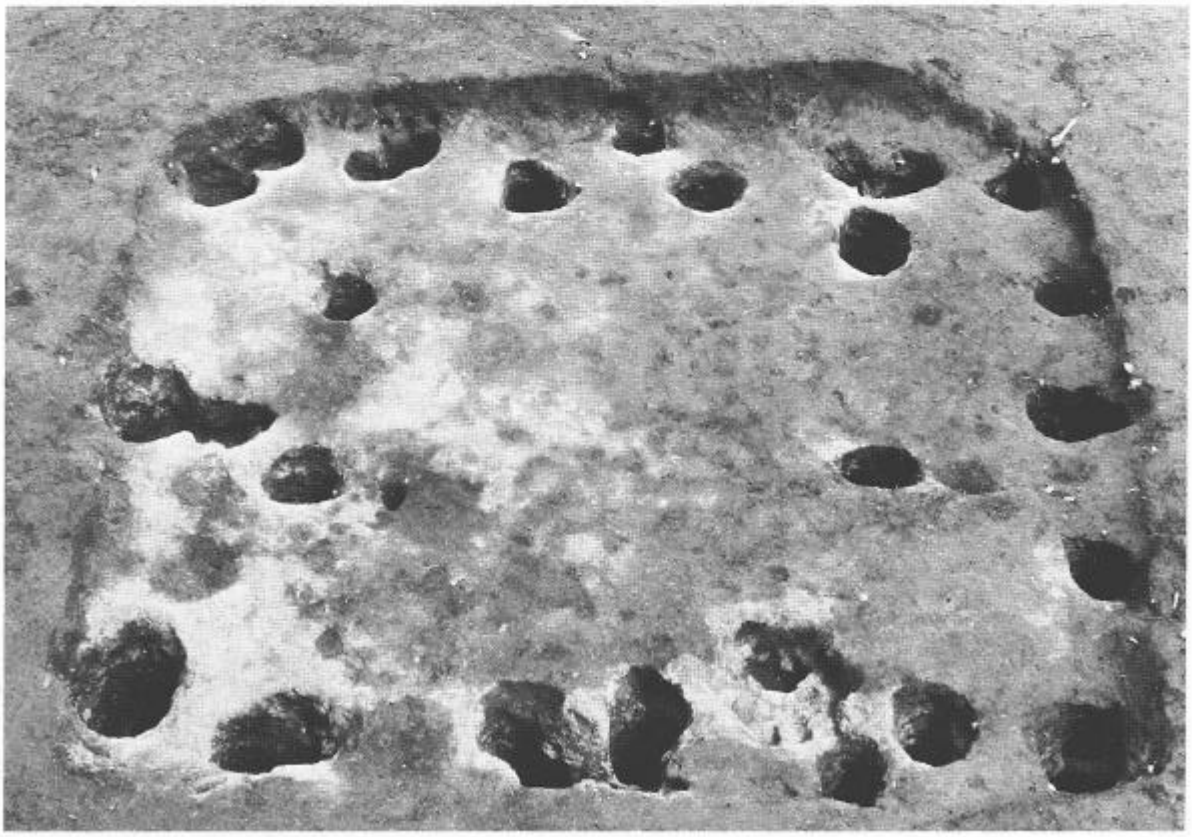


2　II・S I 007

図版27　遺　　跡

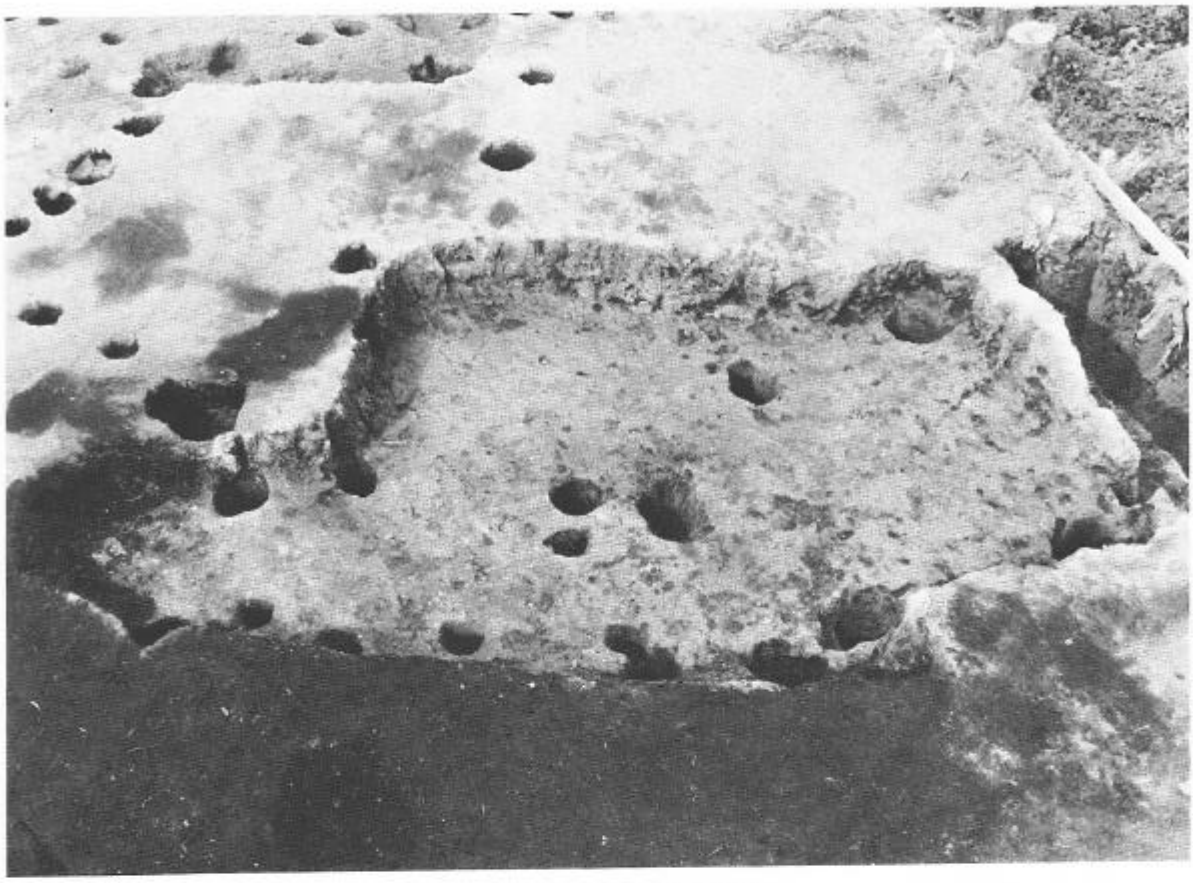


1　II・SI 006・009・010

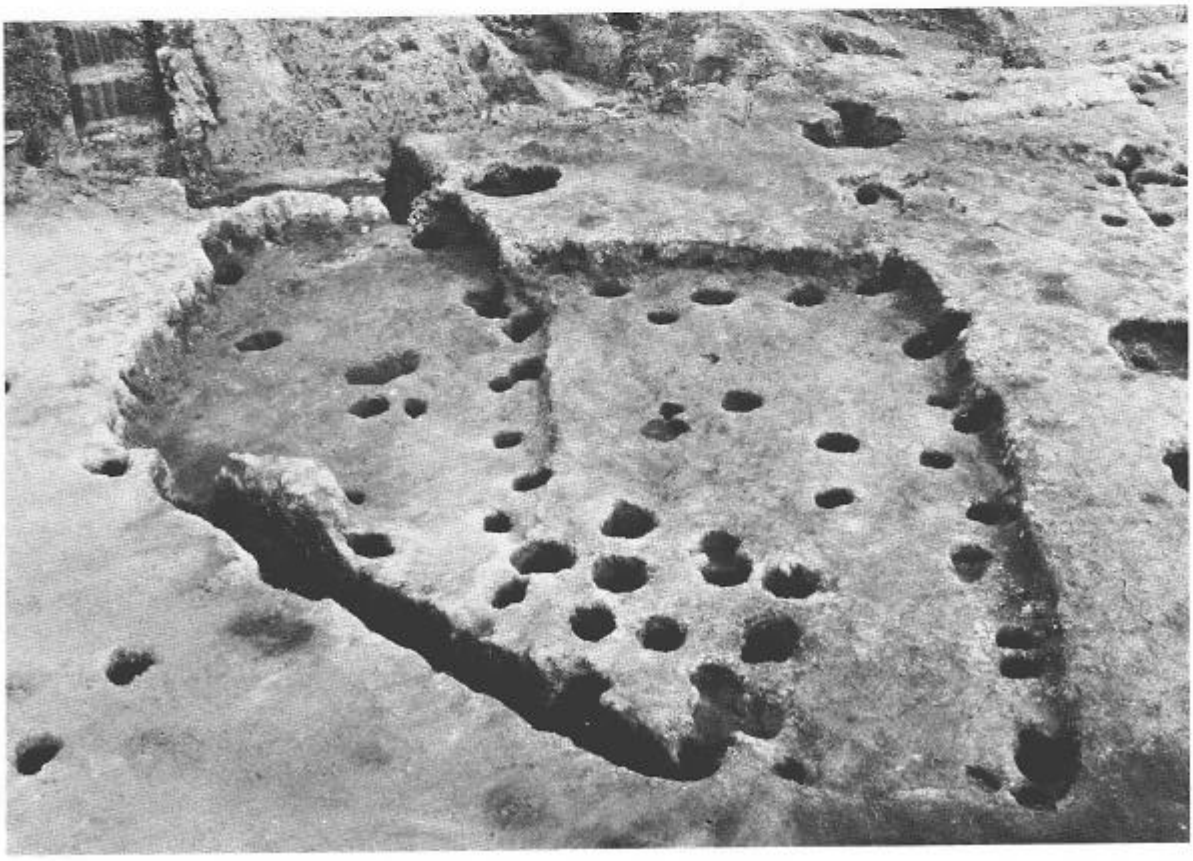


2　II・SI 008

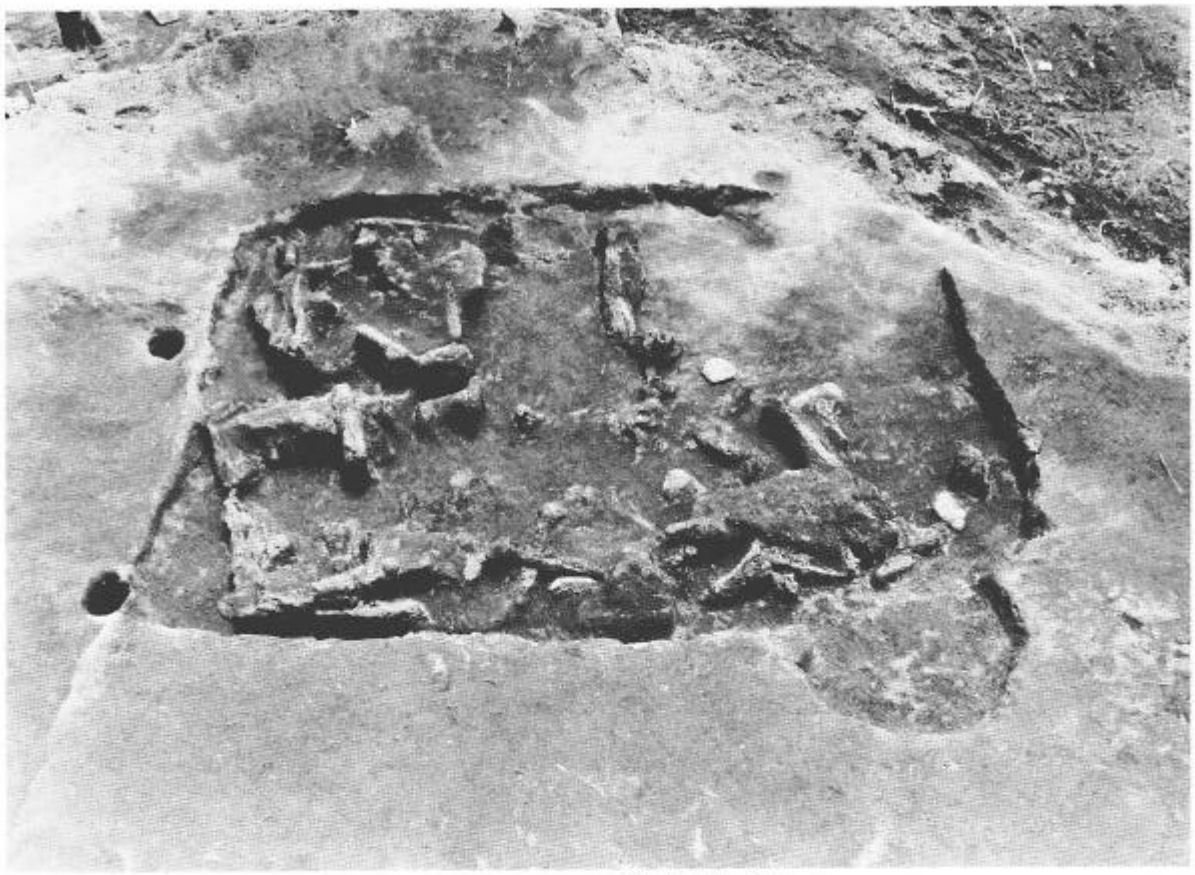
図版28　遺　跡



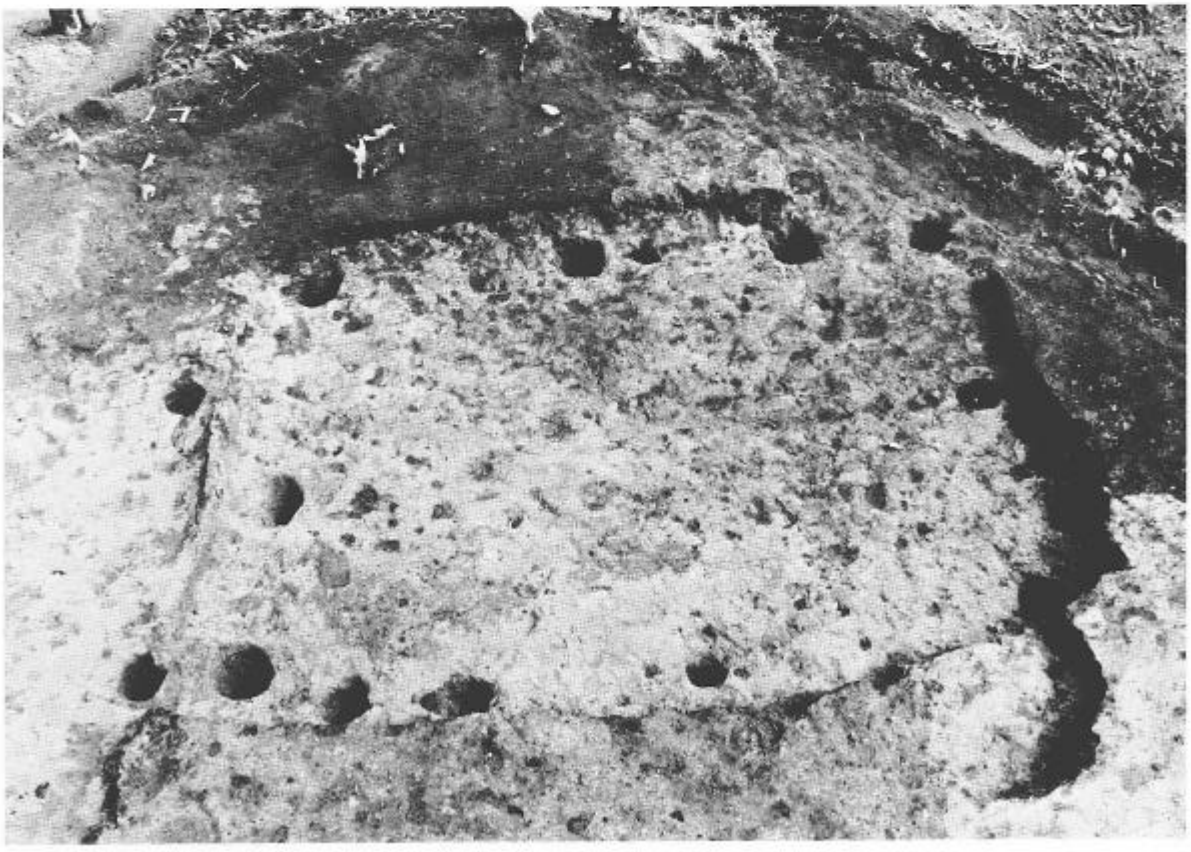
1　II・S I 011・018



図版29　遺　跡　　2　II・S I 011・012・018・S K（T）004



1　II・S I 013炭化材出土状況

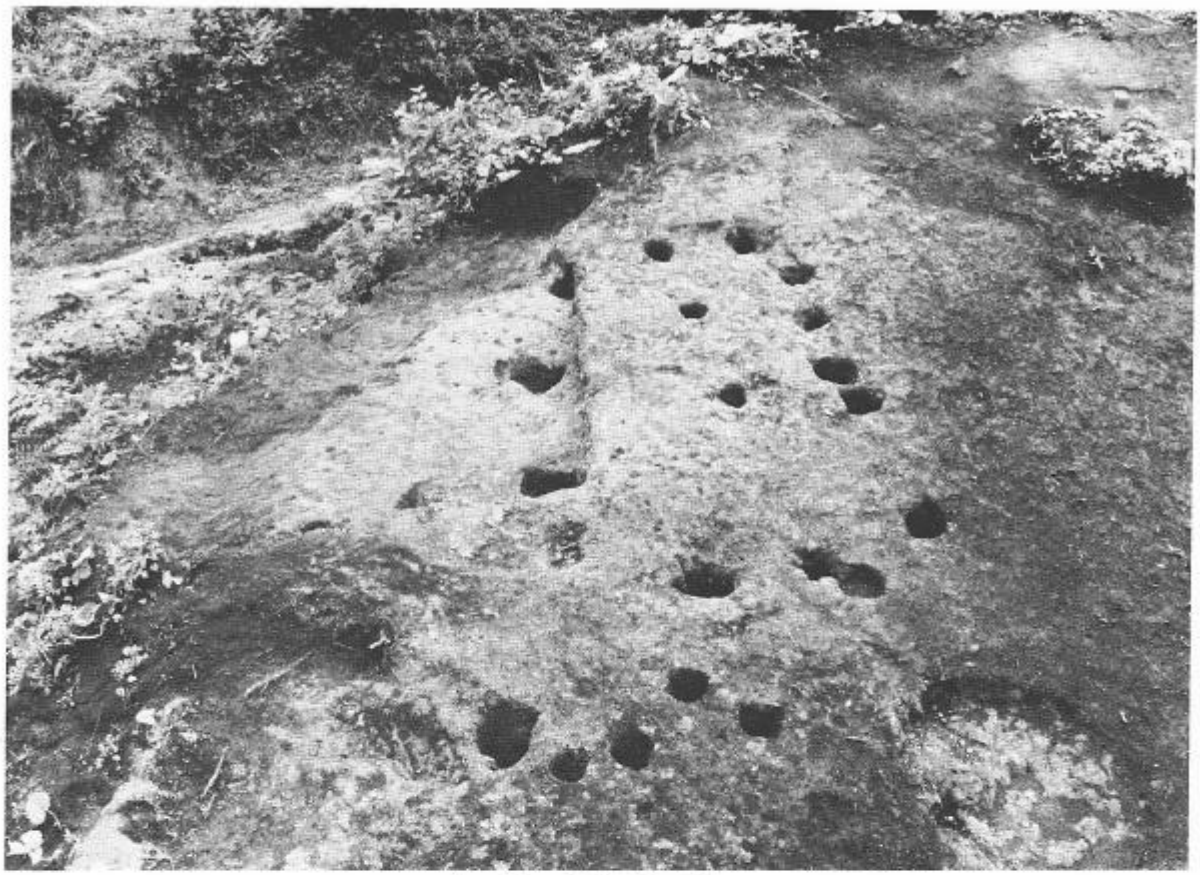


図版30　遺　跡　　2　II・S I 013

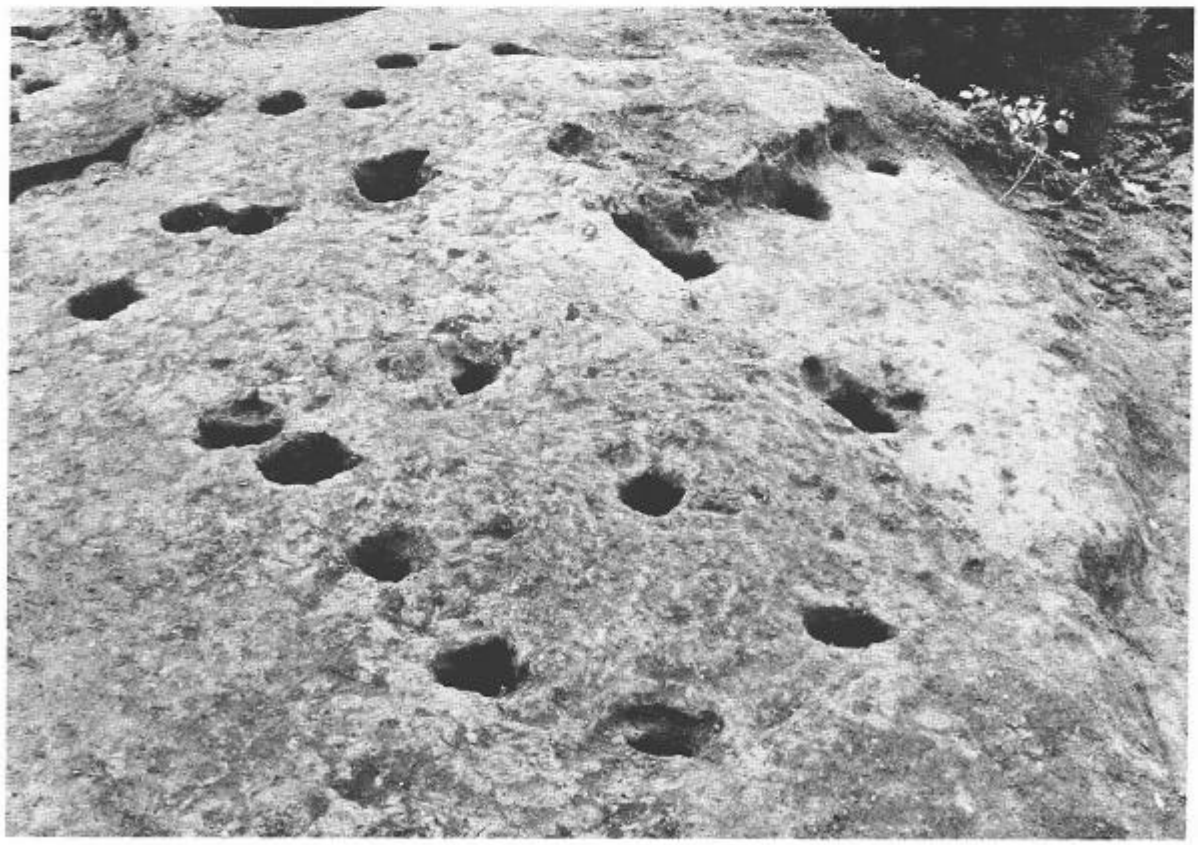
1　II・S I 009・013・014

2　II・S I 013・014

図版31　遺　　跡

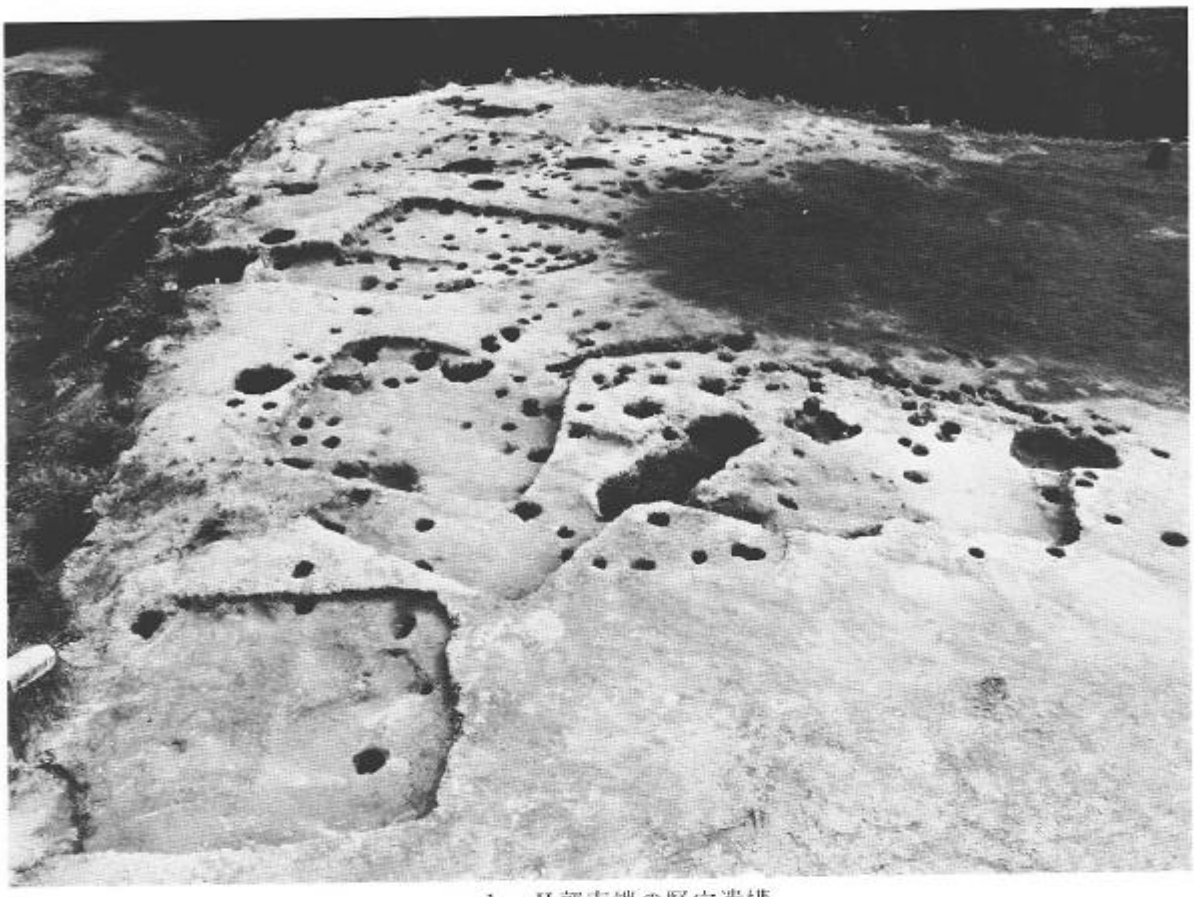


1　II・S I 015・016

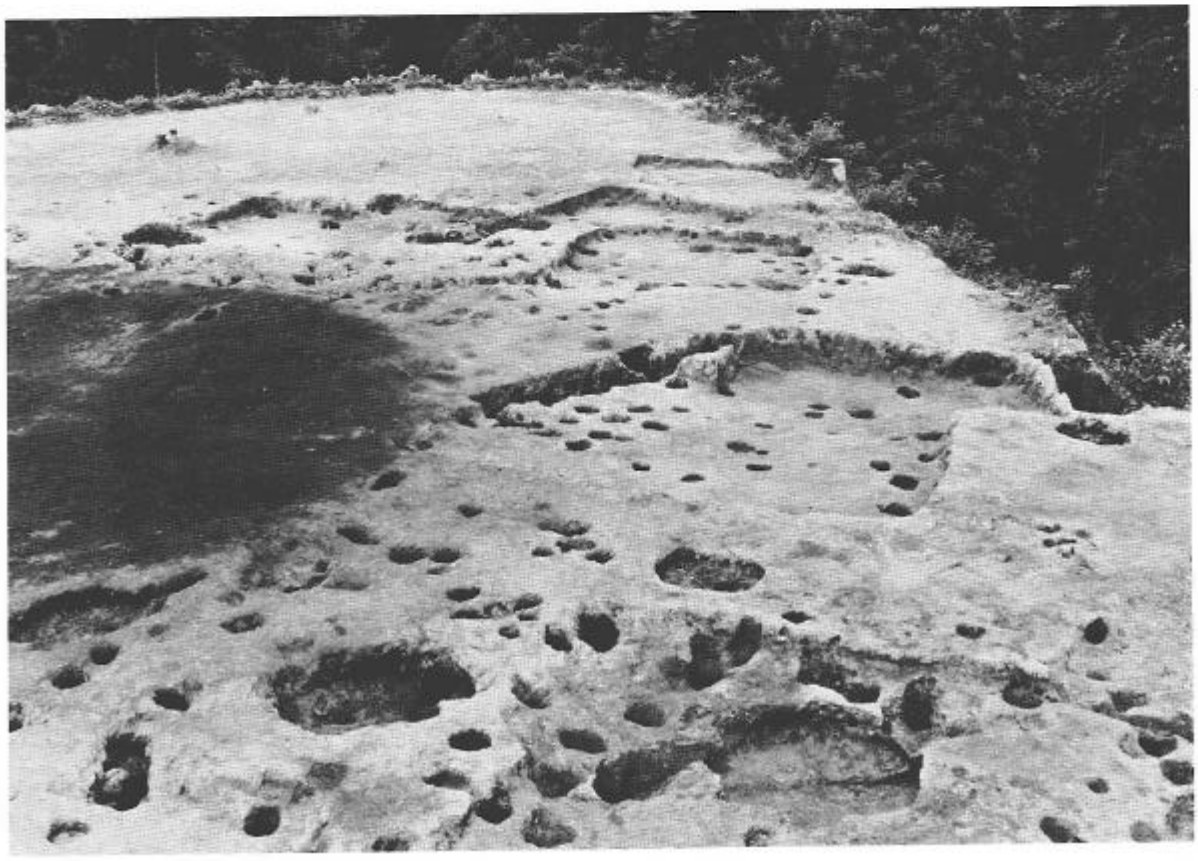


2　II・S I 015・016

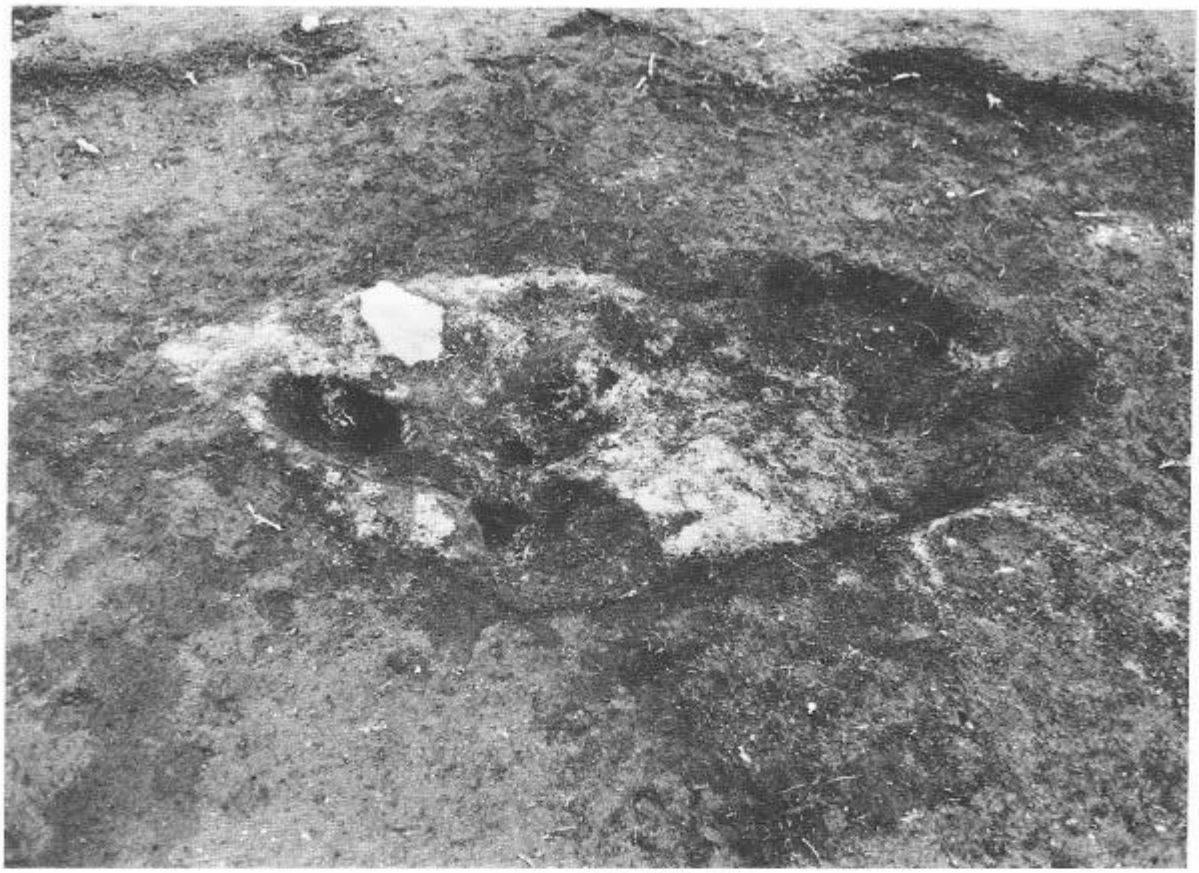
図版32　遺　　跡



1　II郭南端の竪穴遺構



図版33　遺　跡　　2　同　上

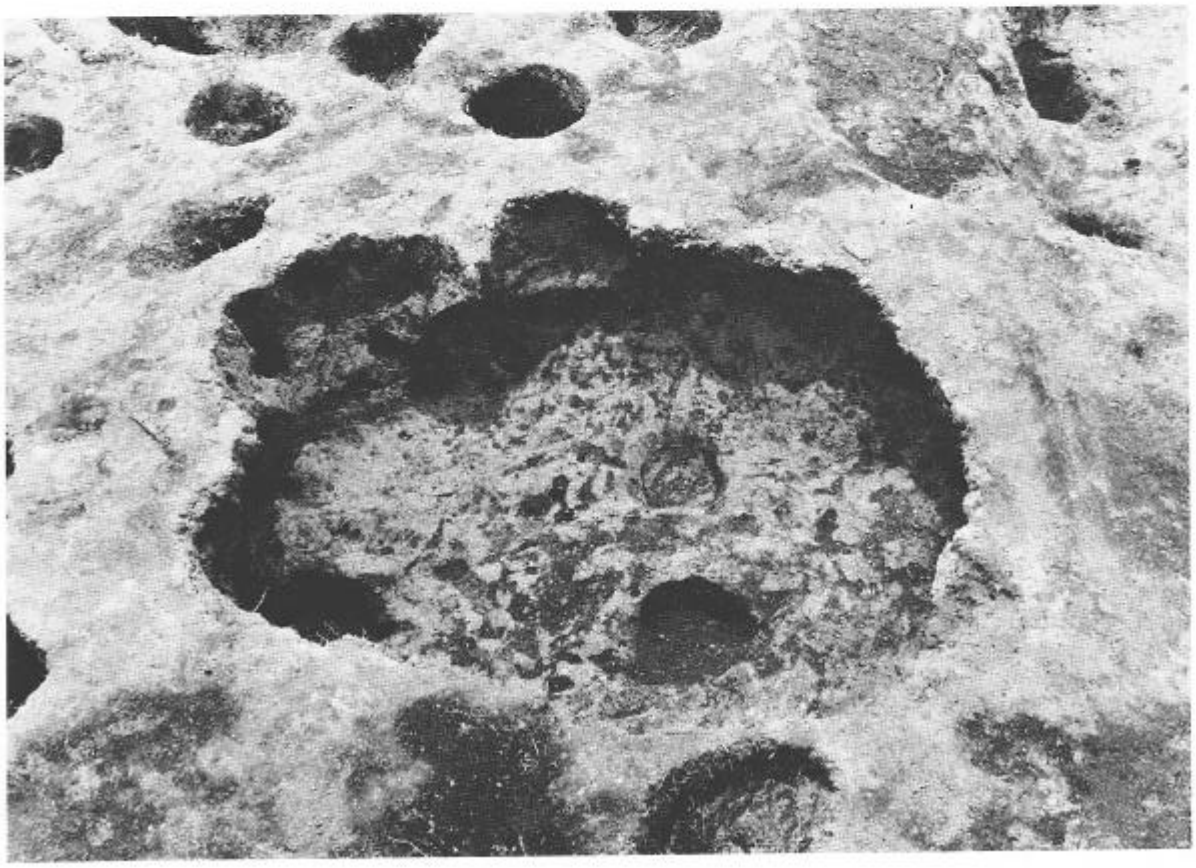


1　II・SX（F）003

2　II・SX（F）006

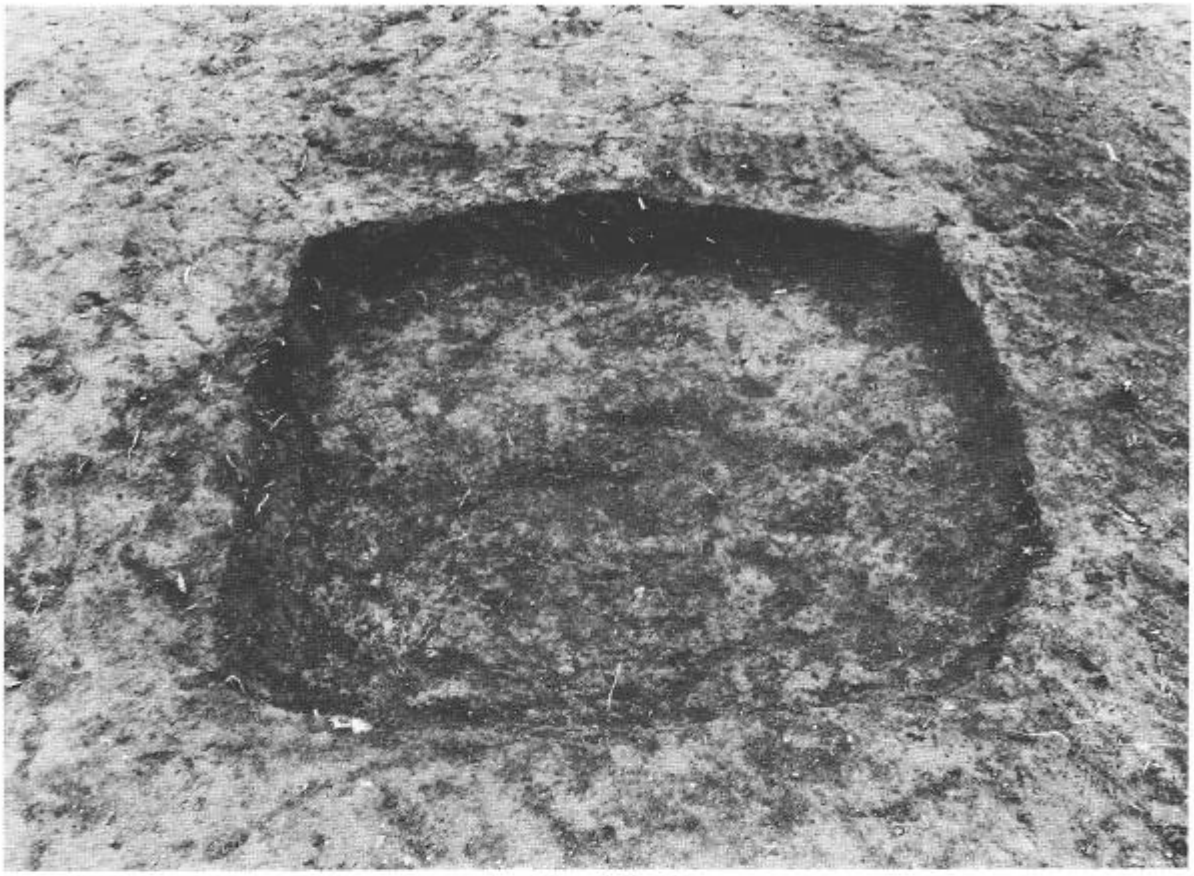
図版34　遺　跡

1　II・SX（F）007

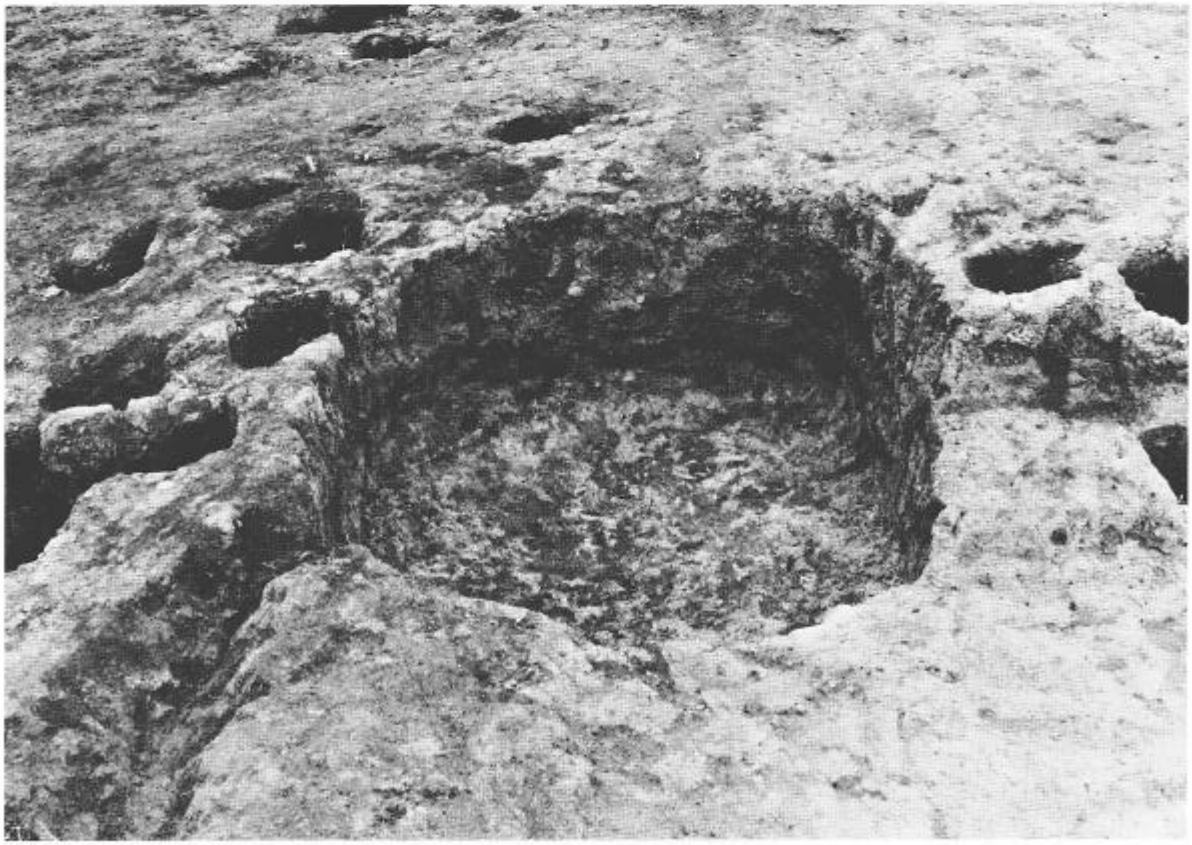


2　II・SK 001

図版35　遺　　跡



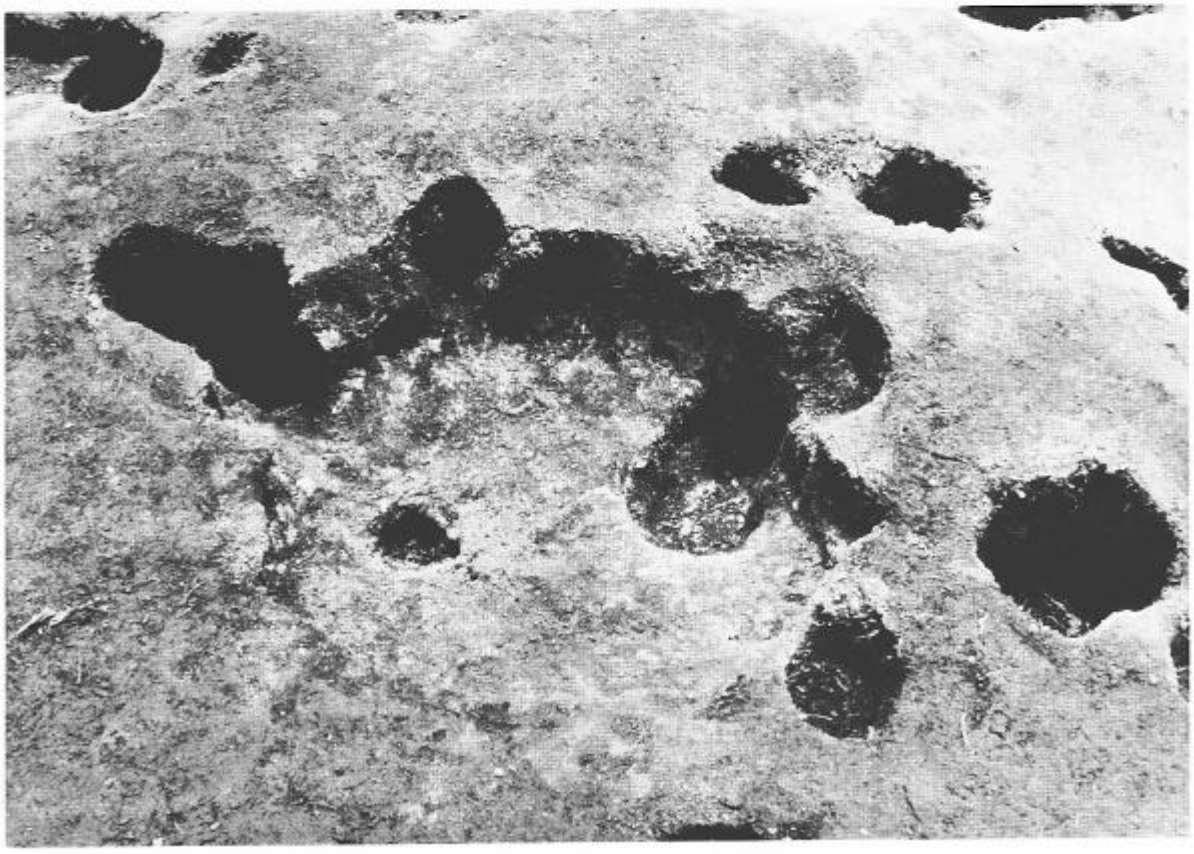
1　II・SK 003



2　II・SK 004

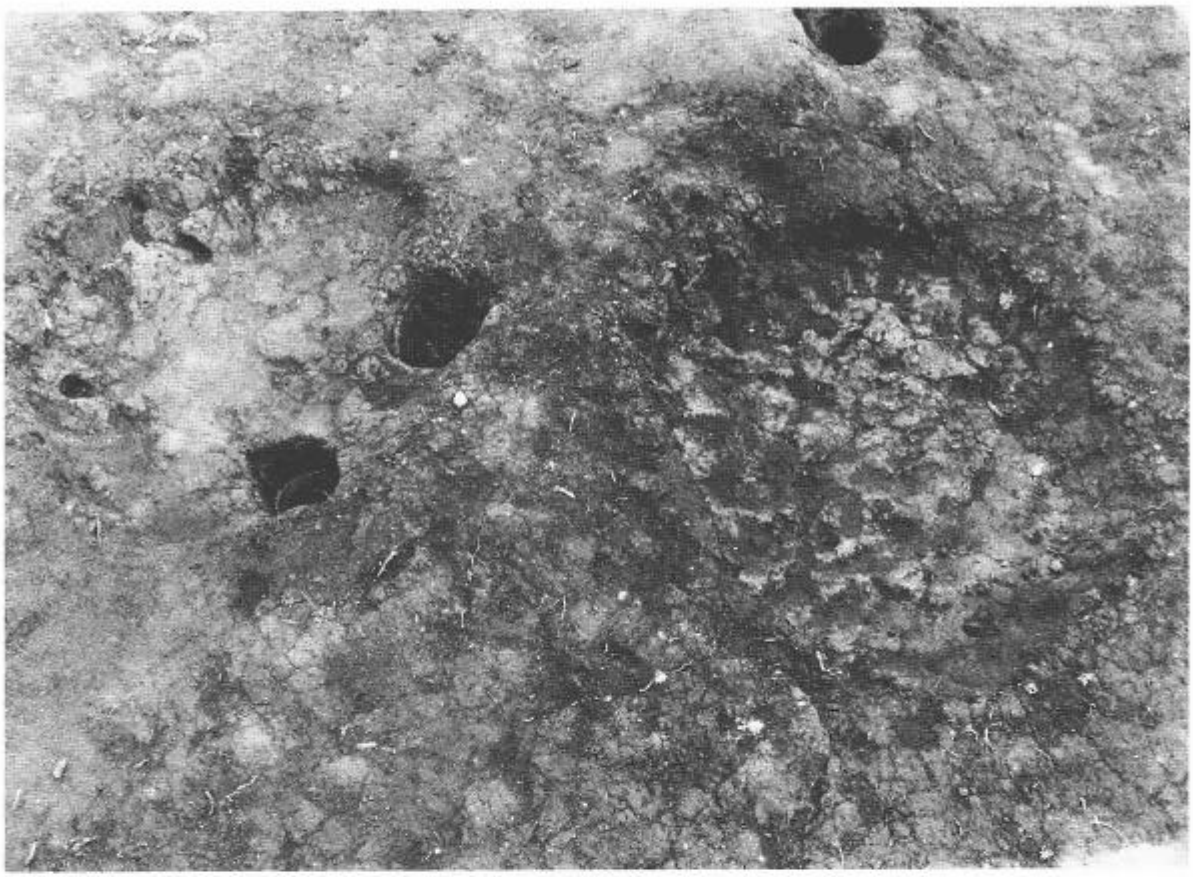
図版36　遺　跡

1　II・SK 004



2　II・SK 005

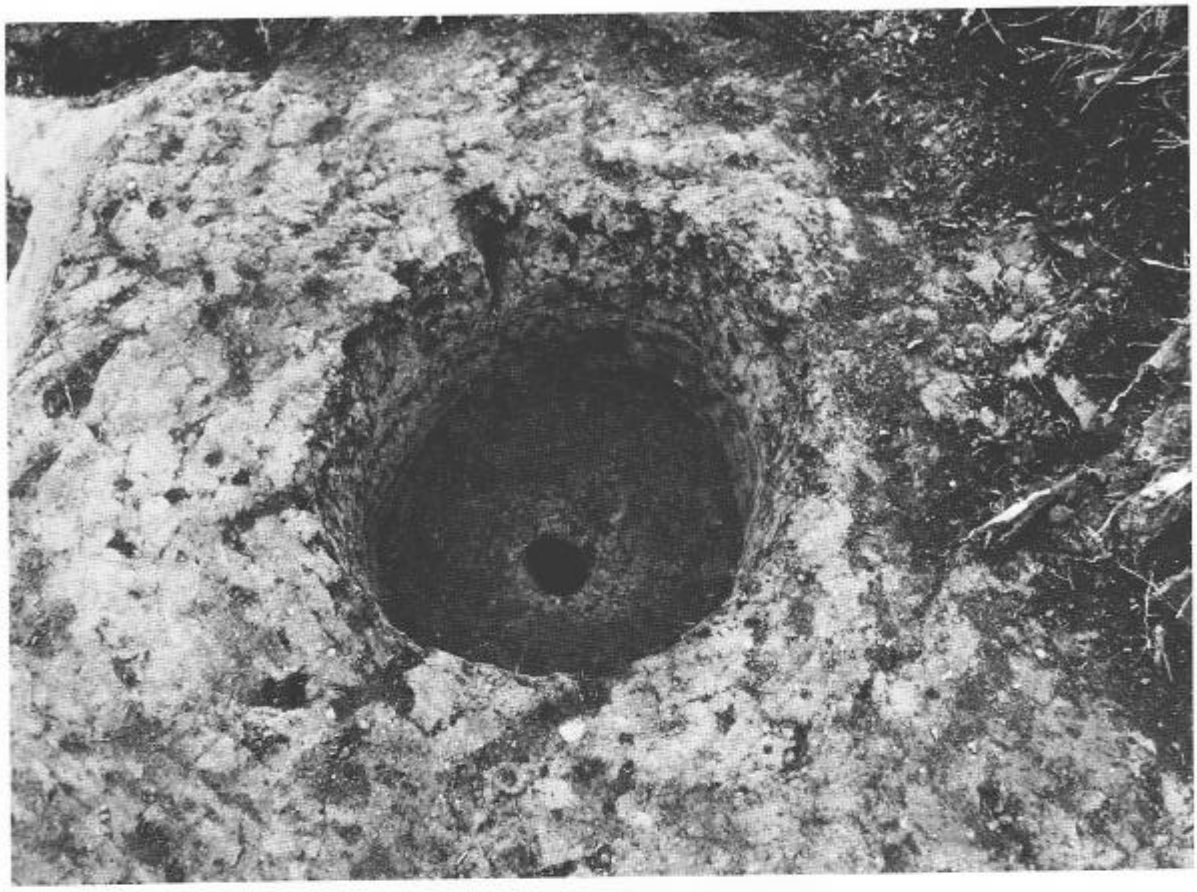
図版37　遺　　跡



1　II・SK 006・007

2　II・SK 008

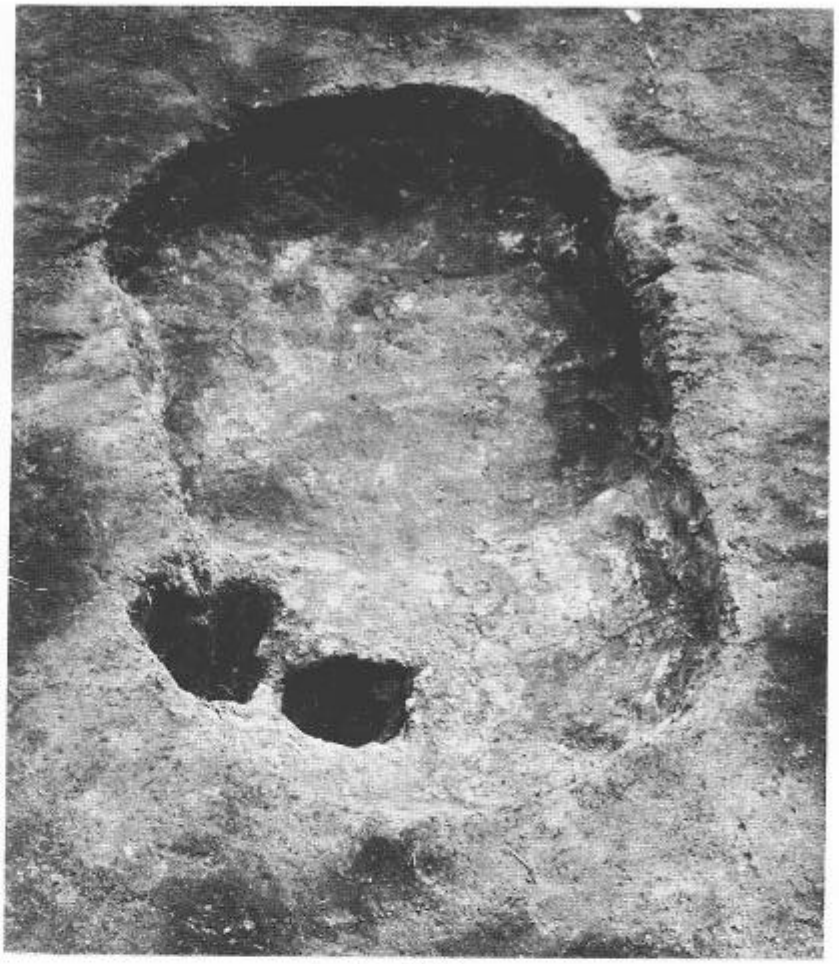
図版38　遺　物



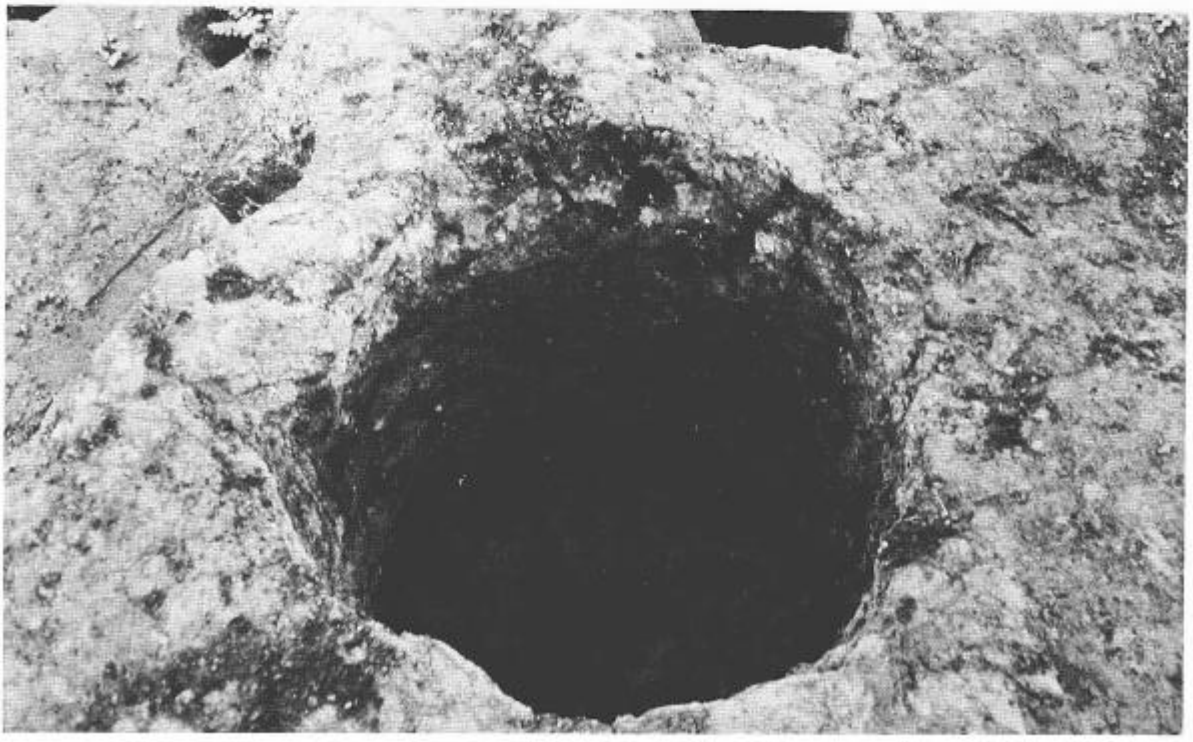
1　II・SK015

2　II・SK019

図版39　遺　跡

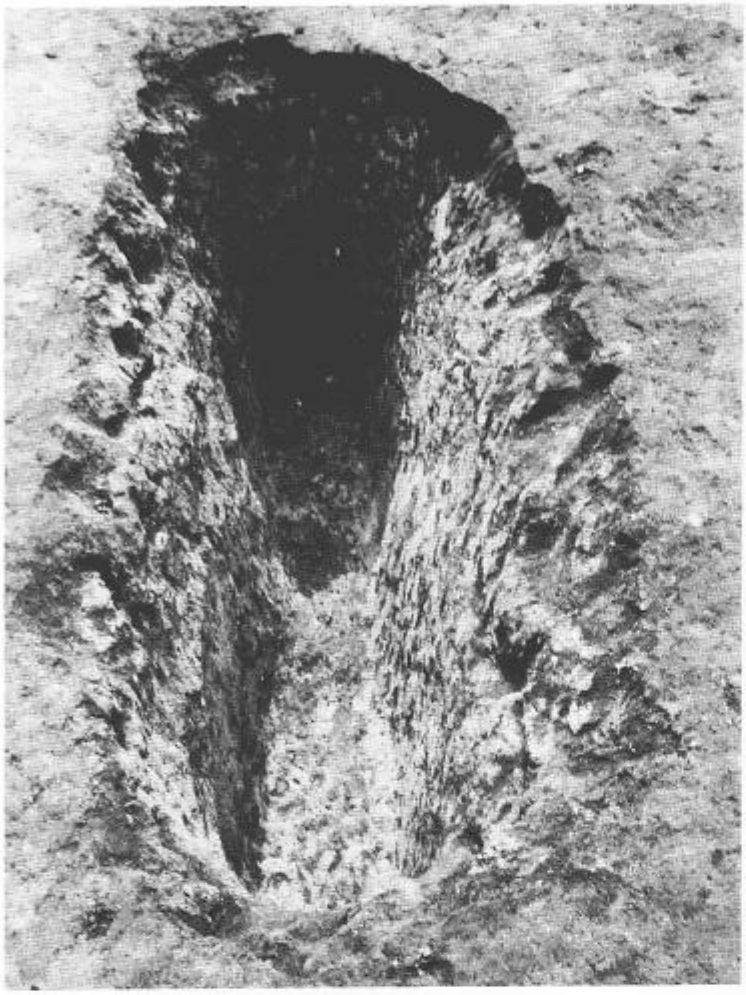


1　II・SK 020

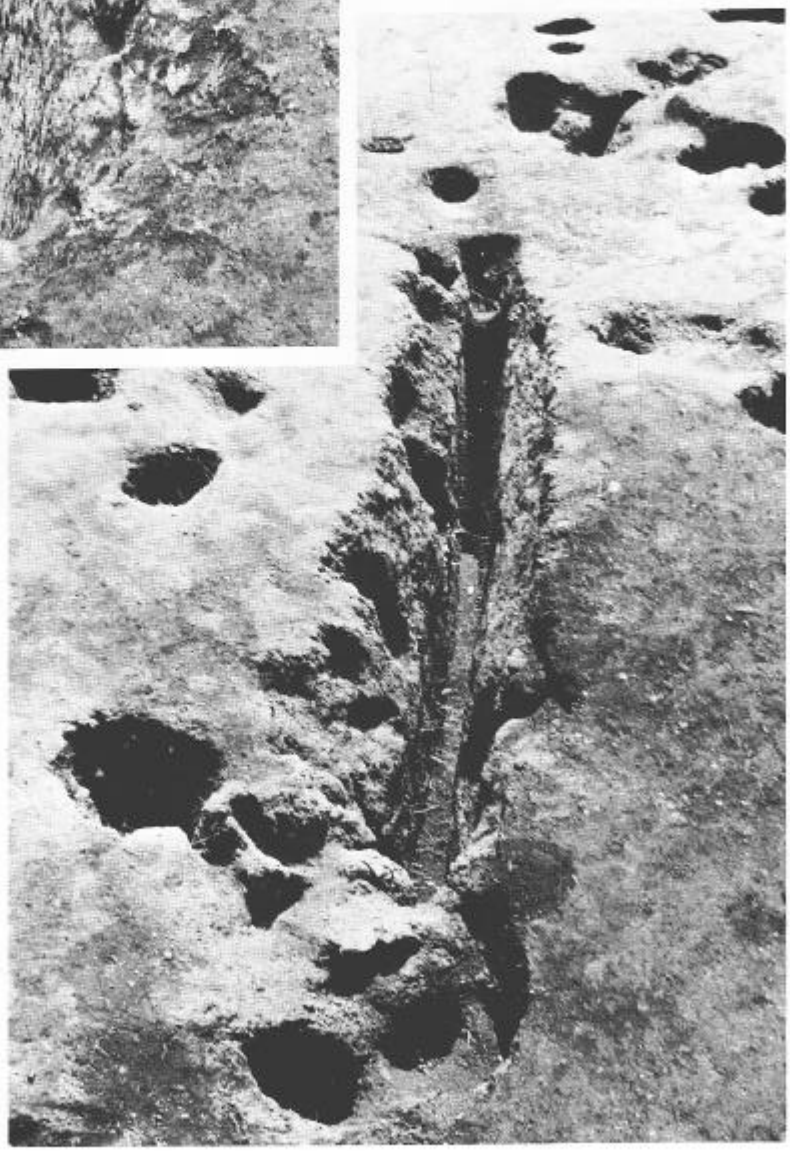


2　II・SK 021

図版40　遺　　跡

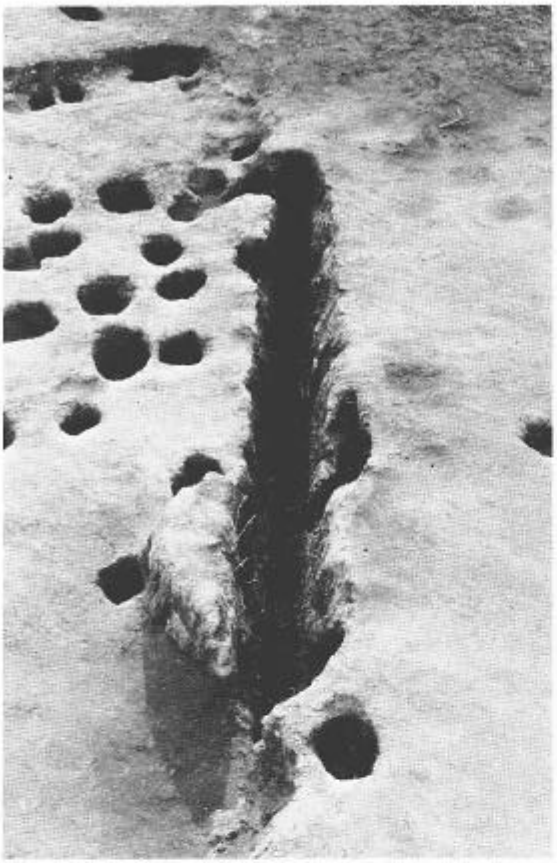


1　II・SK（T）001

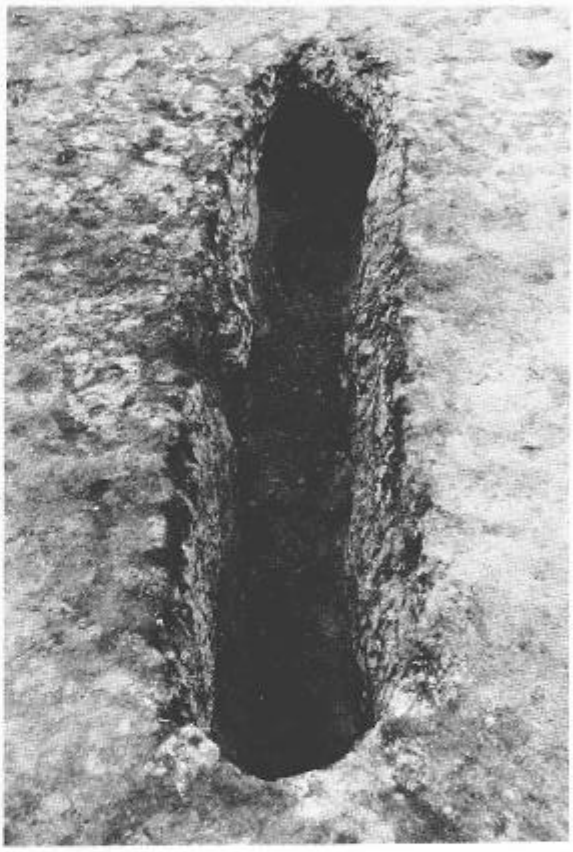


2　II・SK（T）003

図版41　遺　　跡



1　II・SK（T）004



2　II・SK（T）005

3　II・SK（T）006

図版42　遺　　跡

1　II・SX001

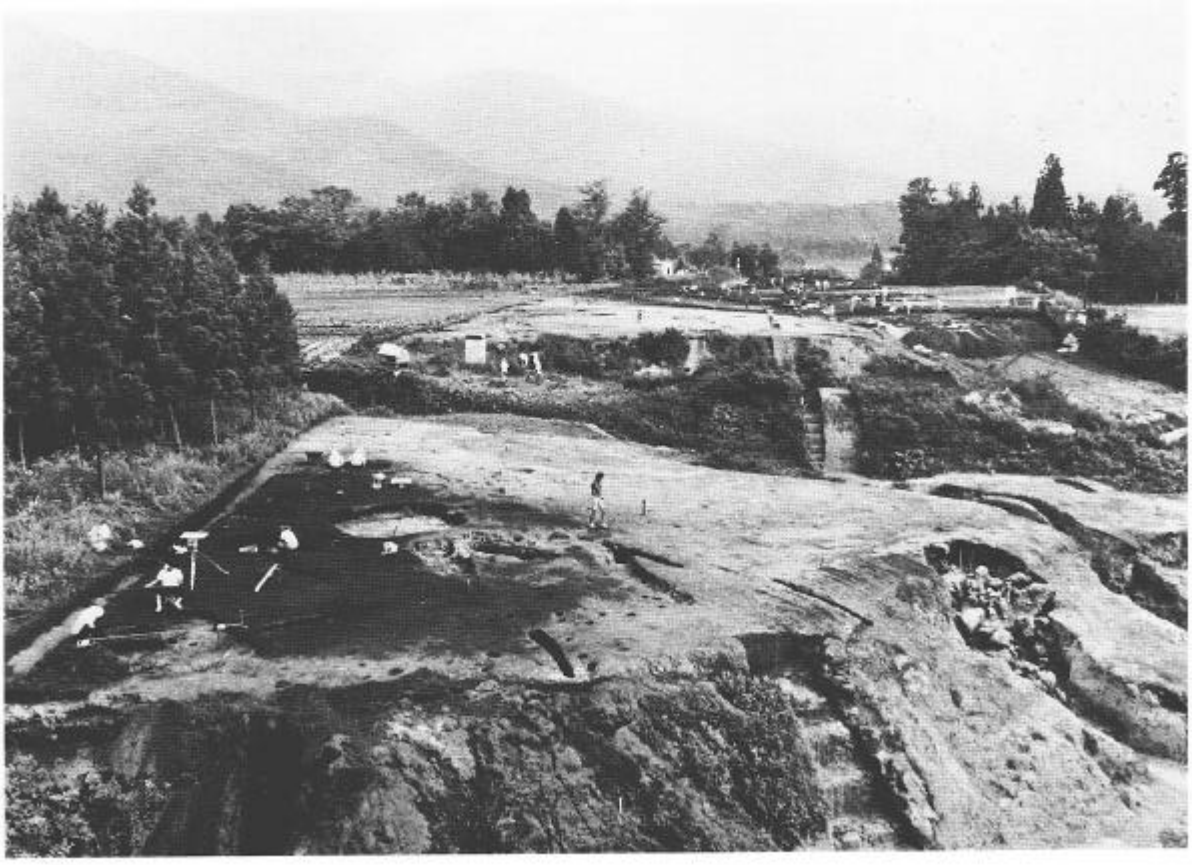
2　II・SX002・SK015

図版43　遺　　跡

1　II　　郭

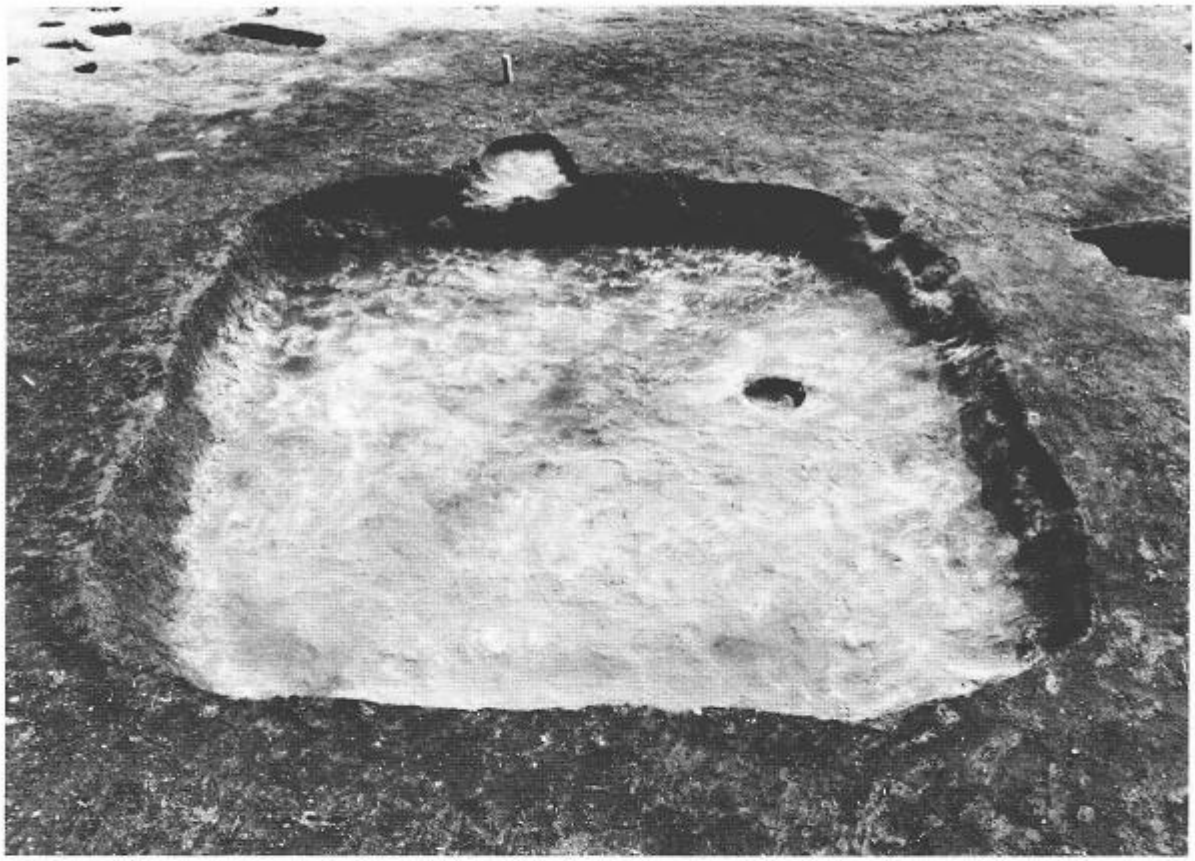
図版44　遺　　跡　　2　II　　郭

1　II・III郭と妻の神遺跡



2　II・III郭と妻の神遺跡

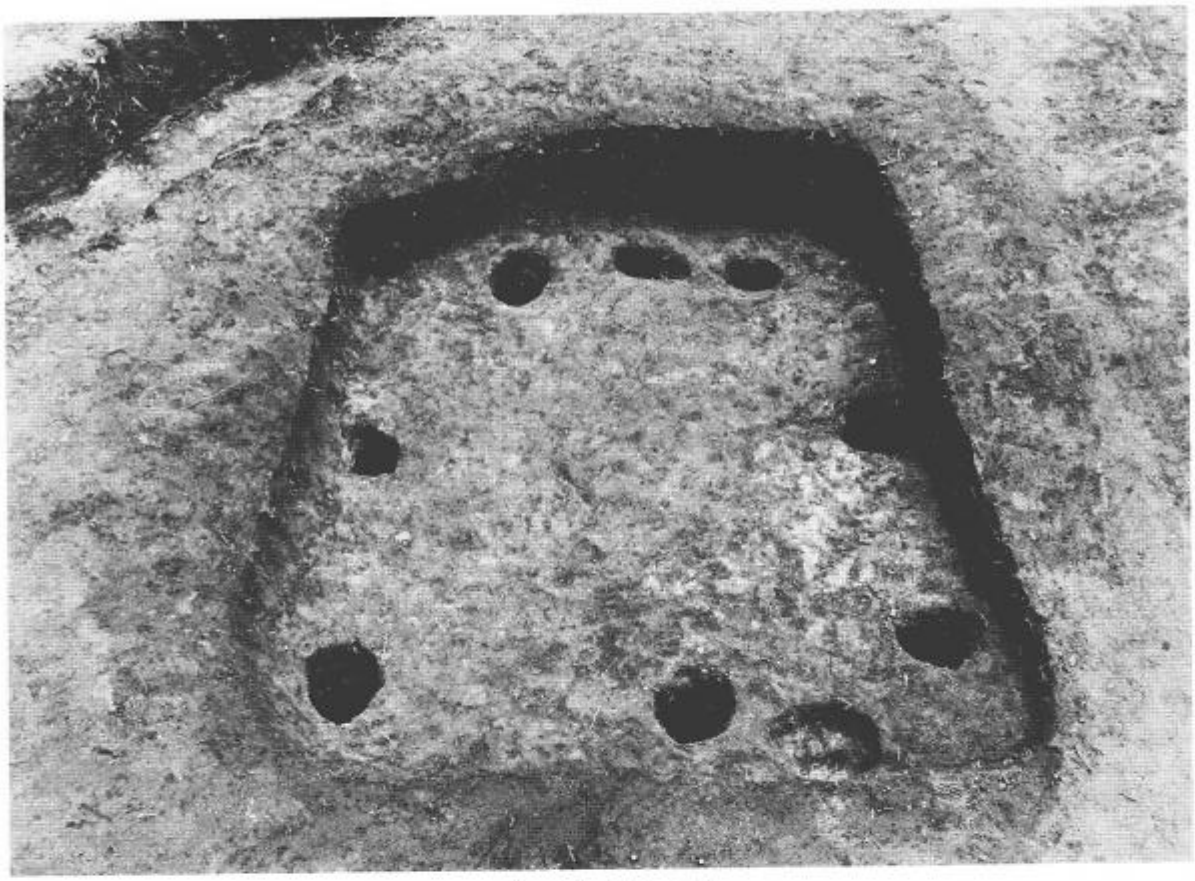
図版45　遺　　跡



1　Ⅲ・ＳＩ001

2　Ⅲ・ＳＩ002

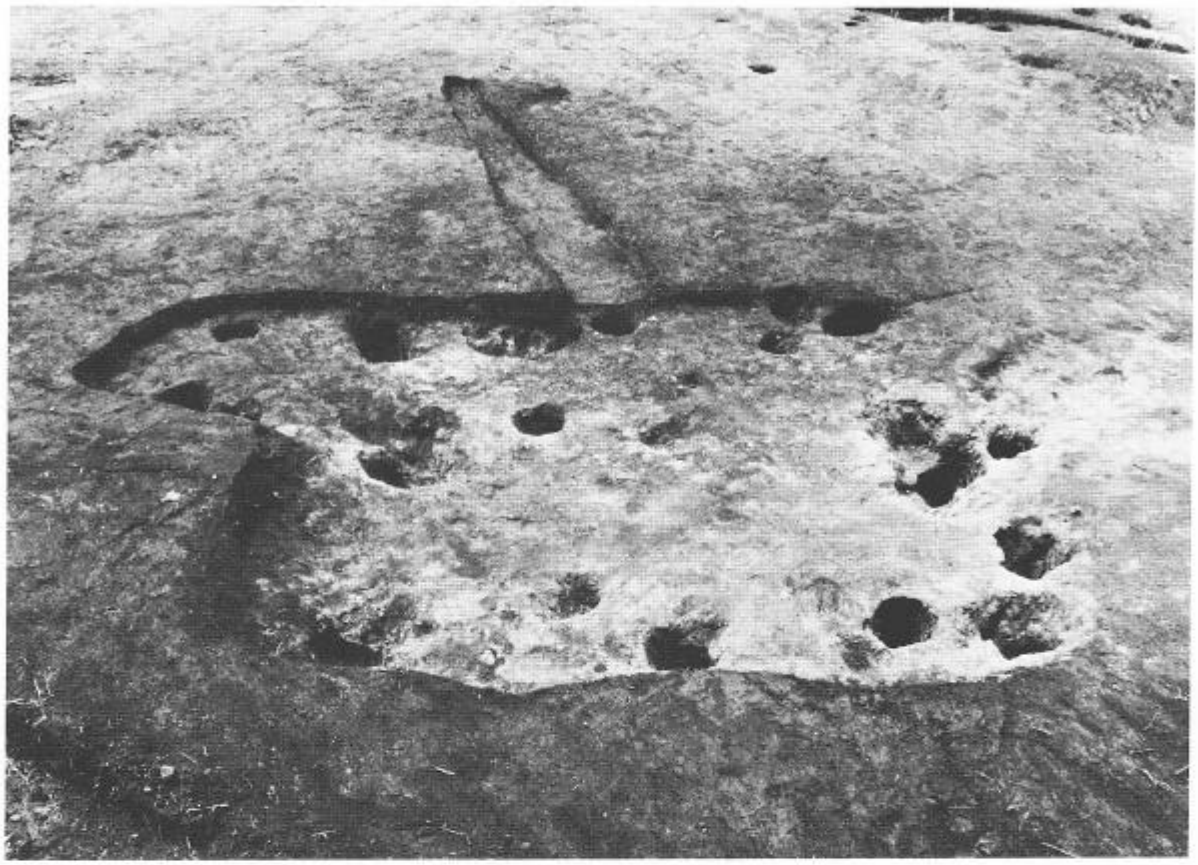
図版46　遺　　跡



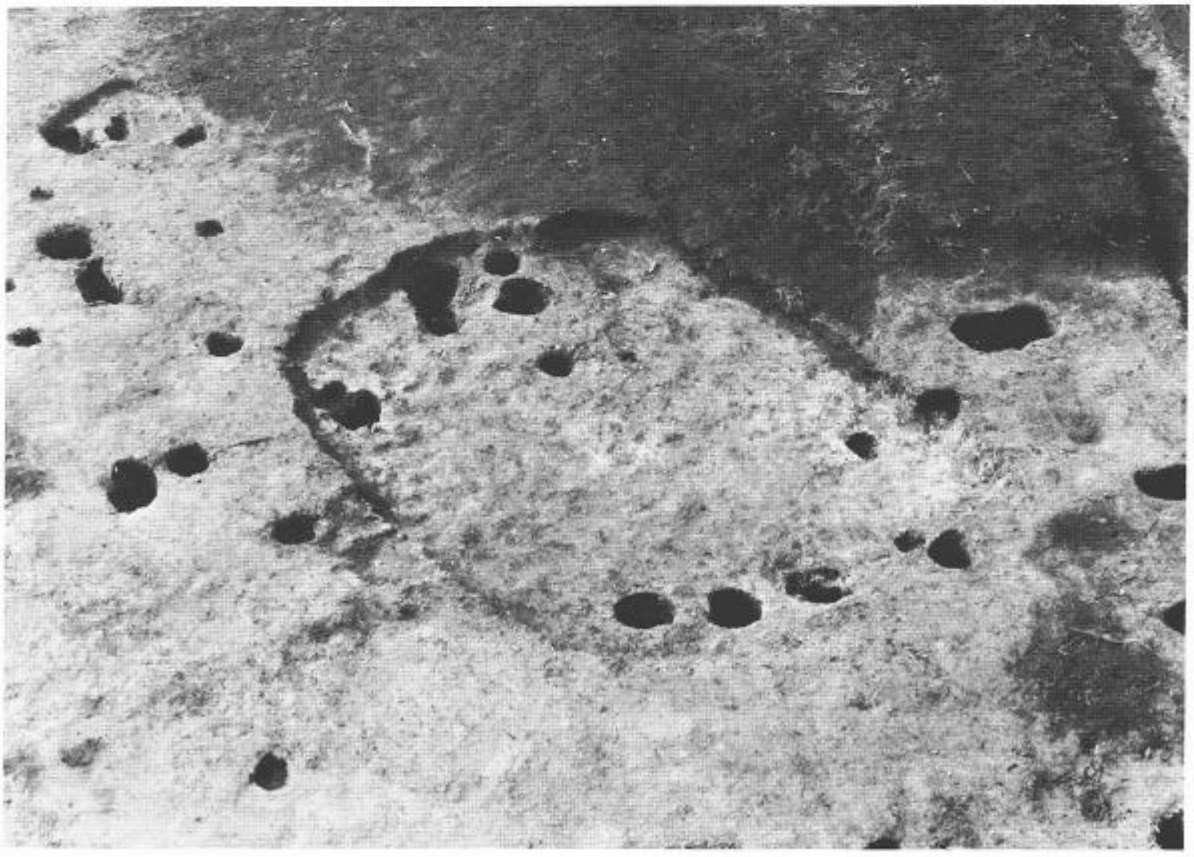
1　Ⅲ・ＳＩ002

2　Ⅲ・ＳＩ003

図版47　遺　　跡



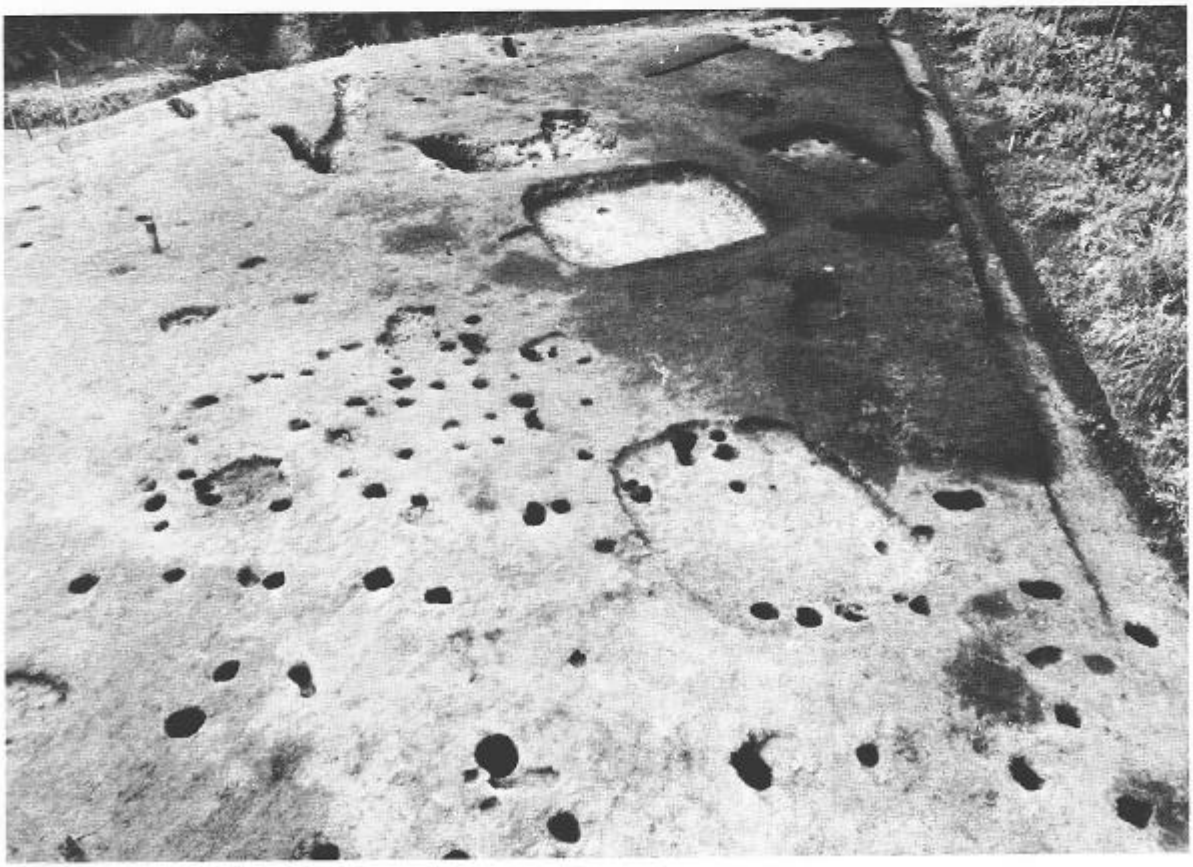
1　Ⅲ・ＳＩ003



2　Ⅲ・ＳＩ004

図版48　遺　　跡

1　III　　郭



図版49　遺　　跡　　2　III　　郭

1　Ⅲ・ＳＸ（Ｆ）001

2　Ⅲ・ＳＸ（Ｆ）001

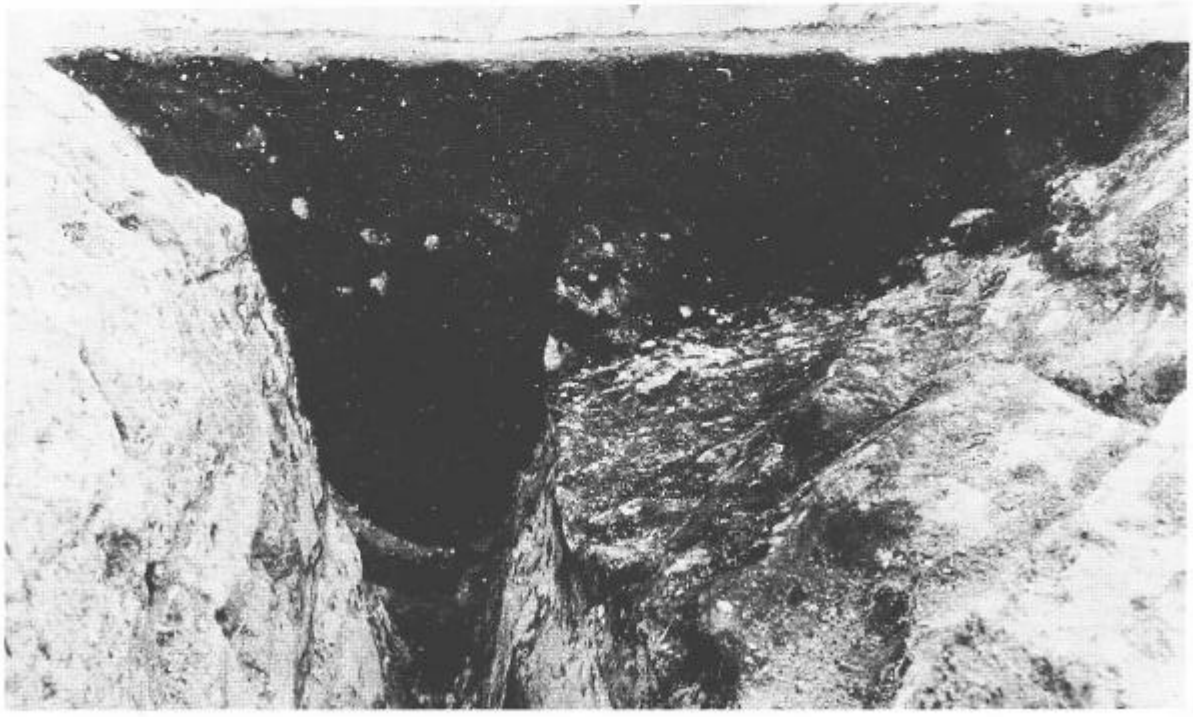
図版50　遺　　跡

1　III・SD 001～006

2　III・SD 001～006

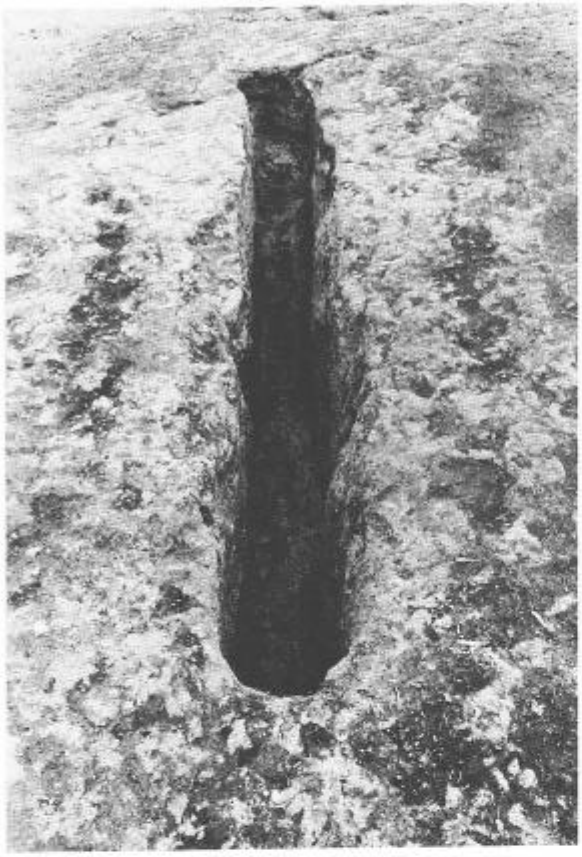
図版51　遺　跡

1　Ⅲ・ＳＤ 001～006

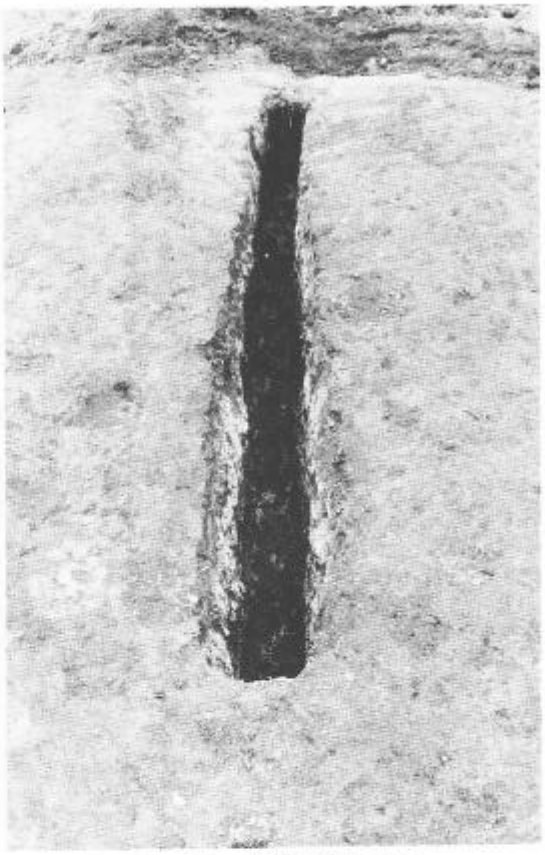


2　Ⅲ・ＳＤ 001土層断面

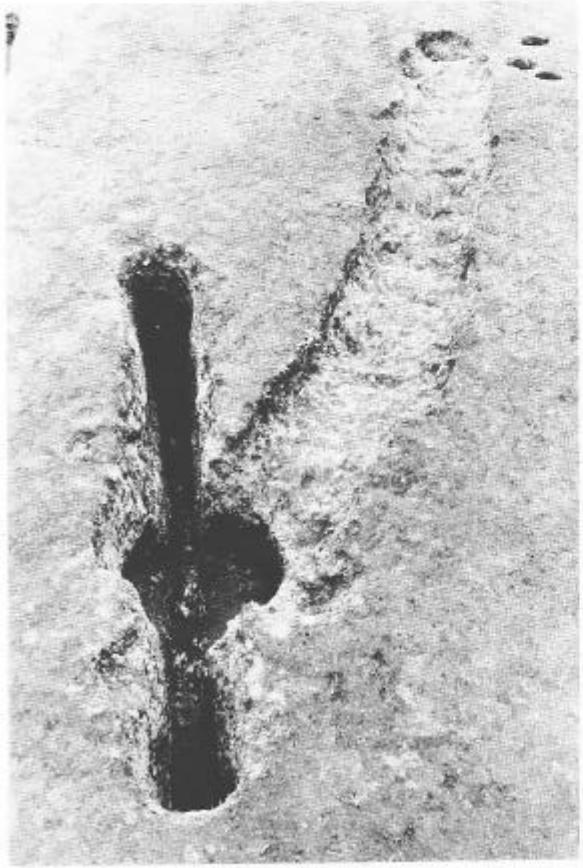
図版52　遺　　跡



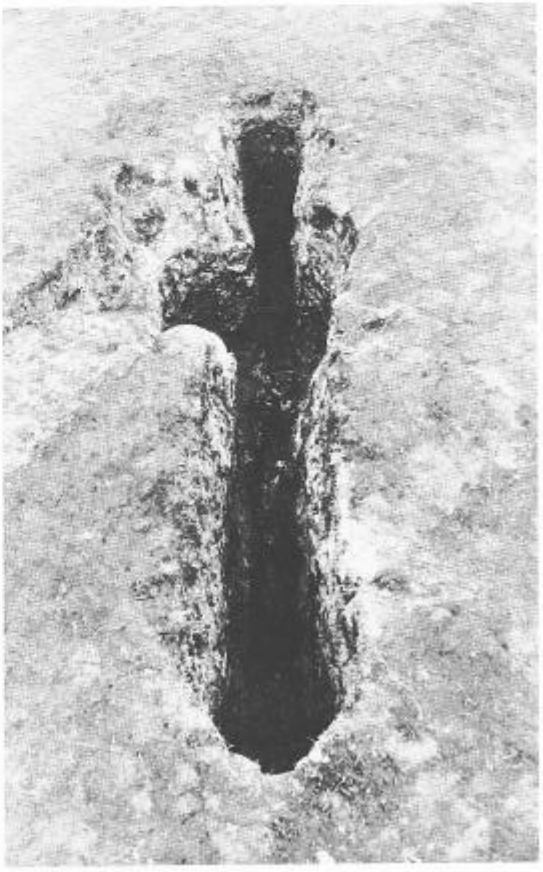
1　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）001



2　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）006



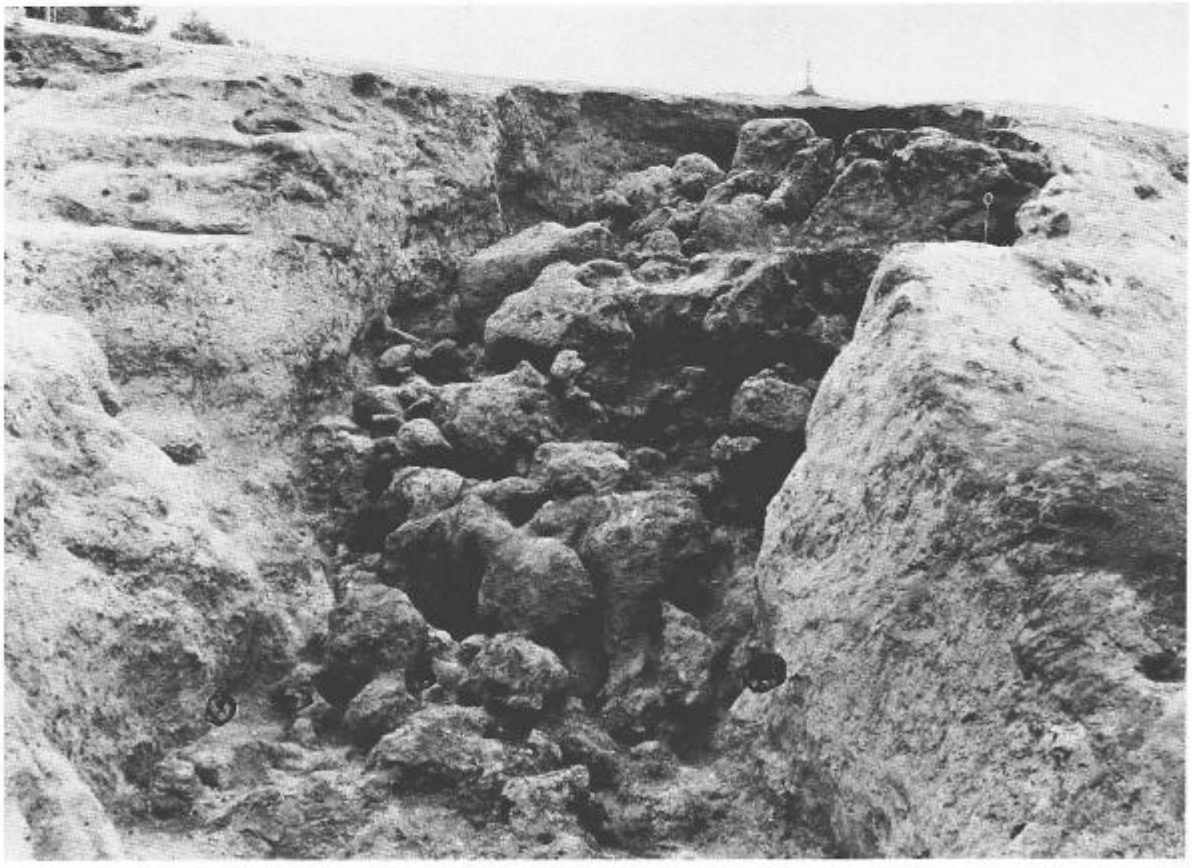
3　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）003・ＳＫ005・ＳＸ002



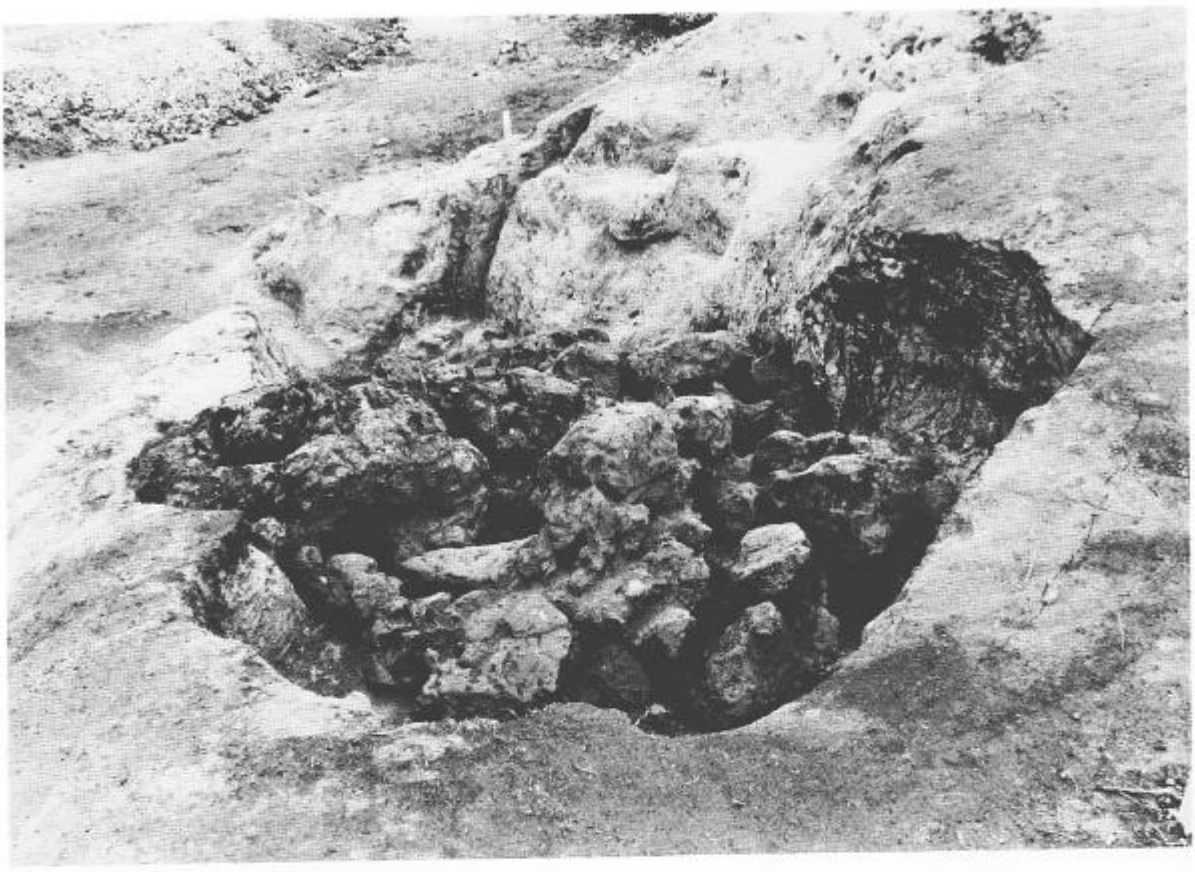
4　Ⅲ・ＳＫ（Ｔ）003・ＳＫ010・ＳＸ002

図版53　遺　　跡

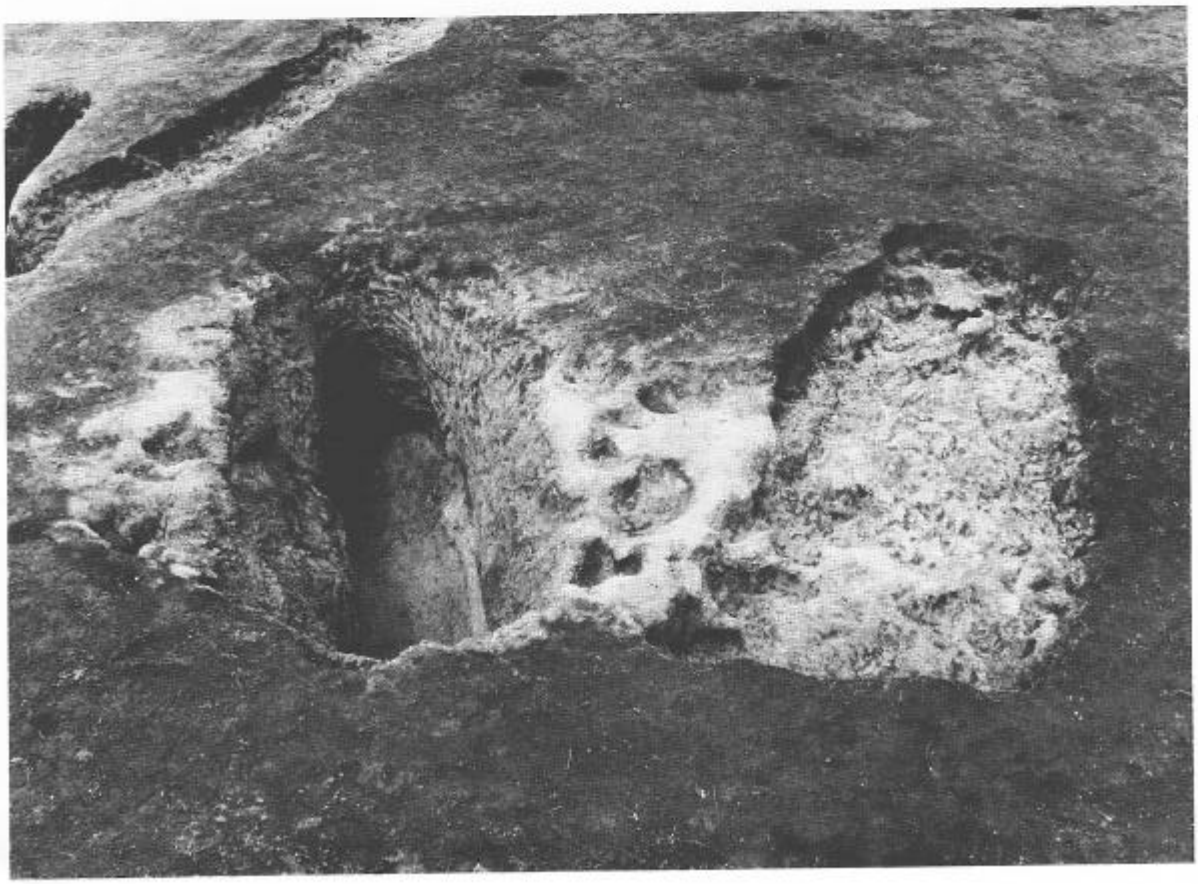
1　Ⅲ・ＳＸ001



図版54　遺　　跡　　2　Ⅲ・ＳＸ001

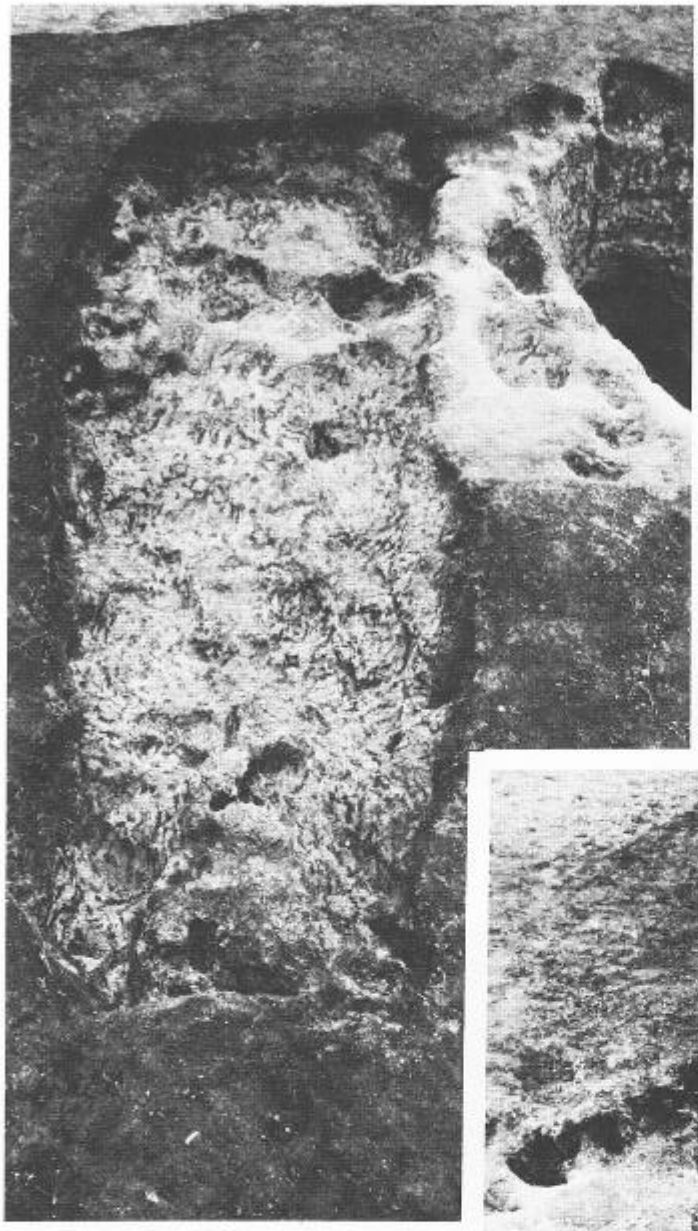


1　Ⅲ・ＳＸ001

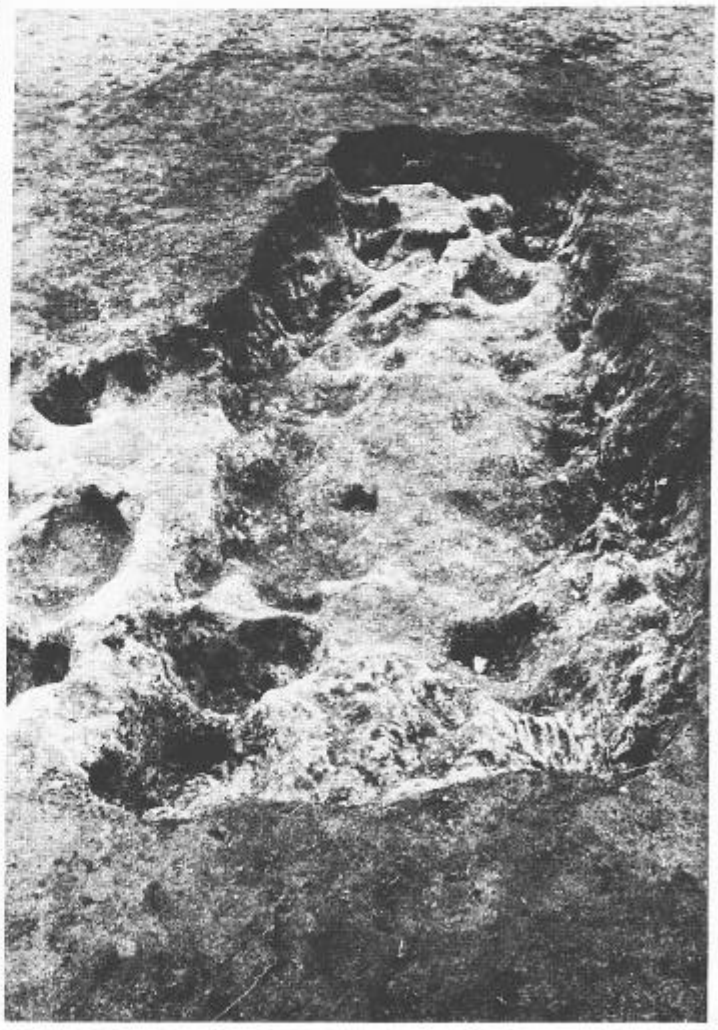


2　Ⅲ・ＳＸ003

図版55　遺　　跡



1　III・SX 003



2　III・SX 003

図版56　遺　　跡

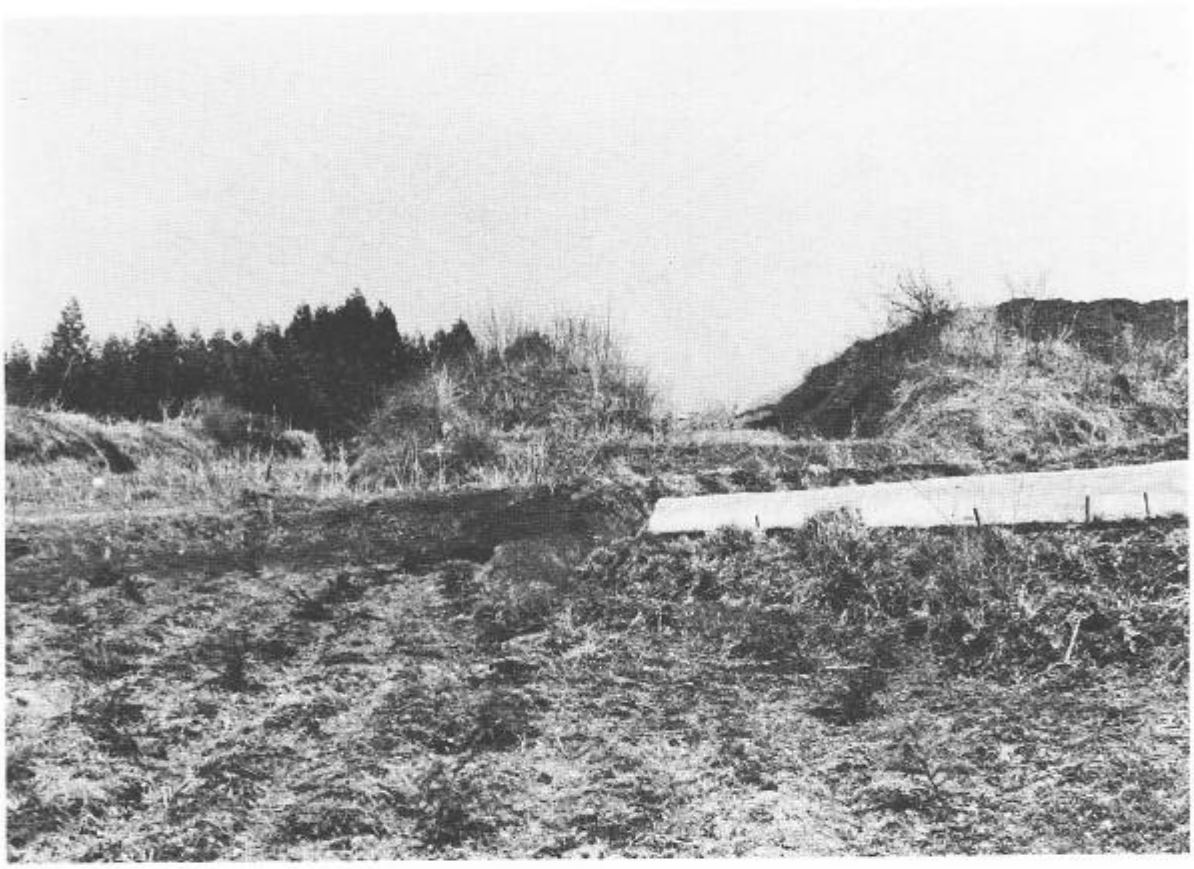
1　Ⅴ郭残存部とⅠ・Ⅴ郭間の堀

図版57　遺　跡　　2　Ⅴ郭西端に見られる段差

1　Ⅰ・Ⅱ郭間の堀調査前（中央部段差が土塁）

2　Ⅱ・Ⅲ郭間の堀調査前

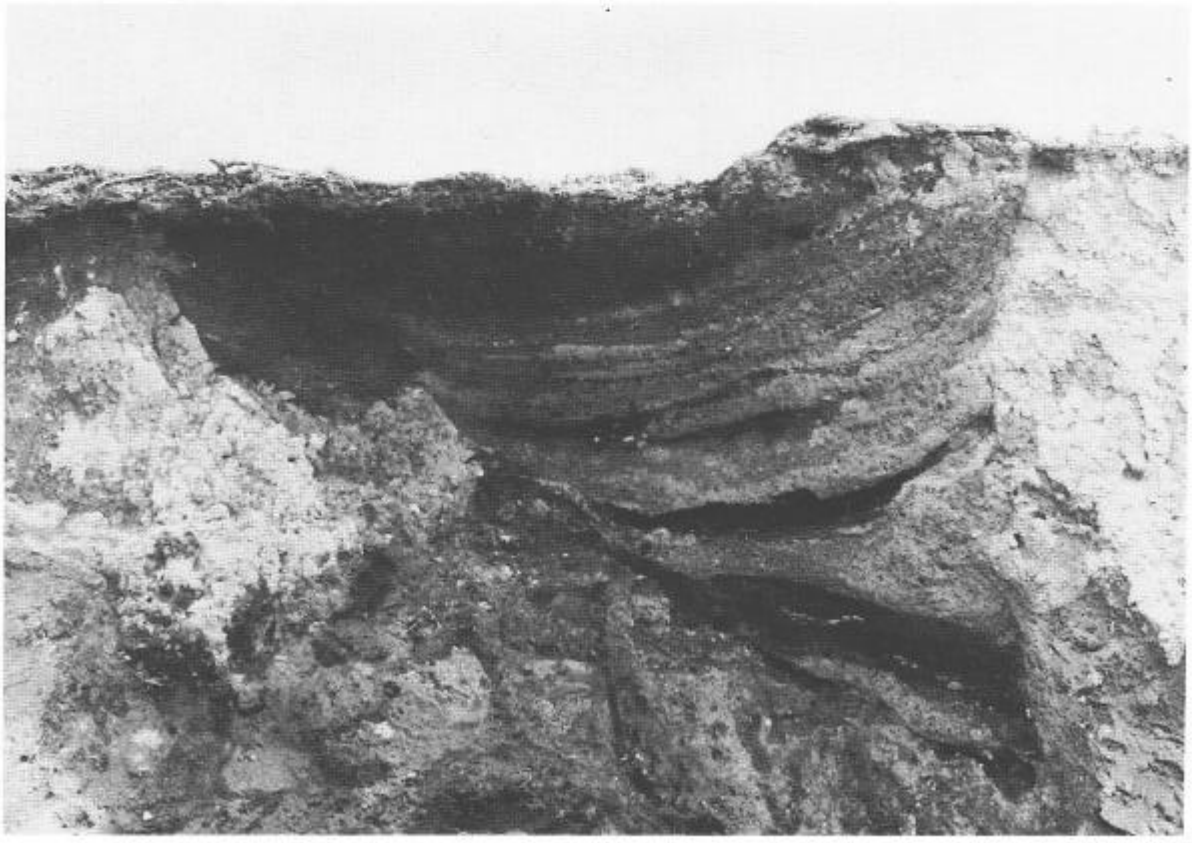
図版58　遺　跡



1　Ⅲ郭と妻の神Ⅲ遺跡間の堀（中央部土塁状小山）

図版59　遺　跡　　2　Ⅲ郭と土塁状小山間の堀（左、Ⅲ郭　右、小山）

1　Ⅰ郭北側に見られる堀



2　同　上

図版60　遺　跡

1　Bトレンチ調査状況

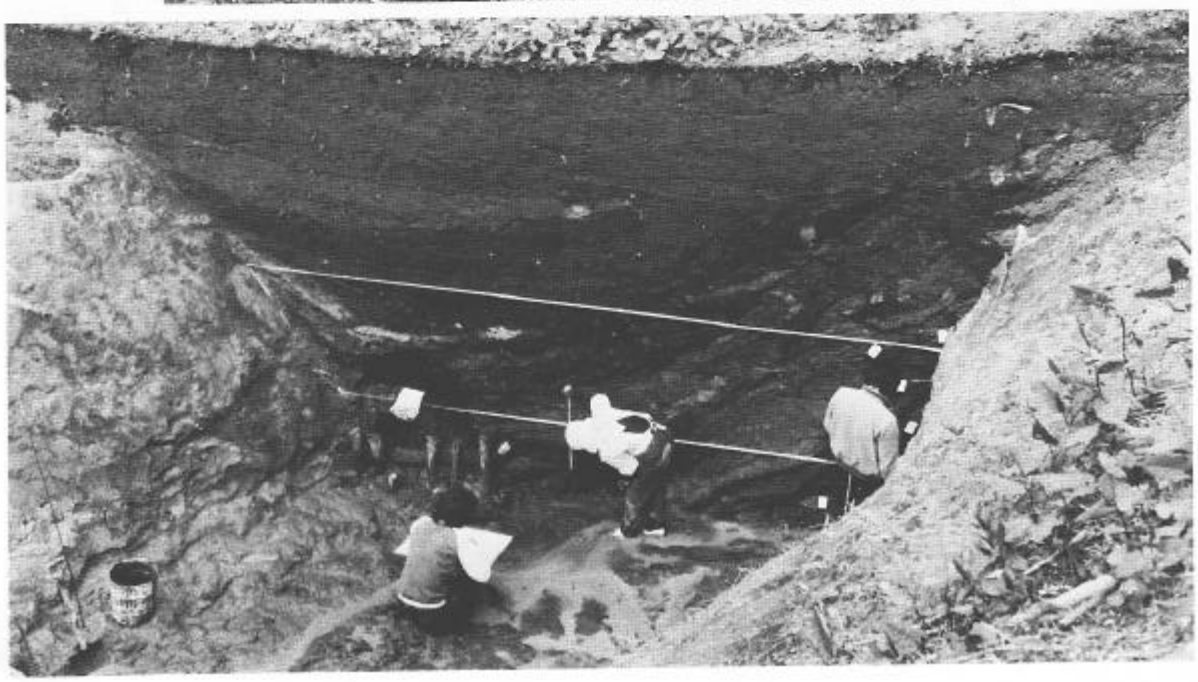
2　同　上

図版61　遺　跡

1　Bトレンチ調査状況

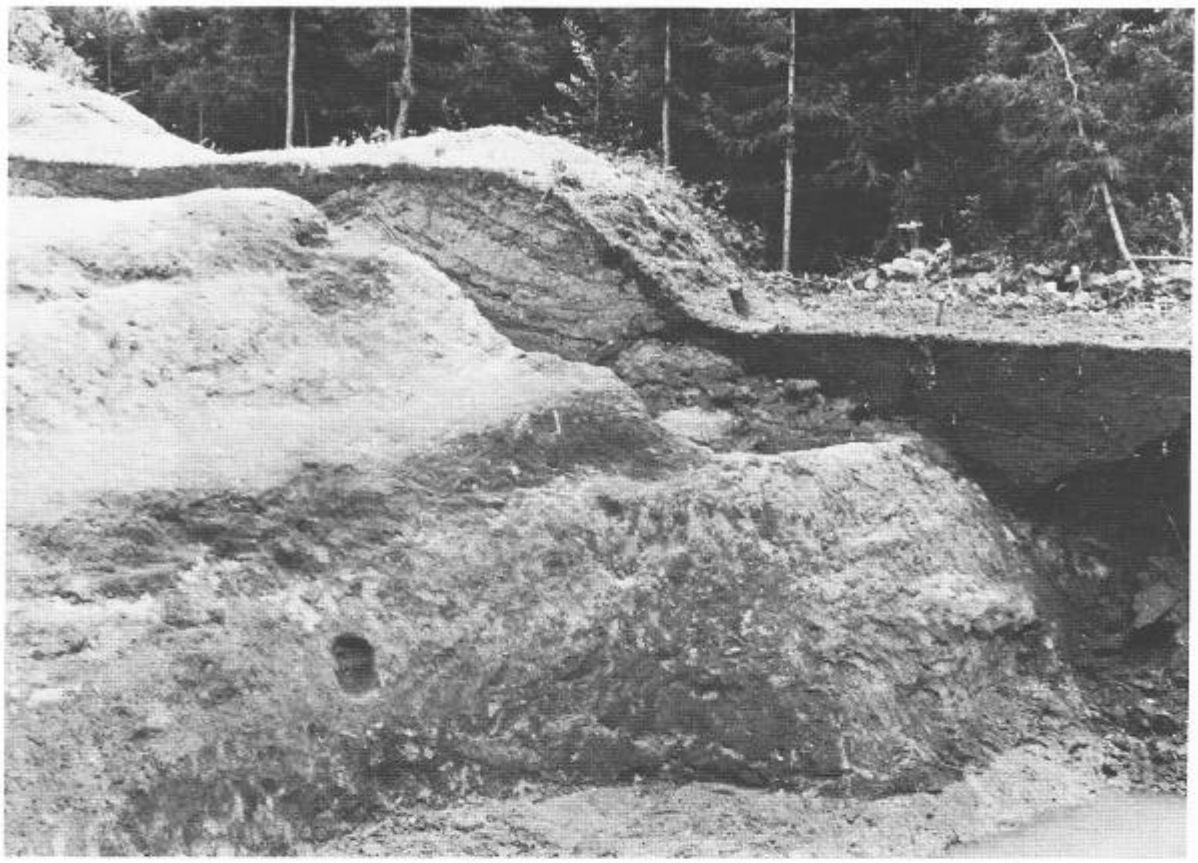
図版62　遺　　跡　　2　同　　上

1　II郭とBトレンチ

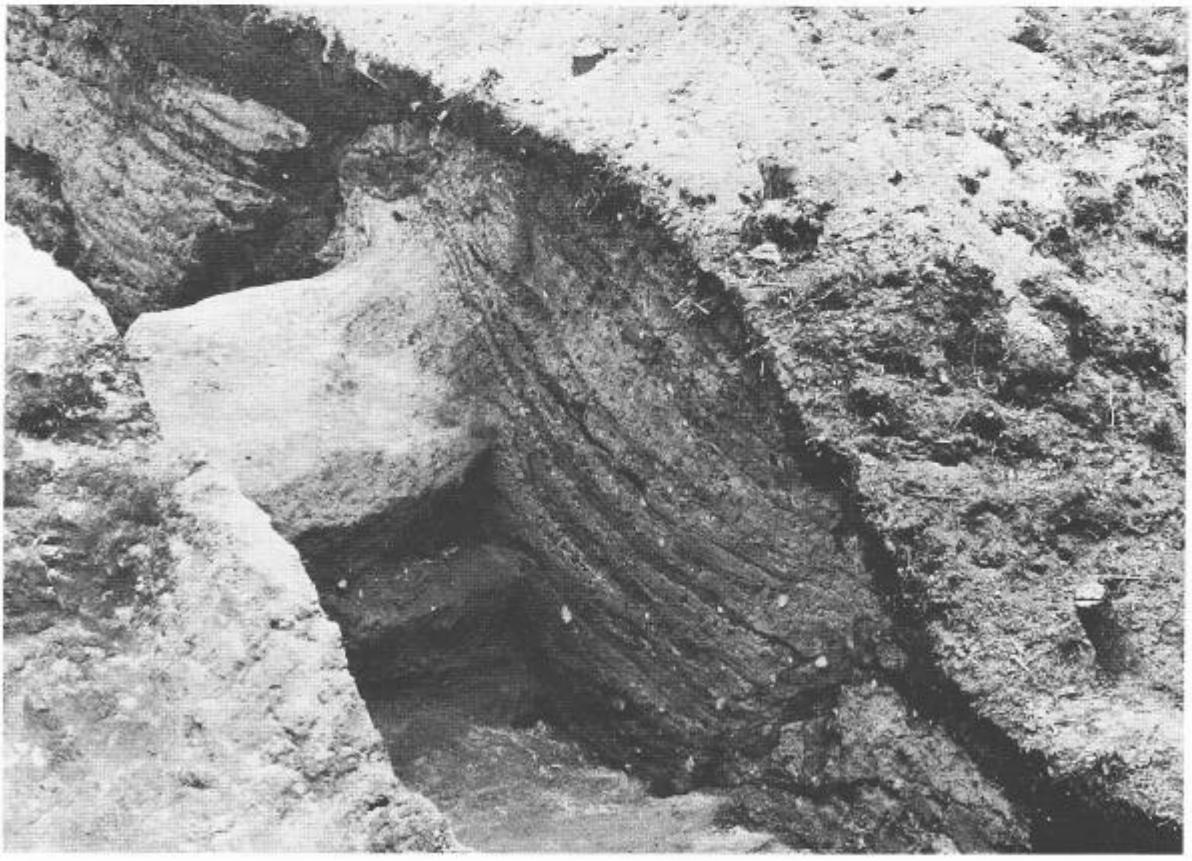


2　Bトレンチ調査状況

図版63　遺　　跡

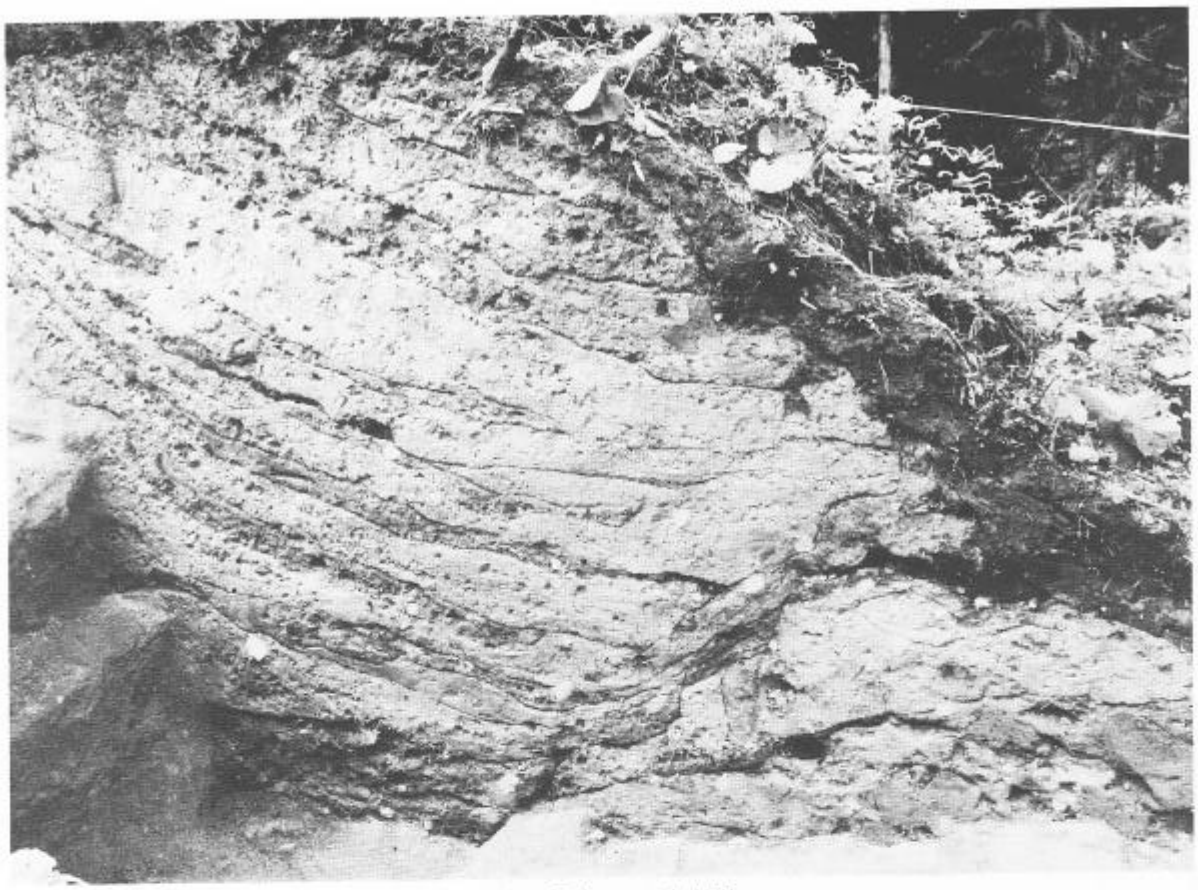


1　Bトレンチ土壁



2　Bトレンチ土壁

図版64　遺　　跡



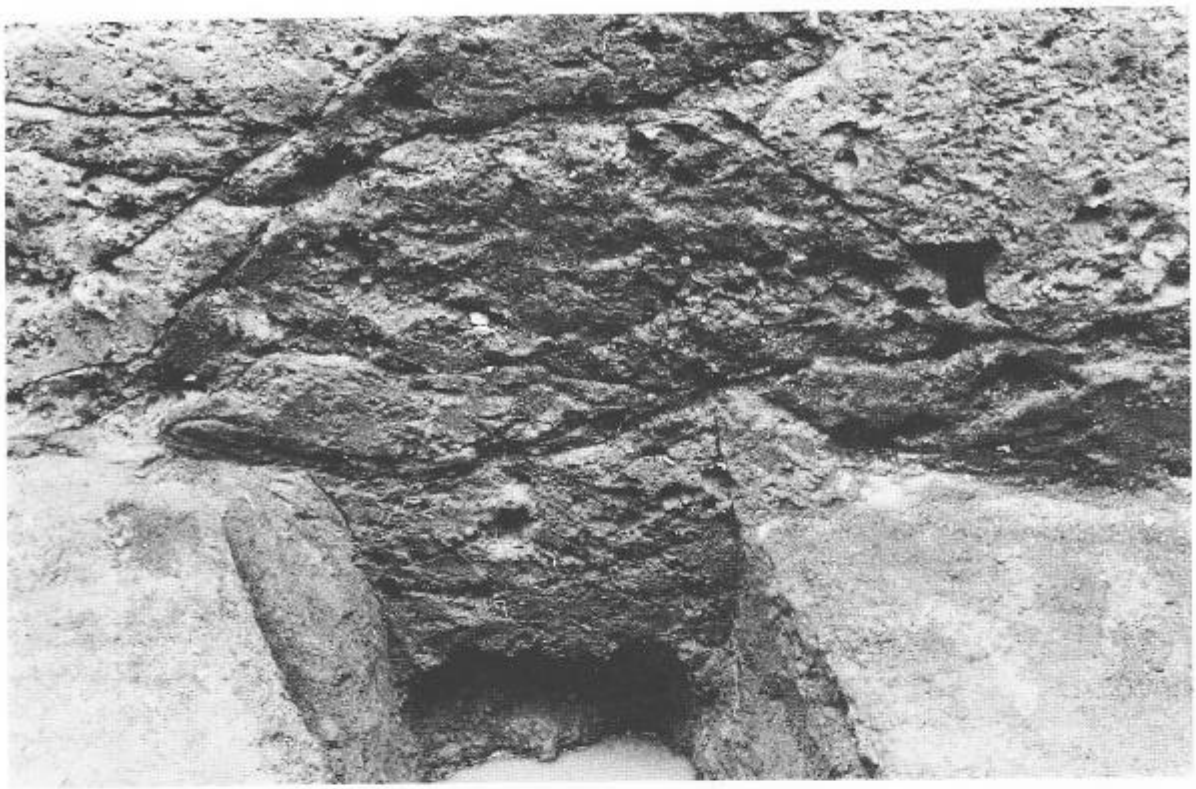
1　Bトレンチ土塁

図版65　遺　跡　　2　Bトレンチ II 郭側堀土層

1　Bトレンチ土塁芯と堀底の溝

2　Bトレンチ南側堀底の溝

図版66　遺　　跡

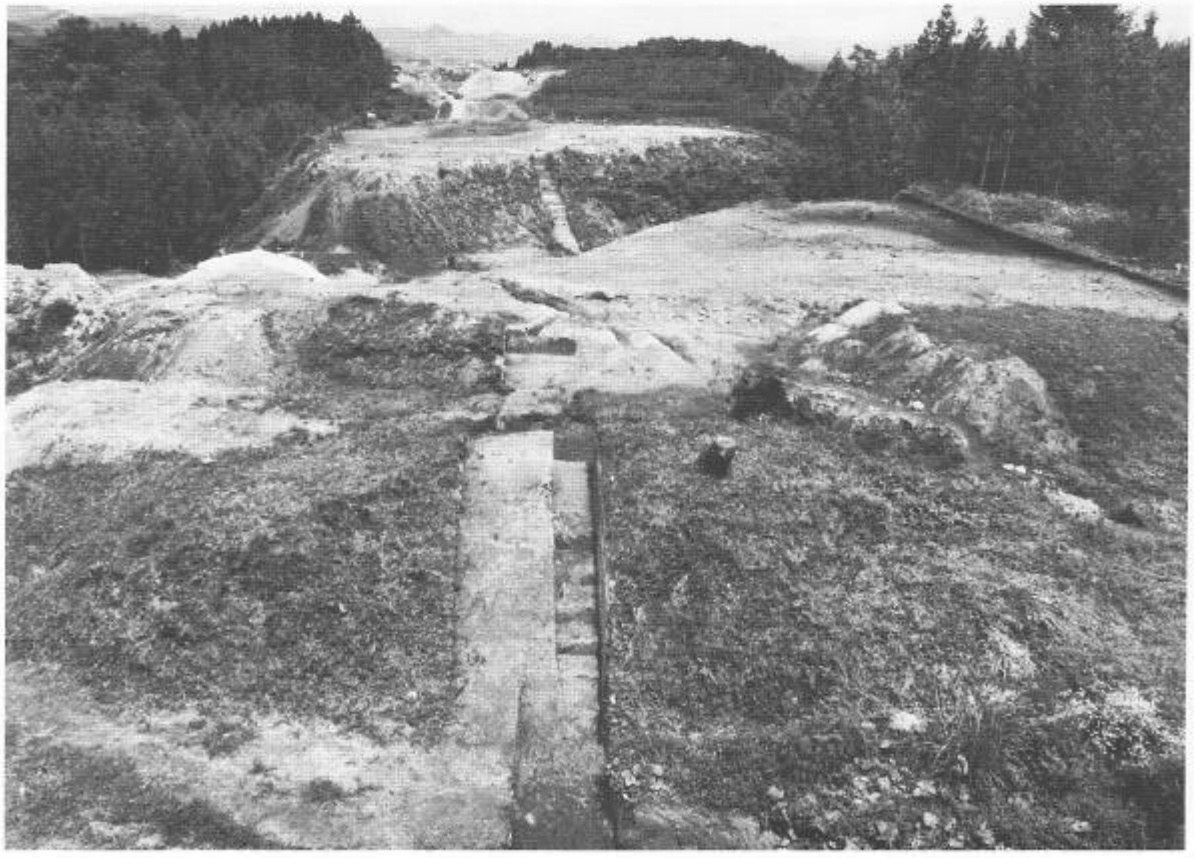


1　Bトレンチ南側堀底の溝土層

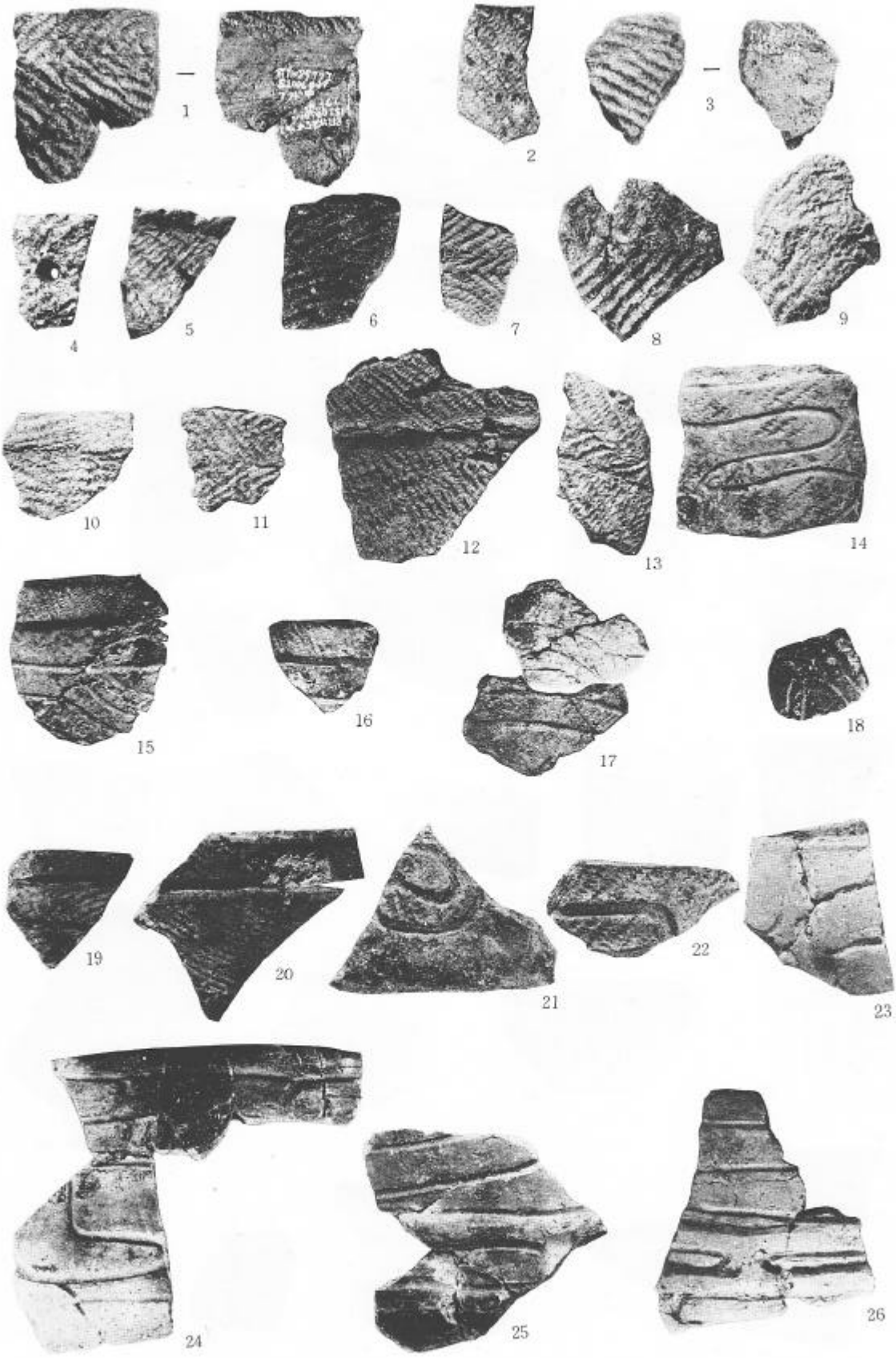
2　Bトレンチ土塁芯

図版67　遺　　跡

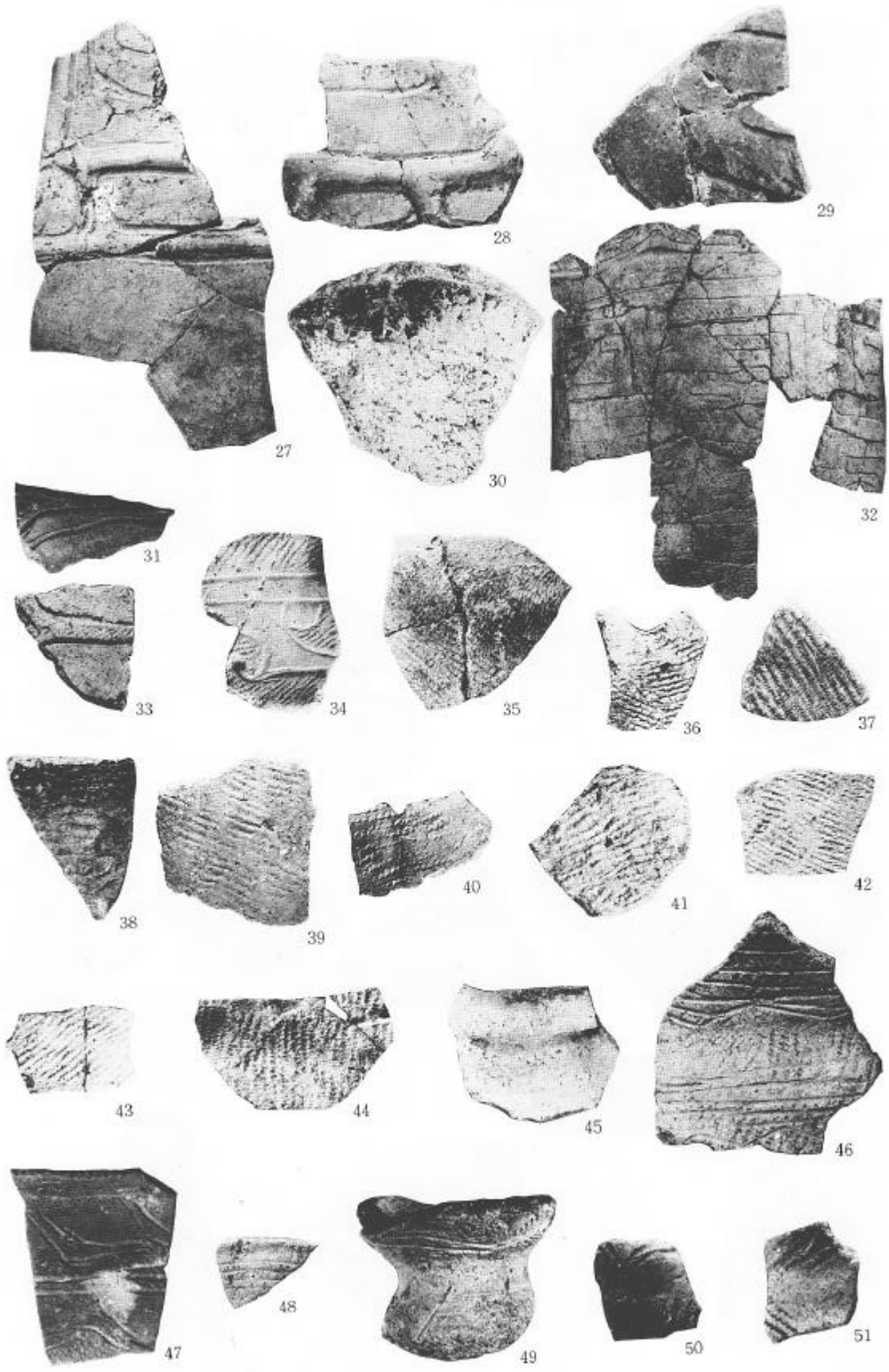
1　III郭より見たII郭



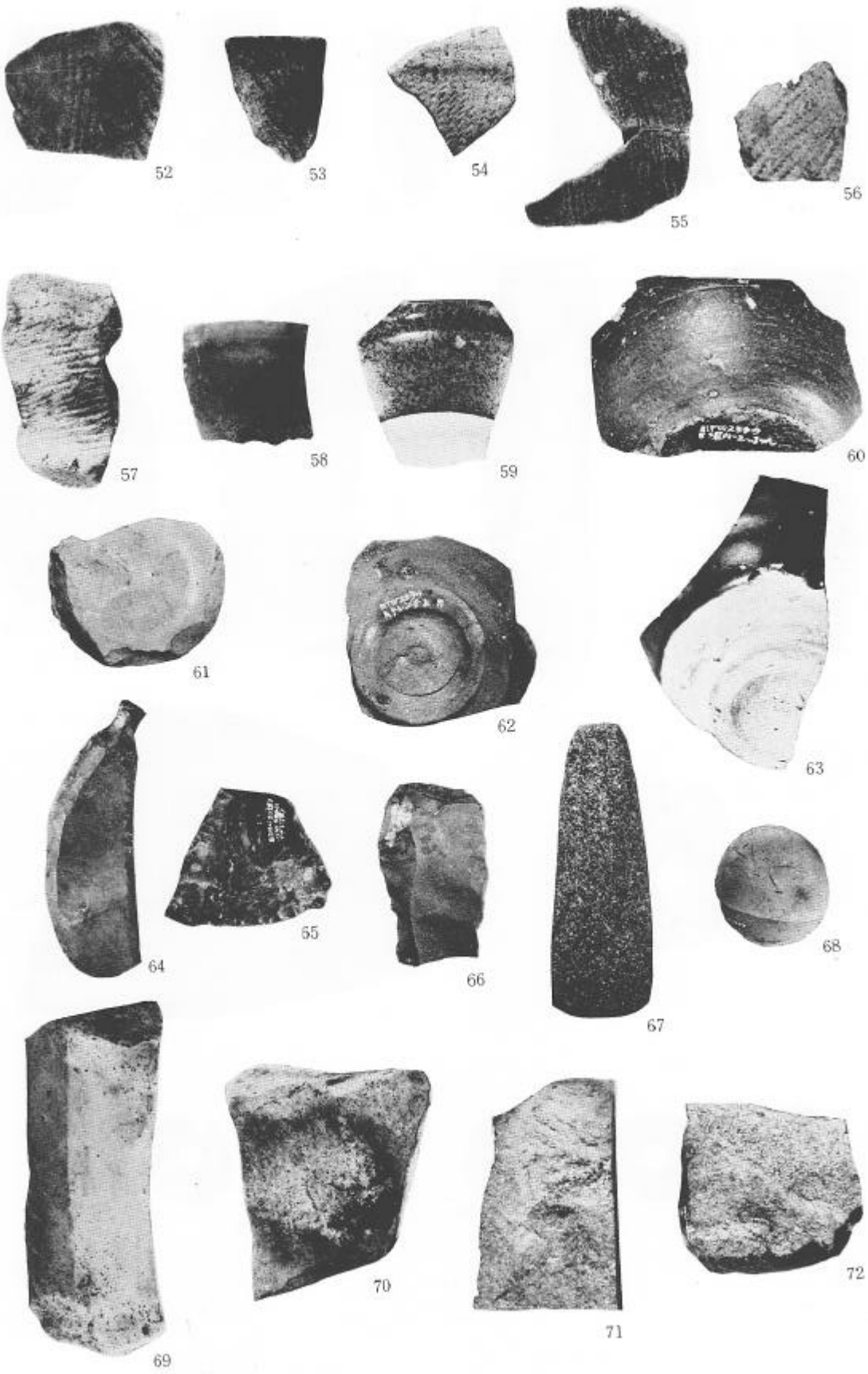
図版68　遺　　跡　　2　妻の神III遺跡から見た乳牛平遺跡



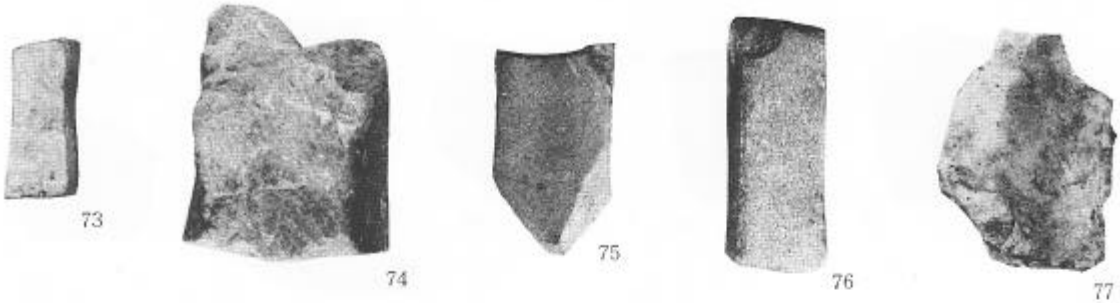
図版69　遺　　物

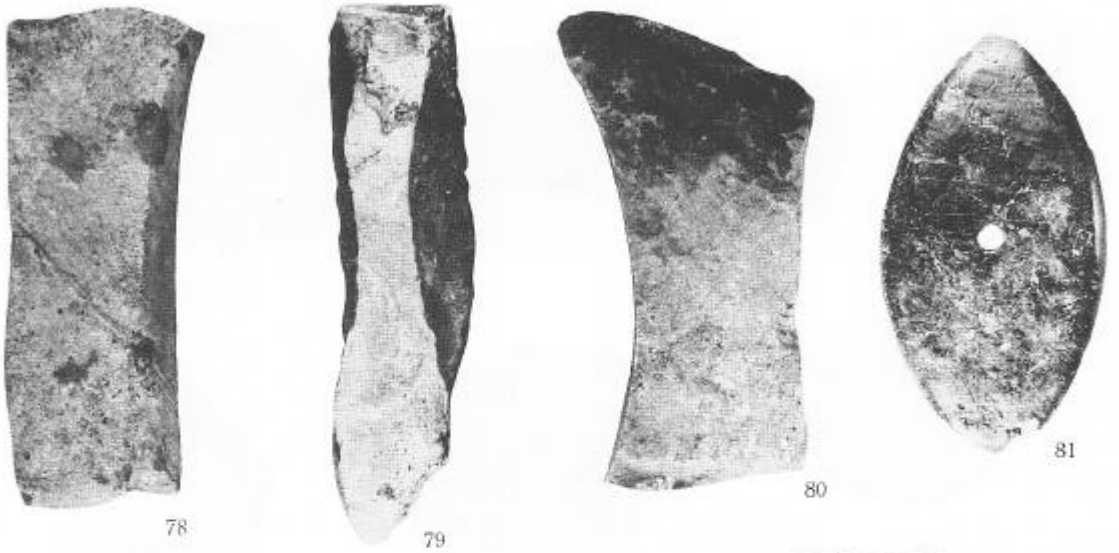

27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

図版70　遺　　物

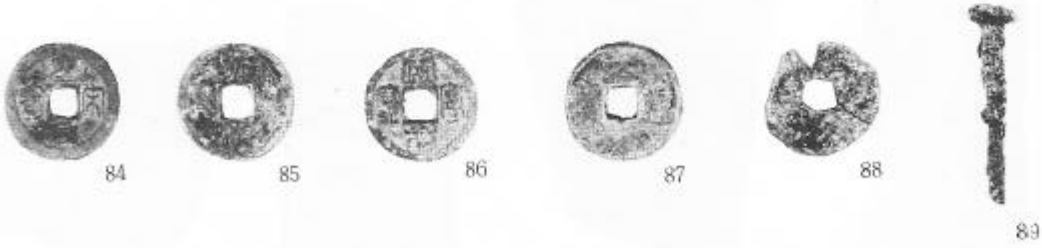


図版71　遺　　物


73 74 75 76 77


78 79 80 81

82 83


84 85 86 87 88 89

図版72　遺　　物